KAIZO

改造

九月號

1927

文學博士 佐佐木信綱著

――最新刊――

萬葉漫筆

日本が世界の文化史上に於て千古不磨の光を發するものわが「萬葉」である。吾々は過去の歴史にこの偉大なる藝術を有することに驚嘆し、且限りなき喜びと誇りとを感ずる。本書は萬葉學研究の權威佐佐木信綱博士が多年研究の集積たる隨筆的考證にして、この人、この好題目を捉へて麗筆は如何なる光彩を發するか。萬葉名歌の鑑賞、難解な歌の解釋、萬葉學史の研鑽、萬葉古寫本の話、萬葉派歌人の傳記逸話を初め、萬葉にまつわるくさぐ〜の物語は、珍寶たる挿繪十六葉と相俟つて、讀者をして興味深く讀み行くうちに、萬葉に關する深い智識と、豐かなる趣味を體得せしめ、かの難解無比なる天上の萬葉をして、何人にも親しみ易き地上の萬葉たらしめてゐる。愛する同好の士よ！來りてこの詩の泉に汲め。

四六判極美装
定價貳圓
送料二十錢

内容一班

萬葉集と天平時代・萬葉集は二十卷なりや・萬葉の影法師・萬葉集と畫題・萬葉研究と婦人・萬葉ここかしこ・桂萬葉に關する一發見・萬葉集の嫁入本・萬葉集の外國語譯本・萬葉と大和・權律師仙覺・源實朝・小泉八雲氏・新選萬葉百首・萬葉珍本談・[illegible]・[illegible]・外二百餘。（挿入書畫十六葉）

發兌 改造社

東京市麹町區内幸町
幸ビルデイング一階
振替東京八四〇二番

寸感

○我々に與へられたる任務は、長い間の封建的隷従生活を葬り、大國民のために堅牢無比なる文明の礎石を建設するにある。それはもとより一つの地震や、火事のために破壊されたり、なくなつたりする基礎の薄弱なものではだめだ。と同時に、日本の精神文化の眞の土臺をなすものが、どうして得られるかを眞劒に、熱烈に究むるにある。なにごとにあれ、社會の現象をまともに見、そして眞劒に見て自己の進むべき方途を決すべきである。

○さる實業家たちが一小說家の死を「わしどもはああした三面記事に興味がないから讀まぬことにしてをる」と冷笑的批評を下してゐる。全く世間に對して虚榮者の、輕薄極まる批評である。もともと彼等にして見れば、生命や、藝術より金錢の方にのみ關心する。かかる徒のいふことを齒牙にかくる必要はないが、しかし文人が思想的行詰りの結果（他にも傍系的原因はありとするも）生命を斷つに至るのは全く刀折れ、矢つきて敵陣に屍を横ふる猛將にもたとへて研究さるべき人生の儼乎たる一事實である。そして文筆のわざが特殊の末梢神經の微動に至るまで心根をいためねばならぬものであるに對しあまりに無理解きはまる批評を下すは自己の教養を暴露するにとどまる。

○我々は決して死を謳歌し、讃美するものでない。あくまで人生をまともに見、眞劒に見、嚴粛に見、皮肉と冷笑とを以て生を生きるべきではないと思ふ。死はもとより各人に許されたる最高の自由ではあるが、と同時に、我々はあくまで意義ある生存により人類の文化に盡すべき最高義務を負はされてゐる。夏になつて體を錬り、秋になつて書にしたしむのも全く人間最高の義務を勇敢に果さうが爲である。

續西方の人

芥川龍之介

1　再びこの人を見よ

クリストは「萬人の鏡」である。「萬人の鏡」と云ふ意味は萬人のクリストに倣へと云ふのではない。たつた一人のクリストの中に萬人の彼等自身を發見するからである。わたしはわたしのクリストを描き、雜誌の締め切日の迫つた爲にペンを抛たなければならなかつた。今は多少の閑のある爲にもう一度わたしのクリストを描き加へたいと思つてゐる。誰もわたしの書いたものなどに、――殊にクリストを描いたものなどに興味を感ずるものはないであらう。しかしわたしは四福音書の中にまざまざとわたしに呼びかけてゐるクリストの姿を感じてゐる。わたしのクリストを描き加へるもわたし自身にはやめることは出來ない。

2　彼の傳記作者

ヨハネはクリストの傳記作者中、最も彼自身に媚びてゐるものである。野蠻な美しさにかゞやいたマタイやマルコに比べれば、――いや、巧みにクリストの一生を話してくれるルカに比べてさへ、近代に生まれた我々には人工の甘露味を味へずには措かない。しかしヨハネもクリストの一生の意味の多い事實を傳へてゐる。我々は、ヨハネのクリストの傳記に或苛立たしさを感じるであらう。けれども三人の傳記作者たちに或魅力も感じられるであらう。人生に失敗したクリストは獨特の色彩を加へない限り、容易に「神の子」となることは出來ない。ヨハネはこの色彩を加へるのに少くとも最も當代には、up to date の手段をとつてゐる。ヨハネの傳へたクリストはマコやマタイの傳へたクリストのやうに天才的飛躍を具へてゐない。が、莊嚴にも優しいことは確かである。クリストの一生

を傳へるのに何よりも簡古を重んじたマコは恐らく彼等の傳記作者中、最もクリストを知つてゐたであらう。マコの傳へたクリストは現實主義的に生き生きしてゐる。我々はそこにクリストと握手し、クリストを抱き、――更に多少の誇張さへすれば、クリストの髯の匂を感じるであらう。しかし莊嚴に劬はりの深いヨハネのクリストも斥けることは出來ない。兎に角彼等の傳へたクリストに比べれば、後代の傳へたクリストは、――殊に彼をデカダンとした或ロシア人のクリストは徒らに彼を斥けるだけである。クリストは一時代の社會的約束を蹂躙することを顧みなかつた。(賣笑婦や稅吏や癩病人はいつも彼の話し相手である。)しかし天國を見なかつたのではない。クリストを l'enfant に描いた畫家たちはおのづから云ふクリストに憐みに近いものを感じてゐたであらう。(それは母胎を離れた後、「唯我獨尊」の獅子吼をした佛陀よりもはるかに手よりのないものである。)けれども幼兒だつたクリストに對する彼等の憐みは多少にもしろ、デカダンだつたクリストに對する彼の同情より勝つてゐる。クリストは如何に葡萄酒に醉つても、何か彼自身の中にあるものは天國を見せずには措かなかつた。彼の悲劇はその爲に、――單にその爲に起つてゐる。或るロシア人は或時のクリストの如何に神に近かつたを知つてゐない。が、四人の傳記作者たちはいづれもこの事實に注目してゐた。



3　共產主義者

クリストはあらゆるクリストたちのやうに共產主義的精神を持つてゐる。若し共產主義者の目から見るとすれば、クリストの言葉は悉く共產主義的宣言に變るであらう。彼に先立つた

ヨハネさへ「二つの衣服を持てる者は持たぬ者に分け與へよ」と叫んでゐる。しかしクリストは無政府主義者ではない。我々人間は彼の前におのづから本體を露してゐる。(尤も彼は我々人間を操縦することは出來なかつた、——或は我々人間に操縦されることは出來なかつた。それは彼のヨセフではない、聖靈の子供だつた所以である)しかしクリストの中にあつた共産主義者を論ずることはスキツルに遠い日本では少くとも不便を伴つてゐる。少くともクリスト教徒たちの爲に。

4　無抵抗主義者

クリストは無抵抗主義者だつた。それは彼の同志さへ信用しなかつた爲である。近代では丁度トルストイの他人の眞實を疑つたやうに。——しかしクリストの無抵抗主義は何か更に柔かである。靜かに眠つてゐる雪のやうに冷かではあつても柔かである。……

5　生活者

クリストは最速度の生活者である。佛陀は成道する爲に何年かを雪山の中に暮らした。しかしクリストは洗禮を受けると、四十日の斷食の後、忽ち古代のジヤアナリストになつた。彼はみづから燃え盡きようとする一本の蠟燭にそつくりである。彼の所業やジヤアナリズムは即ちこの蠟燭の蠟涙だつた。

6　ジヤアナリズム至上主義者

クリストの最も愛したのは目ざましい彼のジヤアナリズムである。若し他のものを愛したとすれば、彼の大きい無花果のかげに年をとつた豫言者になつてゐたであらう、平和はその時にはクリストの上にも下つて來たのに相違ない。彼はもうその時には丁度古代の賢人のやうにあらゆる妥協のもとに微笑してゐたであらう。しかし運命は幸か不幸か彼にかう云ふ安らかな晩年を與へてくれなかつた。それは受難の名を與へられてゐても、正に彼の悲劇だつたであらう。けれどもクリストはこの悲劇の爲に永久に若々しい顏をしてゐるのである。

7　クリストの財布

かう云ふクリストの收入は恐らくはジヤアナリズムによつてゐたのであらう。が、彼は「明日のことを考へるな」と云ふほどのボヘミアンだつた。ボヘミアン？——我々はこゝにもクリストの中の共産主義者を見ることは困難ではない。しかし彼は兎も角も彼の天才の飛躍するまゝ、明日のことを惱みなかつた。「ヨブ記」を書いたジヤアナリストは或は彼よりも雄大だつたかも知れない。しかし彼は「ヨブ記」にない優しさを忍びこます手腕を持つてゐた。この手腕は少からず彼の收入を扶けたことであらう。彼のジヤムアナリズム

は十字架にかゝる前に正に最高の市價を占めてゐた。しかし彼の死後に比べれば、——現にアメリカ聖書會社は神聖にも年々に利益を占めてゐる。……

8 或時のマリア

クリストはもう十二歳の時に彼の天才を示してゐた。彼の傳記作者の一人、——ルカの語る所によれば、「其子イエルサレムに留りぬ。然るにヨセフと母これを知らず、三日の後殿にて遇ふ。彼教師の中に坐し、聽き且問ひゐたり。聞者皆其知慧と其應對とを奇しとせり。」それは論理學を學ばずに論理に長じた學生時代のスウイフトと同じことである。かう云ふ早熟の天才の例は勿論世界中に稀ではない。クリストの父母は彼を見つけ、「さんざんお前を探してゐた」と言つた。すると彼は存外平氣に「どうしてわたしを尋ねるのです。わたしはわたしのお父さんのことを務めなければなりません」と答へた。「されど兩親は其語れる事を曉らず」と云ふのも恐らくは事實に近かつたであらう。けれども我々を動かすのは「其母これらの凡ての事を心に藏めぬ」と云ふ一節である。美しいマリアはクリストの聖靈の子供であることを承知してゐた。この時のマリアの心もちはいぢらしいと共に哀れである。マリアはクリストの言葉の爲にヨセフに恥ぢなければならなかつたであらう。それから彼女自身の過去も考へなければならなかつたであらう。最後に——或は人生のない夜中に突然彼女を驚かした暗黒の姿も思ひ出したかも知れない。「人の皆無、仕事は全部」と云ふフロオベルの氣もちは幼いクリストの中にも漲つてゐる。しかし大工の妻だつたマリアはこの時も薄暗い「涙の谷」に向かひ合はなければならなかつたであらう。

9 クリストの確信

クリストは彼のジヤアナリズムのいつか大勢の讀者の爲に持て囃されることを確信してゐた。彼のジヤアナリズムに威力のあつたのはかう云ふ確信のあつた爲である。從つて彼は最期の審判の、——即ち彼のジヤアナリズムの勝ち誇ることも確信してゐた。尤もかう云ふ確信も時々は動かずにゐなかつたであらう。しかし大體はこの確信のもとに自由に彼のジヤアナリズムを公けにした。「一人の外に善者はなし、即ち神なり」——それは彼の心の中を正直に語つたものだつたであらう。しかしクリストは彼自身も「善き者」でないことを知りながら、詩的正義の爲に鬪ひつゞけた。この確信は事實となつたものの、勿論彼の虛榮心である。クリストも亦あらゆるクリストたちのやうにいつも未來を夢みてゐた超阿呆の一人だつた。若し超人と云ふ言葉に對して超阿呆と云ふ言葉を造るとすれば、……

10 ヨハネの言葉

「世の罪を負ふ神の仔羊を視よ。我に後れ來らん者は我よりも優れ

る者なり。」——バプテズマのヨハネはクリストを見、彼のまはりにゐた人々にかう話したと傳へられてゐる。壁の上にストリンドベリイの肖像を掲げ、「こゝにわたしよりも優れたものがゐる」と言つた、逞しいイブセンの心もちはヨハネの心もちに近かつたであらう。そこに羨に近い嫉妬よりも寧ろ薔薇の花に似た理解の美しさを感じるばかりである。かう云ふ年少のクリストのどの位天才的だつたは言はずとも善い。しかしヨハネもこの時にはやはり最も天才的だつたであらう。丁度丈の高いヨルダンの芦のゆらゝかに星を撫でてゐるやうに。……

11　或町のクリスト

クリストは十字架にかかる前に彼の弟子たちの足を洗つてやつた。「ソロモンよりも大いなるもの」を以てみづから任じてゐたクリストのかう云ふ謙遜を示したのは我々を動かさずには措かないのである。それは彼の弟子たちに教訓を與へる爲ではない。彼も彼等と變らない「人の子」だつたことを感じた爲におのづからかう云ふ所業をしたのであらう。それはヨハネのクリストを見て「神の仔羊を觀よ」と言つたのよりも壯嚴である。平和に至る道は何びともクリストよりもマリアに學ばなければならぬ。マリアは唯この現世を忍耐して歩いて行つた女人である。（カトリック教はクリストに達する爲にマリアを通じるのを常としてゐる。それは必しも偶然ではない。直ちにクリストに達しようとするのは人生ではいつも危險である。）或はクリストの母だつたと云ふ以外に所謂ニウス・ヴアリユウのない女人である。弟子たちの足さへ洗つてやつたクリストは勿論マリアの足もとにひれ伏したかつたことであらう。しかし彼の弟子たちはこの時も彼を理解しなかつた。

「お前たちはもう綺麗になつた。」

それは彼の謙遜の中に死後に勝ち誇る彼の希望（或は虚榮心）の一つに溶け合つた言葉である。クリストは事實上逆説的にも正にこの瞬間には彼等に劣つてゐると同時に彼等に百倍するほどまさつてゐた。

12　最大の矛盾

クリストの一生の最大の矛盾は彼の我々人間を理解してゐたにも關らず彼自身を理解出來なかつたことである。彼は鷄の鳴く前にペテロさへ三度クリストを知らないと云ふことを承知してゐた。彼の言葉はその外にも如何に我々人間の弱いかと云ふことを教へてゐる。しかも彼は彼自身もやはり弱いことを忘れてゐた。クリストの一生を背景にしたクリスト教を理解することはこの爲に一々彼の所業を「豫言者X・Y・Zの言葉に應はせん爲なり」と云ふ詭辯を用ひなければならなかつた。のみならず畢にかう云ふ詭辯の古い貨幣になつた後はあらゆる哲學や自然科學の力を借りなければならなかつ

たゞクリスト教は如何にクリストの作つた教訓主義的な文藝に過ぎない。若し彼の（クリストの）ロマン主義的な色彩を除けば、トルストイの晩年の作品はこの古代の教訓主義的な作品に最も近い文藝であらう。

13　クリストの言葉

クリストは彼の弟子たちに「わたしは誰か？」と問ひかけてゐる。この問に答へることは困難ではない。彼はジヤアナリストであると共にジヤアナリズムの中の人物――或は「譬喩」と呼ばれてゐる短篇小説の作者だつたと共に「新約全書」と呼ばれてゐる小説的傳記の主人公だつたのである。我々は大勢のクリストたちの中にもかう云ふ事實を發見するであらう。クリストも彼の一生を彼の作品の索引につけずにはゐられない一人だつた。

14　孤身

「イエス……家に入りて人に知られざらん事を願ひしが隱れ得ざりき。」――かう云ふマコの言葉は又他の傳記作者の言葉である。クリストは度たび隱れようとした。が、彼のジヤアナリズムや奇蹟は彼に人々を集まらせてゐた。彼のイエルサレムへ赴いたのもペテロの彼を「メシア」と呼んだ影響も全然ないことはない。しかしクリストは十二の弟子たちよりも或は無花果の林だの岩の山だのを愛したであらう。しかもジヤアナリズムや奇蹟を作つたのは彼の性格の力である。彼はここでも我々のやうに矛盾せずにはゐられなかつた。けれどもジヤアナリストとなつた後、彼の孤身を愛したのは疑ひのない事實である。トルストイは彼の死ぬ時に「世界中に苦しんでゐる人々は澤山ある。それをなぜわたしばかり大騷ぎをするのか？」と言つた。この名聲の高まると共に自ら安んじない心もちは我々にも決してない譯ではない。クリストは名高いジアナリストになつた。しかし時々大工の子だつた昔を懷しがつてゐたかも知れない。ゲエテはかう云ふ心もちをフアウスト自身に語らせてゐる。フアウストの第二部の第一幕は彼にこの吐息の作つたものと言つても善い。が、フアウストは幸ひにも櫻花の咲いた山の上に佇んでゐた。……

15　クリストの歎聲

クリストは比喩を話した後、「どうしてお前たちはわからないか？」と言つた。この歎聲も亦度たび繰り返されてゐる。それは彼ほど我々人間を知り、彼ほどボヘミア的生活をつづけたものには或は滑稽に見えるであらう。しかし彼はヒステリツクに時々かう叫ばずにはゐられなかつた。阿呆たちは彼を殺した後、世界中に大きい寺院を建ててゐる。が、我々はそれ等の寺院にやはり彼の歎聲を感ずるであらう。「どうしてお前たちはわからないか？」――それはクリストひとりの歎聲ではない。後代にも見じめに死んで行つた、あ

らゆるクリストたちの斷定である。

16　サドカイの徒やパリサイの徒

サドカイの徒やパリサイの徒はクリストよりも事實上不滅である。この事實を指摘したのは「進化論」の著者ダアウインだつた。彼等は今後も地衣類のやうにいつまでも地上に生存するであらう。「適者生存」は彼等には正に當嵌まる言葉である。彼等ほど地上の適者はない。彼等は何の感激もなしに油斷のない處世術を講じてゐる。マリアは恐らくクリストの彼等の一人でなかつたことを悲しんだであらう。ゲエテをベエトホオヴエンの罵つたのは正にゲエテ自身の中にゐるサドカイの徒やパリサイの徒を罵つたのだつた。

17　カヤパ

祭司の長だつたカヤパにも後代の憎しみは集つてゐる。彼はクリストを憎んでゐたであらう。が、必ずしもこの憎しみは彼一人にあつた譯ではない。唯彼を推し立てることのクリストを憎み或は妬んだ大勢の人々に便利だつたからである。カヤパはきらららに袍を着下し、冷かにクリストを眺めてゐたであらう。現世はそこにピラトと共に意氣地のない精靈の子供を嘲つてゐる、燃えさかる松明の光りの中に。………

18　二人の盗人たち

クリストの死の不評判だつたことは彼の十字架にかゝる時にも盗人たちと一しよだつたのに明らかである。盗人たちの一人はクリストを罵ることを憚らなかつた。彼の言葉は彼自身の中にやはり人生の爲に打ち倒されたクリストを見出したことを示してゐる。しかしもう一人の盗人は彼よりも更に妄想を持つてゐた。クリストはこの盗人の言葉に彼の心を動かしたであらう。この盗人を慰めた彼の言葉は同時に又彼自身を慰めてゐる。

「お前はお前の信仰の爲に必ず天國にはひるであらう。」

後代はこの盗人に彼等の同情を示してゐる。が、もう一人の盗人には、――クリストを罵つた盗人には憐憫を示してゐるのに過ぎない。それは正にクリストの教へた詩的正義の勝利を示すものであらう。が、彼等は、――サドカイの徒やパリサイの徒は今日でも私かにこの盗人に贊成してゐる。事實上天國にはいることは彼等には無花果や眞桑瓜の汁を啜るほど重大ではない。

19　兵卒たち

兵卒たちは十字架の下にクリストの衣を分ち合つた。彼等には彼の衣の外に持つてゐたものは見えなかつたのである。彼等は定めし肩幅の廣い模範的兵卒たちだつたのに違ひない。クリストは定めし

彼等を見おろし、彼等の所業を輕蔑したであらう。しかし又同時に是認したであらう。クリストはクリスト自身の外には我々人間を理解してゐる。彼の教へた言葉によれば、感傷主義的詠嘆は最もクリストの嫌つたものだつた。

20　受難

十字架にかかつたクリストは多少の虚榮心を持つてゐたものの、彼の肉體的苦痛と共に精神的苦痛にも襲はれたであらう。殊に十字架を見守つてゐた、マリアを眺めることは苦しかつた譯である。が、彼は「エリ、エリ、ラマサバクタニ」と云ふ必死の聲を擧げた彼も（たとひそれは彼の愛する讃美歌の一節だつたにもせよ）彼の息の絶える前には何かおほ聲を發してゐた。我々はこのおほ聲の中に或は衰死に迫つた力を感ずるばかりであらう。しかしマタイの言葉によれば、「殿の幔上より下まで裂けて二つになり、又地震ひて岩裂け、墓ひらけて既に寢ねたる聖徒の身多く甦」つた。彼の死は確かに大勢の人々にかう云ふショックを與へたであらう。（マリアの腦貧血を起したことを記してゐないのは新約聖書の威嚴を尊んだからである。）クリストの一言一行に永遠の註釋を與へてゐるパピニさへこの事實はマタイを引いてゐるのに過ぎない。彼自身を欺いてゐるパピニの詩的情熱はそこにも赤馬脚を露してゐる。クリストの死は事實上彼の豫言者的天才を妄信した人々には――彼自身の中にエリヤを見た人々には餘りに我々に近いものだつた。從つて又火炎の車に乘つて天上に去るよりも恐しかつた。彼等は唯その爲にショックを受けずにはゐられなかつたのである。しかし年をとつた祭司たちはこのショックに欺かれはしなかつただらう。

「それ見たことか！」

彼等の言葉はイエルサレムからニウ　ヨウクや東京へも傳つてゐる。イエルサレムを圍んだ橄欖の山々を最も散文的に飛び超えながら。

21　文化的なクリスト

クリストの弟子たちに理解されなかつたのは彼の餘りに文化人だつた爲である。（彼の天才を別にしても。）彼等は大體は少くとも彼に奇蹟を求めてゐた。哲學の盛んだつた摩伽陀國の王子のクリストよりも奇蹟を行はなかつた。それはクリストの罪よりも寧ろユダヤの罪である。彼はロオマの詩人たちにも遜らない第一流のジヤアナリストだつた。同時に又彼の愛國的精神さへ拋つて顧みない文化人だつた。（マコはクリスト傳第七章二五以下にこの事實を記してゐる。）バプテズマのヨハネは彼の前には駱駝の毛衣や蝗や野蜜に野人の面目を露してゐる。クリストはヨハネの言つたやうに洗禮に聖靈を用ひてゐた。のみならず彼の洗禮（？）を受けたのは十二人の弟子たちの外にも賣笑婦や稅吏や罪人だつた。我々はかう云ふ事實にも

おのづから彼に柔い心臟のあつたのを見出すであらう。彼は又彼の行つた奇蹟の中に度たび細かい神經を示してゐる。文化的なクリストは十字架の上に最も野蠻な死を遂げるやうになつた。しかし野蠻なバプテズマのヨハネは文化的なサロメの爲に盆の上に頭をのせられてゐる。運命はここにも彼等の爲に逆說的な惡戲を忘れなかつた。…………

22　貧しい人たちに

クリストのジヤアナリズムは貧しい人たちや奴隸を慰めることになつた。それは勿論天國なぞに行かうと思はない貴族や金持ちに都合の善かつた爲もあるであらう。しかし彼の天才は彼等を動かさずにはゐなかつたのである。いや、彼等ばかりではない、我々も彼のジヤアナリズムの中に何か美しいものを見出してゐる。何度叩いても開かれない門のあることは我々も亦知らないわけではない、狹い門からはひることもやはり我々には必しも幸福ではないことを示してゐる。しかし彼のジヤアナリズムはいつも無花果のやうに甘みを持つてゐる。彼は實にイスラエルの民の生んだ、古今に珍らしいジヤアナリストだつた。同時に又我々人間の生んだ、古今に珍らしい天才だつた。「豫言者」は彼以後には流行してゐない、しかし彼の一生はいつも我々を動かすであらう。彼は十字架にかかる爲に、——ジヤアナリズム至上主義を推し立てる爲にあらゆるものを犧牲に

した。ゲエテは婉曲にクリストに對する彼の輕蔑を示してゐる。丁度後代のクリストたちの多少はゲエテを嫉妬してゐるやうに。——我々はエマヲの旅びとたちのやうに我々の心を燃え上らせるクリストを求めずにはゐられないのであらう。

生命、疾病及び醫術

長谷川如是閑

一　種と個と生命の所在

生物學的には、個體は種のための單位と見做される。が種とは、同じ形態と同じ行動體系とをもつた生物につけた名に過ぎないので、『種』なる生活が個體のそれを離れて存在する譯ではない。『種のため』といふ觀念は、個體が、一定の同じ形態と同じ生活様式とをもつことによつてのみ生きられるといふ事實から、その形態と生活様式との共通性を抽象し、その等同的性質を人格化したに過ぎない。種の觀念は、知慧を觀音とし、罪業を惡魔とする擬人主義を、もつと正確な知覺的根柢の上に踏襲したに過ぎない。

原始社會の人間はたゞ種であつて個人でなかつたといふのは、たゞ彼等の意識の上に於てゞあつて、生存の主體がそこでも個人であつて種でなかつたことはいふまでもない。生物の段階は、その生物の形態と生活態度とに於ける類型の領分の大小によつて定まる。所謂生態的等同性の多いものほど下級の段階にある生物であるとされる。下等動物のうちには、殆んど植物に於けるやうな等同性をその形と行動とに於てもつてゐるものが多い。人間に於ても、原始人は、文明人に比べて、遙かに群的等同性に富んでゐた。その事實から、種の認識が强く、個人の認識が弱いといふ原始的意識の特徴が産れたのである。

されば生命とは、種が生きる過程ではなく、個體の生きる過程である。種に生命のないことは、源氏と平氏とかいふ『名前』が決して物を食はぬのでもわかる。しかも個體が生きんとするものは、彼れ自からの生命であつて、他の個體のそれではない。個體は、むしろ他の個體の犧牲に於て、それ自から生かさうとする。然し、さういふ個的態度は、如何なる生物をも生かすことは出來ない。個體は、自己と等同性をもつた群に於てゞなければ決して生きられない。而かも、この等同性に於て生きやうとすれば、その形態に於て然る如く、その行動に於ても、自己の屬する群の一般性に從はねばならない。二つの眼をもつた人間が、三つの眼をもつことの出來ないやうに、群の行動の典型に從はない個的行動といふものはない。さういふ一般的型式から外づ

れた形態をもつものが、化物として群から排除される如く、一般的型式によらない行動をもつものは、狂人、變人、畸人、罪人、他人等の名の下に、排除される。

生命は個人が生きるに相違ないが、その型式は個人的ではあり得ない。今云つた如く、生物の段階の進むほど、類型的等同性の領分が狭められるが故に、高級の文明人に於ては、行動の等同性が、或は全く失はれたかに見へるまでに、個人的特異性をもつことゝなつた。けれども、元來が形態的に類型をもつてゐる限り、行動的にも絶對の個的特異性なるものが存在するとは考へられない。生理學が個人生理の等同性の上に成立した如く、心理學も個人心理の種々なる型式の上に成立する。このことは、當然個人の行動に一定の典型のあるといふ事實から出立したものである。心の典型が行動の典型に依存するものであることは、始めに行動だけから出立したといふ、生物一般の最も確事實から、人間も亦出立したに相違ないことの當然の結果である。人間は、その形態と行動との動物學的等同性に於て Homo sapiens Lin-né を構成し、その人種學的等同性に於て、それぞ〲種々なる人種を構成してゐるが、その種々なる類別を作つてゐるものは、形態と行動の等同性であつて、心の狀態ではない。心の特殊性は形と行とに隨伴して發生し、形と行とからのみ見分けられる。——しかも心の見分けは、それが形と行とに具象されない場合は問題とならない。ある群は、勇猛果敢なる心的特徵を有するといふ發見は、それが形と行動とに決して現はれないならば、何の意味をもなさず、さういふ發見さへも不可能である。

二　生命と行動

生命とは持續性をもつた行動の連續であるとすると、生命への執着といふ心の狀態は、行動の衝動が意識の形で現はれたものである。現はれたといつても、それは、個人の內的な把持に過ぎないが、今いつた通り、心の狀態は、それが形と行とに現はれて始めて意味をなすといふ事實から、此の內的把持も、それが形と行とに現はれて、始めてさういふ意識の存在が認められる。その本人に於てさへさうである。如何に自分が生命への愛着をもつかは、先づ自分の意識からそれを知ることは出來ないで、生命に愛着する行動の無意識的發動から、己れ自身に知らしめられる。意識は却つて錯誤的に彼れ自身を僞る。彼れ自身命なんぞは惜しくないと考へ、他人もかの人は命など惜しからぬ人のやうだと彼れの言動によつてさう思つてゐた人間が、地震を喰らつて、夢中で馳け出すといふやうなことをする。それは意識に於て僞りが示され、行動に於て眞實が示されたのである。平生の言動は、生命と關係のない場合の言葉及び行動に過ぎなかつたため、それは生命に對する彼の心的態度に對して、何の眞實をも告げなかつたものであつた。それは告げる必要がなかつたからであつた。生命を生きるための必要に於て起る行動は、眞實を行動しなければその目的が達しられ

ないので、決して自らを行動しないのである。

生命に對する愛着は、行動を欲する心狀である。行動それ自體が生命であるが故に、生への執着とは、具體的には、行動への執着の外に何もない。『生きんとする努力』といふ屢〻繰り返へされる言葉は、單に呼吸を續けることの欲求ではなく、その全身の器官の生理的運動を持續せしめたいといふ欲求ではなく、彼れ自からを人間的行動の最高潮に於て行動せしめやうとする努力である。

されば行動への執着のないのは、生命への執着もない。意識のある狀態を人間生活の全體と考へた古代ギリシヤ人、古代インド人等には生への執着がなくて死への執着があつた。行動のないところにはたとへ意識があらうとも、結局死があるのみだからである。もつと常識的であつた古代の支那人でさへ、行動を抑壓された意識の昂奮狀態に於ては、『桴に乘つて海に浮ばん』と叫び、『肱を枕にして寢る』ことを人生の極致と稱した。

三　生に對する相反的感情

然し、事態はさう簡單には片づけられぬ。生に對する愛着を失ふ心狀は、行動の失はれた所から起るには相違ないが、然しもし甚だ深い根抵から導かれる心の傾向があるとすると、生に執着しない心の根抵にも、行動の失はれたといふ現在の經驗的事實の外に、何かの動因があるのではないかと一應考へて見る必要がある。

行動に元來その經驗が、それに對して人間をひきつけてゐるので人間がそれに執着するのではなく、經驗以前の傾向によつて、人間は行動に惹きつけられてゐるのである。赤子は、眠つてゐる時の外、能ふ限りの力をもつて行動を求めてゐる。そこに何等の經驗によつて與へられた動因はない。たゞ動かうとする必然が赤子を動かしてゐるのである。大人の行動は、それに經驗的要素の加つたものであることはいふまでもないが、その經驗的要素の働くのは、行動の方法に關してゞあつて、決して行動の衝動に對してゞはない。人を動かすものは經驗ではなく、如何に動くべきかを敎へるものが經驗である。

そこで人間を行動に執着せしめるものは、人間自からにある必然性であるといはれる。その必然性なるものは、あらゆる生物の機能がそれ〴〵の作用に於て發達したと同じく、動くことを生存の重要な型式とした生物には、行動といふことが、その生態を決定する生存價値となつたのである。動かねばならぬと感じるのではなく、動かなかつた場合の滅亡が、動くものだけを保存せしめたのである。必然性といつても、別に不思議な力があるのではなく、一定の動き方をもつたものだけが生存したといふことの結果に過ぎない。

かういふ必然性に置かれたゝめに、行動に對する執着即ち、行動しやうとする意志、行動に對する好感等が意識に現はれて來るのであるが、然し、意識は、必ずしも、行動の必然性に合致した形で構成されるとは限らない。反對に、必然性は、それを嫌惡する意識として現は

れる。『愛すればこそ憎む』といふことは、前者の性質の行動傾向（愛する行動傾向）が後者の性質の意識（憎いといふ氣持）となつて現はれることを云つたものである。男と女との結合は必然的であるが、男と女との相互の意識的態度は、屢反拒的である。殊に、相愛する男女は屢相爭ふ。精神分析學派によれば、かやうな相互的態度は、最も原始的生活に於て許された行動が、その後の社會統制によつて禁止されたゝめに、原始的行動傾向は、潛在意識となつて殘存し、その後の制約による意識とは全く相反する性質をもつて識域以下に跳梁するところから、二つの反對した感情が、互に鬪爭するのであるといふ。然しさういふ相反的感情は、男女關係に於てのみならず、すべての必然的關係に於て存在することを考へると、原始的行動傾向の殘存といふことはフロイド一派の唱ふる如く、必ずしも男女關係のそれに限られてはゐないやうに思はれる。

行動に對する人間の執着が、行動の失はれることによつて同時に失はれ、非行動的の階級に於ては、行動への欲求のなくなることは前述の如くであるが、さうでなく、同一人に於て、一方に於て行動に對する愛着があると同時に、他方に於て、行動を回避する傾向のあることは事實である。一定の行動に生活する必然から、その行動への愛着をもつことは誰れにもある心理であるが、同時に彼れは、その必然的行動を嫌惡するといふ心狀に置かれる。職人が仕事に對して、學者が學問に對して、武人が戰爭に對して、音樂家が演奏に對して、それぐその行動への必然的憧憬をもちながら、同時に、それを回避する心狀をもつことは珍らしくない。

或はそれを、同一行動の反復から生じた倦怠、即ち生理器官の必然から出た心的反映であるといふ。成る程、腦細胞や筋肉はそれぐ一定の刺戟や運動に馴れて、同一考へ方なり運動なりを反對的にくりかへす傾向をもつものであるが、同時に、同一運動の反復は疲勞の現象を招いて、腦髓自體、筋肉自體がそれを拒む方向をとるに至る。そこから倦怠が、同一行動に伴ふ感情となる。けれども、生命としての行動に於ては、現實の運動が、生理的に快適であるが故に、又はその反對であるが故に、それに執着し又はそれを回避するのではなく、現實の運動とは關係なしに、たゞその衝動的性質が强められ又は弱められるのである。それは疲勞の現象と關係のあることではない。比喩的には『生に疲れた』などゝいはれるが、行動への執着をもつと同時に回避的心狀に在るものは、必ずしも『生に疲れた』人々ではなく、それにも拘らず活潑に生命的行動を持續してゐる人々である。名人の如き優秀の技術家は、大抵特殊の衝動を感じない間は、その專門的行動を回避しやうとする傾向にあることは一般に知られてゐる事實である。そこに何等の機械的障碍があつて回避するのではなく、たゞその行動に出ないといふ消極的態度である。

さういふ事情から、たとへばイギリスの紳士間の習慣のやうに、職業や事務に關する談話のタブーが起る。その職業や事務に關する會合

でない所に、ふと職業や事務の話をいひ出した人は、直ちに謝罪の意を表する。そこからまた、社交的のクラブ等を職業や事務のために使用することの禁止といふ社會的習慣が生れる。日本のクラブ等もそれを眞似てゐる。これはたゞ外國の習慣を意味も知らずに眞似たに過ぎないのだが、外國に於けるその習慣は、職業的行動、專門的行動、仕事としての行動、即ち生命的行動に對する回避的意識の所產である。これは武士が商工業に關與することの禁制から生じたやうに考へるものもあるが、然し、さうでないことは、職人そのものが、社交に於てそれを避ける。日本でも、職業的行動や言語を、さういふ場合にとらうとする時には、殊に謝罪の意を表する習慣がある。生命的行動は、それが行はれる時に、タブー破りを矯正する場合のやうな呪術的挨拶を必要とするのである。それが今日の習慣でもある。

私はやはり、さういふ現象を人類學的に見て、原始的の行動條件の殘存と見るのである。原始社會に於ては、最も必然な行動は、すべて秘密に行はれた。今日、普通の技術又は學術として公開されてゐるものは、原始には、それ〲特殊の魔術的行動であつて、特殊の人々が特殊の神秘的方法をもつてそれを修練したのである。醫術、天文、武器製造法には原始社會といつてもやゝ發達した社會の學術技術であつたが、もつと原始的社會的狀態に於ける必然的行動であつた狩獵、食料蒐集等の行動も、丁度動物が餌物を漁り廻る時の態度と同じく、決して公然的のものではなかつた。それは同時に神秘的行動であつたことは今日のアイヌの熊狩りに於てさうである如くであつた。さうしてその結果を享樂する饗宴なども、神秘的性質を伴つて多く夜間に行はれた。生存的に必然な行動は、一方にそれに對する行動をもつと同時に、それをある制約によつて行ふといふことは、その行動に對する一種の禁制となるのである。而してその禁制から、他方に、その行動に對する恐怖や回避が生れたのである。性的行動の如きはその極端の例で、それに對する衝動の强いだけ、それに對する禁制も强からざるを得なかつた。性の行動の亂脉は種の滅亡となるので、禁制の嚴正に行はれた種だけが殘存したわけである。從つて、今日の人々も、性の行動に對しては、强い執着があると同時に、强い禁制を感じて、それを恐怖や嫌惡や回避やの形で現はしてゐる。一般生活的の行動に對する回避も、さういふ禁制に伴ふ心狀である。必然的の行動は、多くのタブーを伴ふが故に、それに對する忌怖の心狀が發生するのである。（然し、この意味の忌怖や回避やは、奴隷勞働發生後に於ける强制勞働の忌怖及び回避とは嚴重に區別されねばならぬ。後者は、衝動を感じてゐる行動に對して同時に忌怖を感じるのではなく、その行動自體に衝動を感じてゐないために、それを回避するのである。强制勞働又は賃勞働に於けるサボタージ等の回避的態度は、決して衝動の消極的性質ではなく、意識的にそれを嫌惡すべき理由をもつた立派な經驗的態度である。この人々は、彼等が課せられてゐる行動自體を嫌ふのではなく、その組織に於ける行動の無意味を知ることによつてその組織を

否定するのである。組織を否定するが故に、その組織による行動を回避するのである。現在の賃勞働に於ける勞働の低劣とその能率の減退とは、古代に於ける奴隷勞働のそれと同じく、組織を否定するための行動の回避である。)

生命としての行動に對する意識の性質は、かくの如くにして、同時に執着と嫌惡とである。この相反的感情の並立は、行動自體から出たもので、前にいつた行動の失はれた場合に、行動に對する愛着の失はれることや、又今いつた、奴隷勞働及び賃勞働に伴ふサボタージやとは異るものである。

此の回避は、今日に於ては、殆んどたゞ殘存せる痕跡的の感情で、全くその價値の失はれたものには相違ないが、從つて人間はさういふ潜在感情を意識に上ぼせて、それを克服することを努めねばならぬのであるが、しかし行動の衝動を構成する動力を假りに心的エネルギーと稱するならば、それが蓄積される間は、行動に對して消極的であることは自然の狀態と認めねばならぬ。從つて行動に對する人間の執着は勢ひ律動的でないわけに行かない。執着と回避との相反的感情は、行動のこの律動的曲線に從ふ感情狀態に一致する。この一致は偶然であるにせよ、さういふ相反的感情の持續に役立つのである。

四　疾病と行動の中斷

生命としての行動は、それに對する二つの相反的感情の何れか一つのみによつて支配されることは決してない。絶對的に行動に對する愛着のみが支配することもなければ、回避のみが支配することもない。その後者の場合が往々にして成立することは前にいつた如くであるが、それは然しながら生命の失はれた階級の成立に伴ふ事態である。さういふ階級はそれ自體だけでは生存を支持する力がなく、それが寄生する行動の階級をその下に有することによつてのみ生存を持續することを得るものである。

之れを外にしては、行動の回避が絶對に成立するのは病氣に於てゞある。人間は、病むことによつてのみ、全く行動から回避する。そこに、生命としての行動の中斷が起る。

病氣は、生命としての行動を行ふ主體に於て起る障碍であるが、それが心理的でなく生理的のそれであるために、極めて物質的の、機械的の故障である。内科的の病氣でも外科的の病氣でも、いはゞ行動の道具の故障である。それは飛行機がエンジンの故障で飛ばない場合であつて、飛行家がいやになつたので飛ばない場合ではない。(その意味から『病氣』といふ言葉よりも『疾病』といふ言葉の方が適切である。前者は病の物質的機械的原因に關する知識の不十分な時代に於ける理解から出來た用語である。が言葉は何うでもいゝ。)

病氣が個人に起つた時には、その個人自體に於て行動は中斷され、

社會はその中斷を承認するのみならず、場合によつては中斷を强制する。個人がその生命としての行動を全く回避し得るのは、たゞ病氣の場合だけである。

何うして、病氣による行動の中斷が絶對的なのであるかといへば、それは、その中斷が心的氣まぐれではなく、物質的必然、機械的必然だからである。それは、心の働きによつてそれを何うすることも出來ない必然だからである。

そのやうに、行動中斷を必然的ならしめる病氣は、個人に於て起るものではあるが、その原因が個人の事情に限られたものでないことはいふまでもない。原始社會に於ては病氣は、死と同じく、第三者の所爲に基くものと信じられた。第三者といふことを極めて廣義に解すれば、それは今日の信仰でもある。少くとも病氣に關してはさうである。病源の殆んど悉くが微生物の所爲に歸せられてゐるのは、病氣が第三者の行爲であるといふことに外ならない。從つてある特殊の場合の外は病氣する人に責任は負はせられない。病氣は原始社會では犯罪であつたが、今日では犯罪ではない。而して原始社會にそれが犯罪であつたのは、犯罪も亦第三者の所爲に外ならなかつたのである。罪人は、病人と同じく、第三者に呪はれたか、然らざれば第三者たる惡魔に憑かれたものに外ならないと信じたからである。而かも、犯罪を第三者の所爲とする原始的信念は、今日漸く復活しつゝあるのも皮肉である。犯罪に關する犯人の責任は、次第に、第三者に轉嫁されつゝあるのが、今日の犯罪學上の傾向である。原始人の信仰には多くの眞實があるといふ人類學者の見地は、かういふ意味からも正しい言ひ得である。

されば、病氣は無論、第三者の行爲である。社會は、病氣する人間に對して、それを共同の行動の責任から解除せしめると同時に、その病氣の回復に對して責任をとる。これも亦原始時代よりの事である。原始社會に於ては、病氣の驅除については、所謂 Medicine-man が責任をとるのみならず、全社會はその『愼み』に於て又その『惡魔拂ひ』に於て、責任をとつた。病人から病氣を驅除することは、病人の責任ではなく、社會の責任であつた。

この意味に於て、病氣に於ける行動の回避は、病人の特權である。而して社會人が病氣によつてこの特權を持つことを得るのは、生命が即ち人間的行動が、社會的關係に於てのみ成立するものであると同時に、それの障碍も亦社會的關係に於てのみ發生するものだからである。個人はその行動をもつて社會的に協同する衝動的性質をもつに拘らず、その行動に對する障碍が社會的關係に於て個人の側に起るのは個人の生命が、社會によつて脅かされた譯である。衞生といふことは原始時代から社會の責任であり、衞生を司どる人間は魔術者といふ公人であつた。病人は、その時代から、社會の手で、彼れの身體から病魔を驅除せしめる權利をもつてゐた。後に發生した『病院(ホスピタル)』が病人を癒す義務だけを負つて、病人から何ものをも要求しないといふ制度で

あつたのは當然のことである。日本のやうに病院が營利事業であるといふのは、社會的必需品の生產、分配をもつて、私有財產を蓄積する手段とする組織と同じく、變態的現象である。

病氣のための行動回避が權利であるといふ事情は、病氣そのものが行動を不可能にするといふ爲めばかりでなく、その不可能狀態をもち來したものが社會的關係であるといふ事情に基づくことは右の通りであるが、純然たる優生學的立場からいへば、かういふ特權は弊害を生ずる危險をもつ。蓋し、それがために弱者が保存され、尊敬され、從つて人間的能率の平均が低下し、種の頽廢を誘ふ虞がある。社會經濟の上からは、無論それ以上に弊害である。スパルタ的人爲淘汰をもつた自然淘汰に加勢する方が、優生的であり經濟的である。

けれども、社會の事はさう簡單には捗取らぬ。人口過剩の結果、產兒殺しの習慣の盛に行はれた社會にも、病人を殺ろすことはしなかつた。寧ろその方が、確かに經濟的であり、合理的でもあるに拘らず、それをしなかつたのは、やはりそれを爲し得ざる潛在的意識の存するためである。それは全く病氣は、社會的產物——第三者の行爲——であるといふ原始的心理の作用であつた。それは罪人を殺す代りに、その罪の穢れを拂ふ原始的習慣及び犯罪に於ける罪人責任主義から社會責任主義に移つた現代の刑事學的態度と共通の性質のものである。

社會は、その優生上の經濟や經濟上の經濟やを計算して、病人の取扱ひを決定するのではなく、社會的協同に於て、社會的犧牲に於て、病人が保護されるのである。生兒を殺し、老人を捨てた社會も、病人から病魔を拂ふ努力をしたのである。社會は、病人に於ける惡魔が病人を脅かすものではなく、社會を脅かすものであることを知つてゐるのである。病人の保護に於て、社會は彼れ自からを保護するのである。社會的行動を中斷せしめる病魔は、病人の責任に於て排除すべきものではなく、社會の責任に於て排除すべきものである。これは、野蠻社會と文明社會とを通じて一貫した態度である。

が病氣の特權は、決して社會一般の意識的な道德的自覺から生ずるものでもなければ、又病人の意識的要求から生ずるものでもない。その病氣の事實が、言ひかへれば病人の行動の回避が、それ自身社會的に乃至家庭的に成立する所からそこに特權が成り立つのである。否、前の事實の成立そのことが、後の權利それ自體なのである。特にその特權を成立させる何人をも——權力者をも知慧者をも、腕力者をも精神家をも、聖人をも哲人をも——必要としないのである。これは軍國的特權のやうに、それを發生せしめる武力者と無力者との對立を必要としない。財產的特權のやうに、所有者と無所有者との對立を必要としない。智的特權のやうに知者と無知者との對立を必要としない。それは健全者と病者との對立をさへ必要としない。何となれば、病人の特權の成立のために、健全者は病人と對立してゐるのではなく、それに奉仕してゐるのである。

かやうな關係の成立を實證するために——といふよりは私の一本調

子の論述に曲折をつけるために——私は、私自身の病氣の經驗についての挿話をこゝに介入せしめることを許して貰ひたい。

五　ある挿話

私は自分がまだ物心を覺へない子供の頃は、甚だ虚弱であつたといふことである。二歳か三歳の頃に、子供のかゝるその頃の稱へで『脾疳』といつた消化器病に罹つて、腹が太鼓のやうに膨くれて、とても助かり相になかつたといふ話を、私はよく皆からきかされた。然し私はその時に、早くも『病氣は權利だ』といふやうな思想を培つてゐた譯ではないであらう。

漸く物心を覺えてからの私は比較的健康であつて、病氣らしい病氣に罹つたやうな覺えは殆んどない。たゞ七八歳の頃に、眼の病氣で、ある家塾にゐた私が一月ほど家に歸つてゐたことを覺えてゐるが、今から考へると、それは遠視のやうなもので、多分家塾生活の營養不良の結果ではなかつたかと思ふ。殆んど病氣といふものを知らなかつた私は、十五六歳の頃に猛烈な急性の胃腸病を患つた。その時、醫師から厠に通ふ度數を記るすことを命ぜられて、紙に點をつけたが、夜半から翌日の午後までゞ、その點が總計六十幾つかに上つたといふことであつた。それ以來私は、慢性の胃腸病になつて、數年の間は、月に一回位必ず猛烈なのに襲はれることが續いた。で私は、自分の考で、粥に蕎麥粉を入れて掻き廻はした糊のやうな食物ばかりを喰ふことを數年間續けて、家のものから『蕎麥がき仙人』の名をもらつた。人間の最も多食の時代といはれる年頃を、私は仙人のやうな食物で幾年か過したのである。かういふ生活から、『病氣は權利だ』といふやうな思想の生れる筈はない。

それ以來、私は時々頑固な腸の病氣に悩まされたが後年、友人の醫學士からある藥を用ゐる洗滌法を敎へられて、その方法で豫防的に處理することによつて、その病氣では醫者の世話になることが全くなくなつた。その代り、イルリガートルが私の生理的器官の重要な部分を占めることゝなつた。イルリガートルは、私には大腸の連續に外ならないこと、丁度道具が兩手の連續であるのと異ならぬ始末となつた。家にゐても旅行しても、イルリガートルは私の身體に、袋がガンガルーの身體について廻るやうについて廻るのであつた。十數年前に、ある税關で、私の旅行カバンからニッケルのイルリガートルが發見されたので、カバンの中を掻き廻はされて何やら煩るさく質問されたことがあつた。私には何の意味か少しもわからなかつたが、外の人から、變な意味の手術者と見られたのだと敎へられて、思はず赤面したことがあつた。昨年支那を旅行する時には、手違ひで、その大腸の一部を家に置き去りにしたゝめ、早速、途中で硝子製のそれを求めざるを得なくなつたが、破損の虞があつて頗る荷厄介になるので、行く先々で求めることにして、あるホテルにそれを置き去りにした處、汽車の出る間際にボーイが大汗で走つて來て、『お忘れ物』だといつてそれを差

し出したのにがつかりしたことがあつた。こんな經驗に、私をして、『病氣は權利だ』と考へることを躊躇させる性質のものであるに違ひない。

記述がやゝ脱線したが、然しそれは、ある體驗は必ず相反的の互に擯斥する感情を與ふるものであるといふ——丁度前の行動についていつたのと同じやうな——ことを示す事實を說明する必要をもつてゐるのである。

私に『病氣は權利だ』と考へさせる機縁を與へたものは、二十歳近くのある冬に、私の患つた『胸の病』であつた。（恐ろしい病氣に對して、直ちにその現像を指示するやうな名を呼ばずに、間接的な『胸の病』といふやうな名を呼ぶのは、タブーの心理に關聯するもので、それは人間が病氣に對して、それを忌み恐れながら尙ほ且つそれに引つけられる一種の傾きをもつものであることを暗示してゐる事實である。生理的に引きつけられると同時に、心理的に引きつけられる。もし意志といふ現象を形而上學的に解すれば、人間は『病氣への意志』をもつともいへる。直接の名で病氣を呼ぶことを避けるのは、直接の名で、父や母や夫や妻やを呼ぶことを避けるのと同じ心理から出てゐる。人は、自分の父や夫や妻やに對して、吸引的感情をもつと同時に反拒的感情をもつてゐるものであるが、名前の『忌み』はさういふ場合に起る。病名の『忌み』も同じ動機である。たゞ父母その他の場合は敎育的意識がより顯在的で反拒的意識に潜在的であるが、病氣の場合には、反拒的意識がより顯在的で吸引的意識は潜在的である。）

私はその胸の病なるものにかゝつた時には約一年ほどの間、一切の仕事から離れて、全く文字通りに何事もせずに、日當りのいゝ緣先きに出て一日、日向ぼつこをしてゐた。頭も身體も一生中の最活動期に入らうとした所謂青春期のしかも初期を、あのやうな泰然たる態度で一年間過したことに我れながら感服せざるを得なかつた。で後から、それは恐ろしい鈍感からであつたか、強い克己心からであつたかなどゝ考へたが、恐らくその何れでもなく、一種の『東洋主義』だつたらうなどと思つた。東洋主義とは何の意味かゞ自分にもわからずじまひであつたが、たゞそんな風に思つた。實際その東洋主義は極端で、今考へて見ても、その一年の間は、何をしてゐたかといふ記憶が全くない。私はその頃のことを想ひ出す度に、たゞ荒れ果てた庭を背して、褞袍を着込んだ身體から盛に立ちのぼるかげらふが炎のやうな渦卷きを障子に映してゐるのを眺めてゐる自分の幻をまざ〳〵と思ひ浮べるだけである。その間の私の歷史は全く「ブランク」であること、綏靖天皇より崇神天皇に至る約五世紀間の日本歷史と同じである。

然し、因襲的の編年史家にとつては全く歷史のない期間であつたその一年間の生活は私にそれまでの十數年の生活が與へることの出來なかつた體驗とそれに伴ふ思想とを與へてくれたのである。

それまでの私には、若い人間が、一年の間全く何もせずに、自分の身體から立ちのぼるかげらふの影を眺めて暮らすことがあり得るとい

ふやうなことは想像だも出來ないことであつた。一年に愚か半日でもさうして居れと、神様に云はれても惡魔に云はれても。そんな事の出來るわけのものではないと思ふ外はなかつた。そんな眞似をして見やうと思つたこともなかつたが、思つたところで出來る筈はないと定めてゐた。

然るに、私は、何の努力もせずに、全く無意識に、その出來る筈のない不可能事を安々と成しとげた。全く出來ないと思つた事でも、やつて見れば出來る、といふやうな事を人からもきゝ、教科書でも讀ませられたが、人からきいたこと、教科書で讀ませられた事で、これほど確かに實證された例を私は知らない。人から聞いたこと、殊に教科書で讀ませられたことが實證される場合は、大抵それが出鱈目であることが實證されるのだが、たゞこの一つの例に於てはその反對が現はれた。私は、とても出來ないと信じた事が、やつて見ると安々と出來た。しかもその當時は、自分がそれほどたいした事を成し遂げたといふことさへ氣付かなかつた。全く『何もしない』私は、その實、最も至難な事をしてゐたのであつた。

その上に私は、さうした私の態度に於て、既に私の權利を行使してゐたのであつた。『病氣は權利だ』といふ思想は、私のその一切の人間的義務から解放された態度の所産であつた。此の態度が可能でなかつたなら、決してさういふ權利思想は發生しなかつたであらうし、發生した所でそれは空虚の權利に過ぎなかつたのである。私は私の權利の上に限つてはゐなかつた。自分の身體から燃え上る、何にもならない火炎をぼんやり眺めてゐたのは、さうする權利を私がもつてゐたからだ。だから法律も道徳も宗教も、さうしてゐる私を何うすることも出來なかつたのだ。

無論、その當時私は、『病氣は權利だ』などといふ考を、思想だの觀念だのと稱するものゝ形で抱いてゐたのでも何でもない。そんな考は何の形でゞも抱いてはゐなかつた。今でもそんなものをそんな形で抱いてゐるのではない。權利はその主張に於て、ではなく、その實行に於てのみ權利なのである。それがたゞ思想だの觀念だの證文だのゝ形に止るならば、權利は幽靈から湧く瓦斯か乃至はヨーロッパの政治家の口癖の『スタラップ・オブ・ペーパー』に過ぎない。私は、そんな瓦斯や紙屑の形に於て權利を持つてゐたのではなく、たゞ實行に於て權利をもつてゐたのだ。權利を『考へて』ゐたのではなく、權利を生活してゐたのであつた。

權利は、思想や觀念の優越によつて與へられたものではなく、行動の優越によつて獲られたものである。あるものゝ行動を、誰れもどうすることの出來ない所からそのものゝ權利が産れる。武器の力に對して誰れも何うすることが出來なければ、武器を握るものに權利が生ずる。財産の所有を、誰れも何うすることが出來なければ、財産所有者の權利が生ずる。世間に對して、押し通すことの出來るものか、たゞそれだけが、權利である。

思想や觀念やは、世間に對して、思想自體、觀念自體では一歩も押し通されぬ。あべこべに、世間がそんなものに對して自分を押し通すことは自由自在である。歴史は思想や觀念によつて作られるのではなく、思想や觀念が歴史によつて作られる。人間は歴史を生きて行くのであつて、思想や觀念を生きて行くのではない。『考へ』を生きるのが人間ではなく、『行動』を生きるのが人間である。その點で人間も動物である。たゞ一般動物と異る點は『考へ』といふ道具をもつてゐることである。猿も手をもち人間も手をもつ、たゞ異る所は、猿の手は道具をもたず、人間の手は道具をもつてゐることである。人間の行動には思想といふ道具が附き纏つてゐる、私の大腸にイルリガートルが附纏つてゐるやうに。

今度は議論が脱線したが、それを引戻して、私は上述の事實に基いて、その病人から病源を驅除する醫術が全く、社會的責任であることを結論する。

六　醫術と病人

病人が醫師に對して、何の責任をもつものでないのは、破損したエンジンがそれを修繕する人間に對して何の責任をもたないのと同じである。病人は、その疾病から回復することによつて、行動から回避する權利を失つて、再び社會的行動をとるといふのがその全責任である。それは彼れが社會に對して負ふ責任であつて、特に醫師に對して負ふ責任ではない。

然るに今日の病人は、醫師に對して責任を負はねばならず、それを負ふ力のないものは醫術をうけることが出來ない。その結果、彼れは行動回避の特權を持ちつゞける。而して社會は、その間、その必然的の寄生者を尊敬せねばならぬこと、無爲徒食の貴族に對すると同一であらねばならぬ。しかも後者を尊敬する理由は甚だ明白でないが、前者を尊敬せねばならぬ理由は、上述の如く明白である。社會は醫術に關する責任を脱れるために、澤山の病人を尊敬せねばならぬのは、全く計算を超越した愚擧である。

病人が、社會に對する行動の回復に對して醫師に支拂はねばならぬのは、エンジン自體が修繕料を負擔するやうなものである。エンジンの修繕料を、その使用者が支拂ふならば、病人の治療費は、社會が負擔せねばならぬ筈である。

然し、今日の社會に於ては、エンジンが自己の行動の故障の修繕に對して支拂はざるを得ないのみならず、エンジンの燃料に對してエンジン自身が支拂はねばならない。行動の燃料たる食料を得るには行動者はその行動を賣らねばならぬ。されば行動はこの組織に就ては、行動者自體の行動力の燃料を得るための運動である。行動の社會的性質は失はれて、從て行動の社會的衝動は失はれる。行動回避が行動者全體の心的態度となる。それは奴隸勞働の常態である。

生命が行動そのものに外ならないことは前述の通りである。されば

行動の回避は生命の回避である。生命の回避が意識の亢進となつて現はれることはギリシヤ末期のそれを始めとして多くの前例がある。現代に於ける意識の亢進は、行動がその社會的當然の衝動を失つて、無意味の強制となつた所から起る行動の回避の賜物である。そこではすべての運動が意識の形態として現はされ、意識の形態としてのみ發展し、錯覺と幻覺とのみが、歴史を作つてゐる。かういふ行動の屛息時代に於て勝ち誇つてゐるものは、現狀を支配する階級である。彼れは行動の生命を生きずに、意識の生命（？）を生きるものである。しかもさういふ生命は、一切を、行動する生命の犠牲に依頼するものである。行動者は、その行動によつて、自己を支持すると共に、自己に臨む意識の生活者の生命を支へる二重の負擔を背負はされてゐる。而かも彼等は中世紀に於ける彼等の先輩がもつてゐたやうな行動に對する強い衝動をもたずに、もつと前の古代奴隷と同じやうに行動から脱れやう〳〵とする消極的衝動に驅けられてゐる。

このこと自體は實に大なる行動の中斷である。社會は、彼れの行動を、その衝動の消耗に於て中斷せしめてゐる。行動の中斷は疾病である。現代の社會は、それ自體一個の病人である。が此病人を癒やして、社會から行動回避の特權を奪ひ、すべての社會人を健全な行動に引き戻す醫師は、何人からも支拂ひを要求しないであらう。（終）

五年前、病をベルリンに獲て、今なほスヰスの大學醫院に病臥してゐる友人I氏に此一篇を捧げる——筆者

人口問題の反批判

高田保馬

一、序

河上博士は其個人雜誌『社會問題研究』の昨年八月號に於て、私がかつて發表したる日本の人口問題觀に批評を加へられた。それに對する批判、云はゞ反批判を述べるのが執筆の動機ではあるが、可なりな曲解の上に立つてゐる(と少なくも私は考へるが)同博士の批判を論駁するだけのことはさまで考へをねる必要もなく學問的にも意義が乏しい。私はこれを機會に、人口に關する私の考をあらましまとめて見たいと思ふ。而して若し出來うるならば、此人口に關する一般的理論に關聯して、云はゞそれから引き出し得る結論の形に於て、同博士に對する反批判を述べることにしよう。今此筆を執るに際し、河上博士が私の短き隨筆をも看過することなく、それに詳しき分析と批判とを加へられたることに對して、私のこれに承服するとせざるとに關せず、深き謝意を表したいと思ふ。

二、人口增加の意義

マルサスの人口法則は、今日まで種々なる批評と論駁とを受けたるに拘はらず、なほ多くの學者によりて、大體上動かすべからざる眞理であると認められてゐる。少くも私の見る所によれば、人口が幾何級數に於て增加し食物は算術級數に於て增加すると云ふ根本の命題は、その精神に於て一派の學者を除くほか、一般的に承認せられてゐる。增加率の表現たる幾何級數及び算術級數と云ふ言葉が不適切であり、又言ひ過ぎであるにしても、二者の增加が不當にして食物の增加が人口の增加に及ばずとなす重要の點だけは多くの學者が認めてゐる、これ私がその精神に於てと云ふ所以である。たゞ食物の增加の方が後れると云ふ命題から得られる結末については、マルサスの見聞なほ當時の社會と云ふ視野の外に出でず、後の發達から見て極めて重要なるものを逸してゐると見る學者は多い。若し人口の增加に對して道德的抑制を遂行しないとすれば罪惡と貧困との外に行き道はないと云ふ斷定がしてあるに拘はらず、今日人口の增加を食物のそれに從はしめる最も有力なる方途、即ち出生制限は罪惡でも貧困もでないと同時にまた道德的抑制でもないではないかと云ふ主張は、必ずしも根據なしとは云へない。しかし、マルサスの人口法則の詳細なる吟味、その數多き批評の分析、それらは今私が目ざしてゐる仕事ではない。私はその根本の命題から、私の立論の出發點をとらへるために、マルサスの名を掲げ出して來たのである。

人口は幾何級數に於て増加すると云ひ、人口の増加は食物の増加に及ばずと云ふ、此場合に於ける人口の増加は何物を意味するか。

人口の増加と云ふことは社會人としての人の數の増加と云ふ以外に解し樣がない。單純なる動物としての人は一の抽象に過ぎぬ、その性質は私共の全く知り得ざるところであり、從ひてその口數の増加の比率又は割合もまた知り得ざるところである。世界の如何なるところにも存せず、人類の何人も未だかつて認識し得ざりし動物としての人の人口増加の割合如何と云ふことは私共の知識範圍の外に横はる。此必然的なる知識の制限を超えてみだりに推測を逞くするとしても到達し得るところの結論は不定である。社會人、即ち社會をなしてゐるところの、そして社會によりて統制せられてゐるところの（この屬性を以て理性を有する所のと書きかへる人があるならば、私は敢てそれを爭はぬ）人から、一切の社會的統制の要素をとり去ると考へよ。第一。人口の増加と最も密接なる性的結合は如何なる狀態に立ち至るか。ゾムブロヴイッチ流に本來の亂婚的傾向を認むるとすれば、此動物人の集合たる想定原始狀態に於てたゞ亂雜なる性的結合のみが認められるであらう。賣淫者の事實から推定するに、亂雜なる性的結合は女性の姙孕率を極度までに低下せしめ、或は之を皆無ならしめる。此想定狀態に於ては人口の増加どころか、人口の維持すらも困難となり、人類はやがて滅亡するとすらも考へられ得る。私は敢てこれを必然的なる結論と云ふのではない、かゝることの確らしさが否認しがたいと云ふのである。第二。その想定狀態は所謂萬人に對する萬人の戰であるかも知れぬ。此狀態に於て、果して人口の増加があり得るや如何、それについては何人も明確なる答解をなし得まいと思ふ。マルサスの場合には戰爭が人口増加の妨げと云ふ役目を營むだ。それは現實の結果狀態か想定せられ、戰爭は性慾食慾の如く人間に必然的に、不斷に、伴へる事柄でないと見られたが故である。然るに動物人が性慾と共に爭鬪慾を有して相對立するし而もこれを抑制する何等の制度なしとする以上爭鬪は性交と共に必然である、爭鬪は人口増加の妨げにあらずして、人口増加そのことを本來から不可能ならしめる。勿論、高等なる生物の必ずしも亂雜なる性的結合を營まざること、決して不斷の爭鬪狀態にあらざることからの類推として、如上の論據に否定的態度をとる論法も成立する立場もあり得るとは思ふ、併しながら、動物人そのものが認識し得られざる限り此否定も決して決定的ではあり得まい、結局動物人としての人口増加の程度如何の問題は永久に不定なる答解を與へらるゝ外はない。

私共の認識の範圍内に與へられたるものはたゞ社會人としての人口である。社會の組織の中に住み、法律、道德、慣習、風俗と云ふが如き一定の規範の下に共生を營むところの人口である。私共が明確に認めうる人口増加の割合はたゞこの社會人としての人口のそれである。

此立場は更に一歩だけ推しすゝめられてはならぬ。或は次の樣に論ずるものがあり得る。「私共に與へられたるものはたゞ一定の社會的制度即ち歷史的社會組織に於ける人口の増加である、此制度即ち一々の社會組織に於ける人口の法則は十分に認識し得らるべく、その人口増加と食物又は生活資料の増加との一定の關係は究明し得られる。而も各の社會組織はそれ自體に特有なる人口法則をもつ。此一定の組織

から離れて、よし社會人の人口增加について考察するにはしても、すべての社會組織を通じたる、從ひて特定の歴史的制度を離れたる人口の法則は存立せず、又認め得べからざるものである。」此の如き議論の仕方に就いてはたゞ次の如くに答へる外はない。一々の歴史的社會組織（今使用する此語の意味も多義である、而して、私はこれを他の場合嚴密に定義したると同一の意味に於て使用するのではない。それが玆に何を意味するかは、後に述ぶる所から推し知らるることを望む）がそれぞれに特有なる人口法則を有すると云ふ主張は十分に是認せられなければならぬ。然れども、その主張を根據として、又は此主張から更につき進んで、人口法則一般と云ふものは存立もしないし、又認識し得らるべくもないと云ふのは理由なきことであらうと思ふ。比喩を以て之を明にしよう。各種の生物有機體にはそれぞれ特有なる新陳代謝の法則、又は生長の法則がある。然れども、これあるが故に、生物一般に通ずる、從ひて生物のあらゆる發展段階に通ずる此等の法則は存立もせず、認識もせられずと云ひ得るや如何。これは、事、自然科學的なる生物に關する、從ひて直にそれから、社會人としての人口の增加と文化の發達によりて制約せらるる生活資料との關係に關する以上、各段階の人口法則があるとしても、その上に一般的なる人口法則が認め得らるべしと云ふ論證はなし難いと云ふかも知れない。然らば進みて云ひたい。資本家的社會に於て賣買せらるる各種の財の價格を支配する價格法則はそれぞれの財に固有なるものである。併しながらそれが固有なるものであるとしても、資本家的社會に於ける價格一般を支配する價格法則はやはり存立するし又認め得られる。これはすべての經濟學理論の肯定し又前提してゐるところである。更に又、資本家的社會の價格法則と前資本家的貨幣經濟の價格法則とはそれぞれに特有なる性質を有する。然るに拘はらず、又これらの兩者に共通なるところの貨幣經濟的價格一般の法則の存立も肯定せられてゐる。而して數多の經濟學理論の組織は之を確定し說明し得たりとなしてゐる。これらの理論の內容は或は誤れるものであるかも知れぬ。しかし、それは社會的なるものの範圍に於ても、特殊なる對象に固有なる法則を求め得ると共に、此特殊なるものを含むところの普遍的なる對象を支配する法則をまた求め得べしと云ふ確信と前提との上に立つてゐる。而して、此確信を否定すべき論據は存立しないと思ふ。かくて、例へば、今日の經濟學理論の可能を信ずる限り、人口法則一般の否認を敢てし得る理由はあるまい、後者の否認は必然的に前者の否認に導かなければならぬだらう。

三、分配係數そのほか

此の如き立場に立つ私は、人口の增加を、社會人としての人の數の增加と云ふこと以外に解釋し得ない。而かも此解釋は更に立入りたる說明をまつに非ざれば、人人にその明確なる意義を傳へ得ないであらう。

社會人としての人間は常に一定の拘束、即ち一定の規範の下に立つ彼等はその生物學的本能の趣くところに任することを得ず、社會の意志又は利益を顧慮することなくして專心自己の滿足を追求することを許されぬ。これは極めて平凡にして且つ自明なる命題である然れども

それが社會人としての人口増加の意義を明白ならしめる。かの一定の拘束は、國家の强制を伴ふところの法律によりて課せらるることもあり、或は慣習、道德、風俗等の形に於て個人に加へらるることもあり、更に進みては、これらの如く明白なる組織をもつことなくして、去來し轉變することろの、而も隱然として無意識の中に個人を束縛し同化せしめむとするところの、風潮、輿論の形式に於て個人にのぞむ事もある。何れにせよ、個人の思惟行動が個性の好むところに從ひて種々に變化しうるにしても、それには常に一定の限界が設かれてあり、此限界は背後に、國家又は社會の側よりする拘束を以て保障せられる。此拘束に從ふ限りに於ての人を玆に社會人と見る。此意味に於ける社會人の人數の増加が所謂一般的意義に於ける人口増加に外ならぬ。(なほ進みて、人々が社會に於て占有する一定の地位、生活狀態等についても闡說すべきであらうが今はそれに論及せず)

同一の内容をなほ、他の言葉を以て敍述しよう。例へば人人がすべて十六七歳から婚姻生活を營むならば、一生の中に產む兒數は今日よりも遙に多數であらう。然れども風俗乃至慣習は男子が三十歳に近づき女子が二十歳に達せざれば結婚しがたしと思はしめる。又生れたる子に對して慣習は、特別の場合に非ざる限り扶養の義務を負はしめる。これらの拘束からして、男女十六七歳に於て結婚することがない。かくて、此道行による兒數の決定は決して個人の恣意によるものではなく、一に社會人としての人口が必然に受くる拘束の結果である。此社會生活から必然的に個人の上に課せられる拘束の範圍内に於て、個人が任意なる制限を加へざる限り、出生によりて増加するであらうところの人口増加、これを指して私は社會人としての人口増加と云ふ。かの範圍内に於て、更に個人が進みて出生を制限し又は流產を敢てする事は飽まで個人の任意によることにして、社會人としての彼が必然的に、云はゞ社會意識に從ひて營むことでない。若し、マルサス人口の法則の言葉によりてこれを解せむとする人があるならば、次の如くに云はう。マルサス的意義に於ける人口増加の内容の中から、社會組織又は社會意識などの拘束に基くところの所謂「妨げ」による人口増加の障碍だけを差引く、その殘餘こそは即ちこゝに云ふところの社會人としての人口増加である。而して私は前述の如くこれを以て考へ得べき唯一の人口増加とする。

人口の法則は如上の意味に於ける人口増加と生活資料の増加との間に存する必然的關係を示す、或はこれを人口と生活資料との關係を示すとも云ひかへ得る。然れども此兩者の關係を明にするには、なほ其間に插入せらるべき、而して倂せ考察せらるべき他の二の概念がある今これらの概念に就いて簡單なる說明を述べようと思ふ。

マルサスの場合には人口と食物とが對比せられてゐる。此場合、食物が何を意味するかと云ふが如き文獻的考證には今立入らうと思はない。たゞ私は人口と對比せらるべきものは生活資料の生產額、從ひてその生產力であると思ふ。然れども、此生活資料の生產力は畢竟生產力一般の狀態によりて定まるものであるが故に、生產力を以て之に置きかへたい。次に私は生活標準又は生活の水準と云ふものを考へる。これは今の場合、一の社會(たとへば一國民)に於ける生產力の總額を人口數を以て除したる商ではない、換言すれば社會全體の平均的生

活標準ではない。其社會に於て大多數を占むるところの、而して其生活內容の低き階級の生活の程度を指す。何れの社會に於ても、疾病、低能、不具、又は其他十分に一人前としての能力を有せざるがために極めて低き生活程度を以て甘せざるを得ざるところの少數なる赤貧者がある。これらを姑く除いて考ふれば、最も低き生活を營むところの階級は最も多くの成員を含む。勿論此階級とても決して單純に同質的のものではなく、多少とも生活程度の異なれる人人を含む。然れどもそれらの人人の間に不斷なる流通、即ち位置の變更の可能である限りそれらの生活程度を概括し平均化して、こゝに此階級全體としての生活標準を得る。從ひて今生活標準と云ふは、社會全體の平均的生活程度ではなくして、最も低き階級の平均的生活程度を指すものである。

なほ、私は分配係數と云ふものを考へる。一社會に於ける生產物の總額は云ふまでもなく、あらゆる階級に分配せられる。而して、特定の階級がその中のどれだけを自分のものとして享受しうるかは、社會組織（極めて廣義に於ける）によりて定まる。若し、マルクス的表現を借るならば、それは生產關係によりて定まる。今假に、社會の生產力が急激に增加したりとするも、今問題とする最低階級（今日にありては無產者）がどれだけその生活程度を高め得るかは、此分配の樣子が定まらぬ以上、全然未定の事柄である。此の如く、社會の全生產物のうち、社會組織によりて、どれだけが此階級に割當てられるかの程度を示すところの數量を考へる。これを今假に稱して分配係數と云ふ。それは、決して固定的なるものではなく、社會組織と共に變化しうべきものである。然れども社會組織が比較的に變化せざるものである限り、それもまた比較的には不變である。多少の生產力の增加ありとしても、これに一步一步相伴うて變動すると云ふのではない、これに比較して見れば遙に不變的のものである。而してそれは社會組織の反映として考へ得らるべきものである。（なほ附言する。事實に於て分配係數は生活資料の總生產額と全人口をして低き階級と同一の生活を營ましめると假定したる場合、これに必要なる生活資料の額との比例である。即ち勞働者の生活資料を勞働人口の割合にて除したるものが生活資料の全額中に占むる割合である）。

以上に述べたるところだけを準備として次に人口の法則と名づけ得らるべきものを叙述し且つそれに多少の說明を加へようと思ふ。

四、人口方程式

人口は常に生產力に對して一定の關係を保たざるを得ざるものである。一時は此關係から脫逸することが出來るにしても、永久的乃至持續的には到底それから免れることが出來ぬ。此一定の關係は即ち人口及び生產力の二者がたえず變動しゆくうちにも落付かむとする狀態である。云はゞ運動的均衡の狀態である。從ひてそれは人口の正常的狀態とも云ひ得る。それが完全に實現せらるるのは恐らくたゞ瞬間に止まるのかも知れぬ、然れども人口の變動、生產力の變動は常にこの狀態に隨着せむとする運動として行はれる。かくて、此狀態は一の靜的法則として考へることが出來る。其內容は次の如きものである。

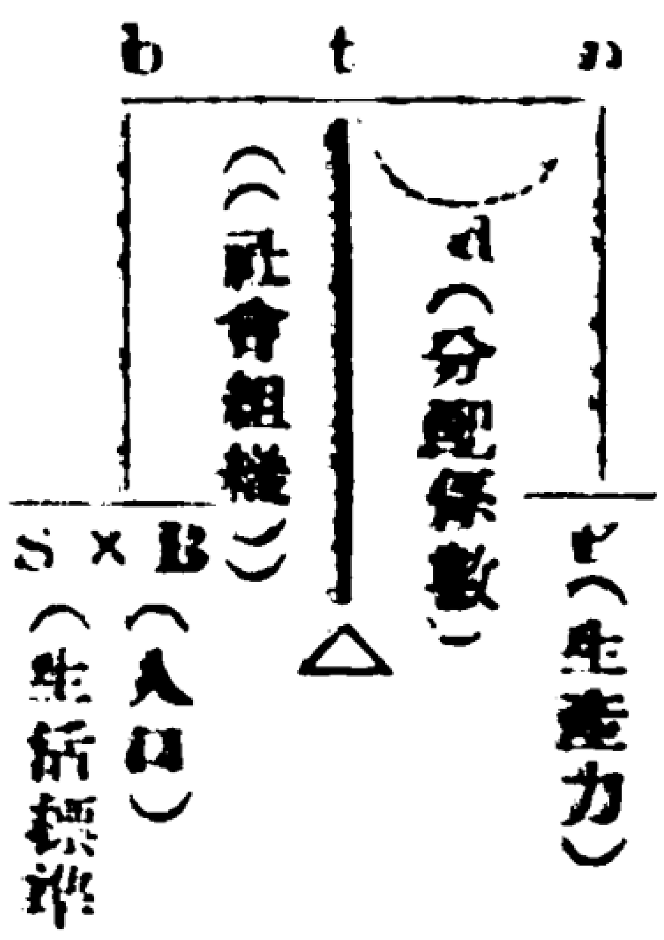
今、玆に說明したる生活標準をSとし、人口の數量をBとする。生產力をPとし、分配係數をuとする。これらの門には左の關係がある

(それを假に人口方程式と云ふ)。

$S \cdot B = d \cdot P$

換言すれば、生産力に分配係數を乘じたる積は生活標準に人口數を乘じたる積に等しい。dとPとの積は生産物の總額の中から、國民をしてかの生活標準を享受せしむる爲に分配せらるる部分である。BとSとの積は此生活標準を享受するに必要なる財の數量である。二者の相等しきことは、必要量と供給量との相等しきことを示す。此狀態のみが持續的でありうることは別に論證をまたざることである。

今、天秤の一方の皿に生産力pをのせる。他方の皿に人口の數量Bに生活標準Sの乘積をのせる。而して支柱の位置をば分配係數dに應ぜしめる。此支柱の位置が兩端pbの中央にある時にCは極大である、それは分配が完全に平等なる時の姿にして此時の分配係數の大さを一であるとする。事實に於ける分配係數は常に之より小にして、從ひて支柱の位置はこれに比し、多少ともPに近よれるものである。さて、此の如く工夫したる圖に就いて説明する。



分配係數cにして與へられてゐる限り、天秤の兩皿は常に相對衡し水平を保たむとする。これだけが所謂人口と生産力との關係を示すところの靜的法則である。此秤の水平は亂されて何れかの一方に傾く事は屢と云ふよりも、寧ろ不斷である。マルサス的立場に立つとすれば、人口の側が不斷に重きを占める傾がある。然るに拘はらず、漸次にそれは水平の位置に接近せむとして、云はゞ適應、復歸の道行を辿る。

今まで述べ來れるところは、飽まで靜的法則である(且つ又、カッセル的表現をかれば、齊一なる動態的法則)。それは均衡狀態の記述――然り極めて平凡なる記述――に外ならぬ。進みて考へる。此均衡は如何なる機構によりて成立せむとするか、此均衡を攪亂せむとする運動は何れの方面より起るか。次にこれらの動的問題に關する答解を與へようと思ふ。

均衡破壞の運動は第一に、人口の側より起る。人口の增加は勿論種々の關係より生ずるけれども、玆にはそれを抽象して考へる。今はそれをたゞ出生による人口增加の意味にのみ解しよう。さて、人口は不斷に增加の傾向を有する。但しこれは、少くも私の立場からしては、無條件に肯定し得られぬ。例へば、多夫一妻が婚姻の一般的形態をなしてゐる社會にありては、人口の增加を停止せしめるやうの社會的規範が形成せられてゐる。從ひて、人口を增加せしむるほどの出生はあり得ない、かかる場合に於ては、人口が常に必ず增加すると云はれ得ない。又滅亡に瀕してゐる低級民族にありては、かゝる社會的規範が成立して彼等の人口數を現在の生活資料の範圍に止めむとするのみならず、又生理的病理的理由のために出生が死亡に及ばざることも稀ではない。然れども、これらの場合を例外として見るならば、大體に於て、人口は增加の傾向を有すると云ひ得る。その何故に然るかは現實に於ける出生數の數字によりて、然るが故に然りと答へる外はない。たゞ此增加は原則として連續的である。勿論增加率は場合により大なることもあり又極めて小なることもある。併しながら、決してそれは飛躍的に增加することはない。さて、人口の增加がよし徐々であるに

せよ、又は徐々でないにせよ、連續して一定の期間に亘るとする。現在の生活標準を維持しつゝ、增加したる人口が生存すると云ふことは、漸次困難とならざるを得ぬ。此壓力は何所に向つてか放散せられざるを得ないであらう。前掲の人口方程式について見るに、生活標準S、分配係數C、生產力Pの三者中何れかゞ此壓力をうけて變化せざれば均衡が成立しがたい。事實に就いて見るに、分配係數Cはそれが社會組織ことに社會勢力關係の組織である以上、容易に大なる方へは變更せられがたく、又生活標準も、後に說くが如き事情からして變更せられ難い。其結果として、此人口增加の壓迫は先づ、而して最も强く生產力の上に加はる。

生產力の增加を決定する事情は極めて多い。一方には外圍の自然的資源の狀態も之を決定する事情であるが、又技術の進步が顯著なる決定力を有する。而も此進步は一定の社會的事情の下に於てのみ容易である、此事情（たとへば、傳統的權威の衰頽、個性の解決、固定的組織の弛緩と云ふが如き）が十分ならざる場合に於てはかゝる進步の全然不可能ならずとするも極めて遲々たるものである。さて、かゝる事情により促されて實現せらるる生產力の增加は決して連續的であるとは云ひ得ない。マルサスの人口法則に於て此生產力の增加に當るものは食物の增加であるが、食物の增加といへども、決して連續的ではない、云はゞ算術級數的ではない。生產力一般而して生活資料の生產力もまた、二の法則によりて支配せられる。一は報酬遞減の法則にして、他は技術變更の法則である。後者はその都的形態に於て、組織による節約の法則と稱せられる。食物又は生活資料が算術級數的にのみ、從ひて連續的にのみ增加すると云ふのは、たゞ報酬遞減の法則のみに着眼し、此法則のみが作用すると見たる場合に於て正しい（マルサスの人口法則と報酬遞減の法則との關係についてはオッペンハイマアの考察を參照すべし）。然るに技術變更の法則がこの上に作用するとき、生產力の增加は飛躍的であり、云はゞ斷續的である。勿論、技術の變更による生產力の增加は前述の如く、事情の如何によりて其實現の程度及び頻繁さに於て極めて區々なるを免れずといへども、それが多少とも飛躍的であることは爭ひ難い。

人口の增加がその壓力を生產力の上に加ふるとき、その結果は生產力の斷續的非連續的增加となりて現はれる。生產力の不斷なる連續的增加、即ち算術級數的增加は報酬遞減の法則の作用する結果として、人口の增加に伴ひ得ざる場合が生ずる。此際人口增加の壓力によりて生產力の側に生ずる變化は技術の變更による飛躍的增加である。これによりて分配係數の上に如何なる變化を生じ來るかについては、種々なる異論は免れ得ないであらう。然れども、大體に於てその變動はさまで顯著ならぬのを一般とする。かくて生產力の增加は增加したる人口を十分に支持し得るに至るのみならず、多くの場合顯著なる餘剩をすら生ずる。此餘剩は生活標準率Sを高める方面に使用せられかくて、人口增加の壓力は生產力の增加を通じて、生活標準の上昇と云ふ意外の結果を有するに至る。

過剩の生產力はかくて生活標準の上昇のために使用せられ、こゝにさきの人口方程式を以て示したる均衡狀態が成立せむとする。併しながら、此均衡は實現せられず、實現せらるるとしても瞬間以上の存續性

を有しない。人口の増加は前述の如く飽まで連續的である、從ひてその増加速度はよし小であるとしても増加部分は漸次に集積する。次の技術變更の實現までに、相當の日子を要し、生産力從ひて生活資料の増加が極めて遲々としてのみ増加する以上、また新なる不均衡を生ずる。前兩を以て云へば、人口、生活標準の積の方が生産力より重からむとする。然らば敢て問ふ、一たび上昇したる生活標準が低下することにより新なる均衡が成立せざるか。

此生活標準は決して單純に生命の維持に必要なる物資の數量によりて決定せらるるものではない。私の用語を以てすれば、力の欲望がすべての階級に亘りて作用する、最低き階級にとりてはそれが單なる優越の要求として作用するのではなく、寧ろ上位の階級の生活内容に對する追随の要求、同化の要求として作用する。その支配は如何なる場合にも消滅してしまふのではないが、生産力の略固定して、云はゞ報酬遞減の法則のみが作用する場合に於ては、それによりて生活標準の高め上げらるゝこと困難である、それは決して不可能ではないが、極めて困難であり、特殊の事情の下に於ては絶望的に困難である。然れども、之を引き上げむとする力の欲望の作用が普遍的であるが爲に、一たび高め上げられて現在の水面に到達してゐるところの生活標準の程度は、決して自發的に(何等かの外的強制をまつことなく單に個人の發意によりては。)低下することはない。特定の生活標準は常に二の部分から成り立つ。一は生命の維持存續のための絶對的必要額にして、他は漸次その上に高め上げられ、云はゞ附加せられたる部分、即ち力の欲望の満足のために要求せられたる額である。然れども、現實に於ける要求としては生命存續の要求と力の欲望に基く要求とが例へば衣類の要求、住居の要求と云ふ單一なる要求として意識せられ、從ひてこれを充すべき物資の十分なりや否やは生命存續の要求の充さるるや否やとして意識せられる。力の欲望は充足せらるること久しきにつれ、その充足が習慣的となるほど、生命維持の要求の假面を被る。從ひて旣に充足せしめつゝある力の欲望の充足を奪ふことは生命の維持に對する脅迫として反抗せられる。此の如くにして、高まれる生活標準は容易に低下することはない。さて此標準は前述の如く、生産力の略ぼ固定的なる間は上昇する餘地を有しない。然れども生産力が飛躍的に増加する際にありては、分配係數が顯著なる變化を見ざる限り(而してこれがいつも大體上、事實であるが)、低き階級のために取殘さるる物資が増加する、力の欲望は作用して、餘地の存する限り、其生活内容を高め上げる。特に此場合に注意すべきことは、他の閑散なる階級に於ける富の集積である。生産力の増加は彼等に豐富なる物資を與へる。その爲に新なる生活内容が創造せられこれが低き階級に一の例として見せつけられる。追随の要求はいよいよ強く刺戟せられる。かくして標準は高まるところまで高まり行く。人口の増加のために殘さるる餘地はやがて消滅するわけである。

かくて、人口の増加、生産力の増加、生活標準の上昇の三運動の循環性は明にせられたる譯である。人口の増加の連續性生産力増加の斷續性のために二者は相平行し、完全に一致することは出來ぬ。前者がある程度に達したる場合に於て其壓力は生産力の上に及びこれが飛躍的なる増加を見る。此の如くにして生じたる生活資料に於ける餘地、

即ち過剰なりし人口を養うて餘りある物資は生活標準の上昇によりて需要せられ消費せられる。然るに人口は依然として增加をつゞけるであらう。此際若し、上昇したる生活標準を切り下げ得るならば、增加したる人にはそのまゝに養はれ得る。このことが事實に於て行はれざるがために、云はゞ既存の生活標準の壓迫のために人口の增加が困難となるに至る。人口の增加は生産力の上に作用し、生産力の增加は生活標準の上昇を可能ならしめ、上昇したる生活標準は人口增加の上に壓迫を加へる。此壓迫がまた生産力に及び漸次此の如くにして循環する。その結果として殘存するものは何であるか。一方に於ては、生産力の發達と人口數量の膨脹、他方に於ては高き生活標準である。而して、前述の循環的過程によりて高め上げられたる生活標準は正に一の意識せられざる貯蓄である。蜂は春夏の活動に於て冬期の食糧となすべき蜜を貯藏する、人間の生活標準は此の如き用意の意識を以て高め上げられたるものではない。併しながら、人口が增加し而も生産力の增加が之に伴はずと云ふ異常の時期に於て、又は生産力の減殺せらるる戰爭の時機に於て、云はゞ國民の冬眠期に於て、彼等は此貯蓄に食ひこみ、これを消耗することによりて、十分に人口と生産力との均衡を維持しうべきである。

以上述べたるところは人口、生産力、生活標準と云ふ三者の相互作用であり、而して、人口方程式の示す均衡を形成する中心的過程である。然れども、かの均衡が常に必ずこれだけの過程によりて成立すると斷定することは困難であり、又誤りでもある。この他に、なほ副次的なる過程がありて、これと協力する。その中の重なるものを簡單に述べて見たい。

第一。人口は前述の如く生活標準からの壓力を受ける、換言すれば現在の生活標準を維持しつゝ、人口が更に進みて增加しようとすれば技術の狀況にして與へられたるものである限り、それが頗る困難である。そこで人口の受くる壓力は人口自體が加ふるところの壓力となり、それが生産力の增加の刺戟となる。然れども、人口の壓力が此生産力に加はるよりも寧ろ人口自體に加はることがある。即ち生活標準がそのまゝに維持せられ、而も生産力が遲々としてのみ增加する場合に於て、人口と生活資料との均衡が維持せらるる爲には人口自體の上に變化の來る以外、何等の方法も考へられぬ。此變化は第一に、墮胎殺兒の如き除却的方法であり、第二に、出生制限、晩婚、道德的抑制等の豫防的方法であり、第三に、人口增加を制限するが如き社會的規範の構成である。此最後のものは前二者が個人的自由意志的なる方法なるに對し、社會的方法とも見るべきものであらう。第二。生活標準の上昇が生産力の飛躍的增加に伴ひて實現せらるることは前述の如くである。然れども、此上昇はそれなくして生ぜずと云ふのではない。生活標準そのものもある程度の自動性を有する。それが力の欲望の充足の手段である以上、此欲望が特に增長するが如き事情の下に於ては、必ずしも生産力の增進をまたず、各自の競爭によりてある限度まではひとりでに高め上げられる。此上昇はやがて人口そのものの上に壓迫を加へ、その增加を阻止し、時としてはその減少をすら餘儀なくせしむるに至るものである。第三。分配係數は大體に於て變化せざるものと假定して議論をすゝめた。併しながら、それが變動性を有することは

於りに顯著なる事實である。而して、これは社會組織によりて決定せれると述べたるが、更に立入りて云へば、權力の分配によりて決定せられる。經濟的分配係數は大體に於て權力分配の反映に過ぎざるものである。勿論、權力の分配によりて分配係數の大體が決定せられ、從ひて云はゞその變動し得る範圍が限定せられたる場合に於て、生産力そのものゝ事情が多少の制限的意義を有し得ることはある。生産力の飛躍的增加は分配係數を低下せしむるもなほ、低き階級のものをして以前よりも多くの物資を享受せしむるに足る。かゝる事情の下に於ては分配係數が往々にして低下する。ことに、生産力の增加をもたらしたる所の技術の性質が之を促すが如き場合に於ては特に然り。人口增加の壓力が有効に生産力の上に加へられず、換言すれば、十分に生産力を增加せしむること能はず、而もまた生活標準を低下せしむること能はざる場合に於ては、分配係數そのものの變更に向ひてその壓力の作用することなきや。これは容易に肯定せられさうに思はれるが、私はそれを事實であるとは考へない。分配係數の根本的なる變化はむしろ權力分配の變更から來り、權力の分配はむしろ他の方面の事情から來る。此經濟的事情は他の事情から來る變革の動力に助勢する副次的のものに過ぎぬ。此點は唯物史觀をとるか他の史觀（例へば私のとる第三史觀）をとるかによりて別れるところであるが、問題の性質のあまりに重大なるがために、玆にその論證をなすことは到底なしうべからざることである

五、マルサス人口法則との比較

私が人口の增加（正確に云へば人口增加の傾向）を如何に解するかは前に述べたるところにて、明であらう。然らば人口の增加を此の如くに解してなほマルサス的なる人口法則は是認せられ得るか。固より人口の增加を此の如くに解するとき、それはマルサスの意義から遠ざかる。從ひて此問題はマルサス的なる人口の法則の外形が是認せられうるかと云ふことになる。

若し此外形が是認せられうべしとするならば、次の命題が肯定せられなければならぬ。人口の增加は生活資料の增加よりも速である。ここには其結果が罪惡貧困及び道德的抑制となると云ふ點については別に論及しない。

此根本命題は第一歩に於て先づ否定せられなければならぬ。前に述べたるが如く、人口の增加は常に社會人としての人口の增加である。社會人として人間は種々なる規範即ち拘束の下に立つ以上、場合によりてはその人數が全然出生によりて增加する傾向を有せざることもあるべきである。これらの場合をしばらく除外して考ふるもなほ、人口の增加が生活資料の增加よりも大なりと云ふことがらは、技術の變更の法則の作用せず、生産力が全然報酬遞減の法則に支配せられてのみ增加する期間に認め得らるるに過ぎぬ。技術が變革せられ、從ひて生産力の飛躍的增加ある場合に就いては、生活資料の增加が人口の增加よりも遙に急速である。かるが故にこそ、其時期に於ては生活標準が顯著なる上昇を遂げ得る。文化の爛熟せる社會に於ける生活標準と低級蠻民の生活標準とを比較せよ。その間の懸隔は大體に於て生産力が人口よりも少くも此等の期間に於て遙に多く增加したる事實の記錄

ではない。が、更に進みて考へる。人口の増加と生活資料の増加との比較は生産力の飛躍的増進に伴ひ生活標準の上昇して所謂人口方程式が示すところの均衡が略ぼ成立したる時を起點として、云はゞ新なる均衡ごとに行はるべき性質のものではなからう。人口の増加一般と生活資料の増加一般との何れが大なるかを比較せむとするならば低級の民族として生活標準の極めて低かりし時を出發點となし、此時の生活資料が増加して今日に至れる増加の割合と、其當時の人口がたゞ社會的規範の拘束のみによりて制限せられたりし場合に今に到達してゐるであらう人口の増加の割合と、此二者が比較せらるべきである。此の如き考方を進めるならば、一たび人口と生活資料との均衡が成立したる後、人口の増加により生産力の上に壓力の加はる期間といへども、生活資料の増加が人口の増加に遲れると見らるべき必然性はない、その逆を信ずべき論據が與へられ得る。畢竟かゝる考に從へば、生活資料の増加が人口の増加よりも小なりと主張しうる根據が愈薄弱となる。

私はなほ更に一歩を進めたいと思ふ。生産技術にさしたる變化を生ぜず、生産力の増加がたゞ報酬遞減の法則にのみ從ふがために、増加し行く人口に對して現在の生活標準に於ける生活資料が給與せられがたくなる。云はゞ人口の壓力が何れかに向いて發散せむとし、最も容易なる道筋をえらみて生産力の變革を生ずる道中にあるとせよ。此の如き場合にありては、若し生産技術の變化が容易に、而して間もなく行はれるとするならば、從ひて此變化が引きつゞき行はるる時期に於てならば、人口の増加が生活資料の増加よりも大に、從ひて後者が前者に後れると云ふ事實はあり得ざる譯である。之に反して若し、生産技術の變化が種々なる事情の爲に容易に生じ來らず、生産力の停止狀態が可なり永續するとせよ。此場合にありては、人口の増加の壓力があり、而もそれは生産力に向ひて有効に發散することが出來ぬ、さりとて生活標準の低下も多くは困難である。唯一の方法は人口増加の個人的制限であらう、それは除去的であるにせよ、豫防的であるにせよ。而も注意すべきことには事實がやがて規範となる性質を有する。此制限はしばらく存續する中に、規範となり、社會的拘束性を帶びるに至るであらう、これは必然的なる傾向である。而して此拘束が伴ふところ、社會人としての人口の増加傾向そのものが減少して、停滯せる生産力と相平行するに至らざれば已まぬであらう。此の如く考へ來れば、生産技術の變革が急速に行はれ且つ反覆せらるる時はもとより然らずして生産力の長く停止狀態にある場合といへども、生活資料の増加は決して人口の増加に後れるものではない。かくて、全體を通じて考ふれば、次の如き結論に到達せざるを得ぬ。生活資料の増加は人口の増加よりも大である。これまさしく、マルサス的人口法則の文句の裏返しである。その外形は今の場合に妥當せざるのみならず、その正反對が妥當する。

私の立場は人口の増加を社會人としての人口の増加と云ふこと以外に解釋する道なしとする。從ひて、所謂マルサスの人口法則は眞の人口法則に非ず、たゞ架空の推測に過ぎぬ。上に述べたるところのみが唯一の可能なる人口の法則である。然れども假に一歩をゆづりて、世の殆どすべての學者と共にマルサスの人口法則を是認するとしてもなほ、私の人口法則は存立する意義を有する。それは抽象的なる生物人

に關する人口法則にあらずして、社會人に關する人口法則である。前者が明にせられたりとて、後者はそれからの派生物又は結論としては出で來らぬ、それからは全く別なる、それとは獨立なる知識として作り上げられたるものである。此意味に於て、私は前述の人口法則をして、社會科學界に新なる一の市民權を所有せしめたいと思ふ。此人口の増加の意義の限定は、これを其外形に於て似たるオッペンハイマアの主張から區別せしめると信じてゐる。

六、資本家的社會の人口法則

さて今まで述べ來れる人口法則は社會人としての人口一般の法則である。此法則と相ならびて、而してある點まではその特殊の場合として種々なる社會組織に特有なる人口法則が存立するはずである。私は玆に資本家的社會についてその人口法則を考へたいと思ふ。前述の如く此社會に特有なる法則を認むると云ふことは決して人口一般の法則の否定ではないさりとて全然それからの結論又は派生とも稱しがたからう。此點は後に論及することとする。

資本家的社會組織の人口といへども、前述の人口方程式によりて示さるるところの靜的均衡に落付かむとする不斷の傾向を有する。かくてその大勢は $dp = B.S.$ によりて示され得る。次に此均衡状態への運動が如何なる部分過程によりて生ずるかと云へば、人口一般の場合について見たると同じく、大體に於て次の如きものである。人口増加の壓力は生産力を刺戟して技術の變革を促し、その増加をして飛躍的ならしめる、此生産力増加は増加人口の壓力をとり去ると共に、生活標準を高め上げる。人口増加の傾向にして依然存續すれば此過程はくりかへし行はれ、一方に於て大なる生産力他方に於て高き生活標準が此反覆せられたる過程の記念物として殘存する。然れども、資本家的社會の人口については此一般的なる過程の外、なほ副次的過程の特に顯著なるものがあり、場合によりては此中心過程を蔽ひ盡し、之に取りて代らむとする。それらはすべて、資本家的社會の特有なる性質に由來するものである。

第一。資本家的社會の生産は企業者の支配下にある。而して彼等は利潤のための激烈なる競爭を行ひつゝある。此利潤は重に生産力の増加によりて獲得せられる。其結果として、生産技術の變革が割合に頻繁に行はれてゐる。勿論、増加しゆく人口が一方にては新なる購買者として立ち、他方には新なる生産手段として存することが、此生産力の發達を刺戟する。又企業者の人口増加が彼等をして其生活程度を改めざらむとする限り、一層激烈なる競爭、從ひて生産力の急激なる増加を促す。然れども此人口増加の壓力を離れて考ふるもなほ、資本家的社會組織は云はゞ生産技術の變革、從ひて生産力の増進を不斷ならしむる傾向がある。かくて、生産力の自動的増進が此社會の一の特徴をなすこれが結果として生ずることは、少くも資本家的組織の爛熟に近づかざる時期に於て人口と生活標準とが共に手を携へて急速に増加することである。

第二。資本家的社會に於ける生活標準は、一方高められたる個人の自由、はげしくなれる個人の競爭の故に、他方生産力の不斷なる増加のゆゑに、たえず上昇をつゞける。而も此上昇はたゞに生産力の増加

によりてその餘地が作られたる場合、又はその程度に止まるのではない、自由と競爭とによりて力の欲望を刺戟せられたる人口は此制限をのりこえてまで生活標準を高めむとする。かくてその上昇たる、生産力の増加に伴ひこれに決定せられて生ずる事象とのみは見るべからずして、顯著なる自動性を有する從ひて生産力の増進が極めて困難なる場合といへども此自動的變化は中止しないであらうと思はれる。

第三。人口がその増加による壓力を他の項目、即ち生産力又は生活標準の上に加へむとする、然れども、それが有効にこれらの上に加へられ、從ひてこれらの變化によりて消滅し得られざる限り、人口自體の上に變動が來らざるを得ぬ。この人口の自動性は、一方に於ては社會的規範の變化となり、他方に於ては個人的自己制度となる。前者は茲に云ふ人口の増加率又は増加傾向そのものゝ變革にして、後者は個人的行動による調節である。さて資本家的社會に於ては、生活標準は自動的にすら向上せむとする、從ひてこれが上に人口増加の壓力を加ふることは一般に困難である。而も、生産力そのものは不斷に増加するとは云ふものの、此増加の或る場合には十分ならず、又困難なることすらもある。かゝる場合、ことに生活標準の自動的向上の伴ふ場合には、人口自體の變動が生じ、特に個人的自己制限が營まれる。

第四。分配係數は資本家的社會に於ても、他の社會組織に於けると等しく、一定の範圍の內を多少とも變動する。從ひて大體に於ては固定的と云ひうべきも仔細に見れば、時々に變更する。此變更には二種のものがある。一は景氣に伴ふ變動である。好景氣の場合に於ける勞銀の騰貴勞働需要の増加する事實から考へて、勞働所得一般の總額は好景氣の時に大であると思はれる。併しながら、生産力そのものの全體的増加が、勞銀の比較的に固定的なる點から考へて、如上の事實から直に分配係數もまた、好景氣に於て大なりと云ひ得ないであらう。ただ、それが景氣の運動につれて變化しうること、好景氣の時に或は大なりうべきことは事實である。併しながら少くも今の場合、この事の重要さがさまで大であるとは思はれぬ。二は生産力の増加、即ち技術の變化に伴ふところの分配係數の減少傾向である。資本家的社會にありては、低き階級（無産者）への生活資料の分配が勞働の給付、賣買と云ふ形式を通して營まれる。然るに、生産技術の變化は（本質的にではなく偶然的にではあるが）事實に於て、生産力に比して割合に少量の勞働を以て事足るやうの方向に向つてゐる。かくて、生産力の變化は一面に於て分配係數 a の減少を意味すると思はれる。たゞ後に説くが如く、此減少には一定の限度があるであらう、此限度をこえてまで減少することは恐らく不可能である。

今まで、人口方程式の各項目について、その資本家的社會に特有なる變動の仕方を述べた。云はゞそれは分析的考察である。次に、此等の項目が相聯絡して、綜合的なる動き方をなしつゝ資本家的社會に於ける人口と生産力との均衡を形成する道行を考へよう。それは前者に對して綜合的考察とも名づけらるべきものである。

資本家的社會の人口法則として看過すべからざるものはマルクスの主張したるそれである。今これを詳細に論述し、考證し、批判することは、私の當面の仕事ではない。たゞその立說の要領のみを述べて私見との關係を明にする。マルクスの人口法則の骨子をなすものは、私

の用語を以て云へば分配係數の變化にある。勞働の生産力が增加することは資本の有機的構成の變化することを意味する。生産力が增加するほど、全資本に對する可變資本の割合は減少する。資本が漸次に蓄積せらるるにつれて、可變資本の絶對額は增加するとは云へ、この割合は減少する、即ち可變資本が相對的には減少する。可變資本の相對的減少はやがて、分配係數の減少を意味する（此二者の減少の程度は必ずしも完全に、數量的に、相平行するとは云ひ難い。この考察には今立入る餘裕を有せぬ。たゞ二者が大體に於て平行する傾向あることのみは疑をいれぬと思ふ）。他方に於て人口の增加は不斷にして休止しない。かくて可變資本の相對的減少は勢、勞銀の總額をして增加しゆく人口と相伴ひ得ざるに至らしめるであらう。生産力の增加は止まるところがなく、これに應じて可變資本の相對的に減少亦止まる所なしとすれば、それが增加する人口を養ひ得ざるに至ることは必然の勢である。かくて、資本と結びつき得ざる人口、即ち産業豫備軍としての相對的過剩人口を生ずる。而して、此相對的過剩人口は決して絶對的過剩人口ではない。即ち社會の生産力が如何なる意味に於ても之を養ひ得ずと云ふのではなくして、資本の需要せざる所の人口が漸次增加したと云ふだけの事である。

さて此見解に對して、私は或る程度の批判と修正とを加ふると共に、それが正當に有しうべき意義を明にしたいと思ふ。

此の立論は相對的過剩人口の存在の必然性を論證し得ざるものである。それと同時に又、相對的過剩人口を與へたる事實なりとしても、これを必然的なるものとして說明する能はざるものである。第一。人口の增加そのものの社會性が明確に把捉せられてあるとは信じ難い、從ひて、社會人としての人口の增加が殆ど零となり負數となる可能すらあることが認められて居ない。併しながら、此點は姑く措いて議論を進めてもよいと思ふ。第二。可變資本がよし相對的に減少するにしても、その絶對額は增加する。而して、人口の增加が之よりも急速であるが故に相對的過剩人口が生ずると云ふ。若し可變資本が絶對的にも增加せずと云ふならば、人口の不斷なる增加を許してかゝる以上、かゝる過剩人口の存在は必然的である。然れども、前者が絶對的には增加する事を是認する以上は、何故に人口の增加が之よりも大であるかを論證するに非ざれば、所謂相對的過剩人口の必然的に存在することが明にせられぬ。また、よしかゝる過剩人口の存在を眼前の與へられたる事實として認めてかゝるにしても、述べ來れる所の「可變資本の相對的減少の法則」はたゞ可能的なる一說明たるに止まる、決して、これを必然的なるものとして說明しうべきものではない。而して私の知る限りに於ては、人口の增加が可變資本の絶對的大さの增加よりも急速なりと云ふ論證は遂行せられて居らぬ。第三。可變資本の相對的大さの減少は生産力の增加につれて減少する可能性を有すと思はれる。一方に於て、マルクス自身の叙述の中にたゞ思想的の構成としてではあるが、其減少の姿を下の如くに說いてゐる。不變資本に對する可變資本に對する割合は次の數字の系列の如くに漸次減少する。はじめ一對一なりしものが、次に二對一、三對一、四對一、五對一、七對一等。此場合總資本に對する可變資本の比は$\frac{1}{2}$より$\frac{1}{3}$、$\frac{1}{4}$、$\frac{1}{5}$、$\frac{1}{6}$、$\frac{1}{8}$等となりて進む。可變資本の相對的減少額は

$1-\frac{1}{2}=\frac{1}{2}; \frac{1}{2}-\frac{1}{3}=\frac{1}{6}; \frac{1}{3}-\frac{1}{4}=\frac{1}{12}; \frac{1}{4}-\frac{1}{5}=\frac{1}{20}; \frac{1}{5}-\frac{1}{6}=\frac{1}{30}; \frac{1}{6}-\frac{1}{8}=\frac{1}{24}$ と云ふが如くに進む。大體に於て、生產力の進むにつれて、可變資本の相對的に減少する率は漸次に低下すと隱然認められてゐる。他方に於て、所謂思想實驗の方面より云ふもこれは成程と首肯し得らるる理由がある。生產力低級にして可變資本が資本構成中に極めて顯著なる部分を占むる間は、技術の變化により勞働を節約すること割合に容易である。可變資本の割合が既に可なりに小となれる場合に於ては、それ以上の減少が强き障碍に逢ふこと多きを思はなければならぬ。勿論生產力の增加は底止することを知らぬであらう。併しながら生產力の增加が常に必ずこれと對應するところの可變資本減少をもたらすと見るのは誤であらうと思ふ。技術の進步は可變資本の割合をさまでに減少せず、生產物の數量を特に增加せしむることもまた頻繁である。此點は何れにしても、かの可變資本の割合が低きにつれて、それ以上の割合の減少は益困難ならざるを得ぬ。かくて、前揭の數字の變化も決して根據なきことではないと思ふ。さて、此可變資本の相對的減少が漸次その程度を低めることは、資本の不斷なる蓄積を前提とする以上、可變資本の絕對額が益〻增加するに至る事を示すものである。而して人口の增加が其增加率を漸次に高めゆくと考ふべき特別の理由なき以上、相對的過剩人口の存立すると云ふ論證は益薄弱とならざるを得ぬ。第四。相對的過剩人口が人口の過大より來らずしてこれと資本家的生產關係と云ふ特有の社會組織に於て結び付けらるべき可變資本の減少より來ると云ふ。而も生產力の不斷なる增加と共に無產者の生活標準は、大體から見て幾分かづゝ上昇してゐる。此結果は、資本家的生產の初期から爛熟期に至るまでに、可なりなる生活程度の差異を來してゐる。若し此差異なかりしものと假定するならば、而して、現存の可變資本がすべて勞働人口に分配せられるとするならば、所謂相對的過剩人口はない譯である。何となれば、此相對的過剩人口と見られてゐる失業者の割合よりも(よし之を不景氣の時について見ても)生活標準の上昇程度の方が超えてゐると思はれるからである。これについて今列擧すべき統計材料を有しないけれども、之を蒐集することは難事でないと信じてゐる。果して然りとすれば、此相對的過剩人口を認めるにしても、それは可變資本の過少より來らずして、寧ろ生活標準の上昇そのことから來ると云ひ得べきである。

　要するに、マルクス的人口理論は相對的過剩人口の必然的存在を論證する能はず、又その存在を與へられたる事實として前提しても、これが可能なる所以を說き得るのみにて必然なる所以を說き得ず、結局十分なる說明を與へ得ざるものである。從ひて所謂マルクス的人口法則は十分なる論據を缺けるものである。この過剩人口が全く他の事情から成立すと信じ得べき餘地を明白に存して居る。なほ附言すべきことは、相對的過剩人口が相對的過剩なる所以、それが絕對的過剩なりと見える理由を明にしたとしても、人口增加の概念そのものに手をふれず、これをマルサス的解釋に委したるまゝにては、此相對的過剩人口を超えたる所の絕對的過剩人口なしと云ふ點が少しも明白にせられぬと思ふ。此意味に於て、それはマルサス人口法則を補ふべき法則ではあり得ても、全然それに取代り、之を斥けうべきものではないと思

はれる。

私は總じて、自ら資本家的社會の人口法則と信ずるものを略述したいと思ふ。資本家的社會にありては、必ずしも人口の壓力をまたず、主として利潤獲得の競爭に基きて、生産力が急激に增加する、此增加に伴ひ、人口も生活標準も可なりの速さを以て增加する。而して生活標準が高まるにつれて、その自動的上昇性が愈加はる（此機構は自著「社會學的研究」中の諸論文、及び社會學原理の中に論述してゐる）。たゞ生産力の急激なる增加は前述の如く分配係數の減少の可能を大ならしめる。特に、資本の割合に勞働の需要が增加せず、所謂可變資本の相對的減少のためにこの事は事實として實現せられる。此分配係數の減少が直に過剰人口を生ずとは云はれ得ぬがたゞ生活標準の上昇が之と相まちて、少くも不景氣特に恐慌の時期に於ける過剰人口を生ずる。此の如くにして「生産力の不斷なる增加が一方に於て人口の顯著なる增加と生活標準の上昇を、他方に於て、一時的過剰人口の傾向とを生ずる。」此相容れざる兩者の並行しうることは、生活標準の自動的上昇、即ち生産力と分配係數とによりて與へらるる限界をこえて上昇せむとすることから、過剰人口をうむ點に由來する。

たゞ注意すべきことは、これが資本家的社會の生長期に於ける人口法則であるに止まることである。かゝる社會の爛熟期を支配する人口法則は全くこれと異なる。マルクスの着眼したりしもの、その所謂資本家的社會の人口法則を求め來りしところは、前者即ち生長期であつて後者ではない。詳言すれば、そのとけるものは資本家的社會の本質が十分に展開せられたる社會の人口法則ではなかつたのである。

此爛熟期に於ては、生活標準はその自動性の故に、生活資料額（可變資本、從ひてd.p）以上に上昇する。今の場合、前述の理由によりて可變資本の相對的減少の勢は極めてゆるむであらう。併しながら、生産力Pは必ずしも以前の速度を以て增加せぬ、種々なる產業部門に於ける獨占の成立は競爭による生産力增加の刺戟を弱めるであらうが故に。然りとすれば、自動的に上昇する生活標準（これは一家族、又は一生計當りのものと見てはならぬ、一人當りとして見らるべきものである）と生活資料との均衡が如何にして確立し得らるべきか。最も手近き方法は人口の自己制限である。而も資本家的社會そのものは極度までに理知を發達せしめる。かくて此制限も除去的なる墮胎、殺兒の方法によらずして、出生制限そのものによる。此傾向は漸次、規範化して人口の增加の傾向そのものを減殺するであらう。かくて、資本家的社會の本質が展開せらるればせらるるほど、出生率は減少し人口はその增加を休止するに至るであらう。私はこの他になほ、分配係數そのものが變化せらるべき狀勢にあることを信ずるが、それにはこゝに論及しない。

此人口の自己制限が如何なる程度に於て生起するかは、もとより種々なる特殊的の事情によりて決定せられる。例へば、資本家的生產の可なりに成熟したる社會にありても、その資源がなほ格別に豐富にして、從ひて生産力が比較的に豐富である場合には、生活標準の上昇に拘はらず、なほ增加しゆく人口を優に養ひ得るであらう。かゝる場合にありては、人口の自己制限の程度も未だ微弱である。北米合衆國の如きは其一例である。然れども之に反して、資本家的組織が爛熟する

と共に、其資源に於てかゝる有利の地位に立たず、又此外の事情により生産力の増加が割合に困難となれる場合には、生活標準が自らを制限せず、人口の自己制限を強からしめる。佛蘭西、英吉利の出生率の極度なる減少は資本家的組織の内部に包蔵せられたる運命の必然的展開に外ならぬものである。

此の如く考へ來れば、資本家的生産の進行につれて相對的過剰人口が益々増加すべしと云ふ主張は到底支持し得べからざるものである。資本主義の爛熟は、一方に於て可變資本の割合の減少を妨げむとする傾向あるのみならず、他方に於て、而して何よりもまづ、人口の數量を資本の要求にまで制限せむとする、而して更にすゝみては、此制限によりて生活標準の下斷なる上昇を可能ならしめむとする。此制限がどこまで實現せらるるかは今のところ全然豫斷を許さない。然れども、資本家的生産の進行が理知打算の態度を完成に近づかしむと見る限り、それはとにかく人口と生活標準との積をして生活資料と相等しき點に止まらしめうると信ぜざるを得ぬ。若し夫れ、恐慌の其頻繁さを加へ、その範圍と程度とを加へると云ふ點に關する過剰人口の考察に至りては、其重要さの大にして且つ問題内容の複雑なるが爲に、後日これを特別の仕事として仕上げたいと思ふ。

私が資本家的社會の人口法則と見るものにつき其骨子のみを繰返してのべる。資本家的社會の生長期に於ては、生産力の急激なる増加に伴ひ、一方には人口の顯著なる増加、生活標準の上昇、他方には分配係數の下降、從ひて所謂相對的過剰人口の可能が伴ふ（此可能は生活標準の上昇ありて成立しうる事柄である）。その爛熟期に於ては、生活標準の自動的上昇の爲に、人口の自己制限が營まれ、二者の積をば生活資料に等しからしめむとする。資本家的社會の本質の十分に展開せらるるは後者にあり、前者はそれへの道行に外ならず。かくて、十分なる意義に於ける資本家的社會の人口法則と見るべきは後者であらう。

此資本家的社會の人口法則を共産的社會の人口法則と比較することは興味ある事柄である。たゞ共産的社會はその近代的形態に於てはまだ完全に確立せられず、從ひてその人口法則と云ふも、思想上の構成物たるに止まる。此場合にありても人口方程式 $dP = s.B.$ は成立しなければならぬ。而して、此均衡の形成せらるる道行の主要なるものはやはり人口の増加によりて生産力が刺戟せられて増加しつゞいて生活標準が高まると云ふのであらう。但し此場合 d の大さは略一に近い從ひて人口方程式は $P = s.B.$ となる。たゞ此組織に於ける社會の特性として、かの均衡の成立に對しては次の如き副次的過程が強く作用するであらう。利潤獲得の競爭が生産力の増加を促すこと止むが故に或はPの増加が其度を減ずる可能がある。人口の増加に對する個人的自己制限は今や其必要を失ふが故に、新なる拘束の生ぜざる限り人口は著しく増加しようとする、然れども生活標準の下降は望まれない。その結果、人口の増加に對して雜多の規範、ことに法規の拘束が生じ云はゞ人口の社會的管理が成立するに至るであらう。而して生活標準そのものすらも社會の規制によりて決定せらるるであらう。企圖としては生産力の大さと現在の生活標準とによりて人口の管理又は調節が行はれるに相違ない。併し人口の増加はさまで詳細なる調節を不可能とすべく、從ひて、實際の増加數に應じて、一方生産力の増加が或は強

く或は弱く要求せられ、他方ある場合には生活標準の上昇又は下降すらもが實行せられる。たゞ社會的拘束を弛むる時は、人口が生産力を超えて増加する可能性がある。資本家的社會に於て、人口が生産力の増加速度以下、特に生活資料の増加速度以下に於てのみ増加せむとする傾向と全く相反する。資本家的組織は資本の帝國主義的努力を生む、而も帝國主義的行動に必要なる人間的材料即ち肉彈の素材たる勞働人には資本家的生産そのことの故に増加せず、減少せむとすらする。

以下次號

健保問答

末弘嚴太郎

——健康保險法の改廢問題が大分やかましいが君には何か意見があるかね？

——大にあるね、無論。

——それぢや少し聞かせ給へ。

——そりや無論きかせんこともないが、その前にかう言ふ問題を論ずるについての根本的態度を明かにして置く必要があるね。

——て言ふと？

——別に改まつて言ふ程大いしたことでもないが、かう言ふ問題を論ずるについては餘程具體的の實情を調べてかゝらないとしつかりした實際的の意見はとても立ち難い。矢鱈に理想論を述べたり外國の事例を引用しても實際上殆ど何の役にも立たない。殊に資本主義を前提とする社會政策には資本主義必然の結果として必ず一定の限界があるから、その限界を越へた改正意見を主張することは資本主義そのものを否定することになる。從つて話が其所までゆくと立場が違ふからお互に議論にならない……。

——成程ね、すると共産系統の人達が可成り徹底的な改正意見を吐いてゐても、政府や資本家乃至は資本主義の是認を出發點としてゐる勞働組合の人達とは抑も立場が違ふから初めから議論にならんと言ふのだね。

——そうだ、共産系統の人々の改正意見は資本主義的社會政策そのものゝ否定だ、そうしてそう言ふ意見を吐いてこそ彼等としてもその主義主張に忠なりと言ふことが出來るのだ、しかし、今吾々が現實の問題として健保問題を論ずるについては資本主義の是認——と言ふて何所までも理論的に肯定すると言ふ意味ぢやないが——ともかく資本主義を前提とし吾國資本家的産業の實際を考慮に入れて議論を立てなければ駄目だ……。

——よからう。その點はおれも贊成するから一つ本論に入らうぢやないか。一體健保改正すべしと言ふ議論は殆どあらゆる人々に通ずる一

致の意見のやうだが、あの法律の何所がどういけないと言ふのだね。

二

――サア色々非難の點もあるが、先づ第一にあの法律を實施して見て驚いたのは政府當局者でね、思つたより餘程金がかゝるので困つて仕舞つたサ。

――そりやおかしいね。隨分長いことえらい澤山の人々が研究して作り上げた制度ぢやないか。それが實施早々そんな思惑違ひを來たすと言ふのは餘りにひどいよ。

――實際ひどいサ。しかし考へて見給へ。あの法律は抑も生れが悪いのだ。大正十一年あの――治安維持法の前身たる――過激社會運動取締法案が議會に提出されて大議論をまき起し朝野の注意が殆どこれに集中してゐたドサクサまぎれに殆ど世の中から何等の批評を受けず又審議らしい審議も受けずに僅か三四日の中に通過して仕舞つたのがあの法律で、言はゞ月足らずで生まれた赤兒に比すべきものなのだ。

――そう〳〵、そう言へば思ひ出すが僕などもあの法案は無論審議未了翌年に持越すものと考へてゐた。

――君だけぢやない、資本家だつて勞働組合の人達だつて皆そう思つてゐたのサ。だから誰しも法案の研究もせず批評も述べずに呑氣にやつてゐたんだよ。所が驚くぢやないか議會は實際殆ど何等の議論もせずに易々とあの大法案を通して仕舞つた。これぢやあとから各方面に小言が出るのは當然だよ。

――無論そうだ。何しろ月足らずの子供は育て上げるのに骨が折れるからな。しかし、一體思つたより金がかかると言ふてその原因は何所にあるのだい？

――勞働者が病氣だ〳〵と言ふて保險の世話になる數が豫期したより非常に多いと言ふ譯サ。

――て言ふと、政府當局の調査が足りなかつたと言ふ譯かね、それとも勞働者が保險の利益を濫用し過ぎると言ふ次第かね。

――兩方あるだらうね。何しろ高々年額四百萬圓の國庫補助でこの大事業をやり上げやうと言ふのが抑も無理サ。それに勞働者にして折角保險料を拂つてゐる以上少しでも餘計恩惠を受けなければ損だと言ふ氣になるのは尤だからな。

――そんなら先づ第一に國庫補助をもつと増せばいゝのだらう。銀行救濟にさへ何億と言ふ金を出そうと言ふ政府のことだから……。

――そりや無論そうだ。しかしそれには一般國民の立場も考へる必要がある。如何に勞働者の爲めに醫療が必要でも、同時に何故に多數國民の中健康保險の適用を受け得る勞働者だけが國民全體の負擔によつて恩惠を受け得るかの問題を考へない譯にゆかない。そうしてそのことを考へると無暗に國庫負擔金を増せと言ふ議論も出來難いことになるのだ。

――するとその點は事の輕重を考へてどの程度まで國費をこの方面へ

差し向けるのが適當かと言ふ問題になるのだな？

——そうだ。

——それぢやその次の勞働者が保險の恩惠を濫用し過ぎると言ふ點はどうだね。

——さあその問題は頗る難問題だよ。何故かと言ふと、誰れしも好んで醫者の世話になる奴はない、又勞働者として受け所得べき療養の程度が何であるかを客觀的にきめることは事實到底不可能だから。それにさつきも言つたやうに誰しも保險料をとられる以上出來るだけ保險の恩惠に浴しなければ損だと思ふのは人情だからな。

——そりやそうだが、こう言ふことはないかしらん。健康保險制度の布かれるまでは醫者にかゝり度くもかゝれない。それが爲め齒だか眼だとか慢性的の病氣が治療を受けずにたまつてゐた、それが健康保險が出來たと言ふので急に一度に出て來て治療を求めるやうになつた、つまり今までたまつてゐたものが一度に出て來た爲めに費用がかさみ過ぎる、と言ふやうな一時的の事情があると思はないか、君は？

——その點は僕も同感だ。從來無料診療所を細民地區に作ると初めの内は必ずかう言ふ現象があるそうだから。

——そうだとすると、初め一二年の所比較的多額の費用を出せば後は多少何とかなるだらうと言ふ意見も立つ譯だね。

——そうだ。しかし結局の問題として業務上の傷病と業務外の傷病とを區別して、前者については何所までも雇主を責任者とし、後者については治療を受ける都度——僅かでいゝから——ある程度の料金を拂はせるやうなことを考へたらいゝやうに僕は考へるんだ。そうすれば普通の醫者にかゝるよりは遙か安價に治療を受け得る。而かも多少とも金を拂ふと言ふことは餘程濫用を戒める效能があるから、費用の問題もこれで餘程解決出來ると僕は考へてゐる。

三

——所が勞働者が保險の恩惠を濫用し過ぎると言ふ小言は、費用問題の點からだけでなく、資本家の側からも別の點から大分激しく言はれてゐると言ふぢやないか？

——と言ふと、勞働者が大して病者でもないのに、「被保險者療養の爲勞務ニ服スルコト能ハザルトキハ其ノ期間傷病手當金トシテ一日ニ付報酬日額ノ百分ノ六十ニ相當スル金額ヲ支給ス」と言ふ例の傷病手當金を當てにしてとかく休みたがる、その結果健康保險法實施の結果として休業者が激增したと言ふ小言かね？

——そうだ。

——この點は失業保險法や災害補償法などを實施するについて何所の國でも能く起る問題でね。吾々の健康保險法ぢやこの種の弊害を防ぐ爲めに業務外の傷病による休業については休業日から起算して第四日からでなければ手當金を出さないことにしてゐるのだが、それだけでもどうも足りないと見へるんだね。

——そうらしい。しかし勞働者が濫用すると言ふ方面だけを惡意に考へずに、今までこの法律のなかつた以前には休めば食へないから病氣でも仕方なしに無理に働きに出たと言ふ事情もあり得ることを考へてやらねばならんね。

——それも確かにある。しかし若しも實際上濫用の弊害が甚しいならば——無論これは當局者の精確公平な調査の結果を俟たなければ解らんが——若しも今日資本家が訴へてゐる程甚しいのであれば、何とか法律を改正せねばならん。或は傷病手當金の額を減らすとか或は現在四日になつてゐるウエーチング・ピリヨドをも少し伸ばすとか、何等かの改正を加へる必要があるだらう。しかしそんなことを言はれるのは一體吾國勞働者の恥辱ぢやないか。勞働組合側ではよろしくこの資本家の非難の眞實なりや否やを事實について確かむべきだ。そうして若しもそれが眞實でないならば大にそれを論據として彼等自らの主張を強硬に貫くべきであるし、又若しも不幸にして資本家の非難が眞實であるならば自ら省みて互に戒めるだけの雅量がなければ駄目だ。一體勞働運動は正義の運動だ。自らの不正を愼まずに相手方の不正をのみせめるが如きは決して勞働運動の健全な發達を期する所以ぢやない……

——ハヽヽ、大變氣焔が激しくなつたが、資本家側の小言にはまだも一つ考へてやらねばならない點があるのだぜ。

——と言ふのは？

——つまり健康保險實施の結果困るのは小資本家だけで大資本家は反つて得をしてゐると言ふ非難だ。即ち大資本家は從來でも大抵共濟組合を組織して相當の金を出してゐたから、健康保險が實施されても特に負擔が増大しない、否反つて負擔が輕くなつたものさへあると言ふ話だ。所が小資本家になると業務外の傷病に對してまで金を出してゐてはとても立ち行かない。これが小資本家連のかなり強い小言で、これも一應尤な點があると思はねばならんね。

——成程至極御尤だ。しかしそれは資本主義發達の自然的趨勢として中小資本家が漸次につぶれてゆく當然の現象で、今更如何とも仕方がない。つまり資本主義を前提とする社會政策はそれが進めば進む程中小資本家をつぶす働きが段々強くなると言ふ議論がこれによつて立證されてゐる譯だ。

——ハ、馬鹿に學者的冷酷な納まり方をしてるぢやないか。

——でもこれは事實だから仕方がないよ。

——そりやそうだ。けれども大資本家の中に共濟組合時代よりも反つて負擔が輕くなつた者があると言ふことが若しも事實であるならば、こいつは何とか考へねばならんね。僕の考ぢや一體健康保險なる統一的制度を布いて無理に在來の共濟組合をつぶして仕舞ふやうなことをするのが抑ものあやまりだと思ふのだ。それよりも共濟組合法を制定して在來の共濟組合に保護と取締とを加へてその働きを適正ならしめ健康保險法は唯その足らざる所を補ふものたらしめるやうにすれば

かつたと思ふのだ。つまり吾國には吾國獨特の共濟組合制度が相當發達してゐた。それを助長利用することを考へずに、外國流の健康保險法で萬事を統一しやうとした事に根本的の過誤があると僕は思ふのだ。

四

——成程それはその通だな。所で資本家側の小言はその位にして次に勞働者側の非難をきかうぢやないか。

——それは色々あるよ。しかしその前に一應考へて貰はねばならないのは、色々小言はあるもの丶新に健康保險のお蔭を蒙るやうになつた勞働者だけはこれで可成り利益を受けてゐること だけは事實だと言ふことだ。從つて勞働者側の小言として是非共先づきかなければならないのは、同じ勞働者でありながら、何故に工場法並に鑛業法の適用を受ける勞働者だけがかくの如き恩惠に浴することが出來るのか、苟も勞働者である以上すべて同樣の恩惠を受けて然るべきだと言ふ議論だ。

——そりや全くその通だな。

——無論さ。今では工場法乃至鑛業法の適用を受けない勞働者は業務上の傷病ですら法律上——普通の民法行爲の規定による外——何等の救濟を受け得ない。然るに此等の法律の適用を受けるものだけは業務外の傷病についてまでも國費の補助によつて治療を受け得ると言ふのは如何にも不公平がひどい。此點をどうにかすることが健保改正問題の第一要點だと僕は確信するのだ……。

——そりや全く君の言ふ通りだ。しかしその點は先づ別として現在健康保險法の適用を受けてる連中の小言はどう言ふんだい。

——それにも色々あるが、先づ第一には從來彼等は業務上の傷病については工場法乃至鑛業法によつて全く無償で扶助を受けることが出來た。然るに健康保險法がしかれてから此方業務上の傷病についてまで保險料をとられるのは不當だと言ふ非難があるのさ。

——しかしその點は健康保險法によると業務外の傷病についてまで療養を受けたり傷病手當を貰へるのだから仕方がないぢやないか。

——さう言へばさうだけれども、業務上の傷害に對して雇主が責任を負ふのは理の當然だ。彼等は機械に故障が起れば無論自己の費用で修繕するにきまつてゐる。それならば機械の附屬品に過ぎない勞働者の故障に對して絶對の責任を負ふべきは理の當然。それを業務外の傷病にまで保險の利益を與へるからと言ふ理由で、多少とも勞働者自らの負擔にするのは不都合だ。第一それでは勞働者の心持が納まらないよ。

——すると、業務上の傷病は飽くまでもすべて雇主の責任とし、業務外の傷病については全く別に保險的の救濟方法を考へろと言ふのが君の意見かね。

——さうだ、さうしてさつきも言つた通り業務外の傷病については平素保險料を支拂はせる外に實際醫療を受ける際に多少の金を拂はせることにすればいいと僕は思ふのさ。學者に言はせると業務上の傷病と業務外の傷病とを一の保險の中に採り容れた所が健康保險法の妙味だ

と言ふけれども、業務上の傷病に對する費用を多少とも勞働者に分擔させることはどうも面白くない……。

——しかし、實際の計算では業務上の傷病に對する費用は全部雇主の負擔とし、業務外の傷病に對する費用は三分の二を勞働者、三分の一を雇主の負擔とし、全體を合はせると結局勞資各二分の一づゝを負擔することにしてゐるそうぢやないか？

——そりやそうだ。しかしそんな說明ぢやとても勞働者の氣持は納まらないよ。何しろ健康保險以前には全く只で業務上の傷病を治して貰ふことが出來たのだから。

——成程な。所で勞働者側の小言にはその外どんなことがあるんだい？

——保險醫が不親切でいけないとか、保險給付を受ける手續が面倒でいけないとか、保險組合をもつと自治的にしろとか、被保險者の家族も醫療を受け得るようにしろとか、中々數へきれない程色々の小言や注文があるよ。

——それで醫者が被保險者に對する診療を特に不親切にすると言ふ噂があるが、實際かしらん？

——さあ皆が皆不親切だと言ふ譯でもあるまいが、中にはひどい奴もゐるだらう。何しろ政府と醫師會とで協定した治療代が可成り安いからな。

——しかしそれぢや醫療を受ける當人はたまらないぢやないか。何とかうまい改正方法はないものかしらん。

——そりや譯ないよ、今やつてゐるやうな政府と醫師會との協約を斷然やめて、政府乃至保險組合專屬の診療所を作るなり特別の保險醫を囑託することにすればいゝんだ。

——所がそれぢや他の一般の醫者がお得意をとられて乾上つて仕舞ふだらう。

——無論そう言ふ傾向はあるだらう。そうしてそれだからこそ現在のやうな協約が成立つてゐる譯さ。しかし若しも實際醫者の中に被保險者を特別扱にするやうな不德漢があるとすれば もうそんな呑氣なことは言つてゐられないぢやないか。

——そりやそうだ。一體理想的に言ふと醫術と言ふものは國營にすべきものだ。今のやうぢや如何に治療醫學が進步し如何に立派な醫師が出來やうとも多數の無產者は全くそのお蔭を蒙ることが出來ない。それ所か普通の風引き醫者にさへかゝることが出來ない。成程醫者が比較的容易に成金になる途であつたり比較的いゝ生業であつたりすることは自ら天下の秀才を醫學に向はしめ、その結果醫術の進步を來たす所以かもしれないけれども、折角かくして進步した醫術が唯金持の爲めにのみ貢獻するものであるとしたならば、社會の爲め一體それが何になるのだ。學問なんてものはそんなものぢやない。學そのものが面白いから勉强するのだ。金持になる手段として學問をするものぢやない。だから綜合醫術を國營にしたつて立派な——それこそ本統の醫者

らしい——醫者はいくらでも出來るに違ひない。そうして貧富の別なく誰れでも氣安に醫療を受け得るやうにしなくてはいかん……。

——オイ〳〵論旨大に同感だが、少し脫線がひどすぎるぜ。

——ハヽヽヽしかしこの點が根本的に改正されるかどうかで健康保險の問題なぞも大に變つて來るからな。

——そりやそうだ。だから少くとも現在の健康保險に於ても普通の醫者のお得意がとられて仕舞ふなんて問題を考へずに專屬の診療所なり保險醫を作つて醫術國營の一端を開くことにする方がいゝと僕は言ふんだ。

——無論だとも。

——そうしてそう言ふ風にすれば現在醫者の側で平均一點二十錢の治療代ではとてもやり切れないから增額してくれろと言ふやうなことを言つてる點も自ら解決されることになる……。

——是非共そうしなくてはいかん。そうして一步進んでは都會であらうが農村であらうがもつと公益的の救療制度を普及することにせねばいかんね……。所で話が大分長くなつて來たからこゝらで打切ることにして、要するに君の意見をかいつまんで言ふとどう言ふことになるのかね。

五

——話が大分多岐に亘つたから一寸かいつまむのは困難だが、先づ第一に業務上の傷病と業務外のものとを區別し、前者については現在の工場法や鑛業法に規定してゐるやうな扶助の程度でなく、もつと完全なそうして廣くあらゆる勞働者に適用する災害及び職業病の補償法を作らねばならん。そうして健康保險の方は無論勞働者にも保險料を負擔させるがその外實際治療を受ける都度——從令僅かでもいゝから——いくらか金を出させることにするといゝ。

——すると健康保險の適用を受けるのは業務外の傷病だけになるのかい？

——まあそうだ、しかし診療所や保險醫が業務外の傷病なら見てやるが業務上の傷病は見てやらないと言ふやうなことになつては困るから治療だけは原因の如何を問はずすべて診療所でこれを與へ、そうして業務上の傷病たることの證明されたものだけは全部災害補償法によつて雇主に費用全部を負擔させることにすればいゝと思ふのだ。

——そうして被保險者の家族の傷病はどうするのだい？

——これも今言つた小額の料金を出させて保險醫が治療してやることにすればいゝと思ふね。

——それから例の勞働者が病氣を口實にして休んで困る問題は？

——あれは實際弊害の程度を調べた上でないと、しつかりしたことは言へないが、若し資本家の言ふ通り弊害がひどければ例のウェーチング・ピリヨドを延ばすなり傷病手當金を減らすかせねばならんね。勞働者側の人は怒るかもしれないが若しも弊害が事實ひどいとすれば已

むを得ない。勞働者全體としては自業自得だ……。

——そう言へばそうだな。

——それからその外の細い點は面倒臭いからもう繰返さないが、在來の共濟組合を活用したりこれと健康保險との連絡をつけたり保險組合の内部をもつと自治的にしたり保險給付の手續を簡易にすること等は早速やらねばならんね。

——そうして國庫負擔金を增額する問題はどうなんだい。

——これはさつきも言つた通り或程度の增額はどうも已むを得ないらしいが、これは國費全部の問題として考へる必要がある。今のやうに狭い範圍の被保險者だけが特に多額の國費によつて恩惠を受くべき理由はない。國家としては廣く各方面の問題を考慮して輕重本末を過らぬやうにしないといけない。

——要するに社會政策と言ふ奴は言ふに易くして行ふに難い物だな。

——そうだ餘程全般の事情を考慮しないと實際的の意見も吐けないし實際の仕事も出來ない……。

——無暗に西洋がかうだからかうなければならぬなんて議論は禁物だね。

——そうだとも／＼。（了）

時評

財界動亂と資本主義末期の恐慌

青木得三

(一)

二十年前の事である。

東京帝國大學法科大學政治學科に席を置いて、法律學と經濟學と政治學とを學んで居た時の事である。帝大圖書館の一隅から Orthodox Socialism といふ新刊書を發見した。當時私の嗜好は法律學よりも政治學よりも經濟學の方面に向つて居つた。時恰も我國に社會政策學會が始めて設立せられて、其の第一回の會合が東京帝國大學で催された時分で、比較的年の若かつた私は Klassenkampf といふ問題の爲に血の湧くのを覺え、Arbeiterfrage といふ月刊誌に眼を通すことを怠らなかつた時であつたから、此の Orthodox Socialism といふ新刊書を發見して、それが極めて簡潔に要領よく Marx, Engels の社會主義に關する主張を説明してあるのを知るや、私は雀躍して耽讀した。

不幸にして私は今其の著者の名を逸したのであるが、此の書の私に教へた所はマルクス、エンゲルスの諸氏が積極的に社會革命を勃發せしむることを主張しないで、資本主義の社會は自然に沒落すべき運命に在ることを説いた點であつた。諸氏は流血の慘事を現代の社會に惹起すことを主張しては居らない、流血の慘事を惹起さずとも、資本主義の社會は自然に沒落する、而して其の沒落する形式は the last and universal crisis であることを其の書は説いて居つた。

貨幣、銀行、金融に關する研究は經濟學の諸部門の中で當時より今日に至る迄私が最興味を以て繼續して來たことである。私は彼の Orthodox Socialism といふ書が教へた the last and universal crisis といふ文字を永久に忘れることが出來ない。

(二)

二十年の歳月は流水の如く過ぎ去つた。

昭和二年四月二十一日の夜、私は大藏省の一室に於て同僚諸氏と會議して居つた。窓外には春雨が絲を引く様に降りしきつて居つた。而して日本全國の銀行が一齊に翌二十二、二十三日の兩日臨時休業をするといふことを聞いたときに、私は恐れた、日本の何處かに暴動が起りはしないかと恐れた。

しかし、それは全く私の杞憂であつた。

二日間の銀行休業は何事もなく經過し、其の間にモラトリアムの緊急勅令は施行せられ、次いで臨時議會は開會せられて日本銀行特別融通及損失補償法案と臺灣の金融機關に對する資金融通に關する法律案とが易々と兩院を通過した。

財界の動亂は茲に一段落を告げた。

私は冷靜に過去を考へることが出來るやうになつた。

（三）

オルソドックス、ソシアリストの所謂ゼ、ラスト、エンド、ユニブアーサル、クライシスの説を批評することは私の任ではない。唯私は冷靜に考へて這般の財界動亂は全く社會主義者が資本主義末期に起るといふ恐慌の如きものではないといふことを本篇に於て論じ度いと思ふのである、成程財界の恢復は甚遲々として進まない様ではあるけれども、這般の財界動亂に因つて我國の財界は殆んど何等新に傷けられた所はない、日本國民は財界の前途を悲觀せず、不屈不撓の覺悟を以て進まなければならぬといふことを言ひ度いのである。

這般の財界動亂の原因は大正九年の反動と十二年の震災とに在る。日本の財界の創痍は大正九年と十二年とに之を生じたのである。昭和二年に於て新に生じたのではないと私は信ずる。尤も銀行其の他の金融機關の創痍は大正九年又は十二年の當時よりも或は多少昭和二年に於て擴大して居つたかも知れない。然し乍ら私は『財界創痍の移轉性』といふことを考へて居る。即大正九年又は十二年に於て或る一の企業會社が其の資産の大部分を失つた（それは震災の爲に破壞せられ又は火災の爲に燒燼せられる、即物質的に滅失する場合と、物質的には何等減損しないけれども、價格の激變に因つて經濟的に滅失する場合との兩者を包含して居る）。而して此の資産の大部分を失つた一企業會社が直ちに減資、積立金取崩等の方法に依つて其の資産の缺陷を補塡すれば財界の創痍は移轉しないのであるけれども、我國の多數の企業會社がありしが如く、何等其の資産の缺陷を補塡せずして、從來の配當を繼續して居つた場合には、其の配當を爲す資源は之を銀行其の他の金融機關より借入るゝ外はなかつたのである、何となれば會社の資産には多大の缺陷を生じて居るが故に、殘存せる確實なる資産より多少の利益を生ずるにしても、それは到底全部の表面上の資産に對して配當を爲すに足りないのである。甚しきに至つては、殘存資産より生ずる利益を以て會社の經費を償ふだにも足らざるものがあつた、此等の企業會社は其の經費を得る爲に銀行より借入金をなした。故に此等の借入金即企業會社の配當の不足を補ひ又は經費を支辨する爲の借入金は當初より返濟の見込なきものであつた。之れが爲に銀行は新に回收不能の貸付をなしたのである、銀行としては新に創痍を受けたのであ

る、然し乍ら之を財界全般より見れば企業會社の創痍が銀行に移轉したのである、之を私は財界創痍の移轉性と稱する。尤も此の移轉なる語に聊正確を缺く憾のあるのは、創痍が企業會社より銀行に移轉したけれども、會社其れ自身の創痍も亦依然消滅せずして現存して居ることである。故に或は之を傳染と稱する方が一層適切であるかもしれぬ

兎に角、我財界の創痍は昭和二年に至つて新に生じたのではない。大正九年及十二年に生じたる創痍が移轉又は傳染して、企業會社より金融機關に及んだのである。金融機關は授信業務と受信業務とを同時に併せ行ふものであるが故に、たとひ其の授信業務に於て多大の缺陥があつても、即其の貸出に多額の回收不能のものがあつても、受信業務に於て信用を維持し得るならば、即新なる預金又は借入金の受入があり又は舊き預金又は借入金の引出がなければ、其の缺陥を暴露せずして、當面を糊塗することが出來る。

我國多數の金融機關は大正九年又は十二年の事變に遭遇し自ら其の資産に多額の缺損を生じたのみならず、財界創痍の移轉に因つて更に其の缺陥を擴大した、而かも受信業務の維持繼續に依つて昭和二年の春に至る迄其の缺陥を暴露しないことを得たのであつたが、春三月震災手形に關する法律案の審議が帝國議會に於て紛糾して以來、其の受信業務に於て急激なる收縮を見たが爲に、遂に其の缺陥を外部に暴露するに至つたのである。

大正九年三月より昭和二年三月に至る間滿七年、大正十二年九月より昭和二年三月に至る間滿三年半、創痍を巧に包み隱し來つた我が金融機關と企業會社との一部が、遂に其の創痍を暴露するに至つたことは、固より喜ぶべきことではないけれども、之を以て昭和二年に至つて新なる創痍を生ずるに至つたものであると斷ずることは決して出來ない。

唯私が返す返すも遺憾に感ずるのは、我が企業會社又は金融機關が事茲に至る以前に於て、速に其の創痍を除却するの擧に出でなかつたことである。鈴木商店と臺灣銀行との關係に於て私は新に痛切に此の憾を深くする。

（四）

私は茲に鈴木商店と臺灣銀行との關係を細論するに忍びない、又其の自由をも有しない。唯私の所謂『財界創痍の移轉』が此の兩者の間に最模型的に行はれたことを一言するに止める。私が茲に論じ度いのは何故に鈴木商店の當事者は自己の經營する幾多の企業會社の創痍除却の方法を執らずして、銀行借入金に依る彌縫にのみ努めたかといふことである。

私は川崎造船所を主宰せられる松方幸次郎氏が屢小册子を公にせられて、通貨膨脹論を主張せられ、日本銀行の所有する正貨十億を以て少くとも銀行券三十億を發行し、以て我國の金利を低下せしむる必要あることを痛論せられ、或る時には『何故に吾々は馬鹿であるか』と題する小册子迄も公にせられた。而して鈴木商店を主宰せられた金子直吉氏が此の主張に贊成せられたことは、或る席上に於て私の親しく聽くことを得た所であつた。

鈴木商店――の經營せられる諸會社――と川崎造船所とは其の資産

の内容に包藏せられる缺陷を除却することを爲さずして、銀行借入金に依つて此の缺陷を彌縫するの策を執つた。從つて借入金利子の低下は誠に兩者の死命を制する問題であつた。而して松方氏と金子氏とは堂々として通貨膨脹論を天下に呼號せられた、私は通貨膨脹が永久に金利を低落せしむる所以にあらざることを信じ且通貨膨脹の弊を論じ嘗て本誌の餘白を借つて、松方氏の所說を駁したことがあつたと記憶する。今に及んで其の論を繰り返すことは、鈴木商店及川崎造船所の現狀に顧み、情に於て忍びざるものがある。唯兩氏が鈴木商店及川崎造船所の經營を誤りたること、銀行借入金を以てする資産缺陷の彌縫は竟に賢明の策に非りしことは、私が何事を言はずとも、世間自ら既に定評があると思ふ。昭和二年四月二十五日に於て日本銀行の兌換券發行高は松方氏の希望せられる三十億に近きものとなつた、即二十六億五千九百餘萬圓であつた。然し乍ら最早鈴木商店を救ふの力はなかつた。私は鈴木商店の遂に起つ能はざるに至つて、日銀發行高の二十六億に達したことを、如何にも皮肉な現象であると思ふのである。」

（五）

然し乍ら、松方氏、金子氏の執りし方策にも、一掬の諒とすべき點はある、諸氏は資産缺陷の補塡を好景氣に因つて生ずる利益の增加を以てする考であつたと思ふ。若し資産の缺陷を彌縫し、其の未だ外部に暴露せられざるに先ちて、好景氣が來り、企業會社の利益を大に增加することを得たならば、或は資産の缺陷を補塡することが出來たかもしれない。缺陷を暴露せずして終つたかもしれない、諸氏は此の事を目標として唱へられたのではあるまいか。日本の財界には日清戰爭以來約十年に一回の好景氣に遭遇した。若しトレード、サイクルにペルオデイテイがあるならば大正九年以後の好景氣は遠からず來らねばならぬと考へられたのではあるまいか。

若し然りとすればそれは甚危險なることであつた。トレード、サイクルに付ては好景氣の後に來る不景氣の態樣は其の好景氣の態樣に依つて支配せられると說くものがある、私は此の說を信ずるのであるが大正九年前の我好景氣は日清戰役後又は日露戰役の好景氣に比較すると誠に霄壤の差あるものであつた。從つて大正九年以後の不景氣は我國に於て殆んど前例なき程深刻な者であると考へなければならぬ。假に好景氣が近き將來に來たとしても、之に因つて生ずる企業の利益を以て過去の資産缺陷を補塡しやうとするのは極めて無謀なることであつた、何となれば其の過去の缺陷は未曾有の好景氣に次ぐ反動に因つて生じたものであつて極めて深刻であるに反し、來るべき好景氣は決して大正九年前の好景氣の如く高調なるものではないと信ずるからである。

之を要するに、金子氏、松方氏等が銀行借入金に依つて企業會社の缺陷を糊塗せんとしたる方策は、恰も砂上に樓閣を築かんとするが如きものであつて、極めて不健全、不堅實なる方策であつたことを斷言せねばならぬ。それが爲に我が財界の創痍は大規模に且深刻に金融機關に移轉した、臺灣銀行と十五銀行とは其の創痍移轉の厄を受けることの最大なるものであつた。私は企業會社の整理計劃を誤つた當事者を責むると同時に、其の創痍移轉の厄を甘受したる、若くは拒絕する

ごと能はざりし銀行當局者をも責めなければならぬ。

(六)

遮莫、本邦財界の有力者を責めることは本篇の目的ではない、私の目的は以上說く所に依つて本邦財界が昭和二年に至つて何等新なる創痍を受けたものでないことを明にするに在る。成程近時我國の物價は低落に低落を重ねて居る。資金は一部の金融機關に偏在して、彼等は放資物なきに苦しむの狀況である。然し乍ら私の見る所を以てすれば是れ實に不景氣末期の特徵たる現象に外ならない。見よ彼の外國貿易の入超額は之を前年に比較すれば大に減じて居るではないか、即上半季に於て二億九千四百餘萬圓である。前年同期に於ては毎旬常に輸入超過を示したにも係らず、本年は五月下旬以降出超入超交々至つて居る。其の間聊か不安を感ぜしめるものは爲替相場であるけれども、それとても正金建値は六月上旬の四十六弗四分の一を最低として最近は四十七弗八分の三迄恢復した。私の常に希望する所は外國爲替相場の低落に依る輸出の增進ではなくして、物價低落に依る輸出の增進である。又外國爲替相場の騰貴に依る物價低落に非ずして、國內の事情に基く物價の低落である。今や我國の物價は國內の事情に基いて低落して居る。爲替相場が低落して居るにも係らず、物價は却つて低落して居る、而して輸出は增進して居る。輸出の增進はやがて亦爲替相場を恢復せしむることであらう。

(七)

物窮すれば必通ずるといふ。昭和二年の春に起つた我國財界の動亂は一度私をして資本主義末期の恐慌に非ざるかを疑はしめた程、激烈なるものであつた。私は敢て之を深刻なるものとは謂はぬ、唯之を急激なるもの又は激烈なるものといふ、斯くの如く激烈なる財界動亂は即物の窮する所ではなからうか、世人は休業銀行の整理遲々として進まずといふ、財界の創痍の移轉を拒絕し得なかつた銀行の內容には多大の缺陷がある。此の創痍は唯之を切捨てることに依つてのみ更生することが出來る、減資と積立金取崩と預金の切捨とに依つて始めて其の缺陷を補塡することが出來る。私は預金者の家庭に幾多悲慘事の發生することを知つて居る。其の中には酸鼻殆んど聽くに堪へないものがある。唯私をして最冷靜に觀察せしめ最直截に說明せしめるならば、それは大正九年又十二年に起つた我財界の創痍を今日始めて癒やしつゝあるのである。『其の來るや何んぞ遲かりし』と私は謂ひ度い。若し速に之を癒やしたならば累を銀行預金者に及ばさずして濟んだのである。累を預金者に及ぼすのは是れ亦財界創痍の移轉に外ならない、企業會社に起つた財界の創痍が一度金融機關に移轉し、二度金融機關に對する授信者に移轉する。其處に或は現代社會の缺陷があるのかも知れない、吾々は過去を顧みて大正九年の如き財界反動の再來らざることを切に希はねばならぬ、吾々は大正九年に蒔きたる稻の穗を今刈りつゝあるのである。

(二・八・七)

失業問題の深化と勞働農民黨の對策

大山郁夫

一

『全國を襲ふ失業の嵐』——

かうした眼ざましき標題の下に、八月一日の『勞働農民新聞』(勞働農民黨機關紙)は、最近各地に於て頻々として起つた——そして現に尙ほ引き續き頻々として起りつつある——工場勞働者群の大集團的解雇の現象について、大衆に呼びかけてゐる。更らに同紙はそれを受けて、『狂暴なる資本の總攻擊に對し、全日本の勞働大衆は結束して立て。獲得したる陣地を守れ。進んで敵を擊退せよ』といふやうな熱烈な表現を三樣の大活字を以て割り書きにして、そこから漸く本文に入り、『三千人の勞働者が川崎造船所で馘られた。富士紡では一千の女工が解雇された。川崎や富士紡には止まらない。金融恐慌の結果、中小工場は一樣にバタ〳〵と倒れて了ひ、大工場からもまた、産業の合理化のために數十萬の失業者は一時に路上へ投げ出された。……』等々と、最近の事實を要約して敍述した上で、『地域別産業別の全勞働の大同團結のみが我々を勝利に導く』と絕叫し、八月十日を『失業反對デー』とすることに決した勞働農民黨の提唱の下に、同日全國各地各産業別に一齊に開かれることになつてゐる全勞働者大會への、勞働大衆の參加を勸告してゐる。

二

最近數個年間に加速度的に進行しつつあつたところの、——そして特に本年の四、五月に於ける金融恐慌を境として急遽に一大長足を取つて躍進したやうに見えたところの、——所謂『資本の攻勢』及び『産業の合理化』は、勞働大衆の生活の上に異常の暗雲を漲ぎらせた。我々は日頃からそれに對する警報を發することを怠らなかつたが、殊に去る五月の臨時議會の前頃から、その際を一層高らかに張りあげるに至つた。

金融寡頭政治の確立に沒頭してゐた支配階級は、しかし、それに耳を借す筈はなかつた。彼等は勞働者農民大衆を始め廣汎なる社會層を構成する一般民衆の生活を犧牲にしても、彼等の立場から見た所謂『財界の安定』を招來することに專念して、毫も他を顧みる暇を持たなかつた。遂に彼等は去る五月の臨時議會に於て、七億圓の新たなる負擔を民衆の肩上に投げ掛けた財界救濟案を成立せしめた。我々が聲を嗄らして叫び立てたところの、『七億の金を以て民衆の急を救へ』といふ當然の要求も、彼等によつて馬耳東風に聞き流された。彼等は彼等が欲

するがままのことを、思ふ存分に、無拘束に、無遠慮に行つた。そして、根本的に於て彼等と同一の世界觀の上に立つブルジョア諸新聞紙は、その臨時議會の終了後以來、一齊に財界の安定について報道しつづけて來た。

だが、彼等がかく財界の安定を唱へてゐる言葉の下から、皮肉にも失業の嵐は吹き初めた。しかもそれは、時の經過につれて、益々止め度もなく荒れ狂ふやうになつた。川崎造船所に於ける三千の勞働者の馘首。富士紡に於ける一千の女工の投げ出され。――かうした非常に大規模な解雇沙汰を始めとして、それと同類の現象は、全國の津々浦々から報ぜられてゐる。若し疑はば、名實共に無産階級の言論機關であるところの、『勞働農民新聞』や『無産者新聞』やの最近の數號の上に眼を走らせてみるがいい。人は容易に、我々がかくいふことの、決して誇大でないことを發見するであらう。

もとより、かうしたことのすべては、ブルジョア諸新聞紙によつては極あつさりと取り扱はれてゐるか、若しくは全然默殺されてゐるかしてゐる。そして、彼等は今でも頻りに財界の安定を言ひつづけてゐる。だが、それは、金融寡頭政治の支配下に於けるブルジョア諸新聞紙の意識的反動化の反映以外の何物でもないことは、誰れにも容易に看取され得ることであらねばならぬ。

三

だが、勞働大衆が今まさに潜り拔けつつある悲痛地獄は、單に彼等が荒れ狂ふ『失業の嵐』に晒らされてゐるといふことだけに止まつてゐるのではない。彼等は更らにまた、かかる狀態の下に於て無限に加重されるのを常とする……彈壓の下にも立たされてゐるのだ。

我々は、この際故らに痛烈なる文字を列ねてゐるものと誤解されたくはない。事實は、より以上に痛烈なのだ。かの金融恐慌勃發の直後に於て、工場閉鎖、操業短縮、及びさういふ事から必然的に生ずる賃銀値下、勞働時間延長、否、それよりもつと不吉な解雇――無期限の失業――の到來の脅威が、勞働大衆の上に現實に臨み始めたとき、彼等は當然の要求として、『賃銀値下反對』『工場閉鎖反對』『解雇反對』等々を叫んで、各地に工場代表者會議を開き始めた。そしてそれが、更らに當然のこととして、次から次へと反響されて行つて、急に全國的傾向となり始めたとき、何が彼等を待ち設けてゐたか？　それは誰れもが知つてゐる筈である通りに、………果敢に彼等に向けられたところの、したたかなる彈壓の鐵槌であつた。

だが、かかる境遇の下におかれてゐた勞働大衆も、決して金融恐慌の下に於ける單獨の受難者ではなかつた。といふこともまた、玆で一言附け足しておかれなければならない。卽ち彼等にも、新たな道伴が出來たのだ。先づ第一に、かぼそき俸給生活者、小商工業者、職人――一トロにいへば小ブルジョアジー層を占めてゐる人々の大多數も、それぞれ相當の程度に、金融恐慌の餘波をかぶらざるを得なかつた。休業銀行の頻出に伴ふ金融の梗塞、殊に孤立無援の小口預金の危殆、市場の沈滯、仕事の拂底、またこの層の上にも押し寄せて來た失業の脅威、物價騰貴による生活不安の亢進、等々の諸現象はすべて皆、彼等の前途を灰色に塗りつぶす材料となるばかりであつた。

更らに農村に眼を轉ずれば、そこにも深刻なる不景氣の影がさしてゐることは同樣だが、それ以外にまた、そこに特有の形態の階級鬪爭が執拗につゞけられてゐるのが見られる、田植時に附け込んでの地主側の無法なる立入禁止の處分、それに對する小作人側の必死の抗爭――さうしたことが、殆んど全國的規模に於て行はれた。しかも、その小作人の抗爭も、型の如く、……全打擊力を込めての彈壓の手を受けなければならなかつた。かくて、去月東京市で開かれた全國農民代表者會議も、その頃の工場者代表者會議と同樣の運命に見舞はれた。

四

上に述べたすべてのことは、ブルジョア諸新聞紙が頻りに財界の安定を公衆に保證しつゝあつた間に、社會の下積みの諸層の上に着々と進行しつゝあつたのである。かうした一見甚だ奇怪に思へる事實は何を我々に物語るか？

それについては、諄々しく說明する必要はあるまい。ブルジョア諸新聞紙の上に見られる財界安定の歌は、いふまでもなく、金融資本の支配の基礎の確立に急ぐ支配階級の見解を、あるがまゝに反映してゐるものである。支配階級が求めてゐた財界の安定は、彼等が臨時議會に於て七億圓の財界救濟案を議決した時に、それによつて實現を期してゐた種類の安定である。それは、彼等の國家資本主義トラスト結成の途上に於ける當面の急に應ずるだけの金融機關の一應の整理である。この目的の達成の目算が立つたことが彼等によつて確められたとき、彼等の意中に於ては、一ト先づ財界の安定が持ち來たされたものと思惟されたのである。しかもこの「安定」が、如何に民衆――もしくは全勤勞階層――……にして得られたものであるかは、彼等の顧みるところではないのである。否、彼等は初めから、彼等の求めてゐた安定が、かくの如く民衆を犧牲にすることなくしては得られないことを百も承知してゐたのである。だからこそ彼等は、その本質に於て資本家救濟を意味するものに外ならない財界救濟案のために、七億圓の血稅を課せたる民衆から……ることを憚からなかつたのだ。無論彼等はそれが民衆の各層に抑へがたき不平不滿を激發することを豫期した上で、十分にそれに備へてゐたことは明かである。それ故にその不平不滿が……抗爭運動にまで發展して行かうとする勢を示したとき、彼等は即刻に……それの上に向けることを誤まらなかつた。――彼等の求めてゐた「安定」は、かくの如くにして購はれたのだ。

……ゐるやうな安定！それは彼等の安定の眞の姿ではないか？それは、絕大の矛盾を內包する安定、微弱な震動にも堪へられないやうな安定ではある。だが、さうした安定こそ、ど……世界の資本主義の、大戰後幾年かを經て來た今日に於て纔かに再現し得た安定を象徴するものでなくて何であらう！

五

この點に來て我々は、何よりも殊に、經濟問題の完全なる政治問題化といふことを、我々の眼前の事實として注意しない譯には行かな

い。支配階級は如何に必死になつて、彼等の所謂財界の安定を實現するために、彼等の政治力の全部をあげつくして狂奔したか！ 金融機關の救濟及び整理、産業管理權の大ブルジョアジーへの移動、企業上の獨占傾向の推進、——かうしたことのすべてが、今日に於て既に立法行政上の諸機關を通じて行はれるやうになつて來てゐることは、我々が最近の金融恐慌を通して明らさまに見て來たことである。我々はまたブルジョア諸政黨が如何に、さうした線に沿うて動いてゐる金融寡頭政治の傀儡として、そしてその表面上の直接の當事者として、彼等の獨占の下におかれてある議會を中心として、蠢動し活躍してゐる、かをも見て來た。これらの諸現象は、沒落過程の上にある資本主義の絶對的支配の最後の堡壘としての國家資本主義トラストの結成への道程を標識するものに外ならないのである。

ところで、かうした目的の達成のために用ひられた支配階級の政治力の全部は、結局どこに行き着くのか？ それは、我々が既に見て來た通りに、全被壓民衆への彈壓に轉化してゆくのである。だが、その彈壓が更らに、最終極點に於て無産階級の上に集中されてゆくこともまた無論である。

我々は、かうした階級鬪爭理論のA・B・Cともいふべき項目に何時までも拘り合つてゐる必要を持たない。だが、『すべての階級鬪爭は政治鬪爭だ』といはれる場合に意味せられてゐる通りの『政治鬪爭』が、上に略述したやうな現在の日本の金融寡頭政治の一般的情勢の下に於て、今まさに大きな輪廓を描いて、我々の眼前に現はれて來てゐることに向つて、我々は我々の眼を塞いではならないのである。

階級と階級との鬪爭は、しかし、政黨と政黨との——一の階級を代表する政黨と他の階級を代表する政黨との——接觸に於て、最も集中的に、最も統一的に、表現される。この意味に於ける政黨と政黨との接觸は、今や、すばらしく展開されつつある。無産政黨の看板をかけながら、實際の行動に於て金融ブルジョアジーの手先たるに甘んじてゐるやうな、所謂エセ無産政黨のことは暫く措く。唯一眞正の無産政黨としての意氣と自信とを以て立つわが勞働農民黨は、今や全力傾倒の下に戰備を整へて、ブルジョア諸政黨の陣營に正面から立ち向つてゐるのだ。今日のブルジョアジーの絶對的優越の下に於て、ひとり我が勞働農民黨のみが、彼等の全政治力の重心點の負擔者となつてゐるのは、そのこと自身、既に最も明瞭に、勞働農民黨の純眞な階級的本質を反映してゐるものでなければならぬ。

この勞働農民黨は、現下の失業問題の深化の傾向に直面して、それ自身の當面の任務として、如何なる對策を取りつつあるか？

六

現下の失業問題の深化の傾向は、それを單に勞働大衆の自然生長的生活要求に聯關するものをして見、從つてそれを經濟鬪爭上の一題目として見ても、容易ならざる事態を出現せしめてゐるものであることは、無論である。この傾向の下に於て、組織勞働者と未組織勞働者とを問はず、みなが一齊に生存の脅威を受けてゐるのだ。のみならず、現在尚ほ工場に殘されてゐるものも、何時路上に投げ出されるかも知れない危險に晒されてゐて、失業者と未失業者との間に、眞に紙一

量の獲たりしか認められない點に於て、この問題の深刻味が一層痛切に感じられるのである。だが、更らに重大なことは日本の勞働運動の、ありし光榮の日に於て收穫された全果實が、今や、擧げて敵手に委ねられようとしてゐることである。で、それを奪還することは、當然すべての勞働大衆の任務と見做されなければならないものであつて、その點に關しては、右翼、左翼、中間派組合のいづれに屬するものたるを論ずる必要がないのである。勞働農民黨は、それ故に、この仕事に於ける全勞働大衆の緊密なる提携協力の下に於ける各地域別、各産業別の共同戰線の必要を提唱し、且つそれを支持しようとしてゐるのである。

だが、この問題は、單に經濟鬪爭上のものに止まり得るものではない。それは本來、既に繰り返して述べた通りに、支配階級が用ひ得る限りの全政治力の發動の下に生じたものである。川崎造船所に於ける解雇騷ぎに際しての、…………………。この事實こそはさうした全過程の最も集中的な表現ではないか？　けれども、かうした要因が我々の考察の中に入り來る前に於て既に、當面の失業問題は、勞働大衆の自然生長的な生活要求に聯關したものとしての形態のままで、一個の政治問題に轉化せしめられ得るものであり、また、せしめられなければならないものである。即ち、この問題の中心點をなす失業反對、賃銀値下反對、勞働時間延長反對、等々の題目は、そのまま失業手當法、最低賃銀法、八時間勞働法、等々の制定、及びそれに附帶して健康保險法の根本的改正等々の政治的要求にまで、當然發展せしめられるべきものである。で、勞働農民黨は、その主催の下に行にれようとしてゐる八月十日の全國的失業反對デーに際して、かかる政治的要求の重要意義を、農民の立場からの耕作權確立の政治的要求の重要意義に聯關せしめて、高調しようとしてゐるのである。

しかしながら、かくの如く根本に於て經濟的なる生活要求に根ざしてゐる政治的要求の主張は、直接にその貫徹の必要を實感する勞働大衆の參加なくして行はれては、その切迫した重要意義を一般公衆に徹底せしめることは出來ない。それ故に勞働農民黨は、廣汎なる範圍に亘る勞働諸團體に檄を飛ばして、それらが相結合して一の主體を構成して、さうした政治的要求のために執拗に鬪爭することを勸告してゐるのだ。そして、この勸告は必ず、かく呼びかけられた諸團體の多くによつて、快よく取り上げられるであらう。

更らにまた、勞働農民黨が、勞働大衆による、かくの如き運動を支持し掩護するための政治行動に於て、日本勞農黨に共同戰線を申し込んだ事實に關しては、玆にその意義を詳説する必要はないであらう。この點に於て、日本農民黨や、社會民衆黨の如き、反動的性質の表面上に露骨に現はれてゐる諸政黨を顧みてならないことは、いふまでもないことである。ただ日本勞農黨は、少くともその主張に於てそれらの兩黨を排擊し、階級的立場を强調してゐるところから、勞働農民黨はこの當面の急務に關して、それに向つて共同戰線を勸誘したのである。そして我々は、日本勞農黨がそれを受諾するか否かが、同黨の階級性の成長の程度の測定のための尺度の一つとして役立つものであることを、確信するものである。

だが、我々の當面の問題の最も重要なる一部分は、その一面に於ては政治的自由獲得鬪爭に聯關し、また他の一面に於ては、反帝國主義鬪爭に聯關してゐることは、前々から反復して述べたところを根據として見れば、當然自明の事柄であらねばならぬ。ところで、勞働農民黨はその全國的政治鬪爭の現段階に於て、政治的自由獲得鬪爭を中心的位置におき、それが續行して居るあらゆる方面に於ける鬪爭のすべてを、盡くこの一點に集注合流せしめてゐるのだ。從つて、同黨が現在行つてゐる反帝國主義鬪爭も、今のところでは、それの政治的自由獲得鬪爭に包括されてゐるのだ。いふまでもなく、さうした政治的自由獲得鬪爭に於ては、無產階級の政黨は、農民及び小ブルジョアジーの廣汎なる層の協力を必要とする。勞働農民黨はもとより、その名の示す如く、勞働者及び農民を基礎とする無產階級政黨であるが、その運動の現階段に於ては、大衆的共同戰線黨として、小ブルジョアジー層との同盟をも、非常に重要視してゐる。だが、かくの如く小ブルジョアジー層との同盟の下に行はれる政治的自由獲得鬪爭に於ても、勞働農民黨は、勞働者及び小農の利益を特に尊重するのみならず、全運動を無產階級的指導の下におくことを公言して憚るものでない。否、かくしてこそ、同黨は眞に自己の地位にめざめたる小ブルジョアジーの、心からの信頼と支持とを益々多くかち得るものであることを信じてゐるのだ。そこに同黨の階級黨としての眞面目が明かに見られる。かくして、今や當面の失業問題を中心としての政治鬪爭も、一直線にさうした方向まで奔放展開しようとしてゐるのである。

唯物史觀經濟史出立點の再吟味（其五・終）

＝『古代共産社會』に關する若干の考證と祖述＝

福田徳三

（三十二）

ソコデ、吟味は、印度に於ける村落共有制の本體に移り行く。

マルクスは、一八五九年刊『經濟學批評』第九頁の脚註並に『資本論』第一卷の一八七二年刊第二版（五十五頁脚註（三〇）民衆版では、四十一頁脚註（三〇）第一版には此脚註なし）の脚註に於て、『原始發生的共有制てふ形態は、スラヴ民族特有であり、又は、全然ロシア的形態であると思ふのは、一の笑ふ可き偏見』なりと嘲り、『此形態は、我々が、ローマ人、ゲルマン人、ケルト人について、其存在を立證し得る』ものであると斷言し、更らに『加之、此形態については——タトヘ、部分的には、遺跡としてではあるが——多様多趣な見本を有する一の全き模範圖が、今日猶ほ、インド人について存在してゐるのである』といひ、『ローマ及ゲルマンの私有財産制の種々異つた固有典型は、（實に、）インドの共有制の種々異つた諸形態から派生するもの』であると主張してゐるのである。（本誌六月號四三頁）彼はまた、一八六八年エンゲルス宛の書簡中に、同じことを繰返して、『ヨーロッパに於いても、到る處に於いて、アジア的、乃至は、インド的

所有諸形態か（土地所有形態の）出立點（又は端緒）を形づくる』（同號四六頁）と云つて居る。

しかしながら、此等の發言は、一八五九年又は一八六八年時代に屬するものであつて、一八五三年とは、稍ゝ時日を距てゝゐるものである。然るに、一八五三年六月十四日付のエンゲルス宛の書翰中に、マルクスは、『ベルニエーは、何等の土地私有制の存せぬことが、東洋の總ての現象の根本形態なることを正しく見出してゐる。これこそ、東洋の天地それ自らへの本當の鍵である』（同號五五頁）と明かに云つてゐるのである。

私は、前段の考證に於いて、『印度論』に於けるマルクスが、明かに印度の共有制のことを論じてゐるものだとするリアザノフ氏の解釋の文獻的に支持し得べからざるものなるを指摘した。故に、若し、右エンゲルス宛の書翰が存せないならば、一八五三年時代のマルクスが、果して、印度の共有制なるものを知つてゐたか否かを確むる由がないのである。幸にして、此書翰傳へられあるによつて、一八五九——一八六八年のマルクスの發言は、移して以て、一八五三年の彼の考をも、言ひ表はすものと想像し得られるのである。

此想像は、讀んで字の如く、一の想像たるに止る。從つて、若しも他に有力なる反證の見出さるゝに於いては、此想像は直ちに打破らるべきであるは、勿論のことである。

マルクスは、『何等の土地私有制の存せぬことが、東洋の總ての現象の根本形態』であると云ふ。此れは、一八五九——一八六八年に於ける、印度共有制に關する發言とは、必ずしも同一事を云ふものでないは、勿論である。其等よりも、遙かに、一掃的に、十把一束げ的に、一切の土地私有存せずと云ふのである。若し、此言を、文字通りに、受取るとするときは、所謂『唯物史觀公式』に於ける『アジア的』とは、『何等の土地私有を認めざるところの』と云ふ程の意に解釋せねばならぬこととなるであらう。幸にも、『經濟學批評』第九頁の脚註あるによつて、斯くの如き解釋を取るべく餘儀なくせらるゝことを、我々は、免除されてゐるのである。

私が、吟味の當面の對象とするところは、一八四九年のマルクスに見出されざる『アジア的』が、一八五九年の彼れに於いて見出されるといふ一事である。其の一八五九年に見出される『アジア的』の何物を意味するやは、右の脚註並に私が前段に引いた『緒論』中の數節に照して、之を窺ふべき便宜が與へられてある。從て、私の吟味に於いては、一八五三年代のマルクスに、必ずしも、執着する必要はないのである。

ソコデ、右の所謂想像なるものを中れりとするときは、一八五三年に於いて、マルクスは、既に、『インド的』又は、『アジア的』とは、『原始發生的共有制』のことであつて、其れは、タトヘ部分的には、遺跡としてのみではあるが、今日猶ほ、多樣多趣な見本を有する一の全き模範圖が、印度に存するものであり、而して、此の印度的諸形態から

ローマ及ゲルマンの諸所有形態は派生したものであり、從て、『アジア的』乃至は『インド的』所有諸形態は、ヨーロッパに於ける土地所有諸形態の出立點を形づくるものであると考へてゐたと認むべきこととなる。要約して云へば、

『アジア的』乃至『インド的』——原始發生共有的——土地所有諸形態の出立點

と云ふことになる。

斯く解釋するときは、——此解釋が、少くとも、一八五九年の『唯物史觀公式』については妥當であることは、疑を容れないものとして——『アジア的』乃至は『インド的』とは、マルクスの唯物史觀經濟史に取つて、甚だ重要の意義を有するものであることは、多言を須たざるところである。從つて、其の有無は、決して、單に、マルクスの研究不十分、若くは、其他の偶然の事情に歸すべきものでないことも、また、明白であらうと思ふ。何となれば、其れは、一切の經濟發展史の出立點を代表するものであつて、單にアジア若くは印度限りの地域的に限局せられた現象としてではないから。

（三十三）

人間の解剖は、猿の解剖に指針を提供する。ブルヂオア社會の解剖が、愈々進歩し、ブルヂオア社會の自己批評が、愈々明瞭になればなるほど、其の經濟史の出立點は、愈々明確に摘發せられる。英國について、ブルヂオア生產方法の研究に精進したマルクスは、其れによつて、種々の先行生產階段の眞相を、より能く看究めることを得るようになり、東洋社會の本體をしかと捉へることが出來るようになつた。『アジア的』『インド的』が、『唯物史觀公式』に取り入れられるに至つたのは、其結果であらう。而して、其れは、同時に、暫らく、遠ざかつてゐたヘーゲルのシエマチジールングに、再び接近する機緣を作つたものと考へられる。此意味に於いては、ストルーヴエが『私の見るところでは、マルクスは、後年の諸著作（一八五九年の『批評』、一八六七年の『資本論』）に於いて、始めて、再び、ヘーゲルに立戻り』（本誌七月號三七頁）と云ひ、クノーも亦た、『マルクスのヘーゲル哲學への連絡は一八五〇年代の初めに於いて始めて起る』（同號三八頁）と云つてゐることが、一部當つてゐると云つて宜からう。『ドイッチエ・イデオロギー』に於いて、ヘーゲルのシエマチジールングを脱却したと、私が前段に云つて置いたマルクスは、此の『公式』に於いて、再び、ヘーゲルの其れに立戻り、四段のシエーマタ——『アジア的』『古代的』『封建的』『ブルヂオア的』——を立つるに至つた。『共產宣言』や『賃銀勞働と資本』に於いては、四段組みのシエマチジールングは、顧みられて居らなかつたのである。

繰返して云へば、『共產宣言』や『賃銀勞働と資本』やに於けるマルクスは、階級鬪爭觀を明かにするに主力を注ぎ、經濟發展史の全體については、まだ、明確な立場を執るに至らなかつた。『公式』に至つて彼は、此兩者を、適當に按排して、其の唯物史觀の中に取り入るゝに至つたものと見るべきではあるまいか。唯物史觀に基く經濟史の全體が、明瞭に看究めらるゝに至つたとき、其處には、其出立點としての『アジア的』乃至『インド的』が、必ず認められねばならぬこととなる。『共產宣言』や『賃銀勞働と資本』に於けるマルクスの唯物史觀經濟史は、其出立點を未だ明かに看究めて居らぬ一の經濟史であり、『公式』に於ける其れは、私が、此小論文の冒頭に引いたマルクスの言『社會内に於て生產する諸個人――從つて、諸個人の社會的に決定せられた生產が、當然に、本論の出發點である』、『我々が、より深く、歷史を溯るほど、個人、從つて、生產に從事する個人は、非獨立的なる一の、より大なる全體に屬するものなるを見る』てふ『經濟學批評緒論』の一句を、十二分に意味あるものたらしめてゐるのである。即ち、『公式』に顯はれたマルクスの經濟史觀は、明瞭に、一の定まつた出立點を有するものなのである。此の差別は、決して、輕々に看過されてはならぬと信ずる。

かく考へ來るとき、私は、讀者に希ふに、此小論文の初めの部分を讀み返されんことを以てせざるを得ぬ。今、便宜の爲めに、其の一部を、茲に繰返して見る。『マルクスは、單に、一のより大なる全體と云ふのみで、其れが、原始共產社會であるとも何とも云つて居らぬのである。……(略)マルクスは、此『公式』の最終段に、經濟的社會組み立ての、漸次に、進歩して來た發展階段を列擧して、『アジア的』『古代的』『封建的』『ブルヂオア』の四と爲して居て、別に『共產的』を擧げて居らぬ。其眞意は、『共產的』生產關係は、敵對的形態でないから、右の發展諸階段中に含まれて居らぬと云ふにあるだらうか。其れとも、『共產的』生產關係を、全く度外に置いたものであらうか。否か言ひ換へて見れば、唯物史觀の『公式』の最終段は、原始共產社會には、全く適用せぬとの意味であらうか否か。私は、此の疑問も、亦た輕視す可からざるものと考へる。マルクスが特に意を用ゐて、有意的に『共產社會』を列擧の外に置いたものであり、從つて、唯物史觀の『公式』の最終段は、『原始共產社會』に適用せざるものでありとするならば、タトヘ、具體的の歷史解釋は、與へられなくとも、彼の考は、エンゲルスの歷史解釋と一致するものと云ふ可きであらう。然らざれば、此兩人の間には、可なり大なる見解の相違が存するものと見なければならないから。而して、其れは、あり得ないことであらうから。併し、其れをあり得るとして考へて見ると、左の樣になりはしまいかしら。マルクス說。敵對的關係は、人間社會あると共に在り、即ち『一のより大なる全體』たる『マルク共產體社會』にも在り、而して、此社會が『封建社會』へ發展し行つたのは、階級鬪爭の敵對關係を通してで

ある。エンゲルス說。敵對關係は、『原始共產社會』には存せぬ。其れが、『マルク共產體社會』なりとする改說以前のエンゲルスによれば、『マルク共產體社會』には、敵對關係、階級鬪爭は存せぬ。從つて此社會から、次の社會へ移り行つた過程は、『唯物史觀公式』以外に屬する。——其れは、黑正氏によれば『墮落』と云ふ過程とせられたと云へるが如くである』と。本誌五月號六二——六三頁 此問題は、私が、右個所に豫め言ひ置いた樣に、『私の幾多の疑問中、其の最根本的なものである』のである。

今『アジア的』の有無と、『アジア的』てふことの意味とを、まことに、たど〳〵しくはあつたが、若干檢討し來つた後、私は、右の最根本的疑問が、私の吟味の進行の前に、『アルプ』の如く、海坊主の如く脅威的態樣を以つて、ふさがり立つてゐることを看取せざるを得ぬのである。

（三十四）

『共產宣言』や『賃銀勞働と資本』やに於けるマルクスは、經濟史家としては、むしろ甚だ淺薄な見識を有するに過ぎないことを示しては居るが、其反對に、階級鬪爭の理論家としては、始終一貫極めて徹底せる立場を、十二分に顯はして居る。其反對に、『公式』及び其以後に於けるマルクスは、廣汎なる經濟史研究の跡を豐かに示しつゝ、階級鬪爭の理論家としては、一の致命的な缺陷を示して居るものではあるまいか。私の吟味の進行の前に立ふさがる海坊主は、獨り、私を脅しつゝあるのみでなく、唯物史觀の階級鬪爭理論の前に立ふさがつて、此れを脅威しつゝあるものではあるまいか。烱眼にして眞正直なるエンゲルスは、此の致命的缺陷を十分に看取して居たが爲めに、『土地に對する原始の共同所有の解消以來』と云ふ一句を、マルクス根本思想の記述文に挿註し、又た『共產宣言』の本文に脚註して、本誌五月號六〇頁に、私のあげた『茲に歷史と云ふは、正確に云へば、文書によつて傳へられた限りの歷史の意である』云々の一節を追錄したのではあるまいか。

かくて、エンゲルスは、右二個の挿註によつて、唯物史觀の階級鬪爭理論の妥當性を著しく限局して仕舞つた。唯數語乃至は數行の挿註ではあるが、其れは、少くとも過去については、而して河上博士に從へば、數千年に涉る過去については、普遍的に妥當すと考へられてゐたものと推定す可き階級鬪爭理論に取つての一の致命的宣言を下したものであるのである。其代り、唯物史觀經濟史の方は、其れによつて始あり、終あるものとせらるゝことを得たのである。此れが、果してマルクスの眞意に合するものであらうか否か。容易に、決定を許さぬ重大の疑問は、茲に存する。

『共產宣言』の文句を文字通りに解釋するときは、右は、決して、

ルクスの——而して同時に『共産宣言』共同筆者としてのエンゲルスの——其下稿の時に於ける考とは、到底相容れないものであることは言ふまでもない。『共産宣言』は、いとも明白に、『總べての、從來の社會の歴史は、階級闘爭の歴史である』Die Geschichte aller bisherigen Gesellschaft ist die Geschichte von Klassenkämpfen と言放つてゐて、其間に、何等の限定的解釋や、附加的着色やを容れるべき間隙を止めてゐないのである。如何なるソフヰストでも、スコラ學者でも、此の端的、簡潔なる一句に對しては、施す可き術を見出し得まいと思ふ。

エンゲルスの補註は、確かに、『共産宣言』の共同筆者としては、自殺的なものである。其の自殺的行爲は、『共産宣言』の右の一節に對して、致命的である斗りでなく、唯物史觀の受取られたる階級闘爭理論に對して、實に、致命的なのである。否、更らに、『原始共産社會』から『古代社會』への推移が、唯物史觀によつては、説明せられなくなると云ふ重大事が、これに、伴ふのである。何となれば、其れは、私が前段に云つて置いた如く、黒正氏によれば、『墮落』と云ふ過程——唯物的ヂアレクチックから見れば、實に嗤ふに堪へたる——によつたものとでもする外、説明の仕様がないことになるから。

茲に、甚だ興味あることは、マルクスは、此『墮落過程』の採用の故を以つて、ブルヂオア經濟學を罵倒してゐること、これである。其れは、『資本論』第一卷第七編二十四章の初（民衆版では、六四五頁、淡堡版(第四版)では、六七九頁。）にある。曰く『此の原始的蓄積なるものは、經濟學に於ては、神學に於ける墮落と殆んど同樣の役目を演じてゐる。アダムは、林檎を喫した、而して、其れと共に、人類に、罪惡なるものが起つた。其の起源は、過去の一アネクドーテとして物語られるによつて、説明せられる。遠い〳〵昔、一方には、勤勉にして、聰明な、殊に儉約的な英俊の人間が、他方には、怠惰で、すべての物を、否其以上をも浪費する屑の人間が居た。かくて、前者は、富を蓄積し、後者は、自分の皮膚の外何も賣るものがないに至つた。此れ以來、大衆の貧乏が存する（略）神學的墮落の作り話は、少くとも、何故に、人間が、其額に汗してパンを得なければならぬように、咒はれるに至つたかを悟らしめて與れる、經濟的墮落の史談は、其反對に、額に汗して食ふことを必要とせざる人間の存するは、何故であるかを、我々に示して、右の神學的作り話に於いて、痛く感ぜられるところの缺陷を補充して與れるのである。』と。

『原始發生的の共有社會』が、『古代社會』に移り行つたのは、明かに墮落過程によるものであつてはならぬとすれば、前者を、敵對形態以外に置くことは出來ない。而して、『アジア的』が、其代表者でありとするならば、原始發生的の共有社會も、また、諸〻の——四つの——進步的階段の一として、『公式』は、其儘に、之れに適用せらるゝもの

でなければならぬことにならう。從つて、此れを、階級鬪爭史の埒外に置くこと、エンゲルスの爲した如くすることは、許されざる可きわけとならう。

斯く解釋すれば、エンゲルスによる唯物史觀妥當性の重大なる限局は、マルクスの與り知らざるところであるが如くである。從つて、此二人者の間には、實に、根本的な相違が存するわけとなる。

唯物史觀に於ける『原始發生的共有社會』は、恰かも、常山の蛇の如きものである。エンゲルスは、これを、全く其の『公式』の適用以外に置くことによつて、一の矛盾を免れ得たけれども、他方に於いてはかくすることによつて、唯物史觀其ものゝ妥當性を、verhängnisvoll に限局せねばならぬこととなり、而して、同時に、また、原始共有社會から、古代社會への推移を、說くことは、唯物史觀の爲し能はざるところとなつた。之れに反し、マルクスは、斯く明かに『公式』の妥當範圍以外に、原始共有社會を置かないことによつて、エンゲルスが當面した厄難からは免れ得て居るやうであるが、他方に於いて、原始共有社會の認容と、階級鬪爭理論との扞挌と云ふ厄難に、當面せねばならないことになつたのである。首を抑へれば、尾は揚り、尾を抑ふれば首は揚る。誠に常山の蛇とは、唯物史觀に於ける『原始共有社會』の謂であると云つても、過言ではあるまいと思はれる。

(三十五)

しかし乍ら、私は、今、結論を下すべく急ぐを不可と見る。私の所謂、最根本的疑問の解決は、先づ、徐ろに、マルクスの『アジア的』『インド的』其ものについて、得られる限りの文獻について、出來る丈け、鄭重に吟味を下だした後でなければ、之を敢てしてはならぬと私は考へる。

ソコデ、私は、暫らく隱忍して、マルクスが、印度の村落共有制について、如何に考へてゐたものであるかを、立入つて、考證することを勉めなければならない。

私は、既に言つて置いた。『一八四五年の渡英期に於いては、マルクスは、アジア、就中、インドの共有制に關する既存の書物類には、目を通す暇がなかつた。之れに反し、其次の一八五〇年の渡英期に於いては、彼は、廣汎に、『一見全く關係のないやうな諸學科の研究に導かれ、』其間にインド並に支那等について、稍ゝ立入つて研究したものであつて、其結果が、一八五三年の『印度論』、更らに進んでは、一八五七年の『緒論』中の若干の引照となつて顯はれ、茲に『アジア的』が、彼の進歩的階段の中に組み入れられるやうになつたのではあるまいかと。』(本誌六月號四九頁) 而して、私は、更らに言つた。『リアザノフ氏の擧げた諸書とは、(中略)右の中、今茲に、問題とする點について、マルクスが

最も多く學んだのは、キャムプルの書であるらしく思はれる。滅多に他を賞めない彼も、特に、此書について丈けは、『インドの共同體の種々異つた諸形態の善き總覽は、此書に於いて、見出さる』と賞めてゐる。』と。――同上所四九―五〇頁

今、私は、キャムプルの此書『近代の印度』一八五二年刊[1]を幸にして見ることを得つゝあるものであるから、其書について、マルクスが學んだであらうと思はれる箇所を、印度の共有村落に關する唯一の――私の知り得た限りに於いての――マルクスの記述である『資本論』第一卷の當該場所と對照吟味して見よう。

キャムプルは、ベルガル――其れは、共有村落でなく、個人土地所有村落の存在する地方である――に於いて、永く英國政廳の官吏たりし人で、――彼は後に印度中央諸洲長官であつたことは、後に引くコブデン倶樂部編の『印度土地所有制度論』[2]の肩書に見えて居る――刻苦精勵、印度全般について調査研究して、其結果を『近代の印度』[1]――『現代の印度』と譯出した方が當つて居るかも知れぬ――てふ一書に記錄して公けにしたのである。彼は、其書の序文に於いて、次の如く云つてゐる。『私は、現在の事實の記述のみに、私の仕事を限局せんことを希つた。さりながら、私の記述を讀む人に對して、ミルの九卷本の通讀を求めるのは、却つて、私自らを、一の大なる溝渠の中に投げ込み、而して、之を充す望は、微塵もないことになるであらう。而して、丹念に、ミルを研究する人でさへも、多くの謬見に陥ることを免れまい。かく、印度の民政史について、正しき、または、一般に讀まるゝ書の闕如たる今日、私は、絕へざる引照と說明とを省く爲めの最捷徑は、私自ら、本書に、數章を添へて、印度民族の記述と、我が印度史の或部分の說明とを與ふるにありと思ふ。(略)エルッキンストーンは、我が印度史に於いて缺くるところを補ふべく約束した。然るに、彼は最も不幸にも、其入口に於いて立止つて仕舞つた。彼の提供した限りの部分については、何ものも缺けて居らぬが故に、私は、脈とこれを引用した。一八一二年刊行の有名な下院委員第五報告[3]――筆者註。私が、前段に於いて問題とした、マルクスの所謂『一の古い官府報告』なるものは、これである――は、我が當初の行政に關する甚だ稱揚す可き記錄であつて、此書が、更らに、より便利な形ちに於いて存して居らぬといふことは、殘念なことである。此書に比し得べきものが、過去四十年間公けにせられたことを、私は知らない』と。序文七頁　彼は、更らに、語をつゞけて云ふ。『私は、印度の全體について、槪括することを試みた。何となれば、私の大原則――之れは、私が見讀み、又た探求することより多くなるほど、より多く確められたところの――は、印度の各異つた諸地方に於いて、我々が見出した習慣、制度及政治の方法は、大般に於いて、絕對的に一致するといふことこれである。(略)私の記述は、主として、北方印度――筆者註。其れは

共有村落の多く存する地方である——に關するものであつて、而して私が特に、南方諸州——筆者註。之れは、共有村落の存せず、個人所有村落の多く存する地方である——のことを指示しない限り、微細の點に至つては、異同はあらう」と。同上七一八頁

キャムプルの前には、ミルとエルフヰンストーンとがある。殊に、エルフヰンストーンの書(4)は、ラッフルスも、屢よこれを、其『ジアヷア史』に引用してゐる。さりながら、印度の『村落共有制度』のことを、いとも明瞭に記述した最初の著作としては、キャムプルの著は、其第一位に置かるべきものであらう。マルタスが、此書を利用したのは、當時に於いては、最も善き『クエレ』を選出したものたるに相違ない。

ところで、玆に、注意しなければならないことは、(一)キャムプルは、主として、北方印度のみを、觀察の對象としたものである(二)然るにも拘らず、彼は、其觀察の結果を、印度全體に推し擴めて概括總覽し、唯だ、微細の點に至つては、元より異同は存するであらうと云ふに止めてゐること、これである。

さりながら、キャムプルは、同時に、明白に印度に於いて、二種の異つた村落制度の存することを認め、これを、簡單ながら區別して記述してゐるのである。此點に於ては、彼は、後のサー・ヘンリー・サムナー・メーンの陷つたと云はれるところの誤の一部分を免れてゐるのである。

(三十六)

今、彼の記するところを窺つて見よう。彼は其書第三章『吾人(英人のこと)が繼承した諸制度及地位』に於いて『村落共同體』『土地占有制度』を記述してゐる。八二頁から九五頁まで 其大要に曰く、『我々(英人)が、インドに於いて見出した收入制度——地租の制度のこと——を説明する爲めには、私は、時にやゝ詳かに、村落共同體の組織と、種々なる土地所有制度の性質とを記載せねばならぬ。私は、既に、前にインドの農民は、當初から、村落に集合して移住したものなること、而して土地は、其の使用及占有に關する限り、最初の耕作者の所有であつて政府に對して、相當の小作料を支拂ふ義務を負ふものであることを云つた。さりながら、此の土地所有權は、唯だ現に耕作せられゐる土地の占有を意味するものであつて、殘るところの間田に對しては、何等の權利を與へず、また、其等間田に移住し來る他の耕作者に對し、何等の權威を與ふるものではない。而して、小作料は、所有權以外に立つものであるから、單なる耕作の權利は——タトへ、それは、其權を有する人、其土地に生長し、これに固着する人によつては 尚ばれるであらうが——何等の市場價格を有ち能はぬ。從つて、此種の權利は、土地所有權の最下級の種類であつて、唯だ、甚だ強い小作權の一種た

る以上に出づるものではない』と。(八二—八三頁)キャムプルは、之を名けて、第一種『最下級土地所有權』と云ふ。

彼は、右と區別して、『第二種のより強き所有形態』なるものをあげてゐる。曰く、『民主的なる諸種族は、以上よりも、より強い權利を有つ。土地の全部は、各異れる共同體の間に分割されて居る。農民は、耕作地の所有權を有するのみならず、彼等の領土内にある未耕地に對しても、所有權を有する。而して、彼等は、本來の小作權地を耕す下級占有者の土地に對して權威を有し、また或種の上級權を有つ。恐らく、當初には、彼等は、小作料の全部又は一部を留保したものであらうが、其大部分は、いつしか、或る政府に之れを支拂ふべく餘儀なくせられるに至つたものである。然し、彼等は、其等小作料の或る限界的部分を、彼等自らの利得として、並に地方的經費支辨の爲めに保留する。而して、特に、下級占有者の存する場合には、小作料の一部分は、此等下級農民から、上級農民に納められる。此種の所有權は、遙かにより強き而してより確定的な所有權である。所有權者が受くる實際小作料の分け前は、事情に從つて、極小額より著大の額に至る著しい相違があるが、何れにもせよ、所有權行使の實際は第一種の所有よりは、遙かに、より明確なものである。而して、我々(英人)が見出したすべての最強の所有權は、占取に基くよりも、むしろ、征服に基くものである。』と。(八三—八四頁)

ソコテ、キャムプルは、以上二種の所有權の差別に基いて、村落共同體にも、また二種ありとして、第一種を『單純共同體』と名け、第二種を『民主的共同體』と名ける。『單純共同體』のことを、彼は、また、『貴族的』とも呼ぶ。

彼は、其第一種については、極めて簡單に、其第二種については、稍具さに、これを記述してゐる。

彼は、第一種の單純又は貴族的村落を以つて、本來固有的のものなりとし、之れは、インドの古代に於いて成立したもので、メニユー(マヌ)法典に記載されてゐるもの即ちこれなりとしてゐる。此種村落の農民は、一種の小作權者で、其村落の組織は、貴族的であり、各村には、國王の任命した一人の村長——ポタイル——があるといふ。彼は此種村落の記述を爲すに、自己の言を用ゐず、前段に私が問題とした英國下院第五報告(3)からの一節と、エルフキンストーンの『印度史』(4)からの一節とを以つて、これに充てゝゐるのである。

玆に、讀者の注意を促がして置かねばならぬことがある。其は別事でもない。キャムプルが玆に、單純又は貴族的と呼ぶ、本來固有の印度の制度で、メニユー(マヌ)法典に既に顯はれて居ると云ふ此第一種の村落なるものは、後に述ぶるバーデン・パウエルの『ライヤツトワーリ raiyatwari 村落』と名くるものに當るので、其れは、土地共有村落では、毛頭なく、個別所有 separate ownership に立脚する村落で

あること、これである。即ち、私が、前段の吟味に於いて、リアザノフ氏の解釋の當らざることを示した通り、此種村落については、土地共有の事實は、全然存在せざること、ラツフルスが、記述した『ジウヴア』と、全く同様なのである。

今、キャムプルが、此の個別所有村落を記述するに用ゐた英國下院第五報告中の一節なるものが、また、實に、私が、前段に、原文を引用したマルクス『印度論』中——『資本論』に於いて、再び引かれてゐる——の一節其ものであることを見出すのは、甚だ興味あることと云はねばならぬ。何となれば、マルクスが、此一節を引いて記述した印度の村落なるものは、何等土地共有の事實を含まざるものなりとの、私のリアザノフ駁論が、キャムプルによつて、更らに、力強く確められてゐるのであるから。而して、ラツフルスに顧みて、共有無關係を主張した私は、更らに、キャムプルを得て、リアザノフ氏のひいきの引倒し論、殊に、マルクスのサン・ヘンリー・サムナー・メーンに對する優越的先見禮讃に、對抗するを得るのであるから。私は、前段を認めたとき、未だ、キャムプルの此書(第二書(2))は架上にあるがソを一見することが出來なかつたのである。幸にして、其後慶大圖書館に、此本の藏せられあることを見出し——其れは、實に、望外の幸であつたのである——匆々借覽して、此の有力なる援軍を得たのである。

さて、其の第五報告からの引用句とは、前號四〇頁下段下から第五行目の a village.... から四一頁下段上から第二行目の Bramin or astrologer, etc の一節、——リアザノフ氏獨譯のマルクス引用では同上三九頁下段第一行から四〇頁上段第五行目の央まで——と、其れにつゞく、八行である。こゝに、面白いことは、キャムプルは、其節の終まで全文を引いゐる。之れに反し、ラツフルスは、astrologer で切つてアトは、etc. としてゐるのであるが、マルクスも亦た全く同く Astrologer と切つて仕舞つて、アトの八行を飛ばしてゐることである。マルクスが、原文からでなく、ラツフルスから孫引したものなることは、此一些事によつても、更らに、確められるのは、亦一興と云ふ可きであらう。

(三十七)

キャムプルは、次に、『民主的村落共同體』を自己の言葉を以つて、やゝ詳しく記述してゐる。曰く『民主的要素の勝つてゐるところ、即ち北方、並に南方の多くの部分(筆者。!?)に於いては、村落共同體の組織は、他の部分に於けるとは異りて、所有權者たる村民は、すべて平等であり、而して、自ら、村の主人、村に屬するすべての土地の主人、並に、所有權者以外の村民——番人、僧侶、工人等——の主人で、此等下級村民は、村の公吏たるよりも、むしろ、村の召仕なりと考へてゐる。村の通常事務は、政府任命の一人の村長によつて司られ

ることなく、『パンチ』と呼ばれる委員會によつて掌られる。此委員會は、村の所有權者團によつて選擧せられ、平均恐らく六人の委員から成立つてゐる』と。八五―八六頁

彼また曰く、『南方に於ける『ポタイル』は、平等者間の一代表者たるよりも、異要素を集めた一團體を統ぶる一の首長である。然るに、民主的なる『パンチ』の委員は、團體の代表者たる以外、何等の官憲的權力も權威も持たざるものである』と。而して彼は『第一種の單純村落のことは屢々照會せられてゐるから、私は、此第二種の民主的村落のことをより詳しく記述しよう』と云つて、以下八頁に渉つて說明してゐる。

彼曰く『古き諸報告は、此種の村落制は、英國の領印以前に於いて、ヴェララース（セイロンへ移住した民）及び南方の他の種族の間には、一般に行はれてゐたことを、明白に示してゐる。而して、北方に於いては、今日猶ほ、ジアット族、ラジュプート族、及其れに近い諸種族の間に普及してゐる。事實として、私が近くまで任にあつた部分の印度、上ストレジュの附近、及び其東西、一方には、ジュマまで、他方には、遠く、パンジアブ地方に至るまで、此種以外の村落團體又は土地所有制度は、これあるを見ないのである。然るに、多くの著者たちは、印度の此等地方に於いては、此種團體のすべての形跡は一掃せられて仕舞つたと想像してゐる。事實は、其反對で、此等地方にこそ、今日猶ほ完全に、此種村落が存してゐるのである』八六頁

此れは、後のバーデン・パウエル5)(6)(7)(8)によつて著しく訂正せられなければならぬ一節であるが、其事は、今問題の外に置く。

かくて、キヤムブルは、此種の共有村落制の記述に入る。

彼記して云ふ。『各村落は、同一血族又はクランに屬すと主張する家族數多から成立つ一の共同體であつて、一般に、同一地方にある諸村落の大多數は、同一種族又は種族内の分脈に屬するものである。しかし、種族外のものも亦混入してはゐる。而して屢見るところでは、一の村落が、二若くは三の異れる種族、カースト、又は宗教にさへ屬する者たちが、或る目的の爲めに結合することから、成立つことさへある。かくて、此等のものは、一の共同體を形づくり、土地に對する最强の所有權を主張し又た之を現有してゐて、如何なる政府と雖も、全く若くは殆んど全く、其權利を奪ふこと能はざるのである。完全に組織されてゐる村落に於ては、彼等のみが、殆んど唯一の本業的農民である。小商人や勞働者などが、耕作地を獲得することありとするも、それは、唯だ認容によつて、其土地を占有するに過ぎないものと看做される。しかし、時としては、永く同一地を占有してゐたことにより

並に、本來の所有權者の死絶へたことにより、此等のもの中少數者が完全なる土地所有權を得ることなきにしもあらず、然る場合、此等の者は、また、其の共同村落の新入員として認められるのである。

政府の役人は、村の所有者たちが共同一致してゐる限りは、村の事柄には、直接には、干渉しない。唯だ、一の團體として、之れに臨むのみである。從つて、常に、村の代表者のみを相手として、事務を取り行ふ。各村には、一切の公課を分賦し、並びに、共同に諸契約を締結すべき一の機關がある。しかし、かく云へばとて、彼のミルが云つたように、此等村民は『大なる程度に於いて、財の共有をなす』ものでは、決してない。私は、耕作が、共同的に營まれてゐたり、村民の私事の何事についても、共產的に行はれてゐる例を見聞したことがない。而して、私は、此くの如き事が、嘗て存在することを、甚だ疑ふものである。土地の全部は、所有者全體の共有である。彼等は、其の代り、此の共有權に對して、また、或種の共同責任を擔ふ。しかし、實際の運用は、次の如くである。各村落の土地は、一定數の一定部分——これを『一鍬』plough と名く——に分割されてある。しかし、『一鍬』といふは、事實、一定の面積たるよりも、むしろ、共有の土地に對する一定の分け前（share）を示すべき、代數的符號の如きものである。タトヘバ、一村の耕地全體を、六十四鍬に分ち、各人の持分は、幾鍬を以て言表はされる。即ち、一鍬、二鍬、又は、一鍬半、四分の三鍬を持つと云ふが如くである。而して、一切の公課——政府への納附又は共同負擔の諸經費——は、一鍬に付き何程と定められ、各人は、其持分の鍬數に準じて、これを支拂ふのである。當初には、土地は、年々割替へを行つたこと、ドイツ人間に於ける慣例の如くであつたであらうが、村落が永住的になつた後に於ては、各人の所有地は固定して居り、井戶其他に投資した人たちは、決して、其權利を奪はれることはない。

しかし、共有の權利は、全くは消滅してゐない證據には、各地主は時日の經過に從つて、いつしか起つた不平等や、境界の變化を訂正する爲めに、時々測量改めを爲し、所有地、及び之れに對する公課の振當換へを爲すことを、請求することが出來るのである。各村の牧地は、全村民共同である。しかし、村と村との牧地間の限界は、甚だ嫉視的に維持せられ、其限界の不確又は不定の爲めには、血を流すような爭が起ることさへある。』八八頁

（三十八）

キヤムプルは、更らに云ふ『新たに、耕地を開墾するときは、其地は、全員の間に、其本鍬數に應じて分割せられるか、又は、全員が、新墾地の分割當を望まざるときは、之を欲する者たち丈けで、別に、分け前を設定することを許される。タトヘバ、二鍬に該當する丈けの土地を新墾したとすると、六十四鍬が增して、六十六鍬となり、かくて一鍬當りの公課負擔額が減ずることになるが如きこれである。但し、

村の牧地が、村所在の畜類に飼料を供するに足る丈けしかないときは誰人と雖も、之を開墾して、耕地と爲すことを許されないのである。（下略）

此等の村々（略）の住民中或ものの政治的地位の劣れることについては、既に記した如くである。會計役、銀行家、商人等は、一般に、村民たるよりも、むしろ、村の盟友とも云ふべきものである。何となれば、彼等は、村の經營については、何等直接の發言權を有たず、唯だ金持として、村の繁榮を助ける人々として、又た各村民が、取引をする相手方として、珍重に取扱はれてゐるのである。村民は、彼等から、前借を爲し、それに對して、彼等は、村民から、すべての穀物を受取り、それに對して、市場價格見積りの貸方勘定を開く。而して、一般に、公課の支拂は、彼等の手を通して爲される。金は、すべての團體に於ける力である。

しかし、右以外の他の住民、即ち、大工、鍛冶、僧侶其他のもの、並びに、多數を占むる勞働者——農耕以外、一切の勞役に服し、又た時としては、農事をも、幇助するところの——は『カミーン』即ち、低級者と呼ばれ、其勞役に對しては、年々若干の穀物量を給與せられる。（略）

村落共同體が、强固、獨立にして、而して、善く組織せられてゐる限りは、所有權が、誰人に屬するかについて、何等の疑も起らないし、之れに對して、何等の侵害を許さない。而して、一般に、此等所有權者と、政府との間には、何等の仲介人を容れない。彼等は、直接に、政府の代表者に公課を納入するか、又は、何人か、其間に介在することありとするも、其仲介者は、其與へられた權限を嚴守して、決して村落の事に干渉しない。

此等村落の土地に對しては、（略）政府の本來の權能は、唯だ作物の分け前を得るに止まる。（略）しかし、土地所有者及び政府双方の利益の爲めに、これを、一定の金額に換算することもあり得る。即ち、全村一ヶ年の上納額金何程と確定し、各納付者は、其土地持高に準じて、自己の上納すべき額を確知し得るのである。

以上が、完全に、民主的な村落共同體の狀態である。しかし、此く完全ならざる共同體もある。かくて、土地所有の狀態に種々の異類が發生する。』以上、八八―九一頁の間から摘譯

玆に、キャムブルが、異類として、あげてゐるものは、多數にある。彼は、其記述の最終段に、印度に於ける、土地所有の諸種類を總括列擧して、次ぎの如き六種ありとしてゐる。

一、一人の村長の下にある單純村落

二、村民互選の委員によつて治められる民主的村落。

三、村落　ゼミーンダール。

ゼミーンダールとは、村民中極少數の者のみ土地所有權を有する其地主の名であつて、他の村民は、皆劣級者と看做される。此のゼミーンダールには、種々異つた成立の種類があり、從つて其權利にも甲乙があるが、要するに、オリガーキカル（寡頭政治的）のものであることは、何れも同じい。

四、マホメット政府の官吏がゼミーンダールたる村落。

五、ジアグヘールダール。

ゼミーンダールに似たもので、同時に政府の收得すべき公課を徵收する權能を有するもの、從つて、地主であり、村の公吏であり、同時に政府の役人たるもの。

六、Tributary chiefs

キヤムブルは、之を說明してゐない。但し、後段に見へる通り一種の公吏で、村の自治に干涉しないものと見へる。

以上九三―九四頁

キヤムブル更らに曰く『土地に對する諸の權利は、動產に對する其れの如くに、自由に離權し得るものではない。（略）最下級の土地所有權は、前述の通り、何等の市場價値を有せぬ。より強き村落共有體に於いては、所有權は遙かにより確定的であつて、土地は、個人所有に屬せず、共有に屬する。從つて、誰人たりとも、他の村民の同意なくしては、村民が、其仲間に入れることを欲しない村外者に、其權利を賣ることを得ない。從つて、所有權の賣買は、主として、一村內の他の村民への讓渡に限られる。此場合に於いても、自己の持てる權利を全く離すことを欲せざる念は、甚だ強くして、其讓渡と云ふも、長期に涉る離權でなく、殆んど、抵當の一種たるのである。』と。九四頁

彼は、以上、各種異れる土地所有制度の、全印度に亘る分賦の狀態を述べて云ふ。『ベンガル洲本部に於いては、村落共有體は、甚だ振はず、主として、ゼミーンダールの制が、可なり一般的である。（略）バハール洲に於いても、ゼミーンダールを多く見る（略）西北諸洲に於いては、或る地方には、多くの完全なる民主的共有村落を見るが、しかし、大多數は、或は多く或は少く不完全なものに屬する（略）。また、ゼミーンダール村落も多く存する。（略）マドラス洲に於いては、西北地方と同じ樣に、多く完全民主村落があるが、しかし、不完全村落の數の方が多い。また、ポタイルを戴く單純村落の數も甚だ多い。（略）ボンベイ洲に於いては、或る限られた地方には、ゼミーンダールに該當する印度的デシユマック村落が存し、而して、其他には、より多くか、より少くか、完全なる各種の村落がある。（略）最後に、極北地方即ち、ジユムナ以北に於ては、村落は完全村落である。ゼミーンダールは、或は、絕へたが、或は tributary chiefs として、村落の完全な

る存在を妨げることなくして、政府の委任權を行使するものと認められるやうになつた』と。九四―九五頁

（三十九）

玆で、私は、印度村落共有制度についての、今日までの最大の權威たるバーデン・パウエル氏の其の小著(8)に於ける誤謬若くは誤解を、一寸訂正して置く義務があると思ふ。

バーデン・パウエル氏は、其何れの著作に於いても、キヤムブルの此書のことについては、一言も云つて居らず、唯だ有名なコブデン倶樂部編纂の『諸國に於ける土地所有制度』Systems of Land Tenur in Various Countries; a series of Essays published under the Sanction of the Cobden Club. 2. E. London 1870（私の座右に今在る本は、一八八一年附の序文をのせた其訂正新版である）中に收められた、キヤムブルの『印度に於ける土地所有制』(2)を、其諸著に引くのみである。私は、其何故なるかを訝らざるを得ない。しかし、其は些事として論外に置き、バ氏は、其小著に於いて、ローレンス、トマソン、マンロー、及キヤムブル等、サー・ヘンリー・サムナー・メーン以前の印度研究者を難ずること、メーンを責めると粗ぼ同樣に出でて――之れは決して不當とは云はれないとは思ふが――、而して、キヤムブルについても、十把一束的に、次の如く云つてゐるのである『メーンが利用した此等の源泉は一の事實を共通に有することを特記せねばならぬ。彼等は、唯一つの點、卽ち『共有』と云ふことのみを力說し、事實上は、多くの差別の存することを看過してゐる』意譯。「インドに於ける村落共有體の起源及發達」

(8)倫敦一八九九年刊第三九頁

私が、前段に、やゝ詳かに紹介したキヤムブルの記事を讀まれた讀者は、バーデン・パウエルの右評が、如何に、キヤムブルについては、當つてゐないものであるかを、容易く看取せられたであらうと思ふ。思ふに、バ氏は、メーン(9)(10)(11)の壓倒的盛名に對應し、其立論の材料の甚だ偏したものであることを舉證せんことに熱中するの餘り、キヤムブルにも、傍杖を喫せしめたのであらう。私の此小論文に先つこと、實に十一年の昔、畏友大塚金之助教授は、仔細に、バーデン・パウエルの諸書を熟讀し、其結果得たる印象を記述するに方り、私の右引用のバ氏書(8)を評して、次の如く云つて居られる。『(此)書は、通俗書にして、主として、メーンに反對する立場を明かにするを目的とす。但し記述重複して、了解に苦しむ所あり』云々と。

大正五年高商專攻部卒業論文『村落團體に關する學說の研究』商大圖書館藏卒業論文第五三二號。一五八葉。註解(一)印度村落團體研究參考書其四。序に云ふ。此論は、二十餘年の間に、私が見ることを得た數十の卒業論文中、殆んど類を絕する底の力作である。其れが印刷に附せられてないことは、まことに遺憾なることである。

私は、大塚教授の此評に裏許するの外ないものである。否、啻に記述に重複あるのみあらず、キヤムプルに對しては、たしかに、誤れる若くは誤解せる判斷を下してゐるものなのである。

(四十)

キヤムプルは、其の『近代の印度』(1)に於いて、右示すとほり、明かに、印度村落に二大種類あり、更らに數種の異類あることを記述してゐるのであつて、メーンの如く、唯共有村落のみを眼中を置いたとの非難を被る可きわけは、些もないのである。

更らに、バ氏の引用してゐるコブデン倶樂部編の書中に於ける『印度に於ける土地所有制度』(2)に於ても、キヤムプルは、いとも、はつきりと、次の如く云つてゐるのである。『慣習的小作料支拂の義務を負ふ土地所有と云ふ意味に於ては、私は思ふ。土地に對する私有權は、記憶以前の太古以來、印度の多くの地方に存在してゐたと。』一八八一年版本二一六頁『印度の村落制度に、共産主義の事實の一つをでも認むるのは、これに過ぎたるものなき誤謬である。(中略)一の村落團體を結束するものは、所有の共同よりも、むしろ、村の自治制度これである』と。同上書二二三頁

メーンが、果してバーデン・パウエルの難ずる如く、馬車馬的に、唯一種のみを見て、他を顧みなかつたものであるか否かの吟味は、本論に關係ないことであるから、私は、今、これを論外に置く。それに反し、バ氏の此非難はマルクスに對しては、たしかに中ると私は思ふ。マルクスに、キヤムプルの此書(1)について『インドの共同體の種々異つた諸形態の善き總覽は、此書に於て見出さる』(本誌六月號五〇頁)と、明かに云つてゐる。然るにも拘らず、彼は、『資本論』第一卷の、印度共同體の記述に於いては、二種を雜然と混淆し、これを打つて一丸と爲す底の言を爲してゐるのである。

ソコデ、私は、印度共有村落に關する唯一の――私の知り得た限りの――マルクスの記述たる『資本論』第一卷中前揭の一節を、玆に持出して、之を吟味臺上に上せねばならぬこととなつた。

私の吟味を、出來る丈け、誤少きものたらしむべく、私は、玆に、マルクスの文を、先づ、原文の儘揭げ、次に、高畠君の改譯文に若干筆を加へて、これを添へることにする。

Jene uraltertümlichen, kleinen indischen Gemeinwesen z. B. die zum Theil noch fortexistiren, beruhn auf gemeinschaftlichem Besitz des Grund und Bodens, auf unmittelbarer Verbindung von Agrikultur und Handwerk und auf einer festen Teilung der Arbeit, die bei Anlage neuer Gemeinwesen als gegebner Plan und Grundriss dient. Sie bilden sich selbst genügende Produktionsganze deren Produktionsgebiet von 100

bis auf einige 1000 Acres wechselt. Die Hauptmasse der Pro-
dukte wird für den unmittelbaren Selbstbedarf der Gemeinde
producirt, nicht als Waare, und die Produktion selbst ist daher
unabhängig von der durch Waarenaustausch vermittelten
Theilung der Arbeit im Grossen und Ganzen der indischen
Gesellschaft. Nur der Ueberschuss der Produkte verwandelt
sich in Waare, zum Theil selbst wieder erst in der Hand des
Staats, dem ein bestimmtes Quantum seit undenklichen Zeiten
als Naturalrente zufliesst. Verschiedne Theile Indiens besitzen
verschiedne Formen des Gemeinwesens. In der einfachsten
Form bebaut die Gemeinde das Land gemeinschaftlich und
vertheilt seine Produkte unter ihre Glieder, während jede
Familie Spinnen, Weben u. s. w. als häusliches Nebengewerbe
treibt. Neben dieser gleichartig beschäftigten Masse finden wir
den "Haupteinwohner", Richter, Polizei und Steuereinnehmer
in einer Person; den Buchhalter, der die Rechnung über den
Ackerbau führt und alles darauf Bezügliche katastrirt und
registrirt; einen dritten Beamten, der Verbrecher verfolgt und
fremde Reisende beschützt und von einem Dorf zum andren
geleitet; den Grenzmann, der die Grenzen der Gemeinde gegen
die Nachbargemeinden bewacht; den Wasseraufseher, der das
Wasser aus den gemeinschaftlichen Wasserbehältern zu Acker-
bauzwecken vertheilt; den Braminen, der die Funktionen des
religiösen Kultus verrichtet; den Schulmeister, der die Gemeinde-
kinder im Sand schreiben und lesen lehrt; den Kalendar-
braminen, der als Astrolog die Zeiten für Saat, Ernte und die
guten und bösen Stunden für alle besondren Ackerbauarbeiten
angiebt; einen Schmied und einen Zimmermann, welche alle
Ackerbauwerkzeuge verfertigen und ausbessern; den Töpfer
der alle Gefässe für das Dorf macht; den Wäscher für die
Reinigung der Kleider, den Silberschmied, hier und da den
Poeten, der in einigen Gemeinden den Silberschmied, in andren
den Schulmeister ersetzt. Diess Dutzend Personen wird auf
Kosten der ganzen Gemeinde erhalten. Wächst die Bevölker-
ung, so wird eine neue Gemeide nach dem Muster der alten
auf unbebautem Boden angesiedelt. Der Gemeindemechanismus
zeigt planmässige Theilung der Arbeit, aber ihre manufaktur-
mässige Theilung ist unmöglich, indem der Markt für Schmied,
Zimmermann u. s. w. unverändert bleibt und Löchsters, je
nach dem Grössenunterschied der Dörfer, statt eines Schmieds,
Töpfers u. s. w. ihrer zwei oder drei vorkommen. Das Gesetz,
das die Theilung der Gemeidearbeit regelt, wirkt hier mit der
unverbrüchlichen Autorität eines Naturgesetzes, während jeder
besondre Handwerker, wie Schmied u. s. w. nach überlieferter
Art, aber selständig und ohne Anerkennung irgend einer
Autorität in seiner Werkstatt, alle zu seinem Fach gehörigen
Operationen verrichtet. Der einfache produktive Organismus
dieser selbstgenügenden Gemeinwesen, die sich beständig in
derselben Form reproduciren und, wenn zufällig zerstört, an
demselben Ort, mit demselben Namen, wieder aufbauen, liefert

den Schlüssel zum Geheimnis der Unveränderlichkeit asiatischer Gesellschaften, so auffallend kontrastiert durch die beständige Auflösung und Neubildung asiatischer Staaten und rastlosen Dynastenwechsel. Die Struktur der ökonomischen Grundelemente der Gesellschaft bleibt von den Stürmen der politischen Wolkenregion unberührt. Das Kapital Bd. I 4. Aufl. Hamburg 1890. SS. 321-323. (Volksausgabe SS. 304-305. 1. Aufl. 1867. SS. 341-343. 2. Aufl. 1872. SS. 369-371.)

『例へばインドに於ける、小さき原始古代的の共同體は、一部的には今日尙ほ存續してゐる(削)が、それは土地の共有と、農業及び手工業の直接的結合と、新たなる共同體の設立に方り與へられたる設計及仕様書として役立つところの固定的分業とに、基礎を置いてゐた。此等の共同體は、いづれも一百エーカー乃至數千エーカーの生產地域を占むる自足的の生產體を成して居り、生產物の主要部分は共同體それ自身の直接的要用の爲に生產せられるものであつて、商品として生產せられるものではない。かくて生產それ自身は、インド社會全般に於ける商品交換に依つて媒介される所の分業からは、獨立したものとなつてゐるのである。而してただ過剩の生產物のみが商品に轉化されるのであるが、それも一部的には、國家の手を通して初めて行はれるのである。インドに於いては、いつとも知れぬ古き時代から、一定量の生產物が現物地代として國家の手に流れ込む事になつてゐるのである。

斯種の共同體は、地方に依つて形態を異にしてゐる。(削)最も單純な形態に在つては、共同體は、土地を共同に耕耘し、而して生產物を構成員の間に分配する。(削)其傍ら各家族は家庭的副業として紡績、はた織その他の產業を營んでゐる。此等はいづれも同一の勞働に從事してゐる人々であるが、此等の外に、(削)一身で裁判官と警察官と收稅吏とを兼ねてゐる『主住民』や、農業上の計算を行ひ、農業に關する一切の事項を評價し登錄する簿記係や、犯罪人を起訴し、他村からの旅客を保護し、これを次の村へ案內する他の吏員や、隣村との境域を見張る境界番人や、農業上の目的のために共同貯水池から水を分配する給水係や、宗教上の禮拜を司る婆羅門僧や、村童のため砂上に讀み書きを敎へる敎師や、占星師として播種、收穫、其他農業上の凡ゆる特殊勞働について時期の適不適を告げ知らせる曆僧や、一切の農具を製造し修繕する鍛冶及大工や、村民の使用すべき一切の容器を製造する陶工や、理髮師や、衣類を洗滌する洗濯師や銀細工師や、此處彼處には又詩人(共同體に依つては、これが銀細工師に代つたり、敎師に代つたりするのであるが)などが見出される。而して此等十數の人々はいづれも、全共同體の費用を以つて養はれてゐるのである。(それで)若し人口が增殖すると、舊來の共同體を標本にした、新たなる共同體が外耕地に移り住む。共同體の全機構は計畫的な分業を示してゐる。だがマニユフアクチユーア的の分業は不可能である。蓋し鍛冶工

や大工や其他に對する市場は、何處に於いても不變であつて、共同體の大小に依り、一人の鍛冶工陶工其他の代りに二人又は三人ゐるといふ位ゐが關の山であるからである。共同體の分業を規制する法則は、この場合一つの自然律たる不可侵的の權力を以つて作用し、鍛冶工其他の如き特殊の手工業者はいづれも傳來の方法で作業するとはいへ、(削) 彼等の作業場の內部に於いては、何等の權力をも認むる事なく、おの〱獨立して自己の專門に屬する一切の作業を行ふのである。此等の自足的共同體の單純な生產的有機體は、不斷に同一の形態に於いて複製され、たま〱それが破壞されても、同一の名稱を以つて同一の場所に再現するといふことは、アジア諸國家の間斷なき興亡と、休止する所なき王朝の代替りに比するときは、爾かく著しく反對の狀を呈するアジア諸社會の不變性の秘密を、解くべき鍵(削)を與へる。社會の經濟的根本要素の構造は、政治的方面の暴風雨によつて左右せられることないのである。』高畠氏改譯資本論第一卷、四五六――四五八頁。圈點を附したのは、私が、試みに改めて見た箇所を示めす爲である此一例を見ても、誰某なる人が、『東京日々』へ投書して、高畠氏譯本は、誤譯だらけなりとか、誤譯の典型で中學生的のものであるとか罵言を吐いてゐるのは、全く出鱈目の放言であることが窺はれよう。前段に、私が引用した諸邦譯の何れに比べても、私は、高畠氏の資本論の決して遜色なきもの、否、むしろ、其れらに對し、多くの强みを有つものであることを感じてゐるものである。

上來、私の記し來つたところを記憶に存せらるゝ讀者は、マルクスの此の記述は、實に堪へ難き混亂・紛更の狀を呈するものなることを見出されるであらうと思ふ。彼は、キヤムブルの記事、ウヰルクスの記事、ラツフルスの引用した第五報告等から、切れ〱に數行を摘出し來り、これを壓搾して、一の印度村落誌として仕舞つたのである。而して、其中には、全く獨斷的と云つても差支ないと思ばれる斷言を敢てしてゐるのである。今、其事を指摘して見よう。

先づ初めの部分、第一行の初から『其れも國家の手を通して行はれるのである』に至るまでは、ウヰルクス――ならん――とキヤムブルとを混淆して一文としたものであつて、其中には、第五報告の一二行も、再びまた織り込まれてゐるのである。殊に最終行『それも一部的には、國家の手を通して』云々は、キヤムブルの記事の曲用ではあるまいか。

其れにつゞく、一節『インドに於いて、いつとも知れぬ古き時代から』云々から、『二人又は三人ゐるといふ位が關の山であるからである』までは、『第五報告』の燒直しである。其の以下は、以上の混淆、誤解又は曲解に基いた、マルクスの獨斷的總括であるようで、而して、最終段の結語は、ラツフルスの曲用であるらしく見へる。

しかし、其等のことは、些事として、これを論外に置くとして、茲に、看過し得られざることは、キヤムブルが明らかに、共同耕作の事實なしと明言せるに拘らず、マルクスは『共同體は、土地を、共同に耕

耘し、而して其作物を、體員間に分配す』と、とてつもないことを言つてゐることこれである。キャムブルは、共同所有村落の存することを云ふのみ。共同所有と共同耕作とは、全然別のことであるは、言ふまでもないのである。而して、共同耕作の事實毫も存せざることは、彼の力說するところであるではないか。

　これは、明かに、マルクスの誤解か、または、曲解であらう。十の八九、前者たるよりも、後者であらうと、私は考へる。

　其他、分業の作用に關する記實は、無から有を生ずる底の巧妙なる、解釋技術の運用に屬するものと思はれる。

　しかし、私は、今、特に、印度共有村落其ものについて、吟味することを目的とするものでもなし、また、其れをするならば、誤謬に充てりと云はれるマルクスの諸出典などについて、爲すべきでなく、バーデン・パウエル以下の新しい研究に基いて爲すべきものと信ずるから、茲に、右等の諸點を追究することを見合せて置く。

　それに反し、私の是非、明かにせねばならぬと思ふことは、マルクスの右の記事は、キャムブルが折角苦心して後のバーデン・パウエルの精到なる研究を、四十年も前に、先驅して置いたところの印度村落の二大種類差別の重大事實を、全く無視し、而して、更らに、河上博士の福本氏に對する言葉を拜借すれば、此二者を、『殆んど救ふ可からざる程度に混同』してゐることこれである。

　マルクスは、キャンブルに倣つて、『印度の異れる地方は、共同體の異れる諸形態を有つ』と云つて居る。然るに、彼は以下、『最も單純なる形態に於いては、共同體は土地を共同に耕耘し、而して其作物を體員の間に分配する』と云ひ、而して、以下第五報告から、キャムブルの所謂『單純村落』——共有制の全然存在せざる——に關する第五報告の一節を、木に竹をつないだ如くに、續けてゐるのである。支離滅裂も、茲に至つて極れりと云はねばならないと思ふ。マルクスは、キャムブルの『單純』の意義を反對に解釋して、これこそ、共有村落の謂なりと早呑込みし、以下其の『單純村落』に關する記事を、これにつなげたのであらう。誠に正視に忍びざるほどの失策と云はねばならぬ。而して、更らに、また、其記事を結ぶに、再び、ラッフルスが明かに共有の事實なしと云へる村落に關する第五報告の一節を以てし、わざわざ鄭嚀にも、誤謬の裏書を爲すべく、脚註に、ラッフルスからの孫引を、原英文で入れてゐるのである。

　私は、茲に、マルクスを非難すべく、以上の點を指摘したのではない。私は、マルクスの『アジア的』乃至は『インド的』と云ふものゝ正體を、しかと見極める爲めに、以上の點は、必ず明かにして置かねばならぬと確信するが故に、此の不愉快なる事實——若しも、其れが、

ルクスの論敵の爲したところであつたなら、如何なる罵言を彼から被むる可きか、思ひ出してさへ悚然たらざるを得ざるところの――を、玆に、已むことを得ずして記すに過ぎない。

（四十一）

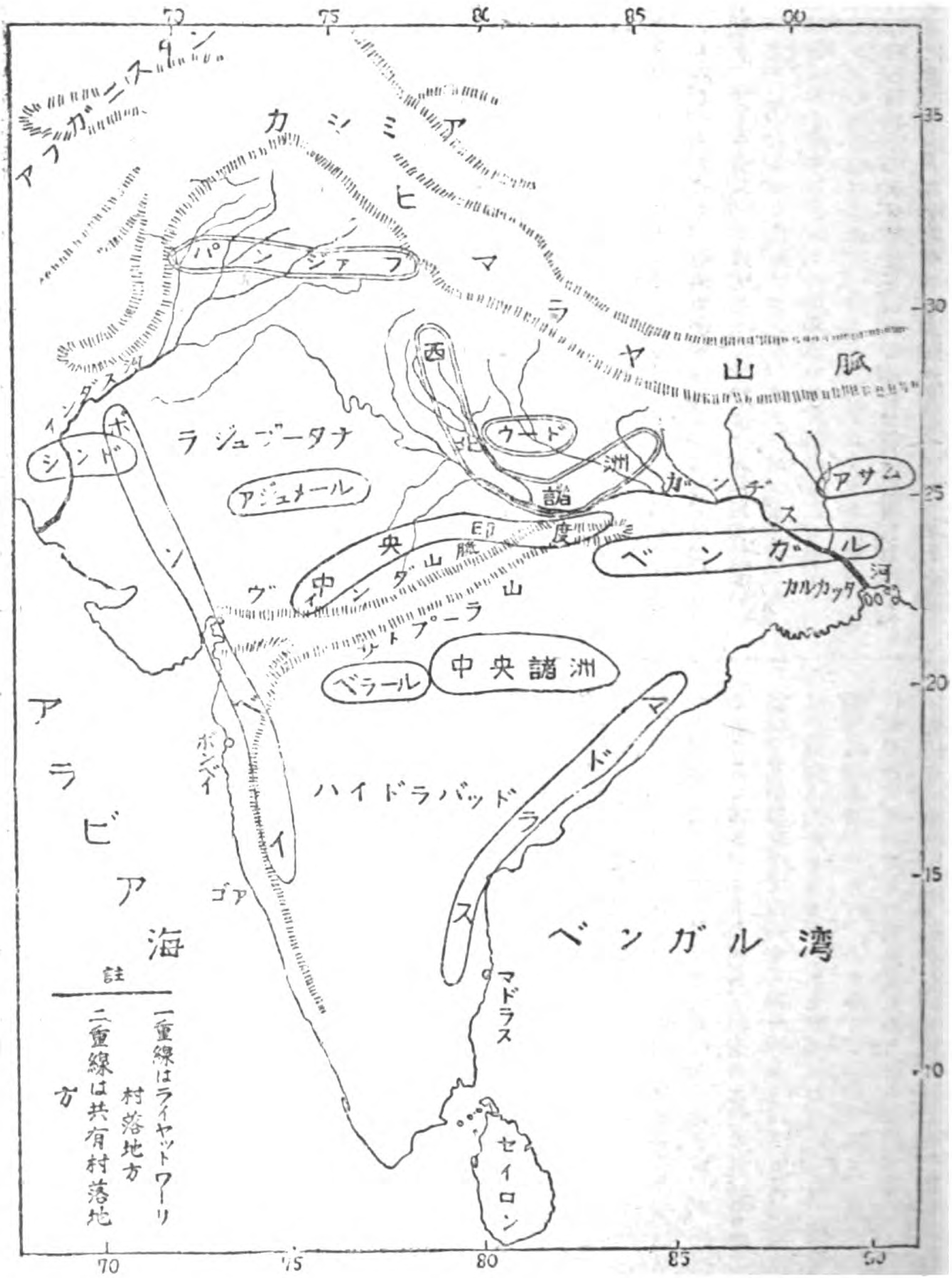
キャムプルは、他の點に於いて、如何に非難さるべきであらうとも、而して、彼の記實は、其後の廣汎にして周到な諸々の調査研究によつて、著しく、訂正されねばならなくなつたであらうとも、印度村落には、第一種單純卽ち個人所有村落と、第二種民主的卽ち共同村落との、畫然として區別されねばならぬ二大種別あることを、一八五二年――メーンに先つ二十年も前に――に於いて、既に、明かに、說いて居ることは、不滅の業績として、稱へられねばならぬと思ふ。然るに、折角、此のキャムプルを主要材料としたマルクスが、此一大事を、支離滅裂なる混同の裡に擲げ込んだと云ふことは、唯物史觀經濟史の出立點其もの丶解釋の上に、一大汚點を染めたものと云ふべきではあるまいか、殊に、其れが、あらゆる、共有制のプロトチープとしてのインド村落に關するものである丈け、其れ丈けより多く、汚點の影を濃くするものと思ふ。

バーデン・パウエルは、其通俗書たる『インドに於ける村落團體の起源及發達』(8) に於いては、大塚敎授の評された言、並びに、私が、對キャムプル評について言つたところを免れ得ないけれども、其最傑作(最大著ではない)、とも云ふ可き――再び大塚敎授の言を藉れば、『村落團體に關する材料を抽出し、系統を立てたるものにして、著者は、尙ほ材料の寫眞を以て滿足するも、其內に鋭き觀察あるを看取し得可し』前掲書一五八葉――『印度村落團體』The Indian Village Community London 1896.(9) に於いて、印度村落の二大種別について、極めて、明晰に記述してゐる。其れによれば共有制度を有する村落と、然らざる村落――バ氏は、之れをライヤットワーリ村落と總稱す――との、全印度に亘る分布の狀は左の如くであると云ふ。同書八頁

共有村落		
所在州	面積 平方哩	一平方哩平均人口
パンジアップ	一一〇、六六七	一八八
西北諸州	八五、三八六	四二一
ウード	二四、二一七	五二三
合計	二二八、一七〇	

ライヤットワーリ村落		
所在州	面積 平方哩	一平方哩平均人口
ベルガル	一五一、五四三	四七一
ボムベー	七七、二七五	二〇七
シンド	四七、七八九	一一七
マドラス	一四一、一八九	二五六
アジマー	二、七一一	二〇〇
コオーグ	一、五八三	一〇九
中央諸州	八六、五〇一	一三五
ベラーア	一七、七一八	一六五
アサム	四九、〇〇四	一一二
合計	五七五、三一三	

印度村落二大種別分布圖



右によれば、共有村落は、面積から云へば、全印度の二割七分五厘弱、然らざる個人所有村落は、七割二分五厘を占めてゐるのである。今、ハ氏に從つて、右兩種村落分布の實狀を、一目瞭然たらしむ可く、甚だ粗末な地圖を作つて、茲に添へて置く。（前頁にあり。）

（終）

私の吟味は、續いて、キャムブルも亦た、單なる事實の客觀的觀察者たるのみでなく、其の村落共有制に關する根本思想は、ケムブルの『英國に於けるサキソン民族』に胚胎し、而して、ケムブルはまた、ドイツの法制史、經濟史の研究者に負ふところ尠からざるもので、其中に、マルクスによつて、嘲笑せられてゐる浪漫派史家ユストス・メーザーも算せらるべく、更らに、ジーベルは、最も有力なものであることを述べ、共有制に關する思想は、塞翁の馬の如く、廻り廻つて盡きず絶えざる川線を有するものなることを示し、マルクスに獨創的なるが如きところのものは、實は、繰返し〳〵言ひ傳られた一の傳統的思想であることをあげて、マルクスの『アジア的』『インド的』と云ふところのもの、本體の何物であるかを明かにすることを勉め、つゞいて、前段の附記に櫛田民藏君に對して豫約して置いた唯物的ヂアレクチックに於けるマルクス・エンゲルスの異同論を、やゝ詳しく吟味して、階級鬪爭理論と原始共有制史觀との根本的枘鑿を、少しく立入つて考究して、此小論文の前段を終り、つゞいて、主としてゲルマン民族について、ストラボン、カイザー、タキトス解釋に入り、傍らケルト民族其他の共有制のことを考へ、更らに、ロシアの共有制に進んで、マルクスのザスリッチに與へた書簡から吟味を初めて　ロシア共有制のことを、若干記述し、終りに、ロシア共有制に對するマルクスの態度の首尾一貫せざることを明かにして、唯物史觀の共有制に關する立場全體を吟味するの土臺を作り、かくて、此小論文の初に返りて、唯物史觀ヂアレクチックに於ける共有制史觀の意義を、全體的に吟味し、ブルヂオア社會の終局、其後に於ける共産社會に關する唯物史觀の考へ方を經濟史的に觀察して、此小論文を結ぶのである。

ところが、恰かも、本號掲載の原稿を校訂しつゝある際、恩師ブレンタノ先生から、其新著『英國經濟史』第一第二兩卷の惠送に接した。先生の此近業に於ける立場は、私が、此小論文の初めに述べて置いたところの、其の昔私が全然信服してゐた共有制を普遍出立點とするところの説を嚴守せられ、本位田教授が綿密に紹介せられた英國のヴヰノグラドフ先生と、大體に於いて、全く一致するのである。本年八十三歳の頽齡を以て、十數年來の眼疾と鬪ひつゝ、全四冊より成る此大著作を完成されたことは、實に人事を絶する如き業績と云はねばならぬ。殊に、其昔し教へられたことを、更らにより綿密により鮮明に再び教られ、且つ又、一昨年先生の左右に侍すること旬日、此大著の進行の狀を親しく見ることを得た私としては、實に限りなき感慨を催さゞるを得ぬのである。然るに、私の此小論文は、多くの點に於いて、先生の此著に於ける立場に背くものであつて、師説に對して、弓を番へるが如くなるは、私の忸怩に堪へざるところである。さりながら、學問の天地には、師もなく弟もなし。私は、私の今日までに研究し得た結果を述ぶるに於いて、其の苦痛は、如何に大なりとも、これを甘受せねばならぬ。唯私は、先生の新刊に接して、更らに、より多く、私の吟味を、愼重に、周到に進行せしむ可き學問上の義務を荷ふことを痛感する。

然るに、『改造』誌上掲載の回を重ぬること、既に五に及びて、私

の吟味は、未だ漸く央に近づかんとしつゝあるに過ぎない。今後更らに幾たびか號を重ぬることは、讀者の倦厭を來し、其結果、改造社に及ぼす迷惑は、益々增加するに相違ない。仍て、山本氏とも協議の上、本誌上の連揭は、本號を以て終とし、改めて、全篇を一括して、單行本として公表することとした。萬ケ一未だ倦厭を感ぜられざる讀者ありとせば、其方々に對しては、甚だ相濟まざる始末ではあるが、右單行本の刊行は、餘り遠からざる將來に期し得るかと思ふが故に、これを以て、宥恕せられんことを、切に御願して置く次第である。(一・八・一・)

引用參考書 (重出を含む)

1) George Campbell (Bengal Civil Service),
Modern India: a Sketch of the System of Civil Government. To which is prefixed, some Account of the Natives and Native Institutions. London 1852.
2) Systems of Land Tenure in various Countries. A series of essays published under the sanction of the Cobden Club. Edited by J. W. Probyn. New edition, revised and corrected. (1881) London, Paris & New York. pp. 213-289. "The Tenure of Land in India". by Sir George Campbell, K. C. S., M. P. Chief Commissioner of the Central Provinces of India.
3) Fifth Report of the Select Committee on the Affairs of India. 1812. Madras Reprint 1883.
4) Elphinstone (The Hon. Mountstuart),
History of India. 6. E. London 1874.
5) Baden-Powell, B. H., F. R. S., M. R. A. S. Late of the Bengal Civil Service, and one of the Judges of the Chief Court of the Panjab.
The Land-Systems of British India, being a Manual of the Land-Tenures and of the Systems of Land-Revenue Administration prevalent in the several Provinces, With Maps. 3 Vols. Oxford 1892.
6) ——— The Indian Village Community examined with reference to the physical, ethnographic, and historical conditions of the Provinces; chiefly on the basis of the Revenue-Settlement Records and District Manuals. London 1896.
7) ———, A Short Account of the Land Revenue and its Administration in British India; with a Sketch of the Land Tenures. With Maps. 2. E. 1907. Revised by Sir Thomas Holderness, K. C. S. I. With an Appendix (December, 1912). Oxford 1913.
8) ———, The Origin and Growth of Village Communities in India. London 1899.
9) Sir Henry Sumner Maine, K. C. S. I, LLD., F. R. S., Foreign Associate Member of the Institute of France,
Ancient Law. Its connection with the early history of Society and its relation to Modern Ideas. London I. E. 1861. 3. E. 1866. 10. E. 1885. Cheap Ed. upon the 10. 1905.
10) ———, Village Communities in the East and West. Six lectures delivered at Oxford. London. I. E. 1871. 3. & en-

larged Ed. 1876. 7. Ed. 1895.

11) ——, Lectures on the Early History of Institutions. London 1875.

前號分正誤表

頁	行	誤	正
二九—下段	三	氏稿本）	氏（稿本）
〃	一一	三四 三六頁	三四—三六頁
三一—上段	二—三	踏	跡
三一—下段	一六	魔睡劑	痲醉劑
三五—下段	二〇	燒點	焦點
三八—上段	一二	既に己に	既に已に
三九—上段	二〇	M rxismus	Marxismus
三九—下段	一一	Bodenls-	Bodenbes-
〃	一四	ib	über
〃	一五	Persnn	Personen
三九—下段	一六	Drfe	Dörfe
〃	〃	Wirkungsler ich	Wirkungsbereich
四一—下段	三	Contitute··esablish-	Constitute est ablish-
四三—上段	六—七	サー・ヘンリーサムナ	サー・ヘンリー・サムナ
		ー	ー
〃 下段	一九	of and	of land
四四—上段	七	Zemindars	Zemindars,
〃	一〇	Sinda	[illegible]
〃 下段	二	no prietary	no proprietary
〃	八	usage	usage,
〃	一七	hands	lands
四五—上段	一七	indnstryno	industry no
〃	九	nllotted	allotted
四七—下段	九	缺き一を	缺き一本を

八月五日追記。北海道大野信三氏と云ふ未見の先輩から、リアザノフは誤りで、リヤザノフとせねばならぬとて、露語の綴方РЯЗАНОВを示された。其綴方は、私の全く知らぬところであつた。私の見た諸本では、此名の拉丁綴は、左の如く Rjasanow, Rjasanoff, Rjazanov, Riazanov と區々になつてゐる。

1) Marx-Engels Archiv. Bd. I Bibliographie. IX. Der litterarische Nachlass von Marx. S. 401. 206. 27. 300. D. Rjasanow.

2) Unter dem Banner des Marxismus. Jg. I. 1925. S. 184. D. Rjasanow. S. 378. D. Rjasanoff.

3) Marx-Engels Archiv. Bd. I S. 314. D. Rjazanov.

4) Karl Marx and Friedrich Engels. 1927. D. Riazanov.

今、大野氏の原綴方を見れば、其れは明かに、リヤザノフを發音すべきである。茲に謹で同氏に謝し、私の誤讀を訂正して置く。

肺結核全日本を包圍す

結核の蔓延に就て

醫學博士　遠山椿吉

酒毒、梅毒と共に人類の三大厄難と唱へらるゝ結核が我邦に何の樣に蔓延しつゝあるかを見るとき誠に驚倒に値ひする程大變であるのを悲む。明治三十二年統計の稍々整頓せる以前の事實は不明ではあるが、我邦の結核は西歐諸邦の夫れの樣に酷いものでなかつた事が推定せられる。西歐諸邦の同病は今距三四十年の頃は人口壹萬に對し結核死亡者は約三十 甚しきは四十近くを算した時代もあつた。之に反して我邦の明治維新初年頃 同病 死數は極めて少く人口壹萬中約八・九位しかなかつた事實が推定される。然るに爾來人口增多、社會複雜等健康生活惡化の原因益々加はるに拘らず、衞生の知識及保健の設備は之に伴はず、徒らに急性傳染病（コレラ、ペスト等）に追ひ廻はされて居る內に、結核死の數は年々鰻登りに增加し來て、明治三十二年肺結核死者が一二・六となり、同四十年には十五・四となり、更に大正七年には一七・八といふ驚くべき高率となつて來た、此對一萬死亡率は他各方面よりの觀察標準となるのであるから、讀者は先づ此數字を記憶せられたい。

左に先づ明治四十一年以來大正十三年に亘る十七年間の肺及其他の結核死亡實數（第一表）を揭げて結核が如何に我邦に瀰蔓しつゝあるかを示さん。

第一表　全國結核死亡實數　（年別）

年次／別	肺結核	結核性腦膜炎死亡	腸結核死亡	其他ノ臟器結核死亡	計
明治 41	76.589	6.103	14.675	1.504	98.871
42	82.623	6.394	10.240	14.365	113.622
43	82.652	6.158	9.786	14.661	113.207
44	80.766	6.242	19.014	4.700	110.922
明治45 大正1	82.048	6.063	19.118	6.962	114.197
2	80.233	5.983	17.528	6.659	110.753

3	81.414	6.481	18.607	6.839	113.341
4	83.254	6.519	19.137	7.063	115.913
5	83.633	6.923	20.873	7.380	121.809
6	87.952	6.814	22.679	7.342	124.807
7	99.215	7.217	26.623	7.692	130.747
8	93.117	7.335	25.323	6.79.	132.565
9	87.102	6.906	24.508	6.649	125.165
10	82.903	6.88	21.200	6.728	120.719
11	85.515	6.956	26.124	6.911	125.506
12	81.547	5.348	31.321	25.530	143.746
13	79.410	5.320	29.499	23.750	137.979

此實數丈けで人口の増加と對比しなければ蔓延の眞相が判らない、仍て更に同十七年間人口毎壹萬に對する肺結核の死亡率（第二表）を掲げる。

第二表　全國結核死亡率

年次＼別		人口萬＝付全結核死亡	人口萬＝付肺結核死亡	年次＼別		人口萬＝付全結核死亡	人口萬＝付肺結核死亡
明治	41	20.0	15.5	大正	5	12.1	15.7
	42	22.0	16.6		6	22.2	15.7
	43	22.4	16.4		7	25.3	17.8
	44	21.5	15.7		8	23.6	16.6
大正	1	21.0	15.7		9	22.4	15.6
	2	21.2	15.		10	21.3	14.8
	3	21.3	15.2		11	21.2	14.8
	4	21.3	15.3		12	20.2	13.9
					13	19.3	13.4

之を以て見れば逐年累加の趨勢で此も減退の兆を見ない。結核は都會地と農村に依て蔓延の度が著く違ひ、又職業に依り、男女に依り、老少に依ても一樣でない、此等の點に就て點檢を試みる

都　鄙

都會地に於ては農村地方に比して結核病の多かるべきは何人も直感的に想像する所なるが、實際統計的に人口五萬以上の地方と都市夫れ以下の地方町村との總結核死亡率を對比すれば都市に於ては平均人口一萬に付き肺結核死者二七、二九で前項全國平均の數より如何に高きかが伺はれる更に邦内六大都市の全結核及肺結核の死亡率を掲すれば次表（第三表）の如くである。

第三表　六大都市に於ける結核死亡率

都市名	全結核死亡	人口一萬＝付	肺結核死亡	人口一萬＝付
東京	4 7 3	24.58	3.241	16.90
京都	1.876	27.55	1.225	17.99
大阪	3.243	22.65	2.307	16.12
神戸	1.833	25.21	1.349	18.55
名古屋	1,597	26.72	1.139	16.89
横濱	808	20.73	562	14.4

即ち第一表に示す通り、全國全結核死亡率最高二五、三なるに六大

都市は最高二七、五五なるを見ても都市結核の趨勢を窺ることが出來る。

結核の都會に多いのは久く認められた事實で、一定面積地上に住居人頭の數に正比して結核の累加することも統計的に證明せられて居る。蓋し都會地に特有なる左の事項が主なる因子をなすや疑ない。

一、人家稠密の結果空氣の汚染
二、同上日光の不足(地下室、裏長屋の如き)
三、室内執務者が多い
四、運動不足者が多い
五、精神過勞者が多い

都市改善の必要は此方面よりも明白である、

職業

職業に依り結核死亡に著しい差がある、即ち統計局分類の二十六種職業の總死亡千に就き肺結核死亡率は次の(第四表)如くである。

第四表 肺結核死亡職業別
(明治三十九年及四十年平均)
(總死亡千ニ對スル數)

銅版石版木版等ノ彫刻印刷及寫眞業	439.3
教育ニ關スル業	323.1
紡績·織物·編物等ノ製造業	304.7
被服及身ノ廻リ品製造洗濯湯附斗業	265.3
其他ノ工業	258.0
機械器具製造業	238.3
金屬ニ關スル製造業	226.7
染物其ノ他ノ雜品製造業	213.8
紙·皮革·羽毛·骨等ニ關スル製造業	210.9
土石類ノ採取及製造業	196.8
商業	181.8
公務及自由業(現役陸軍及海軍、教育ニ關スル業ヲ除ク)	191.6
化學的製品及類似品製造業	174.7
飲食料品及嗜好品製造業	171.0
現役陸軍及海軍	169.3
交通業(人力車挽及乘用馬車業、船舶運輸業ヲ除ク)	166.3
木竹類ニ關スル製造業	155.9
其他ノ有業者有業者ニシテ職業ノ申告詳カナラサルモノ	153.5
土木建築業	151.0
鑛業及冶金業(石炭及石油ノ採取及精製業ヲ除ク)	146.4
人力車挽及乘用馬車業	145.6
無職業及職業ヲ申告セザル者	139.4
船舶運輸業	116.1
漁業及製鹽業	90.3
石炭及石油ノ採取及精製業	89.4
農業·牧畜·養蠶等並林業及狩獵	86.9

此統計を見るに死亡率の最も大なるは彫刻印刷及寫眞業者の一團で四三九・三といふので死者十人中四人以上は結核死であるのを見ては何人も先づ肌を寒くするであらう。之に次いで多いのは教育業者と紡糸業者であり此反對側で最も少きは農、牧、蠶業、狩獵業者で、之に次で少きは石炭、油採取、漁業、船舶業者であることに注意されたい。

結核の職業的関係を大体より観察すれば開放生活即ち屋外に於て執務するものと、終始室内に於てするものと原因的に大差あるものと思はれる農牧者に少く印刷業者に多きが如き之である。又精神を労する業と否らずして単に筋肉を労するものとは結核に影響を来して罹病の差異を結果するものと見へる教育従事者…学校教員……に患者多きは精神労役の外に社会的待遇一般に薄く為に給養豊ならず栄養従つて充実せざるの結果なりと言はれる、吾人の後継者たる学童多数の前に立て教鞭を執らるゝ業者に斯の如く罹病者の多いのはやがて第二国民に同病を播種する一因をなすと思へば転た寒心に堪へない。近年普通教職者罹病時の支給法實行せらるゝも未だ此弊を救ふに至らざる様である、又綿絲業者中殊に注意すべきは繊維工場の女工等に於ては室内作業の為め完全なる日光空気の缺乏するばかりでなく、営養の不充分なるに加へて寄宿舎の設備と使用法不良にして所謂萬年床に、共用食器に、同人同食等が重ね〲結核傳播に動機を與へて恐るべき死亡の高率を作るに至らしめたものである、此女工等は罹病と同時に解雇せられて郷土に歸り、多くは無垢なりし村落に結核を傳播しつゝある事實を認むるに至つて悲惨の感なきを得ない、現今は工場法其他の監視幾分進歩したる観はあれども未だ中々に徹底の域には達しない。

二十六職業以外に注意すべきは兵卒なる一団である、兵卒は所謂壮丁で国民中より屈強の體格所有者を選抜したるものなるに、此一団に中中多数の結核を見るは稍意外の感がある、蓋し年齢関係が主なる因由をなすものなるべく、後の年齢の條下に論ずる。

男女

我邦に於ける男女の別が結核に罹る数に亦た等差の著しきものがある、而も其年令に関して常に一定の等差を示すは特に注目すべき事象である、即ち（第五表）五歳乃至十歳の頃よりソロ〱女子に結核が多くなり、十歳乃至十五歳に至て愈々男子を凌駕し、十五歳乃至二十歳にして其懸隔の極点に達し、此頃より男子に漸く数を加へて二十歳乃至二十五歳には男女殆んど対等となり、且つ男女総体結核死亡率の頂点は此の前後に在ることゝなる。

斯の如くにして結局総数に於て女子は十一、二、男子は九、六となり、男子一〇〇に対して女子一一六、六六で女子の結核死亡数は常に男子に優るのである。之を外国の例に観れば英国の男子一〇〇に対し女子の七九、八八独逸の男子一〇〇に対し女子の八一、二二にして常に女子に著く少きに我邦に於ては之に正反対なる現象を呈するを異とせざるを得ない、

我邦に於ける女子の結核死亡数が常に男子に優る因由は恐らく複雑せる事柄の綜合せる結果なるべきも左の数項は少くとも其要部を占めてゐることゝ信ずる。

一、女子を男子より賤しきものとし、社会が之を遇すること男子の如くならず従つて給養男子に及ばざること、
二、女子の習慣として深窓に潜むを良とし、外出して自然（日光、鮮気）に觸るゝこと男子に劣ること、
三、典雅、柔弱を良とし、活動を避け運動不足を来すこと、

年齢

年齢が結核罹病及死亡に関係することも亦た著明なるものである、

先づ性別年齢別死亡率の統計表を次に掲げる、

第五表 體性年齢別結核死亡率
(總死亡百ニ就キ結核死亡)
(明治四十三年乃至大正八年平均性年齢)

性 / 年齢	男	女	計
0——5	2.1	2.2	2.1
5——01	11.[illegible]	16.3	14.1
10——15	23.1	40.9	33.6
15——20	33.6	49.0	44.5
20——25	41.7	41.7	41.7
25——30	27.0	46.1	26.5
30——35	28.9	27.8	28.[illegible]
35——40	22.8	21.1	22.9
40——45	18.7	17.7	18.[illegible]
45——50	15.6	13.0	15.4
50——55	12.4	11.0	12.[illegible]
55——60	9.2	8.1	8.8
60——70	5.0	3.9	4.4
合計	9.6	11.[illegible]	10.4

表中に見る通り年齢、十歳乃至十五歳に至て俄然其數を増し次第に勢を加へて十五歳乃至二十歳にして其極に達し二十五歳乃至三十歳迄少しも衰退の兆なく總死亡の百中四十以上は現實に前途ある我青少年の二人若くは三人死亡すれば其一人は必ず結核死であることに想ひ至らば誰か其無慘なるに驚かざるものあらん、此事たる既に我國力の前途に如何に重大關係あるかを悟らねばならぬ。

以上略ぼ我邦の結核が如何に蔓延し如何に猖獗を逞ふしつゝあるかを叙述し了つたことゝ信ずる、於是吾人が考へねばならぬことは先進諸國では結核撲滅運動を開始してより最近三四十年間の努力の結果年々歳々其數無數を遞減し、獨逸にては今距四十年の頃までは人口一萬對結核死亡三三乃至三五を算へたのが一九一〇年に至ては一五に減じ實に昔時の半分以下に減じ、英國にても四十年前には三五以上ありしが、今は一〇一五と云ふ約三分の一に減じた、然るを我邦の現狀は如何、前掲統計に見る如く明治三十二年以來約三十年間少しも減退する所なきのみか却て逐年増加の趨勢を見るは國民の深き注視を乞はねばならぬ所である。

然らば我國家及國民は結核に對し全然盲目無智識で、些も關心の態度なく、豫防撲滅の國民的運動皆無なるか、如何。

我結核に對する豫防運動は近々二十年以内の事に屬す、明治三十七年政府は勅令を出して群集場所に唾壺の配置を命じたるを初めとし、大正三年結核療養所の法律を發布し、同八年に至り現行結核豫防法の制定を見た、一方民間に於ける同運動は明治四十一年ローベルトコッホ氏の來朝を機とし其際漸く大となり、四十二年に白十字會、大正二年に日本結核豫防協會創設せられ次で各地方に同種の協會續興し如今四十餘の團體を算ふるに至つた、約廿年間官民共に知識の宣傳に、豫防の施設に相當の努力を致せるは事實なれども、資力貧弱、規模渺小にして未だ以て極烈無比の結核軍に一撃を加ふるに至らざることは誠に遺憾の極である、予は今敢て資力貧弱規模渺小なりと云つた、近今先進諸國の豫防施設を望めば

イングランド及ウエールズに診療所四四二、療養所及病院一九八、收容患者數一三、三〇〇、

フランスに結核療養所病床數六、五〇〇
外來診療所 四五
小兒外科結核療院 五三(病床一一、〇〇〇)

獨逸に

結核療養所	一九〇（病床二〇、五〇〇）
兒童結核療養所	二、五〇七（病床一九、〇〇〇）
林間轉地所	一四八
林間學校	二一
結核專門病院及分院	三八五

北米合衆國に

結核外來診療所	八八八、
病院及療養所	七〇〇（病床六〇、〇〇〇）
林間學校	三、〇〇〇
結核豫防協會	一、二〇〇

である、强敵を滅すには之に應ずる丈けの武力を要するは勿論である、先進諸國が强敵結核を擊退したるは以上の如き有力なる設備と其大活動に由つたものであることは言ふ迄もない。然るに我邦の結核運動は其着手が彼等の國より後れたること約二三十年であるのみならず、豫防設備の中堅とも言ふべき療養所が法律に依て設置された左の數ヶ所に過ぎぬ。

第六表　日本結核療養所

名稱	大正十四年度豫算	收容定員	開所年月
東京市療養所	四四八、二二〇圓	八〇〇	大正　九年六月
京都市立宇田野療養所	九五、一三〇	一〇〇	同　九年二月
大阪市立根山療養所	二二〇、五二四	三五〇	同　六年九月
神戸市立屯田療養所	六、五〇〇	一〇〇	同　七年十月
横濱市療養院	六二、八五六	一〇〇	同　九年十一月
名古屋市立八事療養所	七二、五四〇	一〇〇	同　十一年四月
長崎市療養所	三三、四八二	六〇	同　十年三月
新潟市立有明療養所	四六、五一三	六〇	同　十三年三月
函館市療養所	四二、三八二	六〇	同　十四年七月

彼と此とを對比し來れば讀者に如何の感がある、國民は今後現狀に甘んじ晏如として惰眠を貪く可きや、結核蔓延の實況を叙述し了ツて敢て憂國の人士に訴ふ。

肺結核の原因と徵候

醫學博士　小池重

肺結核の原因

肺結核の原因は何物なりやと言へば、一種の細菌であること、今更何人も疑ふものはない。

其の細菌は今より實に四十五年前、則ち西暦千八百八十二年に獨逸國の一醫學者コッホ氏によりて發見せられた。當時コッホ氏は一田舍

醫師に過ぎなかつたが、其の後種々なる結核菌を發見せしことにより て、世界的の學者、世界的偉人の一人として尊敬せらるるに至つた。而して其の結核菌なるものは何處に存するかといふに、肺結核患者の喀出せる痰の中に含蓄せらるゝのである。吾人の肉眼にては到底之を其儘看取することは不可能なれど、或方法によりて其の細菌を染色し、顯微鏡下に於て、數百倍若くは千倍以上に擴大して、觀察するなれば、明に其の形狀、大小、多寡等を看取することが出來る。然らば肺結核患者の痰の中には數に於て何程の菌が存在するかと言ふに、痰の性質、病の輕重、檢査の巧拙などによりて、一概には言ひ離きも、ヘルレー氏の説によれば、進行せる結核患者の喀血せる一個の痰中には約三億有餘の結核菌ありといふ。實際吾人が日常病者の喀痰より、唯僅かに針孔大の極小部分を採りて、硝子板に塗抹し、乾燥し、染色して鏡下に檢するに、一視野毎に幾百となく、殆んど無數なる文字を以て言ひ現はす外なきまでに、多數なる菌を認むることあり。或はまた一視野毎に僅に數個、又は十數個の菌を算し得るに過ぎぬ場合もある。顯微鏡下にて檢出したる結核菌數の多寡によりて、其の痰を喀出せし病人の輕重を、批判すべき標準とはならざれども、それによりて病原病毒を他へ傳搬傳染せしむる危險率を云々する上に於ては、重大なる意義を有する。換言すれば痰中に結核菌を多數に有する人は、極小數に有する人よりも、周圍に對して傳染の機會を多く與ふることとなる。則ち結核の原因たる細菌によりて、他人に脅威を及ぼすこととなる。從て事實上肺結核に罹り居る人にても、全然無喀無痰なる狀態にある間は、他人に危險――傳染――を及ぼさぬ譯である。

また多少の痰を喀出することはあるも、之を反覆檢査して無菌なる狀態に終る間は、同じく他人に對する危險性は無きものと思ふべきである。病者にして其の痰のうちに菌はなくとも、若くは全く無痰なりとも、卽ち他人に對し危險なしとするも、一旦結核菌の侵入をうけたる以上は、己れ自身に取りて、何時如何なる場合に、結核の發病を惹起せぬと限らぬ、故に自己に對する危險は常に存するものと思はねばならぬ。

世界到る處、人類の棲息する處に結核の存することは、一般に學者の認むる處である。而して都市に多くして、田舍に少く、人口の稀薄なる處丈け、それ丈け結核の脅威を受くることの少なきことも亦周知の事實である。何故に結核はかくまでに廣く世界的に蔓延せるか、試に結核菌を保有する結核病者、又は結核菌保有者を觀察するに、彼等は自家庭内と言はず、往來と言はず、公園と言はず、校庭と言はず、彼等到る處に於て、病原含有の痰を喀出して平然たるものである。痰を手巾に附着せしめて悼まず、痰を手指に附着せしめて省みず、枕被衣袖、食物玩具、其他何物によらず、彼等の手に取り、口に入るゝものをして、總てを菌附着物、菌媒介物たらしめずんば止まず、加之居室それ自己をして、結核感染室たらしめ、不可視的菌を以て室内を汚染することとなる。若し夫れ汽船と言はず、汽車と言はず、劇場と言はず、席亭と言はず、彼等の出入にまかせ、咳嗽と共に病原たる菌を吹噓し散蔓せしめんには、彼等の到る處は總て之れ菌の存する處となる。由是觀之、交通機關の便なる丈け、人家人口の密なる丈け、結核菌存在の密度は濃厚なるものとなり、從て人類として此

の病症に感染する機會も亦頻繁となること知るを俟たずして、知るべきである。豈結核病の蔓延、結核病者の增加する故なしとせざらんや。

結核の病原菌は如何にして人體に侵入するか。學者の研究によれば、空氣を介して塵埃と共に入るもあり、食物を介して倶に入るもあり、道具玩具、古着古本等より指手を介して口腔より體內に侵入するもある。畢竟非衞生的なる結核患者より、健康なる非衞生的小兒大人に傳播するものである。世人の夙に知れる如く、小兒は尙ほ未だ無智なるが故に、水火も怖れず何物と云はず、手に入るものを以て直ちに口にする、則ち種々なる細菌毒物の附着すると否とを識別することなく、自ら口腔へ傳播せしむるものである。之を醫學的に觀察し推論すれば、一面に於ては病毒を自己に傳播すれど、他の一面に於ては之に因りて自然に免疫を受得することとなるべし。故に結核の原因たる黴菌は、吾人の到る處に存するも必ずしも怖るゝに足らぬこととなる。然らば結核は何時感染するかといふに、多くは乳兒時代より始まりて學齡兒童時代に於て、人類の九十幾%は體內に結核菌の侵入を受くるものと信ぜらる。而して結核病として發病するものもあり、侵入せるまゝにて發病の機會を待ちつゝあるもあり、全く發病するに至らずして其儘石灰變性の型となりて、自然に治癒に趣くもある。故に結核菌は侵入せられたりとて必ずしも結核病となるものにあらず、病菌の有する毒性の強弱にもより、侵入する菌數の多寡にもより、侵入せられたる人體の體質にもより、侵入當時若くは其れ以後に於ける精神並に肉體の困憊狀態の如何にもよりて、或ものは發病し、或ものは發病せず、則ち換言すれば、其の發病せざるものは、生來體質薄弱ならずして、常に強健なるか、侵入せる結核菌が數量に於て其の猛威を逞ふし得ざる程小數なるか、病原菌が毒性に於て極めて微弱なるか、抑も病菌の發芽蔓延すべき好機會を見出し得ざるによるならんか、これ何れも結核發病に與りて大いに力ある要件である。

如何なる人が肺結核に罹るか。統計の示す處によれば、如何なる人にても一度は結核菌の侵入を蒙むり居るものと信ぜらる、而して一定度の免疫を受くるものなりとす。この自然的に、不知不識受得したる免疫性の存する限り、且つ身體の抵抗力が旺盛なる限り、再び感染の機會に遭遇することありとするも、容易には罹病せざるものである。日常肺結例へば吾人呼吸器病を專門とする醫師の如きがそれである。核、或は特に恐るべき喉頭結核に接近し、時としては反射的に發來する咳嗽のために、患者より直接に喀沫を吹嘘せらるゝ程、危險千萬なる機會に接しつゝあるも、未だ嘗て肺結核病の徵候さへ自覺せざるものあり。

余の如きは二十餘年來肺結核病者と相往來し、相接近し、相談話しつゝあるも、內科的疾患のため、今日まで未だ一週日間と休業臥床せしことなし。假令自己身體內に、已に結核菌の侵入を受けおることならんとは思へども、未だ尙ほ罹病するに至らざるは、畢竟罹病すべき否發病すべき要件の具備せざるに因るものならんか。

何をか發病すべき要件といふか。これを醫學的術語を以ていふならば、原因的動機若くは發病素因がそれである。大氣中結核菌の存する密度は、結核患者の周圍病室を以て最も濃厚なりとす、從て患者と

同居し、寢食を倶にすることは、感染の機會多く、發病の誘因を增す、これ其の一である。生來頑健なるものと雖も神身を過勞するときは疲勞を感ず、疲勞は精力消耗の過度を示すものなり、內憂外患に堪へ難き境地にあるなり、換言すれば外物に對する抵抗力の減耗せる時なり、從て悪鬼病魔の襲來を受け易くして防ぎ難し、已に浸入せる結核菌、若くは更らに再び浸入せんとせる結核菌の乘ずべきの機會である。強健なる者尙ほ且ッ然り、況んや生來蒲柳薄弱なる者に於てをや、これ其の二である、敢て疲勞を感ずる程の過勞と言はざるまでも、單なる疾病、例へば寒冒の如きにても、自己には何等苦痛を覺ゆるに至らざるも、身體の一部分、則ち鼻腔にあれ、咽喉にあれ、氣管にあれ、局處的に抵抗力の薄弱なる部位を生ずるものである。これ病魔病菌の浸入すべき新たなる門戶にあらずして何ぞ。風邪寒冒にして然り、小兒に於ける痲疹、百日咳、大人に於ける肺炎、チフス、其の他熱性病後の衰弱せる狀態にありては、病前と何れぞや、これ原因的動機の三である。獨り病的狀況の場合のみにあらず、生理的變調を來たす場合に於ても亦病魔の襲ふ機會となる、彼の結婚によりて精神上及び肉體上に及ぼす影響、妊娠の影響、分娩の影響、更に始めて父母となりたる喜怒哀樂の精神的强調せる影響は、これを孤獨生活に比するに天地雲泥の相違にして、或る意味よりいふ時は、全然極端より極端に轉移する人生々活に入るものである。從て客觀的に忖度し能はざる煩悶、悲哀、憂愁、憤怨、戀恨、歡娛、婬逸、其の他種々なる神的肉的有形無形の意味に於て度を過ぐるに至る場合は、總てこれ發病誘因にして其の四である。要するに結核の原因は、微生物たる細菌にして、到る處に存在し、雰圍氣の濃厚なるに從つて、感染の機會を增し、個人的衞生思想の發達、社會的衞生設備の完全をまちて、始めて病原を遠ざけ、發病を免るに至るべきである。蓋し時代の推移と教育の發展とに因らざれば、容易に結核症を減滅せしむること能はざるべし。從つて差當り個人的に神身の積極的强健法を圖り、同時に消極的に過勞放逸を戒め、病魔の襲來を防ぎ、病因の發芽を絕たんことに努めざるべからず、則ち發病の動機を自ら作らざるにあるなり。

發病の動機は幼時少年青年に多くして、壯年老境に入る從つて減少する。蓋し幼時は種々なる疾病にかゝり易くして衰弱に陷り易し、少年青年は寒冒にかゝるも、年少氣銳の勢を以て、苦痛なき限り休業せず、靜養せず、況んや服藥就褥をや、偶々羸瘦疲勞、形容枯槁して初めて醫療を受くるに至る、故に往々にして病已に膏肓に入り、氣の毒に堪へざる場合がある。壯年老年に至る時は、自愛自重の念、保健延命の慾、自發的に起り、或は病を未萠に防がんとし、或は禍を轉じて福とせんとする、從て或は健康診斷をうけんとし、或は疾病豫防の道を講せんとす、これ衞生思想の然らしむるもの、發病動機の自ら減少する所以である。

肺結核の徵候

肺結核の徵候とは如何なるものなりや。これは初期の結核症と中等症と重症とによりて種々樣々である。また肺結核と同時に肋膜炎とか喉頭炎とか腎臟炎とか、其の他種々なる疾病の併發することによつて、徵候も亦千差萬別である。或は單なる感冒の如く、或は神經衰弱症の

如く、或は胃腸症の如く。或は心臟病の如く、或は喘息の如く、或は又氣管枝カタルの如くでもある。

又急性に發病する場合と、慢性に發病する場合とによつて、初發症狀は一樣でない。先づ急性に發病する場合を考ふるに多くは血痰若くは喀血である。則ち自ら健全を以て任じつゝ活動するにも拘らず、突然咳嗽と共に血症を喀出するか、或は劇務に鞅掌し、數日來不眠不休の裡に活躍せる後、俄然咳嗽と共に喀血するか、或は一時的競爭的過勞の後の競技的激動の後、或は不時の打撲外傷の爲めに喀血し、發病することあり。好適の一例として、こゝに述べんに、嘗て何等の疾病にかゝりしことなき者が或日公衆浴場にて、三助に背部を洗滌せしめ、肩胛部を按摩せしめ、最後に三助の兩拳にて強く一擊を受けたるに、之が爲めに喀血を來たし、遂に數月に渉りて病褥の人となれることあり、シカモ此例は單なる血管の破裂にあらずして、喀痰の檢査によりて多數の結核菌を認めたるより、觀察するに、肺結核の已に或程度まで進行し潜在せる病竈が、偶々強激なる打撲によりて、破潰せられたるものである。モシ夫れ此の打撲なかりせば、發病せずして止みたらんも未だ知るべからず、戒むべきことなり。

次に慢性發病する場合を考へんに、普通一般の勞力によりて來たる疲勞感、認むべき理由なくして來たる羸瘦、貧血、肩凝、坂路の步行によつて起り易き呼吸促迫、心動亢進、寒冒後に持續する咳嗽喀痰、胸內違和、微熱若くは日晡潮熱(午後四時頃の發熱)、食慾不進、睡眠不足、其の他倦怠、盜汗、漸進的徐々に起る聲音嘶嗄、時としては胸痛感、背痛感等の症狀が、それである。而して此等の一症狀が單獨に發することもあり、或は二三の諸症狀が同時に起ることもある。

然り而して特に勉勵努力せしこともなく、また連夜不眠、連日不息を以て業務に從事せしこともなきに、近來殊更に疲勞を感じ、羸瘦を覺ゆる如き場合、若くは何時とはなしに、漸々顏面並に全身の皮膚蒼白となり、貧血を來たし、事に當りて容易く倦怠を覺え、從來の些少事にも忽ち肩癖を覺ゆる如き場合、或は暴飲暴食もせず、腹痛下痢もなきに自ら食慾不進となり、美肴佳餐を看るも肯て箸を附けんと欲せず、却て嫌惡の念さへ起ることあり、從て營養狀態の減衰するに至るを見る場合等の如き注意せざるべからず。

普通の感冒は、鼻カタルを以て始まるか、或は咽頭カタルを以て起り、先づ咳嗽を發し、尋て痰を喀出するに至るものなり、何れにしても、靜養宜しきを得れば、多くは一二週日にして、輕快又は全快するものである。もし靜養宜しきを得ざる場合は、三四週間を要し、慢性上氣道カタル、又は慢性氣管枝カタルとして經過する、此際に於ける衞生的生活と非衞生的生活とは、豫後をして重大化せしむるに至るものであ、即ち無理押し、痩我慢、不攝生、不養生等は、結核菌の再感染又は惡化を招來し、咳嗽は頻發するに至り、喀痰は濃厚となり、時には血線痰となり、熱候は弛張して、午前中は三十七度以下に止まり、午後は三十七八度に昇る、所謂日晡潮熱となりて持續し、結核熱の特徵を呈するに至るのである。

呼吸促迫なる症狀は、肺結核のみに限らず、喘息にも、心臟病にも、脚氣にも、肋膜炎にも、貧血症にも現はるゝものである。肺結核に起る場合は、可なり進行せる時か、或は他の疾病を併發せるときか或は初期に

しても結核病竈の發生せる部位の如何に關するものである、而して呼吸促迫の起るは、步行の調子と距離の長短とに因るが故に、自己の生の狀態に鑑みて、比較考察し容易に之を覺ゆる場合は注意に値する。

心悸亢進は結核症の初期に當りて、屢々發來する一症狀である、特に神經質の人にて肺癆性胸廓を有するものに於て然りである。しかし此症狀のみを以て結核の初期と斷することは出來ぬ、何となれば其の他の疾患にあつても亦發來する症狀なればなり。

胸痛は主として肋膜炎のために起る症狀である、肋膜炎と名附くる程にあらざるも、多少肋膜にまで波及せる刺戟のために、胸痛感を訴ふることは、肺結核に屢々有る處である。否肺結核にして肋膜炎を續發するか、或は肋膜炎の經過中に肺結核の發病するもの、甚だ多きが故に、胸痛又は胸痛感なる症狀は、極めて重要なる徵候の一つである。

背痛も亦結核初期の症狀として往々患者の訴ふる處である。しかし神經痛、若くは筋肉ロイマチス、又は脊椎カリエスの疼痛と混同せらるゝこともある。肺結核の場合には、多く肺の根部、即ち肺門部と稱する處に異常あるか、或は同時に肋膜に炎衝の多少波及せる場合なるを思はしむ。

聲音の斷嗄は、喉頭内の聲帶に異常を來たしたる場合に起る。肺結核に併發する喉頭の變化は極めて、徐々に發生する。偶然なる場合として寒冒後、引き續きて斷嗄強度となり結核性に變ずることあり、また聲帶には異常なく、從つて音聲は尋常なるも、喉頭の外部に病變を發生し、飲食物を嚥下する際に、腫脹の感、若くは疼痛、又は夜間乾燥の感を覺ゆるに至ることがある。

以上述べたる諸症狀は、何れも皆主觀的のものなるが故に、其の一症狀を以て直に肺結核と診斷し能はぬのである。此等の症狀と共に、客觀的所見、即ち醫師が診査を遂げ、主觀的症狀に一致すべき病變を客觀的に認めたる場合に、始めて意義あるものとなる。例へば急に喀血したりとて、それが果して肺臟より、出血せしものなりや、或は肺臟以外より出血せしものなりや。出血したる徵候を肺臟に認めたりとするも、それが果して結核性病變なりや、將た結核性以外の梅毒性なりや否や、或は結核性にもあらず、又梅毒性にもあらず、それ以外の性質のものなりや、客觀的診察に俟たざるべからず。羸瘦にしても亦然り、貧血にしても亦然り、呼吸促進にしても亦然りである。肺に於ける客觀的病變、肺以外に於ける客觀的診査の結果を綜合し、比較し、鑑別するにあらざれば、肺結核症なることを診定し難し。世間には三月も半歲も寒冒と稱して服藥し、慢性氣管枝カタールと稱して、咳痰を頻發するものがある、病者自ら名附くる病名にして主觀的症狀より推察せしに外ならず、而して賣藥や家傳藥によりて、之を治せんとする、焉ぞ知らん、其寒冒、氣管枝カタールの後方裏面に肺結核症の潜在潜伏することを。これ客觀的徵候―醫學的には他覺的徵候若くは所見または理學的變化―に重きをおかざるによる。

何をか他覺的所見といふや、望診、觸診、打診、聽診、エツキス線診査、血液及排泄物檢査の結果がそれである。これ等他覺的の診査方法を遂げて始めて肺結核症なることを知り、同時に該症の輕症、中等症、重症の何れなるかをも識るに至るのである。故に肺結核の徵候としては、ムシロ他覺的徵候に重きをおかねばならぬのである。

肺結核の豫後

醫學博士　永井秀太

肺結核の豫後を總稱して醫者は良と云ひ、素人は不良と信じ居る。其理由とする處、前者は元來結核病なるものは、治療し得可き傾向を有する疾病なるが故に、適當の時期に完全の治療を施せば、必ず全癒の効を奏す可き性質のものたりと云ひ、後者は世間幾多の肺病患者中、能く幾人か全癒の勝を制し得る、實に例外的乃至奇蹟的の事例に屬する小數者に過ぎず、故に醫者が何と謂ふとも、肺結核の豫後は事實上不良なりと。兩者共に一面の理屈ありと雖も、其主張甚だ曖昧にして。人若し豫後の良を固持する醫師に對し、或る結核患者の全治を保證の下に、其加療依賴を試み見よ、忽ちにして醫の面上甚だしき難色の漲るを見ん。亦翻って不良を堅く信ずる素人に試みに問へ、何故に豫後の不良と極まり居る患者の爲めに、貴重の財と時を費して、醫の門を訪ふやと、蓋し苦笑一番、必ず辯答に苦むものある可し。

要するに良と云ひ、不良と云ひ、是等の言議は、未だ肺結核なる主體の何物たるやを究明せずして、徒らに架空臺上に無意義の比較論議を鬪わす者に過ぎず。誤まれるの甚だしき者と云ふ可きものなり。

病勢病型による豫後の判別

顧れば肺結核ほど其病態に多種多型の異容を呈する疾病は、他に其比類を見ずと稱して可なる可きものなり、即ち其發病に際しては、或は腸窒扶斯、肺炎を疑はざる可からざる程度に急劇重大症候を以て起るもの、存在する一方に、或は胃病の如く、妊娠の如く、神經衰弱の如く、甚だ輕微の症候を以て初發するものも亦存し、其經過に於ても、僅かに數十日を出でずして死に歸する者あると同時に、數年數十年を費して猶ほ治に就かず、死に轉せず、徒らに生死の間に遲徊彷徨する者稀れならざるは事實上の存在なり。

從って肺結核の豫後判定に際し、概括的に其良不良を斷ずる如きは絕對に許されざる事由に屬し、夫れ夫れ各個の症例に就て、症を案し、候を驗して、始めて能く其豫後を云々することを得るものなり。

肺結核を病勢上大別して、急性症慢性症とす、此の區別たるや、唯だに經過に要する時間的差異のみに依るものにあらずして、熱候變弱の具合等總ての病症を綜合して、始めて別を立つるものなるも、大體に健康なる人が發病後僅かに半年以内に致死する者は、急性肺結核と考へ、其以上に亘る者を慢性症と見做すを普通の見方とす、但し無論急性と慢性の間には、無數の階級ありて、亞急性とか、比較的慢性とかの用語あり。其區分決して明析なるものにあらず。

急性肺結核、豫後不良、其病狀多くは所謂肺病としては、素人に受取り離きものあり、初期に於ては時に腸窒扶斯、肺炎、甚だしきは腦膜炎等と、誤診せられ得る程度に急劇の症狀を發揮し、頑固にして百方治法に反應せざる、稽留型或は弛張型の高熱あり、衰弱日に加はり、恰も急性熱性病の如き經過の下に、數旬を費し、後ち漸々にして小許の咳嗽咯痰を始むるに到り、次で胸部肺臟の變化漸次顯現し來り、玆に始めて診斷の明瞭を得る如きを、模範型とす。追日諸症惡化するのみにして、些の緩解無く、慘憺たる狀態の後に早く致死するを常例とす、但し急性結核とは總稱名稱にして、更に其下に多數の名別あり。

奔馬結核、豫後不良、急性結核中の最も急劇なる經過を遂ぐるものを云ふ、蓋し白駒の隙を過ぐるが如きを、意味して此の名稱を付したるものなる可し。

粟粒結核或は全身結核、豫後不良、粟粒を撒布したるが如き狀態に於て、肺臟を始め全身の諸臟に、一時に結核病竈を發生し來るものにして、屢々其初期に於て腸窒扶斯と誤診せられ、全然更生の希望なき最も惡性の結核型なり。

亞急性結核、豫後不良、多くの青年男女を襲ひ、重病經過後例へば肺炎、猩紅熱、痲疹等に續發的に來り、或は分娩後、或は生活法の急變等が原因となることあり、始め高度の貧血を起し、所謂顏面蒼白、皮膚毛髮光輝を失し、最初微熱後ち高熱を起し、肺の變化は稍々遲れて現はれ、諸種の治法に抗抵して多くは進行一方の經過を遂げ、病の後半に到りて素人の想像する肺病患者らしき、相態を呈し、急速に衰弱を起して死に歸するものなり。甚だ稀に熱の弛張が減じ、漸次慢性症に移行する幸福なる經過を取るものもあり。又反對に慢性症の經過中に流行性感冒等の併發症を起して、引き續き本症に陷る者も稀ならず。然し此の惡急性程度のものは、可及的初期より完全なる入院治療を試むれば、或は時に其經過を頓挫せしめ得て、慢性症に變化せしめ得る望みあり、次で運良くば全治の勝を奏する場合無きにしもあらざるが故に、決して始めより斷念的絕望的態度に出ず可からず、親切なる醫師の周密なる注意の下に、萬全の治法を講ず可きものなり。

以上の急性諸型は總て又急性進行型とも稱するものにして、熱候の停止せざる限り、日夕一貫唯病熱增重にのみ進行しつゝあるものと理解す可きものたり。

慢性肺結核、豫後良

但し玆に一言を斷り置かざる可からざるは豫後上の良不良を決定す可き疾病の時期問題なり。假令ば癌腫、喉頭結核、腸結核の如き難病惡疾と雖も、其最初期卽ち所謂疑診程度の病期に於ては、大に施すに術ありて、豫後の良を確言し得べきものなり。其反對に單純の胃加答兒或は消化不良の如き平易の疾病なりと雖も、陳久經過の末に於ては、如何とも治法の施す可きもの無く、從つて豫後の不良を宣せざる可からざるに至る。是等の關係は結核諸症に於て殊に重大なるものありて存するが故に、肺結核の豫後を談ずるに當りては、豫め一言此處に言及せざる可からざるなり。

惟ふに醫が決定的の診斷を下し得たる、最初の時期を劃して、

豫後を占するものとし、此の點を基礎として一般的の論議に入るを、最も當を得たる規矩と做して可ならん。又治療方法の完不完が、豫後に至大の關係を有するは、元より言を俟たざる處なり、從つて此所には、現時の醫學の教ゆる治療法の總てを完全無缺に遂行することを得、時と財の關係に於て、些の制肘を被らず、聰明にして此の道に充分の經驗ある醫師が、遺憾なく其手腕を發揮し得る、最上の條件の下に置かるゝ病者のみとして、一般的の豫後卜占を試みんとす。

慢性肺結核は從來素人に唱ふる所謂肺病の本態にして、西洋にてはヒポクラテスの昔より、東洋に於ても大古に近き時代の醫書中に肺結核を想像せしめ得る記載あり、夫の漢法の勞咳、勞症は結核病を意味するものにして、實に肺結核は三千年以上の歴史を有し、然も今猶昔ながらの難病たるを免れざる疾病たり。而して肺結核の舊式分類法たる、肺臟の病變程度に依り、第一期より第三期に區別する方法は、此の慢性肺結核に對しては今猶適應することを得て、臨床上大に記述の利便を感ずるものたり。

慢性肺結核の第一期及第二期、豫後良、時と財に制限を被むらずして、完全治療を完行し得る人の豫後は必ず良なり、然るに此所に甚だ悲しむ可き異例ありて、物質的に惠まるゝ處豐かなるに係らず、常に心の安定を缺ぎ、治療の方針を二三にし、或は無意味の迷信に陷り、或は日常の零碎なる失費を無意義の意に介して、不合理の生活を遂げんとし爲めに必然の豫後を大に濁す者在りて存するを忘る可からず。卑近にして然も屢々吾人の遭遇する一例を擧げんに、身に數千金の身裝具を纏ひて、甚だ言辭巧みに一合の牛乳一個の鷄卵節約に努めらるゝ令夫人あり、或は自動車を驅つて社交間を往來しつゝ、藥價診察料の高額を、妙に意に介する紳士あり、共に甚だ御し難き病的心性を有する連中にて、肺結核初期と雖も必ずや豫後の不良を招く實に慨然なる愚者供たり、實に世間斯の如き輩の決して尠なからざるを余は大に悲む者たり。

第三期病、豫後良、甚だ難症なりと雖も、要は治療法の技巧と、聰明なる理智を加味する患者の忍耐力とにあり、元より既に空洞を形成したる病肺が全然舊形に復する理なきも少なくも停止型、延ひては病竈の硬化閉封に迄到らしめ、遂には日常の社會生活に支障を感ぜざる健康體に復歸せしめ得るは、決して望み無き業にあらず。

末期患者、豫後不良、慢性肺結核患者と雖も、全く就褥平臥するに到れば、最早扁鵲の妙技を以てするも、其豫後を挽回する能はず、何となれば既に生存の活力に缺くる處あり、例令へ本病の結核が或る方法に依りて治癒したりと假定するも、生存を保持して行く丈けの體力が缺乏し居る故に、其豫後は絶對に不良なり、素人間に肺病の豫後不良を妄信せしめたるは、蓋し是等の關係に依るものたる可し。

肺尖加答兒、豫後良、素人間に呼稱せらるゝ程度の肺尖加答兒は皆肺結核初期と斷じて可なる可きものたり。本來肺尖の加答兒程度の變化なるを以て、容易に治癒に就く可き筈なるも、茲に注意を要するは、本症は肺結核の最初期なるが故に、果して如何なる性質の結核に依りて構成せらるゝやは、暫くの經過を熟察するに在らざれば、容易に判定の許されざるものあり、即ち現時の結核分類法たる惡性（滲出

性、急進性）と潮性（増殖性、慢性）との二大別中肺尖加答兒程度の病變に於ては、臨床上其果して何種に屬する結核型なるかを、未だ猶ほ充分に判知すること能はざる場合多し、從つて肺尖加答兒の豫後診定は大に鄭重を要するものとす。

氣管枝腺腫大、豫後良、近者X放線の發明以來盛んに用ひらるゝ醫語と成りたる氣管腺の腫大、又は肥大は、恰も頸部の瘰癧の如く、胸廓内奥深く肺門の部に存在する淋巴腺が、結核菌の襲來を被むつて肥大腫張したる物を名くるものにして、同じく肺結核の發源地を構成すること、肺尖加太兒と同一關係にあり。

肺結核の各種症候と其豫後關係

肺結核經過中臨床上の諸症候が、其患者の豫後に如何なる關係を及ぼすか、又其各種症候其ものゝ豫後例令は此の下痢は止むか、此の咳嗽は鎭まるか、等の豫知も時に治療及養生心得上の重大事件となること屢々なるが故に、茲に別に章を設けて略說を試むることゝす。

咯血、豫後良、血咯は噴水狀の大咯血より、血點血線の小出血に至る間、其種類程度名狀す可からずと雖も、咯血其ものゝ豫後は必ず良と稱して可なり。即ち咯血は必ず一度は止血する性質のものたりと斷ず可きものなり。

統計に依れば咯血患者の壹萬人中に僅かに貳人のみが咯血死を遂ぐるに過ぎず、然も其二人は末期に近き腔胴を有する重症平臥患者のみなりき。又咯血が本症に及ぼす關係は、素人が恐るゝ程に重大なるものにあらず、現に再三の咯血に苦みたるを、昔語りにする健康なる老人も世上澤山に存在する程にて、決して咯血即病勢重來と斷ず可からず。殊に咯血は滲出型増殖型の兩者に來り得ると雖も、寧ろ慢性増殖型の著性傾向を有する患者に頻度多きを常とす、故に余は大體に於て咯血の豫後良と斷じたり。然りと雖も若し全然同一行程に在る患者とすれば、咯血の無きを希望する次第にして、決して咯血は疾病經過の良徵を意味するものにあらず。時には咯血後吸引性肺炎を起して、急に病竈の擴大する者あり、或は大咯血の結果貧血が病勢惡化の因を成す者も尠からず。要するに甚だ望ましからざる症候なるが故に、能ふ限りの豫防法を講じて、肺結核の全經過中咯血なからしむるに如くは無し。

熱、豫後不定、高熱にして稽留型或は弛張型を呈し、諸種の解熱手段に對抗して更に解熱の傾向を呈せざる者は豫後不良なり。多くは急性惡性結核の徵證にして、遂に死に到る迄解熱の曙光を認めざるもの多し。卅八度以下の微熱は解熱處置に容易に反應する者は、概して豫後良なり、則ち高熱の緩解と共に急性進行型の肺結核痰適か、漸次慢性増殖型に變化を來る良徵たること多し。要するに熱も亦甚だ好ましから症候にして、醫師は若し肺結核患者を全く無熱の境に導くことを得たりせば、其治療の大半は成効したるものとして、大に嬉色を浮べる程度のものたり。

速脈、心悸抗進、豫後不良、高熱を有せざるに拘らず、脈搏一分間百三十乃至以上を數へ、尋常靜坐の位置に在りながら、心悸の抗進を自覺する者は、此の症候の停止せざる限り豫後は不良なり、共に結核毒素の中毒症候にして、未だ大衰弱に陷らざるに、早く既に此の症候を呈するは急性惡性型を示す惡徵にして命脈永くも數月内に迫るを豫想

せしむるものなり。

咳嗽、豫後良咳嗽の依りて來る原因は甚だ多端にして、反射的に來る乾咳は喀痰を伴はず、痰汁喀出を目的とする濕咳は一種の喀痰排出作用を遂ぐる、生理的良能たり。共に持續長短、頻度多少の差異は存在すと雖も、多くは症にして或る時期來れば自然に鎮靜し、或は醫療が奏効して制止せしめ得るものたり。肺結本病の豫後と大なる交渉を有せず、無咳者必ずしも輕症ならず。

頻咳者治癒せずと限らず。但し肺結核の治癒と共に咳嗽の漸減するは當然の理法にして、此の意味に於て强咳の漸增は決して好ましき良徵にあらず。

喀痰豫後良一般に喀痰と稱するも、是れに就て記述を要する件甚だ多し、實に獨逸書にて喀痰の事のみを記載したる大部の冊子すら存する程なり、素人間に沈む痰は云々、浮く痰は云々と云ふも、謂はれなき妄語なり。痰を性質に依りて粘液痰、泡沫痰、膿痰、血痰等に區別を、形態に依りて塊痰、三層痰等無數の名稱を付す。肺結核の喀痰は多くは三層痰を呈し、上層泡沫を混ずる粘膿痰、中層は透明流動性の粘液痰、下層は濃厚なる膿痰より成る物を多しとす、肺に腔洞を有すれば塊痰を出し氣管支炎盛んなれば、粘膿痰の多量を出す。

喀痰中の結核菌證明は肺結核診斷の最後決定を與ふるものにして、陰性の場合は時を異にして再三反復檢査を必要とす。然も猶ほ陰性なりと雖も非結核性と斷ずることを許さず、封鎖肺結核と稱して結核菌の喀痰に含有せられざるもの亦多數なり。

喀痰の性質及量は、當該肺結核の豫後を占する資となること少なし、喀痰中結核菌の多きは少なきより、其豫後劣ると稱す、其他菌の生物學的諸徵候を檢査して、豫後判定に資する無數の方法ありと雖も、唯に專門家の專門の用に供するに過ぎず。略す。

食慾不振、豫後良色々の原因に依つて惹起せらる其內神經性なること最も多く、多くは原因療法を施すことに依つて、治癒す可き性質の病徵たり、故に本病に對する豫後も、本症自身の豫後も共に良なり。

不眠、豫後良甚だしく身心を疲勞せしむる惡徵候なるも、適當の攝養及治療に依つて、消散せしめ得る症候たり

盜汗豫後良、盜汗と云へば直ちに肺結核を素人は聯想するも、決して盜汗は肺結核に特有のものにあらず、一般に身體が衰弱すれば何病にても、或は無病にても發來する普遍的症候たり、適當の加療に依つて容易に治癒せしめ得る症候なるが故に可及的速治せしむるを良策とす。盜汗を永く放置すれば愈々衰弱を增して、益々盜汗の原因となることあり。下痢殊に鷄鳴下痢、豫後不良、肺結核患者は末期に近くに從ふて、下痢の傾向を呈するを常とす、就中腸結核の主徵たる早朝鷄鳴時に止め難き頑固の下痢症を發するに至れば、其豫後多くは不良にして、足端顏面に蒼白浮腫を起すに到り、死は數旬の內に迫るを豫知せしむ。

精神狀態、急性肺結核を除き慢性症に於ては、當該患者の精神狀態即ち心の持ち方が、唯一疾病治不治の示針と成ることあり。既に熟練なる療養所醫の或者は、肺結核患者の精神狀態のみに依りて、其終局の豫後を卜知して誤らざるものありと云ふ。但し此の精神狀態なるもの△大半は、天賦の然らしむる處にして、是れが矯正容易の業にあら

ずと雖も、以下の畧述を基調として、極めて修養的に戒心獨愼自ら大に努むる處あらんを希望するものなり曰く、樂天、滿悦、感謝、安心、享樂、安分、克己、制慾、知思、趣味、愉快、快活、恬淡、秩序、整理、の心事を多分に有する者は豫後良、之れに反して、不平、不滿、怨嗟、憤恨、懷疑、嫉妬、吝嗇、貪慾、理不盡、無節度、無遠慮、無趣味の人は必ず豫後不良とす、世の肺患者たるもの大々的の三省を要する件ならずや。

諸種の合併症或は併發症に依つて豫後は左右せらる

他臟器の結核性併發症、豫後多くは不良、喉頭結核、腸結核、腎臟結核の併發は其經過中多少の弛張は存在すと雖も、到底終局の豫後は不良なるを免れず。

結核性肋膜炎並に腹膜結核は多少趣きを異にし、能く本病に大なる惡影響を及ぼすこと無く、其經過を遂げて消散に歸するもの稀れならず。

結核性腦膜炎に到りては、其豫後絶對に不良なり。

糖尿病、腎臟炎の合併は、蓋し甚だしく重大不良視せられたるも、追々醫學の進歩發達に從ひ、現時は豫後上餘りに重きを置かれざるに到れり。

百日咳、痲疹、流行性感冒、肺炎等呼吸病の合發は、大體に於て其豫後を不良に導かずして、無難に全經過を終り得るを普通とす。

心臟并膜病の合併は豫後、良、種々の議論及び臆説を玆に省略す、事實上并膜病者には慢性經過を遂ぐる肺結核患者多し。

肺結核患者の姙娠、豫後良、聊か妄言に類する嫌ひあるも、余は分娩哺育に堪ゆる丈けの體質を有す者にして、始めて姙娠を遂げ得る者なり、との理言を僕の信條として可ならんものと信ず。西洋流の傾向たる結核姙娠即人工流産と決定するは(無論敵は本能寺的ならんも)決して推賞す可き仁術にあらずと主張せんと欲す、姙婦の堪ゆる極限迄待期的處置を試み、萬止むを得ざるに到りて、流産或は早産の處置を試みて、決して咬臍的に豫後不良を釀す憂へ無きものと信ず。

遺傳及先天性の體質、豫後に重大なる關係あり、但し現今の理論學説に於ては、重きを置く可からざる件と做と雖も、事實は決して然らず急性肺結核にて死したる兒の妹が、亦肺尖加答兒を發病したる際は、其豫後推定に鄭重の態度を要するは、汎く實地醫家の經驗する所たり。

× × ×

以上記述する處甚だ簡にして要を盡さず、實際に當りて資する處甚だ尠きを恥ずと雖も、肺結核の豫後なる問題は、實に重大なる醫學上の題目にして、唯だ一事此の研究記載に數百頁を費したる浩瀚なる醫書の存する程度のものたり。述者等の如き專ら斯道の研究に從事し、畢生の天職として日夕此の業に携る者にして、猶ほ下記の失敗談あり、以て肺結核豫後推定の難事たることを類推するに足らん。

述者某年秋日招かれて、某大學の令孃を相州某地の大別莊に見舞に行く、年齡、高熱、貧血、發病以來の經過の狀況に徵して、急性結核の甚だしきものと診す、又た實に其診定は決して疑ひを入るゝ可き餘地の存す可きものに在らざるき、次でＨ氏の切なる豫後言明追究に對して、述者は實に自個の所信に基き、明かに豫後不良を宣し、加ふる

當冬の越年難きを以てしたり。
然るに越へて其翌年櫻咲く四月中旬、盛裝美服せる其令孃母氏と共に病院を訪ずれ、懇勤誠意を込めて昨秋の勞を謝せられ、述者をして實に穴に潛り度き思を爲さしめたる目出度き例すらありたり、蓋し此等急性症状が頓挫して良經過を辿たる一例に過ぎざるも其意表に出でたるは眞に驚くに堪えざる症例なりき、但し聞ならく如斯の事例は決して述者丈けのみの、苦き經驗にはあらざると云ふ。以て肺結核豫後推測の難事たるを知るに足るものと爲す可きか。

肺結核の豫防

東京市療養所長
醫學博士　田澤鐐二

今日世界の醫學は次第に治療醫學より豫防醫學に向て進んで居りますが、其豫防醫學として最も大なる意味を有するものは結核であります、又昨今は我國に於ても歐米先進國の例に倣ひ次第に公衆衛生と云ふ問題が高唱せられて參りますが、其公衆衛生の核心と見るべきものは固より結核問題であります。

何れにしても結核は人生の脅威たる最大の病敵であつて、所謂四百四病の大關であり、國民の生命を奪ふ事最も大なる疾患である許りでなく、其治療法及び豫防法の最大要點は衛生的生活法一般の昂上にあるのであるから、豫防醫學と云ひ或は公衆衛生と云ふ語の最も能く適合する所以であります。

而も結核豫防の方法は單に一個人の衛生的生活法改善と云ふ許りではなく其個人が國民とし又社會人として其生活を昂上し得べき諸要素即ち國家社會の制度、習慣、教育法、生活費問題、市街の建造法等各種の問題が之れに關係して居るので究極する所結核豫防法は政治や社會事業の進步改善に歸すると云ふても敢て過言とは云はれない程の問題で實際今日歐米先進國にて結核死亡率の著しく減少した事實は一面に於ては確かに之の關係を有力に物語つて居るものと云つてよろしい。

で、今次に先づ結核豫防法の最も重要とする所が衛生的生活法の改善に在る理由を述べ次で更に豫防法の具體案の重要なるもの二三を揭げて置きます。

○初期の感染、抑も人が結核に感染しまするのは通常子供の時代が最も多くあります。其時には肺臟に豆のやうな小さい結節がポツリと一個出來まして尚ほそれに關聯した胸の中の淋巴腺が腫れます。淋巴腺が腫れると云ふのは頸に出來る瘰癧のやうなものが出來るのであります。此肺臟に出來る結節と瘰癧のやうなものは是は普通に言ふ肺結核とは別のものであります。此初期感染の時の症狀は臨床上には通常見

進まざるものでありまして、即ち知らないで居る中に經つて居るのであります。此初期感染は非常に罹り易いものでありまして、之に依つて人は又結核に對する免疫を得るのであります。

○結核の蔓延　以上申しました所は結核の初期感染の現象でありますが、其後どうなるかと言ひまするのに、若し其の人の抵抗力が弱いと云ふと、其次の第二の時期と致しまして、其結核は全身に擴がりまして全身病の形を取ります、此時機には瘰癧關節炎、骨結核、膀胱炎等全身諸臟器に結核病が起ります、是等は完全に癒ることもありまするし、又は數年に亘る執拗た鬪ひの後に遂に粟粒結核と云ふ全身結核病を起して死に至らしめることもあります、が兎に角此全身的に蔓延する時機が結核の最も跳梁を極める極期であります。全盛時期であります。

○肺結核の發病　此全身結核の時期に打勝ちましたものは免疫の爲に其病毒は最早全身的には蔓延する力がなくなりまして、それから後は病勢が進むと致しましても、特に抵抗力の弱い臟器だけをぼつ〳〵と除々に冒して行くやうになります。此抵抗力の弱い臟器と云ふのは第一に肺臟であります。故に其時に當つて初めて所謂肺結核が起つて參るのであります。是は結核病の發生から言ふと第三の時期に當つて居るのであります。此肺結核も抵抗力が恢復して來ますれば治癒致しますが若し抵抗力が弱ければ肺の上部の方から下部の方へ、或は一方の肺臟から他方の肺臟の方へと次第に廣く冒されて行きまして、遂には死亡に至ることは御承知の通りであります。

以上は各個人の體内で一生中の長い期間に亘りまする結核病消長の歷史でありまして、約言致しまするなら、初期感染のみで癒るか、又は全身結核の時代に進んで其處で癒るか或は死ぬか、進んで第三の肺結核の時期に進んで其處で癒るか死ぬか、其何れかの間に消長する譯であります。

茲に於て今結核の感染と發病の關係に就て考へますと、結核に感染すると云ふのは都會などでは殆ど總ての人間が感染するのでありまして、其後抵抗力が病毒より弱いか強いかに隨て、或は發病したり或は發病しなかつたりするのであります、故に感染は受けても發病はしないと云ふ人が多くある譯でありまして、感染と發病とは別であります。此點は充分に說明して社會の誤解を解いて置きたいと思ふ點でありまして、是から結核豫防の具體案をお話する基礎であります。

○發病動機　感染者が發病に至るのは抵抗力の弱いに依るのでありますが、此抵抗力の弱いと云ふのには生れ付きの者もないことはありませぬが、多くは生後種々の機會に於て弱くたるのであります、例へば他の疾病に致しましても感冒、インフルエンザ、麻疹等は著しく結核に對する抵抗力を弱めるものでありはます。婦人では妊娠の時にも抵抗力が弱くなります。日常の生活に於て抵抗力を弱めることの最も大なるものは身體精神の過勞であります。是が今日の學生其他の青年少年に結核病の多い所以であります。

○豫防方法、今次に結核豫防の主なる方法を列舉致しますると、第一には只今申上げました關係で、身體精神の過勞を避けると云ふことが肝要であります。體力不相應た運動競爭なども危險であります。戸外の大氣に親しむと云ふことの有益たるは申す迄もありませぬが身體運動の種類は體力、身體狀態の如何に依つて加減せねばなりませぬ。文

部省の調査に依りましても、全國の師範學校の運動選手の結核死亡率は他の學生に劣らなく、寧ろ之を凌駕して居ります。本來體力強健な者が選手になつたことを考へまするど、運動の犠牲と云ふことを考へねばなりませぬ。運動の中では特殊な運動と致しまして深呼吸、又は呼吸體操があります、是は肺結核の豫防法としては有効でありますが、既に發病した者には通常厳禁であります。感冒の豫防を目的とする皮膚の鍛錬は極めて有効であります。榮養其他一般生活法の改善も有効であります。發病者も早期に診斷して輕症の中に治療すると云ふことは、結核に於きましては治療と云ふよりも寧ろ一種の豫防法とも見做し得るのであります。是には安静休養が第一でありまして、此目的の爲には輕症患者を入れて休養させ、又は攝養的生活法を教育する所が必要であります。此點を主要なる使命と致しましたものが即ち療養所であります。サナトリユーム即療養所であります。結核豫防の骨子は前に申しました通り、通常は感染の豫防と云ふよりは抵抗力を弱めないこと、又は之を強めることにありますが、まだ結核に罹つて居ない人はどうかと云ふと、それは免疫を得て居ない人でありますから、濃厚なる感染でも受けると急性の結核が起り易くて却つて危險を有して居る人であります。山間地などで、まだ結核の侵入したことのない土地でありますと、之を結核處女地と言つて居りますが、其處へ結核が入り込みますと、比較的急性な經過を取りまして、傳染病として傳播して行く狀況が能くわかることがあります。

○乳兒の保護、既に結核の蔓延して居りまする地方、所謂慣れ地に於きましては同様の意味で最も感染を恐るべきものは乳兒であります、是は免疫が出來て居なくて抵抗力が弱いからであります。殊に母親でも結核に冒されて居りまするならば、斷然乳兒を隔離せねばなりませぬ。

○肺結核豫防、國家的若しくは社會的制度施設に屬する諸事項が結核豫防に密接な關係を有することは冒頭に述べた通りでありますが其例を述べると前に擧げた今日の我國の教育界に於ける學生の狀況等は其の主なるものであります。又「パン」の値が安ければ結核患者が減ずると言つた先哲の言などは生活の安定の得難き日本の社會に取つては最も重要な警告と見ねばなりません。

○米國では借家法即ち借家の建築に關する法規が改革せられて以來結核患者が減じたと稱せられて居るのでありますが建物と結核消長の關係にも最も密接な點があります。斯く列擧すれば一一の事實は際限も無く多いのでありますが、私はここに刻下の東京市に取つて最も重要なる一事項を指摘して社會及び當局の注意を喚起しておかうと思ひます。其れは將來の東京市に於ける公園の不足であります。歐米の諸都市就中米國のワシントン市の如きは市内に公園が多いと云ふよりも寧ろ全市皆公園の中に家が建てられて居ると言つて可い樣な感がします。日本の市街に於ては從來は各家屋が夫々に庭園を有してゐたのであるが、愈々區劃整理が實施せられた後は道路こそ稍々廣くなつたれ、各戸の庭園は極めて縮少せしめられる。加之今後は次第に高層の建物が奬勵されるから面積の割合に人口が一層稠密となつて來る。これ等不燃物の建物及び將來の鋪装されたる道路は光線を反射することが極めて強く、從來の道路及び和風建築物の比ではないから此の都市に公

園の寥々たること〳〵今日の東京市の計畫の如きであつたならば將來の市民の健康問題には實に寒心に堪へないものがあると云はねばならない今日の我々の眼を以つてしてもそうであるのに將來頭腦の進歩した我我の子孫から見たらば何と評されるであらう。で、私はこれを救ふの策としては今日の官公署所有の空地は全部これを公園として保存する程に愛惜しおきて、將來の公園不足に備ふるの外道はなからうと考へて居る者であります。公園として保存されたる土地を他の目的に流用することは容易でありますが、一旦築造されたる永久的建物を破壞して大公園を作るといふことは將來益々不可能事と見ねばならないと思はれますので敢て一言して置く譯であります。斯く抵抗力の增進、又は未感染者の保護等、主要な點に注意致しまして豫防法を講じて、假に社會が進化致しまするならば結核の重症患者や死亡者は次第に減じまして、遂には重症結核に陷つたり死亡したりするのは、よく〳〵注意を怠つた場合の話と云ふやうな、狀況迄世の中を導いて行かるる可能性があるものと私は信じます。

○歐米先進國の成効、歐米の先進國では斯樣にして既に着々成功致して居ります。今其の一例と致しまして米國紐育市の成績に就て申しますると、同市の結核死亡率は五十五年前には人口十萬に對して四百十名、四十五年前には三百七十四名と云ふ數で、四百名内外の率でありましたが、爾來漸次減少しまして三十五年前には二百七十九名、二十五年前には二百七名に減じ、十五年前には百七十三名、五年前には遂に其の半減の八十六名となり、爾來年々八、九十名の所に在ります。故に過去五十年間に四分の一以下に減じた譯であります。又米國全體として申しますと既に數年前の話に、最近二十年足らずの間に結核死亡率が半分に減じ、年々十萬人の人間が救はれると言はれて居りました。是は現在米國の結核死亡率は我國に比して半分以下であるといふ事實と能く符合する所であります。

斯かる成績は單に米國自身の利益と云ふばかりではなく、結核撲滅事業の効果を人類一般に對して教へるものでありまして、一面には又治療醫學より豫防醫學へと次第に醫學の進歩して行きまする跡方を示して居るものであります。

今や結核撲滅事業は單に一家一國の問題と云ふのみではなく、世界文明國民の義務であると看做されて居り、各國が競つて其成績を擧げつゝあるのであります。今日の世界は世界の文明に多大の貢獻をした國民程世界人類の尊敬を受ける世となつて居ります。東洋の文明國たる日本に於て結核病蔓延を此儘に放任して置くと云ふことはどうしても許されない所であります。殊に我國に於ては結核病は單純な食過ぎ病や個人の放逸に依つて來たる疾病とは趣を異にしまして、其の發病の原因の一半は實に國家社會の缺病に在ると主張したいと思はれますので、患者は謂はゞ一面の犧牲者とも見られます、故に無理解な傳染說や又は加之遺傳說等を以て、徒に患者を苛酷に待遇致しますると云ふことは、一種の人道上の缺陷でありまして、其社會の幼稚なるを立證するものと見ねばなりませぬ。故に實業家でも、教育家、政治家でも、一般國民が、皆結核撲滅事業に深甚の考慮を拂はれんことを、切に望んで止まない所であります。

肺結核のサナトリウム療法に就て

南湖院長
醫學博士　高田畊安

世界の脅威、國家の禍難、病魔の巨魁たる肺結核を防遏して、同胞を健福にし、祖國を富強ならしめんが爲には、肺病サナトリウムの必要あり。其必要は今や既に周知の事實にして、議論の餘地なし。故に歐米諸國には、競ふて之を建設し、本邦にも、年々增加しつゝあり。帝國としては、大正三年、法律第十六號を以て、各大都市に其建設を命じ、同八年には人口五萬以上の都市及一定の公共團體に、法律第廿六號を以て、建設せしめ、而して其實行を期する爲に、其建設費及經常費の半額迄を、國庫より補助することゝなした。以て帝國が如何に痛切に、肺病サナトリウムの必要を感ぜるかを知るべきである。

結核蔓延の勢は極めて猖獗にして、既に小兒期中に、人類の大部分を襲ひ、青年期以上には其九割を侵せり。而して被侵襲者の身體は之と戰鬪し、概ね能く之にたへて、一隅に潜伏せしめて居るのであるが、若し精神或は身體の過勞、又は空氣の不良、又は食養の不足、又は日光の不足、又は有害的娛樂、又は他病罹患等の爲に、身體中、虛弱點を呈すれば發病するのである。而して其發病したる場合に、最良の避難所となるは、肺病サナトリウムなり。

肺結核の發病せし際に、現今最も推奬せらるゝは左の三件である。

(第一) 轉地
(第二) 外氣
(第三) 滋養

右は何れも肺病サナトリウムに入院することに依りて、最も善く勵行せらるゝのである。右療養法を詳述すれば左の如し。

(第一) 轉地。肺結核患者に轉地を勸める理由は發病的境遇より解放して、衞生的生活を遂行せしむるに在り。則ち病氣の原因を除くと、同時に治癒を催すのである。或人は曰はん「轉地しなくても養生を爲れば善いのではないか」と、然り、若し眞に養生法を實行するならば、必ずしも轉地を要しない。併し其養生法は言ひ易いが實行し難い事が多い。彼の不衞生的生活の習慣を有し、且つ衞生法の知識なき患者及其家人をして、俄に其生活法を完く變化改正せしむるは困難である。例えば、喫煙や、飲酒や、居室閉鎖や、火鉢使用の習慣など、中々一朝にして、之を廢止せしめ得べきに非ず。又自ら衞生法を理解し、或は自制して醫師の指導に從はんと欲する患者と雖も、家庭の事情や、職業上及社交上の關係より、衞生法を實行し得ざるあり。或は家屋の構造、又は位置の不健康なるあり。故に古來肺結核患者に對する實際

的好良法として、轉地療養を推奬せるゝのである。

肺病サナトリウムは啻に衞生的生活の實行所であるのみならず、同時に其必要及原理を會得せしむる學校である。或人は一、二卷の肺病療養書を購讀し其所説に從つて養生法を實行すれば足るに非ずやと云はん、然り、一少部分の人には或は其れにて必要を達し得ることもあらん。併しサナトリウムに入りたる者と、入らざりし者とは學校に通學したる者と、通信教授を受けしに止まる者との如き、差異ありて、概ね多少及ばざる所あるべきなり。

肺病サナトリウムは其構造及設備が衞生的であり、其位置が健康地であり、醫師が患者を指導しつゝ、同時に之を監督して、衞生的生活を實行せしめるから、數ケ月を經過すれば、療養者は概ね其身に養生法に適へる習慣を得、又其心に衞生的知識を修め、同時に疾病は輕快治癒又は潛伏し、又榮養は增進し、皮色は增赤して、世間並以上の健康狀態を呈するに至る。而して退院後或は從前の職業に復するあり、或は健康地に居住して療養を繼續するありて、一樣ならずと雖も、何れも既に養生法を會得せるが故に、疾病の增劇を避け全治に向ふべきである。

最初からサナトリウムの外で轉地療養するのは常道でない、不知不識の間に不養生を爲して失敗する者が少なからずあつた。硝子戸を閉鎖し、火鉢に炭火を盛る、等を爲せる者の健康を害すべきは勿論である。故に最初數ケ月間はサナトリウムに入院すべきである、而して只衞生上の知識と實行力ある者、又は數ケ月のサナトリウム療養を了りたる者のみ、院外療養を爲すを得べきである。

肺結核の療養地として、何處を適良と認むる乎、と云ふに、古來海氣の在る所が最も多く推奬せられて居る。卽ち既に紀元前殆ど五百年グリシャのHerodot, Euripides 及 Hippokrates は海濱及航海を推奬し、又ローマの Augustus 帝時代の Celsus より次で Peinius, Aeeliue, Aurelianus 等よりも推奬せられた。其後ローマの衰滅と共に、海濱及海上療養の有効なるを忘れられしが、第十八世紀の後半頃より、復び其有効を認むるに至つた。卽ち英醫 Gilchrist(1756)獨醫 Foster(1787)及 Eeler(1734) は何れも海氣を稱揚した彼らは主として其淸潔を賞したのであるが、又同時に其溫度と濕度の平等なる事、及其空氣の緻密なると動搖するの有益なるを説いた、又佛醫 Laennec(1826)も熱心に海氣療養を賞揚し、肺病者なりし彼自身も二ケ年海濱に療養して其有効を證明した。又肺結核の前驅なる腺腫病者に、海氣療法を推奬するは、英醫 Richard Russel(1750) に始まる、而して英醫 John Conkley Lettson 及 John Latham が千七百九十二年に初めて海兵療養院を設立し、佛にては千八百五十四年に之を建てた。獨にては Hufeland (1762—1836)が腺病者に海氣療法を推奬せしが、Friedrich Wilhelm Beneke (1824-1882)が海濱療養院を創設した。又伊にては千八百七十五年に之を始めた。而して今や諸國に多數の海濱サナトリウムの設立せらるゝに至つたのである。予も海濱療養の卓効あるを自身に實驗したのであつた。明治廿八年肺結核を患ひたる時、ベルツ師の勸めに從ひ、大磯に轉地し、全治することを得たのである。

肺結核の療養地として、海濱の好適なるは、既に周知の事實なるが、千八百五十四年に至り獨のシユレジア人 H. Brehmer が同國

Görbersdorf の山中に肺療養院を創設し、物理學的及食養的の療法を勵行して、好成績を擧げて、以來、山中も亦療養地として賞用せらる る事となり、殊に瑞西の高山療養所が喧傳せらるゝに至つた。從つて啻に溫暖の地のみでなく、寒冷の氣候も亦療養に適するを認めらるゝに至り、殊に米國 Trudeau の Adirondack のサナトリウムは北緯四十四度半の酷寒の地に、彼自らが千八百七十三年に轉地療養して、好成績を得たるに始まつたのである。

又海濱に非ず、山中に非ずして、內地平野の田舍にも、サナトリウムが少なからず設置せられて居る。例へば伯林附近の Belitz 肺療養院や、東京市外野方町の東京市療養所の如きが其例である。併し其空氣の淸潔なる事が海濱や山中に及ばざるは勿論である。何故斯く理想的ならざる場所に療養院を立てたか、と云ふに、其れは經費上の都合や、交通上の都合で定めたに過ぎないのである。而してサナトリウムに入院して居る、と云ふことが、療養地の性質以上に、重要の意義あることを示して居るのである。如何に好良なる氣候と雖も、其れのみでは肺結核を癒すを得ない、必ずサナトリウムに入りて醫師の指導監督の下に衞生方法を勵行せねばならぬ。

山中と、海濱と、何れが肺結核の療養に適當するか、と云へば、海濱の方を推奬すべきである。何故となれば氣溫の日差及月差が、海濱に少なく、山中に多い、即ち夜間は晝間より冷え、又冬期は夏期より寒き其溫差が、山中には多くして、海濱には少ない、而して其氣溫の平等なる方に近きは、呼吸器を刺戟すること少なく、又夜間寒冷の變少なく、且つ避寒避暑に適するのである。寒冷の變少なきは、大氣に接觸しつゝ睡眠するに便たり、呼吸器の刺戟少なきは、加答兒及咳嗽を輕快せしむ、又酷寒と酷暑となきは、病弱者に保安するなり。故に海濱は常に生活に便にして、最も療養に適するのである。

又山中には、雲霧と降雨多く、海濱には其少なきは日光及箱根の山中と、豆相房總の海濱に居住せし、人々の、知悉せる所である。高山には紫外線多きを利用すれど、海濱にも其豐富なるは、皮膚に著く色素の增加するに、照らして明かである。

故に療養地としては、我國の太平洋に面せる沿岸地方を、最も好適と認むべきであるが、肺結核患者は、最初數ケ月間、サナトリウム生活を爲して置くを要する。

（第二）外氣。肺結核患者をして、淸良なる空氣に觸れしむる事は、極めて必要である。空氣の汚れ易い都會に於てさへも戶外の空氣は室內に於けるよりも淸潔であるを常とする。之に反して、閉鎖せる家屋殊に室內にては人體より發生する排氣及炭酸等の爲に、不潔有害と成り、爲に身體を弱め、病を起し、或は重らするのであつて、健者、病者の別なく、外氣即ち大氣との接觸を絕たず、成るべくは常に大氣中に呼吸する樣心懸けねばならぬ、抑々呼吸の極めて重要なる理由である事に注意せぬ者が非常に多い。其故に居室の換氣を忽せにして居るのであるが、吾人の生活現象の爲には、炭酸及排氣の排泄と、酸素の吸入を、一刻も缺くことを得ないのである。吾人の生活上食物の必要なる事は、誰も知つて居る、併し其食物と雖も數週間之を絕つことができる。又一層必要なる水と雖も、約十二日程も之を絕ち得る。併し呼吸に至つては決して十分時間之を絕つを得べからず。其れ程大切な

る呼吸作用を、家屋戸障子の開閉に由つて、之を調節して與へないのは、實に言語道斷である。斯かる人は無意識の大小便を飲食せると同樣であつて、不潔有毒なる空氣を吸入して、自身や同居者を害しつゝあるのである。泥棒を防ぐ爲に、止むを得ず、雨戸を閉め切る家も甚だ多い樣であるが、生命と、財産と、何れが大切乎と云へば、勿論生命を第一に保護せねばならぬ。故に萬障を排して、外氣と親むべきである。廻轉窓や、欄間や、格子窓の開放は安全に換氣せしめる。又二階に在る者は雨戸の開放に便である。又雨戸に夢想窓を設くるも甚だ好し。或は戸外に横臥するも可なり。是らの事を考へ、且つ實行するには、矢張り初めサナトリウム生活を爲して、新鮮清良なる空氣の快感を實驗し、同時に皮膚を強練して、寒氣冷風に堪へ得る性質を備へねばならぬ。

(第三) 滋養。肺結核患者には其榮養を回復せしめ、又常に充分なる滋養を與へざるべからず。是れ間接に自然治癒を催す所以である、此事はサナトリウムに入院せる時は最も善く實行せらるゝが家庭に於ては、或は其適當度を知らざるが爲に、或は諸種の事情に制せられて、行はれない事が多い。殊に婦人に於て、滋養不足の弊がある、又男子に於ては、喫煙飲酒等の爲に、消化を害せるも少なからず。其れらの弊はサナトリウム生活に依つて一掃せられ、且つ向后の生活法に對して標準を得べきである。

其他サナトリウム入院中は醫師の指導監督の下に在るが故に、安靜と運動の程度に就いて正き決定を得られる。世間肺結核患者にして或は安靜に過ぎ、或は運動に過ぎて、以て或は身體を弱くし、或は病勢を要する、特に然るに多い。然るにサナトリウムに在る時は、治療や、門診療や、院内衛生施設等に於いて、最も入院の設備と、最小限度の安靜を、試むることも爲し得られ、以て各自に適合の標準を定めることができる。

南湖院に於ける、サナトリウム生活の一斑を擧ぐれば、入院患者はA(閉性即ち非傳染性)、B(開性)の二種に區別して、全然其病棟を分ち、何れも早寢(八—九時)、早起(四—五時)、毎日四回検溫し、毎週二回検量し、三食前後各半時間安靜を守らせ、朝夕冷水摩擦又は灌水せしめ、毎週三、四回入浴せしめ、毎日一回(重症には二回以上)診察し、其他の時間には或は臥室或は簀張りの日蔭に横臥し、又は散歩せしめ、毎土曜日には衞生講話を、海濱會場又は林間會場に於て行ひ、次で輕症者には特殊の心身的體操を行はしむ。又日曜日には會堂に於て、禮拜會を行ひ、同時に聖書を説明して樂き期望を生ぜしむべく望めり。其他時々活動寫眞、琵琶、ピアノ、講演等を以て教育と慰安を爲せり。又一部の者には或は空氣浴、或は日光浴、或はプールに於ける水泳を行はしめ、或は護身術を學ばしめ、又圖書室に於て讀書を得しめり。病室は可及的窓戸を開放し(勿論身體の狀況等を顧慮しつゝなり)、食器は毎食後汽消毒を行ひ、洗面所及手洗の水は足踏にて水を出だし、喀痰は之を汽熱煮沸し、据置痰壺は足踏にて其蓋を開閉し、塵埃は之を燒却し、大小便は水洗して淨化裝置に委し、衣服及臥具は必要に應じて汽消毒又はフォルマリン消毒を行ひ、又日光を利用せり。洗濯は洋風現代式なり。用水の清潔豐富なる、又煮沸はすべて汽を以てせる、又暖室も汽たり、燈火は電氣なる。時は勿論な

り。職員の主要部は何れも正義仁愛なる父神を信じ、其理想を遂行するを怠とせり。

肺結核は癒る、其療法と根本問題

醫學博士　近藤乾郎

結核問題は、目下我國に於て種々の重大なる問題と關係のある重要問題である。周知の如く、大戰前までは英米獨逸等に於ては年々結核の死亡率が減少して居つたのである。然して大戰後俄に増加せる獨英等の同死亡率は今や又漸時に減少しつゝある傾向である。然るに我國に於ては、最近多少減少の傾向はあるも極めて微々たるものであつて殆んど言ふに足らぬ。即ち毎年十四五萬全結核に於てたほれ、其の中八萬五千位は肺結核にて倒れる。殊に注意すべきは、青年男女特に妙齡の女子が本病にてたほるゝ事の最も多きことである。

結核問題の根本的解決は、宗教、政治、教育の改善、世界平和等に重大なる關係がある。

先づ肺結核の療法を述ぶる前に、結核に就ての世人の誤解をとかなければならぬ。

遺傳及び素質の問題

第一は遺傳及び素質の問題である。結核に臨床上遺傳の否定すべきは今や一般に理解されたやうであるが、素質の問題に就いては醫師の間にも、異つた考へを有する者の多き今日特に述べて置かなければならぬ。兩親若しくは其一方に結核があつても、其の子供が丈夫に出誕し成長する程度であれば、其子供は普通の子供と異ることなく、むしろ結核に對して一程度のかゝり難き免疫質を有して居る理由である。いづれにしても生れ乍らにして結核にのみかゝりやすいと云ふ人が有ると云ふ理由は今日の學問上認める事に出來ないのであるから、たとへ兩親や親戚に結核があつても、本人さへ健康であれば、結婚其他に就いて少しも差支ないのである。斯く言ふのは實際吾々が患者を診察する際に妙齡の美人にして結婚に少しも差支なきと認むべき人々が兩親などに肺結核にて死亡せる人あるため結婚の出來ざるやうな場合に遭遇するからである。之れは洵に默視し難き悲慘なる人道問題である、佛國の「グランシエー」と云ふ人の考へで兩親が肺結核であり、劇しい傳染の惧のある初生兒を家庭より分離したる多數の經驗に依るも其の兒は他の健康なる兩親を有する初生兒と同樣に發育成長しつゝあるのである。此事實を以ても、兩親に肺結核あるとも、其の兒がとくに弱いと云ふことは認めることが出來ぬ。いはんや今日の進歩せる遺傳

歷より考ふるも、前述せる如く、遺傳素質が遺傳し得ると考へ得るから其の子はむしろ普通の子供よりも結核に傳染し難い譯である。之を要するに臨床上結核の遺傳及び素因は否定しうべきものと承知していたゞければよいのである。

第二は誤れる傳染の問題

凡そ肺結核には處女地と馴地とがある。處女地とは今日まで結核に關係のなき地であつて全く交通不便なる土地を云ふのである。日本でも結核處女地は今でも殘つて居ることは事實であるが、眞の處女地はほとんど無いと云つてもよい位と思ふ。孰れにしても交通發達によつて年々減少しつゝあるは事實である。我日本の如きは大體より云へば結核の馴地であつて殊に大都會我が東京の如きは馴地中の馴地である。馴地とはすでに數十年來結核の蔓延せる地を云ふのである。處女地と馴地との結核は同じ原因であるに不拘、病氣の性質が、非常に異るのである。卽ち處女地の結核は急性に來つて急に死亡する事が多い。あたかも急性傳染病チブスや肺炎や脳膜炎のやうな狀況を呈することが多い。之に反して馴地のそれは多くの場合は、慢性であつて所謂慢性の肺結核、少年少女時代ならば骨や腺等の慢性結核を起してくるのである從つて治療もし易いのである。

結核の傳染は馴地と處女地に於ては大いに異る。處女地の人が馴地に急に來ると其の人には結核の免疫が出來て居らぬから非常に危險で傳染して發病し易いのである。そして發病すると、前述の如く非常に危險である。馴地の人は之に反して生後日々僅かの結核の傳染に遭遇する機會が多いから、自然に免疫が成立して十才以上になると傳染して發病することは非常に少くなるのである。最近の研究に依ると、乳兒の結核もよく治ると云ふことが判つて來た。卽ち全數の三十%は癒ると云ふのである。之は面白い重大なことであつてすでに馴地に於ては乳兒でさへも、比較的免疫が出來て居ることが理解されるのである。故に其の以上の青少年大人に於ては、傳染して發病することとは非常に稀である。其の例を擧げて見ると、最も傳染し易いと考へられる夫婦の間に一方に結核があつた場合も一方にうつると云ふことが非常に尠いと云ふことである。日本の統計では二六五名の中一方から傳染したと思はれる例は僅に八%以下である。又西洋の統計では四七七名中僅に二・五%である。其他之れに類似した統計が多くある、之等の夫婦のうちで殊に西洋の統計は密集生活をなして大多數は夫婦一つの床に寢て居つたのであるに不拘傳染は百人中僅に二人位にしかすぎない。夫婦間でさへも斯樣に傳染し難いものであるから、病人の見舞に行くのを懼るゝなどは全く愚の至りである。「イングランド」の結核傳染に關する統計的研究の結果は夫婦共に結核にかゝる機會の尠いことは、精神病と同一程度であると云はれ、又獨逸では夫婦間にうつると云ふことは癌よりも尠いと云はれて居る。けだし癌は最近の研究の結果は傳染病でないと云ふことを確言してもよい位である。又肺結核を專門に取扱ふ病院の看護婦の結核による死亡率が普通病院より尠なきこと等によつても、成人間の結核の傳染が少しも恐るゝに足らぬと云ふことを了解しうると思ふ。かつて大阪の佐多博士は九州にて開かれた第三回日本結核病學會總會の席上で、余は肺病の傳染を懼れ

て肺病患者に接するに「マスク」を用ふる人を見て自ら滑稽の感を禁じ得ない』と云ふて居る。

發病と傳染の問題

茲で特に注意して置きたいのは、傳染と發病との關係である。馴地の我々は前述せる如く常に結核菌にさらされて居るのであるから、毎日常に傳染を多少受けつゝあるのである。然し如何に傳染しても發病しなければよいのである。のみならず、輕度の傳染が繰り返へさるゝことは、結核にかゝり難き免疫質を生ずる上に於て利益があるのである。即ち輕度の傳染は即ち發病し得ざる程度の傳染は我々が自然免疫をうける最も必要な條件である。然らば傳染して發病しうる場合には如何なる場合であるか。これが實際問題として重要である。

傳染して發病しうる場合は濃厚傳染と瀕回傳染と兩方が兩立する場合が主なるものであつて同時に個體の抵抗力の弱つてゐる場合である。たとへば家族傳染は其の一例であつて兩親若しくは老人等が重い開放性肺結核にかゝつて、痰と咳がはげしく、其患者に日々接して、しかも患者が不潔で痰や咳の注意が行屆かず、同時に經濟上や看護や其他の苦痛心配によつて家人の身體が弱はり抵抗力が弱る場合にはたとへ成人であつても、傳染して發病し得ることの危險があるのである。即ち夫婦間傳染の二%は之れに相當するのである、之を要するに傳染の危險は無數の結核菌に毎日常に出會ひそして身體の弱つて居ると云ふことが主なる條件である。即ち結核の傳染發病は主として接觸傳染であるから、所謂空氣傳染など少しも恐るゝには足らぬ。人間の純粹の呼氣にはたとへ重症の肺病患者であつても結核菌はないのである。又純粹の唾の中にも結核菌はないのである。一たん日光にさらされて飛散する街上の弱はめられたる結核菌なぞはむしろ比較的免疫を得るに利益があるのであるから徒に恐怖してはならぬ。恐怖は一般に身體の抵抗力を弱め諸種の病氣にかゝりやすくするのであるから注意せねばならぬ。以上に依つて遺傳、素因、傳染發病等の問題は大體理解されたと思ふけれ共詳細は結核の豫防治療撲滅問題に就て云々と題して本年三月十一日と十九日及び五月二十一日の日新醫學社發行の醫事公論に書いて置いたから御一讀をわずらわし度い。

茲で猶一言附記して置き度いことは成人間に傳染して發病することが以上の如く少いに不拘、なほ多數の死亡者を結核によつて出すは何故かと云ふ問題である。之は我國の如き結核の馴地に於ては、すでに四五才以上の者は前記の理由によつて皆多少結核にかゝつて居るのであるから、この潜伏して居る結核を發病さする機會が多いからである。即ち統計的研究によつて見ても傳染發病したと思はれる場合でも、多くは肉體又は精神の過勞殊に試驗地獄、不節制、心配、過度の運動、婦人にあつては姙娠分娩家庭の不和等によつて身體の抵抗力が弱り、これまで傳染して一程度の免疫を得て體內に潜んでゐた結核が發病する事が多いからである。故に肺結核の豫防中最も必要なるは身體を平常より丈夫にし、潜伏し居る結核を發病せぬやうにすることである。故に負擔過重の教育革新問題中殊に國字改良が重要問題となるのである。療法についてかん單に述ぶれば、凡そ結核及び肺結核の大部分は非常に重症なものか或は稀にある初より極く性質が悪く始

つてくる場合の外は比較的手輕でも、合理的に徹底的に治療すれば意外に好結果を奏することは最近我々の經驗で段々明かとなつて來た。一體結核で死ぬのは前記の如く非常に重症な場合であるから之等は素人にも肺結核と云ふことが直に分る。故に肺結核者は皆死ぬと云ふ誤解が今でも中々深く國民の頭に浸入して居る。肺結核の治ると云ふことは確であつて臨床上は勿論、病理解剖學上よりも明である。たとへば高齢に達して他の病氣で死せる人を解剖して見ると肺のある部分に結核があつてよく治つて了つてゐる有樣を見ることが非常に多い。肺結核は治るけれども、然し豫防上からも治療上からも今日學界から承認を受けた特効藥は勿論、ワクチン、血清療法等もないのであるから、誇大な廣告などに迷つて治療の時機を失してはならぬ。

療法中最も大切なこと

第一は精神と肉體的の安靜である。西洋の醫學ことに、獨逸の物質的醫學に心醉せる從來の我が醫學は今日まで餘りに醫療上精神上の影響を輕視して來たではないか？　いやしくも肺結核の治療に當つて患者に精神の不安があつたならば治療の好結果を得ることは殆んど出來ないのである。我々が甲乙よく類似せる患者を治療するに當つて甲は以外に經過よく、乙は以外に經過の惡い場合に遭遇する。此の兩者を詳く調ぶれば乙に必ず何處かに手ぬかりがあるのである。即ち治療上不徹底な點があるのである。其の不徹底な點のうちで殊に精神の不安は重大であつて甲の人は何か宗教上の信念でもあつて醫師を信頼して悠々病氣の治療を確信して居るやうな狀態を發見するのである。迷信に陥らざる宗教上の信念の缺く可からざることは吾人に然りであるが、殊に結核の治療に臨んで特に之を要するのである。國民の宗教を除外に比するが如きは輕視された宗教及び敎育進化の弊害のみを見たる淺見者流の唯物的謬論である。人間の精神的環境によつて最も健全なる社會を建設することが結核治療上にも特に必要なることを今更のやうに考へるのである。かの「太陽」七月號に賀川豐彦氏が新理想主義を高調せらるゝが如きは洵に吾人の意を得たものであるけれ共斯くの如き高遠なる理想的社會を建設するの前途は遼遠なるを遺憾とする次第である。寧ろ武藤山治氏等の政治を道德的經濟的に革新せんとする主義政策が現時の日本に最も適切であると信ずる。第二に必要なるは身體の安靜である。今日の急進行性の肺結核、肋膜炎・腹膜炎等は此の精神と肉體の安靜をのぞいて治療はないのである。殊に前記の如く心配は害があるのである。身體の安靜の程度は其の病狀によつて決して一定するものではないが上記の場合に運動の害のあることは言ふまでもない。又身體の安靜の必要なるは人工氣胸療法の成績に徵しても明かである。

次に面白い例を簡單に述べると、此の頃ある大學の病院に入院して居た肺結核の患者が治らなければならぬのに經過が面白くなく僅かの熱がどうしてもとれなかつた。經濟上の心配があると云ふことが判つて、其の患者を施療室に移した處二三日にして急によくなつて其後二三週の後に退院が出來たと云ふことである。經濟上の不安が如何に大なる影響あるかは此の例によるも明瞭である。然るに現今の如く國民一般が政治的に理解なく且つ冷淡で一部の職

業政治家に政治をゆだね社會國家主義を呪ひながら、本主義に類似せる政治を行ひ民間の有利なる事業は片端から政府に取上げ之を不生産的に經營し民業を壓迫し國家萬能主義を發揮し生産の低下を來たさしめ、不景氣、輸入超過、國民は重税に苦んで居ると云ふ有樣では結核問題の根本問題である生活の安定向上などは思ひもよらぬ、明日のパンにも差支へると云ふやうな狀態に國民の大多數を置いて結核の豫防撲滅を如何に叫んで見たところが効果の擧らぬのは當然である。

結核の治療に食物の大切なことは生活の安定向上の理由によって明であるが、一口に言へば、胃腸を惡くしない程度に於て充分によく嚙んで澤山たべることである。殊に青年男女の本病には、このことが必要である。特に健康な人よりも少し多く動物性蛋白質脂肪及新鮮な果物、青い野さい等を好みに應じてたべるやうにせねばならぬ。但しあながち高い魚や上等な肉をたべる必要はない。いわし、さば、たら、どぜう、豚肉等脂肪の多いやうな魚が胃腸の消化が許せば結構である。又きらいなものを無理にたべても餘り効果がない。それ等は醫師の指導を受けねばならぬ。

「カロリー」さえ充分であれば善いと考へて居つた時代もあつた。即ち牛肉の一定量と豆腐の或る量と「カロリー」が同じであれば營養價は同樣と考へたこともあつた。併し之れは誤りであつて「カロリー」の外蛋白質脂肪の良否殊に「ヴヰタミン」等の有無多少が大に營養上問題となつて來た。以前は蛋白質、脂肪を單に動物性植物性に區別して消化吸收の難易良否により區別して居つたのである、消化吸收同化の難易は勿論重大なる問題であるか同じく蛋白質と云ふても此の難易の外獨逸の有名なる化學者「エミール、フヰシエル」氏の多年の大研究により蛋白質は二十數種の「アミノ酸」により最も複雜に構成せられ同じく動物性蛋白質と云ふも其の營養價は千差萬別であることが知れて來た、併して其の「アミノ酸」中「リシーン」「トリプトワアーン」等は最も重要なる「アミノ酸」であつて之れが人間の身長體重等に大關係があると云ふこと迄明かとなつて來た。同じく動物蛋白質である「カゼイン」と「ラクトアルビン」で營養試驗をやつて全く異なる成績の現はれるも此の理由によるのである。又脂肪、類脂肪に就ての最近の研究は「ヴヰタミン」含有の多少有無のみならず其の他免疫學上にも大なる關係のあることが追々知れて來た、之れを要するに同じく蛋白、脂肪と云ふても千差萬別であつて特に動物性の物が我々人間の營養上貴いことを今日の科學は教へて居る。其の他含水炭素に就ても重要な研究があつて今迄の「カロリー」以外に種々の中毒に對し効果あることが發見されて來た。此の重大なる研究は主として我日本の三田博士の教室でなされたのである。最近葡萄糖の注射が行はれるのは此の理由にもよるのである。又此地の結核の豫防治療に營養強壯療法の重要なるは、前述の二通りであるが、第四回日本結核病學會總會に於ける長濱博士の「蛋白性食餌と含水炭素性食餌の結核感染に及ぼす影響」なる論文を一讀しても明かである。

●藥としては特効藥はないが一程度有効な藥はあるから必要により注射或は内服として用ゐるのである。たゞし餘り藥を使ふのもよくないが藥を輕視するのもよくない。中庸を要する。之を要するに患者と醫師及び看護者の忍耐が兩立して双方よく理解し手ぬかりなく愛と誠を

以つて治療をなし又受けることである。結核療法は今日でも最も平凡なる滋養衞生療法が主なるものであるから誇大な宣傳や廣告に迷つて便の治療を誤つてならぬことを再言して置く、入院轉地必ずしも必要ではない。事情が許さなければ自宅で徹底した治療をさへ受くることを得ればよいのである。轉地の出來ざる人に轉地を無理にすゝむるが如きは患者を毒するものである。又青年男女は轉地の時を誤つて轉地中病を悪くすることが時々あるから注意せねばならぬ。

凡そ肺結核は一般の方には一樣に見えるけれども其の症狀經過千差萬別であるから各個人々々によつて治療をうけねばならぬ。この意味に於て診斷は醫師の生命である。診斷をせずに治療を受け或はなすのは、たまくまぐれ當りはあつても危險が常に伴ふ。大いに注意せねばならぬ。又近時肺結核の診斷はX光線のみで出來るやうに考へる人があるけれどもそれは誤であつて、今日の診斷は決して一方に偏して出來るものではない。打診、聽診、既往症、熱の有無、咳の驗查等すべて必要であつて、之等の結果を綜合して診斷の上治療を始めるのである。

尚一言すべきは比較的重症な患者であつても夏は勿論冬であつても慣れてくれば部屋を解放して治療することである。即ち空氣日光に親しむことが本療法中必要な條件である。「早く結核を退治した國が他の民族を壓する」とは英米國民の信條であるさうだ。讀者諸君以つて如何となす。

之れを要するに結核の豫防撲滅治療の達成は早朝診斷により發病の豫防す可きは豫防し、治療の必要ある者は治療を加へ、危險なる重症

開放性肺結核者のみは隔離又はグランシェ氏法に類する方法に依り、其の患者より老、壯、幼、少年少女を隔離し、一般國民に向つては生活の安定向上を策し、教育の改善に依り、青少年男女の學業負擔を輕減し、潜伏結核の再發を防せぎ得ば期年ならずして驚く可き好果を擧げ得るのである。一般の生活安定向上を恰も空論に近かき雖事の如く論ずる輩もあるが、之れは政治に理解なき者の言であつて、國民が政治的に覺醒さえすれば、明日からでも着手し得る仕事である。即ち吾々の主張するが如き政治的革新が實行さるゝに至らば、生活の安定向上は期して待つ可きである、要は吾々國民が政治的に自覺し立憲政治と國民の經濟生活の頗る密接なるを正解し、大切なる我々國民の資本たる國費を監費し民間經濟を壓迫し、吾々國民の生活を脅すが如き惡政治を革新せねば豁し其目的を達することは至難である。

立憲政治は一國民が相互に協力して平和なる一大家庭を造らんが爲めの政治に過ぎぬとは、誠に味ふ可き言ではないか、最近二年間に物價は約一割六分下落し政府の歳出は反對に一割三分增加して十七億三千萬圓以上になつたことは何を暗示し居るか、云ふ迄も無く政府の濫費である、濫費を改め國費の大節約を行ひ、減稅公債の償還等に依り民力休養を企て眞に生產の發展を助長し順次積極的政策に移り得るやうになれば結核の豫防撲滅に要する財源も出來國民の生活も安定向上し得るのである。

肺結核のX光線診療法

醫學博士　宮原立太郎

肺結核は治癒し易き疾病である

往古より肺結核は社會に害毒を與ふるを以て、之を豫防撲滅することは甚だ緊要のことである。而して打診聽診が發達してから、多少本病の樣子がわかつて來たが、未だ不充分であつた。然るにX光線が發達して以來甚だ明瞭に內部狀態を知ることが出來る樣になつて來た。本病が結核菌なる黴菌によつて、發生することが凡そ五六十年前にコッホに依て發見されて以來、本病が傳染病なることが確實に實證されたのである。從つて遺傳病ではなくて、その結核に罹つてゐる家族は傳染の機會が多いのみならず、虛弱體質が遺傳されるからして、容易に結核菌の浸潤をうける。

それのみならず、輕重こそあれ、文明人の大多數は結核に罹つてゐるのである。恰も痲疹に罹る樣に、子供の幼少時に於て既に大多數が罹るのである。子供が生れ落ちるとすぐに呼吸をするから、何れの日にか空氣中の塵埃に結核菌が混入して、そのものを吸入する樣になるのである。病は知らず識らずの間に、發生して知らずに直つてゐるのである。かゝる狀態は自然治癒の狀態にあるのである。これが不養生の場合には、再三再四反復して終に病變が勢を得て、發熱するとか、咯痰が出るとか、倦怠をおぼへるとかの容態となつて發病すると云ふ順序になる。故に結核の反應試驗をすると大低の人が罹つてゐると云ふことが實證されてゐるのみならず、X光線の診斷によるに大多數の人が肺結核に罹つてゐて、眞の健康なる肺を見ることは比較的稀である。

斯く大多數の人が肺結核に罹つてゐるのだが、實際上の問題に於ては、發病する人はその僅かに過ぎない。既に發病せる人が、その治療の如何なるを論せず、昔から治つてゐる人があるのを見ても、ずい分治癒すべき性質の疾病なることがわかるのである。胸廓異狀の人があるが、即ち鳩胸とか、漏斗胸とか、或は扁平胸とか、又胸廓細長とか普通の人と異つてる胸の形をしてゐる人がある。之等の人が過去に於て虛弱な人もあるが、著しく疾病を經驗をしない人もある。之等の人は以前は肺病に罹る素因があると云ふ說が信じられてゐたが、私が之等の人をX光線で精細に檢査して見た所が、多くの場合に肺結核に罹つた結果現象として胸廓に變化が來たと云ふことを見出した。それにも拘らず、かゝる人にして、肺結核の容態を起さずに、健康に經過して

ある人がある。その事實より考察してみても、肺病の初期には、よく吾人をして、治癒せしめて、病痕をなからしめると云ふことが了解される。實に自然の力位偉大なものはないのであるが私は獨り肺結核と云ふ病氣から見ても、自然の神の力の偉大なることがわかるのである。故に肺結核に罹つてゐても決して失望落膽することはないのである。養生と治療法の良しきを得れば、完全に治癒し、或は又再三反復して再發することがあつても、治癒し易きものだからして、悲觀するの必要はない。弱くても只一口に虚弱と云る程度に過ぎずして天壽を完ふし得る事に努力されゝばよいのである。

△X光線の診察の由來

X光線は獨逸のウルツブルグ大學教授ウイルヘルム・コンナード・レントゲン氏が一八九五年の末に發見せられたもので、一種不明の新光線即ちX光線と云ふ題で物理學界の席上で演說した。次で氏の名譽の爲にレントゲン線と命名されたが、その研究が進むに從ひ、光線の性質が少なくて、一種の放射線であると云ふ關係上、X放射線とも云ふが、更に深い研究の結果は太陽光線と同じく光線の性質を有してゐるので、X光線と云つて差支へないことが明瞭になつて來た。醫學上では、このX光線の持つてゐる種々の性質中、物體の透過すると云ふ點を診療に利用し、又生物を破壞する點を治療に應用するのである。例へば察診には、骨の如くその構造緻密なるものは、X光線を透過しないが、柔かい部分はよくX光線を透過する。肺の如きは病氣でない部分はよくX光線を透過するが、病變の部分や大なる氣管支、血管は透過しないから其の差異を表現して影繪に現ふのである。

胃腸の如きは透過せざる金屬性の粉末を食物に混じて飮ませて其の關係を明瞭ならしめる。百聞は一見に如かずと云ふ諺の如く、身體内部をX光線で照して見るのは誠に有益なる診察方法で實に文明の賜である。實に肺病のX光線診察の如きは、恰も羅針盤とも云ふべき程で、輕症結核でも、進行結核でも、よくその内部の狀態を知ることが出來る。

△X光線の診察は肺の内部を明瞭にすることが出來る

近頃は診察の技術が進步したから肺病の數が增へたのである。打診や聽診の外部よりの診察で肺病がわかつても、醫者は病人に明瞭に告げなかつたのが過去の習慣であつた。醫者もよほど立入つて聞かれなければ、進んで肺病なることを云ふことを避ける傾向があつた。之も肺病の性質、病の經過を了解しない爲に、醫者の肺病なる一言の宣告が、甚だ患者をして徒に悲觀せしめたり、又之が原因となつて離婚となつたり、自暴自棄となつたりするから醫者も愼重に發言をしなければならなかつた。が又一方に於ては、事實肺病であり乍ら養生と治療を怠る爲に病をして益々進行せしめる樣な場合もある。兎に角診察の方法と云ふものは種々あるが、打診聽診して肺の内部を覗つて、するのであるが僅かにその表相の變化を知るに過ぎないで、肺の深部狀態の眞相は知ることが困難であつた。最近二十年肺内の狀態をX光線で觀察して寫眞に撮つて明瞭にこの眞相を知ることが出來るやうに

なつて來た。誠に文明の利器としての恩澤に浴することを切に推稱勸告したいのである。

日本の醫學は近年世界列强と並列するのみならず、或方面に就いてはまことに優秀であるが、本邦は機械工業が幼稚なりと云ふことに就いては何人にも異論はなからうと思ふが、この機械應用のX光線の應用は本邦醫學にとつて、缺陥の一つの方面である。近時X光線の裝置を應用するもの日增しに增加はしてゐるがこの程度は未だに遲々たるを免れない。隨分世界大戰前から獨逸に於ては、病院にX光線を設備することは法律を以て命令されてある。又米國では諸公衆衛生上肺結核の豫防撲滅の爲に、X光線機械を二三臺づゝ大都市の諸所に設置して、無料で健康若しくは肺を疑ふ患者を診察して、適當に處理する。從つて肺病の罹患率は急激に減退しつゝある。何事も理論より實際を重んずる米國の國風として、肺病に對しても好成績を擧げてゐる。本邦がこのまゝで押し移るなら百年の後と雖も米國の今日の如くはなり得まいと其の道の米國視察談の一節にあつた。本邦はたゞ、純粹の學問のみ進步しても之が實際上の應用に至つては、遠く米國に及ばないで、徒に經費が足らぬとか、或は議論だふれをやつてゐることが多いので誠に殘念だ。

日本でも結核性の診察に從事する大家にしてX光線の設備を缺く人もないとは云へない。又之を設備して居ても、充分にこの機械の能率を尊重して好良なる寫眞を撮影して、之を診察上に有意義に解釋する智識を持つことを要する。漢法醫學の時代に於ては、打診聽診は行はなかつた。西洋醫學が打診聽診を行ふ樣になつて、診療上の一大進步を來した。又も時代は變遷して、X光線を應用する樣になつて來たことは、恰も飛行機、ラジオ、自動車が今日普及しつゝある樣に、X光線も盛んに應用される時代は到來すべきである。私は二十年前に心ひそかに思つてゐたことは、自動車が盛大になる時代にならなければ、恐らくX光線も充分には普及されまいと。觀れば自動車も道路の破壞、行通の妨害者の樣に誤解された時代もあつたかの樣に、X光線も私が、時代よりはすこし早く應用した爲に、種々の困難と戰つて來たのである。

△X光線診察の結果從來の學說に變化を及ほせる狀況

從來肺病に關して小兒は肺門乃至氣管支腺結核は本體と云はれてをつた。然るに成人に於ては肺尖結核は初期の結核即ち、本體として認められてをつた。肺病は小兒の肺門氣管支型と成人の肺尖型として記載されてをつた。然しながら子供が成長すれば、大人になるのである。それにも拘らず、小兒の結核が蔓延して成人の結核になるべき順序なるにも拘らず、獨り大人の結核は肺尖型として論ぜらるゝ理由は、何處にありや。臨床家は肺の內部の狀態を觀察し得ずして肺尖近傍を精細に檢査して、こゝに病變を見出し易きを以て肺尖說を主張して居る。それに病理學者も、黴菌學者も追隨して、肺尖說と云ふことになつて、幾多の實證が擧つてゐるが、要するに、鹿を追ふ獵師山を見ず、の例の如く、肺全體の觀察を度外視して、肺尖のみを注視した爲に誤解に陷つたのである。

[illegible]

氣管に達して這入つた微菌が、[illegible]し、氣管支の内部に浸入し、その何れの部分の病竈を形成しても、恰も一家のうちに門番が居るが如く、肺門に多數の淋巴腺が存在してゐるから、この部分に戰鬪が起つて、淋巴腺の腫張を來すのが、病氣の初期變化である。そうしてその時代には、未だ病氣の容態はない。恰も首に瘰癧が出來ると同樣に淋巴腺が腫張しても、餘り容態がないのは、當然の事である。それが長き年月の間潜伏結核として存在し、或る機會に於て進行して、肺尖其他肋膜の方面に波及するのである。然るに從來は肺尖並に肋膜炎の容態が起つたときを、初期結核と云つた。豈計らんや、病源はその以前より存在してゐるのである。而して肺病で死ぬ樣な重症の場合に於ては、肺門の病變の如きは、火災の火元の樣なもので、病變は存在しないから、誤解に陷り易い。然し小兒で死んだ人を解剖して肺門腺が初期結核であると云ふことを確めたのはゴーンと云ふ學者であつた。それから次第に研究が進んでX光線の專門家では生き乍らにして輕症結核を澤山に診て、肺門腺の結核が初期結核であつて、肺尖は屢々來る二次的變化であることがわかつて來た。從つて小兒の肺門結核からして慢性に經過して、肺尖結核となるのである。獨り肺尖のみならず、甚だ屢々肺尖の下方が侵されるのである。又肋膜炎となつて、肺の下部が初期に侵されるのである。從つて肺尖が初期結核なることが、素人にまでは知れてゐるが誠によくない誤解であるから、私は肺尖結核なる名稱を取り去り輕症結核とか初期結核と云ふべきであるとして著書には擧げて居るが、未だ一般に普及されては居ない樣だ。

[illegible]する學說も、[illegible]牛乳より[illegible]して、[illegible]することを[illegible]合してあるが、これは牛乳中に混ずる微菌が腸を經て傳染すると云ふ消化管の傳染說である。又前述せる如く、塵埃に混じた微菌が傳染するのは氣道の傳染說である。或は又皮膚、粘膜を通じての傳染說もある、この傳染して身體内に這入つた微菌は淋巴腺に浸入して、戰鬪を起して腫張を來す。之よりして次第に各種の變化を起すのである。これを淋巴系統の傳染說と云ふのである。今日X光線の發達して以來、この說が急に有名となつて信用される樣になつて來た。二十年以前には流血中の結核菌の存在することが盛んに議論されたが、重症結核でない限りは、血液傳染說は成立しないやうだ。

肺の解剖學の如きは既定の事實だと思ふのは誤りでX光線が開けてから、眞事實に基き詳細に十數年間に亘つて、米國のウイリアムスノーが研究して、種々の新事實を擧げてゐる。從つてこの解剖學と病理學並にX光線所見と相俟つて、學說の進步を來したのである。

肋膜炎に罹れば結核にかゝり易い樣に從來より云つてゐたが、結核性ならざる肋膜炎も多數に存在する樣にも云はれてゐたのだ。兎に角肋膜炎は非常に多い病氣だから、之が結核性か非結核性かに關しては、種々議論ありと雖も、吾輩がX光線所見の結果は、たとへ肋膜炎は輕症でも結核性として取扱ふのが誤りがないと思つてゐる。

X光線治療の發達

X光線の治療は、まだ機械の幼稚なりし二十年前に於ては、皮膚

病、例へば疾疹、頑癬、腋臭等の身體表面の病氣に利用して、次いで頸腺結核、（瘰癧）に利用してよく治ると云ふことがわかつた。更に身體内部の病の白血病、（これは脾臟が腫れる症）骨關節の結核、結核性腹膜炎の如きに應用された。

近來機械は長足の進步を遂げて、數萬圓を要する廣大なるものとなつて、難病不治の癌腫に利用される樣になつて來た。癌は不治の病症なるを以て世界各國等この研究に熱中してゐるのである。世界大戰中に於て、聯合國側では、X光線の應用中主として、診察に關する方面の研究が行はれた。その當時は獨墺の醫學とはその交通が絕えてゐたが、その狀況を知り得なかつたが、不和と同時に彼我の文獻が交換されるに至つたら、豈計らんや、彼等は從來の機械より一層强力なるものを製作して、癌腫の深部治療に盛んに應用するに至つた。殊に子宮癌、乳癌皮膚癌等の手術不可能のものに應用して、之を全治せしめ、或は生命を延長せしむるに至つたから、本病に對する手術療法と相俟つて、然も手術不可能の場合には最高權威として稱揚せらるゝやうになつた。

癌は甚だしく難病なるを以て獨逸に於て發達せる機械にては、その治癒率も僅少の範圍に過ぎないから、米國にては更にその勢力に於て十倍も增加せる機械を六百萬圓の資金を投じて研究、完成した、即ちジエネラル、エレクトリックの技師長クーリッヂ氏の發明にして世界販賣權を有する管球即ちX光線に使用するランプが、獨逸に於て大戰中一層强力なるものとなせるを知り、親しく之を觀察した結果、更に裝置として、十倍の能率を發揮せしめ、以て癌の治療に使用した。

本邦に於ては、一昨年春聖路加國際病院でこの强力な製造を設備した。而して米醫キユービ氏が主任であつたが氏の歸國後余はそれを擔任して本邦に於ては何人も未だ經驗しなかつた强力の裝置を使用した。その成績の優秀なるに鑑み、この機械を日本化せんが爲に、大日本レントゲン製作所長室工學士を招き、更に一層優秀强力なるものの製作を依賴して昨年十月來より余の病院に於て使用する樣になつた。以つて癌腫との戰鬪に努力つしゝある。

肺結核のX光線深部治療

X光線の發見さるゝや幾何もなく、その生物を破壞する性質に基き、慧眼なる巴里大學教授ベルゴニー氏によつて使用された。而して多少その成績を見るべきものもあつたが、主としてその多くは重症結核なりし爲、その豫期する結果は得られなかつた。その後多少臨床上に使用した人もあつたが、學術の基礎は薄弱であつた。然し乍ら瘰癧、腹膜、骨關節の結核に應用して顯著の效能を認められた。それにも拘らず、何故に肺結核に應用せられざるをあやしみつゝあつた。故に私は歐米の新しき雜誌が到着するとこの件に就いて注意を怠らなかつた。又余自身も動物實驗を企てたこともあつた。其後今を去る十數年前獨逸フライブルグ大學のキッブレル氏が動物實驗に於て結核病變のよく治癒するを認め次いで人體に應用して、顯著の效果あることを發表して以來、吾人も盛んに使用する樣になつた。而して今も尙盛んに使用してゐるが、一九二四年に即ち四年前に、肺結核並に喉頭結核

のX光線治療に關する著述が、獨逸フライブルグ大學のパークマイステル教授に、リックマン氏に依つて出版された。而してその著述を同大學の教授にして先年本邦に來遊せる病理學界の泰斗アッショッフ「本邦の大部分の大學の教授はその門下生なり」並に、ドウ・ラカシブの兩先生に向つてこの著述を感謝と共に名譽なりとして捧げたる著書が出版された。その內容は肺結核レントゲンの治療に關する原理並に之が應用に關し詳細に記載したものだ。

肺結核はその病形甚だ種々にして千差萬別である。慢性に經過するは本病の本體であるが、時に急性症があつて又甚だしきにあつては奔馬結核の如きがあつて、數週間にして死亡するのがある。急性の症は大體に於て高熱を伴ひ易い。之に反して慢性症は微熱持續するか、或は無熱に經過するのがある。又胃腸の症候を主とし或は神經衰弱の症候を主とするがある。要するにその經過慢性にして、依然として治癒し難き症にX光線の治療をすれば、三四ヶ月間にして多くの場合は著しく輕快する。普通三四日をへだてゝ治療するを規則とするから、外來患者に適當なる療法である。

肺結核に罹つてゐて職業に從事し得る種類の人、小兒なら通學し得る程度の者は非常に多いものだ。之等の人が一般の養生並に服藥の如きにては只慢性に經過するのみで、治癒しないことが多い。それをX光線刺戟治療によつて補助すれば、容易に自然治癒機能を催進せしめて以て治癒せしめるものである。たゞ發熱の八度以上もあるやうな場合の如きは、安靜を主として、下熱するのを待つて後にこの療治を行ふのだ。然し乍ら七度五六分位の熱候が、數ヶ月に亘つて持續する

隔な場合にもこの數量を加減すれば、病變に卽應することもある。

慢性硬結性結核(結節性結核)の如きによく奏功するのだ。之と反して滲出性結核の如きは奏功し難いが、之とてもX光線の分量に注意して放射すれば早く滲出物が吸收されて、結節性結核に變化する。以て治癒を催進せしめるのである。然し乍ら之が治療上の應用に關しては、細心の注意を要するを以て、熟練せる專門家に就いて治療を受けることが緊要である。

紫外線の治療をしてX光線治療の有力なる補助療法とするのである。夏期海水浴場等に行きて日に燒けるのは大陽中の紫外線の作用である。夏海水浴に行けば感冒に罹り難くなるのは皮膚が強壯になるからである。この日光の作用を人工的に應用するのが紫外線の電氣裝置である。故に之を一面人工太陽とも云ふ。小兒の結核の如きはX光線を使用せず、この紫外線のみにても良好に治癒する場合がある。紫外線とX光線の差異は電氣的に云へば、その波長が前者は長く、後者は短きに過ぎない。故に紫外線は一枚の半紙或は布で濾過が完全にされると云ふことは、彼の海水浴の際に衣服を纏へる部分は日燒けのないのでもわかる。さればこの紫外線の治療は皮膚の表面並にその血管に作用して、その効果を內部に及ぼすのである。之と反してX光線は、身體內部迄光線が浸入して病變に作用するから紫外線より一層有力なのである。

X光線は、以前腹膜炎の樣な深部の結核に應用し効果のあつたのにも拘らず肺の內部には到達し難いと云ふ批難もあつた。しかし乍ら現今に於ては、前述せる如く深部治療が發達して、癌腫に應用する樣に

なつたのだから今日では深部作用を疑ふ餘地はなくなつたのである。然かのみならず、癌腫には破壞量とて多量の放射を必要とするが、結核には少量の刺戟量を反復して用ふるに過ぎないのだから、獨り肺結核のみならず、喉頭結核にも用ひてよく治癒せしめる。本症に對しても以前は深部だから効能のないと云ふ時代もあつたのだが、現今に於てはよく治癒せしめ得る。たゞ喉頭結核と同時に肺結核は重症に陷つて榮養が衰へてゐる人は治らないのも止むを得ないから、獨り喉頭結核のみならず、肺結核に於ても同樣の狀態に陷らないうちに、早期に治療を受くべきである。

肺結核は前述せる如く慢性で治療し易き疾病なるを以て、その治療法は甚だ種々ある。服藥も種々なり、注射藥も種々なり、又海濱に或は山間に轉地する治療もある。然し乍ら結核としての瘰癧は、敢て重症ならざる疾病なりと雖も本病が如何なる治療法も奏功し難きを以て除去してもその半數は再發する統計である。誠に困つた頑固の病氣であつた之がX光線で奇蹟的によく治る。而して肺內部の傳染蔓延狀態もこの淋巴系統の防衛裝置が先づ第一に戰鬪を開始するのである。故にこの淋巴系統の病變を治癒するものでなければ、顯著なる治療的効果のないことは了解される。然るにX光線を除いては少くともその半ばの功能のあるものさへ、瘰癧に對してはないのだ。然らば身體內部の疾病たる肺結核に對してもその何れの方法が最も適當なるかと云ふことは容易に了解されることだと思ふ。しかし乍ら政治に各黨派並に種々の時代がある樣に、醫學に於ても種々の學派があつて、時代と共に消長推移があるから、何れの治療法を受けるのにも、素人でも充分自覺を要求すること恰も多數の代議士の立候補に對してその何れを選ぶかと同樣である。

最後に一言すべきは、肺結核の治療法としては安靜を主とすべきことは論を俟たないので、咳嗽あるものは鎭咳劑を與へ、食欲不進の者には消化劑を與へる等一般醫學の通則は素より重要視すべきことである。素人は動もすればX光線專門家を目して、機械屋と誤解に陷るが如き弊があるが、吾人は素より內科醫の範圍に於て物理的治療として本療法を主張するに過ぎない。

（七、一七）

疾病及その救治の經濟的制約

——勞働者と肺結核について——

勞働科學研究所長醫學博士　暉峻義等

（一）

常によりよき、より正確なる觀察と方法とによつて日々に集積せられつゝある事實、これこそ科學。ことに社會科學の社會への忠實な寄與である。そしてこれらの事實こそは、人類社會の現實のありのまゝの姿であつて、それは人類社會の過去を通じて支配しつゞけた力の當然の産物であるとともに、吾々はこの現實社會の記錄からして、吾々の社會の將來を豫知し、他方これによつて人類社會の不幸を、一部分未然に防ぐことが出來るのである。

肺結核の現實を語ることは、現下の狀態に於ては、國民的不幸について語ることである。とにかく下層階級又は勞働者と肺結核について語ることは、多數の事實の示すところによると、誠に陰慘な氣に滿ちてゐる。而もこの陰慘なる現實は、その大部分、過去並に現在のわが社會の不健全なる發展の過程に起因するのである。けれどもこの陰慘な事實からのみ、この陰慘なる事實を凝視するものからのみ、やがては勞働者や無産者に關する眞實な運動が基礎づけられるのである。勞働者の向上、無産者の向上のために爲さるゝ凡ての運動の力の源泉は、正に無産者の生活の上に求められたる矛盾と不安と不調和の事實そのもののうちに求めらるべきである。

（二）

わが邦の結核死亡者は最近僅少ではあるが減少の傾向が見える。

年次	人口一萬に付結核死亡	人口一萬に付肺結核死亡
明治四十一年	二〇・〇	一三・五
大正二年	二一・二	一五・二
大正七年	二五・三	一七・八
大正十二年	二〇・二	一三・九
大正十三年	一九・三	一三・四

今これを英國獨逸等の結核死亡率に比すると、一九二二年には人口一萬に對し英國は一一人、獨逸は一四人であるが、我邦は二一人を示し、英國の約二倍の高率を示してゐるのである。かくの如き結核死亡の高率は、私の見解にして誤りなくば、その大部分は我社會の經濟的變遷にその原因を求めねばならないのである。私はこれについて多少の私見を披瀝して見やう。

先づ、わが邦過去二十年間に遡つて、肺結核死亡者の男女の年齡を調べて見ると、そこに驚く可き事實が吾々の前に展開せられて來る。表の結果から見ると、全肺結核死亡者に對する生産年齡にある肺結核死亡者の割合は、過去二十年間、逐次增加し來つたことが明らかである。前掲の一般肺結核死亡者率が大正二年（一九一三年）を最高として漸次減少しつゝあるにかゝわらず、生産年齡の肺結核死亡者の肺結核死亡全數に對する比率は益々增加しつゝある。男子に於ては約八人、女子に於ては約五人の增加である。更に女子生産年齡者の肺結核死亡は常に男子を超過してゐることも吾々の注目すべき現象である。全肺結核死亡者の男子の七二%、女子の七五%が生活能力の盛んなる又增殖能力の盛んなる生産年齡者の肺結核死亡者であると云ふ事實

生産年齢男女肺結核死亡者

年代	男子 男性肺結核死亡者全數	男子 15—50歳同死亡者數	男子 1000分比	女子 女性肺結核死亡者全數	女子 15—50歳同死亡者數	女子 1000分比
1906	36163	25812	71.4	39306	29371	74.7
1907	36575	25766	70.8	39169	28955	73.9
1908	37036	26352	71.2	39553	29483	74.5
1909	40260	27927	69.4	42363	21172	73.6
1910	40059	28316	70.7	42593	31629	74.3
1911	39310	27723	70.5	41456	30809	74.3
1912	40181	28682	71.4	41864	31159	74.4
1913	39584	28101	70.9	40649	30241	74.6
1914	40053	28682	71.6	41361	31093	75.2
1915	41030	29598	72.0	42164	31822	75.5
1916	42351	30443	71.9	44282	33337	75.3
1917	42657	30911	72.4	45315	34509	76 2
1918	47662	35482	74.4	51553	39434	76.6
1919	45260	34229	75.6	48757	37018	77.4
1920	42971	98723	1.67	44131	34135	78.0
1921	41650	56913	8.67	41253	32218	78.1
1922	42889	11233	4.77	42626	33133	78.4
1923	40689	88512	6.77	40858	32231	79.0
1924	40164	99313	2 87	39216	31041	79.1

は、誠に驚異に價するものである。かくの如き人口の中堅をなしてゐる年齢階級の肺結核死亡こそ、近代の社會組織の産業化から引き起された、經濟的社會的事情の漸進的な變化をその内容とするところの社會生活の變動、並にそれと同時なる多數者無産化に原因を發し、その無産者の集中地たる膨脹しつゝある都市の衛生學的特色をなしつゝあるのであつて、これこそ、彼のカウツキーの云ふところの『近代の經濟的發達は文化民族を肉體的退化に導き』、又マルクスの云ふところの『資本主義生産がいかに速かに、またいかに深刻に、國民力を根こぎにしたか、また産業に參加する人間の退化が、絶えず田舍から吸集された健康なる生命要素によつてのみ緩和せられる』と云ふ事實を最も雄辯に物語つてゐるのである。

（三）

又内閣統計局發表の死因統計によつて計算すると、死亡實數について觀れば、人口の最も多い農業が第一位を占め、全結核死亡者の約六割が農業者に屬する。工業は第二位であつて約一割を占めてゐる。併し死亡原因としての結核から觀察すると、結核で死亡する割合の一番高いのは、工業從業者、就中纖維工業の女子が第一位である。通信業の女子これに次ぎ、印刷業の男及女、通信業の男子、化學工業の男子と云ふ順序であつて、最も低いのは農業の男子である（鯉沼氏計算による）

この纖維工業に從事する女子に於て死亡原因としての結核病が顯著であると云ふ事實ほど、日本の社會にとつて重大な暗示をもつものはない。現在の工場勞働婦人の約八〇%が纖維工場に働く婦人であり、彼等は周到なる用意を欠ける、不良なる集團榮養のもとに、今尚徹夜作業を可憐なる弱年女子の上に課することを以て、所謂、社會的正義にもそむかず、その堂々たる、産業立國論とも些る矛盾しないものと

考へてゐる政治家や資本家達の支配下に生命の最低の生活を續けつゝあるのである。

私は既に他の機會に於てこれら靑年婦人勞働者の徹夜作業の害惡に關する科學的見解を屢々公けにしたからこゝには再びこれをとかない。ただ一言、染織工場に於ける婦人の結核死亡の高率は、一つに現在の勞働狀態の下では、過度の努力と疲勞とを必然の前驅條件としてゐることを附加しておきたい。短かい勞働時間、良い賃金、健全なる勞働諸條件、この三つはこの高率なる纖維工場勞働婦人の結核防壓、從つて社會的不幸の救治の主要條件である。だが勞働者の健康に關する限りに於ては、部分の利益のために多數を犧牲にすることを恥とすることを知らない。また科學的の基礎に立つて人間の向上をはかることに頗る不熱心なる我邦の今の政治家、資本家達に多くを期待することは出來ない。勞働者はむしろ自己の有するかくの如き環境を見極めることにより、自ら進んで積極的なる對結核戰を開始すべきであると思ふ。

併しこゝに一言すべきは、結核の發生についての職業そのもの〻直接的影響については、近時の學者の考察に從へば、一般に信じられてゐるほどに大きなものではない。勿論ある職業に於ては、肺組織を刺戟してこれに炎症を起さしめ、從つて罹患率を高める原因となる場合もある。又結核を誘發する危險をもつてゐるものもあるが、吾々は職業と結核との統計を視る時に留意すべきは、ある種の職業に於ては、特に身體の劣弱なるものが多くこれに從事する傾向があるため、又他の職業に於ては比較的强壯なもののみこれに從事し得ると云ふやうな事情のあるために、統計上には著しい差異が生ずることもあるのである。丁度わが邦の纖維工業などに於ては、私の見解に從へば、工場の塵埃そのものよりも、むしろわが紡績工場の勞働者が十二歲以上と云ふが如き抵抗力薄弱なる年少婦人勞働者であり、その勞働狀態が晝夜交代作業であつて、十時間乃至十一時間勞働が强要せられ、加ふるに勞働力と發育とを支持するところの榮養品の供給が不十分並に不良であると云ふ理由にもとづくところの結核罹患者が多數であるであらう。

今私をして現下の社會狀態のもとに於ける勞働者の高率なる結核死の過程を明確に云はしむれば、

過度勞働、疲勞、それから感冒、次いで結核、そして最後に死、

この過程こそ、現代の無産勞働者に於ける多數結核死亡者の必然的なコースである。

(四)

私は尙も事實を語らう。事實が諸君に口を開く。

もう十年の昔のことゝなつたが、學校を出て間のない私は、前後三四ケ月間、東京のある貧民長屋に入つて、細にその健康狀態並に一般生活情況を調べたことがある。この時に私の眼に映じたこの極端な無産者の社會生活の上に現はれた事情は、いたく私を悲しませた。私は醫學研究生として、衞生學徒として、當然見ねばならぬ事實を見屆

けたと云ふ學究的な悦び以上に、矛盾と不調和と不幸とが折り重なつてその生活に迫り、逃れ出づる術とてもなさそうな悲慘なる事實を、かの帝都のうちに發見した悲しみはより大きかつた。當時に受けた私の感銘は、其の後もずつと私を導き、私の研究的生活の指導精神となり、私は今も尚、當時の調査に密接に關連した研究を行つてゐると云ふ考へを捨てることが出來ないでゐるのである。

この極端に於ける無産者には、花柳病を有つてゐるものが三六％もあつた（男子）。そしてその大部分は未治療のまゝに放任してゐた。アルコール中毒者が特に私の眼をひいた。その子女の多くが肺結核で死んでゐる、低能兒、白痴、癲癇が現はれてゐた。犯罪者が多く輩出してゐた。又肺結核患者が多數であつて、これらは到底施療病院に收容しきれないもので、僅かに濟生會の出張所の救療を受けてゐたものである。

これだけの事實をあげても、今日吾々の社會的疾患であると唱へてゐるもの――花柳病、結核、アルコール中毒――がいかに下層無産者階級にはびこつてゐるかゞわかるであらう。（詳しくは拙著社會衞生學參照）

また大震災後佛國の援助のもとに出來た佛蘭西寄附病院業績報告（大正十四年）によると、この病院に救療のために收容せられた罹災者の學校兒童六七三人と、收容はしないが罹災者である學校兒童三一人と、それから有福な家庭の兒童の多數を占めてゐる慶應幼稚舍生徒二一四人との結核罹患率檢査成績は左の如くであつた。

兒童の種類		檢査人員	結核總數 實數	結核總數 %	著明結核 實數	著明結核 %
收容兒童	健	六二	二五	四〇・三	一六	二五・八
	中等	一七二	七一	四一・八	四五	二六・一
	稍弱	三六一	一八二	五〇・〇	一一五	三一・三
	虛弱	四七	二八	五九・五	一四	三〇・〇
	計	六七三	三二三	四七・九	一九六	二九・一
對照小學兒童	健	三一	一六	五一・六	六	一九・三
慶應幼稚舍生徒	體格良	四七	五	一〇・六	—	—
	中等	九六	一五	一五・七	—	—
	不良	七一	一一	一五・五	—	—
	計	二一四	三一	一四・五	—	—

右の結果に於て吾々の最も注意を要するは慶應幼稚舍の如き有産階級に屬する家庭の兒童に於ては、その結核罹患の證左あるもの僅かに一四・五％に過ぎず、而も著名なる病變を示すものは皆無であつたのであるが、救療を受けねばならない社會階級に屬する家庭の兒童の全結核罹患率は、前者に三倍して四七・九％を示し、あまつさへ著明なる病變を有する兒童が二九・一％も發見せられてゐる。ことにこの階級に屬する家庭の兒童にして外見上頗る健康に見えてゐる兒童の結核罹患率が五一・六％を示し、そのうち一九・三％に於て著明なる病變を發見することは見逃すことの出來ない事實である。かくて結核は先づ

無產階級の家庭に入りて先づそのいとけなき子女の健康を傷け、やがてはそれらの家庭をして更に一層の經濟的困窮に導くものである。
若し諸君にして勞働者街を訪れ、その若干戸についてその健康狀態を觀察する機會をもつならば、諸君は必ずそこに結核の惨禍がいかに、この惠まれざる社會階級に巣くつてゐるかを見ることが出來るであらう。

獨逸雜誌に報ずるところによると、貧民街に於て開業したる醫師の言によると、過ぐる歐洲大戰の第三、第四年に於ける肺結核患者數は、平時の約四倍に達した。即ち一人の結核患者に對して五人の感染者を出したのである。これは勿論戰時の窮乏による慢性的榮養不良と非常時代の過度緊張とが結核の害毒をして容易に繁殖せしめた結果に外ならぬのである。

慢性的榮養不良、狹隘なる採光不良の住居に於ける比較的大なる世帶員の過群生活、經濟的困窮、これら結核をして蔓延せしめ、病毒をして活動的ならしむる諸誘因は、正に現にわが勞働者、一般無產者の凡て具備するところである。

震災後に活動した濟生會巡回看護班員の手記によれば、(市政調査資料第十一册による)

「某は三人の子供ありて昨大正十二年冬より肺結核に侵され、淺草診療所の治療を受けてゐたが、病勢の進行意外に速かで、四月末全く病床に横臥するに至りました。然るに妻は姙娠中で五月十三日第三看護班の介補により健全なる女兒を分娩しました。然も就褥せしむる場所なきため、止むなく病父の床中に安臥せしめたのです」(第三看護班員手記)

私等巡廻看護に從事した最初から痛切に感じたことは容易に結核患者を收容させ得る結核療養所の澤山にないことである。僅かに六疊足らずの一室に盛んに喀血してゐる病人を中心に家族六人も一緒に寢込んで居るのを見るたびに國民の前途を考へずには居られないのである(第九看護員班手記)

これら看護班員の手記に表はれたる結核患者の狀態は、正に勞働者乃至は一般無產者の背後に、すきもあらばと迫りつゝある運命であると云つてよいのである。

かくの如き片々たる記錄にあきたらず、最近畏友小宮醫學士は、無產者階級と結核の問題を明かにし、更に進んで無產者に於ける結核撲滅策をしてより該切ならしめるために警視廳衛生部の援助のもとに目下東京の三河島に於て日夜調査に努力しつゝある。私も調査の始めから種々相談を受けた因縁で、小宮君の調査の進行狀態については可なり注意を拂ひ、その成績に大いに期待をつないでゐる、小宮君の語るところによれば、そこの勞働者の結核罹病率は隨分高率を示してゐるのみならず、勞働者の子女の結核罹病率が驚くべき高率を以て示されつゝあるとのことである。この調査の完了の曉は相當大きな問題が提示さるゝに相違ない。

私は今勞働者と結核病とについてこれ以上に適切なる資料を示すこ

とが出來ないのは遺憾である。實際わが邦にはまた社會的疾病、階級的疾病についての確實なる統計資料すらないのである。であるからこそ小宮君の調査の結果は愈々期待さらるゝわけである。

　私はこれらの多數の事實から、ある人間の有つてゐる環境の影響か、いかにこの極端に於ける社會階級に强く現はれてゐるものであるか、また兩親のさらされねばならなかつた社會生活の諸條件が、いかにその子女の上に影響し得るものであるか、更に相似た又は同樣なる生活狀態或は生活條件のもとにある一社會階級の人々が、いかに同樣なる『類素因』又は『社會的素因』を現はすものであるか、これを比較的に云ふならば、現在の社會に存在する諸社會的階級の間には、著しい衞生學的特異性――先天的及び後天的の――が存在し、諸社會階級はこれによつて制約せられつゝ、その種としての、或はその階級人としての過程をたどつて行くものであることを痛切に思はざるを得ないのである。こゝに疾病の階級性があり、その經濟的原因が橫はつてゐる。人類社會をしてよりよく進化せしめ、その幸福を增進しようとすれば、少くとも會社的疾病と唱へるものに就いては、この事實に突き入つて、これを粉碎し去らねばならない。そしてこは大部分、良き正しき政治の力に據らねばならないと思はれる。

（五）

　以上私は勞働者と結核病についての概要を事實について說明したのである。たゞ私の遺憾とするところは、私に與へられた紙數の關係で、勞働者達ちの間に結核病を慢延せしめ、結核病をして頻數ならしめる事項、或は新たに感染し又は潜く存在する結核病竈をして活動的ならしめる諸誘因についてこれを詳述し得なかつたことである。が、勞働者が衞生學的に見て誠に不利な生活環境を有し、それがためにいろ〳〵な生命の危險や勞働力の損傷を受ける。特にそのうちでも結核病が頗る慢性的な、比較的長日月に亘る疾病であるが故に、そが勞働者並びにその家族を困窮せしめることは他の急性の疾病や災害に比して比較にならぬほど甚だしいものである。

　勞働者――一般に無産者が他の有産者或は裕福なる階級に比して、結核に罹り易い先天的後天的素因をより濃厚にもつてゐて、そのために勞働者の間に結核が頻發すると云ふ事實以外、更に重要なる事情が勞働者と結核病について考へられねばならない。

　即ち若し勞働者たちが、不幸にしてその生活の唯一の資本たる勞働力を損傷する場合、勞働力の恢復、健康の恢復のための手段方法がまた經濟的に制約せられねばならないのであつて、健康保險法が實施された今日に於てすらも、尙疾病の救治は當の制約をまぬかれることは出來ない。そして疾病治療の經濟的制約は慢性病たる肺結核に於てことに勞働者に迫り來るものである。

　近世に於ける醫學、ことに細菌學病理學の進步は、人類社會に幾多の幸福をもたらした。そのうちでも『肺結核は治癒し得る疾病である』と云ふ病理學的、臨床醫學的經驗のもたらした福音は、いかに多くの人々を蘇生せしめたことであらう。今や肺結核が不治の疾病であると云ふことは、完全に一種の迷信に過ぎないことが明らかになつた

のである。

ところが、この肺結核は治癒し得べきであると云ふ近代醫學のもたらした福音も亦、同じく經濟的制約のもとにあり、良好なる經濟的條件のもとに於てのみの福音であつて、肺結核病者の多數を占めてゐる無產者は、多くの場合、この恩澤を蒙ることの出來ない現下の狀態は何たる矛盾と不幸であらう。

營養品の攝取、新鮮なる日光と空氣との間に於ける十分なる休養、良醫の支配のもとに於ける完全なる治療、これら凡て結核に對する戰鬪方法は、その大部分無產者の能力の外にあると云つて差支はない。加ふるに一般社會生活の艱難と軌を一つにして、漸次にその社會的經濟的地位の低下を餘儀なくせしめられつゝある醫師、從つて益々營利的に經營せられゆく醫業の業態は、かゝる孤苦無援の人々に對する救治の事業から本質的に遠ざかり行く。而もこの重大なる國民的疾患に對する國家的社會的施設は頗る貧弱であつて、僅かにその一少部分を救濟し得るに過ぎない。（現在大都市の有する結核療養所は十三都市、約二千の病床數に過ぎない。全國のあらゆる救療機關の結核病床數を合するも、おそらく五千床に達するまい。然るに結核患者數は約八十萬と稱せられてゐる）

かくの如き疾病の救治、ことにその多くの部分が正しからざる政治と、社會組織のもとに於ける生產的活動に根ざすところの結核病の救治が、富によつて制約せられねばならない現狀は誠に重大なる社會的民族的不幸であり矛盾である。そは確かに無產者の上におほひかぶさる陰影であるとともに、國家的社會的陰影である。そしてこの陰影は生產者階級の經濟的社會的生活狀態が、生產力と生產の悅びとを生むやふに改善せられざる限り、永遠に除去することが出來ぬであらう。

結核治療と鬪病

小酒井不木

一

「肺結核は治癒すべき病である」とは、今日の常識であるが、同時に、「肺結核に特効藥なし」といふことも、恐らく、知らぬ人は少ないであらう。いはゆる重症で、醫師に匙を投げられた患者が、みごとに治つた例はいくらもある。これ即ち肺結核は治療すべき病であるといふ證據である。然るに一方に於て、わが日本だけでも年々十萬人近くの患者が肺結核によつて死んで行く。これ即ち、肺結核に特効藥又は特効ある治療法のない證據である。

さて、治療すべき病であるに拘はらず、肺結核のために、凡そ五分間に一人づゝの同胞が死んで行くといふことは何故であらうか。こゝに結核治療上の大きな謎が存在する譯である。尤も、肺結核に限らず、他のすべての疾病は元來治癒すべきものであつて、たゞ特効藥のないために死んで行くものであると言へば言ひ得るけれども、肺結核は文明病として人類に最も廣く蔓延してつねに人類を脅かしつゝあるのであるから、この結核治療上の大きな謎は、醫師は勿論、患者も大に力を致して研究すべきものであると思ふ。

　解剖學上では、他の病氣で死んだ人々の百人中九十何人（いや、百人が百人といふ學者もある）の肺臟に、一旦結核に罹つて治癒した痕跡を發見することが出來る。これによつて結核は治癒すべきものであるといふことが愈よ確かめられる譯であるが、それにも拘はらず、多くの人は、醫師から、肺結核の診斷を與へられると、あだかも死の宣告を受けたやうに、今更ながら狼狽するのが常である。して見ると、多くの人は、「肺結核に特効藥なし」といふ原則を重んじ、從つて肺結核は不治であると考へ、「肺結核は治癒すべき病である」といふ原則を顧みないものと謂はねばならない。實際、多くの患者ことに重症なる患者は、肺結核は治癒すべき病であると說明しても、それを信ずることの出來ぬ狀態になつて居るのが普通である。從つてこれが、肺結核患者の死亡數を莫大ならしめて居る主要な原因の一つであると謂つてよい。

　さて然らば前記の「結核治療上の大きな謎」は、治癒すべき肺結核を患者自身が治癒させぬやうにして居るからだと解釋し得る譯であつて、現今の結核治療が、はなはだ不完全であるのは、醫術そのものの罪ばかりでなく、寧ろ、患者の主觀即ち心の罪であるといつてよいのである。從つて、結核治療の際には、この患者の心を適當に處置しなければならないのである。さうして、この患者の心を處置するのが、私の提唱した「闘病術」なのであつて、「闘病術」は決して、一部の人の考へるやうに、醫術に反對するものではないのである。たゞ、やゝもすると、患者の心が、現代の醫術に伴ふ弊害のために迷はされ易いものであるから、闘病術は、その醫術に伴ふ弊害に向つて反對するに他ならぬのである。

　たとひ現代の醫術が、肺結核を自由に治療し得ないとしても、醫術そのものは長い間の人類の經驗と研究とから成り立つて居るものであるから、之を排斥するのは誤つて居るのである。よく、現代の醫術の力なさに失望したあげく、所謂迷信的な治療に走るものがあるけれど、それは甚だよくない態度である。たゞ、醫術に伴ふ弊害だけは、絕對に之を避けねばならない。さもなくては醫術のために却つて害を受けることになるからである。

　以下、私は、肺結核治療に於ける現代醫術の弊を指摘して、闘病術の趣意を說き、もつて結核治療の本義について考へて見たいと思ふ。

二

　肺結核治療に於ける現代醫術の弊を述べるためには、まづ、現今の醫術の行ひつゝある肺結核治療について語らねばならない。

　如何なる病でも、それに對する特効藥のない場合には、醫術はたゞその症狀を適當に處置して、自然に治癒するのを待つより他はないの

である。幸に人體には自然治癒力が備つて居るから、藥劑によつて症狀を減せしめつゝある間に、それが活動して、病氣を退治するに至るのである。だからあらゆる病氣は治癒すべき道理であつて、結核の治癒するのも、要するにこの自然治癒力のためである。

さて、肺結核の治療の際には、その最も普通なる症狀即ち熱に對しては、解熱劑を與へ、咳嗽喀痰に對して、鎮咳袪痰を與へるのであつて、昨今いろ／＼の新藥が提供されるけれども、要するに、現今の結核治療の最も大切な藥劑は、解熱劑と鎮咳袪痰劑なのである。

以前は、肺結核の特種の治療劑として、よくクレオソート類が用ひられた。即ち、クレオソト類は、試驗管の中で結核菌を殺し得るから、内服によつて體內の結核菌を殺さうと企てられたのであるけれども、遺憾ながらその考へは誤まつて居て、今日、クレオソートやグアヤコールなどが使用されるのは、單に胃腸を健全にするといふ意味に過ぎないのである。

關節の結核などは、その關節を動かぬやうに固定することによつて治癒を促がすことが出來るから、肺結核の際も、肺臟を動かさぬやうにと、いはゆる人工氣胸療法に即ち窒素を肺と胸壁との間へ入れる方法も試みられたけれど、これも、豫期した効果を擧げることが出來ず、今では殆んど行はれて居ないのである。

又、關節や、骨や、淋巴腺の結核は、レントゲン線の照射によつて治癒し得るから、肺結核の際にも、肺臟をレントゲン線で照射して治さうと企てられて居るけれども、將來は知らず、現在では少なくとも、レントゲン療法は特効あるものではないのである。

次に、結核菌の發見者ローベルト・コッホに結核菌そのものから、ツベルクリンと稱する物質を製造して、一時はそれが特効藥のやうに吹聽されたけれども、今日ではたゞ結核病の診斷に役立つばかりである。これと類を同じくした療法例へばワクチン療法や血清療法なども試みられたけれど、いづれも特効を奏することが出來なかつた。

更に、かの化學的療法と稱して、「體內の結核菌のみを殺して人體細胞には無害である」やうな物質はないかと、いろ／＼搜し求められ、その結果、重金屬の化合物などが作られたけれども、一つの特効あるものは見つからなかつた。

なほ又、結核患者の血液內には常人に比してカルシウムが不足して居るから、それを補ふために、カルシウム劑の注射が行はれたけれども、これも特効あるものとはいはれない。最近、カルシウムの粉末吸入療法なるものが行はれ、これは、カルシウムを取り扱ふ工場の勞働者に結核患者の稀なことからヒントを得て考案されたものであつて、私自身も試みた經驗があるけれど、もとより、これも特効のある譯ではないのである。

かうした有樣で、藥物療法も、又は二三の特種な物理的療法も、みな著効を奏しないために、一方に於て、身體の榮養をよくして、病氣を退散せしめる方法が工夫されるに至つたのである。

即ち、先づ身體をなるべく安靜にし、清澄な空氣を吸ひ、よく日光に當り、滋養物を多量に攝取する方法であつて、これを一定の療養箇所で醫師の監督のもとに行ふのを、所謂サナトリウム療法といふのであるが、あながち療養所に入らずとも、この原理を應用する療法を總

用するのである。又、自然物を利用することであるから自然療法ともいひ、廣義の物理的療法でもあるのである。

さうして、結核治療に於ても、いろ〳〵な藥劑や特種の治療法を用ふるよりも、それ等を一切避けて、これ等の自然物を應用するのが一番有効であると考られ、今日では、このサナトリアム療法が最も勢力を得て居るといつてよいのである。

それ故、今日では、醫師は通常、結核患者に向つて、このサナトリアム療法をすゝめることになつて居るのである。それのみならず、ある一部の人々はサナトリアム療法が結核の特効療法であるかのやうに考へ、結核はサナトリアム療法でなくては決して治らぬと信ずるに至つたのである。

これが、やがて、結核治療に於ける醫術の弊を生むに至つたのである。

三

初期の結核即ち肺尖カタルがサナトリアム療法によつて治り易いことは誰しも疑ひ得ないほどたしかなことである。けれども、それだからといつて、サナトリアム療法は結核の特効療法であるとは言ひ得ない。何となれば、肺尖カタルの如き軽度の病氣は、あながサナトリアム療法によらずとも、捨てゝ置いても立派になほるからである。ところが、現今の多くの醫師は、初期の肺結核がサナトリアム療法でなほるから、重症なる結核患者もサナトリアム療法でなほるものと信じ、重症患者に向つても等しく之をすゝめるのである。ところが重症患者はサナトリアム療法ではなか〳〵なほりにくい。元來サナトリアム療法は特効ある療法でないから、それは當然過ぎるほど當然のことであるが、それにも拘はらず醫師は一も二もなく、結核患者に向つて出來るだけ安靜にし、出來るだけ清澄な空氣を吸ひ、出來るだけ滋養分を攝り、出來るだけ日光にあたるやうに忠告するのである。

ところが、この忠告は、必ずしもすべての患者にとつて實行可能ではない。それは即ち經濟上の關係にもよらうし、家庭の事情にもよらうし、なほ社會的事情にもよらうし、とに角、これを實行し得ない患者が少なくない。さうすると、それ等の患者は當然、それを行ひ得ないことに不安と焦燥とを感じ、病を惡化するに至るのである。

尤も、醫師の側から言へば、若し患者がサナトリアム療法を實行し得ないならば、それは致し方がないではないか、たとひ特効藥があつても、それを買ふ錢がなければ、運命とあきらめて死んでゆくより外はないではないかと言ふかも知れない。いかにも、若しサナトリアム療法に特効があるものならば、或はその言葉も否み得ないかも知れぬが、特効療法でないサナトリアム療法を、特効があるかのやうに言ひきかせ、それがため、患者が實行不可能によつて不安と焦燥を感じて病を惡化せしめたとするならば、それはむしろ醫師の責任だといつても差支ない譯である。

かういふと、醫師の側では、「サナトリアム療法を決して特効のあるものとは言はない。けれども、サナトリアム療法より外によい方法はないではないか。サナトリアム療法は誰が考へても一番安全な方法ではないか。」と抗論するかも知れない。まつたく、今の大部分の醫師はこの考へで居るやうである。

ところが、サナトリアム療法は嚴密に言へば決して絶對に安全な療法ではないのである。すべての治療法に於て、特効療法ならざるものを過度に行ふことは必ず害を生ずると同じく、サナトリアム療法で最も大切とされて居る安靜は、これを過度に行ふとき、結核患者をして、遂に再び起つあたはざらしめる虞れがあるのである。

かういふと、或は異様の感をいだく人がないとも限らない。安靜はすべての病氣に缺くべからざるものであつて、ことに肺結核に於ては肺臓を安靜にすべき必要のあるため、なほ更全身の安靜が必要であるやうに思はれる。いかにも一定度の安靜は肺結核治療の際にも必要な方法である。だから、私はそれを排斥するのではなくて、たゞ度を過すのが悪いといふのである。

まつたく時期の進んだ患者は、いかに安靜にして居ても、少しも症狀の去らぬことがある。さうした場合に、なほ且つ安靜が足らぬと斷ずることは、むしろ酷であらねばならない。繰返して言ふとほり、安靜は特効療法でないから、際限なくそれを強ふることは不合理であらねばならぬ。現に安靜をある程度でやめて、活動養生に移り、立派に結核を征服した例はいくらもある。又、反對に今迄相當の活動を續けて居た人が、安臥療法に移つて遂に再び起つことの出來なくなつた例も少なくない。だから、一にも安靜、二にも安靜と、無制限に安靜を主張するのは間違つて居るのであつて、特効のない自然療法を、特効あるやうに思ひ誤まり、之を強ふるやうになつたのが、肺結核治療に於ける現代醫術の最も大なる弊害なのである。

この他にも、弊害はまだ澤山ある。けれども、こゝではその一々をあげて居る餘裕がないから省略するが、要するに私の反對するのは自然療法そのものではなくて、自然療法に伴ふ弊害である。自然療法は、これを巧みに應用したならば、一ばん安全な方法である。元來多くの慢性病は、之を捨てゝ置くのが一番よいのである。捨てゝ置くといふことは口では言ひ易くても、之を實行するのがなか〳〵困難である。だから、巧みに捨てゝ置くことの出來る人は最も治癒に惠まれた人であると謂つてよい。自然療法の最も大切な點も、實はこの「捨てゝ置く」ところにあるのである。何となれば、自然のまゝにするといふのが自然療法の本義であるからである。

ところがいつの間にか自然療法なるものに一定の形式が出來て來た。これが即ち弊害の生ずるもととなつたのである。一定の形式に從ふといふことは、「自然」の意味に反するものといはねばならない。だから、自然療法に於て、患者に安靜を強ひるのは間違つて居るのである。安靜は人間が病氣の際に執るべき、いはゞ必然的な態度である。必然的な態度であると同時に消極的な態度である。從つて病氣がいつまでも去らないやうなとき、無理に安靜を續けるのは考へ問題である。何となれば、安靜は消極的な態度であるがために、一定の期間安靜を續けて病氣がなほらねば、當然その消極的態度は拋つて然るべきであるからである。私の主張する闘病術は、要するに、自然療法に伴ふ弊害に反對するものであつて、自然療法の本義に戻るのが、闘病術の本義であるといつてもよいのである。

四

こゝで私は、闘病術の意義を述べる順序となつた。

闘病術はその文字の示すとほり、結核病と闘ふ患者の態度をいふのであつて、徹頭徹尾患者の立場から、肺結核の治療について考へ、それを實行して肺結核を征服するのを目的とするのである。

凡そ難治の病に罹つた患者の心ほどみじめなものはない。醫師にかゝつても必ずしも治ると限らず又、肺結核を治すべき方法が一つもないとなると、可なりに不安な思ひになる。不安どころか所謂絶望の淵に沈むに至る。さうして動もすると「肺結核は治癒すべき病である」といふ原則を忘れて、ひたすらに身の悲運をなげかうとするのである。

かやうな患者は、多くは、徒らに狼狽し、焦燥するばかりで、病そのものをぢつと見つめる氣にならない。見つめるどころか、恐ろしさが先に立つて、一刻も早くその毒牙を遁れようとあせり、少しも病と四ツに組まうとする努力をしない。だから終局に於ては病に負かされてしまふのである。

闘病術は、何よりも先に、病そのものを見つめて、病と四ツに組むことを主張するのである。患者の失ひつゝある「自己」をとりもどして、静かに病と闘ふの策をめぐらすのである。「肺結核は治癒すべき病である」といふ原則は厳然として存在する。各人に備つた自然治癒力は患者がその心を適當にさへ處理したならば、全力を盡して活動する筈である。勝利の夢にあこがれるやうな果敢ない態度をすてゝ、先づ現在の心の陣を立てなほして、もつて、病に處して行く覺悟を定めるのが闘病の本義なのである。

初期の患者は完全な治癒を望み得るけれども所謂二期三期の患者に於ては、完全な治癒はむつかしい。從つて患者たるものは、病を持ちながら生きて行くことを工夫しなければならない。病を持ちながら生きて行くことが出來れば、もはや完全に治らうが治るまいが問題ではないのである。完全に治れば幸福であるし、治らなくとも、もともとである。而も病を持ちながら生きて行くことは決して困難なことではない。いはゆる「持病」を抱いて生活する人は世の中にザラにあるのであつて、すべての患者が、このやうになるのは決してむづかしいことではないのである。

病持をしながら生きて行くことは、甚だ物足らなく思はれるけれども、それは、治癒に至るの道程であると思へば、少しの物足らなさも起らない。病を征服するには階段的でなくてはならない。一足とびに完全治癒に達しようとしても、それは多くは不可能である。而も病を持ちながら生きて行くといふことは、とりもなほさず病を征服したことなのであつて、病と身體とを切り放すことが出來れば病は立派に征服されたといつてよい。

病を持ちながら生きて行くためには、病の各種の症狀に對して平然で生きて行く覺悟が必要である。「肺結核に特効藥なし」といふ原則が厳然として存在する以上、肺結核は捨てゝ置くのが一ばん得策であつて、捨てゝ置くためには、各種の症狀に伴ふ苦痛を耐え忍ばねばならない。苦痛を耐えるには苦痛を迎へる心になればよい譯であつて、從つて迎苦的態度は闘病の際に於ける最も大切な態度の一つである。

然るに、世の多くの結核患者を見るに、僅かの症狀に對して極めて鋭敏である。體温計の水銀線の一分二分の昇降に顔色を變へてまで心

配する。これは所謂結核恐怖心の然らしめるところであるが、この結核恐怖心なるものも、要するに、患者が自己を失つた結果生ずるものであつて、若し患者が、肺結核を治すものは、自己に具はる自然治癒力であることを自覺し、その自然治癒力を自由に活動させるのは、偏に自己の心の持ち方であるといふことを悟つたならば、無意義なる恐怖心は去り、從つて僅かの症狀をば氣にしなくなり、後には症狀の消退に何の心の動搖を感じなくなるのである。

かういつたとて鬪病術は決して服藥に反對するものではない。たゞ無意義な服藥に反對するだけである。藥劑を巧みに利用して病に處して行くことはむしろ必要なことである。けれども、藥劑中心主義となつてはいけない。いつも必ず自己中心主義でなくてはならぬ。同樣に自己を中心とし、自己の適當な考へによつて、自然療法を利用するのは大によろしい。たゞ自然療法の虜になつてはいけないのである。多くの患者は、いつの間にか、各々の療法に囚はれて居る。即ちいつの間にか自己を失ひつゝあるのである。だから吾に鬪病術によつて、その失はれた自己を取り戻してもらひたいと思ふのである。自然療法をどれだけ行へば病はなほるといふ規則は存在しないのであるから、無暗に自然療法に信頼して、あてもなく療養生活を送るのは、甚だ誤つた考へである。

患者が自分を取り戻し、自分で自分の生命に全責任を擔んだならば、結核は甚だ征服し易い病となるのである。だから私は、現に自然療法を行ひつゝある人や又は、特種の療法を講じつゝある人に向つて、それ等の形式的な治療を頼りにせず、自己を頼よりにして、療養生活を營んでほしいと思ふのである。

要するに鬪病の本義は、自己の意志を鞏固にして、他人の言辭に迷はず、すべて外的事情から自己を解放して、自由自在に各種の療法を利用し、もつて、一日も早く病に馴れ、人並の生活の出來る道を講ずるにあるのである。

（をはり）

社會問題としての肺病撲滅策

安部磯雄

ヲーターローの戰爭が行はれた頃ロンドンには傳染病が猖獗を極め、これによりて生命を失ふた者の數がヲーターローの戰場で討死した英兵の其れよりも多かつたと言はれて居る。此不思議なる傳染病は後に其れが現在のチフスであるといふことが判つた。さしもに恐ろしい傳染病も今や文明國の諸都市に於ては殆んど全滅の狀態に近づいたといふも差支はない。コレラやペストに惱まされるといふことは文明

國の大なる恥辱とまで言はれて居る。然し不幸にして我國は此等の傳染病を全滅せしむるどころか、常に此等のために惱まされて居るといふ狀態である。極言すれば我國は殆んど凡ゆる種類の傳染病を脊負込んで居るといふ有樣ではないか。肺病や性病の蔓延に對しては唯茫然として其爲すところを知らぬといふ情態である。コレラやペストに對しても全く安心といふ程度に達して居ない。チフスや赤痢は殆んど一年を通じて流行して居るといふ有樣である。故に一たび社會衞生といふ標準から見れば、我國は未だ文明國の仲間入りする資格がないと言はなければならぬ。

何故に我國民が斯の如く社會衞生に對して無關心であるかといふに、私は其原因が我國民の傳染病に對する誤解にあることを信ずる。國民の多數は疾病なるものが人類の生活に伴ふ必然惡であつて、これを奈何ともすることが出來ぬものと考へて居るらしい。人類の發生以來疾病は常に生活と切つても切れぬ關係を有して居るのだから、これを全滅せしむることは絕對に不可能だと考へるのもあながち無理でないかも知れぬ。殊に肺病や性病の如き暴威を逞ふして居るものに對して全滅策を唱へる者があれば、世人は單に驚意の目を以てこれを迎へるのみである。此態度が我社會衞生の發達を妨害する大なる原因ではないかと思ふ。

然し傳染病の全滅を絕對的に不可能なりとする考へは確に誤謬である。我國に於てすら恐るべき天然痘の流行は殆んど完全にこれを防止して居るではないか。今より五六十年前に於て最も恐るべき傳染病は天然痘であつた。これがため無數の小兒は其生命を失ふたのみでなく、幸にして其死を免れた者も化者の如き醜い容貌となる外はたかつたのである。然し英國の醫學者ゼンナーが種痘の方法を發明したゝめ、今や人類は完全に此傳染病を征服することが出來た。次に文明國の諸都市はチブスや赤痢を全滅することに殆んど成功して居るのみでなく、コレラやペストに對しては天然痘に對すると同樣の成績を擧げて居る。肺病と性病は傳染病中の難物であつて、今日まで尚其毒牙を逞ふして居るけれども、此等を以て到底征服し難き强敵であると考へるのは正當なる意見でない。私は凡ゆる方面から此等傳染病の全滅可能を確信する。

獨逸は歐洲戰爭前に於て殆んど肺病の撲滅に成功したと言はれて居る。これは必ずしも肺病患者が皆無になつたといふことを意味するのではない。唯多年の努力により每年肺病患者の數を減ずることが出來たのであるから、其割合を以て進步すれば、遠からず肺病全滅を實現せしむることが出來るといふ確信を得たといふのである。私共は此點に於ても深く獨逸に感謝する處がなくてはならぬ。獨逸はこれに勢を得て更に驚くべき決心を公にしたのであつた。即ち肺病退治に成功した後には第二の事業として直に性病退治に着手すべしといふことであつた。若し幸にして歐洲戰爭が起らなかつたとしたならば、今頃の獨逸は必ず肺病征服の凱歌を擧げ、意氣衝天の勢を以て性病退治の壯擧を企てゝ居たに相違はない。性病は世界共通の傳染病である。マルサスの所謂生活難のため結婚の延期と獨身生活が益々多く行はれる限り、性病の蔓延は當分これを防止することが出來ないだらうと思ふ。肺病の傳染は意識的に行はれるものでないけれども、性病の

傳染は意識的であると共に其傳染の徑路を突き留めることが出來る。故意に病を傳染せしむる者に對しては刑法の制裁があるにも拘はらず、獨り性病に對しては何等の規定がない。これは大なる現行法の矛盾であらねばならぬ。私は性病蔓延の原因が茲に在ることを信ずると共に、性病撲滅の手段が又此點に在るのではないかとも考へる。

私は獨逸が如何にして肺病全滅の確信を得るに至つたかを簡單に述へて見よう。言ふまでもなく私共は其遠因が獨逸の國民性に在ることを信ずるけれども、同時に其近因が獨逸の勞働保險法に在つたことを疑ふことがない。勞働保險法と肺病撲滅との間に如何なる因縁があつたか。これは興味ある問題であると同時に、私共日本國民には有益なる暗示を與へるのである。

獨逸の勞働保險は疾病、負傷、老廢の三種に別れて居るけれども、年收二千マーク以下の雇人は強制的に此三種の保險に加入する義務がある。此保險法は一八八四年から部分的に實施され、一八九一年に至り全部實行を見るやうになつたので、現在は約二千萬の雇人が被保人となつて居る。

兎に角二千萬人を被保人として取扱はねばならぬ政府は毎年五百七十萬餘件に達する疾病に對して一々手當を拂はねばならぬのであるから、單に算盤の上から見ても被保人の健康增進に對して凡ゆる努力を傾す必要がある。殊に肺病は下層階級の間に最も多く暴威を逞ふして居るのであるから、政府は當然肺病撲滅の必要を痛切に感ずることとなつた。更に肺病のため多くの死亡者を出すことになれば、其れだけ多く死亡手當を要することになるから、獨逸政府は初めて肺病問題を眞劍に取扱ふことになつたのである。濠洲のシドニー市に於ける火災保險會社は毎年市の消防隊に若干の寄附を爲して居るといふことであるが、これは當然さもあるべきことだと思ふ。何となれば火災事件の少なきことは會社の利益であるが故に、會社が消防隊完成のため相當の寄附をなすことは結局自らの利益を謀るに外ならぬからである。獨逸政府が肺病撲滅のために努力するのは被保人の疾病件數や死亡率を減ずることになるから、其結果政府事業たる勞働保險を有利ならしむることになる。故に獨逸政府が凡ゆる手段によりて肺病撲滅を試みたのは決して偶然でない。

さて肺病撲滅の手段として獨逸政府は如何なる方法を取つたかといふに、先づ全國を通じて七百七十七ヶ所の無料診察所を設けた。專門家の言ふ所に據れば、初期の肺病は概して治療し易いのであるから、重症に陷らぬ以前に於て相當の手當をなすことが必要である。故に醫師の命ずる所に從ふて適當なる注意を怠らなければ肺病其ものは決して恐るべきものではない。獨逸政府が先づ着眼したのは此點であつた。

第二に設けられたのは山林休息所であつた。これは都會から稍遠からぬ所に在る休息所で、初期の肺病患者は毎日辨當持參で此所に來り、午前七時頃から午後七時頃まで暮すことになつて居る。新鮮なる空氣を呼吸するといふことは肺病治療のために最も有效であるから、多くの病院に於ても空氣療法といふことが採用されて居る。此山林休息所は最初赤十字社の發起で設立されたのであるが、今は保險事業の方から多くの補助金を得て居る。

第三は七十四個の肺病々院を建設したことである。此等の病院が得する寢台數は合計七千四百九十三で、其内五千は男子のため、其他は女子のためである。病院建設のために要した費用は六千五百六十一萬九千二百萬マークで、一年の經常費は一千五十萬二千マークに達して居る。

此等の設備により獨逸政府は著るしき好成績を擧げることが出來た。左に示す統計表は新しきものではないけれども、其成績の如何なるかを知るには充分であると信ずるから、これを擧げることにする。一八九七年に於ては肺病患者中全快したものは僅に六割八分であつたけれども、一九〇九年には八割三分に增加して居る。これは確に政府が試みた努力の結果であると言はねばならぬ。更に肺病に原因する死亡者の比率も勞働保險制度の實施以來年々著しき減少を來して居る。左に示す數字は人口千人に對する肺病に原因する死亡者數の割合である。

年　　年	人
一八七七――一八八一	三、五八
一八八二――一八八六	三、四六
一八八七――一八九一	三、〇四
一八九二――一八九六	二、五六
一八九七――一九〇一	二、一九
一九〇二――一九〇六	二、〇二
一九〇七	一、九八
一九〇八	一、九三
一九〇九	一、八三

以上の數字を見ても肺病に因る死亡率の割合が如何に年々減少したかを知るに足るが、若しこれを實際の數字によりて表はせば、約四十年の間に肺病に因る死亡者數は毎年約十萬人を減じたことになる。更に全體の死亡率の減少に比しても肺病に原因する死亡率の減少が一層顯著であることが判る。即ち一八八一年から一八八五年に至る間に於ける人口千人に對する死亡率は二十五人四分であつたのに一九〇五年から一九〇九年に至る間に於ては單に十九人に減じたゞけである。然るに同期間に於ける肺病患者に原因する死亡率は約半數に減じて居る。兎に角獨逸政府の努力が如何に素晴しいものであつたかゞ推測される。

私は我國に於ける肺病撲滅運動が如何に微々たるものであつたかを考へる時いつも一種の悲哀を感ぜざるを得なかつた。勿論白十字運動を起した特志者もあつた。政府が自ら建設した肺病院も少しは存在して居る。更に私共は救世軍の肺病院やタブソン孃の婦人のための肺病院のあることを感謝せずには居られない。然し此等小規模の設備を以て私共は滔々と寄せ來る肺病蔓延の波に對抗することが出來るであらうか。私共に取りて肺病は餘りに强大なる敵である。政府も國民もこれに對して施すべき適當なる術を知らなかつた。實を云へば肺病撲滅の術がなかつた譯ではない。殊に專門家の立場から言へば肺病對策はいくらでもある。唯これを實行するだけの勇氣が政府になかつたのである。

然し我國には不完全ながらも健康保險法が實施されることになつた。保險其ものゝ利害得失は別問題として、健康保險がやがて肺病撲

保險の範圍となるべきことを或は否認して居らない。政府が更に何百萬の勞働者に對して其健康を保險することになれば、打算上から見ても被保人の健康狀態に注意せねばならぬことになる。疾病件數を少くするためには無料診療所や無料病院の如き衛生設備を完成する必要がある。言ふまでもなく政府は常に經費不足のため必要なる事業にも着手することの出來ぬ場合があるけれども、採算上有利と認められる事業であれば何時でもこれを實行することが出來る。單に社會的必要があるからとて肺病撲滅運動のため多額の費用を投ずることは困難であるけれども、若しそうすることが保險制度の支出を節約することになれば、政府は斷じてこれを實行するに相違ない。私は此意味に於て健康保險制度に大なる希望をかけるのである。

然し我國の健康保險制度が果して獨逸の勞働保險制度の如く直に肺病撲滅の原因となり得るか否かにつき私は多少の疑問を有するものであることを述べて置かねばならぬ。何となれば我國の保險は獨逸の其れに比して其範圍が甚だ狹いからである。獨逸の被保人は既に述べた如く約二千萬人に達して居る。從つて被保人と雇主の掛金及び政府の補助金を合計すれば毎年十幾億マークといふ財政を運用するのであるから、斯る財政の一部を割いて肺病撲滅のため相當の設備をなすことは決して困難でない。若し我國の健康保險が少くとも一千萬の被保人を包容することになれば、肺病撲滅の設備は自然に出現するであらうと信ずる。

私は肺病の根本解決が健康保險完成の曉に實行されることを信ずるけれども、現在に於てもこれを放任して置くのは得策でない。肺病專門の療養所を設けるが如きは現在に於ても實行し得べきことである。更に山林や海邊に於て肺病專門の休息所を設けることも左程困難なことではない。要に何人も大敵たる肺病撲滅のためには政府も國民も全力を傾注すべきである。

我國民は簡單なる日常の禮儀作法に對してすら餘りに無頓着であるように思はれる。時と所とを擇ばず唾を吐くといふことは決して許すことの出來ぬ習慣であるに拘はらず、今日でも尚ほ平氣に電車内や公會堂や街路などで唾を吐く人がある。これは極めて下品な習慣であるのみならず、肺病の傳染といふ點から見ても直に嚴禁すべきことではないかと考へる。先づ肺病撲滅の手段として私は唾を吐く者に對し相當の科料を徴することを提案したい。これによりて此惡習を一掃し得るや否やは疑問であるけれども、國民をして幾分か反省せしむるには多少の效果があることを信ずる。

肺病患者をして群衆に接近せしむることは出來るだけこれを避くべきであるが、一時にこれを斷行することは困難である。然し學校教師中に肺病患者がある場合これを看過して置くのは餘りに姑息な遣り方ではないかと思ふ。政府は先づ此方面から肺病撲滅の第一步を踏み出すことを要する。肺病患者なるが故に學校教師を免職することは餘りに殘酷であるから、私は斯る教師には勤務年限の如何なるに拘はらず、相當の恩給を與へることを提案する。國家の財政が充實するに從ひ、漸次恩給制度の範圍を擴張すべきは言ふまでもない。要するに私は肺病撲滅の根本策を健康保險に求むると同時に、國家は決して應急策をも輕視してならぬことを主張するのである。

府縣會議員總選擧を豫測す

既成政黨の選擧對策

永川俊美

今年の秋には、殆んど全國に亘つて府縣會議員の改選が行はれ來年の春には解散の有無に拘らず國會議員の改選が行はれる。本來ならば、地方議會と國會との改選は、全然別個のものでなければならぬ筋合であるが、我國政界の實情より觀る時は、この兩者が混同せられ勝ちである。殊に今回の府縣會改選は、地方制度改正後の最初の實施であり、有權者の數も九百五十餘萬人の多きに擴張せられて居るから、宛然たる地方議會の普選である。その樣式から言つても、また結果から考へても來るべき國會の改選と最も密接なる關係を有し、その瀬踏みとなり前哨戰となるものである。そこで既成政黨も無産黨も、こゝを先途と選擧準備に忙殺されて居る譯であるが、本論においては主として府縣會の改選について述べて見たいと思ふ。

試みに府縣制施行年月日及び府縣會議員選擧期日を見ると次の通りである。

府縣	府縣制施行年月日	前回總選擧日	今回の總選擧期日
青森	明治二四年八月一日	大正一二、九、二五	昭和二、九、二五
岩手	三〇年七月一日	一二、九、二四	二、九、二四
宮城	二七年七月一日	一二、九、二五	二、九、二五
秋田	二四年八月一日	一二、九、二五	二、九、二五
山形	二四年八月一日	一二、九、二五	二、九、二五
福島	三一年二月一日	一二、九、二五	二、九、二五
茨城	二九年一〇月一日	一二、九、二五	二、九、二五
栃木	三〇年一〇月一日	一二、九、二三	二、九、二五
群馬	三〇年四月一日	一二、九、二五	三、九、二五
埼玉	三〇年四月一日	一三、一、二五	三、一、二五
千葉	三〇年十月一日	一三、一、二〇	三、一、二〇
東京	三二年七月一日	一三、六、一〇	三、六、一〇
神奈川	卅二年七月一日	一三、六、一〇	三、六、一〇

新潟	三十年四月一日	一二、九、二五	二、九、二五
富山	廿九年七月一日	一二、九、二五	二、九、二五
石川	廿四年十月一日	一二、九、二五	二、九、二四
福井	廿四年八月一日	一二、九、二三	二、九、二三
山梨	廿四年十月一日	一二、一〇、六	二、一〇、六
長野	廿四年七月一日	一二、九、二七	二、九、二七
岐阜	三十年十月一日	一二、九、二五	二、九、二五
靜岡	三十年四月一日	一二、一〇、一四	二、一〇、一四
愛知	廿五年十月一日	一二、九、二五	二、九、二五
三重	卅一年四月一日	一二、一〇、九	二、一〇、九
滋賀	卅一年八月一日	一二、九、二三	二、九、二三
京都	卅二年七月一日	一二、九、二五	二、九、二五
大阪	卅二年七月一日	一二、九、二五	二、九、二五
兵庫	廿九年十月一日	一二、九、二五	二、九、二五
奈良	卅一年三月一日	一二、九、二六	二、九、二五
和歌山	卅一年九月一日	一二、九、三〇	二、九、三〇
鳥取	三十年四月一日	一二、九、二一	二、九、二一
島根	卅一年四月一日	一一、三、八	大正一五、三、一八
岡山	卅二年七月一日	一二、九、二五	昭和二、九、二六
廣島	卅二年七月一日	一二、九、二六	二、九、二五
山口	三十年四月一日	一二、一〇、五	二、一〇、五
徳島	廿四年九月一日	一二、一〇、二	二、一〇、一
香川	卅二年七月一日	一二、九、二五	二、九、二五
愛媛	三十年十月一日	一二、九、二五	二、九、二五
高知	廿四年九月一日	一二、一〇、五	二、一〇、五
福岡	廿九年十月一日	一二、九、二三	二、九、二一
佐賀	三十年九月一日	一四、三、一九	四、三、一九
長崎	三十年九月一日	一二、九、二五	二、九、二五
熊本	廿九年九月一日	一二、一〇、五	二、一〇、五
大分	廿四年八月一日	一二、九、二五	二、九、二五
宮崎	三十年九月一日	一二、九、二五	二、九、二五
鹿兒島	卅一年九月一日	一二、九、二五	二、九、二五
沖繩	四十二年四月一日	一四、五、二一	四、五、二一
北海道		一五、八、一〇	五、八、一〇

右の中、北海道、東京、神奈川、埼玉、千葉の一道一府三縣は昭和三年に、佐賀、沖繩の二縣は同四年に、また鳥取縣のみは同五年に改選が行はれることになつて居る。

所謂既成政黨と稱するものの中には、政友會と民政黨の外に武藤山治君の統卒する實業同志會がある。尾崎行雄、關直彦君等を盟主とする革新黨がある。併しこれらの實業同志會や革新黨は、微力言ふに足らないのみならず、其の選擧對策も概ね政民兩派と軌を一にするので姑く論外とし、こゝには兩大政黨がいかなる陣形の下に選擧に臨まんとするかを如實に眺めて見度い。

○

既成政黨の激しい政爭の間を縫ふて、新興無産黨の各政團がどの位の勢力を得るか、また彼等が最初の試練において政界淨化に幾許の貢獻を爲し得るかは、世間の注目を惹いて居るところではあるが、既成政黨の側においては期せずして之を蔑視し且つ無視して居る。選擧運

と言はれるいづれの政治家に質すも、異句同音に、「無産黨は未だ紙の上の存在ではないか。彼等が單一無産黨を組織するも、右と左の二黨位に纒つて既成政黨の牙城に迫るとするも、我々の敵ではない。況んや四分五裂の内訌狀態では意に介するに足らぬ。」と豪語して居る。それ故に政友會においても民政黨においても共同の敵たる無産黨に對しては、何等の警戒をも加へて居ない。

彼の濱松、北海道、長野の各市會議員の選擧。埼玉、茨城、靜岡、北海道、山梨、鹿兒島等各衆議院議員の補缺選擧等において、無産黨があまりに氣勢をあげることが出來なかつたことは、既成政黨をして益々增長せしめた。若しそれ實戰に臨んで、無産黨が意外の勢力を得る地方があれば、既成政黨の面々は直ちに變裝して攻擊の矢から免れることに努めるであらう。甚しきに至つては老獪なる手腕を弄して彼等を既成政黨の陣内に卷き込まんと志すかも知れぬ。

○

既成政黨の選擧準備は、中央本部の應援と、地方獨自の運動とに大別することが出來る。右のうち政友會は政府の與黨であるから中央本部よりの應援を單に民政黨の如く政黨本部に限らず政府の有力なる助力を受ける便利がある。否政黨内閣は基礎を國民の上に强固にしなければならぬところから、政府自ら進んで與黨と力を合せて府縣會改選の結果を有利に導かうと焦つて居る。

先づ政府側の仕打ちを見よ。『腕の喜三郎』と言はれる鈴木内相は就任早々、全國的の地方官大更迭を斷行し、反對黨の色彩あるものは知事と言はず内務部長と言はず警察部長と言はず悉くゝびきつてしまつた。その後釜には政友色の濃い浪人を据ゑるか、又は有色知事を榮轉さして我黨内閣に御用を努めさせようとして居ることは世人の熟知する通りである。政府は地方長官會議において、選擧の公平を訓示したが、凡そ政黨内閣の公平論は自黨に忠勤を擢んでて反對黨をやつつけろといふ意味である。之は必ずしも政友會の專賣特許でなくて、民政黨も地位を代ふれば同樣の手段を取るのである。訓示を受けた地方長官も上に鈴木内相を戴き、警保局長に山岡君の顏を見ては『どうすれば選擧が公平になるか』位は察するに相違ない。選擧期日の切迫と共に、地方警察署長の交迭が頻々として傳へられて居るが、之等も政府の選擧取締方針がどの方面を向いて居るかを知ることが出來やう。現内閣となつて言論出版の取締りが一層嚴になつたとは、よく耳にするところで、地方においては純然たる學術講演が政談演說會の屆け出でをせねば許されぬやうなことすらある。選擧に際して必勝を期しやうといふ目的から官憲の壓迫は免れぬところで、甚しい選擧干涉さへ豫感せられる。

政府は地方官の更迭を斷行して與黨に氣勢を添ふると共に、國務大臣や政務官が種々の出張口實を設けて盛んに地方に押し廻つて居る。副大臣を氣取る政務次官や、郷里の子女にこれ見よがしの參與官等が出稼きするのは別として、試みに各大臣の出張を見ても

田中首相　長野、千葉、福島、神奈川、（追つて關西、中國へ）
鈴木内相　東北
小川鐵相　信州、東海、關西、（追つて北海道へ）
山本農相　北陸

三土藏相　四國
望月遞相　九州、關西、中國

といふ具合でこの外にも今年の秋までには大臣行脚がもつと頻繁に行はれることであらう。

○

國務大臣だからといつて地方に出て惡いことはない。否政黨内閣の下においては國務大臣自ら與黨支部の大會なり演說會に出席して所見を開陳するがよい。國務のひまを見て地方の民情を視察することは最も望ましいことであるが、惜しいかな、今日の我が政情は未だ全く官尊民卑の風が去らないで、權力者も之を利用せんとする風習が熄まない。一大臣がその地方に臨むとする。土地の家の子郎黨が御機嫌奉伺に來る。金持ちや有力者を紹介する。之等の人々はその黨派に好意を示すべきを約し一歩進んでは入黨するものもある。だが政治上の見解が一致しその政府の政策に共鳴するが爲めのみではない。むしろ事業關係や利益關係の交換條件を有つて居る。斯くて地方と中央との聯絡がつくと隣縣には一本道で行ける鐵道や道路が百足のやうに曲りくねることになる。前内閣時代に甲の地に設けられることになつて居た裁判所や學校が現内閣となつて乙の敷地に代るといふやうな例は枚擧に遑がない。大臣行脚が惡いといふのでなくて地方民が覺醒しないところに弊害がある。

政府は一面において國民に見ゆる看板を掲げなければならぬ。稱して政策といふ。在野黨の政策は、無責任な地位にあるだけに多く實行不可能の人氣策に沒頭する。併し政府としてはなにがしかの實行が伴はなければ國民に承知したいから、全民たことにかゝりかゝつて居られよ。けれども我國庶の現況はいかなる手品師が現はれても、見物人に尻ッポをつかまらないで喝采を博することは六ケ敷い。現内閣が掲げんとする政策もいよ〳〵實行となればお粗末なものに相違ない。それでも國家本位に眞面目に考慮すれば二三の國策位は樹て得られぬ道理はないが、國會と府縣會との改選を控えて居るだけに地方民を釣る人氣策を出さうと汲々として居る。

いふところの知事公選論はどうであるか。政友會は在野時代に公選論をふりまはしたが鈴木内相は就任後、之に向つて何等手をつけやうといふ素振りが見えぬ。そればかりか却つて反對の内意をさへ明かにして居るが政友會の諸君は洒々然として昔日の言責を顧みない。

地方民を釣らんとする地方分權の標語が何を内容するかはトンと說明せられざるところである。地方自治體に獨立の財源を與へやうといふ地租の委讓は承れば昭和四年以降の着手とある。政憲聯立の加藤内閣當時、濱口藏相の立案にかゝる税制整理案に對し政友會が反對して遂に袂を別つたのは税制整理の濱口案に地方が顧みられて居ない。政友會は國税の體系を整ふると同時に地租を地方に委讓しなければならぬといふ主張であつた。それが爲めには内閣の抱合心中まで計つた政友會が一朝責任の地位につけば、財源關係を口にして昭和四年度以降に非れば實行不可能であると揚言して居る。たゞ〳〵政黨者流の政策なるものが斯くの如き出鱈目のものであることは今に始まつたことではないが、選擧に際し政府及び與黨はさても眞面目顏で之が實現の方針を地方民に宣傳するであらう。昭和四年以降まで内閣の壽命があ

るかどうかゞ先決問題で萬一右樣な長命内閣であつたら天下の命綱に數へられ得る。

地方民と雖も、今日の地方民は雲を掴むやうな空理空論よりはモッと切實な施設を望むに違ひない。三土藏相が政友會の幹部會に出席して、本年三月財界動搖以後、郵便貯金が激増して居るから預金部二億四千萬圓中、その半額を地方債及び地方各組合に對して産業資金として融通する旨を聲明したのは政府用意の一端を示すものであらう。目下中央の大銀行に集中せられて居る資金を地方に還元するといふ政策は府縣會議員改選の有權者を成るべく政友會内閣に還元するといふ政策である。

内務省來年度豫算において土木、治水等の事業に力を注がんとするが如き、地方債の起債認可を緩和せんとするが如きいづれも對選擧策のあらはれである。

○

政府の選擧準備と脈絡を取り一擧に大勝を博せんとして居るのが政友會である。政友會本部の陣容は

總務　高橋、廣岡、高山、岡田、岩崎、堀切、井上、富安、熊谷

幹事長　秦

黨務部長　廣岡（兼任）

遊説部長　小久保

といふ顔ぶれで此の外にも政務調査會長以下數十名の役人が居る。

本部幹部は大臣と政務官を拔かれた殘りだから貧弱たるを免れぬが、玆に一言を附加して置かなければならぬことは、前幹事長山本条太郎君が滿鐵社長に就任したので、其の後任を物色するに當り大に困難が起つたといふことである。政友會では本部の幹事長を重く視る習慣で他の政黨に比してキレものを据えて居た。殊に山本条太郎君を起用するに當つては所謂大幹事長主義を取り留守師團の切り盛りを擧げて山本君に一任して居るの觀があつた。この幹事長が渡滿することになつたので、後任物色の必要に迫られたが、いづれもドン栗のせい比べで之はと飛びつくやうな適任者がなかつた。そこで政友會は曾て憲政會内閣當時、安達遞相が院内總務筆頭をやつた故智を倣つて、現遞相の望月圭介君を現官のまゝ政友會の筆頭總務とし、その下に幹事長として法制局長官の前田米藏君か秦豐助君を据え黨の選擧に關する中樞機關を構成しやうとする方針で進んだ。然るに望月遞相に筆頭總務を兼ねさせることについては勢力爭ひの關係と感情問題から閣内と與黨内に反對論が起つた。即ち小川鐵相や、高橋光威、廣岡宇一郎、堀切善兵衞君等が反對したので田中總裁もこの筆頭總務兼任問題は沙汰やみにした。一方前田米藏君も法制局長官を退いて再び政友會の幹事長となることについては、容易に首を縦にふらなかつたので、不滿足ながら總務の一人であつた秦豐助君を拔いて幹事長の椅子に据えた。どうせ選擧になれば政府與黨兩方面から事實上の委員が出來るに相違ない。僕は聊か本論の傍系に入つて閑文字を費したやうであるけれども、決してそうでない。政友會が幹事長の後任について斯くの如く苦心して居るのは取りも直さず、來年總選擧と今秋の府縣選擧に心を配つて居る何よりの證據である。

○

さて政友會はいかなる目算を抱いて選擧戰に臨んで居るかといふに、前にも述べたやうに、政府と聯絡を取つて黨員の地方遊說、大臣行脚、政策宣傳に力を盡して居るのはいふまでもないが、右の外政友會が最も力瘤を入れてゐるのは、民政黨の地盤切り崩しである。民政黨はこゝに改めて書くまでもなく憲政會と政友本黨とが合同して一の新黨を作つたのであるから、本黨の參加地方で地盤の方は中央の意思通りに動かぬところが尠くない。代議士中でも選擧期日の切迫につれて、一人去り二人去ると云ふ具合に民政黨を脫して政府黨に走つて居る位であるから、地方地盤が政友會に有利に展開せんとして居るのは當然のことである。そこで政友會においては、地盤關係を詳細に調査して誘惑威嚇あらゆる手段を弄して自黨の黨勢擴張に專念する模樣が見える。

○

民政黨は純然たる在野黨であり、官權も利權も利かぬところから專ら言論戰によつて府縣會改選を有利に導き、來春の總選擧にも相當の黨勢を維持して他日の機會を待たんとして居る。本部幹部の構成は、總裁濱口君の下に顧問に若槻、床次、武富、山本の四君、總務に安達君を筆頭として町田、原、小橋、杉田、齋藤、小泉、八木の諸君、幹事長八木君、黨務部長田中君、政務調査會長小川君、遊說部長中野君といふ陣立である。

濱口總裁が病後靜養中とあつて思はしくないから若槻床次兩君が專ら遊說の頭目となつて居る。

今年六月結黨以來今日までに支部發會式を擧げ遊說を行つたところは、東京(六月十七日)京都(七月二日)大阪(七月七日)長崎(六月廿四日)新潟(七月十二日)福井(七月九日)石川(七月三日)富山(七月十二日)鳥取(七月三日)岡山(六月十八日)埼玉(七月廿四日)群馬(七月十五日)和歌山(七月三日)大分(七月四日)佐賀(六月廿一日)熊本(六月十九日)福岡(六月廿五日)奈良(七月五日)愛知(六月十五日)滋賀(七月六日)岐阜(七月廿一日)福島(七月一日)山形(七月廿三日)の記錄を示し、この外に幹部黨員總出で殆んど全國にわたつて大遊說を行つて居る。序でながら一言すれば代議士は無賃乘車券を所持して居るから、汽車賃は要らぬが、政友會では一日の日當平議員十圓幹部十五圓といふ內規になつて居り、民政黨においては汽車賃を別として日當八圓宿泊料八圓で院外團は汽車二等實費、日當六圓宿泊料六圓を支給して居る。六月一日民政黨が結黨式を擧げて一月半位の間に遊說費約一萬圓を費つたといふから、地方行脚も相當の資金を要する譯である。

民政黨の選擧題目として好んで口にするところは政府の施設に對する批判である。

一、對支出兵問題の不可

一、川崎救濟放棄を中心とする政府の財政經濟策

一、地租委讓反對

一、地方官更迭を初め植民地人事異動の政黨化

等がその主なるものである。彼等は一面において政府の施設を批判すると同時に、他面には自分たちが前內閣時代やつて來た功績を吹

聽して居る。それと同時に地方民の歡心を得る爲めに、農村振興策を氣にしたことを見逃してはならぬ。民政黨新政策中「小農工商企業家の金融改善」といふのは選擧目あての項目で、自作農の維持創定、小作立法の完成と共に、農村に對する資金調達の便を開くといふのが對策である。義務教育費の國庫負擔額を增して地方民の負擔を輕減し、肥料資金、副業資金等の小金融機關を整備するといふのであるから農村の機嫌買ひは政友會と五十步百步の議論である。民政黨中舊憲政會は過去數年の間政府黨であつたから選擧費用の調達にもまた融通が利くであらうが、何と言つても在野黨であるから步が惡い。それに內外二つの煩悶がある。對內的には舊憲政系と舊本黨系の地盤協定が問題であり、對外的には政府の選擧干涉に對する恐怖がある。

自黨側の候補者選定については何とか始末をつけるであらうが、政府並に地方官の選擧干涉については選擧干涉防止委員會を活用しやうといふ意圖を持つて居る。曾て町田忠治君が選擧に迫害を受けた時には伊澤多喜男君等を監視にやつた。又過般神奈川の多額議員補缺選擧には俵孫一君を派遣して相當の効果があつたといふので、今回の府縣會議員選擧に際しては甚しき個處に干涉の干涉防止委員を出さうといふのである。政府の干涉を民政黨が監視しその民政黨や政友會の既成政黨監視を無產黨がやり、之等全部の選擧運動監視を國民が引受けやうといふのだから蟬のあとに子供が立ち子供の足を黑蟻が狙ふやうな觀がある。

○

以上は既成政黨本部の應援であるが、自治體の選擧においては、地方地方の各代議士が全力をあげて自派の候補者を應援する。

今日までの制限選擧においても、立候補者は所謂地方の有志を抱き込んで、自分の選擧の運動を依賴して居る。ゆえに運動員は候補者の主義政策、人物手腕は第二義として專ら運動費の多寡に依つて選擧の勝敗が決せられることになつて居る。選擧買收の弊は久しく論議せられて居るところであるけれども、容易に廢止せられなかつた。地方議會においても國會においても、選擧法が改正せられて、有權者の數が、一躍二倍三倍になつたからには選擧買收は行ひ得まいといふものがある。成る程多數の有權者を個々に買收することは實際問題として困難かも知れないが、併し僕をして言はしむれば投票賣買のブローカーが出るものと考へられる。たとへば甲の村何票あるから幾何の運動費を要する。乙丙の村合せて幾何といふやうに選擧仲買人といふものが出現するであらう。このブローカーが換言すれば選擧運動員であり參謀である。故に各個の有權者は昔のやうに候補者の名刺の裏に五拾錢、壹圓といふやうな札が貼つて買收されるのでなくて、或る團體の一員として仲買人の腹を肥やしてやる結果になる。選擧權をもつ資格者が多くなるといふことは一面から言つて各個人の資格が認識せられたことになるけれども、立派な選擧法も運用全からざる時代においては一山幾らの極めて安つぽいものになる。そしてその一山をまとめる有志といふものが選擧にはゞを利かすことになるであらう。府縣會議員選擧においても選擧區全體に向つて漠然たる政戰を初めたところで豫想がつかぬ。各市郡又は各町村に足溜りを置き之に依つて凡そ自派の投票幾何かを算定するものと思はれる。それだから各地方の足溜り

になる奴が、運動費をしこたま候補者からしぼり上げることになり候補者も之を否めば當選覺束ないことになる。

多數有權者を手玉に取つて行くには他にも方法が講ぜられるであらう。之が無産黨の場合においては、小作人組合、勞働者組合といつた具合に名簿があり、之に依つて得票凡そ何票といふことも目鼻がつく譯であるが、既成政黨の場合においては一層複雜になつて來る。尤も或る地方は政友會、或る地方は民政黨と地盤が判明して居るところも尠くないが、中には政友民政相半ばする場所も相當ある。之等の地方へ向つて單なる演說位をやつただけでは、自派の得票については豫想し難いので、彼等はモツと地味に平生から手入れをして居る。

○

その一は平生から間斷なき選擧準備で、代議士は自分の足場となる府縣會議員、府縣會議員は市町村會議員の選擧を助けて自分の選擧に利用しやうとする。地方の代議士はその地方の鐵道、道路、港灣、學校その他の設置問題に骨を折る。青年團の事業に敬意を表したやうな形で費用の一部又は全部を寄附して置く。甚しきは土地の冠婚葬祭にまで顏を出して、選擧仲買人や地方有志の機嫌を取ることを忘れない。さていよく選擧となれば、地方の遊說をやる、演說會を開く、選擧時だけの薄つぺらな新聞雜誌を配布する。ポスターを立てる。斯様な方法で、選擧を初めるが、國會の場合と異つて中央本部から選擧費用を貰ふことが出來ないから、地方の代議士が金を作つてやる。候補者自身も、三千圓、五千圓と自分の金を費ふが、支部で公認した候補者が事實上その中央黨派の候補者となり選擧後政友派幾ら民政派幾らと勘定されることになる。（昭和二、七、卅）

無産政黨はいかに戰はんとするか

薄　茂　人

一　選擧戰の意義

初秋から晩秋にかけて、府縣議選擧戰がおこなはれる。

この選擧戰は、政治的機構のあらゆるもの丶活動と、諸政黨の最後の一人に至る總動員のもとに遂行される。

まさに全國的規模に於ける選擧戰である。

この選擧戰は、また、來春おこなはれる衆議院議員總選擧の前哨戰であるといふことだけでなく、かつておこなはれたいかなる選擧にも、見出すことの出來ない重要な意義を持つものである。

われくは、先づ、かゝる意義を、選擧戰のうちに探究しなければ

ならぬ。

その第一は、いはゆる普選の試錬としての選擧戰であることである。今秋の府縣議選の有權者は、九百五十萬人で前回の選擧當時に比べると四百七十九萬人多い。まさに二倍である。

現在の府縣議員は、悉くブルジョア諸政黨のものであるが、政友會の發表によれば政友會所屬議員五割、民政黨所屬議員三割八分、民政黨の調査するところによれば、政友會四割六分、民政黨四割三分である。いづれが何割であれ、いづれも四百七十九萬人の少數有權者に選出されたものである。

しかるに倍加された有權者——選擧權擴張によつて增加したる、しかも衆議院議員と共に男女廿五才以下の國民の中堅層を除外したる、有難い僞りの普選によつて——を基礎に、選擧戰に、今や始めてのぼらねばならぬ。

その第二は、わが「資本主義經濟の現段階」が特徴づけるブルジョア諸政黨の對立、抗爭の激化が、かゝる選擧地盤の上に、すさまじくも展開されるところに在る。

けだしブルジョア政黨現在の對立は、戰鬪的小ブルジョア黨としての革新黨。小ブルジョア上層を基礎とする産業資本家黨としての實業同志會。三菱財閥をめぐる諸財閥、産業資本家、地主の大ブルジョア黨としての政友會。その間、内に或は外に、封建的國家官僚の諸勢力が、陰に蠢めく、複雜なる對立である。

かれらは、安定と不安定の兩局面が、鋭角度に於て對立する日本資本主義經濟の現段階にあつては、かれらの經濟的地盤の救濟、保護、防衞、發展のためには、政治的解決が絶對に必要である。

かゝる「必要」は、いはゆる憲政常道論に於て、端的にかつて表現されたところではあつたが「現段階」の兩局面の鋭角度が、鋭さを增すにつれて、「必要」は一段と切實さを加えたのである。

だから、かれらの、ブルジョア諸政黨の對立、抗爭の激化は必然的である。殊に二つの混合形大ブルジョア黨は、正眞無垢の大ブルジョアの金融資本黨——言ひ換えると三井政友會、三菱民政黨——への發展段階(從つて地方議會統制の確立)を特徴とし、選擧戰にのぞまんとはしつゝある。

その第三は、プロレタリアートの政治的結勢力の、選擧戰における全線的展開これである。社會民衆黨、日本農民黨と稱するブルジョア政黨の別働隊さへも、無産政黨の假面を冠つて躍り出てゐる。

プロレタリアートの政治的結勢力——勞働農民黨と日本勞農黨——新たなる出現は、一連のブルジョア諸政黨との階級的對立の新たなる政治的段階を形勢せしめる。

かゝる段階、これは、今秋の選擧戰の重要なる意義の、決定的要因である。

二　ブルジョアジーの全意圖

早くも、政府及び政府黨政友會は、選擧戰にのぞむお題目——スローガンを、投げ與へつゝあるを見よ。

行政革新議會幹事會の意見として、現行府縣制の廢止、自治權の擴充、

市町村廢合、知事公選、樞密院の改正が傳へられる、政友會の審議會委員案としては、拓務省、社會省新設、官業整理等々が傳へられる。農地金庫法案と地租移讓——但し四年度より——都會にだぶつく(都會の何處にだぶついてゐるかの問題を隱蔽しつゝ)資本の地方還元。そしてなほ陸續と投げ出されるであらうところの、これらのスローガンはかれらの選擧對策に外ならぬ。

かれらのスローガンは、かれらの全意圖を餘蘊なく具現してゐる。即ち、封建的國家官僚殘存勢力の據つて立つ經濟的基礎の克服——農村の資本主義化、金庫法案、自作農創定、官業整理等々——また據つて立て能る舊制度の改廢ここに讀者は、ブルジョアジーのかかる封建的官僚勢力に對する緩漫なる挑戰と、財界救濟案に、川崎融資、憲法論をふりかざしたる封建的官僚の飛躍的自己存立運動をも、あはせ想起しなければならぬ。——府縣廢止、自治權擴充、樞密院改正等々——或はまた、日本資本主義經濟の現段階——勞働者農民の犧牲による經濟の安定——に於ける大衆の窮乏と不平に對する僞瞞政策——社會省設置、資本の地方還元等々——を意圖する全意圖である。

かような、かれらの全意圖の歸結するところは大ブルジョア金融資本黨の確立、無產政黨との對立の急速度なる展開、と激化でなければならぬ。

三　勞農、日勞の選擧對策

如上の諸形勢のもとに、無產政黨は、對選擧方針と政策を烈日の旱天に高くかゝげて、すでに對戰の陣形を整へたのである。

勞働農民黨は宣言していふ。

「我が黨が地方自治體を中央の專制的支配の手から取り返し、民衆の完全なる政治的自由を獲得する爲めに、今秋の選擧戰は戰はんとする」(勞働農民新聞一四號)

日本勞農黨は、支部黨員に檄していふ。

「我等が府縣會選擧に戰ふ所以のものは、一般縣政の上に無產大衆の要求を反映し既成政黨の壟斷から縣治を民衆の手に取り戾すことでなければならぬ。地方自治體に於ける勝利は、延ひて一般國政の上に我等の勢力を反映せしめる前提である」(日本勞働新聞一五號)

兩黨は又、一般政策(地方的特殊政策に對する)を次の如く高らかにかゝげる。

	勞農黨	日勞黨
一、選擧權擴張	十八歲以上の男女、住居制限の撤廢、大選擧區制等(選擧自由の原則)の獲得	廿歲以上の男女、住居年限の短縮
二、知事公選	一般投票による知事公選	知事公選
三、地方行政	內務大臣の府縣會解散權、豫算削減權、知事の原案執行權、出兵要請權廢止、道府縣令制度の廢止等	知事の原案執行權、道府縣令廢止
四、地方財政	戶數割、雜種稅、家屋稅、特別地稅、營業稅、人力車稅廢止、不在地主稅、庭園稅、土地增價稅等、財產稅、高層建築稅、別莊稅、奢侈稅等を設定し高率累進稅を賦課す	不在地主稅、土地增加稅、閒空地稅の設立、雜種稅惡稅の改廢、地方財政の確立等
五、公益公營	病院等の衞生醫療設備、	肥料農具種子浴場公營、

養老院職業紹介所等無料解放、肥料器具、蠶種等の關督、食堂、宿泊所、浴場等市町村營	公立病院解放、公營住宅擴充、火災救濟制度、傳染病對策の確立等

六、地方教育	一切の教育機關から中央の專制的支配を排除し、その管理、學生代表參加、門戶解放機會均等、青年團處女會等の民主化等	學用品無料貸與、無料給食、圖書館、文庫の擴充等

備考、勞農黨の政策は、さらに住宅問題、勞働者並に小農の要求をかゝげたる膨大なものである。

無產政黨の政策に對する態度は、一般政策偏重の感がないではない。地方的特殊政策は一般政策と同時に重要であり、勞農大衆の日常的要求の琴線にぴつたりと觸れるものは、より特殊政策にある。

例へば府縣市町村の、現に公營するところの事業收入は、大正一三年度に一億六千六百萬圓である。之の固定資產八億五千七百萬圓（水道、瓦斯、電氣だけで）に達する。これらに對する大衆の日常的要求はより切實である。

かゝる地方的特殊政策は、支部の討議に投げ遣るのでなく、黨の成育が若いだけに、重心がここにもてゝかねばならなかつた。

しかし、ともあれ、兩黨の一般政策は、ここに對比しつゝ、讀者がすでに見られた如く、一見似たるものがある。

たが、似てはゐるが、同じものでないことは、宣言と檄文を對比することによつて、より容易く看破し得る。

勞農黨の宣言、碎けた言葉と端的な表現にて綴られた短い宣言は、封建的絕對專制勢力に對する若干の誤謬はあるにしても、現段階に於

けるプロレタリアートの位置、選擧戰に於ける無產政黨の役割、指標を、いとも明確に公示してゐる。

しかるに日勞黨は、これをまやかさないにしても、ぼかしたことはいたまれない。黨の檄文（前揭のものの全文）は、おぞましくも之れを證據立つるところではないか。

四　右翼諸黨の全目標

わが無產階級運動の右翼を形成し、ブルジョアジーと堅くつたかるところの、しからば社會民衆黨、日本農民黨は如何？

勞農黨は「選擧對策全國協議會」の名に於て、逸早くも公開狀を投げつけてゐる。

貴黨に對するわが黨の見解並に態度は本協議會に於て次の如く要約された。曰く、社民、日農の兩黨はそれ〴〵小市民、農民の地盤に立ち、其の意識化の故に小ブルの反動的本質を代表してゐる。彼等はその自由主義的粉飾の下に少からざる勞働者小農民を把へ無產階級陣營内に於ける、ブルジョアジーの手先となつてゐる。わが黨は彼等を徹底的に排擊することによつてその旗下の勞働者農民小市民とをわが黨旗の下に奪還せねばならぬ」

公開狀の此の序文は、社民、日農の階級的本質を、大體に於て正しく暴露してゐる。

社民は勤勞所得階級（勞働階級に對する）日農は小中農の單なる利益の伸張が、黨の全的目標である。

だから、その對選擧政策も、地方官民選、普選の徹底、地方議會改

造、地方財政税制の勤勞階級本位化、勤勞階級本位の都市計畫等々、曖昧模糊、靴をなめるが如く、その解說「無産政黨の地方自治體への進出は、今日迄官僚が、政黨に對すを自己擁護の立場から主張してゐたところの地方自治體政治に於ては政黨の存在とその黨爭とを許さずとの說を完全に破壞する」（社會民衆新聞二八號）といふ、かゝる憐れなる全見解の上に、立案されたことも、又いなまれぬ。

だが、すでに、勞農黨の一般政策に關する範圍で、注意を喚起して置いた如く、民衆黨はその全國協議會で、電燈瓦斯水道料金値下げを追加要求して採りあげてゐる。といふやうに、かういふところにはいはゆる抜かりが無い。かういふことに於てのみでなく、一般技術の上にも、抜からぬところを、屢々見得る。これは實際知識と經驗（政治家としての）を、かれらが採り入れる（ブルジョア政黨につながる必然の結果として）ことに存する。勞農黨は、今や學生のヘゲモニーを確立せんとする危機に當面するやに見ゆるも、選擧戰の實際的効果は、存外かうしたところに、相當大きなかゝはりを持つことは、追つて選擧の經驗が、吾々を敎ふるであらふ。

五　勝敗——いはゆる選擧協定

しかし、それは、もちろん選擧戰の勝敗を決する根本的な問題ではない。より根本的な問題は、社會的條件（之れは無産政黨、殊に左翼的政黨の發展を可能ならしめる狀態にある）政策が勞農大衆の要求と支持を受けるかどうか。

黨の實際的勢力、ブルジョアジーの對無産政黨政策、選擧協定の範圍等によつて決する。

だが、もちろん、勝敗は、投票數、議員當選數のみによつて、黑白を決することは出來ぬ。いかんとなれば、無産諸政黨にとつては、この選擧戰は黨礎確立の基礎的事業である（眞の基礎的事業は來春の總選擧にある。だから右翼が伸びるか左翼が伸びるかの議題なども、一要はそれからの問題であり得るとも云へるまた現在の有權者は二十五才以下の中堅的層を除外してゐるからである。

だから、勝敗の歸決するところは、議員當選數（あはせて落選投票數）と同時に、黨の質と量（主としては量）の發展、黨の活動が、一般大衆に與へた影響のいかんに存する。

然し乍ら無産政黨の確立發展に、關心事をもつところの、何人もが、この際興味と注意を集中するばかりでなく、田中內閣の、全的警戒をそそぐところのもの、しかして又、無産政黨の選擧戰の勝敗を決する、より根本的な條件——問題の一つなる、選擧協定のいかんは、この際の選擧であるだけに（一般的社會的狀勢、田中反動內閣の彈壓政策）無産政黨の分立と各黨勢力の分布狀態より見て、提携を深めねばならぬ）無産政黨個々の又全體の勝敗の上に、力強い反作用を及ぼすことに留意しなければならぬ。そして之れは、七月三十日勞農黨より日勞黨への提議によつて、問題はすでに具體的に提起されてある。

ところで、選擧協定といへば、質的方面に於ては、一、ブルジョア政黨に對する協定、二、選擧干涉（違反）監視共同協定、三、右翼黨、左翼黨の對立的協定（社民、日農排擊の如き）四、議員候補者協定（即ち地盤協定）五、選擧運動の部分的協定（府縣町村民大會、演

說會、立候補者又は黨支部のない地域の黨員の協同戰線、選擧應援團等)六、一般的協定(以上の全部又は大部分)等が現實の問題として考慮される。

協定の外的範圍より見れば、ブルジョア政黨の一部、社民、日農、日勞、勞農、その他地方的無産政黨、無産階級的團體、の協定が、現實の問題として思考される。

しかるに協定に關しては、民衆黨は「他の無産政黨との關係については、支部はその都度必ず本部と協定をなすべきこと」と、本部、支部協定?を遂げたゞけであり、日勞黨、日農黨は緘默し、勞農黨は東京支部聯合會書記局提案?の社民、日農の排擊協定と革新黨との選擧協定を議決したにとゞまる、(協定の限度、方法は決定されてをらぬ)

それ故に、協定問題の考察を、より具體的にすゝめるためには、勞農黨協定對策を對象とすることが、何により便宜なわけであるが、その對策の決定された理論的根據とも思はれるものが、無産者新聞九二號附錄に一應展開されてある。だがそれは「何故に協定するか、の關係を抑壓された階級層の前に暴露する」必要のもとに、物されたものにもせよ、選擧協定とは何にか、その意義、性質(質的外的)は、考慮されてをらぬ。このことを前提としての協定對策でなければならぬ。でなければ革新黨と日勞黨とのみ協定し、他は非協定といふ、戰術の根據が見出されぬ。

大體がこの問題に關聯する範圍に於ては、他黨の本質的究明は、その黨の地盤、構成要素に限つても差支ないことである。その黨の發展傾向たとはむしろ第二義的の必要に屬する。何んとなれば、協定による共同戰線の舞臺は、その組織大衆との肌と肌の接觸を、より可能に導く、少くも最も近い觀客を前にたらべた舞臺であり、それは暴露戰術に於ける假想的舞臺だからである(協定問題を、官僚戰術とのみ把握せざる限りに於ては)しかるに右の一應展開されたる協定對策の理論的根據とするところによれば日勞黨が右翼にも對立し、社民、日農が左翼にも鋭く對立する(民衆黨も、かゝる層を地盤とする限り、專制支配に對して抗爭せんと欲する、といふ自からの認識をも度外に置いて)といふ、指導者の態度のみが、主として協定の終局的決定條件をなすものの如くである。だからそこに、排擊と協定の觀念的混亂や上からも下からも働きかけろ(いかにしてか)などいふ、砂を嚙むやうなスローガンを吐き出すに過ぎない(豫定の紙數に達してゐる。已むなく協定問題の本質的展開をまつて、他の機會に詳論せざるを得ない)

しかして日勞黨との協定は、また別個の觀點より考察されねばならぬ、別個の觀點とは、勞農黨と日勞黨の不可避的なる合同、合同への前提としての、方法と條件を決める合同委員會の設定、その過程としての選擧協定、あらゆる協定、これである。

× × × ×

だが、ともあれ、おりからの夏に、無産政黨は、石も瓦も灼き溶かさずには已まぬ、烈日の光を浴びて立つたのである。

拔かるところもあらふ。準備の足らぬところもあらふ。だが、それらは黨の基礎確立の、初端的段階に、今や漸やくにして上らんとする黨にとつては、けだし不可避的な過程でもある。無産政黨の行く手は輝く。秋の府縣選擧、次ぎの總選擧。段階から段階を踏む毎に、經驗を積み重ねる毎に、それは、事もなく克服されて行ふ。

無産政黨は、かくて一應は試錬の段階にのぼる(八月四日)

私は現代日本の風景を切る

野口米次郎

私に夏なほ寒い正宗の名刀があるといふ譯ではないが、一つだらしなさ過ぎる現代日本の風景をすつぱりと兩斷したい……首尾よく出來ればお慰みだが。然し私が切つてもまた他人が切つても、現代の日本は赤い血一滴も落とさないかも知れない、少くもその體からは『神國日本』の血潮は出ないであらう。假令私の刀で切られて血を出したとしても、その血は赤か紫か恐らく人はその判斷が出來ぬであらう、嗅げば必ずや變な外國の臭氣がするであらう。現代の日本は鵺だ。

私は直接に最初私の刀を振りかざしてかゝるより、遙か遠方から手裏劍を投げて現代日本の痛い所をお見舞ひしよう。どこから私はこの鋭い手裏劍を投げようか……上海か香港か、いつそシンガポールからでも投げようか……そして私自身がそれを投げるより私の友人に手のうちを見せさせよう。私の友人は愛蘭の詩人カズンズだ、彼は今英文學講師として東京の慶應へ赴任の途船で上海へ着いたばかりである。彼が私に替へて投げた手裏劍は日本のヂヤナリズム攻撃の一手である。彼は日記のなかにかう書いてゐる……

『僕如何に東洋の地圖に暗くても上海は日本でないことを知つてゐる。然るに日本の新聞記者二名が直ぐ船へやつて來て僕に面會を求めた。彼等はいづれも「日本で最大の講讀者を持つ新聞を代表する」といつた……僕は彼等が眞實の日本人でなく米國人でないかと疑つた。彼等はまづ第一に廣告屋だ。僕は彼等のやうに自家宣傳を巧にする人間は米國以外にあるまいと思つた。そして彼等は僕のやうに不恰好な粗末の服を着てゐない、米國流行のちやきちやきの靴を穿きズボンに眞直の線がついてゐる……そこで僕が彼等を米國人でないかと疑ふのである。僕は果して上海が日本の勢力範圍内であるかどうかを知らないが、記者をわざわざ上海まで送つて人にインタビユウさせるとは流石は日本の最大新聞だけあると思つた。僕はこの時日本は、世界第一でなくともそれに近いヂヤナリズムの國に相違ないと感じた。僕は彼等と對坐しながら心の中で思つた、「僕はまださう名前も世界に響いてゐない詩人に過ぎない……どうしてかういふ名譽を與へられるのであるか、どうして僕はかう名士扱ひをされるのであるか。僕は自

ら嬉しいやうな擽つたいやうな感なきを得なかつた。この時僕の心を掠めて過ぎた第二の感想は、「日本は今日でも依然として外國崇拜の國に相違ない」といふことである。この外國崇拜のお蔭で僕のやうな小さな詩人も名士扱ひをされるに至つたのであらう。かう思つて來るとジエームス、カズンズはますます大きく成つて行くのに反對に、日本は小さく小さく縮少し行くやうに感ぜられた……僕は日本を小人島と思つて遙々やつて來たのでない、日本を精神的巨人國と思つて來たものである。僕は思つた、「僕のやうな人間でもただ外國人であるといふ簡單な理由で名士とされるやうな國とすると日本は無批判の田舍國に過ぎない……僕は詰らない低級の國へ行くのではあるまいか。」僕は外國を輕蔑する日本へ行きたい、御維新の頃は日本人がよく外國人を街上で殺したさうだがその時の方が、僕のやうなものを名士扱ひにする今日の日本よりどんなに尊敬に價するだらうと僕は思つた。僕は恰も夢から醒めた人間のやうに、胸中に波立つ雜感をふり捨てて頭をなげると、僕の面前に前記の新聞記者が默然として坐つてゐる……彼等は佛像のやうに默想に耽つてゐる。僕は「これでは僕がインタビユウされるのでなく、僕が記者となつて彼等をインタビユウする形だ」と思つた。彼等は英語を語り始めた……然るにこの英語たるや珍無類の英語で、最初は彼等の語らうとする意味を了解することが出來なかつた。彼等は一廉の英學者として新聞社から派遣されてゐるのであらうか、若し彼等が日本語で僕に話しかけて呉れたならば、僕はその方を遙に喜んだに相違ない。この時僕は第三の感想を得た、即ち「日本人は驚くほど外國語の下手な國民であるに相違ない」といふことである。彼等の僕への質問は所謂紋切形のもので、中で僕を驚かした一問は「あなたは日本をどう思ひますか」であつた。僕は日本から歸るのでなく今僕は漸く日本に近づかんとしつつあるのである。僕は彼等の質問も恐らく米國の新聞記者から教へられたものかも知れないと思つて自ら密かに微笑した」

それから私の友人は言葉を續けた……

「僕は上海へ上陸して慶應の出身者から迎へられた……彼等はどうして僕が慶應へ行くといふことを知つたであらうか。日本の宣傳網即ち報告機關は微に入り細を極めてゐると僕は思つた。僕は慶應出身者の歡迎會へ出席した、そして始めてそこで僕は日本料理を食べた、いな眺めた、如何となれば日本料理は恐らく日本の文明そのものゝやうに實質より外觀に價値がありさうだからである。僕は席上で慶應義塾の由來を詳細に聞かされた……その時僕は再び「またしても宣傳だ」と私かに叫ばざるを得なかつた。あゝ果して日本が僕が今想像するやうに宣傳の國でありヂヤナリズムの養育場であるならば僕は日本へ行く必要がない。若し僕が日本へ渡らねばならぬならば、何故三十年前に決行しなかつたであらうか。」

私はその後この日記を讀ませられた時、一言一句取つて以て私の言葉とすることが出來るとカズンズに語つた、そして私は彼にいつた、

「君の言葉のやうに君は確に三四十年後れて日本へ來た……なぜ君はアストンやチヤムバレーンの時代に日本へ來なかつたか、なぜ君は小泉八雲の時代に日本へ來なかつたか……半世紀前の日本は今日のやうに惡化して居らなかつた。僕の惡化した日本は卽ち外國化した日本、云ひかへると僞りの日本といふ意味である。今日の日本がかく惡化した罪の大部分はもとより日本それ自身にあるが、西洋人もその一半を分たねばならない。五十年前に日本へ來た西洋人は巨人であつた……米國人でも英國人でも乃至は佛國人でも。彼等は今日彼等が北極探險へ向ふと同じやうな正直で嚴粛な態度で來たものだ。然るに今日日本にゐる大部分の外國人は所謂出稼人に過ぎない、彼等は香港からマニラから乃至は布哇バンクーバーから日本へ流れ込んだ……日本は恰も芥溜の如く本國から掃きだされた不具者を無批判で收容してゐる。シンガポールの藥種屋から放逐された一店員も日本へ來ると立派に學校の敎員で通る、又無學な米國太平洋岸の勞働者も日本へ來ると、西洋人樣で通つて大手を振つて大股に歩く……實に日本は外國人の樂園である、そしてこの樂園内で外國人の取つて惡い果實が一つもない僕等少數の人間は「日本よ外國崇拜から目覺めよ」と呼んで、自國を輕侮して世界の四流國であるといつてゐる……然し一般の日本人は到底この外國崇拜を捨てさうにない。君試みに日本の山間幽谷の村落へ行つて見給へ、そこに英語の讀める人間がゐないに係らず理髪店は英語の看板を懸けて居る……これは何を語るであらうか。恐らく君等外國人は如何に不快な[illegible]……[illegible]小學生等は君等を見て駱駝の脊を撫ふであらう。かふいふ行爲を見て君等が自惚れて來るといふことは極めて自然だ。君等も弱點の多い人間の一人に過ぎない……弱點の誘引位無意識的のものはない。人が一度その誘惑にかゝると直ぐ理性を失つて仕舞ふ。實際君等は一般の日本人より價値のある人間であるだらうか、日本人の弱點を利用した時君等は既に墮落してゐると云はねばならぬ。して見ると日本人の西洋崇拜の方が君等の日本人輕蔑に比較して、遙に弱點としても無邪氣な弱點と云へると僕は思ふ。五十年前の外國人は今日の外國人より遙に立派な態度で日本人に接した……彼等は日本人を尊敬しないまでも決して輕蔑しなかつた。彼等は日本人の性質と環境とを詳細に研究した、そして彼等はその結果を著書に出版した。君等は僕等にいふであらう、「今日の日本は五十年前とは異つた日本である半西洋化して僕等の研究の材料にならない。興味ある材料のない所にどうして僕等の研究があらう。僕はこの時この言葉にかく答へる、「君等のいふこと一應は尤もだ。然し日本は世界中でも最も古い部の國だ。如何に今日日本が變化したといつてもさう一度に全部の特質ある美を失ふ理由がない。若し君等がそれを發見しそれを一々拾ふことが出來ないならば、正に君等は盲目だ。かく僕はいふものゝこれは出稼人に對していさゝか無理の注文だと云へる。出稼人は金錢が目的で、彼等は學者でない紳士でない、學者や紳士に相應しい精神的の性格を持たない彼等に感興がない、……それ

で彼等はその物質的目的が達せられないとずん〳〵日本を去つて仕舞ふ。彼等の記憶に殘る所のものは、日本は西洋崇拜の國だ」といふ一事のみである。君が上海で「自分が大きくなつて日本が小さくなる」と感じたことは君の間違つて居らない直感である。詩人は直感の人間だ……君の言葉は一々僕の肺腑を突いて今日の日本人の短所を擧げてゐる。僕は日本人が淺薄な西洋崇拜から目覺めない以上日本は眞實の文明國でないと信じてゐる。如何に日本が海陸軍のお蔭で倫敦で巴里で一等國らしく新聞紙上で書かれても、それは何等實際の價値のないものである。日本が兵隊や軍艦を捨てて素裸になつた時その眞價が定められねばならない。僕は一日も早くその時が來て、價値のないものならば價値がないとなつた方がどんなに氣樂か知れない。ああ虚榮を維持する位苦しいことはない……この虚榮のお蔭で僕等は精神的にも物質的にもどんなに貧乏するか知れない。僕は曾て日本鎖國論を書いたことがある……フオド自働車の工場や米國石油會社のタンクが日本に設立されてゐるやうな時代では鎖國論はいふまでもなく夢物語に過ぎないが。然し日本國民にこの思想の背景がなかつたならば到底僕等は日本獨特の文明を築くことが出來ない。僕等は保守主義のなかから進歩を生みだすの秘密を學ばねばならぬ。昔奈良朝時代は支那崇拜を極めた時である。平安朝の某才女は白樂天の詩句一節を記憶して居つたがためその學識を稱贊されたが、それは恰も今日の青年がヴエルレーヌの詩やロマン・ローランの語錄を暗誦してその學才を鼻にかけるやうなものだ。然し日本が鎖國して徳川時代に及び日本文化を獨立的に建設するまでに數百年の年月を費やしてゐる。してみると僕等は今後二百年もたたねば眞の文明國を日本に見ることが出來ないであらう。その時には君のやうな英文學の講師を遠方から迎へる必要もないであらう。君は日本人の下手な外國語を指摘したが、それに僕は同感する……僕は外國語の下手なことを憂へない、寧ろ支那人や朝鮮人のやうに上手でないことを誇りとするものだが、この下手な外國語を學ぶにどれだけの努力を浪費してゐるか知れない。僕はこれを思ふと腹がぞつとする位である。僕等は御維新以來國を外國なみに持ちあげたい一心で海陸軍を擴張して來た、そしてそれと同じ心理から僕等は外國語を學び始めた。今日日本の海陸軍が餘り役に立たないやうに僕等の外國語の價値は大なるものでない……然し日本が海陸軍を捨てることが出來ないやうに外國語を捨てることが出來ない、これが僕等の運命だ。後進國が先進國と爭ふに多大の犧牲を拂はされる、恰も新前の店が廣告の力で古い店と競爭するやうなものだ。僕等は果して廣告の方法を米國から學んだかどうかを知らないが、この廣告策は後進國が取らねばならぬ唯一の方法であると云はねばならぬ。實際今日の日本は廣告の力で國際的名譽を維持してゐるの感がある、そして僕等はその廣告費が餘りに大なるに頭痛を感じてゐる。然し廣告策で出發した商店はそれを捨てることが出來ない、それを捨てる時の危險を考へねばならぬ……これも僕等の悲劇だ。この避けることの出來ない悲劇が國

國際名譽の上にだてのみならず國內の事々物々の上に、頭から踵までその不愉快な影を投げてゐる。君は上海に於て日本を廣告の國宣傳の國であると睨んだ……廣告拔きで成存し得る英國並に英國人は羨ましい。然し廣告も百害のみで取柄一つないとは云はれない……要は如何に廣告を宣傳を紳士的にするかにある。人はいふかも知れない、「世に紳士的廣告なるものがある筈がない。廣告は俗惡なればなるだけ廣告はその力を出してくる。」事實その通りであらう。倫敦タイムスも廣告なしに新聞を維持し得ないならば、タイムスはデーリー・メールの廣告策を強ち笑ふ譯にゆかない。してみると廣告宣傳の國日本は世界中で一番現實的な新しい國といふことが出來るかも知れない。この地球上で日本のやうに新しい國はないであらう。』

話を私はジエームス・カズンズの日記へかへして續ける……私は、他人を借りて自說を語るやうに思はれるが許して貰ひたい。カズンズは船を捨てて横濱へ上陸した。岸壁から埠頭の樣子を眺めて日本の商業貿易の將來を考へた。彼はシンガポール以來馴染の人力車に乘つたが、急に人間を牛馬視するやうな苦痛を感じて之れを捨てた。日本の街上の光景は彼を喜ばした……そこには柔かい黃金色の太陽の光線がなみなみと溢れて街上の人々の顏を一層黃色に見えさせた。彼は彼等の黃色の皮膚は輕蔑すべきものでなく之の美は歐羅巴人の皮膚以上の美であると思つた……特に年若い女は美しいと思つた、また彼は小さい子供を背負つた子守りに人間的興味を感じ、日本の町に澤山の子供が居らなかつたならばどんなに寂しいだらうと思つた。彼は倫敦のバーリングトン・アーケードのやうに狹い道路をはさんで兩側に鮨詰めになつて店を開いてゐる有樣も面白いと思つた、そしてそのある店の門口に垂れる紺の暖簾殊にそれに書いてある文字は如何にも模樣美に富むと感心した。彼は一軒の花屋の前に立ちどまり中にならべてある草花を眺めて、日本の花も西洋の花も大差がなく、『自然は人間社會のやうに區別や相違がなく西洋も東洋も同じだ』と心のなかで叫んだ。彼は文字通りに四海兄弟を信ずるヒユマニストである、彼は印度のセオソフヰを信ずる博愛主義の詩人である。彼は今東京へ向ふべく電車に乘りこんだ。日本の電車は少くもスウエズ以東には怖ろしく立派な淸潔な電車だと思つた、然し彼が電車內に入つた時乘客のすべてが一齊にその視線を向けた、彼等のあるものの眼は牛のやうに愚鈍であると感じた……例令それ等が印度人や支那人ほど無神經の感を人に與へないとしても。電車は走つたそして止つた。乘客はどやどやと他人へ無遠慮にわれ勝ちにと出たまた入つた。彼はこの光景は歐米どこへ行つても見ることの出來ないと思つた……何故に彼等はさう急がねばならぬかと疑つた、そしてどこに天下に有名な日本人の禮儀なるものがあるかと私かに思つた。更に彼は心のなかで思つた、『文明の利益は結構だ、然し電車などゝいふものが出來たゝめに日本人が千年以來の禮儀をお互に失つたとしたならば、所謂文明の武器位無用なものはない。彼は男の乘客が婦人に對して何の考慮を拂はない樣子

を悲しく感じた。彼は必ずしも女に拂ふ禮儀の有無で國の文明を計る人間でないが、日本人は或は外で女を虐げ内で彼女を愛撫するといふ佛蘭人の一種かも知れぬと思つた。最初のうちは左程にも感じたかつたが、電車内の言葉で語ることの出來ない臭氣を感じ始めた……彼は南印度で四年間屋外生活をした人間である、彼の清鮮な空氣に對する感度は鋭い。彼は窓を開けて顏を外の空氣に曝らした……彼は不愉快なものを見た、それは電車を挾んで立つてゐる大きな廣告の看板である。彼は如何なる廣告であつたかは知らなかつたが、彼は廣告に喜ばしいものが一つもないと思つた時、彼は『あゝ日本は廣告の國、寧ろ廣告亂用に近い國だ、日本は宣傳の國だがそれを適當に使用する方法を知らない國かも知れない』と叫んだ。

彼は自分の側に一人の女が坐つてゐて變に不愉快な臭氣を放散すると感じた。彼は直ぐその臭氣は彼女の毛髮の間から來ることを知つた……彼女はいふまでもなく純日本風に結んで居つた。彼は何故にかういふ不衞生の油を使用するだらうかと思つた、そしてまた浮世繪で有名な昔の春信や歌麿の美人もかういふ臭氣を放つたであらうかと訝んだ……日本婦人の結髮は假令美術的であるとしてもこれは到底人間の忍び得る所でないと思つた。彼は又電車内に洋裝してゐる年の若い一婦人がゐるのを注意した……實際をいふと彼は彼女を見まいとしたがどうしても見ざるを得なかつた、そして彼は如何にも醜惡なものを見たやうに感じた。彼女の洋服はその體と離ればなれになつて、何故彼女はそれを着ねばならぬといふ意識なしに着てゐるやうに思はれた、故に彼女と洋服とは一つの言葉を語らなかつた。彼はまたかうも思つた『或は彼女はかういふ洋服を着てゐるといふ意識が强いがため、彼女は自然に醜惡になつたかも知れない。』彼は日本婦人に洋裝は禁ぜねばならぬと思つた……日本の女は長い年月の習慣の結果で胴や肩や手や腰の線を臺無しにして仕舞つてゐる、又それ等を適當に發達させなかつたといつた方が眞實であらう。そしてその短所を補ふべく發明された服裝が即ちキモノである。キモノは日本婦人の不恰好の體を具合よく匿くして美化させる不思議な魔法的とも云へる一種の道具である。日本人の發明としてこのキモノ位偉大なものはない。今日本の女がこの尊い發明品を捨てて西洋服を採用するといふことは、人間は短所へ短所へ誘惑され行くといふ生きた標本になる譯だ。西洋の婦人服は日本服ほど人間を美化する魔法を知らない。それは單にアダムやイーブが使用した木の葉の代用物たるに過ぎない。若しそれを着用する女が肉體美の所有者であつたならば、決してそれは排斥すべきものでないであらうが、如何せん日本婦人は脛の長さが短かすぎる。それに當今歐米の流行に從つて寸のつまつたスカートを着ける段になると、これぞ世界無比の狂氣沙汰であらうと詩人カズンズは思つた。

彼はまた乘客の顏を見廻はし彼等の額はいづれも揃つてさう廣くない高くないことに注意した。彼等の低い狹い額は何を語つたか……

いふまでもなく淺學短才の證據だ。それから彼は彼等の手を見た、それ等の手は概して綺麗で均齊の美ともいふことの出來るものさへ備へてゐるが、決して傲然として力のある手でない。第一に彼等の手の指が短くて理想の乏しいことを、それから彼等の親指の恰好に意志と獨創の強くないといふ暗示があることをカズンズは感じた。然し電車の車掌の手でも歐米同階級の人間のそれに比較すると、到底同日の談でないほど美的なものだと彼は思つた。彼は日本人は奮鬪者ではないがまだ藝術を全然忘れて居らないと思つて一種の歡喜を覺えた。然し彼は工場が連なり高い煙突が林立してゐる光景を見てすぐ暗い憂鬱に撃たれざるを得なかつた……彼は心のなかでいつた、『僕はどこへ來たのか、まさかバミングハム附近へ來たのではあるまい、又市俄古へ着くのでもあるまい。然しこれはどうしても僕の夢見た日本とは思はれない。』電車は彼の悲哀などを問題にしないでどんどんと工場や煙突を送つたり迎へたりして前進する。彼は瞑目して運命に萬事を委托するの外はなかつた。彼は平和な運命論者である。天命に順應して逆らはない抒情的愛蘭人である。彼はいつも心に共痛を感ずる時目をつぶつて事情の變化を待つ人間である。故に彼は心靜かに『よしんば東京が市俄古でも又バミングハムでも構はない』と觀念して、電車の東京へ着くのを待つた。彼は東京々々といふ大きな聲に驚いて立上つた時、プラットホームで寂しく彼を待つてゐる友人野口米次郎を見出した。

：野口米次郎とはこの文の筆者である。

私は本文の最初に名刀正宗の切れ味を首筋に入れると敍述したから、遂に友人カズンズに首切の團左衞門の役を引受けさせて仕舞つたかの感がある。カズンズは可なり見事な手裏劍を上海から撃ちだし、つづいて彼一流の尊敬に價する切味を見せた。彼のいふ所悉く私の云はんとする所で、彼の言葉に對して私は共同責任者の地位に立つものである。私が一外人に重要な役目をさせたことを人が卑怯といふならば正に私は卑怯であるが、若し私の著書が暗示となつて彼にかかる批評態度を取らしたならば、私は原因で彼は結果に過ぎない。してみると私が本當の團左衞門で彼は私の命令に從つたのみである。

カズンズは東京驛で私一人だけを見出して寂寞を感じたに相違ない。彼は上海で既に名士取扱ひされたのであるから恐らく東京驛で新聞記者や歡迎者の包圍攻撃を受けるであらうと想像したかも知れない。然し彼は新聞記者に三四行の雜報を送る商賣上の必要があつて彼を上海埠頭で迎へたに過ぎなかつたことを自ら知つたであらうか。もとより私が宣傳を巧に利用したならば彼は東京驛でも堂々たる名士となつて、新聞社の寫眞班の包圍攻撃を受けたに相違ない……然し私はこの種の喜劇に厭いてゐる。實際私は東京驛で實演される所謂名士歡迎振りを日本の恥辱の一つだと思つてゐる。それで私は私の友人を彼が倫敦のチャリング・クロスで又紐育の中央停車場で迎へられるやうに迎へたのである。私は日本人の外國名士歡迎振りを恥づるといつ、

た……私は實にそれを恥づる。十年前に印度のタゴールを迎へた東京驛の光景はどうであつたか。彼は恰も凱旋の勇者であるやうに迎へられた。恐らく昔羅馬入りしたシーザーもあれ以上の歡迎を受けなかつたであらうと私は想像した。近くアムノゼンはどんな歡迎を受けたかを私は知らないが、假令外國人がタゴールでもアムンゼンでなくても宣傳の效さへよく利けば、如何なるものでも東京驛で名士扱ひを受けることが出來る。今日の日本人に外國人に對する正當な價値判斷を要求するのは蓋し無理だ、如何となれば彼等の西洋崇拜は彼等を盲目にして仕舞つてゐるからである。西洋の小さい蟻の山も日本へ來ると大きな山となるが、勿論それは實在でない日本人はその幻を見るのである……幻は愉快なものだ日本人はその幻に誘惑されて喜んでゐるのだ。私は帝劇の宣傳部から幾度『大音樂家來る』の聲を聞いたか知れない。今度こそ最大音樂家であらうと思つてゐると、直ぐ後からまたもや最大音樂家がやつて來るといつたやうな譯で、宣傳もかうなつては滑稽だ。そして所謂大歌劇團なり大音樂家なりが東京驛へ着くと、常例に依つて綺麗なキモノを着た帝劇女優がずらりと並んで花束を進上する……あゝ天下にこれ以上の喜劇はどこにあるだらうか。實際帝劇の女優達は新聞廣告用の特別大活字以上の價値がない。彼等は生きた廣告のビラに過ぎない。

　私は今カズンズの日記を讀んでかういふ文字を見出す……

『東京驛へ着いた。驛の建築は中々立派な西洋館で歐米の如何なる都會をも飾るに足ると云へる。假令外國模造にしてもかう見事に出來上ると僕等は感服しなければならぬが、建物が米國趣味の跡をうたつてゐるやうに思はれ、日本の土地に對しては一種の冒瀆の感なきを得ない……少くもあるべからざる所にあるの感があつて巨大な建築の風來物だ。驛を出ると面前に驛以上に巨大の感を人に與へる丸ビルが聳へてゐるが、これも米國に擬ふ最大敬意の表徴である記念碑である。市俄古や紐育で見る普通商賣區中の建築で何等の印象をも僕に與へない。若しこれが東京誇りの建築の一つであるとしたならば、東京は米國第四流の都會たらんとしてなほ及ばざるものだ。僕の信ずる東京はそんなものである筈がない。日本の最大都會はもつと權威あるものでなければならぬ。僕は驛や驛の附近では僕の東京を見出すことが出來なかつた。そこで僕はノグチに質問した、「東京はどこかね。」ノグチは「こゝが即ち東京だ」と僕に答へた。僕は彼にいつた、「然しだ西洋諸國の例を見ると、停車場は町の中央を離れた場末にあるに定つてゐる。君のいふ通り東京であらうが恐らくその中央であるまい、僕は東京の中心を見たい。」ノグチは僕に答へた、「こゝが東京の中心だ。」若し果してノグチの言の如くこゝが東京の中心としたならば、僕はそれを悲しまざるを得ない驛の右手に一つの醜惡な銅像が立つてゐる。ノグチはそれが誰であるかを知らなかつた、また彼が知らないほど詰らない人物であるに相違ないが、僕は馬鹿げたものを立てたものだと思つた。ノグチはいつた、「これはほんの一見本に過ぎない、まだまだ

殘酷な銅像は澤山ある…………驚いてはいけない。日本へ來ては魯鈍になる修行が肝要だ。」もとより銅像の悪いのは日本ばかりでないであらう。倫敦でも又美術の都と云はれる巴里でもどこに藝術的銅像があるだらうか。然し若し僕が日本人ならば銅像破棄から東京美化の十字軍を始めたいと思つた。僕は不平家かも知れないが美の修道者だ……修道者として僕の眼にこの東京驛附近がどうしても東京第一流の場所と思はれなかつた、どこかにもつと美しい町があると想像した。日本人は藝術的國民として世界に知れてゐる……藝術的國民とはものの統一と諧調とに敏感な人間をいふ。僕は眼前に生れて以來嘗て經驗したことのない混亂不統一の光景を眺めて、「これが果して藝術的國民の仕事か」と叫ばざるを得なかつた……見よ洋服の人も日本服の人も、靴を穿いた人も下駄を突掛けた人も乃至は素足の人も肩と肩とすり寄せて推しあつてゐる。ああどこに藝術的國民の統一があるであらうか。僕はこの位の悪夢を目のあたり見たことがない。僕は「これはどうした狀態か」と歎息した。ノグチは僕を顧みていつた、「これは日本の復興狀態だ。」僕は若しこれが復興であるならば、それは日本に於ける米國の復興であらうと思つた。ノグチは更に僕にいつた、「日本にいくつもの日本がある。ここは澤山ある日本の一日本に過ぎない。」この言葉が單に皮肉でないならば日本は確に多種多樣の國であるに相違ない。』

私はその後間もなく外遊の途に上つて、カズンズに異つたいくつもの日本を一々見せる機會を失した。彼は一年も東京に滯在せずに再び印度へ歸つて仕舞つたが、私の留守中この西洋模造の日本の外部如何なる日本を彼は見たであらうか。恐らく彼は私の見せてやりたいと思つてゐた日本を見ずに歸つたかも知れない。私はカズンズを思ふと彼がどんなに東京驛附近の西洋館を罵倒したかと想像することが出來る……實際西洋の標準で西洋館らしいものを求めたならば、帝國ホテルと三菱銀行の建物二つあるのみだ、そしてその餘は取るに足らない。私は嘗て日光を論じて『ここは印度の延長だ』といつたことがあるが、私はいふであらう、『東京は紐育の出店だ……或は紐育は東京から始まるといひたい。』然し東京は實際に於ける紐育の延長ブルークリンの程度にまで至つて居らない。

關東の大震災は大部分の東京を灰にした。灰のたかから新銀座が生れた……これが現代日本の寶刀の新鬪であるたらば、最早や私はそれを兩斷なる勇氣がない、實以て刀の名折れだ。さても銀ブラとは何のことだ……さも立派な場所でもあるかのやうに、ステッキ振りふり背のびしてそこを歩く青年や斷髮洋裝の女などを見ると、私は齒の浮くやうに感ずる、その光景は假裝行列以上の滑稽と云はねばならない。

私は嘗てかういつたことがある、「多少たり倫敦を知り巴里を知り紐育を知つたものの眼から見ると、銀座は田舍町だ……第一世界の一等國の一等地に十錢均一の玩具店や投賣りの洋品店などのある筈がな

い。人通りの點では銀座も世界の都會かも知れないが、あの軒を並べた飲食店の有様はどうだ……全く私共を辟易させる。私共必ずしも道學者ではないが、是等の飲食店には必ず厚化粧した女給が並んでゐる。銀座の横町に男の給仕で旨しい料理を食はせる所が一二ないではないが、さういふ實際の料理店らしい所が流行らずに、厚化粧白エプロンの女給の店に客が集るのを見ると、如何なる種類の人間がここを支配してゐるかが想像される。銀座は必ずしも婬だ靡とは云はないが、今日の狀態をそのままに放擲して置いたならばいつか巴里のモンマートルに成らないとも限らない。モンマートルはもとより巴里の一等の場所でない。事實今日の銀座は淺草の六區と大した相違がない。若し銀座をして新日本を代表させようとするならば更に一工夫を要する。私は銀座の飲食店で須らく男給を使用して貰ひたい。外國へ行つてみると家庭でも上等の家では給仕人に男を使用してゐる。女を使つてゐる家庭は三流四流のものだ。飲食店でもさうで相當名のある所では決して厚化粧の女給を使用しない。ある西洋人の書いた日本印象記に、日本の女は皆な賣笑婦だとあるのを讀んだことがあるが、其人は單に外觀から自分の國の風習に思ひくらべてさういふ印象を受けたものであらう。それから銀座に軒を並べる西洋料理店の名前だが…………これがまた私共を妙な氣持にさせる。やれライオンだ、やれエスキモウだ、やれアルプスだ……一體全體それは何といふ名前だ。かういふ名前は米國などの博覧會の盛り場だけで附ける名前だ。銀座が代表するといふ新東京の文化なるものがあるとすると、それは果して何であるか……若し知つてゐる人があらば私に教へて與れ。昔は一寸とした菓子にさへ如何にも美しい名前を附けた日本人が、今日飲食店に動物や山の名前より附ける方法を知らないとは慚愧至極と云はねばならぬ。」

私は今現代日本の風景で切るべきもののすべてを兩斷した。もとより私の刀に正宗の切味があつたかどうかは私の知る所でない。然しまだ重要な一問題が殘つてゐる、それは外でない、かく私が兩斷した後で何ものの眞實な日本が殘るだらうかといふことだ。

ジョーと語る

宮島新三郎

一

――これはエピソードである――

一八八二年（明治十五年）九月五日の黄昏であつた。年の頃二十五六と見える、面長で、と說明するよりは、日本の思想家石丸梧平君の顏を思はせるやうなと一口にいつたら好い容貌の持主で、素晴らしく脊の高い青年紳士、更に委しくいへば、その後二年たつての身體檢査表に依ると、眼色――灰青、色感――良、視力――右二三、左二七、聽覺――最高聽覺一秒につき三〇、〇〇〇から四〇、〇〇〇の波動、呼吸力――最大呼吸二九八立方吋、腕力――右手八三、左手八〇、身長――坐姿、椅子の坐床より計りて三呎一・八吋、靴ばきの起姿六呎〇八吋、內靴踵の高さ〇、七吋、差引六呎〇・一吋、重量――通常室內服にて一四二封といふ堂々たる紳士、といつて善いか惡いか、兎に角、淡茶色の、ひどく、想像のつき兼ねるほどダブ〳〵な縞ズボンをはき、長い黑いモーニングを着し、頭にはデコボコの多い高いシルク・ハットをかぶつた青年が、屈托さうに、ロンドン市のファーリングダン街を北の方へブラリ〳〵と歩いて行つた。

青年はいつも行きつけの宗教書店の前でちよつと立ち止まつたが、別に這入りもしないで又歩き出した。ラッシ・アワはたうに過ぎてゐたが、この街路には何時も猶太人の露店が出てゐるために、相變らず人通りが繁かつた。乾いた馬糞と砂塵とが一緒になつて、時々薄寒い風に舞ひ上つた。メモリアル・ホールの前まで來ると、其處の石壁に貼つてあるビラが青年の眼をとらへた。

> 土地の國有
>
> 於メモリアル・ホール
> ファリングダン街
> 一八八二年九月九日、火曜日
>
> 土地國有貫徹協會主催
> エフ・ダヴリユー・ニユーマン教授司會

青年は何の氣なしに這入つて見た。聽衆の席は勞働者の群で一杯になつてゐた。その夜の講演者は『進步と貧困』の著者にして單稅論者

なるヘンリー・ジョージその人であつた。辯士の力強い一語々々をききながら、青年はすつかり興奮して、堅く拳を握り、幾度となく、隣りの人に氣付かれるやうに齒ぎしりをした。奇蹟を感じたといはうか、電氣に打たれたといはふか青年はすつかりジョージの言葉に吸ひつけられてしまつた。尤もそれがアメリカ訛であることだけは、青年の生來冷徹な意識からのがれなかつたが。ジョージの演說はたゞ一人の心を打つたばかりのものではなかつた。それはまことに英國に火を點じた炬火であつた。人間業ではどうしても消すことの出來ない、それは、火であつた。群集の耳を捕へるに充分な熱を持つてゐた。けれども當夜の聽衆の中で最も高い思想的代償を拂つたのは、何といつてもこの青年を措いて他にはなかつた。ジョージの演說は青年の生活に奇蹟を演じた。後になつて書いた述懷について見ると、

『その時始めて「宗教と科學の爭ひ」……聖書の放擲、婦人のより高等なる教育自由を書いたミル、その他、ダーウイン、ハツクスリー、テインダル、スペンサー及びそれ以外の人々、私を知識的に育て上げて來た學者達の周圍に渦卷いてゐた一切の嵐は單に中產階級の仕事にすぎないことが分つて來た。……經濟的基礎が如何に重要であるかゞわかりかけた。』

演說が終つてからも、青年の興奮は去らなかつた。經濟學的觀點に立つた社會問題の研究、青年には全く耳新しいことであつた。尤も子供の時分に、ジョン・スチユアート・ミルが愛蘭土土地問題について書いたパンフレットを讀んだことはあるが。彼はホールの出口の所で、會のかへりのものから『進步と貧困』を丁度持合はしてゐた六ペンスを投じて手に入れた。そして追々、この書物こそ自分が九年間もロンドンにゐて筆を動かしながら僅かに六磅（六十圓）しか稼げなかつた（而もそのうちの五磅は賣藥の廣告を書いた謝禮であつた）理由を或は說明して見れるかも知れないと考へながら、凱旋將軍のやうな元氣で、オスナーバー街の唯一人ゐる假の住家に歸つて行つた。澄んだ沁みるやうな初秋の夜風も彼の頰には冷たくなかつた。この青年がその夜徹宵して、『進步と貧困』を讀み通したことはいふまでもない。その後青年は前よりも一層繁く大英博物館の讀書室へ通つた。そして彼の机の上にはカール・マルクスの『資本論』の佛譯がきまつて備へられた。しかし青年の趣味は、また彼の傍らに『トリスタンとイゾルテ』の管絃樂譜などを置かせることも忘れなかつた。この新マルキシストの青年こそ、ジョージ・バーナード・ショーその人であつた。——

二

『資本論』を讀めとすゝめられたのは、社會民主黨の一員からであつた。薦められた當人は汗水流して、いや血をしぼるやうな思ひで、それを讀破したが、社會民主黨員では誰もまだ讀んでゐないのを知つて、ショーは內心得意を感じた。けれども彼は一から十までマルクスを鵜呑みにするやうな不見識な藝當は演じなかつた。マルクスの階級鬪爭說にも剩餘價値論にもやがて反對し始めた。それにはスタンリ・ジエヴアンズの『經濟理論』や『經濟學初步』や『金と交換機構』などの研究が役立つた。從來資本主義制度に反抗の叫びを擧げたものは、例へばラツサルにしても、マルクスにしても、リープクネヒトに

しても、モリスにしても、ハイドマンにしても、皆なブルジョアジイの息子である。プロレタリヤ階級は寧ろ資本主義制度の餘光を謳歌するではないか、從つて社會の革命的要素は中産階級並びに上流階級であつて、無産階級は寧ろ保守的要素であるといふブルジョアジイの意識觀念に、ショーも亦た囚はれてゐたのである。かうして彼は、階級鬪爭によらない、一箇平凡な社會主義者となつた。彼はそれでも誰の耳にも響かない天の聲を自分一人きゝでもしたやうに、勇敢に、『自分はこの世に何かの使命を帶びた人になつた』と言つた。それ以後、彼は社會主義の煽動宣傳の仕事に心魂をすつかり打込み、一八八四年(明治十七年)一月四日に『最高の道德的可能力と一致した社會の改造』を理想とするフエビアン協會が成立すると間もなく、これに入會し、忽ちその大立物となつた。それは丁度フエビアン協會の生後八ケ月、社會民主同盟が八月四日第四回目の會合を開いて、その席上でバローズとウイリアムズとの發議でS・D・F・(Social Democratic Fedration)なる名稱を執ることに決議した翌月であつた。ショーは當はフエビアン協會に這入らうか、社會民主同盟に行かうか、何れとも決し兼ねて、暫し迷はざるを得なかつた。だが終に『私は將に社會民主同盟に加はらうとした時に、急に變心して、その代りにフエビアンに加入した。私は綱領乃至主義の目立つた差違に指導されたのではなく、たゞ私自身の嗜癖や知的習慣を持つた人々即ち吾々の眼前にある仕事をするやうに丁度その時成熟してゐた人々の心を惹くのはフエビアンであつて、フエデレーションではないといふ本能的感情に支配されたのである。』ハイドマン氏を首領とする社會民主同盟は無産階級の團結組織を目的としてゐたに反し、フエビアン協會は、中産階級並びに知識階級の階級自覺を眼目としたのであるから、後者がショーの思想により接近してゐたことは明かである。從つて又ショーがフエビアン協會に入會したのも極めて當然であるが、假りに『變心』せずにその時社會民主同盟に加入したならば、彼の社會主義思想のその後に於ける内容發展にどれだけ今日と違つたものを示したであらうと想像をめぐらすとき、座興とはいひながら、云ひ知れぬ興味の湧汾するを禁じ得ない。

始めショーはフエビアン協會のトラクト第一號『多數の者何故に貧しきか』を手にするまでは、その協會のことを何も知らなかつた。けれども一度入會するや、彼は聰明博識な人々と共に事業をすゝめて行くことに深い興味を覺え、忽ちこの會の大立物となり、トラクト第二號『宣言書』(一八八四年)を殆んど彼一人のペンで書くといつた風であつた。聰明と適確と博學とで聞えたシドニー・ウエッブをこの協會へ引き入れたのはショーであつた。マルクス及びエンゲルスの『共產黨宣言』が有力である一つの理由は、それに盛られた記錄が正確であり豐富である點だと考へたショーは、フエビアン協會のトラクトも亦たその記錄が正確豐富でなければ効果がないことに思ひ至つた。記錄を正確豐富にする仕事を完全に果し得るものは、二三年前から交際し始めた『生き字引』のウエッブより他にゐない——かういふ考へから、ショーはウエッブを說いてフエビアン協會員たらしめた。丁度ウエッブが植民省に務めてゐたところである。ショーの辛辣なる機智と輕快なる論理、ウエッブの適確なる判斷と健全なる保守主義とは、共に

相俟つてフエビアン協會の進行を滑かにした、いはゞ車の兩輪の如きものであつた。

爾來十有余年、その間に『ヘル・メル・ガゼツト』に入社して美術批評を擔當したり、『ザ・スター』の創刊と同時にこゝに入社して音樂批評家として働いたり、『ワールド』の音樂批評家にもなれば、『サタデー・レヴユー』の劇評家ともなつて活躍はしたが、主力をフエビアン協會に注ぎ、漸進的社會主義の宣傳に專念したことはいふまでもない。『フエビアン禁酒改良案』『フエビアン教育論』を始め多くのパンフレツトを書いたり、出來るだけ多くの社會主義の會合に出て演説したり、時には荷車に乘り、ラツパを吹かしてハイド・パークに押出して行き、そこで公園演説もやれば、又大道演説もやつた。

この社會的活動の全盛時代は同時に藝術活動の成果期とまではいへないでも、たしかに開花期であつた。『不合理な難關』(一八八〇年)、『藝術家の間の戀愛』(一八八一年)、『キヤシエル・バイロンの職業』(一八八二年)それから『非社交的社會主義者』(一八八三年)を書いた小説家としてのショーは前期に屬するが、『男やもめの家々』を始め『戀をあさる人』『ウオレン婦人の職業』『武器と人』『キヤンデイダ』『運命の人』『譯る筈なし』等の劇を書いて劇界演劇界に聲名を馳せるに至つたのはこの時期である。ロンドンが初めて自由自在な早變りの『ジー・ビー・エス』に不思議な眼を向け出したのは、晝間はショーが荷車の上から汚穢惡臭の東區(ロンドンの貧民街)に革命を説ひてゐるかと思ふと、夜になればウイリアム・アーチヤや教養ある西區(繁華街)の人々を『武器と人』の見物にやつて哄笑させることを發見した時であると誰かゞいつた。以後のショーは社會主義者としてよりは、諷刺戲曲家として世間に知られるやうになつた。

三

私は戲曲家としてのショーよりも社會主義者としてのショー、荷車の上に收まりかへり、ラツパを吹かしてハイド・パークに繰り込み、そこで縱横無盡に論理の劍、機智の槍を使ひわけ、聽衆を引きさき突きさいて凱歌をあげたショーに會つて見たかつた。彼の社會主義思想に千頭敬服し推服してゐた譯ではない。いかに社會主義の口吻をもらしても所詮ブルジョア・イデオロギーから出てゐないのをひどく物足りなくさへ思つてゐた。けれどもショーの人間らしい働きは、フエビアンに這入つてからの十有餘年間に最も端的に、痛快に表白されてゐるやうに思はれ、その點に一種のあこがれを抱いてゐた。だから出來れば、ハイド・パークで荷車の上から演説するショーが見たかつたのである。

その望みは終にかなへられなかつたが、その代り演壇上のショーにも接し、又親しく相會して談笑これを久しうすることも出來た。最初の機會はフエビアン協會が與へてくれた。それは『社會主義共和國に於ける自由と權力』に關する六回六人の講演會で、一九二五年十月二十二日の木曜日をきつかけに、毎木曜にあり、同年十一月二十六日に終つた。會場はキングスウエー・ホールといつて約一千の聽衆は集め得られさうに見えた。第一火曜日は、曾て慶應の講堂できいたことのあるラツセル の『社會の自由』續いてラスキーの『政治上の自由』ウ

エッブの『經濟上の自由』・オックスフォード大學バリオル・カレッヂの校長リンゼーの『創造及び實驗への自由』、代議士ロスリン・ミッチエルの『家庭の自由』、そして最後がショーの『自由の不可能』であつた。

初めてショーの風貌に接したのはその第一日、ラッセルの講演當日であつた。その日はひどい吹き降りで少し道草を食つた爲め、私は定刻より稍遅れて會場へ行つた。丁度チエアマンのトウニイ氏がラッセルを紹介してゐるところで、その演壇の後左手にはフエビアン協會員が顔を並べてゐたが、そのうちに見覺えのあるラッセルが夫人と一緒に、そのお隣りには寫眞で知つてゐるウエッブ夫妻、その次には三呎一・八吋の上半身を椅子に浮かして、髮の毛の眞白な老紳士が、ダブル・ボタンの脊廣服をきちんと合せて、腕組みしてゐた。口髭も顎鬚も眞白だ。面長な割に眼がひどく小さく、睫毛が太くピンと上へよれ上がつて見えた。全體の印象は、喧しやの親爺さんといふよりは、溫情あふれるといつたやうな、寧ろ好々爺であつた。貧乏振ひをやつたり、顎鬚をしごいたり、一寸もじつとしてゐなかつた。ラッセルの講演が終つて、チエアマンが聽衆から質問を受ける用意をすると、第一にぬつと起ち上つて『チエアマン!』と呼びかけたのは、實にこの好好爺ショー先生であつた。『子供にどうして階級意識を植えつけることが出來るか』といふ質問だつた。冷瓏透徹した聲でもなんでもない、寧ろダミ聲である。ラッセルが何か答へた、するとショーは一語二語何か言つて、聽衆をどつと笑はせた。例の警句だつたのだらうが、殘念ながら私にはきゝとれなかつた。意識して舞臺に立つて芝居を演じてゐるのではないかしらとかんぐればかんぐれないことはなかつたが、少しも不快ではなかつた。愛嬌のある爺さんだなと思はせた。からして彼は以後毎回出席して、一二の質問を放つては、聽衆を笑はせた。

ショーの講演を愈々きいた時の印象は、その當時の日記が語つてゐるから、それを引用して見る。

『26th…… Fabinn Scicty の最後の講演ある日、講演者は Bernard Shaw 演題は 'The Inpssibilities of Freeom' きかずにはすませぬものなり。ショーの全盛時代は過ぎたと言はれても、未だ人氣はたいしたもの、Kingswny Hall へ定刻通りに行つて見ると、入場切符を買ふ人が列をつくつて待つてゐる騷ぎ、前五回の講演には見られなかつた光景である。

壇に上つて口を開くなり、否定形で講演の題をつけたのは、ブリトン人は生涯自由だといふ通融觀念を打破らうと思つたからであると皮肉つて、聽衆をクス〳〵笑はせた。講演の主旨は大體個人の自由とは結局時間の余裕のことに他ならない。この餘裕が出來れば凡ての組織が變つて來るといつて政治問題、結婚問題、避妊論、教育宗教に及ぶ。締めくゝりなければこれを榴霰彈的演說といふ。ショーは謂ふところの雄辯家ではない。屹々として語るといふ風である。ダミ聲で、抑揚をひどくつけるので、時々きゝとれぬことがある。而かも聽衆を惹きつけて行く。内容論旨のためではない、連發する警句や皮肉や頓智やである。演說振りは何處か日本の雪嶺博士を思はせるものあり。兎に角實物を通して既になぢみになつてゐる警句や頓智の連發で聽衆をやんやとうならせるところ、飽くまで彼の身上なるべし。ショーは立派な服裝をさせた細君を連れて社會主義の會場に來て、皮肉まぢり

警句入りで貧乏の講釋をする、聽衆は貧乏のことなど忘れて、アハハ笑つてゐる、ショーの講演は高等寄席であると河上博士は『祖國を顧みて』の中で云つてゐたと記憶する。少し殘酷すぎる評だが、無理でないことはない……』

四

日記によると、皮肉屋のショーを皮肉に見てゐるやうなところがあるが、尊敬を拂つてゐない證據ではない。ショーは或る意味でどうしても好きにはなれない、けれども別の意味で尊敬することが出來る。ところで尊敬の正體は底を割つて見ると好奇心が七分を占めてゐる。その意味の尊敬が、演壇に立つたショーを見てからは、更に私をして彼との會見を望ましめた。

　私は例の講演をきいて間もなく、浮田先生から紹介狀を貰つてあつたので、始めウエッブに會つた。ウエッブ氏は議會の開會中で非常な多忙にも拘らず、議會で三十分ばかりいろ〱と話してくれた。そして翌年の二月になればいくらか暇にもなるからロンドンの家の方へ來てくれ、今は田舍の方で暮し、ロンドンの家はほんの寢泊りするだけだからお構ひの仕様もない、ショーに會ひたいならフエビアン協會へ傳へて置く、その他協會は君の仕事を何かとヘルプするだらうと何處までも親切であつた。二三日すると、フエビアン協會の秘書役のゴールトン氏から何日何時お會ひしたいから協會事務所まで來てくれといふ手紙が私の手許へ屆いた。

會つて見るとゴールトン氏も甚だ親切で、直ちにショーとの會見の手筈をきめてくれた。ショーは今田舍で仕事をしてゐる、けれどフエビアンの會合には出て來るからその席上がよからうといふことであつた。かうして私は一九二六年一月の何日であつたか、ストランドのエセックス・ホールで、あの偉大な毛むしやらな、しかし溫かい手と握手した。ショーはやがて、優しいおつとりした調子で、地震で日本は大分破壞されたやうだが、もう復興したかとたづねた。これまでもこの疑問は普通のイギリス人からはよくかけられたが、ショーの如き人がと一寸面喰つたほどであつた。御世辭は本來英國人の禁物とするところと思つてゐたがさうではない。

『日本ではあなたのものは大變な人氣です。』と私も人並のことをいつて見た。

『イギリス人を嘲笑したり皮肉つたりしてゐるところが受けるのだらう。』とそろ〱一流の鋭鋒が見えて來た。

『いゝえ、聖ジョンをイギリス人が喜んで見てゐるの と同じ心理です。』と逆襲を試みた。

『日本の某氏から、聖ジョンの上演許可を與へてくれといつて來た。あんなものが日本人に面白いのかね……。』

『日本人はジョン以上に奇蹟を好みます。西風よ、西風よといふところなどたしかに受けます。日本には伊勢の神風といふ奇蹟がありますから。それにジョンが生命を賭して國難にあたるといふ思想は全く日本的です。日本人を喜ばすために書いたやうなものです。』

『そしてイギリス人を怒らさうと思つた、が……。』

『あなたは誰かとの對話で、作家が過去に題材を求めなくてはならな

いやうになれば、それはその作家が古雑誌であるといはれましたが、あれは本氣でいつたのですか。』

『私はいつでも本氣だ。』

『では死火山だなんてご自分のことを卑下するには及びません。日本では若い作家達が古雑誌になる流行がありますから。』

『若い作者の死火山は危險だよ。』

『あなたは今何をおやりですか。』

『"A Guide to Socialism for the women"といふやうなものを書いてゐる。……』

こんな風で話は何時までたつてもつきようとしない。しかしかういふ調子では、私が本當に提供して答へて貰ひたい問題に對しても結局警句や洒落で報ひられるに過ぎないと思つたから、問題の提供は斷念した。そして私は親切にやさしく對談してくれたことを深く感謝して、手をさしのべた。ショーは例の毛むくじやらな手を出して、堅く握手しながら、春暖かになつたらロンドンの住居へ來る、その時には是非又尋ねてくれと言はれるまゝに、必ずと答へて別れたもの〻、私は終にアデルフィ・テラスのショーの家を訪れなかつた。あの尊い一生のうちの二十分を更に尊くし意味深くするためには、却つてその後會はなかつた方が好いと、今では思つてゐる。ダンテのベアトリチエに對する戀を思へばだ。

五

私がショーに會つた年、即ち昨年の七月二十六日は彼の誕生七十年目にあたつた。勞働黨の主なる人々、藝術家の歴々は盛大な祝賀の宴を張つて、ショーの健康を祝した。その席上で彼は一場の演説を試みた。その一節に、

『カール・マルクスは自分を人間にしてくれた。社會主義は自分を人間にしてくれた。さうでなかつたら自分は自分と丁度同じ位の文學的才能を持つてゐる文士仲間の多くと變るところがなかつたに違ひない。社會主義はウエルズ氏を人間にした、そして彼はひとかどのことを成し遂げた。けれども他の文學者達を見るが好い、さうすれば自分が何故社會主義者であることを甚しく誇るかを理解してくれるであらう。』といふ句がある。私がショーに會つて先づ何よりも先にきゝたいと思つた重要事項の一つはこの一句と密接な關係を持つてゐた。つまりそれは何故イギリスの作家の多くは社會主義に無關心であるのかといふ質問であつた。その後いろ〱な作家に會つて質して見たが、結局滿足な答は得られず、自分で考へるより他仕方ないことを知つた。そして自分だけの考へをまとめて見た、何れ折りを見て披瀝したいと思つてゐる。

＊　＊　＊

ショーは今日素晴らしい世界の人氣を脊負つて立つてゐる。英國では何れかといへばひどく氣嫌ひされてゐたショーが最近數年間に大變評判がよくなつて來た。年をとつておとなしくなり、惡口をいはなくなり、思想が穩健になつて來た爲めであらうか。新進評論家コリスは、さうではない、彼が變つたのでなく、民衆が變つたのである、彼が民衆の方へ下つて行つたのではなく、民衆が彼の方へ上つて行つた

のである、彼の風貌の變つたことは事實であるが、その變化を見誤まつてはいけない、彼の髭が昔つて赤く熱してゐたのは怒氣の然らしめたところ、今日白く熱してゐるのは激怒のせいだといつてゐる。刺を包む綿が多くなり厚くなつて來たことは事實だが、刺に變りはない、一層鋭くなつて來たといふことをコリスは認めてゐる。

彼の事業を總勘定するのは稍々早計に失するうらみがある。けれどもいくらより大きな怒りに燃えても、彼の髭が黑くなることもなければ黄色くなることもない、たゞそれは綠に變ずるだけだ。いくらふんばつて見ても彼の今日までの評價に狂ひを來すほどの重みを今後加へる譯には行くまい。そこでその評價をここで吟味して見ると、彼の劇の指導者であり長い間の知己であるウイリアム・アーチヤ氏が一九二四年のイギリスのブックマン・クリスマス號で述べてゐるところが私には一番共鳴する。彼はいふ。

『ショーほどに變幻自在な性格、又解釋しにくい若しくは分類しにくい天才は、これまで世界の舞臺に現はれたことがない。無理にも一番近い類型を求めるなら過去の作家のなかでボルテールがある。ボルテールはジー・ビー・エスと同じく頓智の人であり、劇作家であり、又無盡藏のパンフレットの筆者であつた。……けれども二人の根本的差異は氣質のそれであつた。ヴオルテールの心は平面、歪みのない鏡であつた。ショーのは凹面、凸面、波形、切子形の——何といつても好いが、斷じて平面で有りのまゝを寫すとはいへない。ボルテールはショーだけの天才又は雄辯しか持つてゐなかつたが、而かも世界を革命した。ショーは天晴れ自稱革命家でありながら何物をも革命せぬであらう。』

私はショーの書くもの話すことを榴霰彈にたとへて見た。天に向つて雨霰と放たれる榴霰彈に。甚だ危險のやうでゐて、何處へもあたらない。時々雨に交つて人の頭の上へ落ちて來る。だが引力で落ちて來るのだから元より危害は加へない。本來危險なものが危險な力を失ふ時、それはユーモアとなり諧謔となり、好奇心をそゝり、時には快樂をさへ導ひて、子供の弄具となる。だからショーの七十年誕生祝賀所感のラヂオ放送を英國政府が禁じたなどは甚だ笑止の沙汰である。アメリカの某新聞で、ラヂオ放送を許せば何をいつたつて空中に消えて了ふものを、さしとめた爲めに却つて新聞に發表され後々まで殘るではないかとは皮肉られたのも無理はない。

昨年ノベル賞を送る旨の傳達があつた時、ショーはノベル賞狀はもらつて置くが、賞金は戴くに及ばない、暮しに困まつてゐない、金のある人にノベル賞金を送ることは、丁度溺れかけてた人が岸に上つてしまつてから浮帶を投げてやるやうなものだといふ意味のことを書き送つたといふ。

ショーの思想やその著作は今やこの浮帶に似たあるものを聯想させないとは斷言出來ない。思想的に溺れかけてゐた民衆は、兎に角ある岸へ這ひ上つて、呼吸だけはしてゐる。彼等にもう浮帶の必要はない。必要なのは新鮮な空氣である、營養である。奇蹟ではなくて科學である。ショーに、今後のショーに果してこの空氣を營養を、奇蹟ではない科學を生み出す力があるだらうか。男らしく、勇ましかつたのは、矢張り荷車の上に乘つてラッパを吹かせてハイド・パークへ突進して大道演說をしたあの壯年期の姿である。

八月六日

横瀬夜雨論

河井酔茗

一

明治、大正、昭和の三代に渉り、横瀬夜雨氏の存在は詩人としての奇蹟であるばかりでなく、人間生活の記録としても確かに奇蹟に價する。

今や明治大正年代の文化總決算の期に當り、詩人夜雨を逸することはできない。彼の詩、彼の生活、而して彼のからだ、一として驚くべき實在を示さないものはない。いつの世にも夜雨のやうな人間はざらに現はれるものではなく、稀に有ると同時に、百年も二百年も後までさうした人物に興味をもつて傳はるものだが、幸に夜雨なほ健在、後日を待つまでもなく此處にありのまゝの夜雨を傳へてみたい。

夜雨は明治十一年寅の歳元旦の生れで、それで名を虎壽といふが、ちやうど今年で五十になる。あのからだで五十まで生きられたのが不思議である。そのからだのことは何人も知りたくて加之はつきりと知つてはゐない。一言にして云へば夜雨は歩けない人である、立てない人である。坐居と膝行で生きてきた人である。

からだのことを餘り立入つて云ふのは夜雨に對して失禮かも知れぬが、友人の間柄で許してもらうことゝして今少し詳しく述べてみると、夜雨のは所謂イギリス病で、最初醫師の手にかゝつたのは三四歳の極く幼い時であつた。母に連れられて東京の某病院に入り治療を受けた。

ゴムの尺で胸を括られた。瓶の臭い油をぺつとりと背へ塗られた。板でぐる／＼と胴を巻かれて、疊の上にころがして置かれることもあつた。

長い脚で蒲團の上へ乘つたり、歯を光らしては背を嚙む鬼がゐて、夜不圖すると來る、痛い、痛い、退しやらしてくれ／＼と泣いて、眠つてゐる母に縋り／＼した。

骨髄にまで徹れる疼痛は、幼い子供に白い鬼の幻影を見せたのである。併し脚は立つやうになつた。白い鬼は來なくなつた。をり／＼の痛みはあるにしても村(大寶)の小學校に通ふこともできた。

二度めの病患がきた。明治二十七年再び足は起たなくなつた。それまでにも手を盡して治療の方法を講じたが、今日でこそレントゲンだの物理療法だの進んだ療法もできたが、未だその頃は醫術も進まなかつたし、草深い田舎では充分な手當も出來なかつた。

小學校は卒業したのだから、上の學校にも行きたかつたのだが、行歩不自由なからだを人に見られ、辱かしめられるのが、何より辛かつたので學校は思ひ止まり、專ら獨で讀書した。その時である、呪はれたからだを有ちながらでも、一道の光明を詩に求め、詩に生きることに心を決めたのは。

彼が横瀬夜雨（大寶沼に因む）の名で「文庫」に詩を發表し始めたのは二十七八年頃からで、八年の秋「文庫」一卷四號に「ありやなしや神も佛も」といふ題で掲載された詩が、詩人としての銳敏性を現はした最初であつた。偶然にもその二册まへ、即ち第二號から私は「文庫」の記者となつて詩を見るやうになつてゐたので、夜雨の詩には深く動かされ、同じ記者の瀧澤秋曉と共に此人は大事にしなければならないと語り合つた。間もなく横瀬氏と手紙のとりやりをするやうになり、その友情が今日にまで及んでゐるのである。

さて「神も佛も」の詩は夜雨の何の詩集にも加はつてゐないのだけれど、夜雨の經歴の上では重大な意味がある。詩の手法は稚いかも知れぬが、彼が少年の心にどんなに深く自分のからだを悲んだか、そのことが如實にうたはれてある。

我いまこゝに十あまり
八つの年とはなりながら
床を離れて口そゝぐ
うがひの水も運ばせつ
ゆあみするにも人の脊に
負はるゝことの口惜しさよ

といふ一節もある。「外の見る目も恥かしき、脚をとことぞ人は呼ぶ」ともある。「右と左の眼さへ、おぼろにこそはなりにけれ」ともある。「獨りかはやに通ふたび、もろきは落る涙かな」ともある。「みだれやきてふ此太刀は、家の寶と傳へ聞く、いでや血汐にそめてんと、手にとりたるも幾度か」ともある。

此詩を引用したのはからだのことを述べる序ではあるが、夜雨の詩人的素質は此一篇に於ても窺ひ知られる。後に詩人として立つやうになつても彼の詩は彼の生活から離れなかつた。夜雨は自然の詩人ではない、人間をうたふ詩人である。人間の苦惱をうたつて、恨み、憤り、怒り、悶つた。あきらめたり、さとつたり、すましこんだりしなかつた。何處までも苦惱に滲透していつた。彼の詩魂は既に幼い時から、そのからだの惱みと共に惱んできた。「神も佛も」はその出發點として意義がある。

足がわるいと云つても初めから全然起てないのではなく、左右の手を引かれて一町や二町は歩けたのだが、それがだんだんいけなくなつて明治三十八九年頃からは殆んど起つことが出來ず、坐つたまゝで居るやうになつた。「神も佛も」のやうに發表はしなかつたが本心から死を決したときもあつた。醫藥に就くことは斷じて肯んじなかつた。何年かの正月の日記に、

千代もと我は祈れども
母は子ゆゑに死なんといふ
世にひとりなる母を除きて
わが有つものはあらじと思ふに

悪い方から雨でまた裏足が冷たくなり、縮めても腹へおつけてもはりづき〱痛い。ゆふべから右枕のまゝ動かぬから胸も切ない。と歎きだして、

年三十にして母に介抱さるゝつたなさも今は恨むまい。一度は湯殿の石だたみへ仰向に轉んで、頭を血だらけにし、一度は胸を打ち、近く三度目で腰をぶつつけてから母の注意は造次にもわが身邊を離れずなつた。帶をしめてやると言ふから大人しく締て貰ふ、夜は壁を隔てゝ寢るが時々見にも來る。最後の慈愛、あまんじて最後の慈愛に浴していためる心を癒さう。

天地こゝに新なり、母よ、兒は生くべし。

と自ら力づけてゐる。而して明治四十年に詩集「二十八宿」を出版するに當り、その書の扉に「三たび足たゝずなりぬる年の思ひ出に新しき詩と古き詩とをあつめて母ぎみへまゐらす、かぞいろはあはれどみずやひるの子は三歳になりぬ足たゝずして」と題してゐる。併し何んなに慈愛深い母が居ても、母には戀がない。「母よりも君をば愛しと思ひつる戀の猛者なればいのち生きけれ」と強いことを云つてゐながら、事實は續々と裏切られてゆく。少年時代にはからだだけの惱みであつたのが、大人になると心の惱みが加はつてきた。何うして堪へられるものではない。

二

夜雨の詩の大半は戀愛の詩である。それも一々對象のある戀の詩が多いのだが、今日からみればその對象は何うでもいゝので、藝術としての光彩と香氣が失はれさへしなければその詩は尊い。夜雨は現實に戀愛の苦しみを經て來た人だけれど、それは逸話として存在するだけで、藝術する處は戀を戀したことに過ぎない。けれどもわれ〱は夜雨の詩を語ると共に逸話にも興味がある。

「文庫」時代の夜雨は、私は勿論所謂文庫の同人と云はれた伊良子清白、小島烏水、千葉龜雄、瀧江秋曉、鮫島大浪などの諸氏とも交が深かつたから、それらの友人の情で慰められてゐた。それが次の「女子文壇」時代になると友人がすつかり女に代つてしまつた。それが抑も夜雨に戀愛の煩悶を起さしめる一大動機となつた。

「女子文壇」といふ雜誌は明治三十七年の創刊で私が主筆をしてゐた關係上、夜雨には選評も依囑し、寄稿も頼んだ。「女子文壇」が十年間續いてゐた間に三宅やす子、山田邦子、生田花世、若杉とり子、鷹野つぎ等、その他幾多の作家や歌人を養成して來た。それら謳はれたる人達は兎に角、隠れたる女達と夜雨との間に逸話が多かつたのである。

元來夜雨は自信の強い男である。普通の人間なら何も手足の不自由な身で女沙汰にも及ぶまいと引込んでゐたらうが、彼にはからだは何うあらうと、ほんとうの愛さへあれば生涯を共にする女はあるべき筈だといふ自信があつた。煩悶には相違ないが叱りつけることはできない。幻滅は分つてゐても夜雨の戀愛には同情せざるを得なかつた。

二十五年一室に籠つてゐる半身不隨の友人から送つて來た手紙を、夜雨はその文中に抜いてゐる。曰く、

「なぜ僕は白痴に生れなかつたらう、なぜ僕は狂人になれぬのだらう。神を信ぜよと說く者がある、如來の慈悲に縋れといふ人もあ

る、勝手にしやがれ、身ぬは丈夫なからだと好きな女を持つてゐるくせに、不具者には住まふべき世界なしと云ふ。わが心を慰めわが涙を鎮むるはたゞ君のみ。僕は切に妻をおもふ、私がこゝに居ますと言ふてくれる女があつたらと思ふ」

此の近代人的一面は確に夜雨の性格にもあるだらうと思ふが、全然それぱかりならば執るべき手段もあつたらうし、解決もつきやすかつたらうが、夜雨は日本の文學に養はれてきた傳統的の純なる情操を固守し、彼の自信も、彼の自重も、要するに其處に基調があるのだから、耽美はあつても耽溺はない。大いなる矛盾の上に立ちながら、じつとがまんしてきた處に夜雨の人格を認めるのである。彼の詩はよくそれを現はしてゐる。

一夜小島烏水の家に宿つて作つたといふ詩に「やれだいこ」がある。

花なる人の
　戀しとて
月に泣いたは
　夢なるもの
たて縦びし
　ころもでに
涙の痕の
　しるくとも
うきよに遠
　われなれば
君もさのみは
　とがめじ

花なる人の
　戀しとて
月に泣いたは
　夢なるもの
辛けれど、紅葉
綾なす芦穂山の
ふもとに、今は
歸らうよ

やぶれ太鼓は
　叩けど鳴らぬ
落るなみだを
　知るや君

諸君試みに此の詩を誦出して讀んでみたまへ。別に曲も譜もないけれど、人間の脈を鼓打たすやうな情感が自らなるリズムとなつて生き生きと傳はつて來るであらう。「破れ太鼓」は「お才」と共に古くから人に知られてゐる作だが、「お才」は所謂民謡調であり、「破れ太鼓」は、

それよりも香氣が高い。若し此の作を民謠に準ずるなら絶好の民謠である。今日でこそ民謠の新作を多く見られるやうになつたが、當時夜雨の「お才」「破れ大鼓」の如き僅に一二篇だけれど今日の諸家の作に比して優るとも劣つてはゐない。當時にあつてはそれだけ他の刺戟となつたことは言ふを俟たない。

三

明治年間に起つた新體詩――即ちわれ〳〵の謂ふ詩は、その形式に於て劃期的所產である。だから明治以前の詩歌とは切り離して全然新興の藝術として觀る考へ方もある。更に視野を延長して眼を上下二千載の文學の上に注ぎ、古典と共に詩を考察することもあり得るだらう。

夜雨の詩の如きは切り離して考へずに、既に古典の一つとして考へてみてもよい。例へば江戸時代の歌謠と比べてみる。或は平安朝の和歌と比べてみる、遡つて萬葉歌人の作と比べてみる。何の時代の詩歌に比べてみても夜雨の詩には遜色がない。もしそれを誇張だといふ人があるなら恐らくは古色に溺れた人の錯覺であらう。單に夜雨の詩のみならず、明治時代に起つた創作――廣義の意味でいふ藝術には古典に比肩して劣らないものがいくらもある。夜雨の詩とても悉くが然うといふわけではないが、ある數篇の詩は凡ての古典と共に殘るものであらう。その理由は簡單だ、彼の詩にはいのちがある。

夜雨の詩は形式の上で七五調を守つた。用語は在來の國語を選擇した。彼の意力は人間本來の情感の上にのみ動いた。而かも日本傳統の國民性の上にのみ立つて、西洋詩人の借り物などは些とない。在るものは鄕土の色相ぐらゐなものである。それらの意味から彼の詩は一層古典と共に相並べて鑑賞される所以である。

藤村、有明、泣菫等の諸家は明治詩壇の巨匠とされてゐる。如何にも巨匠には相違ない、夜雨にはそれらの諸家ほど作の粒が揃つてゐない、けれども例え一篇の詩でも永く人を動かすものがあれば詩人としての價値は認めなければならない。有明は象徵詩の立場に立ち、泣菫は純古典派に傾き、すなほなる抒情詩人として夜雨は最も藤村に似て、藤村よりも理知の働きが少ない。

「雪燈籠」「野に山ありき」「人は去れり」「吾脣は燥けり」「人故妻を逐はれて」「やれだいこ」「富士を仰ぐ」「お才」など、みな夜雨集中の傑作であるが、何れも人間の愛着、人間の苦惱からうたはれてあつて、筑波の山、常陸の野はその背景となつて生きてゐる。

多くの詩を引用するとは紙面がゆるさないけれど、「人は去れり」に

人は去れり
天の遠きに手を擧げて
來よと招くを目にすれど
露多き野の草原に
雲の薄きがゆくばかり

は實にさびしい氣持だ。人は無論美しい人であらう。

我には人は電の
光の中に來ぬるのみ
我には人は電の

光の中に去しのみ
手は白かりき森の沼
若葉の淵に櫂とりて
水を弾きしたまゆらの
人は我より離れけり

菱の實喰ふ大雁の
岸に鳴く夜は萍の
白める花もくすむらむ
仄に煙る霧ふりて

毛は黒かりき有明の
灯を耻づる對坐に
慎ましかりしものごしの
夢のやうにも見えながら

色亂りなる花苑の
星は新に瞬かむ
俤人の去りしより
我世は暗くなり初めぬ

草長うして瑠璃色の

山は常陸に秀づれど
野の花に見る紫の
月波に君も隠れゆくか

沼を渉る時にも彼の凝視するのはその白い手であつた。夢にさへ殘るはその黒髪の色であつた。その人は去つてしまつた。

今は痛める夢殿の
俤人となりぬるに
秋立つ風よ、ふたたびは
戸を打つ勿れ、草に吹くとも

人去つてたゞ草に吹く風、何うしようもない寂しさである。

「人は去れり」といふ言葉もたゞそのまゝ聞いてゐれば何でもないが、夜雨の場合には「人は來れり」が、必ずいつも〳〵「人は去れり」になるのであつた。

「吾が唇は燥けり」も寂しさに思ひ迫つた詩だ。

筑波の山の猿飛岩も
踏みたどらかす足は痿えたれ
來よといはゞゐざりてだに
行きて君に縋らんもの

吾がくちびるは燥けり
燥いて焦れんとすれど
露を刺に貫ける薔薇の花の
白きは人なる君に似たり

扉に凭れども咎めず
手に觸るれども許せし
人は居らぬ古里の
櫻の大木は芽をふきぬ

焦燥、憧憬、追及、彼の求むるものは何處までも人間であつた、人間の愛であつた。

これら夜雨の詩の一部を見ても氣の附くことだが、夜雨の詩には肩、手、胸、乳、顏、唇、眼、頰、髮、腕、足等々の感覺が非常によく働いてゐる。なほ一二擧げてみると

受ければ溜る淡雪の
輕きを打ちて丸め作す
雪燈籠は脆くとも
灯入れて君の眉を見む
　　——雪燈籠——

あゝ君が胸ならで天地に
魂はこもらさじ、まろき乳は
他の指には觸れむやと
出羽の人の契れども
　　——七夜の夢——

母が乳房の珠ならで
許されざりし唇は
岩が根纏ふ山百合の
白き花にも觸れずして
　　——森の館に——

大抵の詩には此のからだの感覺が出てくる、殊に觸覺が多い。これは豫め用意してさうなつたのではなからうけれど、からだといふことが絶えず氣になつてゐる人だから、戀をうたへばそこまでゆかないと人間の實感が現はれてこない。詩形は典型的であつても、感覺に觸れてゆくところは近代藝術の表現に近い。古い新しいは別として。

人間を對象としてゐるから感覺が濃かだ、それが夜雨の詩の個性をはつきりと示唆してゐるが、今一つ彼の詩でなければ見られない印象は「野」である。人間とは異ふ、自然だけれど夜雨の「野」の印象は他の多くの詩人には到底これほど際立つては表はれてゐない。山といへば筑波、沼といへば大寶（古萬葉歌人の歌にもある騰波淡海）、川といへば利根に小貝川、森、林、而して野である。

垂尾地に摺る山鳥の
出で入るあたり草枯れて
なづさふ野火の煙のみ
動くと見えて日は寂寞に
　　——野の灯——

筑波も暮れぬ野も暮れぬ
唄も暮れぬる藻刈船
撓へる棹を操りて
行くべき方も暮れにけり
光寂しき森のかげ
　　——沼にて——

露は臉に落れども
睡りてさめぬ野の花の
夢にや月を迎ふらむ

――湖の畔にて――

千草にわたる金風の
露ふきこぼす朝ぼらけ
花の死生を眺むれば
長しとも思ふ命かな

――長夜――

海拔僅に千米突の筑波山があんたに高く秀れて見えるのは、あの邊の野が平らかでひろ〲としてゐるからであらう。武藏野や相模野のやうに地に高低がない、全く名の通り常陸平である。夜雨の村の邊へ行くと、戀人があつてもなくても寂しい氣がする。

四

「人は去れり」の人には何ういふ人があつたらうか、夜雨が最後に期待をもつて「最終となりし、希望をば、一人に繋けて、待つからに、わが寂しさは、亡びゆく、星だに物の、數ならず」とまで歌つた女、秋田に生れて京に育つた窈窕たる美人も、今は世に生きてはゐない。

一時「女子文壇」を通して夜雨の周圍にはかず〱の女があつた。夜雨の家まで尋ねて行つた女も十人や二十人ではきかないだらう。今は夜雨自身も一々覺えてはゐなからう、それが皆夜雨と戀愛關係があつたといふわけではないが、對象にはなつてゐる。何しろ優しい詩人に生れて、身體が不自由だといふのだから女達は動かされる。慰めてあげたい、同情してあげたいといふ氣持が、夜雨に取つては大いなる誘惑である。でも女達にしても夜雨と生涯を共にするといふことになると勇氣を要する。一時の虚榮から飛込んで行つた女などは論外だが、赤心から夜雨を崇拜するつもりで、をり〱尋ねて行く女でも結局は他の所有となるので、夜雨にはいつも〱人は去れりである。

そればかりでなく夜雨の方から云つても、生涯の伴侶とするには詩や歌が好きだといふだけでは一寸考へさせられる。苦しかつたらうが夜雨も自重した。のみならず賢明なる夜雨のお母さんは、夜雨の心情も見拔き、女の氣持も汲んでやつて之れ亦苦しい後援をした。きれいなお孃さんが俥で乘込んでくる、また來たな、こんな女に何うして半日だつて夜雨の面倒がみられるものかと思つたかも知れないが、叮重にもてなして、つまりは體裁よく「さようなら、御機嫌よろしく」と返してしまふのであつた。來た女も初めて逢つた夜雨の長者のやうな風采や、百年の風や雨に曝された櫟板の廣い縁側や、隆然として並び立つ男體女體の筑波の峰などを瞳の奥に印して、さてこんな寂しい村で一生を終ることは辛抱ができさうもないやうな氣がして歸つて行つたものであらう。

そのいさこさの間にからだのことを云はれるのが夜雨の致命傷であつた。實際友人の間にでも妻君を迎へるにしてもあのからだでは長命は無理だし女もかはいさうだと云つてゐた。「君の病は治すべからず、人を迎へて泣かしめんよりは、さびしくともひとり常陸の草にかくれよ」と直言する友もあつた。

併し數ある女の中から更に熱情を夜雨に捧げ、全身全靈を打込ん

で惜まないと云つた女が一人はあつた。頓てその女さへいざといふ場合になると夜雨に背いてしまつた。

　夜雨は憤つた、すねた、極度の恐怖に陥つた。あらゆる女を疑ひ、あらゆる女を呪ふやうになつた。反感と皮肉と追及の辛辣さには面を向けることもできない程であつた。彼の散文集「夜雨集」一冊を讀めば彼の女性觀の何んなに峻烈であつたかゞ分るであらう。「女といふ女は誓約の尊いことを知らない、昨日祭壇に供へたいけにへを下げて今また新しい神に捧げて平氣でゐる。一度人に賣つた貞操を斷りなしに又賣して代價を受取つてゐる」と罵り、「彼女等潔く終れとわれにいふを忘れしも無し蠟がぬもなし」と嘆き、「迷はんかな、天地の靈に合するものたゞ煩惱の力にあり、忘れむとする悲しみはいよ〳〵あたらしく、脱れむとすれど悲しみは毎に我に纏れり、枯木寒岩、法師となりて山に入るも忘れずば何の甲斐かある」と無解決に徹し、「詩人としての夜雨の名は廢人に過ぎた何かも知れず、されど僕は終に慰められなかつた」とこじれ、「破滅の末を悲しまば、何しに死をば契りたる、君が足蹠は血に染むとも、常陸は踏まぬ土なりや、夢は遥けし朝寢髮、今更落る涙あらば、一つよりなき魂を二人に賣りし悔を知れ」と責めた。

　過去一年間に於てはAは結婚し、Bは姙娠し、Cは母と爲れり。Xの笑を賣り、Yの媚をひさぎ、Zの節を售れるが如き其の一なり。おもへば揚ぐべきもの獨武漢の赤旗のみならず、彼等亦以て長江の上流を扼するに足る。

　彼等はなほ動かん、晝は晝を迎へんが爲に、夜は夜を送らんが爲に。

　病者は動く能はず、其身つねに苦しめど、其心はしづかなり。其肉不斷の熱に焦がるれど、其靈や火の如き光あるも有り。すでに住むべき天地無きを知る。故に一意死をのみおもふ。

ほんとうに死にはしないかと思はれたので、私も長い手紙の中に「君なほ死すべからず」と書いてやつたこともある。

　夜雨がさうしてゞもなほ生きてゐたのは母があつたからである。彼が母を思ふ心は詩に文によく現はれてゐるが、それよりも深く母は子を思つたであらう。夜雨には一人の兄君と一人の妹君と四人の弟さんがあつたが、皆村を去つてそれ〴〵の地に家を爲した。故郷の村に殘つたのは彼一人、一人の夜雨を護る爲にお母さんは何んなに苦勞したか知れない。父はたゞ溫厚篤實な郷黨であつたが、お母さんは賢かつた。愛にも知惠があつた。だから夜雨にもあやまちなからしめた。夜雨も「生れて三十三年、一日として明るい生活を送つたこともなかつたし、母の爲に生くるが生の全部か、人を呪ひ、人を詛ふかせめての復讐か、それすら知らぬ。孑身孤立、無期にわたるわが涙をかなしむ」と涙の底からも母の顔を見てゐる。「わが晝を守る者母有り、わが夢を護る者も亦母なり、むかしは其乳に縋りし如く、今もその手に枕するのみ。天人の嘗むる醍醐味は知らず、匙にてすゝむる少量の食物と、乾けば脣をぬらすいさゝかの水と、母によりて猶存らふる病者の命よ」と身を母に任せてゐる。そのお母さんがなかつたら夜雨の今日あつたか否かさへ疑はしいのである。

　慈母のふところに歸つた夜雨は、もう一切詩も作らなくなつた。明

の友達にも女の人達にも手紙のとりやりを止めてしまつた。斯くて時は大正に移つた。歌集「死の歓喜」一冊を世に投げ出したまゝ夜雨は全く沈黙の人となつてしまつた。

五

大正七年三月夜雨は結婚した。新夫人の年は二十歳、同縣人で素封家の女、媒酌は假名いばらきの社長飯村氏、式は晴々しく擧げられた。村人達は驚いた、驚きながらも祝福した。

友人等も聞くには聞いたが、さて祝意を表する段になると夜雨の結婚には聊か疑惑が伴つた。皆動く遠ざかつてゐたから前後の事情がはつきりしないので、もし夜雨が反抗的に世間並の結婚を肯じて、型の通りの花嫁さんを貰つたとしたなら甚だつまらない。何となく夜雨の純潔がけがされたやうな氣がして、それなら前々からの宣言通り獨身をとほした方が潔くもあり詩人らしくもある。普通の女を娶り、普通の式を擧げ、親族隣人に披露するだけのことなら別に誇りとするには足らないだらう、と云つたやうな反感も起つて來る。一つは前に世を憤り女を罵つた反動で、如何にも矛盾した行動のやうに思はれ、輕々しくは喜ぶ氣にもなれなかつた。

對手の婦人が何のくらゐまで夜雨を理解してゐるかといふことで、その疑惑も解かれるのだが、まさか家や名にあこがれてきたのではなからう。そこには何か確かな信條がなければならない。熱烈な戀があつたとでも云ふなら格別、たゞ勧められるまゝに來たといふやうな次第なら、夜雨の結婚には危惧の念をさへ抱かざるを得ない。

さうしてゐる間に一年二年と月日はたつていつた。夜雨の身邊には何事も起らなかつた。新夫人は時々ものを書いて發表するやうになつた。

一昨年の秋、あまり無沙汰してゐるので私は夜雨をたづねることにした。新婦人にも逢はうと思つた。

常陸へ出かけるのは十年ぶりであつた。夜雨がよく詩に歌つた騰波淡海はすつかり埋められて田になつてゐる。その中を汽車が走つて堤の端には大寶といふ停車場ができた。

昔の通り山容秀麗なる筑波に迎へられて村に入つた、村の寂しさもかはらなかつた。

夜雨は非常に喜んでくれた。

夜雨は一生を生れた家で暮す人である。家より外へは出られない身である。だから家とか室とかいふものをよくしたいのは當然で、彼は嘗て「蠶の自ら繭をつくるが如く、自分は自分の隠れ家をつくるのだ。終生籠るべき室に新しい障子をはめたとて何だらう――自分は與へられた二つの室の凡ての調度を新しうしつらへて來るべき或るものを待つのである」と威張つたことがある。見るとその通り、錦を敷き、玉をちりばめてこそないが、きれいに片づいてゐる。片づいてゐるばかりでなくお母さんがゐた時より家庭の内に一味のあたゝかみが籠つてゐる。(父は大正十年に歿し母は同十二年になくなつた)

書物がきれいに整理されてあるのも嬉しかつた。夜雨は書物を愛藏する方だからかうしてあると不自由な身にも探しよからう。どの一冊を抜いても塵埃はかゝつてゐなかつた。

お母さんの居た時と同じやうな御馳走を同じ態度に盛つてもてなされた。

夜、灯火の下に夜雨と自分との昔語りを聞きながら、をり〳〵話し相手にもなる夫人の様子は年齢よりもおちついて、才氣もあり意氣もあるが都會式の上調子は少しもなかつた。夜雨に話しかけるものごしがお母さんそつくりで、私は若いお母さんが傍に居るやうな氣がした。

あゝわが夜雨は生きた。果然彼は愛の勝利者であつた。否、生の勝利者であつた。

私が二人の女の子を喪つた間に、夜雨は二人の女の子を儲けてゐる。姉はいと子、妹はゆり子、二人とも健康、姉さんは一年から級長をつゞけ、妹さんも怜悧さうな子だ。

結婚當初、われ〳〵の抱いた疑惑の雲は十年の時日がきれいに一掃してくれた。人間は生きるべきものだ。

そこで改めて夜雨を祝福した。

結婚すれば命がなからうと云はれた夜雨は、結婚して却て元氣になつた。今度も私が書庫をひつくり返して古新聞を探したのが機縁となり「明治初年の世相」原稿紙で約千五百枚からのものを書き上げた。この後とても詩も作るであらう、文章も書くであらう。

生きることの根強さは俳人一茶に似てゐる。一茶は五十二歳の時初めて妻を貰つた。一茶も亦家に執着した。夜雨は餘儀なくであつたが、一茶は十四の時から江戸に出て流浪三十年、やつぱり郷土に歸つてきた。而かも鬼のやうな繼母と喧嘩しながらも遂に家は捨て得なかつた。夜雨の家には廿何代かある。元禄以前からの家系が傳はつてゐるが、享保から維新の時まで質屋を営んでゐた。苗字帯刀御免の名主をつとめてゐた。夜雨のお祖父さんといふ人が當年の文化人であつたらしく、古い記録をみると分る。夜雨にはさういふ家の傳統の血もあるだらう、だから家を愛し家を重んずるのも當然だが、一茶の場合は幼少の時に虐げられた反感と執着が主である。夜雨は先天的に呪はれてゐたが、一茶は後天的に虐げられてゐた。而かもとう〳〵我意を通して家を立てたところはよく似てゐる。それればかりでなく藝術の上に於ても類似がある。夜雨の詩が人間をうたつてゐるやうに、一茶の俳句も人間の實生活に即してゐる。而して兩者とも郷土藝術の色調が濃い。

一茶はさま〴〵の惱みを經た後、「兎も角もあなたまかせ」の如來に安住を求めた。夜雨は「不斷の底歸に在り」と云ひながら悟らず覺めず、人を求めて遂に現實に救はれた。

夜雨もし詩人なるがゆゑに詩のかげに隱れて人間性をごまかすものであつたら、却て生の淨化は得られなかつたであらう。彼はあくまでも現實に生きんことを欲して、少しも自分を欺かなかつた――人間りある限り滅びない純眞なる情感のあらはれ――それが夜雨のいのちである。

婦人同盟の創立について

田島ひで

（一）

今日の資本主義社會組織の下に於て、婦人問題は、最早、單に個々の對男子への問題ではなく、婦人自身が現存せる此の社會組織の不合理、矛盾を認識し問題とする所謂、社會問題の一分野に過ぎないのである。

從つて婦人問題の解決は、社會問題の解決の中に見出し得るのであり――即ち有產者圍對無產者圍の階級對立の揚棄の曉に於てのみ見出し得るのである。

婦人問題の、女權運動よりのかゝる必然的轉化は、婦人運動の主體、先頭隊が、勞働婦人、農村婦人――無產婦人であるは謂ふまでもなく、婦人運動も、無產者解放運動の一翼として、一分野としての認識、連關のもとに展開することによつてのみ、その眞の役割と任務とを果し得るのである。

（二）

我が無產階級運動は、今やその歷史的使命遂行のために、獲得せる戰鬪的マルクス主義を樞軸として、人民層のあらゆる場面に、現實に大衆的行動を組織し指導し展開すべき仕事の第一步についた。

而して我が無產階級が、歷史的現段階に於て有つ鬪爭目標――我がブルヂョアジーが專制的勢力との抱合によつて內抱しつゝある矛盾、特殊性に對する鬪爭――對專制勢力への鬪爭に於て、全被壓迫民衆を自己の同盟者たらしめるために、無產階級自ら指導勢力、先頭隊とする全被壓迫民衆との政治同盟を結ぶことを『――自己とその社會的存在を異にするところの』あらゆる階級の不平、要求を統一するためにの協同戰線を必要とした。

勞働農民黨は、實にかゝる無產階級がヘゲモニーの下に、反絶對主義的鬪爭的のために――ブルヂョア民主々義獲得のために――必要缺くべからざる條件として全被壓迫民衆との間に過渡的に結んだ所の共同戰線黨である。

（三）

婦人同盟は、我が無產階級運動のかゝる現段階に於て、ブルヂョアジーが婦人の上に特に強く加へたる壓迫に對し――社會的、經濟的、政治的――專制に對し、戰ふために無產婦人自ら先頭隊として、被壓迫婦人大衆を自己の同盟者たらしめあらゆる婦人層の不平、要求を統一すべく結ばれた、婦人の大衆的、戰鬪的共同戰線體である。

婦人同盟の當面の鬪爭目標は、婦人を除外する對專制政治でなければならぬ、が、あくまで婦人同盟の爭鬪は、無產階級の全般的爭鬪の一分野としての聯關のもとに戰はれねばなら　事は謂ふまでもない。

從つて、今やゝ新しく生れたる婦人同盟は自然發生的に生れたフエミニズム、組合主義時代の婦人運動とは本質的に異つた劃時代的な組織である。從來の婦人鬪爭が、朝に生れ夕に消え失せて、未解決のまゝに殘された婦人問題も、此の無產婦人を先頭隊とし、指導勢力とした婦人同盟の、今後の團[illegible]、統一的果敢なる鬪爭にゆだねられてのみ、初めて眞の解決への第一步につき得るであらう。

鶚軒游戲を讀みて

醫學博士　太田正雄

「どの頁も最も充實したる內容を盛つた浩瀚の書籍、それは一見專ら科學を語り、技術を傳ふるものである。然し卒讀直ちに意を解するといふわけには行かぬ。苦辛して之を精讀すると、此書の實に學藝の書に非ずして實はHumanismusそのものを敎ふるものであるといふことを悟るに至る。わたくしはわが土肥先生の一代の事業をかかる叡智の書に譬ふるの必しも比倫を失するものではなからうと信ずるのである。」

是は本年六月九日恩師土肥先生が大學退官の後滿一年の日にあたり、兼ねて我々門下生一同より獻じたる先生壽像の開幕式があつたその夜、門下の組織する戊戌會の多數が先生及び御家族を招待して盛宴を張つた時、わたくしも亦同門の末班を汚す者として、先生に對して述べたる謝恩辭の一節である。指名によりてふと立上ると咄嗟の際思想が纒らず大に恐縮したが、然しわたくしの此の卓上演說の意味は偶然考へだしたものでなく、平生腦子裏に在つたことを覺えず口走つたのであるから、その時述べた二三の思想は今も明記してゐるのである。

但し言葉が足りなくて、わたくしの陳べんと欲せし意味を先生が諒とせられたか、或は苦笑せられたかを知らないが、わたくしは私かに先生を想ふごとに、いつも、このHumanismus の大書籍を想像するのである。

同じ夜、先生は當日やつと製本の成つた著書を初めて出席者一同に配ち與へられた、卽ち「鶚軒游戲」である。宴罷んで旅舍に歸りわたくしは直ちに之を披いて一氣にその數十丁を讀んだ。それは卷末の短篇であつた。その後わたくしは仙臺に歸り「わが實家」「郷里の先哲と亡友」を讀み殊に「奧村良筑考」と「奇傑獨嘯菴」とは再三熟讀した。そしてわたくしは感じた。此書こそはわたくしの嚮きに言つた「浩瀚なるフマニスムスの書」の縮微である、縮小版であると。

先生は本草家の草木を損ずるが如く、解剖家の筋骨を解くが如く、古文書を渉獵し來つて二實在人物を傳せられた。一は德川盛期の極めて獨創的なる一醫傑で、一はその門下にして倜儻なる一奇士である。

然しながらわたくしの管見が謬らないならば、分析は唯分析の爲ではなかつた。それよりもつと價値高き實用たる合成の爲めであつた。かくして良筑、鳳介は骨幹、枝葉、花又葉の部分ではなく、筋、靭、骨、皮の死物ではなく、殆ど目前に生を有するかの如き完體として再現せられたのである。而もその際不必要なる偶然は芟除せられて、其本質のみが賦形せられた。恐らく良筑、獨嘯菴の唯朧ろげに感じ、意識閾下に思念した思想、理想が本人たちの思辨以上に明晰に求められ、言ひ現はされてゐるのだらうと思ふ。

先生の分析と合成とに由つて、時代と環境との制肘を受けざるを得なかつた良筑の醫學的努力は、實に文明史的意義を附せられたのである。又奇矯な一處士の煩悶は、一般人道上の問題となつて普遍性を與へられたのである。

醫事雜誌記者の某氏は堀進二君の作つた胸像の甚だ佳作であつて、能く先生の風貌を髣髴せしめると言つて賞讃した。わたくしも其言の當れるのを思ふものである。然しながら先生の精神的のフイジオグノミイは一生の「游戲」の裡に隱見せられる。無論自家の肖像ではない、呼吸の吹き込まれてある小塑像である。

題命の游戲の二字に就ては、先生の意の奈邊に在るかを推量することは出來ないが、わたくしは特別の意味に考へてゐる。

千九百廿二年中、佛蘭西の國會に中學に於ける希臘拉丁語問題の在つたとき、佛國十九世紀の文豪アルフォンス・ドオデエの息レオン・ドオデエの演題の間に面白い一節があるから、之を拔萃して見よう。

・ドオデエ氏「……わたくしは父と一緒に或日、シャルコウ教授を訪問したことがあります。當時ヌイイ・サン・ジャアンムの小さい家にお住いでしたが、天氣の好い夏の日でした。教授は手に小さい本を持つて居られました。何をお讀みですかと父が尋ねますと、わたしの臨牀講義に極めて必要な本ですと教授はお答になりました。所でその本は何であるかと云ふと、ホラチウスの詩集でした。それは理解せられることです。凡ゆる文學中唯一と謂つて可い能辯と智慧との合一を、教授はその裡に見出されたのです」。

之に對して當時里昂の市長であつたエリオオ氏（その希臘學は優に教授の資格があると噂せられた人で、而もその議案に對しては消極論者であつた）が、「それは精神の休息でせう」と半疊を入れた。

文部大臣がすかさず「Otium!」と叫んだ。これは拉丁語で「休息」の意味と精神上の「勞作」の意味と二様あり。曾つてエリオオ氏がその不分化を擧げて拉丁文明を批評したことがあるので今大臣が此好謔を勞したのである。

ドオデエ氏「さうです同時に休息でもあり得るのです。然しわたくしには les humanités（佛蘭に於てはこの語は主として希臘拉丁の古典的の修養の意味に用ゐらるるが如し）なしには、人間修養の目的を達することが出來ないと思ふのであります。而して現代外國語の習得だけでは l'humanisme の代償となるに足りないのであります……」。

無論、佛蘭西人の演說であるから、餘りに多くの機智がはひつてゐる。先生の游戲の意味をわたくしはシャルコウの愛讀したホラチフスの意味に考へたいと思ふものである。典據があり且つ諧謔の心持も含ませてあるこの字は、同時に古典と歷史とを基礎とする人格的修養の奧底を暗示するものである。日に日に新なる「進步」の獲得に對する努力を精進と名付けるならば、それを游戲と呼んで可いであらう。又 Otium と見做すものであるかも知れぬ。然しそれは言葉の最高の意義に於て解せらるべきである。

而してかかる人物が如何なる列宿の下に生れ、如何なる環境の間に育せられたかといふことをば「鄕里の先哲と亡友」「わが實家」が物語り、またその大成に資する精神的材料が如何の土壤及び空氣より同化せられたかといふことは、「追憶」の諸篇から窺知することが出來る。「追憶」の諸篇で呼ばれたる人々には外山正一、カポシイ、ウイルヒヨウ、田口和美、スクリバ、橋本綱常、三浦守治、ギユイヨレの諸博士がある。その感想、批評は孰れも短篇ではあるが、能く當時の學界、精神文明界の鳥瞰景を現出する。背繙累脉歷々として指顧の間に連り、而して之を觀る人との間に脈絡の存するを知るのである。

若し夫れ「過去と將來」の一篇に至ては、先生の識見と抱負とを卒直簡明に語つて後進に教訓するものである。わたくしは數夜に亘りて先生の此著を熟讀したが、此篇に至つて身に三十棒を喫したる思があつた。打棒必しも强かつたのではなかつたかも知れない、唯身に顧みて戰慄を禁ずることが出來なかつたのである。そのわたくしがかかる讀後感を敍べて公表するのは、甚だ僭濟がましいことゝ思ふ。殊に最近吳先生が最も美しい評を東京日々新聞に寄せて居られるに於て、わたくしのこの記はいよいよ必要ないものとなり、且つ多く禮を失するものであるやうに考へられる。然しわれわれ仲間のうちで話し合ふことを蔭口でなくしたいといふ欲求もある。唯年少氣鋭の時、過つて文壇に近き物を書き印刷に附することをさう面倒とも思はなくなつたわたくしの性癖が、今回も亦罪を大膽ある先生に得はしまいかと恐れるものである。

（昭和二年七月廿六日）

肺患に倒れた明治の文人

正宗白鳥

明治の文學者では肺患に罹つて倒れたものが多いが、その原因は多く生活難のためであらうと推察される。貧乏であつたゝめなのだ。私の友人に平尾不孤といふ男があつたが、彼れは、自然主義全盛時代まで生延びてゐたなら、相當に世に認められさうな素質を備へてゐた。しかし、運が惡くつて、暫くのあつた妻君には逃出されるし、友人には嫌はれるし、しまひには京都へ落ちて、不平不滿のうちに肺患に罹つて、下宿屋をも放逐されて窮死したのであつた。彼れが小杉天外氏に誘はれて小田原に轉住して、貧乏生活をしてゐた間に、妻君は愛想をつかして逃出したのだが、その時彼れは、上京して私を新聞社へ訪ねて來た。私は彼れが原稿を賣込みのために、隨行者となつて、一しよに雜誌社や劇場を訪問した。あの時は、私は世間知らずで、面白半分で彼れのお伴をしてゐたのであつたが、今日、當時の彼れの容貌や態度や、斷片的な述懷の言葉を思出すと、痛ましさが胸に迫るやうである。彼れのこの金策のための上京中に、妻君は、實家の父親の病氣に假托けて家出したので、妻君の電報は在京中の彼れの手に屆いた。その時の彼れの狼狽振りと云つたらなかつた。

しかし、一圖に妻君ばかりを非難する譯には行かないと思ふ。國木田獨歩の最初の女が、同棲後間もなく逃出したことも、獨歩が日記に於て小說に於て罵倒してゐるのに心から同感する譯に行かないと思ふ。あゝ貧乏して前途の當てもないのに、藝術家といふことだけを得意がつて辛抱せよと、女に責めるのは、少し蟲がよ過ぎる。私は不孤の當時の苦悶に同感するとゝもに、彼れの妻君の當時の心境にも同感を寄せ得られるのだ。

早稻田出身者では、綱島梁川や杉谷代水などが肺患で倒れたのだが、この二人の如きは、稀れに見る攝生家であつた。私は梁川をば、[illegible]大久保の病室に訪ねたことがあつた。衛生術を勸められるのには閉つたが、病床に臥した彼れが、顴骨の尖つた蒼い顔して、小さな目に和らかな笑ひを湛えて、健康術で悠々と人生問題を說くので、私はいつも敬意をもつて耳を傾けた。彼れも、子規のやうに、病中原稿を書いて生活や、醫藥の資に當てゝゐたのであつたが、そのために、精神修養には隨分努めてゐたらしかつた。「見神の實驗」は、生の不安死の恐れから免かれやうとする努力の果てに、彼れの心に自から湧出したものであるが、その點では、最後まで現實を直視し、病苦と闘ひ、宗教的迷妄に捉はれなかつた正岡子規の方が悲壯痛烈であつたやうに感

ぜられる。

全體、肺病は、腦病や胃病よりも、文學上の天才を發揮するに相應しい病氣であるらしい。子規の病中の句作や感想には、肺病の刺戟によつて光を放つたものがあるに違ひない。高山樗牛の文章も病後に成つたものが傑れてゐる。しかし、國木田獨歩は、生來根氣の乏しい人らしく、病後はます／＼持久性がなくなつて、斷片的の小品しか書けなかつた。肉體の烈しい苦痛に耐へられるだけ耐へた子規と耐へ得ない脆く倒れた獨歩とを比較すると興味がある。

とに角、今日隆盛を極めてゐる文壇は、これ等、病氣と貧乏とのために早世した明治の文學者によつて築上げられたのである。

問題の人サッコ、ヴァンゼッチ

荒川實藏

今や問題の人サッコ、ヴァンゼッチ兩名の處刑事件は全世界の視聽が集まつてゐる。いな彼等兩人の處刑事件が單に强きセンシェションを捲き起したのみではなく、兩死刑囚の助命示威運動は米國內はもちろんヨーロッパ、南アメリカその他世界各地に於いて行はれてゐる。全米各都に頻々として勃發した爆彈騷動は兩人に對する死刑宣告を不當とする左傾派一派の所爲だと云はれてゐるが、死刑囚の助命運動がかゝるテラーだけに止まらない。八月十一日の死刑執行日にはニューヨークに於いて各勞働組合が一せいに罷業を決行する形勢だと傳へられ、又同地に於いて兩人死刑執行反對手段として九日に半日間の總同盟罷業が行はれることゝなり、右實行委員の豫測によればこの罷業に參加する勞働者は七十五萬人に達するだらうと報ぜられてゐる。同樣に歐洲ではフランス及びスカンヂナヴィア其他にも示威運動が起りさうな形勢となり、南米アルゼンチンのヴェノス・アイレスに於いてはすでに總罷業が行はれたと報ぜられてゐる。更に勞農ロシアでは全國至る所で助命運動の會合が催され、殊にモスコー全市は今回の事件に對して憤慨の極に達してゐる。我が日本でも勞働農民黨では八日午後三時から本部で常任委員會を開き、該事件についてクーリッヂ大統領に宛嚴重なる抗議書を十日駐日大使館を通じて送つた。

だが、萬國無產大衆の熾烈なる抗議運動を無視して豫て兩人の辯護士から裁判所に申請した助命請願は八日に至つて全部棄却され、いよいよ來る八月十日夜半を以つて死刑を執行さるゝ運命となつた。

何等證據なき兩嫌疑者は殺人犯人の罪名の下に、遂に電氣椅子に上るべく運命付けられてゐる。殺人犯人と電氣死刑！　これが慘めな苦しい生活をなしながら、絕えず勞働者の理想のために獻身的に鬪へるニコラ・サッコ及びバルトロメオ・ヴァンゼッチ兩名に下された宣告だ。

死刑執行は眼前に迫つてゐる。けれども、幾[illegible]萬、幾千萬、いな幾億人の勞農[illegible]衆の視線が[illegible]怖と憤激の裡に兩名の死刑執行に注がれてゐる。世界の凡る方面から『死刑執行を取[illegible]せ』『兩名を釋放せよ』との叫びが囂々として響き渡つてゐる。此叫びは眞暗な炭坑の中から世界各國の工場及び職場から、抗議的會合の演壇から、また進歩的作家達の口から發せられてゐる。

彼等兩名が七年前に行はれた殺人事件の眞犯人たる證據の全然なきことや、兩人の審理に關して詳しくは私は今述べる暇がない。たゞこの事件の大要を概說し、更に兩名が果して如何なる人であつたかを傳へたいと思つてゐる。事件の眞相を簡單に述べるとこうだ。

サッコ・ヴァンゼッチの兩名は『赤』狩りが猛烈を極めてゐた一九二〇年五月五日に逮捕されたのである。當局は最初彼等を『怪しい赤』だと思つてゐたが、更により重大な犯人だとの嫌疑をかけるに至つた。即ち、當局は七年前の一九二〇年四月十五日マサチウセッツ州サウス・ブレインツリーでスレター・エンド・モリル靴製造會社の會計係フレデリック・パーメンターとアレクサンドル・ベラルデリーの兩名を射殺し、一萬五千ドルを強奪した犯人が彼等兩名だとの斷定を下した。そしてヴァンゼッチに對しては

一九一九年十二月二十四日に行はれたブリッヂウオーターの強盜が、彼の行爲だとの嫌疑をも受けた。だが、最初彼等が逮捕された時には、彼等の釋放運動が僅かにその地方の友人達によつて行はれてゐた。然るに暫くにしてこの地方的問題が全米的の問題となり、アメリカの勞働大衆を奮起せしめた。そして翌一九二一年五月三十一日から七十四日までの第一回公判が開かれて以來、幾度も死刑宣言が繰返へされてきたのである。では、世界平和の使徒を以つて自任せる米國政府とそのブルジョア階級の慘虐なる白色恐怖の犧牲とならんとする彼等兩名は果して如何なる人であるか？

サツコは一介の靴職工に過ぎず、ヴァンゼッチは不熟練勞働者であり、魚屋に過ぎない。從つて彼等の名は彼等が運動してゐた極く僅かのイタリア勞働者の間にしか知られて居なかつた。特にアメリカ人は彼等の存在さへ知らなかつた。然るに、何故に米國の當局は彼等を知つてゐたか。それは外ではない。彼等兩人は卒先してヨーロッパ大戰中及び直後に苛酷にも壓迫され、投獄され、追放された同志を援助したからである。また多くのイタリア勞働者の働いてゐるニユー・イングランドに於けるあらゆる罷業に於いて彼等は偵察委員としてまた宣傳家として活躍した。その地方の支配階級が彼等を憎惡したのは理由がないではない。

サツコ・ヴァンゼッチの事件を研究したネーションの同人アーサー・ウオーナーは、彼の論文中に、「彼等兩名はどうしてサウス・ブレンツリーに於ける犯罪を犯し得るか」の意義ある質問を出して、自分で次のやうに答へてゐる。

「殺人はたゞ絶望に陷入つた人か職業的犯罪人によつてのみ行はれる。然るにサツコは十七歳の時に渡米し、間もなく靴磨きとなり、極めて精勵に働いた。一九一〇年から一九一七年迄眞面目にミルフオールド靴製造會社で働いてゐた其後メキシコに渡つたが、彼の妻子を思ふの餘り僅か四ケ月にして歸米した。彼はスタフトンに於ける靴屋に入り、逮捕された日までそこで働いてゐた。彼の雇主は彼が善良な人だと云つて居り、又彼は彼の家族と彼の家庭に愛着を傾けてゐた平和な人として知られてゐた。彼は千五百弗の預金をしてゐた。かゝる眞面目な勞働者がどうして一夜のうちに盜賊となり得やう。

ヴァンゼッチはサツコとは違つたタイプの人ではあるが、同じく理想家であり、仲間からは崇拜されてゐる。更に彼は詩人でもあり、讀書家である。若しも彼にしてもつと早く基礎學を修得してゐただらうならば、恐らく學者になり得たであらう云々」と。

サツコは十七歳の時自由の王國米國に足を入れて以來、外國移民として具さに辛苦を嘗め、長い間の汗によつて貯蓄した金を旅費として故國イタリアに歸らんとする眞際に電車内で逮捕されたのだ。ヴァンゼッチの身の上に就ては更に涙ぐましいものがある。詩人である彼は憐れな移民の生活に直面して如何にその心を悩ましただらう。彼の最初の仕事は料理屋の皿洗であつた。彼が渡米したのは、一九〇八年の不景氣の時であつた。彼は幾夜も新聞紙を寢臺として人の戸口で横わり、一切のパンさへなく幾日も過したこともあつた。だが、その間にも彼は勞働者を教育することを一刻も忘れなかつた。

サツコは入獄中彼の同志に與へた感想文の終りに次のやうな句が書かれてゐる。

「そして私は社會改造と人類の解放のために斃れた殉教者達に私の無名の名を附け加へるの滿足して死に就から」

全世界勞農大衆が彼等兩名に寄せてゐる無限の同情を知つたなら、彼等はいかに喜ぶであらうか。偉大なる指導者よりも寧ろこの一介の働者が世界のプロレタリアによつて新しい殉教の模範として見られてゐることはより我々の心を打つ何物かがある。

（八月十日夜半）

カマキリの命がけの交尾

東京市視學　岡崎常太郎

その一

もはや十年ばかり前、大正五年のことである。九月八日の朝、一頭のカマキリ（前翅褐色のオホカマキリ）の雌を捉えた。これを同日の夜八時頃に、かねてより飼育して居た雄（これも前翅褐色のもの）の籠に入れて見た。この雌は可なり飢えて居たから、恐らく友食をするであらうと思つたのであつたが、事實は全く豫想に反した。雄は例の恐ろしさうな身構をするよと見る間に、突然雌の背中に飛び乘つたが、しかし少々あわてたものと見えて、逆に乘つたので、止むを得ず雌のお腹を鎌でしかと抱いてゐた。仁田四郎が、猪に逆乘して、しつぽを攫んだ時の有様も、かくやと思はれて、痛快でもあり又滑稽でもあつた。尤も私はカマキリの交尾狀態を度々觀察した事はないから、これは、彼等にとつては、左程珍しい事ではないかも知れないが、私にとつては、誠に物珍しかつたのである。何はさておき、彼は此の狀態では、到底所期の目的を達するわけに行かぬと悟つたものと見えて、暫時の後、向き直つて、雌の頭と自分の頭とを並べ、尻と尻とを並行させて鎌で以て雌の肩先（肩とは長い前胸の後端で、翅の基部の所を假りに名附けたものである）をおさえ、口を雌の前胸におしあてゝ靜止した。その様を横から眺めると、首の恰好と云い、肩の様子と云い、まるで瘠せこけた馬が、非常に疲れて、長頸さしのべ、頭を垂れて、馬子に引かれながら歩いてゐる時の様であつた。かくして、八時二十分に至つて、遂に交尾したが、それから十時二十分まで、まる二時間、全く身動きもせず、靜寂そのものの様であつた。十一時を過ぎてもまだ動きさうにもない。彼等は魂飛び魄散じて最早冷たき骸殼のみとなつたのであらうか、否決して左様ではない。

翌九日午前六時に見た時には、雄の尾端は既に雌のそれより離れて居たが、雄はやはり負ぶされたまゝであつた。しかも時々生殖器を延ばして交尾しようとする様子であつたが、其の慾望が高調に達しないものの如く、再三この狀態を示しながら、六時半頃になつても遂に交尾せず、只徒らにおぶされたまゝであつた。私は出勤時刻に近づいた爲に、止むなく宅を出かけたのであるが、午後五時に歸宅して見ると、再び交尾して居た。同九時に見た時には全く分離して居たから、雄を出して別の籠に移した。

翌十日正午に再び雄を出して雌の籠に入れた所が、午後二時になつて又交尾した。これは私の見た第三回目の交尾であるが、それが又も離れ、午後七時に至つて、又々第四回目の交尾をした。翌十一日の朝六時に見た時も交尾したまゝであつた。多分前の晩に交尾したまゝ離れたものではあるまい。今度は雌雄を別の籠に移さず其のまゝにして置いたが、この日の午後四時に歸宅して見ると、豈圖ら

ん、雄の姿は見えずなり、僅にも只翅の一部と脚の片われのみが籠の中に散亂して居るのであつた。宅のものに質せば、午前中に雌が雄を食つたと云ふ。かくの如くして、文字通りのカマキリの命懸けの交尾の幕は閉じられたのである。

その二

登場人物はオホカマキリの雌雄、時は大正五年九月十五日の夜、所は東京郊外代々木字初臺、私が畠中の一軒屋に假の宿りをして居た時の事である。もはや閉戸に入つてうつらうつらと夢路をたどりかけた時、何物か枕元をかすめて隣室との堺の襖にパタリとぶつかつた者がある。たゞならぬ音に耳をすまして聞いて居ると、何だかざら〱した足で襖をふみしめてゐる樣である。さてこそくせ者、一つかみにして茶瓶にほうり込んでくれようと、直に起きて電燈をひねつて見ると、瘦カマキリが只一匹、キヨトンとして闇の中から我が姿を見下して居るのであつた。前例と同じく前翅褐色の大カマキリの雄であつた。田舎の事であるから、縁の間に燈火に誘われて室内に飛び込んで居たのであらう。別に珍しい種類でもないから、茶瓶に投げ込むには及ばぬと思つたが、その頃私は直翅類について多少の興味を覺えて居た時であつたから、早速それを捉えて、飼育中の大カマキリ（前翅褐色のもの）の雌の籠に投げれた。所が雌は飢えて居たのであらうか、忽ち猛然として雄に飛びかゝり、鎌を以ていきなり彼をつかみ、やにわに噛みついて、前胸の後端から食い始めた。あまりの見幕にどぎもを消して見て居ると、彼の女は何の遠慮もあらうものかは、ガジリ〱次第に雄の胸の背面を後部より前方に食つて行く。その物すごき光景、氣の弱い婦人達はとても見ては居られぬ。然るに此の時不思議にも胸を食われつゝある雄が、しきりに尾端を活動させて居る。苦しまぎれにもがいて居るのかとも思つたが、どうやら雌のお尻を探して居る樣に見える。はて奇しき事もあるものかなと思い、更に注視して居ると、强力な彼女は、しつかと雄の胸ぐらをつかんで動かさず、ズン〱食つて、もはや長い前胸の背面をすつかり食つてしまつた。何しろ圖太い腹の持主であるだけに、胸一ぱい食つても、腹一ぱいにはたらぬと見えて、次に頭部に移り、目玉（複眼）をボリボリと食い出した。東京の人間は生馬の目をくりぬくと聞いて居たが、カマキリ社會では、それ位は何でもないらしい。それにしても餘りにひどい。「もし世の中に鬼があるなら、これが鬼でなくて何であらう」などゝ、いやに彼女に對する敵愾心を發揮して、いつその事つまみ出して、ひねりつぶして呉れようかとも思つたが、いや〱そんた然は、小説でも書く時まで、收めて置こうと思い直して、さて雄は如何にと見れば、眼玉を噛みとられながらも、しきりにお尻を動かして居る。これも亦殊の外熱心なものだと感心して見つめて居ると、遂に首尾よくその目的を達したではないか。一念凝つて此の通り、胸も頭も何のその、人間社會には、とても見られぬ奇蹟である。

不思議〱と、猶も瞳を凝らして居ると、兇暴なる雌は、遂に頭全部食われてしまつた。それでもまだ依然として交尾したまゝである。雌はしきりに三角頭を打ち振りながら、猶も進んで雄の前腕（鎌）をかじり出し

た。肉を噛み取つては徐ろに首を上げて、紅い口をペロ〳〵と甞めずりながら、舌鼓打ち鳴らして居る光景の物すごさ、紅葉狩の鬼女も、恐らく魂消て腰を抜かすであろうと思はれた。かくして雄は左の鎌全部食い盡されたが、それでもお尻は離れない。時はまさに午前一時二十分、草木も眠る丑三つ時である。雌は口の先で盛に雄を食つて居る、お尻の先では交尾して居る事を知らないかの様に。雄はお尻の先で交尾して居る、そうして胸も頭も、腕までも食われながら我不關焉の體たらく。頭と尻とはまるで別人である。これこそ天下の奇觀でなくて何であろう！ 如何に氣丈な我輩も、これには痛く辟易して、更に觀察を繼續するの勇氣もなく、そのまゝ再び布團の中にもぐりこんだ。

私は翌朝目が覺めるとすぐに虫籠を見たが、胴體ばかりの雄は、猶依然として交尾して居る。又しても私は魂消た。何と云う痛ましの狀態であろう！

汝弱き者よ、汝の名は女なり、など云つたなら、當世の御婦人達から、如何に攻擊されるか分らないが、カマキリ社會に於ては、何の顧慮もなく、「汝弱き者よ、汝の名は男なり」と云つて居るであろう。いや、私の此の記事を讀んで、溜飲を下げて居るお方が何處かにある様だから、こゝらで御免を蒙つた方がよいかと思うが、話の結末をつける爲に、もうちよつと聽かせて頂きたい。

此の日（即ち十六日）の午前七時出勤の時刻が迫つたので、名殘り惜しくも無頭胸先生に別れを告げて出かけたが、午後三時に小急ぎに歸宅して見ると、さすがの無頭胸先生も、只翅の一部のみを殘して、全く雌に食ひ盡されて居た。この時雌の尾端は猶開いて居たから、交尾後（分離後）多くの時間を經過して居ない事を知つたのであつたが、同日午後十時に見た時には、全く常態に復して居た。

猶私は同月二十一日にも略同樣の事實を見たのであるが、もはや之をくりかえす勇氣もなければ、こゝには省略することにする。

カマキリは益虫であるにもかゝはらず、その姿のよからぬ爲、殊に三角頭でギロリと睨みつける樣子、又飽くまでも負けぎらひの彼が、人を人とも思わず、恐ろしい劍幕で跳びかゝつて來る有樣は、どう見ても可愛く思われず、その爲か、洋の東西を問わず、時の古今を論ぜず、誰にも彼にも、惡しざまに云われて居る。近頃横山桐郎博士は、其の著「蟲」に於て、彼を目して蟲仲間の陰險者、蟲地獄の親玉、昆蟲界の追剝、辻強盜と、あらゆる酷評を下し、彼をして完膚なきまでに至らしめてある。さすがに博士一流の名文で、學者に稀な文才家であるだけに、一度同書を繙けば、痛快極りなく、覺えず知らず釣り込まれて、自分の意見など出す暇さえない位である。しかしカマキリに對して書かれてある事は少々酷な樣にも思われる。勿論左樣に考えられない事もないけれども、同じ卵も横から見れば長丸で、縦から見ればまん丸アバタもエクボに見えると云ふから、私は強いて異說を立て、カマキリの爲に一言辯じて擱かうと思う。

抑も追剝と云ひ、強盜と云ふ、その事は人間によつて行われ、その名は人間によつて附けられたものである。よし濱の眞砂は盡きるとも、世に追剝強盜の容易に絶えぬ事は、日々の新聞紙が之を證明して居る。萬物の靈長たる人間にして此の如し、豈にカマキリのみ

を貪むべけんやである。又妻君が夫君を食つて平氣で居る冷血漢は、直翅類仲間では極めて普通であつて、彼の鳴虫仲間の筆頭であるスズムシでさえ夫君を食うのである。豈獨り蟷螂のみならんやである。又カマキリの雄は、交尾して精虫を雌に捧げるのが、蓋し最高の願望であろう。その大願の成就した後は、もはや此の世に御用済のもので、何れ遠からず彼の世に旅立つにきまつて居る。そこで妻君思えらく、いとし殿御の事である。どうせ永くはない命、人手にかゝつて非業の最後を遂げるより、いつその事我が手にかけてと、思案の上の仕打であらう。自分が命の有る中に、御主人の後始末まで、奇麗に片附けるとは、何と心掛のよい妻君ではあるまいか。

因に私がカマキリの交尾の觀察をした當時、これを恩師丘博士に物語つた。所が、研究室に居られた博士は、

「自分は此頃ファーブルの著書を食後の休みの時間に讀みに讀んで居るが、小説を讀むよりかも遥かに面白い。丁度今聞いた樣な事をファーブルも書いて居るので、大そう面白く讀んだ。何でも一匹の雌が二週間に七匹の雄を食つたそうである。恐らく飢えさせて實驗したのであろうが」

とのお話を伺つたのであるが、その當時には、ファーブルの名は、我が國の讀書界には、あまり多く知られては居なかつた樣に思う。然るに數年を經て大正十一年「昆蟲記」として其の著の譯出さるゝや、ファーブルの名は、忽ちにして動物學者以外にまで知れ渡つた。

カマキリの交尾狀態については近來我が國の學者も大に注意を拂うに至り、今年に入つて既に二三回も精細なる研究が發表された。私のこの觀察はファーブルの發表したるものと我が國學者の近來の研究とを連絡する飛石の一つになるものではあるまいか。

電報文學

○　高村光太郎

ハラキリグ モガ ハラヲキル

○　齋藤茂吉

ナツノヒザ カリニイヌガ ジ
ド ウジヤニヒカレタハナシ
ヲキキマシタナムアミダ ブ
ツナムアミグ ブ ツ

○　藤原咲平

ニホンガ グ ンカクノチカラ
ナキコトメイリヨウトナリシニ
ツキグ ンシユクノヒツヨウナ
シ」プ リツデ マン

○　千家元麿

ナマケルサビ シサハタライテ
モサビ シイサビ シサハナク
ナラナイガ ヨロコビ モアル
ミンナゲ ンキニイキヌケ

○　加藤一夫

ヤマニインウツナシカシサウク
ワイナヒガ ツヅ クミミヲサ
クライデ ンタキノアメサツサ
ウタルカゼ ハレ

○　林房雄

キチガ ヒノロバ ヨオマヘノ
フミアラシテヰルハタケハコク
ミンノアタマダ ココロダ キ
ヲツケロ（××××カン）

○　兼常清佐

ナツハビ ールビ ールノアヂ
ヲタノシミ「ビ ールノクニド
イツヲヲモフ○ビ ールノアジ
ニカイキヨウビ ヨウノアジ
アリ

○　山川均

アサギ リニツツマレタヒエイ
ヲナガ メツツイマビ ワコハ
ンヲハシツテヰマス」二三ヒア

サキウコウシヤニテ

○　畑英太郎

ニホンコクミントシテノワレラ』
ハタエイタロウ

○　藤森成吉

バリケード　ノヤウナヤツガ
タケ○ケムリノヤウナクモ○
コウゲ　ンニモエルココロヨ○
シナノ○セイキチ

○　荻原井泉水

ヒトヘモノキテウキクサノミノ
トウキヨウニヰル

○　室伏高信

ルツクス　エツクス　オリエン
テ

○　杉村楚人冠

トヤカクトヒヒヤウサレテニン
ゲ　ンカシコクナルモノナラ
ソウリダ　イジ　ンナンテモノ
ハモツトカシコクナルハズ

○　石川三四郎

アツイ　アツイ　アツイ

○　堺利彦

ヒンコンシツギ　ヨオコジ　キ
ジ　サツヌスミサギ　ボ　オコ
オカクセイハンコウダ　ンケツ
ソシキクンレン

○　高濱虚子

ハコニハノヒトニフリユクツキ
ヒカナ○キヨシ

○　生田長江

マンテンカノモダ　ンガ　アル
オヨビ　ボ　オイシヨクン」シ
ヨクンノゴ　カツド　ウニヨツ
テーサイノ「キンダ　イテキ」
ナモノガ　キウゲ　キニコツケ
イカサレテキタコトヲカンシヤ
シマス

○　長谷川如是閑

シソウニハレキシワナイ　レキ
シニハシソウハナイ

（小穴隆一氏の畫ける芥川氏の死顔）



芥川龍之介氏

恒藤恭

佐佐木茂索

小穴隆一

富田碎花

下島勳

萩原朔太郎

犬養健

谷崎潤一郎

里見弴

佐藤春夫

芥川龍之介

恒藤恭

一

七月二十八日の午前、遺族、親戚、若干の友人と共に私は日暮里の火葬場にゆき、芥川の遺骨を壺に拾つた。はじめ一同が燒香した後、係りの人たちが鐵扉を開いて爐の中から取り出した白骨を皆の眼の前に置いたとき『きれいに燒けて居るな』と思つた。それは清淨なるものの一と塊りであつた。

『この白骨を芥川に一と目見せてやりたいものだな』、次の瞬間にはそんな事をかんがへてゐた。そしたら『あゝ身が輕くなつちやつた、うれしいぜ』と言ふだらうとおもつた。

『もうこれで此世に於ける君の存在は完全に終了した。安心して呉れたまへ。しかしね、殘つた者はさびしくて堪らないぜ』。斯んなことを一言彼に告げたくも思つた。

八月二日の夜、私は東京を出發し、翌あさ下鴨の家に歸つた。暑さに中つて腸や頭やをいためた後に上京して、酷暑の中をあちこちしたので、心も身體も疲れた。何だか氣抜けのしたやうな感じがした。東京で買つて來たおもちやのＢＩＬＤＡや積み木を並べて子供たちとあそんだ。

それから、戸棚の中から古い手紙を入れた箱を取り出して、芥川から來た書簡をえらび出した。大抵の手紙は保存して居ないけれど、芥川のよこした分は不思議と高等學校時代のから割合に完全に保存してゐる。順序もなく、封筒の中からなかみを出しては讀み返した。過去はなつかしく記憶の中によみがへつて來た。あゝそんな事もあつたつけと幾たびか獨りでうなづいた。

明治四十五年の七月、出雲の國松江に歸省して居た頃に呉れた手紙などが、一番古い部分に屬し、封筒に入れた書簡が七十通ばかりと五六枚のはがきとが殘つてゐる。最後に來たのは今年の五月二日付の便りで、留守中に妻が狀差の中か何かから探し出して置いて呉れたのであつた。大部分は大正二年から七年頃までの日付になつてゐる。その頃から以後は、偶々東京又は京都で會へば、昨日別れたもののやうに話し合ふのであつたけれど、文通は稀れにしかしなくなつた。

二

人の死んでしまつた後の狀態を死といふし、斯かる狀態としての死

に人が到達する過程をも死といふ。前の意味における死は、生と對立するものであるが、後の意味における死は、生の最終の部分である。だから、或る人の一生について云為するときに、この後の意味における死を其人が如何やうに經過したかといふことを不問に付してはなるまい。その人が自殺といふ經過をゑらんだ場合において、一層然るであらう。しかしながら、人生の終りの部分としての死は、必ずしも藝術品の創作の過程における最後の仕上げのやうな意味をもつものではない。死が人の生涯の一構成分子として有する重要性は或る人の場合においては比較的に大であり、他の人の場合においては比較的に小である。自殺の場合といへども、例外を成すものではないと思ふ。或る人が自殺によつてその生涯を了へた場合に、彼の自殺を以て彼の生涯における最大の事件であるが如く思推することは、多くの場合において彼の生涯の意義を正しく理解するの途ではない。しかも或る人の自殺が彼を知つてゐた者に與へるところの心理的影響は、やゝもすれば後者をして、死が前者の生涯において有する意義に關する錯覺に陥らしめる。

芥川の場合において、彼の死が彼の生涯において如何なる意義を有するものであるかを、私は論じやうとは思はない。唯、何にしても、自殺が彼の一生において有する重要性を過大視することは、私にとつては望ましくない。――根本において斯うは考へるものゝ、しかし彼の自殺によつて惹起された心理的影響から免れることは不可能である。一つ／＼披いて讀んで行つた芥川の手紙の中で、次にその全文を寫すところの一通が最も強く私の心を撲つたのも、その爲である。それは大正四年三月九日の消印である。

イゴイズムをはなれた愛があるかどうか。イゴイズムのある愛には、人と人との間の障壁をわたる事は出來ない。人の上に落ちてくる生存苦の寂寞を癒す事は出來ない。イゴイズムのない愛がないとすれば、人の一生程苦しいものはない。

周圍は醜い。自己も醜い。そしてそれを目のあたりに見て生きるのは苦しい。しかも人はそのまゝに生きる事を強ひられる。一切を神の仕業とすれば、神の仕業は惡むべき嘲弄だ。

僕はイゴイズムをはなれた愛の存在を疑ふ。(僕自身にも)。僕は時時やりきれないと思ふ事がある。何故、こんなにして迄も生存をつゞける必要があるのだらうと思ふ事がある。そして最後に神に對する復讐は、自己の生存を失ふ事だと思ふ事がある。

僕はどうすればいゝのだかわからない。

君はおちついて畫をかいてゐるかもしれない、そして僕の云ふ事を淺薄な誇張だと思ふかも知れない(さう思はれても仕方がないが)。しかし僕にはこのまゝ回避せずにすゝむべく強ひるものがある。そのものは僕に周圍と自己とのすべての醜さを見よと命ずる。僕は勿論亡びる事を恐れる。しかも僕は亡びると云ふ豫感をもちながらも、此ものゝ聲に耳をかたむけずにはゐられない。

毎日不愉快な事が必起る。人と喧嘩しさうでいけない。當分は誰ともうつかり話せない。そのくせさびしくつて仕方がない。馬鹿馬鹿しい程センチメンタルになる事もある。どこかへ旅行でもしや

うかと思ふ。何だか皆とあへなくなりさうな氣もする。大へんさびしい。

三月九日　　　　　　　龍（句讀點は恒藤施す以下同じ）

右の書信の日付に先立つこと約十日の二月二十八日に書かれた書信の内容と照し合せると、右の書信の文句の意味が一層よく了解し得られるけれど、或る事情のために、唯その最後の部分だけを左に寫す。

不性な日を重ねて今日になつた。返事も出さないでしまつた手紙が澤山たまつた。之はその事があつてから始めてかく手紙である。平俗な小説をよむやうな反感を持たずによんで貰へれば幸福だと思ふ。

東京ではすべての上に春がいきづいてゐる。不斷なる、しかも常に休止しない力が悠久なる空に雲雀の聲を生まれさせるのも程ない事であらう。すべてが流れてゆく。そしてすべてが必止るべき所に止る。學校へも通ひはじめた。イヷンイリイツチもよみはじめた。

唯、かぎりなくさびしい。

二月廿八日　　　龍

右の二通をいづれも私は京都吉田の帝國大學寄宿舍で受け取つてよんだ。間もなく春休みとなつた。私は上京して、前の年の十月に移り住つた田端の新居に芥川をおとづれ、休暇の間そこで起居を共にした。

三

その時から約一ヶ年以前の芥川の心境を物語る手紙がある。

僕の心には時々戀が生まれる。あてのない夢のやうな戀だ。どこかに僕の思ふ通りな人がゐるやうな氣のする戀だ。けれども實際的には至つて安全である。何となれば、現實に之を求むべく、一に女性はあまりに自惚がつよいからである。二に世間はあまりに類推を好むからである。

要するに、ひとりでゐるより外に仕方がないのだが、時々はまつたくさびしくつてやり切れなくなる。

それでも、どうかすると大へん愉快になる事がある。それは自分の心臟の音と一緒に風がふいたり、雲がうごいたりしてゐるやうな氣がする時だ（笑ふかもしれないが）。勿論、妄想だらうけれど、ほんとにそんな氣がして少しこはくなる事がある。

所にもう一つ妄想をかくと、何か僕をまつてゐるやうな氣がする。何かゞ僕を導いてくれるやうな氣がする。小供の時はその何かにもつと可愛がられてゐたが、この頃は少し小言を言はれるやうな氣がする。平たく云ふと、幸福になるポッシビリチイがかなりつよく自分に根ざしてゐるやうな氣がする。それも仕事によつて幸福になるやうな氣がするのだから可笑しい。
幸福な夢想家だと君は笑ふだらう。

無智をゆるす勿れ。己の無智をゆるす毎に他人の無智をゆるすのは、最卑怯な自己防禦だ。無智なるものを輕蔑せよ（ある日大へん景氣がよかつた時）

オックスフォードの何とか云ふ學者が「ラムをよんで感心しないものには英文の妙味はわからない。ＥＳＳＡＹ・ＯＮ・ＥＬＩＡは文學的本能の試金石だ」と云つた有名な話があるさうだ。上田さんのラム推奬の理由の一として御しらせする。

試驗が近いんだと思ふとがつかりする。試驗官は防疫官に似てゐる。何となれば、常に吐瀉物を檢査するからだ。偶に營養物となつたものを測るべき醫學者が來ない以上、試驗は永久に愚劣に止るにちがひない。ノートをつみ上げてみると、ほんとうにがつかりする。

キヤラバンは何處に行ける
みやれば唯平沙のみ見ゆ
何處に行ける
行きてかへらざるキヤラバンあり
スフインクスも見ずに
砂にうづもれにけむ

われは光の涙を流さざる星ぞ
地獄の箴言をかゝざるブレークぞ

わが前を多くの騎士はすぎゆくなり
われも行かむと時に思へる

メムノンはもだして立てり
黎明は未來らず
暗し——暗し

何時の日か日の薔薇さく
ほのぼのと
何時の日かさくとさゝやく聲あり

象牙の塔をめぐりて
たそがるゝはうすあかり
せんすべなさにまどろまんとする

龍

この手紙には日付はないが、封筒に大正三年五月十九日のスタンプが捺してある。當時彼はなほ新宿の家に住んでゐた。

四

順次に時の流れを遡つて行くやうだが――封筒の上のかすかなスタンプの文字により、大正三年一月二十一日に發信したものと認むべき手紙がある。後年に至るまで一貫して芥川が把持してゐた人生觀なり藝術觀なりが、かなり明瞭に且つ濃厚にその中にあらはれてゐるやうに思ふ。彼の手紙の多くはむしろ普通の消息の體裁を成してゐるのだが、この頃はよく感想録めいたものを書いてよこした。

自分には善と惡とが相反的にならず相關的になつてゐるやうな氣がす。性癖と教育との爲なるべし。ロジカルに考へられない程臆力の弱き爲にてもあるべし。

兎に角、矛盾せる二つのものが自分にとりて同じ誘惑力を有する也。善を愛せばこそ惡も愛し得るやうな氣がする也。ボードレールの散文詩をよんで最なつかしきは、惡の讃美にあらず、彼の善に對する憧憬なり。遠慮なく云へば、善惡一如のものを自分は見てゐるやうな氣がする也（氣がすると云ふは謙遜なるかもしれず）。これが現前せずば、藝術を語る資格なき人のやうた氣がするなり。

同じ故郷より來りし二人の名を善惡と云ふなり。名づけしは其故郷を知らざる人々なり。

何にてもよけれど、しかつめらしくロゴスと云はむ乎。宇宙にロゴスあり。萬人にロゴスあり。大なるロゴスに從つて星辰は運行す。小なるロゴスに從つて各人は行動す。ロゴスに從はざるものは亡ぶ。ロゴスに從はざる行動のみ、もし名づくべくんば惡と名づくべし。

ロゴスは情にあらず、知にあらず、意にあらず、強いて云へば、大なる知なり。所謂善惡はロゴスに從ふ行動を淺薄なる功利的の立場より漠然と別ちたる曖昧なる概念なり。

自分は時に血管の中を血が星と共にめぐつてゐるやうた氣がする事あり。星占術を創めし人はこんな感じを更につよく有せしなるべし。

このものにふれずんば駄目也。かくもかゝざるもこの物にふれずんば駄目也。

藝術はこれに關係して始めて意義あり。

今にして君の「WOE SEN」を感得せしむるアートは最高也」と云ひしを思ふ。君は三足も四足も僕に先んじたり。

しひて神の信仰を求むる必要なし。信仰を窮屈なる神の形式にあてはむればこそ有無の論もおこれ。自分は「このもの」の信仰あり。こは「藝術」の信仰なり。この信仰の下に感ずる法悅が他の信仰の與ふる法悅に劣れりと思はれず。

すべてのものは信仰とならずんば駄目也。ひとり宗教に於てのみならず、ひとり藝術に於てのみならず、すべて信仰となりてはじめ

て命あらむ。

藝術を實用新案を工夫する職人の如くとり扱ふものは幸福なり。

自己を主張すと云ふ、しかも轟々しく主張すと云ふ。

自分は引込思案のせいかしらねど、まづ主張せんとする自己を觀たしと思ふ。

顧みて空虚なる自己をみるは不快なり。自ら眼をおゝひたき位いやなり。されどせん方なし。樽の空しきか否かを見し上ならでは、之に酒をみたす事は難かるべし。兎に角いやなり、苦しいものなり。

みにくき自己を主張してやまざるものをみるときには、嫌惡と共に壓迫を感ず。少しなれど壓迫を感ず。

自分はさびし

時々今から考へると、一高にゐた時分に君はさぞさびしかつたらうと思ふ事あり。

かく云へばとて君と今の僕と同じと云ふにはあらず。君の云つてる事が僕にわからなかつたからなり。何時でもわからないのかもしれねど。

自分は新思潮同人の一人となれり。發表したきものあるにあらず、發表する爲の準備をする爲也。又、人に一たりとは異なりと思ふ。自分は發表されたる創作をもつはいやなり。これより稿をつなかむと思ふ。

アナトオル・フランスの短篇を譯して、今更わが文のものにならざるにあきれたり。同人中、最も文の下手なるは僕なり、甚だしく不快なり。

同人とは云へ皆步調は別なり、早晩分離せむか。

この二三ヶ月、煮え切らざる日を送れり。胃の具合少し惡きに、いろいろな考に頭をつかひし爲なり。その爲に年賀狀の外どこへも手紙をかゝず、君にも失禮した譯なり、堪忍したまへ。海苔は少し大袈裟なり。胃病で死んでも海苔を食ふはやめじと誓ひたり。

忙しいだらうが時々手紙をくれたまへ。僕もせいぜい勉強してかく。

今日の手紙は大抵日記よりのぬき書きなり。幼さを嗤はざらむ事をのぞむ。

歌も殆つくらず、つくる暇なし。唯三首。

ともかくもむしやうに淋し

夕空の一つ星のやうに
　　むしやうに淋し
こんなうれしき事はなし
　こんなうれしき事はなきに
　　星をみてあれば涙ながるゝかな

木と草との中に
　われは生くるなり
日を仰ぎてわれは生くるなり
　　木と草との如くに

書中偶々私の言説について記してゐることなどは、聰明なる彼の謙遜の氣質に因るものであつて中らざること大である。

大正二年六月、私たちは一高を卒業した。芥川はかねての志望通りに東京大學の英文科に入學する考へであつた。私はその一年前くらいから讀んでゐた哲學書の影響を受けて、英文學研究の志を絶ち、京都大學の法科に入學することに決心した。それについては、芥川は唯一の相談相手であつた。

その夏、私は松江に歸省したが、七月十七日夜の日付で芥川の送つて呉れた手紙は、高等學校三年間の二人の交はりを回顧して、つぶさに彼の感想をしるしたものであり、私にとつては最も思ひ出の深い長文の書信である。たゞ私はその内容を公けにしやうとは思はない。この手紙に對して私の送つた返答の手紙の文句が偶然殘つてゐる。恐らく一度書いて、氣に入らなくて書き直したものかと思ふが、事によつたらすつかり内容を書き改めて送つたのかも知れない。つまらないものではあるけれど、當時私が彼に對してもつてゐた心持をそのまゝ現してゐると思はれるので、一部分をぬき書きする。

　きみの手紙をよんだ。その文句は僕のこゝろにとつては強い熱を持つてゐた。大へんうれしいと同時に、するどいメスのさきがかくれた傷口を抓いてゆくやうに痛苦しい氣持ちがした。僕には値ひしないほど君があつくそゝいでくれた好意がこの二年間にどれだけつもつたか。今またそれのあらはれにふれたとき、きみの示してくれたやさしいこゝろは、なぜかメスのやうにするどくいたく感ぜられる。

　なんだか斯う書いて行くと、ぢきにあの本館が目にちらつく。それが庭から斜めに見上げたさまが浮ぶかと思ふと、二階のまどから追分を見下ろした眺めがみえる。やつぱり君がそばに居て、やゝもすると二たあし三あし動きさうにするやうな氣がする。庭から見上げるときは、動いてゐる雲のあいだから日のひかりがこぼれて來さうだが、窓から見をろすときは、雨がねづみ色に空間をぬらしてゐる。もうあそこいらで低徊する機會はないかも知れないね。

　僕が君に對して言ひたいと思つてゐたことを、君の方から僕に向けてよつぽどすなほにうまく書いて貰つたやうな氣がする。君のまごゝろからのいろ／＼の實感のことばのどれか一つでもほんとうに

受けるだけの理由が若しあつたならば、それを君から聽くことはどれだけの悦びであるかも知れない。しかし僕はうれしいよりも恥しい氣がする。恥しいよりも悲しい氣がする。僕はそれだけの理由を確實にもつてゐない。(略)。

君がわがまゝであつたと云へば、僕はどれだけ我儘であつたであらう。正直なところ、もし比較の出來るものであるならば、幾倍わがまゝであつたか知れない。

君はいつも、そしてどのかどを手に當つて見ても、いつも手ざはりのよい珠玉のかたちをしたやうな人だと思つた。それで、手ざわりがわるいと感じたやうな時をあとで考へて見ると、いつもやつぱり自分の手の先の感覺が我儘な時であつたのだ。一體、君はしづかにして居るときは、大へんやさしい謙遜を主張するから、若し君にわがまゝがあつたにしろ、君は氣を置いてわがまゝをするのに、僕は自分がわが儘をするのが權利でもあるやうに我儘を通さうとしてゐたやうな氣がしてすまなかつたと思ふ。(略)

ぜんたい僕の方が年上なくせに、僕は君に對すると、いつでも年長者に對するやうな氣がしてゐた。少くとも年少とは感ぜられなかつた。それだけ君は世間に對して、否自己に對して落ち着きを持つてゐるのに違ひない。君ばかりでなく一體に僕は大抵の周圍の同じ年輩の人々がみんなはるかに僕よりも老成してゐるやうな氣がしてならないが、誰もそんなものかしら? まあ僕の交友の中ではN君ぐらいが同じ年ごろに感ぜられる。たゞみんなは、ざわ／＼と落ちつかうとして居るのに、君だけは羨ましいほど靜かに落ち着いてゐる。君はやはり君の自己を内からながめて、不安である、いつもさわいで居ると云ふかも知れないけれど、その不安も騒ぎもまことに靜かに落ちついて居るらしく見えてならない(略)

君にいろんな弱點や缺點があるとしたら、僕はそれに大てい不得手で接して居られるらしい。また好きな點もあるらしい。君の弱點に乘ずると云ふやうな考へからでは無い。數へ立てゝ來れば、君の長所や美點は澤山あつて、嘆賞する、また畏敬する心は折りにふれて動いたが、何だか君を誰よりもなつかしくさせるものは、君のどちらかと云へば影のうすいSIDEであつたやうな氣もする。考へてみると、誰だつてほんとうに威張れる、誇れる長所や美點をどれだけも持つては居やすまい。お互ひの缺點か弱點がお互ひの氣に障らず、不快にも思へなかつたら、此世の中では其上の事はあるまい。世の中が寂しい。いろんなものゝざわめきや入り亂れの中にも生といふものはさびしい。そのさびしい氣持が君とは共通なやうな氣がして、二人一緒にゐると、大分さびしさが薄らぐやうな氣がした。正直、君から求めるものは其れだけであつたかも知れないし、またそれだけが何よりも有難かつたのであつた。

氷の上に立つて一寸踏み出すと、あつしまつたと思ひながらも滑るやうにと書いたが、その踏み出す時の足の性根は實際に確かで、また能く自己を制する力をもつてゐるが、少しすべり出したかと思ふと、足の方が逆に自己を主張する。その滑り出した始めの自己がほんとうの自己か、それとも其制馭を無視してほとんど本能的にすべるのがほんとうの自己か、僕さい紛らはしい。君はよくつゝしん

で、わり合にその無抵抗的にすべる事をやらないやうに思ふ。それだけ君はよく自己を顧慮して生活を按排してゆく。(略)

東京の町の中で君と一緒にあるいて來て又は乘り合せて來て、新たに乘り別れたり又は乘り替へたりして電車で別れるときは、大へんさびしいと思つた。電車といふ奴は不可抗力をもつた動物のやうな氣のする時もあるね。(略)君に對しては不まじめに腹を立てたことも、まぢめに腹を立てたことも殆んどない。尤もいつか有樂座の外で待ちぼけてゐた時は、君と云ふもののカテゴリーの中からパンクチユアリテイを除かねばならぬかと考へて、少し腹が立つた。その外、何時か(君は氣にもとめなんだであらうし、僕もいつ頃かよくは覺えぬが、とに角此學期の間である)學課を了へて歸るときに、一緒に三丁目まで(?)ゆかうと云ひ出したら、君は用事があるからといつて、さつさとどちらへか電車に乘るべくあの下駄棚のふたをあけて往つてしまつた事があつた。その時は、腹が立つたといふよりは、ばかに失望したやうなと云ふよりは、何だかつまらない氣がした。それで今でもその氣持はよくおぼへて居る。僕はいつでも僕の勝手に從つて行動してゐたくせに、その時は『なぜ一寸氣をかへて一緒に行つて吳れないのだらう』とずい分我儘な事を考へながら、畢竟人間といふものゝ交はりはお互ひの「我」の接觸で、それの觸れ合はないところの時間と空間とは恐ろしく空虛なものと感じた。そして考へて見ると、自分もいつも自分の我を通したがるが、若しも幾分まごゝろを以て自分に接して吳れる人があつたら、よつぽどその人にさびしい氣もちを與へるにちがひないだらうと考へた。(略)

六

大正三年十月、新宿から田端にひつこしたときには、「銀杏落葉櫻落葉や居を移す」といふ小句を書きそへた印刷の通知狀をよこしたが、十二月一日付の音信には、その新居の樣子や田端の情景を敍述したあとに、次のやうな事をしたゝめてゐる。

此頃僕はだん〳〵人と遠くなるやうな氣がする。殆誰にもあはうと云ふ氣がおこらない。時々は隨分さびしいが仕方がない。其代り今までの僕の傾向とは反對なものが興味をひき出した。僕は此頃ツソでも力のあるものが面白くなつた。何故だか自分にもよくわからない、たゞさう云ふものをよんでゐると、さびしくない氣がする。さうして高等學校にゐた時よりも大分ピユリタンになつた。(略)

兎に角僕は少し風向きがかはつた。かはり立てだからまだ餘裕がない。僕は僕の見解以外に立つ藝術は悉く邪道のやうな氣がする。そんな物を拵へる奴は大馬鹿のやうな氣がする。大分鼻いきが荒いが、まじめなんだから、ひやかしてはいけない。それから天才の眞似をしてゐるんでもないから、心配しなくてもいゝ。餘裕がないから切迫してゐる。切迫してゐると、すぐ喧嘩腰になりさうでいけない。一體僕は人の感情を害するやうな事をするのは大嫌なのだが、此頃は反意志的に害しさうで困る。Yさんなんか大分氣をわるくしてゐるらしい。兎に角僕がよくないのだ。

　君が京都にゐる中に一ぺんゆきたい。鼻息のあらい時にゆくと、君があきれてしまふかもしれない。尤もいくらあらくつても自分のものがいゝと思つてゐるわけではない。人のものがあんまり卑怯でのんきだから不愉快なのだ。同時に僕のものも其仲間入りをするか、もしくは其以下になりやすいのだから猶不愉快なのだ。でも少し位あらいのではあきれまいと思ふから、やつぱり行きたい。要するに君が京都へいつたのはよくない。あはうと思つても一寸あへないのはおそろしく不自由だ。手紙では埒があかないし、ゆくには遠いし、甚よくない。

　何だかする事が澤山あつて忙しい。腦は大へんいゝ。胃病は全く癒つた。

　いつか寮で君が云つたやうに朝おきた時にミゼラブルな氣もちがする事だけは少しもかはらない。醫科の男に何故だらうつてきいてみたら、血液が後頭部へどうとかする具合だらうつて云つた。その男もあまりよくわかつてゐないのだから、僕はなほさらわからない。

　新思潮はとうの昔廢刊した。それでもあれがあつたおかげで、皆かいたものがすぐ活字になる權利を得てゐる（略）

　僕はこの頃今までよんだ本を皆よみかへしたいやうな氣がする。何もわからずによんでゐたやうな氣がして仕方がない。

　世の中にはいやな奴がうぢやうぢやゐる。そいつが皆自己を主張してるんだからたまらない。一體自己の表現と云ふ事には自己の價値は問題にならないものかしら。ゴーホも「己は何を持つてゐるか世間にみせてやる」とは云つたが、「どんなに醜いものを持つてゐるかみせてやる」とは云はなかつた（略）。

　大學の英文科に在籍した三年間の學課は芥川にとつて世にも退屈な時間つしぶであつた。それは當然至極な事柄である。彼はその事についてよく話しもしたし手紙にもかいた。一例をあげる。大正四年六月十三日付の書簡である。

　試驗は十日に始まつて十五日にすむ。日數は短いが一日に二つある日がある位で中々充實してゐるから厄介だ。殊にこの一年來興味のないものには努力する事が益々出來なくなつて來たので餘計厄介だ。そして專門の英文學の講義が僕には一番興味がないんだから愈厄介だ。最後にまだ一週二回づゝ品川の醫者へ通つてゐるんだから、その上に厄介至極だと云つていゝ。（略）

　差當り僕の頭は數字で一杯になつてゐる。デイッケンスの著作年表、ペトラルカのソンネットの數、十六世紀のソンネット作家の作品總數、沙翁のソンネットの番號、及シムペラインの幕數、場數——實際災だ。早く自分の事がしたくつてたまらないが、仕方がない。ノートのよみきれない科目は半創作的な答案を書いて間に合せてゐる。

　田端は若葉——あらゆる種類の若葉で埋つてゐる。その上に毎日靜な雨がさあつとふつてゐる。僕が雨期を愛するのは、君もしつてゐるだらう。僕は少しでもエステテイッシュな心のある人なら誰で

も黴のはえる事位は度外視して雨期を愛すべきものだと思ふ。この頃の雨に飽きた木の枝はどうつくしくしだれてゐるものは外にない。江城五月黄梅雨と云ふが、黄梅、黄麥、新緑及び灰色の空の美しい諧調は、西洋の詩に見られない美しさであらう。雨のはれまを散歩すると、家々門巷絲桐花といふ句を思出す。椒影沈々雨勢來と云ふ句を思出す。一川煙雨野薔薇と云ふ句を思出す。僕は試驗後少くも半月は雨がふつてゐる事を祈つてゐる(略)

早く自由にいろんな事がしたい。僕にはする事、しなくてはならない事が澤山ある。僕の友だちに一人今三期の結核患者がゐるが、病氣が病氣なので、誰も見舞ひに行かない。姉さんと妹と三人くらしで、姉さんもまだ片づいてゐないのだから大へんだ。病院へ入れておくのも苦しいらしい。あゝなつちやあたまらないと思つた。しみじみさう思つた。その人が野心家でないのは、まだしもの幸かもしれない。どこへゆくともまだきまつてゐないがどこかへゆく。

十二日夕　龍

七

封筒を失つた爲に、發信の時を正確に知り得ない書簡が若干ある中に次のやうな文句のものがある。多分大正四年のあひだに書かれたものと思ふ。

僕は愛の形をしたHUNGERを恐れた。それから結婚と云ふ事に至るまでの間(可成長い、少くとも三年はある)の相互の精神的肉體的の變化を恐れた。最後に最卑むべき卑怯心、そして更に僕の愛を動かす事の多い物の來る事を恐れた。

しかし時は僕にこの三つの杞憂を破つてくれた。僕は大膽に於て常にジンリツヒなる何物をも含まない愛を抱く事が出來るやうになつた。僕はひとりで朝眠をさました時に、ノスタルジアのやうなかなしさを以て人を思つた事を忘れない。そして何人にも知らるゝ事のない、何人にもよまるゝ事のない手紙をかいて、ひとりでよんで、ひとりでやぶつた事も忘れない。(略)

僕は霧をひらいて新しいものを見たやうな氣がする。しかし不幸にしてその新しい國には醜い物ばかりであつた。

僕は醜い物を祝福する。その醜さの故に、僕は僕の持つてゐる、そして人の持つてゐる美しい物を更によく知る事が出來たからである。しかも又僕の持つてゐる、そして人の持つてゐる醜い物を更にまたよく知る事が出來たからである。

僕はありのまゝに大きくなりたい。ありのまゝに強くなりたい。僕を苦しませるヴァニチーと肉慾とイゴイズムとを、僕のチャスチファイし得べきものに向上させたい。そして愛する事によつて、愛せらるゝ事なくとも、生存苦をなぐさめたい。

この二三日漸くCHAOSをはなれたやうな、しづかな、そのわりに心細い狀態が來た。僕はあらゆる愚にして滑稽な虚名を笑ひたい。しかし笑ふよりも先に同情がしたくなる。恐くすべては泣き笑ひで見るべきものかもしれない。

僕は僕を愛し僕を憎むすべてのSTRANGERSと共に大學を

出て、飯を食ふ口をさがして、そして死んでしまふ。しかしそれはかなしくも、うれしくもない。しかし死ぬまで夢をみてゐてはたまらない。そして又人間らしい火をもやす事がなくては堪たまらない。たゞあく迄もHUMANな大きさを持ちたい。

かいた事は大へんきれぎれだ。此頃僕は僕自身の上に明な變化を認める事が出來る。そして偏狹な心の一角が愈々のHARTになつてゆくのを感じる。毎日學校へゆくのも砂漠へゆくやうな氣がしてさびしい。さびしいけれど、僕はまだ中々傲慢である。龍

高等學校時代から大學時代へかけて芥川がかいて與れた書信の中の若干をえらび、その全文もしくは一部分を寫しとることによつて、この時代における彼の生活——主として內的生活の片影をあらはすことが、以上において私の試みた所であつた。故人が私に宛てゝ送つた私的音信を公けにするのは、さし控ふべき事であらうかと考慮してみたが、直接に又は作品を通じて、間接に故人を愛する人々が、彼をより好く知り、より深く愛するよすがに爲るであらうといふ考へから、その公表を敢てすることとした。

八

人生の或る時點に個人が社會において占める地位は、そこばくの義務と責任とを伴ふ。それらの義務なり責任なりは、生存の肯定を前提することによつてのみ成り立つものであるから、原則としては、自殺はそれらの義務や責任やに調和するものではない。芥川の場合において、彼の自殺は社會の一員としての義務及び責任に反するものではないといふやうに、私は彼の所爲を辯護しやうとは思はない。例令かやうな辯護を試みたとしたところで、それが彼にとつて何の意義を帶びするであらうぞ。さりとて、彼に向つて道德的責任を問はむとすることは、私の感情の肯んぜざる所である、むしろ私は、若しも彼の魂がなほ存在するものならば、『よくも君はあんなに深刻な苦しみに堪へて、その時までも生きて居られたね』と、さう云つて慰めたく思ふのである。

七月二十四日夜、始めて悲報を耳にしたとき、『噫、やつたな！』と思つた。この心持を說明するには多くの言を費さねばならぬから差控へる。たゞ私は彼の自殺の事實を知つたとき、後で考へると自分でも不思議な位に、少しも駭かなかつた。そして、彼の自殺を決意するに到つた心持に十分同感することが出來るやうに思つた。唯俄に人生が數倍の寂寞を加へた感に襲はれた。爾來この氣持は今に至るも持續して居る。

彼の自殺に何等かの理由があるとすれば、それは全く彼の場合に特有な理由であると、私は信ずる。何等かの他の人又は人々の自殺の理由と同一のカテゴリイに歸せしめることによつて、彼の自殺の理由を理解し得たと考へるのは、單なる論理的滿足たるに過ぎぬであらう。人間の行爲の動機はすべて之を理解し得るといふ前提其者が、すでに甚だ疑しいものではあるまいか。若しも強ゐて普通の自殺の理由を

以て彼の場合を理解せむと欲する人があるならば、彼は理由無くして自殺したと答ふべきであらう。但、『彼の全生涯及び全性格の裡に彼の自殺の理由を求めよ、而して其中に彼の生きた社會的環境の全面をも考慮せよ』との答は、恐らく間然する所無き答であらう。私自身としては、『彼の自殺の理由はわからない、しかし自殺を決意するに至つた心持には同感が出來る」と言ふ外はない。だが、彼の自殺の原因や動機が假令完全に明かになつたところで、最早二度と彼に會つて話することが出來なくなつたといふ厳然たる事實に面して、何の得る所ぞと言ひ度い。(昭和二年八月五日)

無題

佐佐木茂索

一

23 イエルサレム

クリストはイエルサレムへはいつた後、彼の最後の戰ひをした。それは水水しさを缺いてゐたものの、何か烈しさに滿ちたものである。彼は道ばたの無果花を呪つた。しかもそれは無果花の彼の豫期を裏切つて一つも實をつけてゐない爲だつた。あらゆるものを愛した彼もここでは半ばヒステリックに彼の破壞力を揮つてゐる。

「カイゼルのものはカイゼルに返せ。」

それはもう情熱に燃えた青年クリストの言葉ではない。彼に復讐し出した人生に對する(彼は勿論人生よりも天國を重んじた詩人だつた。)老成人クリストの言葉である。そこに潜んでゐるものは必しも彼の世間智ばかりではない。彼はモオゼの昔以來、少しも變らない人間愚に愛想を盡かしてゐたことであらう。が、彼の苛立たしさは彼にエホバの「殿に入りてその中にをる賣買する者を殿より逐出し、兌銀者の案、鴿を賣者の椅子」を倒させてゐる。

「この殿も今に壞れてしまふぞ。」

或女人はかういふ彼の爲に彼の額に香油を注いだりした。クリストは彼の弟子たちにこの女人を咎めないことを命じた。それから——十字架と向かひ合つたクリストの氣もちは彼を理解しない彼等に對する優しい言葉の中に忍びこんでゐる。彼は香油を匂はせたまま(それは土埃りにまみれ勝ちな彼には珍しい出來事の一つに違ひなかつた)靜かに彼等に話しかけた。

「この女人はわたしを葬る爲にわたしに香油を注いだのだ。いつもお

前たちと一しよにゐることの出來るものではない。」

ゲツセマネの橄欖はゴルゴダの十字架よりも悲壯である。クリストは死力を揮ひながら、そこに彼自身とも、——彼自身の中の精靈とも戰はうとした。ゴルゴダの十字架は彼の上に次第に影を落さうとしてゐる。彼はこの事實を知り悉してゐた。が、彼の弟子たちは、——ペテロさへ彼の心もちを理解することは出來なかつた。クリストの祈りは今日でも我我に迫る力を持つてゐる。——

「わが父よ、若し出來るものならば、この杯をわたしからお離し下さい。けれども仕かたはないと仰有るならば、どうか御心のままになすつて下さい。」

あらゆるクリストは人氣のない夜中に必ずから祈つてゐる。同時に又あらゆるクリストの弟子たちは『いたく憂へて死ぬばかり』な彼の心もちを理解せずに橄欖の下に眠つてゐる。…………」

以上は「改造」八月號所載「西方の人」から拔いた。少し長いが敢えて引用した。僕は此一章を今は特に繰り返して涙とともに讀まずには居られないのである。どの一節を讀んでも、ひしひしと胸のうちに迫つてくるものがある。此一章は今の僕に種種雜多なことを考へめぐらさせるのである。

だが僕などは所謂『いたく憂へて死ぬばかり』な彼の心もちを理解せずに橄欖の下に眠つてゐた迂濶な「弟子たち」の一人であつたらう。さうなら今更何を語る資格も持たないのである。唯、自分自身の魯鈍に愛憎をつかして、うなだれてゐるの外ないのである。

二

田端へ着いて格子戸を開けると、玄關の板敷の上に小さな白木の臺と晒し木綿が置いてあつた。僕はもう事實を信じなければならなかつた。

「キトクスグオイデマツアクタガワ」

先刻受け取つた此至急電報は、たつた今の今まで僅かに僕の氣持に謎をついてゐてくれたが。

家の方達から少しの話を聞いて僕等は奧へ通つた。

死顏は少し口を開けてゐた。その代り何か清淨なものを附加へてゐた。鼻の穴に脫脂綿の詰めてあるのが、儚なく眼に映ると、僕等は耐へかねた涙を流した。

二階へ引きとると久保田氏と小穴君とがゐた。僕はやうやく椅子に掛けて、「或舊友に送る手記」を讀んだ。

雨はまだ庭の木々に降り續けてゐた。

三

此天才を初めて見たのは本郷燕樂軒の樓上であつた。その頃存在した或劇團の招宴で、大勢知名の士が既に集つてゐた。そこへ故人は遲ればせにはいつてきて、暖爐を背後にして立つや否や、忽ち誰彼と盛んに談笑しはじめた。僕はそれを遠くからぢつと眺めてゐた。

會はてて十二時近く外へ出ると、僕は此人が頗る古風な山高帽をかぶつてゐるのを見た。長い毛が帽子の下からはみ出て、それは素晴しく

似合つたハイカラだつた。黒い外套の衿に黒い天鵞絨がついてゐた。大正七年十二月十五日の夜である。

四

生前最後の顔を見たのは六月十五日鎌倉の拙宅に於いてである。僕は今年の一月鎌倉に移り住んでから、一度も澄江堂を訪れなかつた。此二日前にふと思ひついて田端まで出掛けたのだが、あいにく某氏の病氣の爲に他行中で會へなかつた。それで玄關で奥さんに會ひ、近況を訊ねて某氏の病狀なども聽して歸つて來た。その時奥さんは、此間から一度鎌倉の方へも出掛けると申してゐるのですが、といつた。で僕は又訪ねなほすつもりでゐると、翌々日來訪を受けたのである。狹い部屋で久濶を叙してゐると、菅君が川端君を伴れて偶然遊びにやつてきた。それで從つて話題は皆に共通なあたらずさわらずなものに變化して行つた。夕食を共にしたあと澄江堂と僕は六百ケンを戰つた。二度とも僕が負けた。そのあと菅君が、代つて相手をした。これは一勝一敗であつたかと憶えてゐる。

八時頃、これから鵠沼へ行くといふので自働車を呼んだ。川端菅兩君と僕は、菅君の家の方へ散歩に行くことにして自働車の待つてゐる通りまで四人一緒に出てきた。その時澄江堂は僕等の行くところまで此自働車で送らうといひ出した。菅君の家は停車場の裏口にあり、凡そ鵠沼へ行く道とは正反對の地點だつた。だから僕等は電車で行くからとせつかくの厚意を辭退したが、それでもまだ幾度か送つて行かうといつて容易に鵠沼へ去らうとはしなかつた。だが僕達はあまりに延り道なことを說いてひたすらに辭退した。するとそれぢやあといつて澄江堂は鵠沼へ去つてしまつた。

普通鎌倉から鵠沼へ行く自働車の順路は、大佛の前を左りに梶原の方を一旦藤澤へ出て行くのであるのに、その晩に限つて運轉手は極樂寺の切通しから七里ケ濱の海岸づたひに行くと主張して聞かなかつた。僕等は今迄常に大佛の方を通つたので運轉手に海岸を行くのは遠路だらうといつたが、運轉手は頑として片瀬廻りの方が近いのですからと答へて讓らなかつた。しまひには御命令でしたら尤もどちらからでもまゐりますけれど、そんなことをいつてゐた。自働車の後尾燈が見えなくなつてから、僕と菅君とは何だか變だねえと何度もいひ合つた。

これが別れだつた。まことにあつけない別れだつた。いつまでも氣になる心殘りな別れやうだつた。

海ぞひに走る自働車の中で何事をも覺らない魯鈍な「弟子たち」の一人に「蔑のやうな冷笑」と憐憫とをどんなにか吐きかけて行つたことだらう。僕は自分に腹を立てゝ且その日偶然やつてきた菅君をさへ今は恨めしく思つてゐる。

五

最近の手紙にはよく藥のことが書いてあつた。たいていの手紙に藥の名の出ない手紙はないといつていゝくらひだつた。今年二月十六日の手紙、

原稿用紙にて失禮、河童百六枚脫稿。聊か鬱懷を消した。改造社

招待の芝居に來ないか。君の顏が見たい。○○○○、○○○○、○○○、――何や彼やゴチヤ〱で騷つてゐる。がそれだけに何か書いてゐるのは愉快だ。ブエロナアル○、七錠用。アロナアルよりもヌマアルの方が眠るのによい。やはりロッシュ會社製。

河童のことはこの手紙よりも四日前のにも書いてあり、それには「河童は僕のライネッケフックス」だとあつた。(「改造社招待の芝居」には僕も招れて出席、澄江堂に會つた。そのことは後に書く。)

十五年三月十二日の手紙。鵠沼。

(前略)お土産は入らぬ故、アロナアルロッシュを二びん買つて來てくれ給へ。兎角閑居してゐるのは寂然たるものだ。

同、四月九日の手紙。田端。

(前略)アロナアルロッシュ、君は一錠にて眠られるといひし故一錠飲みしところ、更に眠られず、もう一錠のみしが、やはり眠られず、とうとうアダリンを一グラムのみて眠りしが、アロナアルの効力は細く長きものと見え、翌日は一日惛々然として暮したり。右御聽かたがた御報告まで。

同六月十四日の手紙。鵠沼。

君が來ないものだから(即、君が來らずアロナアルロシユも來らざる故)けふもひどい下痢を二回起し、へこたれ切つて仰臥してゐる。(前略)

同十一月十日の手紙、鵠沼。

此頃の寒氣に痔が再發。催眠藥の量は增すばかり。(後略)

手紙も此通り、その頃間を合せれば病氣と藥の話が出ないことはなかつた。もう少し手紙の引用を許してもらはう。主として神經衰弱に就いて。――テレパシイのことが書いてある。

十五年十一月十日の手紙。鵠沼。

(前略。)とにかく君の顏が見たい。この頃君のことを考へてゐると、必ず君から手紙が來る。この前の手紙などは行き違ひだつた。それも少からず氣味が悪い。

同年十二月二日の手紙。鵠沼。

又々手紙が入れちがひになつた。これはテレパシイだよ。僕は暗タンたる小說を書いてゐる。中々出來ない。十二三枚書いてへたばつてしまつた。冬眠、冬眠、その外のことは殆んど考へない。(下略。)

同年十二月三日、鵠沼。

又君の手紙と入れ違ひになつた。どうも變だよ。小穴君曰、「それは呼吸困難などにさせるからさ。」鴉片エキス、ホミカ、下劑、ヴエロナアル、――藥を食つて生きてゐるやうだ。

同年十二月十三日。鵠沼。

前の手紙を書き終るや君の手紙が來た。いつもかくの如し。(後略。)

今僕の手許には澄江堂の手紙が凡そ百通餘りある。今迄大抵なくさなかつたつもりだが、それでも大正十二年度のものは僅かに一通より見當らないところをみると、その他にもしまひ忘れたのや散逸したのも多少あるかと思はれる。少くもあの大地震で、時事新報社に置いてあつたのは、すつかり燒いてしまつたわけである。これらの澤山の手紙

の中には引用して感慨を述べたいものが少からずある。しかしまだその時期ではないやうに考へられる。最近のものほど引用したいし、最近のものほどはばかられるところが多い。

かつて澄江堂は冗談に幾度かいつた。

「僕は死ぬ前に君へやつた手紙を燒き棄てに行くよ。」

六

「改造社招待の芝居」の晩、僕等は里見氏に拉せられて吉原の引手茶屋に行つた。十二時頃亂醉の一座の中から澄江堂と佐藤春夫氏と僕と妻とはそつと拔け出して一台の車を走らせた。上野驛で佐藤氏は別の車に乘り換へる爲に下車して、あとの三人はそのまゝ帝國ホテルへ乘り着けて行つた。僕達はもう鎌倉へは歸れないので此處に泊るの外ないのだつた。暫らく部屋で話してゐると、先刻別れた佐藤氏がひよつくり入つてきた。それから二時過ぎまで、何やかやら四人は――主として澄江堂が話しつゞけた。時々のしかゝるやうに、或は髀を撫りつけるやうにしながら、――不思議に薄氣味の惡い話が續けられて行つた。二時過ぎになつて澄江堂と佐藤氏は別の部屋に引き上げて行つた。

翌朝遲く久米氏と顏を合せた時――久米氏は僕等が寢たあとでやはりホテルへ泊りに來たのだつた。「ゆうべは弱つたよ。」といつた。「玄關を入ると暖爐が燃えてゐるだらう。あそこに芥川と佐藤と谷崎潤一郎とがゐて盛んにしやべつてゐるぢやないか。たうとう夜が明けるまでしやべりつゞけなんだよ。たつた今しがた朝飯を食つて別れたばつかりなんだ。」

なんでもそんな話だつた。僕は深夜のホテルのあのだだつ廣い、妙に無氣味でさへある玄關の暖爐の前で、以上の四人が藝術と人生を語り合つてゐる有樣を想像した。

七

はじめ我鬼窟と稱へ、我鬼と號したことは人の知る通りである。澄江堂の署名の手紙に見えた最初は、十一年二月十七日日附のものである。尤もこのあとも我鬼の署名はまま見當る。完全に我鬼を排して澄江堂に化つたのは大正十二年以降のやうである。大正八年乃至十年頃までは澄心亭、或ひは餘裕洞、或ひは了中庵等を我鬼と共に用ひてゐた。

八

いつでも書いてもらへるつもりだつたから僕は澄江堂の短冊半切の類を持つてゐない。僅かに色紙を二枚だけ持つてゐる。一枚には岩の上に小さな木が描いてあり、一枚にはただ二本の木が描いてある。これには淡彩が施してある。前者には「大盛先生淸鑒」と僕の雅號を置いて、「窮巷寡交偶寂寞　寒厨無酒自淸修　枯葉窓外西風晩　欲寫胸中落木秋　我鬼生畫一井題」、後者には「素友來語古　山秋冒々寒　我鬼生畫」と賛かしてある。此外河童の畫だの我鬼羅漢、冷眼羅漢、三汀羅漢の三幅對などあつた筈だが今は見當らない。

手紙の中には毛筆で「我鬼先生散步の圖」やペン畫の「修善寺繪

髭」などがある。いづれも小さなものだ。だが近近小島から半切を貰ふことになつてゐる。これは死の少し前かねて頼まれてあつたものを一切片付けたうちの一つである。

九

大正八年の手紙にこんな一節がある。

子規は三十六で死んでゐる。僕などはよほどしつかりせぬと、あの年ではろくなこと一つせずに了りさうだ。

澄江堂は享年三十六。

家の方の話に、最近澄江堂の茶碗が切りに割れたさうだ。新しい茶碗に變るとその都度いやな顏をするので、家の方が氣を付けるのだが、それでも切りに割れさうだ。

十

あの翌朝新聞は一せいに「或舊友に送る手記」を掲出した。僕は手に入つた限りの新聞に眼を通した。しかしその中のたつた一紙を除く外、他は凡て次のやうな文章を次のやうに書き綴つてゐた。

「僕の今住んでゐるのは氷のやうに澄み渡つた病的の神經の世界である。」

だが此中には一字の間違がある。「澄み渡つた」ではなく、原文は「澄み透つた」である。明らかに「澄み透つた」と久米氏は二度まで讀み返したに拘らず、「澄み」と聞いた新聞記者の手はそのまま「渡る」と必然かのやうに動いたものらしい。

僕は此時、此一字に明らかに故人を感じた。

十一

君看雙眼色　不語似無愁

これはその第一著作集「羅生門」の扉に刷つてある。これを最近澄江堂は突如として二三の文章の中に又使つた。僕はそれを此人に似ぬことだと私かに訝かしがつてゐた。

だが今は——不語似無愁

僕は考へて暗然、軈てぼんやりしてしまふ。

附記

無用の言を連ねすぎたかも知れない。或ひは或人は憤り、或人は顏を顰めるかも知れない。いづれにも豫めただにあやまつておく。

故人はつまらぬことをあまり書いてくれるなよと苦笑するかも知れない。だがそのあとで、それも舊稿廢文ぢや、(これは室生調ぢや、)と冗談に流してくれるであらう。

實のところ、まだ僕は何を書いていいか分らないのである。あれも忘れこれも忘れてゐるやうである。想ひ出したらまた書くであらう。

(昭和二年八月八日鎌倉)

IIII

小穴隆一

I

Gramme のことは知らない。

骨あげて見た彼の脳味噌は　曾て、彼が用意してゐた脱脂綿を燃したとしてみたほどの嵩であつた。

(鼻口に埋む脱脂綿、縊死、)

II

こはれた肋骨を掌に、舍利こつぱい　御坊は御坊の智識をふりまはしてゐた。

ずゐぶん水腫のきてゐたひとですねえ？

このきいろくなつてゐるところが薬品でかうなつたのです。

ここがわるくなつてゐたところの骨です。

III

改造社は民衆夏季大學の講師として關西か九州のいづれかへ彼をのぞむでゐた。

――あゝうるさいから電報で返事をしてをいた。どうせ西の方だ。

――それまでにはおれはもうあの世にいつてゐるから。

――だから僕はただ　ユク　としてをいたのだ。ユクとだけで場所は書かなかつたよ。

これは死の數日前僕に答へた彼の言葉である。彼の死は七月二十四日日曜日。夏季大學は八月。

IIII

七月二十三日彼の伯母の考で午後十時半、彼は彼の伯母の枕もとにきた。

「――タバコヲトリニヤタ」

七月二十四日彼の伯母の勘定で午前一時か半頃、彼は復伯母さんの枕もとにきた。さうして一枚の短册を渡して言つた。

「――ヲバサンコレヲアシタノアサ下島サンニワタシテクダサイ」

「――先生ガキタトキ僕ガマダネテヰルカモ知レナイガ、ネテヰタラ僕ヲオコサズニオイテソノママ　マダネテヰルカラト言ツテワタシテオイテクダサイ、――」

短册、句は、

自嘲
水涕や鼻の先だけ暮れ殘る

空谷下島先生は田端の醫者

V

Ⅲ、一時半に伯母さんに「オヤスミ」を言つて、六時に奥さんが氣がついて、下島さんがとんできて、…………みんな駄目であつた。

私には醫者の智識はない、しかし私はなぜか、Ⅲ、四時の彼をかんじる。

芥川君を憶ふ

富田碎花

芥川君は死んだ。それも自ら死に急いだのだつた。――遂々、やつたか！　といふ感じである。凡そ彼れを知るほどのものならば誰れでもさう感じたに違ひあるまい。彼れらしい道程を整然と辿つてそこまで到りついたのだ。人、或ひは彼れの自ら招いた死をもつて、餘りにイゴイステイクであると難ずるかも知れぬ、然し、かう云つたら抗議を持ち込まれるかも知れぬが、彼れも亦、東京人の通有性であると信ぜられる一面に於て僞惡家をプリテンドする性癖を強度に所有してゐたから、彼れの所謂非人間的情感を滿喫することを餘儀なくせしめられつつ、冷たく周圍に叛いて死んでゆかねばならなかつた、そして深く秘めた眞の自身の素相を、その最も親しいものにすら示すことを能き得ずにかうして孤獨に死んで行つたことは、たとへ『心境は澄み、生に執着なし』と強調はしてゐるにしても、恐らく隨分と悲しいことだつたに相違ない。然し、この點は、殘されたものにとつては一層の悲痛を與へるもので無ければならぬ。即ち、肉親の情も、また凡そ世

の何ものにも代へ難かるべき友情も、恐らくは彼れが生涯を被り通した假面のうしろにあつたであらうところのまざまざと苦惱しつゞけた赤裸々の生身の彼れにとつては何ものでもあり得なかつたといふことである。

×

何としても死は厳然たる事實であるといふとを前提として考へれば、冷静であればあるほど、自らそれを招くには異常の勇氣を要することは言を挿む餘地は無い、從つて當事者以外のみだりな臆測は許容さるべきで無い。が、この外見には、一見唐突のやうにも思惟されるカタストロフも、日夕、その起居を共にしてゐた家人は勿論、親近の友人等にとつては恐らく斯くあるべき豫兆は充分に知悉せられてあつたことを信ぜられる理由が無いでもない。何等かの理由で、偶々、もののの本質に徹して洞察する明を掩はれてゐた人々だけをしかその周圍に持ち得なかつたのは故人の不幸であつたやう私には感じられてならぬ。彼れの年來の痼疾と、その遺した手記に所謂『封建時代』の遺物たる家族制度の桎梏と、彼れが神經系統の疾患に直面してゐながらも努めて自家藥籠中のものとなし得たと確信した氷の如き冷静そのものにも優して一層の冷徹さをもつた靈藥の誘惑と、云つても效ないことではあるが、若し、そこになほ一層の注意が拂はれてゐたならば、或ひはこの惜むべき一代の才人を、かく孤獨な、不慮の死によつて喪ふことを免れ得たかも知れなかつた。恐らくこれは愚痴に過ぎまい、決して親近の人々を責めやうとするのでは無いことは知つて貰ひ度い。人は惜まれて死ぬうちが花であると云ふならば、また何をか云はんやではあるが。人々は彼れが死に直面してなほかつ冷静を失ふことなく、あの美しい文章を書き綴つたことを賞讃することに於て一致してゐるやうであるが、私としてはなまじひ『或る舊友へ送る手記』などいふものを遺して行かなかつたならば一層の親しみを人間としての彼れに覺えることであらうと思へてならぬ。最後まで彼れ自身を韜晦して、僞惡家として終始したと云つたならばあまりに故人に對して殘酷に過ぎるだらうか。若しさういふことが不可であるならば、瘦我慢を通してしまつたと語勢を弱めてもいい。他人の眼はこれを瞞ますことは或ひは能きたであらう、あり餘る彼れの叡知をもつてしても自身のうちにある『人間』に對しては刀折れ、矢盡きた感を泌々と味つたことであらう。おもへば悲しい極みである。

×

私は、彼れの死をみだりに英雄化しやうとする人々には反對の側に立つ者である。

成程、長期に渉つて惱み拔いた胸部の疾患にかてゝ加へた神經系統の疾患は直接の死因では無かつたかも知れぬ、が、それらの疾患が、他人には云へぬ×××の惱みと錯綜して彼れの生きる希望の大部分を奪ひ去つたことは察知するに難くない。私は、彼れの死を知つたときに反應的に、彼れが或る時期に於て恐らく強く心をひかれたであらうと信ぜられる愛蘭の劇作家シングを思ひ浮べた。この人は生に於ける諦といふものには惠まれなかつた薄幸の作家は、肺患の結果、死に直面して、多くの痴者でさへも長生をするのに自分のやうな天才者に生命を保證せぬといふことは解するに苦しむと云つて神を怨すことを肯じなかつた、そして病氣から來る激しい苦痛に耐へて、最後

後まで隣者にも親族にもこれを訴へることをしなかつた。この一見傲岸とも思はれるこの作家にも、その青年時代の或る時期には聖フランシスの傳記を書かうとしたことがあつたことを信頼するに足る傳記者が傳へてゐるのは、芥川君が、人間としては孤獨に死んで行かねばならなかつた『西方の人』を書いた氣持と一脈相通ずるものが無いであらうか。またシングが少數の、過去十六七年に渉つての詩作と譯詩——それにはペトラアクの古詩や、ヴヰヨンの作が含まれてゐた——を纏めて、死の少し前出版した『詩集』の序文に書いた僅々三百二十内外の語數のそれは、イエイツ、A・E等の壓倒的勢力の傘下に走るを肯じなかつた當年の愛蘭の群小詩人たちに深甚な感動を與へたのであつた。それには詩は人間的であるに先つて動物的でなければならぬと主張してゐる。芥川君の場合にあつては、凡そ藝術は人間的であるに先つて非人間的であるべきであるといふ信念の下にその創作をつづけて行つたことであらう。然し、同時にまたその大學の卒業論文の題目にヰルヤム・モリスを選んだ彼れが、如何してこの人間社會のあらゆる歪められた現狀に對して白眼しあり得たであらうかは疑ひ無きを得ない。私は彼れの作品『秋』及びそのグルウプに入れらるべき二三の作品が發表されたのを見たとき、當にかくあるべき彼れをそこに見出した喜びを持つたのであつた。然し、殘念ながら彼れはそれ以上に突き進むことをせずして韜晦——私は敢へて韜晦といふ——してしまつた。飽くまで藝術至上主義の大旆を掲げる創作家として生きやうと希つた彼れは、さうした傾向をそのまゝ押し進めて行くことには恐らく或る戰慄を感じたでもあらう。理由は『文藝的な、あまりに文藝的な』(『改造』昭和二年八月號所載『文藝上の極北』)に告白してゐるところによつて明白である。

私は、彼れと交渉のあつた無數の人々と彼れとの關係を、鐵道の邊人に、多勢で白刃を拔き連れて迫つてゐる情景が思ひ浮べられてならなかつた。それはあらゆる秘術を傾けつくして身邊に寄せつけぬ、或ひはスキを見せて手許に誘き寄せては切つて棄てる冴えた腕前を想はせるものに他ならなかつた。(但し谷崎君との場合だけは例外。)假りに彼れの少年時代の希望が實現されてゐて歷史家になつてゐたとしたならば如何であつたらう(彼れは最初歷史家になる志望だつた)。恐らく新しき日本は彼れに於いて明敏な、正しき歷史を書く一人を見出したことであつたらう。凡そ、人間といふものは、ほんの一寸したことに重大な轉機を與へられるものである。この意味に於いて彼れがその『鼻』なる作品が夏目漱石氏の賞讃を得たといふ事實に重大な意義を見るものである。

×

『或る舊友へ送る手記』に記された如く、『たとへ死別するにしても』その『妻をいたはりたく願ふ』彼れであつたことから類推して、『彼れと一緒に死なうとした『或る女人』とは夫人を指すものだと一二の友人は語つたと新聞紙は傳へてゐた。成程、夫人が貞淑たる内助者であることは屢々彼れが親ら洩らした口吻の通りに違ひあるまい。然し、餘計なお節介ではあるが、これは必ずしもさうした斷定に導く理由に乏しいと思惟せざるを得ない。『あるだけの菊投げ入れよ棺の中』——これは字句に少しく誤謬があ

るかも知れぬ、いま句集が手許に無いので暫く記憶に從ふが、彼れの傾倒して熄まなかつた夏目漱石氏が、××××夫人の死に際會しての作である。若し、先生にしてこの句作に見るだけの熱情を持つてゐるならば、何故、地位とか身分とかいふものを一擲して×××夫人と××でも何でもしなかつたかと齒掻ゆかつたことがあつた。夏目氏は××者の心理と云つたやうなものをその作品の一つで取扱つてゐるが、あれは實感で無ければならぬ、尠くともその氣持のうへで或る一線を越へたものにして初めて判り得る心理狀態であると斷定してゐたことがあつた。彼れの場合にあつては夫人以外にいろ／＼の意味に於て交渉のあつた婦人は恐らく一二にしては止まるまい。それにつけて想起されるのは、彼れがまだ學生時代に遭遇した戀愛試練のことである。その相手の婦人といふのは、私の寄寓してゐた家の娘の女學校友達で、極めて聰明な頭腦の所有者であつた。そして順當に進んでゆけば結婚といふ極めて平凡な道程を辿る筈であつたのだらうが、如何なる理由からか彼れの養家では極力警戒して果ては先方の家を彼れが訪問することさへ喜ばないやうになつた、それは彼れの實家の知合の家の娘さんだつたのである。奇緣であつたのは・その娘さんの父親であつた人が私と郷里を同じくした人であつたし、結局、その婦人は、矢張りこれも郷國を同じくする或る青年士官と結婚してしまつた、無論、二人の間には淡い、青年らしい感激性の物語が醸された以上のものでは無かつたであらうが、彼れの方の熱心には可なり私たちも惱まされたことは事實である。いよ／＼嫁ぐと決つてからは、嫁いだとなつてから一層その熱情は昂まつたやうに思へた、私の記憶にして誤認が無いならばその婦人の結婚式の前日、當時、中澁谷にゐた私のところで二人は最後の會見をしたとおもふ。私はその後、彼れから、自身も亦結婚後のことであるがその初戀の人？に何とかして會はせて貰へぬだらうかと賴まれたことがあつた、それは實現されなかつたことはつけ加へる必要もあるまい[六]。

×

『死の誘惑』と云つたやうなものは、隨分以前から彼れにはあつたやうに思へる。彼れが横須賀に奉職する決心をした動機に就いても秘かに洩してゐたことがあつたが、云はでものことだと考へられるからそれには觸れまい。私が先年出版したホヰツトマンの『草の葉』は實に彼れの所藏したマツケイ版をそのテクストとしてやつたものであつた。この原本は初め、當時アメリカ旅行から歸つて來た森戸辰男君の土産に貰つた同一のものに據つたのであつたが、人が持つて行つたまゝ遂に返戻して來なかつたので、芥川君所藏のものを借り受けて譯筆を進めたのだつた。これは書き込みや何かをしなくてはならぬので後で讓り受けてしまつたが（この頃ではどうだつたか知らぬが彼れは以前には書物を買つては讀み了るとそれを友人たちにわけてくれたものだつた。）無數の私自身の書き込みのなかに、彼れが殘したであらうと信ぜられるただ一つの痕跡がある、それは赤インキでされたアンダ・ラインに他ならぬが、その一篇の短い詩は實に『この上ない幸福な死の囁き』（Whispers of Heavenly Death）と題されたものである。それはこんな詩である。

この上ない幸福な死の囁きが、ささやいたのを私は聞く、
夜の唇音の饒舌——鳴音の合唱が、靜かにのぼつてゆく跫音——柔かに低く浮動した神秘な微風が、
見えることのない河々の漣の音——永劫に流れ、流れる急流の流れが、
(それともそれは涙の飛沫か？ 人間の涙の量り知れぬ海の？)
私は見る、正しく見る、天空の方にあたつて大きな雲の塊りを、
音もなく膨れ上りまた混り合ひつつ、それらが悲しげに、徐々に塊りをつくるのを、
時として、ぼんやりとなり、黒ずんで見えかくれする遠方の星をも一緒に。
(或る分娩、と云はうよりは——或る嚴肅な、不死の生誕、
眼もとどくことなく、國境を、
或る靈魂が越へてゆく。)

死をおもふ！ そんなことは誰れも青年時代には一度は通る道だと輕くあしらはれるならばもういふべきことは無い。奇しき因縁はこれに止まらない。私の『草の葉』の譯著に多大の關心を持つて激勵して吳れた有島武郎氏、それに著作年譜作製の勞を執つて吳れた久保田正彝君、而して芥川龍之介君、いづれも自ら死を招いて現世に於ける歩みを斷つたのは不思議と云へば不思議な一致である、その取つた手段に就いてはそれぞれの相違はあつた。一人は縊死を選び、一人は剃刀で咽喉を搔き切り、或る一人は藥物を嚥下して冷たく死の襟に飛び込んで行つた。いづれもその最後に取亂した跡を見せなかつた點にも不思議な一致があつた。

×

彼れの處女創作集『羅生門』は、その頃、俗稱ヤマカン横町の入口の日比谷ビルデイング内にオフイスを持つてゐた阿蘭陀書房が版元だつた。今のアルスの北原鐵雄君が主人だつた。その本屋は同君がハシ上げたので、何とかいふ製本屋の主人が事業一切を繼承した。が、それも後ではつぶれてしまつた。芥川君は藝術至上主義の信條の崇奉者に共通の美的感情の尊重者であると同時にまた東京人らしい瘦我慢の隨分強い方だつたから口に出しては云はなかつたであらうけれども這般の×××對×××の醜い係爭でも心を痛めたことだつたらうと察せられる。そして一方非常に義理堅い性質があつたから、當年白面の一書生の處女作集の出版を敢然と引受けた書肆の義俠的冒險に對しては深く恩義を感じてゐたに相違ない。だから騎虎の勢とは云へ、あゝした喧嘩の捲き添へを喰つたことには可なりの苦痛を感じたことだつたらう。そんなことも死期を早めた動機の一つにはかぞへられなかつたらうか。然し彼れは信賴して遺族を托するに足る良友を持つてゐるからその點は安じて瞑目してよからう。

×

私が東京を去つてしまつたりした理由で、近來彼れとは全く疎遠に打過ぎて來た。何でもこの早春の頃だつたとおもふ、大阪の朝日會館で三田文學の講演會があつたとき、偶々、講演者として下阪した小島

政二郎君に會つた、そのとき芥川君の近況を詳にすることができた。その際、神經病の專問的な醫學書を片ッ端から漁り讀むので、齋藤茂吉博士から叱責されたといふやうなことも聞いた。私の意識にフッと影のやうな暗示がのぼつたのを覺えてゐるが、然し、そのときはそれで過ぎてしまつた。ところがその後旬日を經て、これは故人と私の最後の會見となつたものであつたが、改造社の紀念講演會が同じく大阪で開催されたとき、夜晩く、それはもう一時頃だつたが、用事で大阪に出た私が一人、阪神の梅田停留場で終電車を待つてゐた際に、谷崎、佐藤兩君夫妻と連れ立つた彼れに會つて、偶然、蘆屋まで同車することができた。その終電車は隨分晩かつたにも關はらず可なり混雜してゐた。彼れも隨分と疲れてゐた樣子だつた。『その後、病氣は如何だ？』『大分いい。』と云つたやうなことを數語交はしただけだつた。蘆屋から、谷崎君の所在地である岡本まで自働車を傭つて諸君は風吹のひどい夜半を別れて行つてしまつた。別れ際に、『閑暇があつたら明日でもやつて來ないか』と誘つたが、『駄目だらう、京都へも行き度いし』と斷つた。

その夜は徹夜して谷崎君と語り明したさうだ。彼れは學生時代から谷崎君を畏敬してゐた、私などもよくそれを聞かされたものだつた。星霜十年、先般來この尊敬してゐた先輩と論陣を張つて、單騎陣頭に馬を進めるの概をもつて議論を上下するのであつたから彼れとしても感慨の深いものがあつたことだらう。議論の是非、當不當は人各各見るところに從ふ他なからうが、公平に見て、殘念ながら矢つ張りこれは彼れの方がタヂタヂの形であるのを意識してゐたに違ひあるまい。

芥川龍之介氏のこと

下島勳

芥川氏のことについては、書きたいことも隨分あるやうな氣もするが、今は雜用も多く、それに心神も疲勞してゐるので、落ちついて書くことが出來ない。これは改造社に對しまた讀者に對し、相すまぬことである。

芥川氏と私とは十二年の長い間の接觸で、單に醫者としてばかりでなく、老友として、また年こそ違へ私の師として、種々の教へを受けてゐたのである。

世間の人々は、私が醫者であるがために、直ぐ芥川氏の體質や病氣のことを聞きたがる。現に改造記者も、そんなことが注文の主要事項のやうだつた。

芥川氏の體質や病氣については、世間にイヽ加減な臆説や誤りが流布されてゐる。また種々の尾鰭がついて、肺結核だの甚だしきは精神病者とまで傳へられてゐる。これは醫者としてもまた友人としても忍びがたいことであるから、この機會においてその妄を辯じておく。

その一は肺結核説である。なるほど、あの痩せた身長五尺四寸以上、頸のたけまでひよろ長い。しかも聊か前屈の姿勢で、日本人には稀れに見る、あのバイロン卿の寫眞でも抜け出したやうな、眼の麗はしい白皙の美貌家に接した人なら、誰でもが一見、肺でも惡るさうな第一印象をうけるのに不思議はない。現にさう云ふ私でさへ、初對面がそれであつた。

併し見ると實際とは違ふことがある。殊に藝術家の體格や體質は、餘程注意しないと、見そこないに終ることがある。尤も芥川氏などは、幼年時代に頭腦の發達が早い方で、斯ういふ人の常として兎角、肉體の方は餘り健康ではなかつたらしい。よく風邪をひく、氣管支加答兒に罹る。と云つたやうなことから、ほんたうに肺でも惡くすると困るといふので、もとの高輪病院の院長瀬脇ドクトルの注射治療を受けたことがあるさうである。

先年支那視察に行かれたときは、感冒後の氣管支加答兒が全治しないのを、種々の都合で決行した。案じた如く大阪の宿で發熱する。無理に船に乘つて上海へ上陸早々肺炎を起して入院する。と云つたやうなことではあつたが、それも間もなく治癒して、あの困難な支那旅行を終へて歸つたほどである。

その後も流行感冒に罹つたこともあるが、大した後害など貽さずに治癒してゐる。だから、假りに少年時代に輕い肺尖加答兒ぐらいやつたことがあつたにしても、少くも私の知つてからの芥川氏に、肺結核の症狀のなかつたことだけは、保證出來る。

その二は胃のアトニーである。この病氣は三年ばかりこのかたのことで、始めは獨立してゐたわけではなく、神經症狀に伴なつてゐた。即ち神經症狀のよいときには胃もよく惡いときにはいけないと云つたやうなことで、胃のアトニーとして症狀の獨立したのは、最近一年ぐらいのことである。

食事は隨分注意する方で、まう二年ぐらい一日二食であつた。酒は飮まず特別これと云ふ嗜好を持つてゐない同氏にとつての唯一の嗜好は莨であつた。莨は洋の東西を問はず何でも用ひられたが、晩年はおもに日本製であつた。殊に創作は多く夜中になるので、朝の莨の吸ひ殻の量は、讀者の想像におまかせする。だから、芥川氏の莨の消費量は恐く創作に比例したものと云つても差し閊へないであらう。

時おりは苦い忠告を試みたが、こればかりはと哀願したものである。云ふまでもなく藝術家の生命は創作である。よし胃はおろか、體全體に良くない影響があるとしてからが、創作を妨げるのは忍びないことである。芥川氏の場合など實にそれであつた。

その三は痔疾である。これは脫肛として現はれる種類のもので、寒い夜中の勉强が過ぎたり、或は氣候の惡い時分に力作をしたりするときに起る。時々疼痛の劇しいため苦しむこともあるが、出血したり或はコンニヤクやパップなどで温めて、安臥してゐれば充血が去つて收縮する程度のもので、手術の必要ありなど認めたことは一度もない。

この起り始めは胃病と同時ごろか、或は少し前であつたか判然しない。

その四は神經衰弱である。芥川氏の神經衰弱は頗る有名なものである。だが、同氏の神經衰弱を識る前に是非知つておかねばならぬのは、同氏がもつ腦神經の作用である。私は私の乏しい經驗の上において、異常な神經の作用を持つものも少しは識つてゐた。併し未だ嘗て芥川氏の如き異常な神經の所有者に接したことはない。西歐のことはいざしらず我日本にあつて、天才の有無など餘り問題にしなかつた私が、一たび芥川氏に接してからは、始めて天才と云ふものもあるものであると云ふことを識つたのである。なぜかなら、それは單に謂ゆる頭腦がイイとか記臆力が非常に發達してゐるとか云ふ種類のものでなく、異常の上の異常、寧ろ不可思議な作用を持つてゐたからである。このことについては、何れ書くつもりでゐるから、ここには唯一二の例を擧げるに止める。

試みに芥川氏の讀書するところを一見したもので、その速度に愕かぬものはないであらう。それは普通に云ふ早さなどではなくて、邦文ものなどは、恰も銀行會社の職員が計算表でもめくつてゐるのと同じやうである。また雜誌の小說などは、人と談話をしながらサッサと讀了し、これでゐながら確實なことは愕くべきものがある。

嘗て大阪の新聞社に用事があつて出張したときの如き、京都に一週間ばかり滯在を見こんで、部厚な洋書を五六册携帶したのであつたが、列車が京都の停車場へ到着するころは、のこらずそれを讀みつくして、滯在中は京都にゐる友人から借りて讀んだと云ふやうな逸話がある。

また元祿以後明治大正に至るまで著名な俳人の俳句の代表的のものなどは、年代を逐つて記憶しをり、俳談の場合などには、隨分人を愕かすことがあつた。室生犀星氏など時々、——嫌やになつてしまふと、嘆聲を發したこともある。

故鷗外先生も當時記憶力の雄をもつて聞へた人であるが、迚も芥川氏のやうな異常性はなかつたらしい。

氏は自分でよく云つた。——俺の神經は細くて弱いが、腦髓の丈夫なことは誰にもまけないと、これは一寸非科學的のやうに聞こえるが、實は芥川氏の腦神經はこれで說明が出來るのである。假令ば二晝夜三晝夜の不眠不休も、腦そのものは大した疲勞を感じない。即ち腦の中樞はまだ充分餘裕があるのに、神經の疲勞が來ると云ふやうなわけである。頭痛などといふことは、一度も聞いたためしがない。

時として、——俺は氣ちがいになるかも知れない。などと云ふこともあつた。さう云ふときに私は、——その理智の飽くまで發達してゐる頭腦と、その聰明さでは、迚も氣ちがひなどにはなれ得ないと、云つたものである。だから芥川氏の神經衰弱は、普通の意味の神經衰弱などとは大いにその趣きを異にしてゐる。況んや、精神錯亂などとはとんでもない誣妄と云はねばならぬ。その證據は、「舊友に送る手記」でも遺書でも、また「西方の人」などを讀んでみても略ぼわかることであらうと思ふ。

遺傳については近いところに存在する。併し芥川氏の如き人にとつて、それが果して重大な意義をもつだらうか、なぜなれば、精神病の

遺傳或は神經遺傳などと云ふものは、僞はいゝ加減なもので、臨床的に檢べたら、遠近の差こそあれ必ず出てくると云ふても、過言とは思はれぬ。要するに人間は或る意味において、悉く精神病者たり得べき素質を持つてゐるからである。

芥川氏は稀れに見る品行方正の藝術家であつた。また芥川氏は菊池氏の謂ゆる文壇第一の學者でもあつた。このかくれもなき博學賢明の小說家に、自殺問題について批判のないわけがない。現に彼の有名な某將軍の自殺にも、或は某文學者の死にも、禮讃することの出來なかつた芥川氏が、恬然として自殺するに至つたのは、果して何を語つてゐるのであらうか、？ 謎は自然には解かるべきである。

芥川氏終焉の日
驅けつけて先づ心臟を聽かんとすれば

懐ろの手紙はねとぶ浴衣かな

絶望

カンフルの注射の効ひもなかりけり

檢屍を終へて

安らけき永久の眠りよ草の雨

小穴隆一君枕邊に畫架を据ゆ、雨暗憺

死貌描く畫の灯や夏の雨

その夜

灯を通夜をとしもなく明け易し

（二、八、三）

芥川龍之介の死

萩原朔太郎

1

七月二十五日。自分は湯ケ島溫泉の落合樓に滯在してゐた。朝飯の膳に向つた時、女中が去りげない風でたづねた。

「小說家の芥川といふ人を知つてゐますか？」

「うん、知つてる。それがどうした？」

「自殺しました。」

「なに？」

自分は吃驚して聞ひかへした。。自殺？　芥川龍之介が？　あり得べからざることだ。だが不思議に、どこにかこの報傳の根底には、否定し得ない確實性があるやうに思はれた。自分はさらに女中に命じて念のために新聞を取り寄させた。けれども新聞を見る迄もなく、ある本能の異常な直覺が、變事の疑ひ得ないことを斷定させた。

何事か、ある説明のできない不安な焦燥と、恐怖に似た興奮の感情とが、火のやうに自分の全神經を驅けまはつた。彼、つい旅行に出る數日前に、あれほど親しく逢つて話した彼が、眞實にも自殺をしたのだ。何たる意外、何たる青天の霹靂だろう。むしろ自分は、荒唐無稽の夢にうなされてるやうな感じもした。しかし心の隅の一方では、どこかまたそれが豫期されて居り、或る自覺のない意識の影で、内密のものに觸れたやうな思ひもした。

「やつたな！」

新聞の寫眞を見た時、悲痛に充ちた自分の心は、唇を噛んで低く呻いた。自分は苦しくなり、恐ろしくもなつてきた。頭腦が急に充血して、何事も考へることができなくなつた。何かしら、これは大變な事件だと思つた。ぢつとしてゐる場合でないと思つた。そして夢遊病者のやうに立ちあがり、半ば跣足で川上にある旅館をたづねた。その旅館（湯本館）には尾崎士郎君の夫妻が居た。尾崎君は吃驚し、呆然とし、それから異常な感激にうたれて立ちあがつた。最近尾崎君は、私を通じて芥川君の人格につき知る所が多かつたのである。

2

何故に芥川龍之介は自殺したか？　自殺の眞原因は何であつたか？　思ふにそこには、いろ／＼な複雜した事情がある。故人の多數の友人たちは、種々の異つた見解から、夫々の意見を語るだらう。自分について言へば、自分は彼の多數の友人——實に彼は多數の友人と交つてゐた——の一人であり、しかも交情日尚淺く、相知ることの最もすくない仲であつた。しかもただ、自分が彼について語り得る唯一の權利は、あらゆる他のだれよりも、すべての彼の友人中で、自分が最も新しい、最近の友であつたといふことである。

この「最近の友」といふことに、自分は特に深い意味をもつて言ふのである。何となれば彼の最近の作風には、一の著るしい變化と飛躍とが見られるから。そしてこの心的傾向には、しばしば私と共鳴同感するものを暗示するから。何故に彼が、あの文壇の大家芥川龍之介君が、私の如き非才無名の一詩人に對して特別の好意と友情とを——時としては過分の敬意さへも——寄せられたかといふことは、今にして始めて了解出來たのである。

3

室生犀星君は、最近における故人の最も親しい友であつた。室生君と芥川君との友情は、實に孔子の所謂「君子の交り」に類するもので、互に對手の人格を崇敬し、恭謙と、禮讓と、德の賞讚とを以て結びついてた。けだし室生君の眼からみれば、禮節身にそなはり、敎養

常識に富む文明紳士の芥川君は、正に人徳の至上観念を現はす英雄であつたらうし、逆に芥川君の眼から見れば、本性粗野にして強情にならはず、直情直行の自然児たる室生君が、驚嘆すべき英雄として映つたのである。即ちこの二人の友情は、所謂「反性格」によつて結ばれた代表的の例である。（室生君の最近の生活や藝術が、同様にまた彼自身の反性格であることも、此所でついでに一言しておく。）

自分と芥川君との友誼は、室生君よりも尚新しく、漸くこの三年以来のことに属する。自分は芥川君の死因について書く前、この短かい年月の間における、我々の思ひ出深い交情を追懐して見たいと思ふ。

4

私が田端に住んでる時、或る日突然、長髪痩軀の人が訪ねて来た。

「僕は芥川です。始めまして。」

さういつて丁寧にお辭儀をされた。自分は前から、室生君と共に氏を訪ねる約束になつてゐたので、この突然の訪問に對し、いささか恐縮して丁寧に禮を返した。しかし一層恐縮したことには、自分が頭をあげた時に、尚依然として訪問者の頭が疊についてゐた。自分はあわててお辭儀のツギ足しをした。そして思つた。自分のやうな書生流儀で、どうもこの人と交際ができるかどうか。自分はいささか不安を感じた。

しかし聰明な訪問者は、直ちに私の不安を見ぬいた。私のおどおどしてまごついてる様子をみると、彼は直ちに態度をかへ、急に平易なざつくばらんな調子になつて、心おきなく書生流儀で話しかけた。この時以来、自分は芥川君に壓倒された。すくなくとも自分より「上等の人物」から、直接で壓倒されてることを感じ、一種の反抗的な氣分に驅られた。そしてこの卑屈な反抗心は、その後の交際に於てさへも、ずつと最後まで續いてきた。いつも私は彼の前で、故意に負けまいとする肩を張つた。（いかに私が、みじめな愚劣の奴であつたか！）

5

私が彼を訪問した時、私が訴へんとするすべてのことを、彼は前からちやんと知つてた。その頃自分は、思想上や藝術上のことで、ひどく絶望的な惱みをもつてゐた。自分はそれを語らうとした。だが芥川君は聰明にもそれを豫知して居り、私が口を利かない前に、先廻りをして話しかけた。そして彼一流の豐富の話題で、自分の考へてること、惱んでゐることに議事を關連させ、最後に結論として、暗に私を鼓吹し、慰藉し、勇氣と力をあたへるやうに仕向けてくれた。

所が、これがまた私にとつて不滿であつた。なぜなら私は、さうした芥川君の態度について、先輩が後輩に示す所の、教訓や憐憫を感ずるからだ。もし芥川君が、眞に自分の同感者であり、同病者であるならば、我々の會話は魂の深い所で、親友としての握手を換すべきだ。然るに芥川君の態度は、どこか自分を高い所におき、單なる智的聰明さを以て人を見てゐる。故にその同情は憐憫であり、侮辱であるにすぎないだらう。

之れがまた、いつも自分の反抗心を驅り立てた。彼、年少者の分際として、より年長者の自分に對し無禮であらうといふ意識か、故意に

また彼の前で肩を怒らさした。何よりも私は、彼の「聰明さ」が氣に入らなかつた。彼は單に聰明であり、そして聰明であるにすぎないといふことが、私の芥川君に對する不滿であつた。

あゝ！ しかしながら今日、いかに私が明盲の鈍物にすぎなかつたことだらう。ずつと後になつてから、私は漸く始めて、少し宛芥川君の眞人物を理解し出したのである。

6

芥川君は、詩に對しても聰明な理解をもつてた。彼は佐藤春夫、室生犀星、北原白秋、千家元麿、高村光太郎、佐藤惣之助等の諸君の詩を、たいてい忠實に讀破してゐた。のみならず堀辰夫、中野重治、萩原恭次郎等、所謂新進詩人の作物にも、一通り廣く目を通してゐた。

彼はよく詩壇を論じ、詩について批評した。そして彼の見識は、殆んど大抵の場合に正鵠だつた。この公平な理解と見識では、詩壇の最も高い純粹鑑賞に劣らなかつた。しばしば芥川君は、私の古い詩について意見を述べ、表現技巧の缺點を指摘された。彼はいつも大膽に私に言つた。「君の詩は未完成の藝術だ」と。そして自分は之れを承諾した。なぜならば私の詩は、彼の指摘によつて實際缺點だらけの物に見えたから。

7

或る日の朝、珍らしく早起きして床を片づけてゐる所へ、思ひがけなく芥川君が跳び込んできた。此所で「跳び込む」といふ語を使つたのは、眞にそれが文字通りであつたからだ。實際その朝、彼は疾風のやうに訪ねてきて、いきなり二階の梯子を驅け登つた。いつも、あれほど禮儀正しく、應接の家人と丁寧な挨拶をする芥川君が、この日に限つて取次ぎの案内も待たず、いきなりづかづかと私の書齋に踏み込んできた。

自分はいささか不審に思つた。平常の紳士的な芥川君とは、全で態度がちがつてゐる。それに第一、こんなに早朝から人を訪ねてくるのは、芥川君として異例である。何物が起つたかと思つた。

「床の中で、今、床の中で君の詩を讀んで來たのだ。」

私の顏を見るとすぐ、挨拶もしない中に芥川君が話しかけた。それから氣がついて言ひわけした。

「いや失敬。僕は寢卷をきてゐるんだ。」

成程、見ると寢卷をきてゐる。それから面喰つてゐる私に對して、ずん〳〵次のやうなことを話し出した。この朝、彼はいつもの通り寢床に居て、枕元に積んである郵便物に目を通した。その中に詩話會から送つてくる「日本詩人」といふ詩の雜誌があつた。始めから一通り讀んで行く中に、私の「鄕土望景詩」といふ小曲に來た。それは私の故鄕の景物を歌つたもので、鬱憤と怨恨とにみちた感激調の數編を寄せたものであつたが、彼がその詩を讀んで行く中に、やみがたい悲痛の感動が湧きあがつてきて、心緒の興奮を押へることができなくなつた。そこで勃然として床を蹴り、一直線に私の所へ飛んで來たのだといふ。さう語つたあとで、顏も洗はず衣服も換へず、朝寢姿で訪ねたことの非禮を謝罪した。

この感激にみちた話は、私を非常に悅ばした。自分のつまらない作品が芥川君の如きやかましやの嚴正批評家に對して、それほどの實感的興奮をあたへたといふことは、たしかに非常の重大事でなければならない。私は感激して悅んだ。けれども同時に何かしら腑に落ちない妙な疑問が、新しく心の底にきざしてきた。

我々の詩について——新しい詩壇の詩について——芥川君が聰明な理解と見識をもてることは、前述べた如く自分の常に敬服する所である。(現文壇で我々の自由詩が解る人は、室生犀星、佐藤春夫の詩人小說家を除いて、實に芥川龍之介一人あるのみだつた)槪ねの場合に於て、彼の詩の批判は正しかつた。自分はその「批判」に敬服してゐた。けれども彼の批判態度は、常に著るしく客觀的だつた。何よりも彼は、詩の表現効果について意見を述べた。丁度小說の價値批判が、描寫(表現)の巧拙にかかるやうに、詩についても同じ描寫の効果性(即ち表現技巧)について求めた。即ち彼の批判態度は、純粹に鑑賞的であり、理智的であり、主觀を混じない美學的觀照主義のものであつた。

だから自分は、常に芥川君について考へてゐた。要するに彼は、聰明なる「詩の鑑賞家」である。どれが善き詩であり、どれが惡しき詩であるかについて、彼は正しく判別批判する。しかしながらそれだけである。彼自身は詩をもたない。彼自身は詩人でない。故にすべての詩は、彼にとつて單に「批判さるべきもの」であり、何等「感動さるべきもの」でない。丁度あの所謂劇通が、劇に對してもつ興味のやうに、單にその藝術を「批判する」のであつて、一般觀客の如く、眞にそれを樂んだり、感激したりするのではない。彼自身は劇の外に居て、劇を客觀的に見てゐるもの、即ち所謂「批評家」にすぎないのだと。そしてこの點から、自分は彼を室生君や佐藤春夫君——その人たちは疑ひもなく詩人である。彼等は詩の鑑賞家であると共に、自分自身がまた詩を持つてゐる作家である。——と區別した。

かうした私の見解は、その朝の出來事から動搖してきた。實にその心緒に詩を持たない人物が、どうしてそんなにも主觀的に、人の詩によつて感動流涕することがあり得やうか。この日の感激に燃えた芥川君は、平常の鑑賞的な美學者ではなく、そんな批判的の態度を忘れてしまつた所の、眞の「詩に溺れてゐる詩人」であつた。自分は彼の眼の中に、かつて知らない詩人的の情熱を見た。そして或る解決のできない疑問が、この不思議な人物について起つて來た。それはずつと後後までも、彼の自殺の直前までも、遂によく解くことのできなかつた、或る恐ろしい意味をもつた「神秘の謎」であつた。

8

そのこと以來、自分の芥川君に對する見解には、或る新しい動搖と變化が生じて來た。そもそもこの「理智の人」であり、洗錬された「禮節の人」である——として一般に知られてゐる——人物の內臟には、どんな不思議な情熱が火を噴いてるのか。その情熱の炎は、どこか地殼の深い內部で、地獄の硫黃の如く燃えてるやうに思はれた。自分の新しき友に對する興味は、それの秘密な本質を探險すべく、友情のＡＤＶＥＮＴＵＲＥによつて驅り立てられた。

しかしながら運命が、不幸にも我々を別離させた。そのことあつて後、まもなく自分等の家族は田端を去り、鎌倉の方へ移轉してしまつた。そして距離のへだてから、自然に交情が疏くなつてきた。けれども尚、自分は作品を通じて「眞の芥川君」「詩人としての芥川君」を見やうと努めた。自分は月々の雜誌をよんだ。そして、だがその結果は不滿であつた。作品に現はれた芥川龍之介は、依然として冷靜なる「理智の人」であり、常識的判斷に富んだインテリゲンチュアにすぎなかつた。彼は透明な叡智を以て、あらゆる自然の實相を見通してゐた。だが彼の眼鏡は、いつもただ素通しであつた。何物の影も、その觀照を曇らせない。しかしながらただ、彼はそれを「見る」だけである。そして「感ずる」ことをしない。故に彼の觀照が澄めば澄むほど、素通しの硝子における陰影の缺陷が著るしかつた。

當然、私はかくの如き文學に不滿をもつた。文學上における主觀主義者――それ故にまた浪漫主義者――としての私の立場は、芥川君の「あまりに文藝的な」「あまりに觀照的な」態度を好まなかつた。私の言語の意味に於て、「詩」といふことは主觀性を觀念してゐる。だから主觀性のない文學は、私の意味での「詩」でない上に、自分の藝術上の立場として、對蹠的な地位に敵視するものでなければならぬ。そして芥川君の文學は、正にこの點で自分の敵――しかも最も强力の敵。それへの戰で最大の名譽を感ずるほど、それほど偉大で强力な敵。――として感じられた。特に月々の「文藝春秋」に出すエピグラム風の文字の美は、機智のために機智を弄する弄筆者流の惡皮肉で、憎惡的にさへ不滿を感ぜずに居られなかつた。

しかしながら自分は、不思議にまたその反對の好意を常に同じ作者に捧げた。何となれば彼の中には、丁度我々の詩が求めてゐるやうな「新鮮さ」や、特殊な鋭い「先覺さ」やがあり、或る說明できない神經の尖鋭が、潑溂たる言語の中で泳いでゐるのを見るからだ。實に今日の老廢した、あまりに老朽衰廢した日本の既成文壇で、芥川君の如く「若さに充ちてゐる」作家はない。彼の文學作品ほど、それほど詩人的な若さに充ちてるものが他にあるか。もし「詩」といふ言葉を、かりに「魂の若さ」と考へれば、すくなくともこの芥川君は詩人である。(實際に言つて詩人は、精神の永遠的な少年である。この同じことを芥川君自身も言つてる。改造八月號。)

芥川君の文學は、そのあまりに文藝的であると共に、またあまりに少年的な、少年的であることに於て著るしい。今日の新しき日本詩壇が、芥川君と同趣相ひ通ずるのも、實にただこの一點にある。そして芥川君以外の既成大家等が、我々の新しい詩と交渉をもたないわけも此所にあるのだ。實に芥川君の文學は、少年客氣の文學だつた。丁度、彼のあの容貌がさうである如く、どこかに子供らしい、元氣の好い、何でも新しいものや舶來のものに憧憬をもつ、鮮新無比の感覺がおどつてゐる。

それ故に芥川君は、私にとつて一面の「敵」でありながら、同時にまた一面の「愛人」だつた。もし私が、私の言語における「詩」といふ定義を換へるならば、彼は疑ひもなく詩人――しかも最も若き時代の詩人―であつた。しかし私は强情だつた。私の中の最も微妙な本能は、頑として彼の詩人でないことを、したがつて彼の作品の不滿で

あることを主張した。

9

　海に面した鵠沼の東家に、病臥中の芥川君を見舞つたのは、私が鎌倉に居る間のことだつた。ひどい神經衰弱と痔疾のために、骨と皮ばかりになつてる芥川君は、それでも快活に話をした。不思議に私は、その時の話を皆おぼえてゐる。病人は床に起きあがつて、殆んど例外なしに悲慘である所の、多くの天才の末路について物語つた。「もし實に天才であるならば、彼の生涯は必ず悲慘だ。」といふ意味を、悲痛な話材によつて斷定した。それから彼は、一層悲痛な自分自身を打ちあけた。何事も、一切の係累を捨ててしまつて、遠く南米の天地に移住したいと語つた。

　さうした芥川君の談話は、異常に悽愴の氣を帯びてゐた。自分は彼の作品について、時にしばしば一種の鬼氣を——支那の言語で、丁度「鬼」といふ字が表象する所の悽愴感を——感じてゐた。實に私は、至る所にこの「鬼」の形相を見た。彼の容貌や風格に。そのユニックな文字や書體に。そしてとりわけ作品や會話の中に。

　丁度、ひどい憂鬱の厭生觀に憑かれてゐた私は、談話のあらゆる本質點に於て彼と一致し、同氣あひ引く誼を感じた。だが私は、彼の厭生觀の眞原因が、どこにあるかを判然と知り得なかつた。多分その絕望的な病氣と、それに原因する創作力の衰弱とか、事情の主なるものであると思つた。且つ一つには、例の「人の心を見通す」聰明さから、彼一流の思ひやりで、たまたま私と合槌を打つてるのだとも考へた。實にこの一つの邪推は、彼に對する交際の第一日から、私の腦裏に根強く印象されたものであつた。彼はあらゆる聰明さで、あらゆる人と調子を合せて談話する。だがその客が歸つたあとでは、けろりとして皮肉の舌を出すだろう。そしていかに對手が馬鹿であり、愚劣な興奮に驅られたかを、小說家特有の冷酷さで客觀してゐる。

　この考は、たしかに不愉快なものであつた。だが私は、かつて伊香保で知己になつた谷崎潤一郎氏に對しても、やや同樣の邪推なしに居られなかつた。けだし私は、室生犀星以外のいかなる文壇人とも交際がなかつた上、特に小說家については全く未知の世界に屬してゐた。小說家は——あらゆる小說家は——私にとつて「星からの人類」だつた。彼等と交はることは私にとつてちがつた宇宙への觀察だつた。自分たち詩人の仲間は、すべてが單純な情熱家であり、客觀的な觀照眼を殆んどもたない。詩人は常に醉つて居り、醉の主觀境地でのみ話をする。然るに小說家は、常に何事に對しても客觀的で、冷靜な觀察眼をはなつてゐる。だから小說家と話をする時、自分等の倶樂部と全くちがふ、冷酷にまで氷結された空氣を感ずるのだ。そのちがつた空氣は、意地の惡い觀察の眼をもつて、ぢろぢろと自分の醉態を眺めてゐる。そこに丁度、酒に醉つた者が醉はない人々の中にゐて、意地惡く狂態を觀察されるやうな、一種不愉快な自覺が生ずる。

　芥川君に對する時、いつも自分はさうした不快さ——觀察されるものゝ不快さ——を、本能の微妙な觸に直感した。それからして自分は、時にしば〳〵彼を「意地惡き皮肉の人」とも考へた。けれども之れは、小說家について全く知らない私が、一般の習性となつてる小說

家的本能（觀察本能）を、たま／＼初見の谷崎君や芥川君について邪推したものにすぎなかつたのだ。彼等は決して、そんな意地惡き觀察をしてゐるのでない。たゞ態度が、職業的に習性となつてるその小說家の態度が、ある俗痛な——酒に醉はない——觀察本能を、我々ちがつた世界の人間に印象させるにすぎないのだ。

談話が徐ろにそれたが、最後に、別れる時、前言の一切を取り消すやうな反語の調子で、彼は印象強く次の言語を繰返した。

「だが自殺したい厭世論者の言ふことなんか、皆ウソにきまつてゐるよ。」

それから笑つて言つた。

「君も僕も、どうせニセモノの厭生論者だ。」

11

芥川龍之介は、いよ／＼私にとつて不可解の謎。むしろ神秘的な人物にさへなつてきた。彼は「思ひやり」と人情とに充ちた、愛すべく懷しき人のやうでもあり、反對に冷酷で意地惡き人のやうにも感じられた。何よりも不可解なのは、一面極めて冷靜なる理智の人でありながら、一面狂氣じみた情熱に內燃してゐる人のやうであつた。彼は常識的な人物でありながら、どこにか驚くべく超常識な、アナアキスチックの本能感をかくしてゐる。常に彼の作品は、二二ヶ四で割り切れる所の、あまりに餘情なき理智的合理物でありながら、しかも言語の或るかくれたる影に於て、ふしぎに神秘的な「鬼」を感じさせる。

何よりも彼の藝術は、一面に於て「典型的な小說家」でありながら、一面に於て「典型的な詩人」であることだつた。そして小說家といふ語の典型と、詩人といふ語の典型とは、私の定義に於ては全く矛盾した、兩立できない反極に屬してゐる。彼は果して詩人だらうか？それとも所謂小說家の範疇だらうか？

自分が芥川君と別れてゐる間、再三この疑問について考へた。そして結局、次のやうなはつきりした斷定に到達した。

「芥川龍之介——彼は詩を熱情してゐる小說家である。」

その頃、雜誌「改造」の誌上に於て、彼の連載してゐる感想「文藝的な、あまりに文藝的な」を讀むに及んで、この感はいよいよ深くなつて來た。その論文に於て、彼はしきりに「詩」を說いてる。（もちろん彼の意味する詩は、形式上の詩——敍情詩や敍事詩の韻文學——でなく、一般文學の本質感たるべき詩、即ち「詩的精神」を指してゐるのだ。私がこの文中でしばしば言つてゐる「詩」の意味も、もちろん之れに同じ。）芥川君のあの論文、及び最近における彼の多くの感想をよんだ人は、いかに彼が純粹な詩の憧憬者であり、たゞ詩的なものの中にのみ、眞の意味の文學があり得ることを、必死に力說してゐるかを知るだらう。

自分は不讀にして、芥川君の以前の文學觀を知つてゐない。しかし最近の如く、彼が詩に深い接觸をもち、詩的の精神に憧憬し、殆んどそれによつて文學觀の本質に突き入らんとするが如きは、恐らくかつて見無かつた所だらう。自分の推斷する所によれば、最近の芥川君はたしかに一轉期に望んでゐた。彼の過去における一切の思想と感情とに、ある根本的の動搖があり、新しき生活の革命に入ろうとする、

けなげにも悲壯な心境が感じられた。そして實際、この點では多少その作品にも現はれてゐる。たとへばあの死際でニヒリズムの影が濃い「河童」や、特に最近の悲痛な名作「西方の人」やに於て。

けれども自分は、依然として尚芥川君の「詩」に懷疑を抱いてゐた。けだし芥川君は——自分の見る所によれば——實に詩を熱情する所の、典型的な小說家にすぎなかつたから。換言すれば、彼自身は詩人でなく、しかも詩人にならうとして努力する所の、別の文學者的範疇に屬してゐるのだ。實に詩人といふためには、彼の作品は（その二三のものを除いて）あまりに客觀的、合理觀的、非情熱的、觀照主義的でありすぎる。特にその「文藝春秋」に連載された「侏儒の言葉」や、私の所謂印象的散文風な短文やを見ると、いかに彼の文學本質が、詩人といふに遙かに別種の氣質に屬するかを感じさせる。しかも芥川君は、自ら自稱して「詩人」と呼び、且つ稱して「僕は僕の中の詩人を完成さきるために創作する」と主張してゐる。（改造所載）。

かうした芥川君の觀念は、たしかに詩の本質感で誤謬をもつてる。すくなくとも私の信ずる所は、芥川君と「詩」の見解を別にする。それで私は、いつか適當の機會をみて、このことで芥川君と一論戰をしやうと思つた。丁度その頃、雜誌「驢馬」の同人を主とし、室生、芥川の二君を賓とするパイプの會が上野にあつた。私はその機會をねらつた。だが不運にして芥川君は出席されず、歸途に驢馬同人の諸君に向つて、大に私の論旨を演說した。「詩が、芥川君の藝術にあるとは思はれない。それは時に、最も氣の利いた詩的の表現、詩的の構想をもつてゐるだが。無機物である。生命としての靈魂がない。」私はさういふ意味のことを、可成大膽に公言した。

11

それから暫らくして、或る夜、突然芥川君が訪ねてきた。その夜折あしく、私の所に多數の集會があつた爲、殆んど話をすることもできずにしまつた。その上に芥川君は、小穴隆一君や堀辰夫君等の、大勢の若い人たちと一所であつた。彼は土産に上等のシャンパン酒を置いて歸つた。（今から考へると、このシャンパン酒は彼の死前の形見だつた。）

しかし芥川君が訪ねてきた時、私の顏を見るとすぐに叫んだ。
「君は僕を詩人でないと言つたさうだね。どういふわけか。その理由をきかうぢやないか？」
語調も見幕も荒々しかつた。電燈の暗い入口であつたけれども、かう言つて私に詰め寄つた時の芥川君の見幕は可成すさまじいものであつた。たしかにその時、彼の血相は變つてゐた。かくし切れない怒氣が、その挑戰的な語調に現はれてゐた。

一瞬間！　ほんの一瞬間であつたけれども、自分は理由なしに慄然とした。或刃物のやうなものが、ひやりとして胸に突き出した恐怖を感じた。彼の背後には、大勢の若い壯士が立つてた。イザといへば總がかりで、私に摑みかかつてくるのだと思つた。「復讐だ！　復讐に來やがつた。」實に或る一瞬間、自分はさう思つて觀念した。

12

數日後、今度は自分の方から芥川君を訪ねて行つた。丁度先客と對話中であつた彼は、ひどく憔悴して見えた。何となく眼に活氣がなく、悲しくやつれてゐるやうに見えた。だが私は例の調子で、對手の氣分にもかまひなく、無遠慮にずばずばと放談した。漸く、その中に彼の顏には、平常の明るい活氣が現はれてきた。自分はこの日の印象ほど、芥川君の眼における少年らしさ、風貌における書生らしさを見たことがない。實に彼はその病弱の體軀の中に、無限の精力に溢れた「少年客氣の勇」をもつてゐたのだ。

先客が歸つたあとで、彼は再度、前の日の鋭どい質問を繰返した。

「君は僕を詩人でないと言つたね。どういふわけだ。も一度説明し給へ。」

だが今日は非常に落付いてゐた。聲はむしろ沈痛にさへしづんでゐた。そこで自分は、諄々として前からの考を披瀝した。

「要するに君は典型的の小説家だ。」

自分がこの結論を下した時、彼は悲しげに首をふつた。

「君は僕を理解しない。徹底的に理解しない。僕は詩人でありすぎるのだ。小説家の典型なんか少しもないよ。」

それから詩と小説との本質感の相違について、我々はまた暫らく議論した。そして遂に自分は言つた。自分が、自分の立場としての文學論を進めて行くと、究極して芥川君は敵の北極圏に立つことになる。文學上の主張に於て、遺憾ながら我々は敵であると。

「敵かね？　僕は君の。」

さう言つて彼は寂しげに笑つた。

「反對に」

と彼はさらに言ひつゞけた。

「君と僕ぐらひ、世の中によく似た人間は無いと思つて居るのだ。」

「人物の上で……或は……。でも作品は全くちがふね。」

「ちがふものか。同じだよ。」

「いや。ちがふ。」

我々は言ひ爭つた。しかし仕舞ひに、彼は私の強情に愛素をつかした。そして怨みがましい聲で言つた。

「僕は君を理解してゐる。それに君は、君は少しも僕を理解しない。否。理解しやうとしないのだ。」

その日の彼は、あらゆる點に於て深い悲痛の感をあたへた。聲の調子そのものから、非常に沈痛の響をもつてた。彼はいろいろなことを訴へた。どんなに自分が、アナアキスチツクの自由に憧憬してゐるか。本質的な氣質に於ては、むしろ遙かに私（筆者）以上のアナアキストであること。（芥川君は死ぬ少し前、白秋氏の「近代風景」といふ雜誌に私の評論を出してる。その評論で彼は、私を代表的な詩人的アナアキストだと評してゐる。）それから妻子や家庭やの一切を捨て、自由な漂浪者の群に入りたいこと。室生犀星君の如く、感情の趣くままに自由な本能的行動をしたいこと。すべてそれらの自由にまで、いかに必死的な熱情をもつて過去を一貫したかといふこと。しかも遂に何物も、何物の自由も自分には絶望であつたといふことを、悲しい沈痛の語氣を以てかき口説いた。

すべて此等の話をきいてる中に、私は涙ぐましく感傷的になつてき

た。そして從來の交際で、未だかつて知らなかつた或る新しい發見が、この天才的な文學者の本質にひそんでゐることを、朧げながらも自覺して慨然とした。實に芥川君が、それほど眞の詩人的な情熱家であることを、かつて私は氣がつかなかつた。愚劣にも私は、彼の「聰明さ」についてくだらない猜疑をした。彼は私と語るために、故意に話の主題を合せて、その心にもない人生的感傷論をするのだと邪推した。もつと甚だしくは、談話の後で舌を出す皮肉な惡漢——意地の惡い諷刺家——とさへ想像した。

　いかに腹立しく、私が飛んでもない間ちがへをしたことだらう。芥川君の如く單純で、純粹で、子供らしく生一本の人間がどこにあるか。ずつと前から、私がこの人に對して抱いてゐた、或る理由のない漠然たる愛慕の感は、實に彼の人物が有するこの本質點に存してゐたのだ。今思へば、そもそもの交情の始から、彼は何の術ひも氣取りもなく、純眞生一本の心でもつて、滿腔の熱情を私に向つて打ち明けてたのだ。然るに私の方では、何といふ卑劣な愚かしさだらう。必要もない肩を張つたり、無意味な猜忌の眼を向けたり、馬鹿げた警戒をしたりしてゐた。芥川君が死去の報に接した時、自分はむしろ彼の前に、舌を噛んで慚死する恥を感じた。

13

　その夜さらに、室生犀星君と連れだち、三人で田端の料理屋に鰻を食べた。その時芥川君が言つた。

「室生君と僕との關係より、萩原君と僕との友誼の方が、遙かにずつと性格的に親しいのだ。」

　この芥川君の言は、いくらか犀星の感情を害したらしい。歸途に別れる時、室生は例のずばずばした調子で、私に向つて次のやうな皮肉を言つた。

「君のやうに二人の友人に兩天かけて訪問する奴は、僕は大嫌ひぢや。」

　その時芥川君の顏には、ある悲しげなものがちらと浮んだ。それでも彼は沈默し、無言の中に傘をさしかけて、夜の雨中を田端の停車場まで送つてくれた。ふり返つて背後をみると、彼は悄然と坂の上に一人で立つてゐる。自分は理由なく寂しくなり、雨の中で手を振つて彼に謝した。——そして實に、これが最後の別れであつたのである。

14

　この會見の後、私は直ちに伊豆の温泉へ旅行した。そして或る朝、思ひがけない自殺の報傳に接したのである。萬感胸に充ちて、今尚私は哀悼の言葉を知らない。思ふに故人のあらゆる友人は、だれしもこの感情に於て同じだらう。けれども私の哀悼は、それらの人々の中にあつてまた別である。實に久しい間、私は自分の胸中を打ちあけて語るべき、眞のよき友人を持たなかつた。稀れに芥川君を友に得たことは、自分の物寂しい孤獨の生活で、眞に非常な悦びであり力であつた。

　何よりも芥川君は、私を本質的によく理解してくれた。そして尙、一個の我がままと偏狹を許してくれた。（自分に友人のないことは、この偏屈と我がままのためであつた。折角親しくなりかけても、それで

すぐ不和になつてしまふ。）この點で芥川君は、常に自分を寛容し、いたはり慰めてくれた。私がどんな生意氣を言ひ、屁理窟をこね、憎々しく突つかゝつて行く場合にも、彼は寛大に情意を理解し、決して腹を立てることがなかつた。實に私は、その寛容に對して小癪を感じ、時に彼によつて憐憫される怒を感じた。しかも結局して、私は彼にいたはられ、甘たらされ、故意に駄々をこねることの悦びにさへ、充分自ら飽滿してゐた。即ちつまり言へば、彼は私の最も「親愛なる友」であつたのだ。いかに、彼なしに私の生活が寂しいかな！

人が百人の友の中から、その一人を失ふことは苦痛がすくない。けれども僅か二人、もしくは三人の友の中から、その一人を失ふことは耐えがたいかな。自分は彼によつて數へられ、彼によつて慰められ、彼によつてよき藝術の理解者を得た。彼れ死してどこにまた第二の芥川が有り得るか。どこにまた私の藝術を、私の詩を批評してくれる人があるのか。かくて先天的に孤獨不運な私は、今日よりまたいよいよ孤獨寂寥になつてくる。宿命よ！　呪ひあれと叫ばざるを得ないのだ。

15

今こそ、自分は芥川君の自殺について、一の判然たる推論を下すことができるのだ。もちろん理由は、さまぐ\の事情にからみついてゐる。けれども私の信ずる所によれば、彼の自殺における「漠然たる不安」の一つは、近く來らんとする彼自身の心境的革命にまで、名狀しがたき不安の困憊を感じたのである。實に芥川君の文學的生涯は、死を賭したる「彼自身への戰ひ」だつた。彼は自由を欲求してゐた。むしろデイオニソス的なる、放縦不羈の自由を欲求してゐた。しかもその自由は、悲しいかな彼自身の教養に屬しなかつた。彼自身の教養は、あらゆる點に於て理智的であり、クラシカルであり、禮節的であり、そして二二ケ四的の透明さだつた。

芥川君の生涯は、それは鷲にならうとして沒落したツアラトストラの人間悲劇にたとへられる。彼はその遺書の中で、自ら神にならうと企圖した哲人を諷刺してゐる。しかしながら神にならずして、だれが眞に完全に、自分自身の主人になり得るか。私の藝術は私の中の詩人を完成するためだといふ彼の文藝觀の眞意も、之れによつて始めて了解されるのである。實に一方の眼から見れば、彼は超人的な藝術至上主義者だつた。自殺によつて、彼は藝術の完成境——美のツアラトストラ——に達さうとした。けれども一方の眼は、同時に彼が沒落した人間悲劇であることを語つてゐる。いかに人間として、彼は「熱情される自由」のために苦しんだか。藝術は、然り藝術は、彼にとつての催眠劑たるにすぎなかつた。（しかも皮肉なことには、その催眠劑がまた彼を死に導いた）

16

あらゆる自分の藝術が、あらゆる自分の表現が、芥川君自身にとつて不滿であつた。彼が眞に嚮かうとしたものは、催眠劑としての文藝でなく、もつと生活實感に迫つてくる、眞の意味での「詩」であつたのだ。しかも彼の教養が、理智の透明さが、詩人としての彼の表現を妨げた。彼は自分に叛逆した。彼は憤怒し、そして一の超人的跳躍を

試みた。「河童」が、「西方の人」が、それから最近の多くの作物がさうであり、轉期への黎明的な豫想を見せてる。

けれども此所に、彼の著るしい破綻が感じられた。彼の向かうとした熱情は、いつも埋れ火の如く、發光する影の如く、さうでもない他の斷層——氣質的及び教養的斷層——の下に埋沒された。彼はしばしば力を感じた。そして實に長い間、見るも無殘な、悲壯な痛ましい戰が續けられた。

何故に芥川君は自殺したか？　自分はもはや、之れ以上のことを語り得ない。しかしながらただ、一の明白なる事實を斷定し得る。即ち彼の自殺は、勝利によつての自殺で、敗北によつての自殺でないといふことである。實に彼は、死によつてその「藝術」を完成し、合せて彼の中の「詩人」を實證した。眞にすべての意味に於て、彼の生涯はストイック——それのみを、ただニイチエが望んでゐた。——であつた。最後の遺書に於てすらも、尚且つ藝術家の態度を持し、どこにも取り亂した所がなく、安靜なる魂の平和（精神の美學的物齊）を失つてゐない。彼こそは一の英雄崇美なる藝術至上主義の英雄である。

17

故人は平常、常に菊池寛氏を以て「私の英雄」と稱してゐた。だが實には、それと全くちがつた意味に於て、芥川君自身が英雄であつた。しかしながらそれは、悲痛な、傷ましい不斷の戰による英雄だつた。生前たれが——どんな彼の親友が——この傷ましい英雄を彼に見たか？　彼は人に理解されず、孤獨な、寂しい墓の中に死んで行つた。しかも自ら死を決して、儼然と持し、精神のストックな安靜を失はないで。

彼に於て、自分は正にギリシヤ人の、ストイック教徒の、ソクラテスの、藝術至上主義の山頂的な哲學を見る。そしてこの哲學から、逆に始めて彼の藝術論（文藝的な・あまりに文藝的）の戰慄すべき、かくされたる精神を知る。彼はニイチエの英雄であり、藝術至上主義の傷ましい殉教者だ。

そして、私が此所まで考へてきた時、始めてあの鵠沼における悲壯な會話が、言語の隅々まで明らかに解つてきた。いかにその時、あらゆる天才の不運について、藝術家の宿命的な孤獨と悲慘について、彼が沈痛な聲で訴へたか。愚かにも自分は、その時彼の悲哀について、眞の事情を知ることができなかつた。あまつさへ彼が反駁した最後の言葉——自殺しない厭生論者の言ふことなんか、たれが本氣にするものか。——の深い意味さへ、少しも了解することができなかつた。實にその時、既に既に、彼は死を計畫してゐたのである。

18

見よ！　ここの崇高な山頂に、一つの新しい石碑が建つてる。いくつかの坂を越へて、遠い「時代の旅人」はそこを登るであらう。そして秋の落ちかかる日の光で、人々は石碑の文字を讀むであらう。そこには何が書いてあるか？

見るものは默し、うなづき、そして皆行き去るだろう。時は移り、風雪は空を飛んでる。ああ！　たれが文字の腐蝕を防ぎ得るか。山頂

の空氣は稀薄であり、鳥は樹木にかなしく鳴いてる。だが新しき季節は來り、氷は解けそめ、再び人々はその街を通るだろう。その時、あゐたれが山頂の墓碑を見るか。多數の認識の眼を越えて、白く、雪の如く、日に輝やいてゐる一の正しき存在を。　（完）

通夜の記

犬養健

知己友人の通夜は葬儀の前日、二十六日の夜に行はれた。それには芥川邸のみでは手狹であるため、地續の香取邸、向の關根邸を拜借し更に食事の便をはかつて三四町先きの貸席竹村をも借りる。竹村は前前二十四日の夜、故人の絶筆「或舊友へ送る手記」を友人によつて公表した場所である。

靈柩は階下八疊の客間に置かれてある。柩のうへの寫眞には、頬杖に倚つて前面を凝視したものを選んである。守刀がこれに添へられてある。此處には滿室の花輪の香と香水の匂が強い。花の香に醉ふもののあるくらゐに強い。

知己友人の大半はこの客間の緣を南へ折れた新築の二間に集つた。新築のその八疊は前々年に書齋として建てられたもので、最近しかし故人はこれを寢室に用ゐてゐた。永眠せられたのも此室である。

庭は八手と椎との多い庭である。隨筆小品なぞによつて見れば、故人は椎を愛したらしい。竹も少しある。石も少しある。それから書齋の南、障子にごく近く、三株の芭蕉のもとにつくばひがある。恐らく室生犀星氏の贈つたつくばひであらう。つくばひの前を屢々過ぎて庭續きの香取邸と聯絡をとりつゝあるうちに、殊更これが記憶に殘るのである。

十二時には混雜も減じ、通夜の諸氏はすべて芥川邸に集る。交代に柩前に侍する。久米氏の紹介にて嚴君挨拶せられる。交代を終へて庭へ下りる者もある。花輪の列が入り組んだ影をつくつて、庭からは柩もこれに侍する人々もよく見えないのである。そのかはり頭上の椎の裏葉は假造りの天幕の燈をうけて一面に浮き出てゐる。

二階の六疊では小穴隆一、久保田萬太郎、南部修太郎、瀧井孝作、堀辰雄、神崎淸の諸氏が座をつくつてゐた。夜の明けるまで初期白樺

初期三田文學時代の話が續いた。故人の作「少年」「寒さ」「大導寺信輔の半生」等がその間の話題にのぼつた。そして欄干に近い自分には、階下の谷崎潤一郎氏のよく透る聲が、絶えては續きして殊に耳に入るのであつた。

二階のこの六疊は故人が「或舊友へ送る手記」をしるした室である。書棚の隅には見覺えのあるペン軸とインキとがその儘に殘されてゐる。そのGペンの尖があまりに濡れたまゝのやうな色を見せてゐたので、前日自分は觸つて見たほどであつた。それから、緣より西へつゞく階段は、故人がこの室で睡眠藥を飲み終つて降りて行つた、その同じ階段である。階段の電燈はいまも薄黄ろい。

しかしこれらのすべての生ま生ましい想像を慰撫するものは、ひとへに書棚のうへに安置せられた、小穴隆一氏による永眠後一時間の故人を寫した油繪である。それは尋常の「紀念畫」ではない。故人の臨終のいかに平和であつたかをこの世なる知人に教へる「寫し畫」である。入棺の後に參じた自分もこの畫の前に立つて、はじめて何か安堵した。それほどにこの畫のなかの故人は柔和に微笑してゐる。もはや輕輕とこの世の「頭の重み」を青いゝろの枕にゆだねてゐる。「かくすれば自分は幸福ではないでも、少くとも平和であらう」と故人は「手記」にしるしてゐる。そして晩年の故人に最も親しかつた小穴氏は特に懇望せられた唯一の傳令のごとくにその平和さを友人に傳へてゐる。才能のほかに友情がそれを完成させてゐる。「なるほど」と、この繪を見て感じたと或人が云つた。「友達といふものは有り難いものだ」と或人が云つた。「死は故人に平和なる微光の[illegible]ふを見て甚だ安心したり」と或人が云つた。[illegible]である。

葬儀の當日、七月二十七日は三日ぶりに晴天であつた。暑氣が嚴[illegible]り、蟬がしきりに啼いてゐた。午後一時半に讀經あり、遺族は石をもつて柩に釘をうたれた。再び柩を覆ふ間、令息達は[illegible]の傍で葬儀社の用ゆる打釘器を弄ばれるのであつた。

やがて谷口氏に促されて、小穴、菊池、豐島、佐佐木、小島、瀧井、岸田、菅諸氏とともに、記錄係の一人である自分は炎天の往來に出た。靈柩車の通ずる道路まで歩くのである。久米、山本、久保田、南部諸氏はすでに齋場を整理しつゝある筈である。時に二時十分であつた。

後記。自分は瀧井孝作君を輔けてともどもに通夜の記、齋場の記を識す筈であつたが、其後瀧井君の奈良に住つてゐる關係から、同君は齋場の記を、自分は此記をと、おのおの手分けする事に變更した。通夜に參ぜざりし故人の知己に報告する文として、努めて修飾を避けたつもりであるが、また一方當夜の狀況をなるべく印象的に傳へたい便宜上、さういふ依賴もあつて、かたがた故意に主觀を交へ、私事にわたる事どもを添へた個所もある。猶事實の相違、記錄としての不備に就ては當夜の諸氏に訊して、改めるべきところを改めたいと思つてゐる。文の拙さは云ふまでもない。生憎前前日來發熱にあたつて臥床し、それらを全く他日のことゝしなければならないのを、友人諸氏、讀者諸氏に深くお詫びする。八月五日。

芥川君と私

谷崎潤一郎

芥川君と私とはいろ〳〵な點でずゐぶん因縁が深いのである。

芥川君は私と同じく東京の下町の生れである。

私の出身中學は府立第一中學であるが、芥川君の母校たる第三中學は元來初めは第一中學の分校であつて、或る時代には故勝浦鞆雄先生が兩方の校長を勤め、教師にも共通の人が多く、生徒も相互に轉校することは容易であつた。だから君と私とは中學からして同じやうなものである。そしてそれ以來高等學校も大學も同じであつた。

私は第二次「新思潮」に據つて文壇に出た。その處女作は平安朝を題材にした戯曲「誕生」であつて、私の文壇への出かたは可なり花々しいものだつた。そして芥川君の據つたのは第三次「新思潮」で、矢張り平安朝を扱つた小説「羅生門」が君の出世作であつた。君が文壇に出た時の花々しさも甚しく私と相似てゐた。

今はさうでもないやうだが、當時は西洋文學熱が旺盛で、少くとも青年作家の間には日本や支那の古典を顧る者は稀であつた。さう云ふ方面を面白がるのは頭の古い證據のやうに思はれてゐた。芥川君と私とは早くからその風潮に逆行し、東洋の古典を愛する點で頗る趣味を同じうした。

最後に私一家の寺はもと深川の猿江にあつて、今は染井に移轉してゐる日蓮宗の慈眼寺であるが、芥川家もまた此の寺の檀越である。寺には司馬江漢の墓があり、浦里時次郎の比翼塚があつて、深川時代には此の比翼塚へ縁結びに參詣する男女が相當にあつた。

そして芥川君の亡くなつた七月二十四日と云ふ日は、また私の誕生日なのである。

斯くの如く君と私とは、出生地を同じうし、出身學校を同じうし、文壇に於ける境遇と黨派を同じうし、寺までも同じうしてゐた。私の方もさうであつたが、君も私に對しては、通り一遍の先輩以上に親しみを感じてゐたであらう。たゞ今になつて殘念に思ふのは、東京の舊家に育つた君は都會人の常として昔風の節度を重んじ、親しいうちにも私を遇するに飽く迄先輩の禮を以てしたために、私は君に對しては佐藤春夫に對する如くザツクバランになれなかつた。なれさへすれば、君もすすんで心の苦しみを打ち明けたかもしれないし、私としても及ばずながら慰める術もあつたであらうに、最近の君の樣子が甚だ尋常でなかつたことは明かであつたに拘はらず、さうしてしばしば夜を徹して話し合ふ機會があつたに拘はらず、とうとう其處まではお互

ひに切り込むことが出來ないでしまつた。

「下町つ兒は弱氣でいけない。」――芥川君は近頃しきりにさう云つてゐたが、ザツクバランになれなかつたのは、君も私も東京人の悪い癖である。

兎にも角にも、先輩扱ひされながら私は一向頼みがひのない先輩であつたことを愧ぢる。正直に云ふが君の自殺にはいろいろ分らない事が多い。ここ一二年を無事に通過してしまへば、それから先は伸び伸びと生きられたやうに思へてならない。學問と云ひ頭腦と云ひ、此の無學なる先輩が却つて常に教へを乞うてゐた立派な後輩を亡くしたことは、私一個の身に取つても何物にも換へがたい損失である。

が、地下の芥川君は、「此れでやうやう樂になつたよ」と、今頃は好きなマドロスパイプでも咬へて、疲れた體をほつと休めてゐるのではなからうか。

講演旅行中の芥川君

里見弴

今年五月、改造社主催の講演旅行で、私は始めて芥川君と親しくつき合つたのだが、その九日ばかりの間、芥川君が私に示した面は、元氣で、優しくて、趣味はもとより高雅で、大へんよかつた。「私に示した面」この言葉は、或は昵懇の人々には不快に響くかも知れないが、私は、芥川君が、一面しかもたなかつた人とは思はれない。云ひ換へれば、相手を見る人だつた。――が、もう一度穏かに云ひ直せば、私に示した友情は温かかつた。

私は、自分ひとりのことでは、決してさう面倒臭がりやでもないが、ひとつ行動を共にするやうな場合には、大抵相手の云ひなり放題になつてゐる。異を建てるのが面倒臭いからだ。誰と旅行をしても、大抵私はつれの云ふまゝになつて、何分ともよろしきやうにやつて貰ふことにするが、今度は、ひどく芥川君にたよりにされて、いつになく先達じみた役ばかり背負ひ込まされた。行く先々歡迎會の斷り、なかでこれが大役だつた。先方の御好意は有難いが、日夜汽車と講演、汽車と講演の强行軍で、勞れきつてゐるところへ、招ばれて行つて飯を食ふのはずゐぶん難儀なことだ。で、仕方がないから、ポン／＼、もぎどうに斷つた。それを、芥川君はひどく嬉しがつてゐた。今夜は逃れられないかな、などゝ悲觀して話し合つてゐるうち、小さんの「猫久」の文句「逃れざるやと喧嘩を致し」などゝ云ひ出し、それが旅行中の流行言葉になつた。さういふ時、實に無邪氣でよかつた。

夜、連絡船の甲板で、いきなり猛然として、あの開閉のむづかしい船窓を、力一杯うん／＼云つて引きあけて、室内に顔を突つ込んだのは、私のつれをおどかさうためだつたのだが、何ぞ計らん、それは隣の船室で、よその奥さんが寢てゐたので、慌てゝ逃げだしたなども可笑しかつた。

一つ氣の毒なことをしたと思つてゐるのは、旭川への汽車中、親籍に關する話が出かゝつた時、他人の秘事を聞くことを好まない私が、成可く話をほかへそらさうとしたため、半分でお仕舞になつて了つたことだ。聞いたとて、どうにも仕方のないことだつたらう、とは思ふが。

書けばまだいろ／＼あるが、いま私は新潟で三日間の講演をすまして來た歸りで大へん勞れてゐるから、これでよす。

文藝春秋の「追憶」と併せ讀まれたら、まだしもいくらか主張一貫することがあるかも知れない。

「是亦生涯」

佐藤春夫

今年の一月の十幾日であつたかと思ふ。夕方のまだ暗くなつたばかりの時刻に彼は飄然と僕を訪づれた。手には一册の本を持つてゐた。彼は椅子に腰を落ち付け乍らその本を僕と彼との間にあつた丸卓子の上に置き乍らそれを僕に呉れると言つた。本といふのは The Yellow Book の第二册目であつて、僕が彼の随筆集の爲めに試みた裝幀の御禮心だと說明したのだ。僕は名ばかり聞いてまだ一度も見たことのないこの珍らしい贈り物を心から喜んだ。すると彼は言つた。

「お互に千八百九十年代の文士だからね。こういふものを見ると懷しいよ。君ならばきつと喜んでくれるだらうと思つて……。何しろ日本あたりに來て賣れ殘つてゐたんだからこれもさう澤山は本國でも賣れた譯けではなかつたらうね」

こういふことを言ひ乍ら彼は坐に落ち付いた。僕の先客は新しい客に遠慮して辭し去つた。彼はその數日前（？）に起つた彼の身邊の不祥事に付いて嘆息した。それは彼の姉の夫が或ることの爲めに轢死した出來事である。僕も當時新聞で彼に遺書を殘して死んだその人のことを見てゐたので弔意を表すると、彼は亡くなつた身内の死んだ姿の悽惨たる有樣を人から聞いたと言つて委しく描寫して聞かせた。それから何んでも、

「死ぬのもいゝが僕はもう鐵道だけは止めやうと思つたね」

さういふ意味のことを言つた。

僕たちは座敷を換へて二階へ上つた。僕は普通の客とは腰を掛けて下で話すことにしてゐたが、ゆつくりと話し合ひ度い客を持つた時には改めて二階へ招ずることにしてゐた。

僕たちはその晩、翌日の午前三時近くなつたのに驚いて、彼はあわたゞしく歸つたがその間約八九時間、僕等は藝術と人生とを語つた。いや、僕は二階へ上るとほんの世間並の話題の積りで、當時やかましくなりかゝつてゐた一圓本のこと、果してどれ位賣れるかと言ひかけると、彼は

「そんなことなんぞ僕には問題でないよ」

さう言つた句調は、何處か僕を叱咤するやうな樣子があつた。尤もすぐその後には何にか當り前のことを二こと三こと付け加へることでその語調を柔げはしたけれども。その晩は僕はどちらかといふと聞き役だつた。彼は

「酷い駄作を殴り書きしたよ。百枚ばかり、河童といふのだがね。」

それから彼はその作品の内容の一部分を話し出した。自信の無い作のやうな口振りであつたにも係はらず、その内容を話す間は可なり熱心であつた。未だ何處へも原稿を渡して無いといふことであつたから、ひよつとするとその前夜位に書き上げたのであつたかも知れない。河童の内容はどちらかといふと迫き込んだ獨り合點な口調であつたので僕には呑み込めない所もあつた。彼がそんな風な調子でものを言つたことは今迄であまりなかつた。僕は彼が健康を恢復してそんな大作を書いたことを慶賀し、また人から聞いたよりも元氣なのを喜ぶと、彼はだん／＼恢復しつゝあると答へたがその口の下から、色んな厭世觀を漏らした。そして彼は彼の藝術に行き惱んでゐることや、彼の人生の不幸なことを縷々として說き出した。

「僕の生涯を不幸にしたものは××なのだよ。尤もこの人は僕の無二の恩人なんだがね」

彼が多少でも私生涯に關することを一言でも僕に話したのは、この晩が始めてであつた。尤もその晩とてもそれ以上には何にも言はなかつたけれども。然し非常に抽象的な言葉の中に、僕は彼が心中に深い悲愁を抱いてゐることを知つた。

「僕も今では是亦生涯、是亦生涯、と思ひ決することがあるよ」

僕は彼のこの言葉に對して

「さう言つて了へばそれ迄のことだけれども………。それも亦一つの解脫だかも知れないけれども。一體吾々の本能といふものは、是が否でも生きるやうに……」——僕はその時言つた言葉をこれ以上はつきり思ひ出さない。たゞ僕が彼の言葉を聞いて相當に當惑し（全く當惑と言はなければならぬ）さうしてうろたへて彼を慰めるやうなことを言つたのに對して彼は直に亦返事をした。

「尤も、今ではもう餘程落ついてはゐるがね、ひと頃は、實際是亦生涯、是亦生涯と思つたものさ。」確にかういふ意味のことを言つて、僕の困つてゐるのを彼は救つた。

僕は非常におせつかいと思ひ乍らも一つの忠告を試みずにはゐられなかつた。正直に言ふが僕はまさか彼が自決するとは思はなかつた

が、然しそれにしても彼の言葉や態度が餘りに異樣に感ぜられたから、人に向つて決して忠告らしいことを試みたことのない僕ではあつたが、何にか一言言はずにはゐられなかつたのである。僕が彼に言つたことゝ言ふのは、それは人が何か思ひ餘つたことがあるのをそれを表現せずに藏つて置くといふことは最もよくないことで、ヒステリーの原因はさういふことにあるのださうだが、またヒステリーの療法を逆に、深く思つてゐて明すことの出來ないこと柄をうまく言はせて了ふにあるといふのだから、僕を君がこの療法に從ふことは良くはないかと思ふ。但し僕は君の一大事を聞く程の値打のある男では無いからその任には堪えないけれども――こういふ意味を僕が言ふと、彼は、

「有難う……僕は成るべくそれを表現する方法を心掛けてゐるんだよ。だが僕は見え坊だから……」

彼は言葉を句切つて改めてつき加へた。

「僕は見え坊だからその爲めに僕の生涯を滅茶苦茶にして了ふやうなことは無いとは限らんね」――これは彼の言葉通りには思ひ出せないが、さういふ意味であつたことだけは確かだ。

本誌の八月號の「文藝的な餘りに文藝的な」の中にヒステリーといふ項目があるのは此の時の吾々の話から彼が考へたものである。實際吾々はヒステリーと文學との話をした。さうして話題は幾度か循環して藝術上のことに及んだ。僕は彼がいつも餘り金石文字的の表現でなければ承知出來ないのを知つてゐるのでもつと氣輕に、即ち恰度しやべるやうに無雜作に書いて見たらといふことを言ひ出した。本誌の四月號の「文藝的な餘りに文藝的な」の「僕等の散文」の書き出しに「佐藤春夫の說に依れば云々」といふのは矢張りこの時の話題である。ヒステリーの療法に就いては即座に贊成した彼も、僕には同意しなかつた。彼はボードレールの一句といふ言葉を使つた。つまり此の上なく完成された一行を求める意味なのである。然し彼は彼のその言葉の下からまた言つた。

「尤も、ボードレールの一行にしても儚いものには違ひない、といふのは近頃のフランス語ではRが響かなくなるといふのだから、して見れば、ボードレールの詩句だつてこの言語の世紀的變化の前には矢張り金石文字と言へない運命に遭遇してゐるのだからね」

「それとも金石文字かも知れんさ。つまり金石文字が世紀の爲に風化されて磨滅するやうなさういふ自然な變化だらう。つまり年を經た金石文字だね」

そんなことも話した。また僕は言つた。

「或る種の作家は殴り書をすると冗談になるし或る種の作家は殴り書をすると短くなつて了つて結局何んにも書くことが無くなつて了ふ。吾々はお互にどうも後者の方に屬するらしい、然し所謂る小說家といふ才能を持つて生れて來たものは前者のやうな傾向があるものらしい――例へば宇野などのやうにね」

彼は僕の說に贊成した。そして彼は吾々自身を小說家でなく詩人の仲間へ加へた。その時であつたか、それとも別の續き具合だつたか、彼は彼は口ごもり乍ら次のやうなことを言つた。

「僕は見え坊だから、こんなことは決して言ひ度くは無いんだが、僕は文藝的生涯を何故君と一緒に踏み出さなかつたかを後悔してゐる」

僕は言つた。

「どうして今からでは遅いのだ？ これからだつて吾々には未だするべきことが多少殘つてゐるではないか」

「いやもう遅い」

「どうして？」

「どうしてでももう遅い」

彼は何時に似合はず甚だ機智に缺けた返事をした。然もきつぱりとした句調で。

これ等の言葉にすぐ續いたかどうかを今はつきりとは思ひ出さないが、彼はまた次のやうなことを言つてゐた。

「僕が死んだならば誄を書くものは君より外にないのだからね」

僕は彼がこの言葉をその場のはずみで言つたのだかそれとも心情をこめて言つたのだか未だに思ひ迷はないではない。何故かといふのに、彼には交際的にももつと古いもつと親密な友達があるのだから、この言葉はその意味では僕に取つて過ぎたやうに感ぜられる。然し亦考へ直せばその作品の傾向に於いて僕と彼とは多少の類似と從つて互に相當な了解とを持たないではないから、この意味では彼の言葉を僕はそのまゝに受け入れ度い。もし彼の平生僕よりももつと親密に交際してゐた人々の中で、彼から僕に對すると同じやうな言葉を言はれた人があるとすれば僕は引き下るけれども、若しさうでなければ僕は却つて故人を評傳して見たいといふ志を持つてゐる。——————今となつては、僕はこういふことも考へるのである。

もう一つ僕は正直にこゝに記して、彼の寛恕を乞はなければならんのは、その同じ晩に、彼は僕の或る小品文のことを言ひ出して、それの主人公とも言ふべき人物は彼自身でないかどうかを、もし然していいならば言つて見てくれないかと、僕に迫つたのに、僕は甚だ曖昧にしかこれを言はなかつた。事實に於いて僕はその小品の或る部分は彼から暗示を得ないではなかつた。然も僕はそれをすら充分に言へなかつた。といふのは彼の開き直つた樣子やまた今のさつきまでの餘りにヒステリカルないた〱しい調子に對して僕は、若し僕が彼に持つてゐた所の不滿と反感とを今更に言ひ出し度くはなかつたからである。今にして考へるとあの晩、僕が若しはつきりとそれを言ひさへしたなら、彼も亦もつと彼の心中を僕に漏らしたかも知れなかつたのである。このことに思ひ至ると、僕は彼に罪を得てゐるやうな氣がする。

僕はもう殆ど十年彼と友達であつた。さうして無作法な僕は彼に對しても或は面と向つて、或は彼に聞ゆる所で明らさまに彼に對する不滿を述べ立てた。然し僕は別段そのことに依つて彼に罪を得てゐるとは思はない。それよりも彼がそれ程向きになつて僕に尋ねたことを、僕が言ひまぎらして了つたことを自から恥ぢ、亦彼に向つて謝しなければならぬ。僕のその曖昧な言葉を聞いて、彼は言つた。

「僕は精神的にマゾヒズムのやうな傾向があるらしい。一度人から思ひ切つたことを言はれて見度いと思ふんだが。」

僕は何にも答へずに只だ彼の顏を見上げた。僕は今迄に幾十度か彼の顏をしげ〱と見たことはある。然も僕の眼には彼の顏は始めて見るもののやうに印象が激しかつた。又、最も輝いて見えた。僕は彼の切れの長い二重瞼の下にある濡れた大きな瞳が美しくまた親愛と威壓

とを兼ね備へてゐるやうに感ぜられた。僕ははつきり言ふが僕のうぬぼれから作品に於いてもその他の何に於いてもまだ一度も彼の前に頭を下げるやうな氣持になつたことはなかつたが、彼のこの顔付を見た一時には僕は自分自身をへんに小さなものに感じた。さうしてかういふ瞬間を彼がどれ程屢々持つてあらうかを考へて見て、その一時毎に彼は偉大なもの或は純粹なものになつて成育するだらうといふ氣がした。つまり僕は此の時の彼に接して自分のその日頃の生活がだらけてゐることが反省せられた。

三時にならうとしてゐるのを知つて彼はあわたゞしく歸つたが、さうだ、彼は寒中に素足でゐた僕を發見して、彼自身の毛皮の付いた足袋を示し乍ら、僕の頑健を嫉むと言つた。

そのうち僕等は屢々少くとも六七へん出會つた。いつも元氣よく見えた。いつぞやの寒い夜——またしても思ひ出したが、その晩彼は敷島を百八十本近く吸つたものだ。さうして僕はそれを彼の健康の爲めに窘ると彼はたわむれのやうに

「吸つても惡し、止めても却つて惡し、つまりは同じことだよ、吸ひ度いのを吸はないでゐるのは矢張り不愉快だよ」

など〻言つたものだが——あの時の樣々な話はお互にわざと忘れたやうな顔をしてゐた。尤も彼は何かの話をして僕が「それは一體何時時分のことかね」と言つたのに對して「さうさ。まだ冬の頃だよ——そら僕が君を惱ませたあの頃のことだがね」と答へた。それ程彼は落ち付いて見えた。二月に改造社の用事で皆か上方へ行つた時にも彼と一緒だつたが、その旅の間に僕は彼に、美術を見る爲めに一緒に歐羅巴へ行くことを薦めると、彼は非常に快活に賛成した。

「行かうよ。一刻も早く行かうよ」

ゴーガンを見る爲めにモスコーを通つて巴里へ出てスペインへ行つてゴヤとグレコを見て伊太利を通つてエジプトへ行つてコンスタンチノープルから、メツカ、メジナ、エルサレムなどとさういふ道すぢまで、僕等は話したものであつた。

それがその後その話が出ると、彼はいつの間にか氣のない調子で

「いや、いざとなるとなかなか手輕には動けないものでね」

などと言ひ出して了つた。

先日彼の靈前に跪坐いて後、僕は彼の夫人と話をした。十年程前に一度拜眉の榮を得たが、口を利くのは始めてであつた。彼女はその夫が僕と一緒に美術を見る度に出かける相談があつたことを夫から聞いて知つてゐた。彼女は若しそれが實行されてゐたならばどんなによかつたらうか——きつと彼の氣分も明るい方へ轉ずることが出來るだらうと、その時からそれを喜び、彼自身も亦僕がさういふ旅行を彼を慰める爲めに思ひ付いたのだらうとまで言つて喜んでゐたことがあつたと言ふのを聞いた。

人が死んで了つてから、生前よりももつと多く愛情を感じなければならんことは決して惠まれた運命ではない。それとも恐れた運命であるかも知れない。實際僕等はもつと多くもつと深く友情を披瀝すべきであつた。然し「もう遲い！」

上海より

セイコヨリカヘリテソノフヲキク○アヤシミカナシミムネツブルオモヒ○コノチハコジンソオユウノトコロ○カエリテトモニカタルベキコトスクナカラザルニヒトスデニナシ○コノヤドニトマツテヰタコトアリトフロバンノオヤヂモカナシメリ○オモカゲメニウカビキタル○サトハルヲ

右の電報は、芥川氏の訃を上海で知つた時、佐藤氏から、本社社長山本へ送つたものである。

或舊友へ送る手記

芥川龍之介

誰もまだ自殺者自身の心理をありのまゝ書いたものはない。それは自殺者の自尊心や或ひは彼れ自身に對する心理的興味の不足によるものであらう。僕は君に送る最後の手紙の中にはつきりこの心理を傳へたいと思つて居る。もつとも僕の自殺する動機は特に君に傳へずとも善い。レニエは彼の短篇の中に或自殺者を描いて居る。この短篇の主人公は何のために自殺するかを彼自身も知つて居ない。君は新聞の三面記事のうちに生活難とか、病苦とか、或は又精神的苦痛とか、種々の自殺の動機を發見するであらう。然し僕の經驗によれば、それは動機の全部ではない。のみならず大抵は動機に至る道程を示して居るだけである。自殺者は大抵はレニエの描いた樣に何のために自殺するかを知らないであらう。それは我々の行爲する樣に複雜な動機を含んで居る。が、少くとも僕の場合は唯ぼんやりした不安である。何か僕の將來に對する唯ぼんやりした不安である。君は或は僕の言葉を信用することは出來ないであらう。然し十年間の僕の經驗は僕に近い人々の僕に近い境遇に居ない限り僕の言葉は風の中の歌の樣に消えることを教へて居る。從つて僕は君を咎めない。……僕はこの二年ばかりの間は死ぬことばかり考へつゞけた。僕のしみじみした心地になつてマイレンデルを讀んだのもこの間である。マイレンデルは抽象的の言葉に巧みに死に向ふ道程を描いて居るのに違ひない。が、僕はもつと具體的に同じことを描きたいと思つて居る。家族達に對する同情などはかう云ふ慾望の前には何でもない。これも又君には in human の言葉を與へずには措かないであらう。けれども若し非人間的とすれば、僕は一面には非人間的である。——何でも正直に書かなければならぬ義務を持つて居る。(僕は僕の將來に對するぼんやりした不安も解剖した。それは僕の「阿呆の告」の中に大體は盡してゐるつもりである。たゞ僕に對する社會的條件——僕の上に影を投げた封建時代の事だけは故意にその中に書かなかつた。なぜ又故意に書かなかつたかといへば我々人間は今日でも多少は封建時代の中に居るからである。

僕はどこにある舞臺の外に背景や照明や登場人物の——大抵は僕の所作を書かうとした。のみならず社會的條件などは、その社會的條件の中にゐる僕自身に判然と判るかどうかも疑はない譯にはゆかないであらう。)——僕の第一に考へたことはどうすれば苦まずに死ぬかと云ふことだつた。縊死は勿論この目的に最も合する手段である。が、僕は僕自身の縊死してゐる姿を想像し贅澤にも美的嫌惡を感じた。(僕は或女人を愛した時も彼女の文字の下手だつた爲に急に愛を失つたのを覺えてゐる。)溺死も亦水泳の出來る僕には到底目的を達する筈はない。のみならず萬一成就するとしても縊死よりも苦痛は多いわけである。轢死も僕には何よりも先に美的嫌惡を與へずにはゐなかつた。ピストルやナイフを用ふる死は僕の手の震へる爲に失敗する可能性を持つてゐる。ビルデングの上から飛び下りるのもやはり見苦しいに相違ない。

僕はこれ等の事情により、藥品を用ひて死ぬことにした。藥品を用ひて死ぬことは縊死することよりも苦しいであらう。然し縊死することよりも美的嫌惡を與へない外に蘇生する危險のない利益を持つてゐる。唯この藥品を求めることは勿論僕には容易ではない。僕は内心自殺することに定め、あらゆる機會を利用してこの藥品を手に入れようとした。同時に又毒物學の知識を得ようとした。

それから僕の考へたのは僕の自殺する場所である。僕の家族たちは僕の死後には僕の遺產に手よらなければならぬ。僕の遺產は百坪の土地と僕の家と僕の著作權と僕の貯金二千圓のあるだけである。僕は僕の自殺した爲に僕の家の賣れないことを苦にした。從つて別莊の一つもあるブルヂヨアたちに羨ましさを感じた。君はから云ふ僕の言葉に、ある可笑しさを感じるであらう。僕も亦今は僕自身の言葉にある可笑しさを感じてゐる。が、このことを考へた時には事實上しみじみ不便を感じた。この不便は到底避けるわけには行かない。

僕はたゞ家族達の外に出來るだけ死體を見られないやうに自殺したいと思つてゐる。然し僕は手段を定めた後も半ばは生に執着してゐた。從つて死に飛び入る爲のスプリング・ボオドを必要とした。(僕は紅毛人達の信ずるやうに自殺することを罪惡とは思つてゐない。佛陀は現に阿含經中に彼の弟子の自殺を肯定してゐる。曲學阿世の徒はその肯定にも「やむを得ない」場合の外はなどゝいふであらう。然し第三者の眼から見て「やむを得ない場合」といふのは見す見すより悲慘に死なければならぬ非常の變の時にあるものではない。誰でも皆自殺するのは彼自身に「やむを得ない場合」だけに行ふのである。その前に敢然と自殺するものは寧ろ勇氣に富んでゐなければならぬ。)このスプリング・ボオドの役に立つものは何と言つても女人である。

クライストは彼の自殺する前に度たび彼の友達に(男の)道伴れになることを勸誘した。又ラシイヌもモリエエルやボアロオと一しよにセエス河に投身しようとしてゐる。然し僕は不幸にもから云ふ友だちを持つてゐない。

唯僕の知つてゐる女人は僕と一緖に死なうとした。が、それは僕等の爲には出來ない相談になつてしまつた。そのうちに僕はスプリング・ボオドなしに死に得る自信を生じた。

それは誰も一しよに死ぬもののないことに絶望した爲に起つた爲ではない。寧ろ次第に感傷的になつた僕はたとひ死別するにもしろ、僕の妻を劬りたいと思つたからである。同時に又僕一人自殺することは二人一しよに自殺することよりも容易であることを知つたからである。そこには又僕の自殺する時を自由に選ぶことの出來るといふ便宜もあつたのに違ひない。

最後に僕の工夫したのは家族たちに氣づかれないやうに巧みに自殺することである。これは數箇月準備した後、兎に角ある自信に到達した。(それ等の細部に亙ることは僕を好意を有つてゐる人々のために書くわけに行かない。尤もこゝに書いたにしろ法律上の自殺幇助罪《このくらゐ滑稽な罪名はない。若しこの法律を適用すればどの位犯罪人を殖すことであらう。藥局や銃砲店や剃刀屋はたとひ「知らない」と言つたにもせよ我々人間の言葉や感情に我々の意志の現れる限り、多少の嫌疑を受けねばならぬ。のみならず社會や法律はそれ等自身自殺幇助罪を構成してゐる。最後にこの犯罪人たちは大抵は如何にもの優しい心臓を持つてゐることであらう。》幇助罪を構成しないことは確かである。)

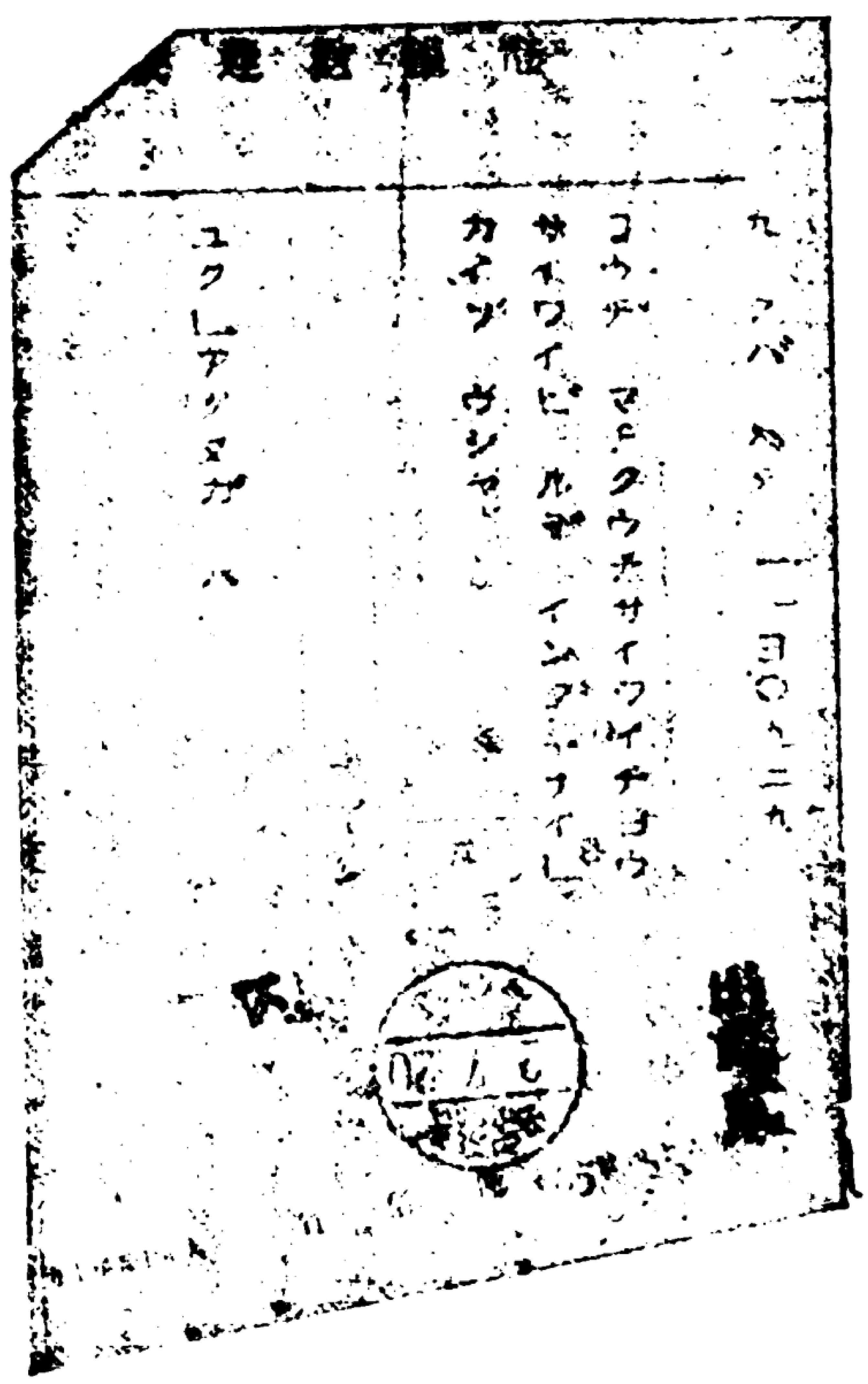
僕は冷やかにこの準備を終り、今は唯死と遊んで居る。この先の僕の心持は大體マイレンデルの言葉に近いであらう。我々人間は人

間獣である爲に動物的に死を怖れて居る。

所謂生活力といふものは實は動物力の異名に過ぎない。僕も亦人間獣の一匹である。しかし食色にも倦いたところを見ると、次第に動物力を失つて居るであらう。僕の今住んでゐるのは氷の様に透み渡つた、病的な神經の世界である。

僕はゆふべ或賣笑婦と一しよに彼女の賃金(!)の話をし、しみじみ「生きるために生きて居る」我々人間の哀れさを感じた。若しみづから甘んじて永久の眠りにはいることが出來れば、我々自身の爲に幸福でないまでも平和であるに違ひない。併し僕のいつ敢然と自殺出來るかは疑問である。唯自然はかういふ僕にはいつもよりも一層美しい。君は自然の美しいのを愛ししかも自殺しようとする僕の矛盾を笑ふであらう。けれども自然の美しいのは、僕の末期の眼に映るからである。僕は他人よりも見、愛し、且又理解した。それだけは苦しみを重ねた中にも多少僕には滿足である。どうかこの手紙は僕の死後にも何年かは公表せずに措いてくれ給へ。僕は或は病死のやうに自殺しないとも限らないのである。

附記　僕はエムペドクレスの傳を讀み、みづから神とした欲望の如何に古いものかを感じた。僕の手記は意識してゐる限り、自ら神としないものである。いやみづから大凡下の一人としてゐるものである。君はあの菩提樹の下に「エトナのエムペドクレス」を論じ合つた二十年前を覺えてゐるであらう。僕はあの時代にはみづから神にしたい一人だつた。(完)



芥川氏は死の四日前に、本社あてにこの電報を打電された。本社では温泉岳に於ける本社主催の民衆夏期大學講師として長崎に行くの意だと思つてゐた。しかし、氏はこの時已に死を決してゐたのである。この電報は、特に本社と親交ありし氏が、死の豫告の電報ではないかとも思はれるので此處に掲載することにした。

饒舌錄(感想)

谷崎潤一郎

今からもう十何年も前、嘗て芥川君はこんなことを云つたことがある。——

「あなたは創作をしてゐる途中で、いつたい己は何のために骨を折つてこんな仕事をするんだらう。これを書いたところで何になるんだらうと、そんな氣が起ることはありませんか。シエンキウイッチは、もしもさう云ふ氣が起つたら惡魔だと思へと云つてゐますね。」

私はそれに對して何と答へたか覺えてゐないが、多分私にもさう云ふ經驗がないことはない。さうしてそれは、創作熱の最も衰へてゐる際に起る氣持ちで、云ふ迄もなく作家に取つては甚だ危險な時機であり、誰しも一度はさう云ふ經驗があるであらう旨を述べたと記憶してゐる。

芥川君は此の、シエンキウイッチの所謂「惡魔」に見込まれたのであらうか。

が、創作熱がなくなつただけで人は容易に死ねるものでない。芥川君はその手記の中に、食慾も色慾もなくなつたと云つてゐる。しかし生來甚だ君に旺盛であつた讀書慾はどうなつてゐたらうか。好きな本を讀むことさへが詰まらなくなつたであらうか。或は又、全く讀書慾ばかりでは生をつなぐに足りないのであらうか。

芥川君の自殺の動機が哲學的思索の結果であるや否やは知らず、少くともその手記に發表されたところだけでは、哲學的であるとは云へない。氷のやうな病的な神經の世界と云ひ、ぼんやりとした不安と云ひ、單に氣分を述べてゐるのみで、冷酷なる自己解剖は施してない。もちろん故人が世人に讀ませる意志を以て書き遺したものでないから、——又そんな必要は認めなかつたでもあらうから、——此の手記だけで故人の自殺を批評することは早計であらう。ぼんやりとした不安とは何であるか、故人の明敏を以てしてそれが今少しはつきりと說明出來なかつた筈はない。故人は或ひはほんたうのことは世人に知らせたくなかつたかも知れない。

「いや、なんのかのと餘りうるさく云つてくれるな、默つて靜かに死なせてくれ給へ。」

と、今頃は地下でさう云つてゐるでもあらう。

それにつけても、故人の死にかたは矢張り筋のない小說であつた。

○

多くの作家は、不斷に旺盛な創作慾を持つてはゐない。大概の場合、それは週期的に、間歇的にやつて來るのである。今日の如きジャアナリズムの時勢に於いて、職業的作家は假に書かないではゐられないで書くことよりも、新聞雜誌の編輯者に鞭撻されて書くことの方が多いけれども、それでも全然創作慾を感じない時には、いくら書かうにも書く譯に行かない。さう云ふ場合に、金が欲しさに恥を忍ぶことの出來る人は別として、苟くも藝術に忠實な者は再び感興が戻つて來るまでじつと待つより仕方がない。ところでそれが直きに戾つて來ることもあり、何年たつてもとうとう戾らずにしまふこともあり、要するにミューズの神樣の思し召し次第で、作家自身は自分で自分をどうすることも出來ないのだから、これで生活し、妻子を養つて行かうとするのは、云はゞ危い綱渡りのやうな渡世である。

金のために物を書くなどと云ふことが夢にも出來なかつた芥川君は、此の渡世の危さを人一倍痛感してゐたに違ひない。菊池君が大每の客員を辭したとき、芥川君はひとり同社にとゞまつてゐたが、「ろくに仕事もしないくせに月給を貰ふんで、新聞社には濟まないんだけれど、僅かな金でも月々きまつた收入がないと僕は非常に不安なんでね」と云つてゐた。思ふに神經質な故人は、シェンキウイッチの所謂「惡魔」に附け込まれさうな運命にあることを、甚しく恐れてゐたのであらう。實際君の作風には、いかにも惡魔が狙ひさうな弱々しい傾向が早くから見えてゐた。もちろん弱々しいと云ふことは常に必ずしも或る作品の缺點ではなく、それが特色であることもあり、芥川君にもさう云ふもので美しい作品があるにはあるが、それならそれで、もつと思ひ切つて弱々しいところを打ちまけてしまふか、然らずして君の持ち前であるあの端正な風格を是非とも保ちたいのなら、創作の量をずつと少くすべきであつた。今の普通の作家に比べて決して多作の人ではなかつたが、もつと減らして、出來るだけ創作慾の蓄積を心がけた方がよかつた。

が、こんな道理は誰よりもよく承知してゐながら、君は一面に、書かずにゐるとなほ書けなくなりさうだと云ふやうな、强迫觀念に似たものを持つてゐたのではないだらうか。私はひそかにさうであつたらうと想像し、その心持ちに限りない傷ましさと同情を感ずる。神經衰弱だと云つてしまへばそれまでだけれども、神經衰弱も亦その人の體質なり性質なりの一部であるから、一概に病人扱ひする譯に行かない。

（此項つゞく）

雜誌「改造」十周年記念

懸賞創作募集

來る昭和三年四月一日は改造社の創立十周年に當ります。雜誌「改造」は十周年記念號を發行し創作論文に於て我國の代表作を網羅する以外左記の懸賞方法により小說、戯曲を募集します。

1 懸賞金は一等一名一千五百圓、二等一名七百五十圓とす。
2 應募小說戯曲は四百字詰百五十枚以內とし本年十二月卅一日を以つて〆切る。
3 當選原稿の一等は昭和三年四月號の『改造』に、二等は同五月號の『改造』に登載す。
4 應募小說戯曲は社中選のこと。
5 宛名は「懸賞創作」と封表に記載し『改造』編輯局宛てのこと。
6 紙上の匿名は許さず。賞金は發表と共に交付す。
7 應募原稿は一切還付せず。且つ應募者は略歴一葉添付ありたし。

改造社



暗夜行路

志賀直哉

七

二人は圓山から高台寺の下を淸水の方へ歩いて行つた。何所でも飛行機の噂をしてゐるものはなかつた。朝の新聞で若しそれを見てゐなければ謙作は先刻の機體を自分の幻と思つたかも知れない。それ程それは朧氣にしか見えなかつたし、又それ程彼の頭にも危なつかしい所があつた。彼は甚く空虚な氣持で、末松に前夜の事を話さうか話すまいか、迷ひながら、絶えず他の事を饒舌り續けてゐた。實は話すまいと彼は決心してゐるのだ。然しその決心してゐる自身が信用出來なかつた。

彼は前にも尾道で一寸これに近かい氣持になつた事がある。それは自分が祖父と母との不純な關係に生れた兒だといふ事を知つた時であるが、その時はそれを彈ね返すだけの力が何所かに感じられた。そして實際彈ね返す事が出來たのだが、今度の事では何故かさういふ力を彼は身内の何所にも感ずる事が出來なかつた。こんな事では仕方がない、かう思つて、踏張つて見ても、泥沼に落込んだやうに足掻きがとれず、氣持は下へ下へ沈むばかりだつた。獨身の時あつて、二人になつて何時かさういふ力を失つて了つた事を思ふと淋しかつた。

少時して二人は二年坂を登り、其所の茶屋に入つた。謙作は緣の籐椅子に行つて、倒

れるやうに眠りかけたが、今は心身の疲勞から眼を開いてゐられなかつた。節々妙に力が拔け、身動きも出來ぬ心持だつた。これは病氣になつたのかも知れぬと彼は思つた。そして

「茶が來たよ。そつちへやらうか」末松にから聲をかけられた時には謙作は不知、眠りかけてゐた。

「どうしたんだ」

「寢不足なんだ。それに此天氣でどうにもならない」

謙作は物憂い身體を漸く起こすと敷居際から這ふやうな格好で、自分の座蒲團へ來て坐つた。

「大變な參り方ぢやあないか」

「實は君に話したい事があるんだ。然しそれを話すまいと思ふんで何いけない」

末松は一寸變な顏をした。

「…………」

「持て餘してゐるんだ。僕の氣持の上の事だが」

然し謙作は未だ云ふまいと思つてゐる。云へば屹度後悔する事が分つてゐた。

「氣持の上の事か？」

「あゝ、丁度今日の天氣見たやうに不愉快な氣持なんだ」

「どういふんだ」

「何れ話す。然し今日は云ひたくない」

「ふむ」

「…………話は別だが君の所謂赤切符はその後どうなのかしら？」

「…………」此不意な質問に末松は云澁つて具合惡さうな微笑を浮べてゐた。そして「…………四條の額ぢやないが雨奇晴好位の氣持かな」と笑つた。それは祇園の或る三流藝者の事で、謙作が結婚した頃、末松はその女の事でよく苛々してゐた。當時謙作は離れ離れな氣持から、深入りして訊きもしなかつたが、水谷の口から、別れたとか、又會つてゐるとか、二三度そんな噂を聞いたゞけで、其後はどうなつてゐるか、少しも知らずに來たのである。末松は嫉妬からよく苛苛してゐた。彼が愛してゐる割りに女の方は氣樂な氣持だつたし、それに他の關係も多く、其邊の言葉でいふ「てつぱる」場合がよくあり、百も承知の事ながら、その度末松は一人苦しんでゐた。

「然し其關係でいまだに續いて居るんだね！」

「さうだ」

「君の氣持はそれで落ちついて居られるのかね」

「一ト口に云へば氣持が冷めて來たのかも知れない。對手に無いものは望まなくなつた。然しそれで調子はとれて來た。疑つてゐた日にはい、きりがないからね。田舍亭で君を騙らした事がある。覺えてゐるかしら？」

謙作は點頭いて見せた。

「あんな事はもうないよ」さう云つて末松は笑つた。そして「君のも

あゝ云ふ種類の氣持なのか？」と云つた。

「…………」謙作は一寸考へてから、「幾らか近かい氣持だ」と答へた。

末松は少時默つた。それから又こんな事を云つた。「よくは分らないが、さういふ事は十中の七八は疑心暗鬼を作つてゐる場合が多いらしいな。そんな事ではないのかね」

「疑心暗鬼ではない。然し事件としては何も彼も濟んでゐて、迷ふ所は少しもないのだ。只、僕の氣持が落ちつく所へ落ちつかずに居るんだ。それだけなんだ。それは時の問題かも知れない。時が自然に僕の氣持を其所まで持つて行つて呉れる、それまでは駄目なのかも知れないんだ。が、兎に角今は苦しい」

「…………」

「然し一方ではかうも思つてゐる。今直ぐ徹底的に僕が平和な氣持にならうと望むのは却つて、自他共に虚僞を作り出す事だとも。その意味で取らねばならぬ經過は泣いても笑つても取るのが本統だと云ふ考へもあるんだ」

「…………」

「抽象的な事ばかり云つてゐるが、さうなんだ」

「大概分つたやうな氣がする。そしてそれは水谷に關係した事なのか？」

「いや、直接關係した事ではない。露骨にいへば水谷の友達で直子の從兄がある。それと直子が間違ひをしたんだ」

「…………」

「それも直子自身に少しもさういふ意志なしに起つた事で、僕には直子が少しも憎めないのだ。再びそれを繰返さぬやうに云つて心から許してゐるつもりなのだ。實際再びさういふ事が起こるとは思へないし、事實直子には殆ど罪はないのだ。それで總てはもう濟んだ筈なんだ。所が、僕の氣持だけが如何しても、本統に其所へ落ちついて呉れない。何か變なものが僕の頭の中でいぶつてゐる」

「それは君の云ふやうに時の經過を待つより仕方ないかも知れない。寧ろそれで自然だとも思へる」

「それより仕方のない事だ」

「無理な註文かも知れないが、事件として解決のついた事なら、餘り拘泥しない方がいい。拘泥した所で、いゝ結果は生れないから。つまらぬ犧牲を拂ふのは馬鹿々々しい」

「只、當事者となると、よく分つてゐる事で、その通り氣持が落ちついて呉れないのが始末に惡いんだ」

「本統にさうだ。然し意志的にでも努力するのだな。さうしなければ直子さんが可哀想だ。感情の問題には相違ないが、君のやうに事件が十二分に分つてゐるとすれば、感情以上に意志を働かして、それを壓へつけて了ふのは人間としても立派な事だと思ふ」

「君の云ふ事に間違ひはない。然し僕としてはそれは最も不得手な事

だからね。それと假令直子に罪がなかつたとは云へ、僕達の關係から云へば今まで全然なかつたもの、或ひは生涯ないとしてゐたものが、出來た點で、今までの夫婦關係を別に組み變える必要があるやうな氣がするんだ。極端な事を云へば假に再び同じ事が起つても動かないやうな關係を。――もつとも、こんな事を云ふのからして、君の云ふ事を本統に意志してない證據かも知れないが」

「まあ、それは無理ないと思ふけど……」

「密雲不雨と云ふ言葉があるが、さういふ點にいやな氣持がしてゐる」

「それはさうだらう。然し兎に角、君にとつて、これは一つの試練だから、そのつもりで充分自重すべきだな」

「ありがたう。この上不用意から不幸を積み上げた日には、それこそ、馬鹿々々しい。それは氣をつけるつもりだ」

「事件そのものが分らずに引廻はされるのは仕方がないが、君のはよく分つてゐるんだから」

「ありがたう。話したんで大變氣持がよくなつた」

「直子さんはどうしてる？」

「僕が出る時には頭痛がするとか云つて寢てゐた」

「早く歸つて上げる方がいゝな」

謙作は不圖末松に直子を慰めて貰はうかしら、と考へたが、直ぐ「それは厭やだ」と思ひ返へした。又、そんな事を承諾する末松ではないと思つた。

往來を驅ける號外賣りの八釜しい鈴の音が聞こえた。

間もなく二人はその茶屋を出たが、出る時、末松は入口に落ちてゐた號外を取上げ、

「矢張り先刻の飛行機は深草へ下りたんだね」と云つた。然し他の一機は無事に大阪へ着いた事もそれに出てゐた。二人はそれからダラダラ坂を東山松原の停留所の方へ下りて行つた。

八

其後、衣笠村の家では平和な日が過ぎた。少なくも外見だけは思ひの外、平和な日が過ぎた。お榮と直子との關係も謙作の豫想通りによかつた。それから謙作と直子との關係も惡くはなかつた。然しこれはどういつていゝか、――夫婦として一面病的に惹き合ふものが出來たと同時に、其所にはどうしても全心で抱合へない空隙が殘こされた。そして病的に惹き合ふ事が強ければ強い程、あとは惡かつた。

妻の過失がその儘肉情の刺激になるといふ事は此上ない恥づべき事だ。彼はさう思ひながら、二人の間に感ぜられる空隙がどうにも氣になる所から、そんな事でゞも何卒、直子に對する元通りなる愛情を呼起こしたかつたのである。病的な程度の強い時には彼は直子自身の口で過失の場合を精しく描寫させようとさへした。

直子が又妊娠した事を知つたのは、それから間もなくだつた。彼は

指を折るまでもなく、それが謙作の旅行以前である事は分つてゐたが、いよ〳〵直子との關係も決定的なものになつたと思ふと、今更、恐ろしい感じが起こつて來た。

謙作の心は時々自ら堪へきれない程弱々しくなる事がよくあつた。さういふ時、彼は子供のやうにお榮の懷に抱かれたいやうな氣になるのだが、眞逆にそれは出來なかつた。そして同じ心持で直子の胸に頭をつけて行けば何か鐵板のやうなものを不圖感じ、彼は夢から覺めたやうな氣持になつた。

夏が過ぎ、漸く秋に入つたが、依然謙作は心の狀態はよくなかつた。それは心の狀態といふより寧ろ不攝生から生理的に身體をこわして了つたのだ。彼はこんな事では仕方ないとよく思ひ〳〵したが、だらしない惡習慣からは却々起きかへる事が出來なかつた。彼は甚く弱々しいみじめな氣持になるかと思ふと、發作的に癇癪を起こし、食卓の食器を洗ひざらひ庭の踏石に叩きつけたりした。或時は裁鋏で直子の着てゐる着物を襟から脊中まで裁ちきつたりした事がある。こんな場合、彼では其時ぎりの癇癪なのだが、直子は直ぐその源を自身の過失まで持つて行き、無言に凝つと、忍んでゐるのだ。そしてその氣持が反射すると、謙作は一層苛立ち、それ以上の亂暴を働かずにはゐられなかつた。

お榮は前から謙作の癇癪を知つてゐたが、そんな風にそれを昂行するのは餘り見た事がなく、僅か一二年の間に何故、謙作がそれ程に變つたか、分らないらしかつた。

或時謙作は鎌倉の信行から、その内遊びに行くと云ふ便りを貰つた。そして謙作は直ぐ返事を書いたが、後で、それはお榮が手紙で信行を呼んだのだといふ事に氣がついた。彼は追ひかけに直ぐ斷りの手紙を出して了つた。然し又、彼は折角來るといふ信行をそんなにして斷つた事が氣になり出した。彼は來て貰ふかわりに此方から出掛けようかとも迷つたが、それを斷行するだけの氣力はなかつた。そして會へば必ず總てを打明けるだらうと思ふと、それだけでも今は會ひたくなかつた。

末松は自分も一緒に行くからと、切りに旅行を勸め、二人共未だ知らない山陰方面の溫泉案内などを持つて來て、誘つたが、彼は却々その氣にならなかつた。末松の好意はよく分つてゐたから、さうなると意固地になる自身をどうする事も出來なかつた。そして兎に角自分で自分を支配しなければならぬ、さう決心するのだ。

彼は久しく遠退いてゐた、古社寺、古美術行脚を思ひ立つた。高野山、室生寺、など、二三日がけの旅になる事もあつた。丁度晩秋で、景色も美しい時だつた。そして彼は少しづゝ日頃の自分を取りもどして行つた。

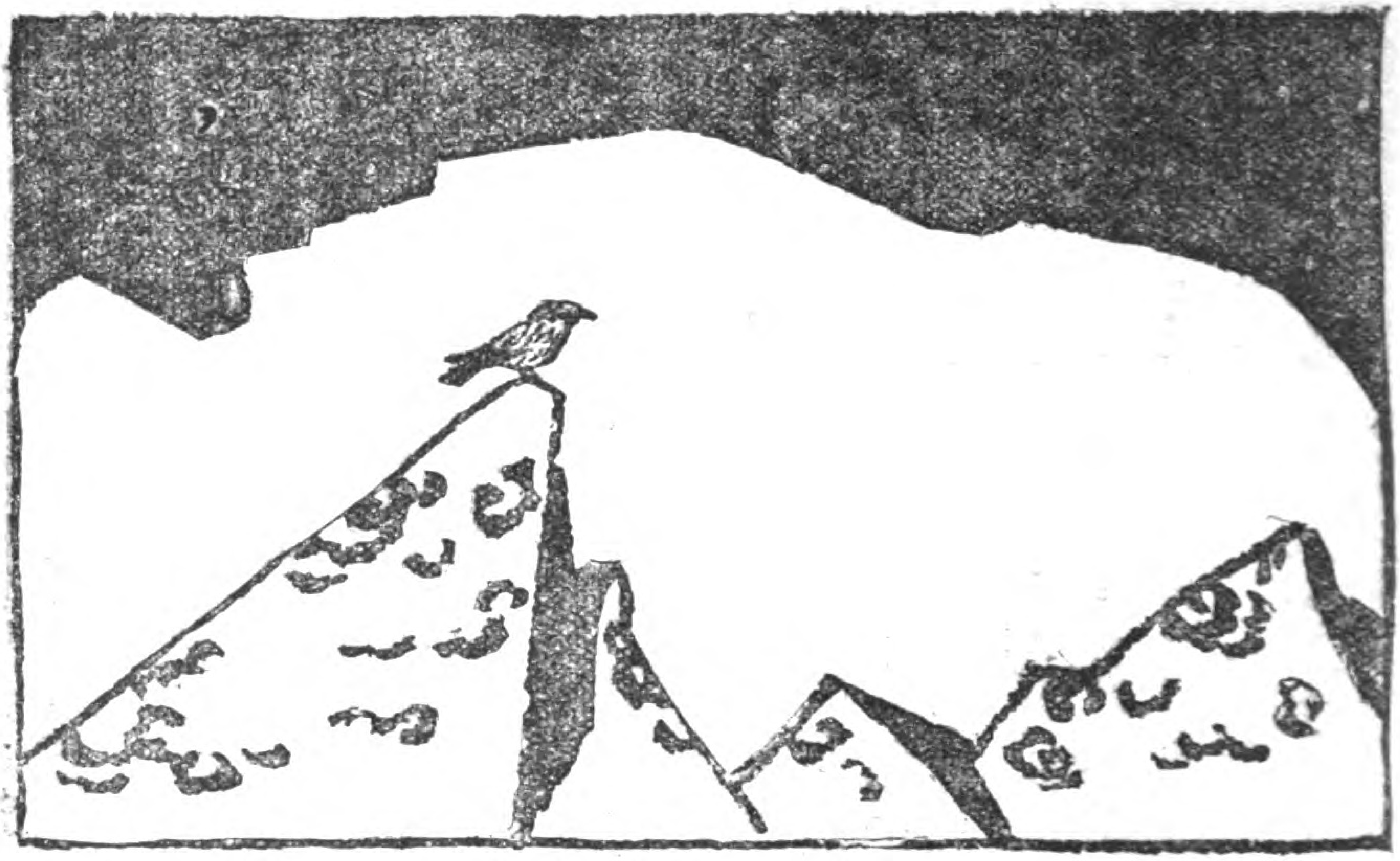
秋が過ぎ出産が近づいた。彼は總てゞ幾らかの自制が出來て來ると、直子に對し、亂暴する事も少なくなつた。自分の亂暴が胎兒に及ぼす結果を考へると、彼は無理にも苛立つ自身を抑へつけるやう心掛

けた。

出産はその暮れ、——延びて、正月の七草前といふ事で、彼は前の例もあるので、直子の輕擧には八釜しく云つてゐた。そして今度はお榮もゐるし、萬事手ぬかりなくやるつもりだつたが、正月になり、十日過ぎても未だ産がないと、彼は少し心配になつて來た。そして彼は今度は病院で産をして、一ト月位は其所で養生する方がいゝといふやうな事を云ひ出したが、醫者に相談すると、これだけの人手があれば其必要はあるまいと云つた。その上、直子もそれを望まなかつた爲め、入院の話はその儘沙汰止みになつた。

謙作は若し一ト月數へ違ひではないかと云ふ不安を感じた。二月に入つて産があり、月を逆算してそれが自分の朝鮮旅行中にでもなつてゐたらと思ふと、慄然とした。

然し一月末の或る日、彼は大和小泉にある片桐石州の屋敷に出かけ、それから歩いて法隆寺へ廻はり、夜に入つて歸つて來ると、自家ではもう赤兒が生れてゐた。充分に發育し、その爲め、前より遙かに産が苦しかつたといふ丸々とした女の赤兒を見て、彼は何かなし、ほつと息をついた。彼が丁度法隆寺にゐた頃、生れた兒ゆえ、一字をとつて隆子と命名した。



天の怒聲

葉山嘉樹

およそ此世の中で、人間をすつかり腐らせて終ふのは、退屈する事だと思ふ。退屈は人間を生きたまゝ腐らせて終ふ。

若し誰かゞ自分で勝手に、此人生と云ふものに退屈したとしても、それは決して樂な事ではない。まして、自分ではちつとも、それを望んでゐないのに、無理に退屈させられるとしたら、これはもつと苦しい。それも期限がハッキリしてゐればいい。だが、おそらく『俺のこの退屈は、一九二七年九月から、二九年の三月頃までで濟むだらう』などと云ふ見通しは、むつかしい。

私はある無期徒刑の囚人と、隣り合はせの監房で暮した事がある。

誰でも、監獄の塀の外では、こんな男を見る事は出來まい。勿論、その男にした處で、監獄に入るまでは、娑婆にゐたに違ひないから、その男を知つてゐる、多くの人が居るにはゐるだらう。しかし、それにしても、その男は全然變つてしまつたのだ。

私はその男が口を利いたのを、一年の間に一度も聞かなかつた。云はゞ、前足を縛られた猪のやうに、虱や蚤などをつぶすために、又は一方から一方へ追ひやるために、コンクリートの壁に、彼は體をこすりつけた。

私は、運動の歸りに一度彼の監房を覗き込んだ事がある。その時、彼は監房の隅にうづくまつてゐた。そして、暗闇で光る豹の眼のやうな彼の眼光に、私は射すくめられた。

それは人間の眼ではない。と云つて又、動物の眼でもない。若し、生きた人間に、自然のと些も違はない義眼を二つとも篏め込んだら、それは無氣味に違ひない。

彼の眼は、その義眼がたゞ一つの表情を持つて作られたとでも云ふべきものであつた。何と云ふ執拗な、何と云ふ射透すやうな、深い、鋭い、呪であるだらう。

私は決して役人ではないではないか。私は同じやうに虐げられた彼の隣人ではないか。その上、私は普通の囚人のやうに、他の囚人を輕蔑しやうなどとは、全で思つた事もないではないか。私は氣の弱な男に話しかけやうとさへして覗いたのではないか。

だのに、彼は、呪以外に何の光もない、その純粋な呪の眼で私を見たのだ。

私は、どちらかと云へば無邪氣な、陽氣な、その癖亂暴な、そして憂鬱なだが氣の置けない囚人だつた。何故つて私の性質がそうである上に、刑期だつて、僅かに十二ヶ月だつたから。私の退屈や絶望には契約期間があつたのだ。

だが、私は、彼の眼に打つ衝つてからと云ふもの、言ひ表す事の出來ない感情を胸に射込まれて終つた。

私は、私の監房の扉が厳重に閉つてゐるかどうかを、絶えず檢して見るやうになつた。そして、それが押しても叩いても開かない事が解ると、私は安心した。

私は扉を檢すと、隣房との厚いコンクリートの壁へ耳を押しつけた。が、どんな場合でも、一つの物音さへも聞きつけることは出來なかつた。たゞ、絶えず眼を監視窓の方に睨み据えながら、豚のやうに、猪のやうに、體を遲鈍にムズムズさせてゐる、彼の氣配を感じる丈けであつた。

私は彼の事を考へるやうになつた。何の犯罪で入つたんだらう、どんな育ちであるだらう、と。だが、獄房ではそんな事を知る由もなかつた。だから、私は彼について知つてゐるたゞ一つの事、その眼の事についてのみ彼を判斷するより外に仕方がなかつた。

それは丁度、慘死でもしさうな程、呪に燃えた瞬間を止めた緒端ではあるまいか。生きた繪ではあるまいか、彼の死ぬまで續く同じ呪の表情。たつた一つの想念がすつかり化石して彼の上に乘しかかつてゐる。いや、彼の中で生きてゐるものは、たゞその呪丈けではあるまいか！

だが、何を一體彼はそんなにも呪つてゐるのか。呪はねばならないのか。恐らく囚人の心ほど想像し難いものはない。何と云つても一瞬ある人間の流れ込んで來る處なのだから。

私は十二ヶ月で出られるのだつた。十二ヶ月と云へば三百六十五日

だ。一日に三度飯を食ふから、千九十五度飯を食へればいい譯だつた。だから一度の食事はもつとも解りよい私の暦だつた。殘り千八十二度、千七十度と、私はあらゆる食事の時間に、子供が幾つ寝るとお正月が來る、と云つて樂しみにして待つやうに、私は食事を待つた。それ丈けが私の唯一の希望であつた。

だが、隣房は一度の食事が何を意味したか、どんな積りで彼は食事をするか、一生涯、たとひ八十まで生きやうとも、その間の彼の生活は監房の中でのみ營まれなければならないのか。彼には希望はなかつた。あるものは彼の現實であつた。

彼はその現實に生きる値打を見出したのだらうか。然し、よしんば、彼が、こんな生活よりは死の方がよい、と思つたにした處で、自殺は脱獄と同樣に至難な業であつた。それに又、よしんばそんな機會があるとしても、彼の心はそんな方へは働かないやうに、固まり切つてゐたのではあるまいか。

彼は未だ、ほんの人生へ出發を初めた許りの若者のやうに見えた。若し私が判斷した彼の若さが正當であるならば、彼の生活は、苦しみにもあれ、歡びにもあれ、これからなのだ。その綿毛の生へた雛のやうな若者の彼が、五十を越した此私を、全で自分の子供たちが、そこらの惡戯小僧たちを眺めるやうな態度で生活してゐるのだ。

何故かならば、若者がそんなにも默つて、憎々しげに、たとひ監房の中でだつて暮せる譯のものではないから。彼の心の中に、未だ自分は十分に世間の事を知つてはゐない、と思ふならば、彼は、反抗をするか、それが駄目だと悟るならば、努めて元氣を裝ふかする筈ではないか。さうでなければ、彼の無期徒刑は、いつまで經つても、減刑に浴する望みがないのだ。

それに、彼だつて、全でたつた一人で此世の中に首を突き出したと云ふ譯でもあるまい。たとひ、孤兒であるにした處で、彼がそれまで育つて來たについては、何か、きつと彼を育てたものがあるに違ひない。だとすれば彼とても、何かの思ひ出は持つてゐさうなものだ。それとも、その思ひ出も、現在の彼も、またこれから先の彼も、一樣に暗室のやうに眞つ暗なのだらうか。

一坪に足りない監房の中にも、蚊に食はれないための方法や、鼻や耳や手や、膝などが凍傷にかゝらない方法やは、やり方一つで講じられない事はない。だが、そんな事についても、彼が一言も訴へがましい事を云つたのを、私は聞いた事がない。

彼は動物園で生れた象のやうに、永久に鎖に縛られて、その外の世界を見る事、そこに生活する事を思ひ切つたのか、又は忘れたのだらう。

彼と關はりはないが、私が刑期の半分以上を濟ました頃、一つの出來事が起つた。

それは夏の終りで、朝晩は寒く、日中は暑い時候の頃だつた。

掃除夫が私の監房に、食器差入口から何か投り込んで、

『新入の十五房から』

と云つて、行き過ぎた。

見ると、箸を十字架に結へて、それに足を縛つた生きた蠅が無數に、小さな麻糸で括りつけてあるのだ。

蠅は上手に生捕られて、足だけが縛られてゐるので、各々勝手な方向に飛ばうとして、ありつたけの力で翅を動かしてゐた。そのために、十字架の頭の部分の方が少し浮くと思ふと、次には、足の方の部分が少し許り浮くのであつた。此フワフワした、箸と蠅の十字架を見てゐると、覺えず、私は微笑んだ。

新入と云へば、その言葉丈けでも懐しいものである。昨日まで娑婆にゐたかも知れない。多分そうなのだ。すると、私が全で知りもしなかつた半年の間の、社會のあらゆる出來事を彼は知つてゐるのだ。想像や憶測では絶對に知る事の出來ない、社會の實際の出來事を彼は知つてゐるのだ。

然も、その彼が私を知つてゐて、そして蠅の十字架を贈り物にして呉れたのだ！

誰だ、一體、彼は？

それから、私は麻の屑糸で草鞋を作り初めた。雪駄よりも小さい草鞋を。どんなに私は熱心にそれを作つた事だらう。全で、それを作り上げると同時に放免になりでもするかのやうに。

そして、その草鞋に、私と同房はしてゐるが、決して私を信頼したり、愛したりしてゐるからではない、例の蠅を捕へて、十四五も縛りつけた。そして、その草鞋を染めるための染料として、私は私自身の血を以てした。

と云ふのは、私の指を嚙み切つたり何かするのではなく、私の血を吸つて、だにのやうに圓くなつて壁に止つてゐる蚊を叩きつぶしてその赤黑い血を塗つた。

血を分けた中ではあれど
蚊の憎さ。

と、私に十字架を贈り、私が草鞋を返禮した十五房が、後に私に云つた、その蚊の血で私は、その草鞋をベトベトにした。

その血に染んだ、云はゞ、死屍の河を踏み越えて來たとも思へる、その草鞋を八方に引つ張りながら、蠅は舞ひ上つた。それは、パラシユートがいつまでもフラフラしてゐるのに似てゐた。

開け放つた窓から、澄み切つた晩夏の空へ、自由を求めて、私の草鞋が飛び去るならば、と、私は思つて、だらしなくブンブン唸りながら宙に浮いてゐる、草鞋を眺めた。

が、馬鹿野郎！

蠅の奴等は、自由の空を目がけて飛び去る代りに、各々勝手な方に引つ張るものだから、草臥れてしまつて、ノロノロと這つこつて來や

がつた。そこには、風呂桶の蓋のやうに熟く蒸された、監房の床板があるのに！

私は、そのいくぢのない蠅の奴等を、ゴワゴワした官給の便紙に包んで、掃夫を通じて十五房に贈つた。

およそ、どんな囚人にだつて、『惡い事を爲た』と思ひ込ませるのは、困難なことである。だが、『詰らない事を爲た』とは思ひ込ませ得る。然し、そのどちらも思ひ込まうとしない囚人もある。そんな部類に十五房は屬してゐた。

青桐の葉が芽を出して、それが大きく繁り榮え、そしてまた、萎み枯れて行くのを、一つ獄窓から眺めるのは、云ひ知れぬ淋しさを覺えるものだ。

不思議なものだ。監房に入つてゐれば、お天氣だらうが雨が降らうが、そんなに氣にしなくてもいいだらうのに、囚人ほど天氣を苦にするものはあるまい。それは、殆んど農民以上であると云つても過ぎはしない。

その朝も、私は淋しい程蒼く澄んだ空を見て、底冷えのする寒さを胸の底に感じながらも、なほ救はれた氣持になつてゐた。

私たちは、運動場に五人づゝ位、共犯關係のない者だけが一度に連れ出された。そして、その囚人たちは、赤褐色の、ジゴマ團が被りでもするやうな、眼丈け出る木綿の帽子を被つて、ゾロゾロ圓い運動場を競馬の馬見たいに歩き廻つてゐた。

その監獄の運動場は、他のと較べてよく出來てゐた。扇子形に煉瓦で圍はれないで、ただ獄庭に、囚人の頭と同じやうに短く刈り込んだ芝草の上に、眞ん丸く打ち拔きでもしたやうに、踏みつけた跡が赤く禿げてゐた。だから囚人は雀や、蠅など丶一緒に、眼も運動させる事が出來るのだつた。

私は、たとへば漣一つ立たない、山中の湖面のやうに、淋しいけれども動かない氣持で、他の囚人と共にグルグル廻りながら、眼をアチコチ働かせてゐた。

南の方には、煉瓦造りの自轉車工場があつた。その向ふに、港の倉庫に似た長い木造建築が續いてゐた。その建物からはトロッコに積んだ何かの織物が、絶えず運び出されてゐた。

人間には、男と女と以外には滅多に中性の人間がゐないやうに、監獄の中にも、看守と囚人以外の、『社會人』――囚人はさう呼び慣はしてゐた――は滅多にゐなかつた。

自轉車工場の扉の所に、上を霜降りのアルパカにして、下をセルのズボンか何かで、赤革のキッドらしい靴を履いた、『社會人』が立つてゐるのが、馬鹿にスッキリと洒落て見えて、私には珍らしかつた。

南を除いては、三方皆、獄舍の屋根で切られた空以外には見えなかつた。

北側の獄舍、圓い運動場から五間とは離れない處に、私たちの獨居監が二十四の目のやうな窓で覗きながら長く横はつてゐた。

私は、働く廻るものだから、その各々の方面の景色を交る々々眺めながら、不思議な氣がした。

私の前を歩いてゐる他の囚人は、どれもこれも痩せてゐた。それは丁度植林された杉林を見る感じであつた。入つて來た時は各々肥つてゐたり中肉で居たりするのだが、二ケ月も經つ内には、一樣に同じやうな細さになつてしまふのだ。だから入つて來る時に、胸に病でも持つてゐれば、その人間は運動場などへは出られなくなるのだ。

そんな病人や、凶暴な囚人の外に、啞や盲人などが、ひどく年老いた人間と一緒に入つてゐる獄舍などもあつた。その獄舍の囚人が入浴に行くのを見るのは、全く一つの見物であつた。啞は奇聲を發し、盲人と老人は杖に縋つて、ノロノロと、一つの長い虫ででもあるやうに、浴場の方に動いて行くのだ。

私はその行列を内部で、窓によじ登つて眺めながら、そんなにも不敏活な、自分の自由さへ利かない身體の者たちが、二重に社會から切り離されてゐるのを不愍に思つた。彼等は社會に居た處で、此の忙しい世の中では、どんな風に生きて行けるだらう。そして、彼等はどんな罪を犯し得たゞらう。然し、口の利けない、耳の聞えない啞に、囚人が非常に多かつたと云ふのは事實だ。

私は、それ等の啞や盲人が、どんな罪を犯したかは知らない。そして、よし彼等が罪を犯したとしても、それを憎むべきかどうかも知らない。

全く健康な、全く働き盛りの人間でさへ、監獄の方が寧しいと云ふ者さへある位だから、不具廢疾者が、牢獄に收容されるのは、別な見方から見らるべきであるか、それも私には分らない。

今では監獄でも、活動寫眞を見せ、蓄音機を聞かせるが、その當時は、そんなものはなかつた。私の言ひたいのは、どんな生活の間でも音樂はある、そして、たとへば、海の上に住む人や、坑の中に住む人や、工場の中、農村の大地の上に、各々その生活の感情をしんみり唄ひ出す俗謠がある、と云ふ事だ。それのないのは恐らく啞丈けだ。

私は、一つ處からも一つの當てもない土地に歩き初めると、ある時は青く萌え出た芝草の堤の上で、ある時は澄み切つた空の下で、狐色に枯れた芝草の上で、仰向きに寢轉びながらよく唄つたものだ。

私は何もない澄み切つた深い空、又は犬のやうな入道のやうな、色色の形を持つた雲を眺めながら、次から次へと、私のあらゆる生活が私に教へた歌を唄ふのだつた。春であれば大地は私にその汗ばんだ肌の氣を傳へるし、秋ならばどことなく底冷えのする淋しさを私に傳へて、私の生活が氣候と云ふものと、いつでも關連してゐる事を覺らせた。

私の歌は雜多だつた。海でも、隧道でも、發電所でも、都會でも、農村でも、大工の手許の時でも、どこでも生活には唄がついてゐた。

私は、私の人生の初まりから唄ひ出して、私の青年、壯年、そして、もう漸く草疲れて來た現在までの生活を、今日も草の上で、太

閃や雲や、大地と一緒に總ざらひをした。私に、私の鼓膜に叩き入れられた。覺えず笑ひ出すかと思ふと、涙を知らず〳〵の中に流しながら、その唄を唄つた時代の生活に、甘いやうな愁ひと共に曳き摺り込まれて、いつまでもいつまでも唄ひ續けた。

――親は二十才で兒は二十一よ、
　どこで勘定が違たやら――

なんかを唄ふ時、私は頭の下に敷いた腕が、全でセットでも振つてゐるやうに感じた。

――セーラ可愛やホンコン沖で、
　ルックアウトに飛沫飛ぶ――

と唄ふ時、私は大地が海のやうに揺れてゐるのを感じるのだつた。

――シュウシュどころか今日此頃は、
　五錢のバットも吸ひかねる――

その時、私はカンカンハマーで、船のサイドを錆落ししてゐるのであつた。

かうして、私の生活は放浪の時代にも、唄は私を喜ばせ、又、悲しみもさせた。

ところが、囚人の生活は、私からその唄を七ケ月の間奪つてしまつた。これはいろいろな他の條件と共に、私をひどく憂鬱にした。

甘つたれたやうな、寂しさうな、悲しげな、憤つたやうな、呻くやうな、錆びた聲で唄が唄へるならば、私は監房の中でも、八分通りは容易に生きる事が出来る私なのだ。

私はその唄の調子を、踵と、頭とで考へながら、高い塀や建物で切られた、監獄の上ではない、娑婆の上の空を仰がれたから、圓く圓く、歩きまわつてゐた。

私たちの居る監房の窓々からは、時々、片目だけで覗いたり、一瞬間顔だけを出したり、どうかすると肩から上をすつかり出して、運動してゐる仲間を見る囚人などがあつた。けれども、看守によつては監房の方ばかり向いてゐて、彼が直接監視してゐる囚人の方を向いてゐない看守もあつた。そんな看守は誰からも憎まれた。

丁度その日の看守は、看守の中で最も意地の惡い、そして非常に横柄づくな看守であつた。事の序だから言ふのだが、囚人と云ふものは、おとなしい看守にはよく従ふが、必要以上に眼を尖らしたり、啀むやうな聲を出したり、威張つたりするのを軽蔑するものだ。

何とか云つたつけ、その看守は。名前は忘れたが何しろ、黒眼鏡そのものと云つた風な感じの男だつた。それは官職から當然受ける反抗以上の、彼個人に對する憎惡まで囚人に植ゑつける處の、妙な、損な人間に属してゐた。

丁度、私が雑居監の側から、工場、自轉車工場の方角を廻つて、我々の獨居監の方に正面を向けた時だつた。

十五房の窓に、上半身を大膽に丸出しにして、私に十字架を呉れた彼が覗いた。

私は、ジゴマ帽を少し阿彌陀に被つて、庇を上げてゐたものだから、彼はハッキリ私を認めたらしかつた。私も彼を見た。

どうだらう。彼は音樂家だつたのだ。いや普通世間では艶歌師と呼んでゐる、私の古い友達だつたのだ。

『何をしてやられたのだらう?』

と、私は眼で問ひたいやうな表情をして、色の白い、上品な彼の顔を懐しく見た。

『十五房！　何を覗く！』

運動看守が、窓を向いて喚いた。

と同時に、私は十五房が慌てゝ引つ込むかと思つたのに、運動看守の聲よりも、もつと大きい聲で歌を唄ひ出すのを聞いた。上半身を依然として窓に現はしたまゝ。

それは憤りそのものの歌であつた。白刃の刄を傳はるやうに、鋭く彼の聲は獄庭に貫ぬき亘つた。

その歌は六句から成り立つてゐて、私もよく、燃えるやうな私たちの感情が沸騰する時に唄ふ處のそれであつた。

十五房はその美しい、世界の隅々までも透るやうな聲で、第一聯を唄ひ終るまで窓を降りなかつた。

看守は、プルプル顫へるほど憤つてゐた。

『何と云ふ無茶な、然し、、な事をやるのだらう。彼奴は！』

と、私は七ヶ月目で聞いた歌聲に、極度に昂奮しながら思つた。私の足は全で土を踏んでゐないやうだつた。頭が充血した。緊張が私に來たのだ。

その一聯の句を唄ひ終るのに一分とはかゝりはしなかつた。けれども私には一時間も聞いた氣がした。一方では心臓が痛くなるほど鼓舞されながら、一方では早く止めてくれればよい、と思ふ程長く感じた。それは、歌なんか唄つた彼に加へられる、懲罰の事が私の氣持を昂奮と同時に重苦しくもさせたからであつた。

たとひ歌を唄はないにしても、そこでは余程うまくやらないと自分を護る事は困難であつた。そこ程、、、、、、、、、、、、、、處は外には無かつた。そこはトルコの王宮の内部よりも、外部からは覗き込み得ないのだ。殊に、その中に五年入つてゐる者でも、十年入つてゐる者でも、その中の事を全部知ると云ふ事は、絶對に不可能であつた。その陰鬱な建物、蜂の巣のやうに並んだ小さな監房、どこまでもどこまでも續いてゐるやうな、暗い日の光の射さない廊下。その廊下の外れのどこからとも分らない處から響いて來る悲鳴や、呻吟。

ガチヤツ！　と鳴つて扉から出て行つたまゝ、、、、、、、、、、囚人。マッチの棒見たいになつて病監に擔がれて行く禁錮囚。いつの間にか冷たい屍骸になつてしまつた自殺囚。

そして、それ等の事は、偶然、覗き窓から一瞬間丈け、チラリと見ることが出來る丈けなのだ。後は又、時計のセコンドを永久に瞶めてゐるやうな、焦れつたい倦怠と、不安の時間が彼――誰でも構はない

——を待つてゐるのだ。

そこには、いつでも何か、探り得がたいものが、薄暗がりに潜んでゐる。

勿論、刑期は決定してゐる。だが、囚人はその刑期に百パーセントの信頼は置けないのだ。いつ病氣に罹るか分らないではないか。監房の生活は健康に良い生活ではないから。それにどんな事が自分の上に降つて來るか分らないのだ。監房には親指の入る位の龜裂が、支那とロシヤとの國境の線見たいに、屋根際から床下の方まで續いてゐるのだ。いつ地震が來るか分らないではないか。そして、地震には、今度こそは一堪りもないだらう。よしんば建築は辛うじて倒れないにしても、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、思ひ起せば足りるだらう。

又、囚人名簿だつて、どんな風に書き誤られてゐないとも限らないのだ。人間の爲る仕事だ。おまけに、たとひそれがどんな風變りな人間であつたにしても、監獄の仕事を興味を持つてやり得ると考へられるだらうか。

若し囚人から憂鬱や不安を除き去らうとするならば、歯科醫が歯神經をプラチナの針で拔くやうに、囚人の頭の中から脳味噌を搾り出すより外に仕方がない。

それにしても絶えず不安に押しつけられてゐる事は、どうしても堪えられない事がある。そんな時、囚人は、自分の不安を驗して見たくなる發作に捉はれるのだ。それはチョツと考へると矛盾である、が、然し囚人にはそんな心理が働くのだ。尤も囚人でなくても、誰にでもたとひより悲慘であり、より苦痛であつても、宙ぶらりんな狀態よりも決りのついた狀態の方が、好ましい事ではある。

十五房がそんな破天荒なやり方で、歩調を破つたので、私たちは早速運動を切り上げさされた。

私は今でもありありと思ひ起すのだが、十五房はよくやつてくれた。その運動看守は私とても、全く獄に隣つてゐたのだ。彼は不便に出來た瀬戸ものの尿瓶以外の何物でもなかつた。それは胴も尻尾もない頭丈けの蛇見たいな奴だつた。

『早く歩け！』

とそいつは、私たちを怒鳴つた。丁度鶏小屋へ鶏でも追ひ込むやうな格好に兩手を擴げながら。

尻の切れた藁草履で芝生から赤土へ、赤土からジメジメ膿でもにじみ出さうな監房の間の叩きの上へ、そして、自分の住居へ當てられてゐる監房へと、私たちは追ひ込まれた。

私たちが各々入房すると、運動看守は十五房へ飛んで行つた。

私たちは監房に入つた。丸一日の中に私たちが監房から外へ出得る時間は、その運動の五分か七分か以外にはなかつた。その短い時間私たちは外に出てゐると、今度監房へ歸つた時決つて表し難い感情に捕はれる。それはホツと安心したやうな、又は殘り惜しいやうな、全く

妙なそは〳〵した氣持である。私はよく、運動から歸ると直ぐ、立ち上つて窓から、たつた今まで競馬のやうに、圓形に歩き廻つてゐた單調な獄庭を眺めた。

私が歩き廻つてゐたその同じ獄庭を、嚴重に金棒を張られた窓の中から見る時、それはもう決して前と一つのものではないのであつた。その金棒がまるで幻のベールででもあるかのやうに、獄庭は幻影化されて見えるのであつた。それは子供が自分の玩具を捨てゝ、他の子供の玩具に引かれるのと違ふであらうか。人は自分の手許にあるものは、彼の夢の對照には撰ばないものと見える。

たとへば、私は五十年の間苦しくも、又夢見心地にも、私の理想に向つて生活して來た此本土を、それは全く多くの思ひ出を以て埋められた奇しい綺卷物ではあつたが、それを私は展げて眺めかへさうとはしなかつた。不思議ではないか。私はチベットや、又は南米のボリビヤの生活ばかり想像してゐたのだ。それは何とはなしに私を引きつけた。よしどんなに私がそれに憧れやうとも、それが私に分る筈がなかつた處から、私が引きつけられ、夢見心地に撫でられたのであるかも知れないが。

まあそんな事は私丈けのロマンチシズムであらう。誰もが同じ處を見るものではない。私の聞いた一人の強盜犯は、七年の刑期を勤めて終へて、七年前忍び込んだ時の同じ家へ押入つた。その時小娘がゐたのだが、七年後の彼は同じ小娘がゐるだらうと思つて入つたのだ。ところがその娘はもう年頃になつて養子を迎へてゐた。その養子は都合の悪い事には警察の柔道の先生だつたので、彼は手もなく取り押へられて終つた。そして出獄してから四日目に三度刑務所に舞ひ戻つて來てから云つたと云ふのだ。

『今度出たらみな殺しにしてやる！』

そして今度出られるのは、十五年先の事なのだ！ そして彼は十五年經つて出たとすれば、彼の考へてゐた通り又候押し込むに相違ないのだ。私にはそんな人間の氣持を考へられない。けれどもそんな人間が現實にあるのだから仕方がない。

私がそんな風な事を考へてゐる時、十五房の方から大きな聲で喚き合ふのが聞えて來た。勿論、十五房と看守とが議論してゐるのだらう。

十五房は永島と呼ばれてゐた。私は社會にゐる時も彼と知合に往來してゐた。彼は涙脆い、氣の柔しい、義の強い男だつた。私には彼のやうな優しい人間がどうして、巡査の佩劍が飴ん棒見たいに曲る程、人を打ん毆つたのか合點が行かなかつた。彼は職務執行妨害罪と傷害罪とで來てゐた。女のやうに優しい顔や體軀の彼が、そのどこに勇氣を蓄へてゐるかは、私を不思議がらせた。兎に角彼は彼の屬する階級以外のものとは、口を利くのも厭はしく思つてゐるらしかつた。

一度などは、教誨師が彼の監房の扉を開けて、その扉に凭れながら彼を諭してゐた。(そこでは誰でもさうする習慣なのだ。)ところが永島

は、

『まあ、そんな門口に立つてゐられては、とつくりお話も承れませんから、むさ苦しい處ではありますが、どうぞお上り下さい。』

と云つたさうだ。で、何氣なく教誨師も釣り込まれて監房の中へ入ると永島はいきなり中からドシーンと、扉を引つ張つて閉めてしまつた。教誨師は悲鳴を擧げて救を求めた。看守が駈けつけた。ところが法衣を纏つた教誨師が扉にしがみついてゐて、扉を開けると同時に、叩きの上へ轉がり出てしまつた。永島は平常の教誨師が泛べてゐるやうな表情で端座してゐた。そして言つたさうだ。

『いや何事も對等で話さなくちやね。距てがあつちや物事には仲々諒解がつき惜いものですからね。』と。

勿論、彼は懲罰を食つた。懲罰は彼にはこたへた。それは普通の肉體を持つてゐる者にでもこたへる。その上彼は數度の入獄で肺をひどく痛めてゐたのだ。

『俺はなしくずしに自殺してるのだ。又なしくずしに、、、、、、、のだよ。』

そんな風に人並より弱い彼が、そして懲罰がどんなものであるか、それが他の者よりもどの位自分によくないか、を知り拔いてゐる永島が、何だつてあんなに氣でも狂つたやうに歌を怒鳴つたのだらう。

私はいつも座る所へ官規通りに坐つて、そして鐵格子越しに、頭の中も眼の中も青くなるほど、澄み切つた大空を眺めてゐた。

叩きの廊下を草履でポト〳〵歩く、幾つかの足音が私の耳に入つた。きつと永島が呼び出されて、叱られて懲罰を受けるために出て行くのだらうと私は思つた。

小供の世界では叱られゝばけりがつくが、大人の世界と云ふものは、叱られただけではけりがつかない。意地の惡い、邪惡な、いつまでも根に持つた、陰險極まる懲罰がある。小供を叱る親は、親の都合で多くの場合小供を叱りつける。大人の場合だつてさうだ。

そして、殊に此一廓では、人間を人間でなくしてしまふ。五年も十年も、たつた一つの事を考へて人間が生きて行く。同じものを食ひ、同じ色を眺め、同じ匂を嗅いで、生きて行く。若し人間がいくらでも大きくなるものとすれば、そこでは監房の型の、何千丁かの豆腐見たいな人間が出來上るだらう。そんな人間の頭はどこにあるか？それは豆腐から頭を見付ける人間以外には發見出來ないだらう。同じ型の多くの豆腐たちは、よし形はさうでもあれ、その各々の犯罪の傾向だけの質で固め上げられるのだ。

いつまでも、十五年後でも、同じ家に押し入らうとする強盜、八度監獄に投り込まれても、窓から敢然と歌を唄ふ永島、それに又、此私だつて同じだ。

『へん、珍らしくもねえや』

囚人はその最も困難な、苦しい立場に陥られた時でも、默つてさう感じてゐる。ほんとうは彼は不安や恐怖を持つてゐるのだが。その他

安や恐怖の度がひどければひどい程、彼は自分でそれと相殺する捨て鉢な氣持が必要になつて來るのだ。何故つてどんなに足搔いても、暴れても免れ得ない事だから。

それにしても、無限に長く連なつた錆びた鐵の鎖の、一つの環と同じ獄内の一日は、外の錆びた一日と些も違つた處はないのに、何故永島は、一體何だつてあんなに大きな聲で、全で火のついたやうに怒鳴り出したのだらう。彼れの歌と、私に贈つてくれた生きた蠅で飾られた十字架とは、何かの關聯があるだらうか。

然し、私は永島が奇を衒つて歌なんか怒鳴る男ではない、事をよく知つてゐる。それはもう大分前の事であつたが、永島と私とがある事件で、一緒にやられて法廷に立つた事があつた。その時は、皆やられなくても済んだ位何でもない事件だつたのに、株屋の息子で刺戟を求めるため見たいに、私たちの仲間に入つてゐた若林と云ふ、學校出たての男が、豫審で輪に輪をかけて、事件を大きく作り上げてしまつた。詰り、ある程度の刺戟は彼に必要だつたのだが、未決監になると薬が利きすぎて、彼は自分で求めた刺戟から逃げ出し度くなつたのだつた。それは無理もない事だと私は思ふ。若林にして見れば若氣の過ちでもあらうし、又道樂としては、軟派な道樂よりは氣も利いてゐるし、それに一寸見には道樂には見えないのだから、尤も、そんな事を道樂半分に、又は道樂の代りにやられたのでは、下積みになつてる仲間たちは堪つたものではない。何と云つても、人間は生きてゐるのであつても、化學の藥品ではないのだから、實驗が間違つたと言つて、溝の中へ捨てられる代物とは、いくら貧乏に馴れてゐても、苦勞に馴れてゐても、自ら違はうと云ふものだ。

その若林の、云はゞまあ教室の實驗を、いきなり街頭に持ち出したのが、彼の失敗であつた。彼が又、豫審で無理に事件を大きくしたのも同情出來なくはない。彼にして見れば、詰らない事で引つ張られたと云ふより、大きな事でやられたかつたのだし、又大きく思はせれば、その大きな事件を自白したと云ふので、恩典にも浴れやうと云ふのだから、大したまあ悪意はない譯であつた。

彼はまあそんな無邪氣な氣持ちで、もうすつかり足を洗つて、家に歸つて株の取引きの手傳ひやつてゐた、彼は故郷から公判廷へ出かけて來た。その事件は大したものでもなかつたので、皆保釋で出てゐたのだ。

檢事の論告があつて、事實調べに入つて晝時分になつたので、裁判長が休憩すると云つて、皆が出かけ初めた。若林は彼自身の辯護士を持つて、そしてその辯護士は反對の方面から辯護すると云ふ事が分つてゐたので、被告も傍聽者も興味を持つてゐた。

ところが、その若林の答辯も彼だけの辯護士の辯論も、聞けないやうな事件が持ち上つた。

と云ふのは、若林が一足先きに出やうとしてゐると、すぐその後から永島が、人を押し分けるやうにして、未だドアの手前で、裁判官や

弁護士や、傍聴人なども法廷にウヨウヨしてゐるのに、若林の奇麗に撫でつけたポマードだらけの髪の毛を、引つ掴んだのだ。そして蹴飛ばしたのだ。

『犬奴！』

若林は振り向いた。その顔は腐つた青桐の葉のやうな埃つぽい土色であつた。彼は蹴られた腰の邊りに手を當てて、人々の間を裁判官席の方へ、死に物狂ひに駆け戻つた。

『救けて下さい。私の命を保證して下さい、裁判長！』

と彼は叫んだ。

裁判所の中には異常な空氣が漂ひ初めた。永島は保釋を取り消すと嚇かされた。おまけに『永島たちの前では、一言も口を利けません』と、ブルブル顫ひながら、若林が云つたので、裁判は若林だけを分離して進める事になつた。

『殺す積りではなかつたさ。だが右の腕を一本位貰ふ積りではあつたよ。』

と、永島はその日、若林が汽車で出發する時刻まで止めて置かれた裁判所の門を出ながら、薄暗の中でその女のやうに白い顔を私に向けながら話した。

彼はそんな風に思ひ切つた事を、ポカッとやる男だつた。然し見た處では、私たちの仲間中で一番穏かな人間に見えた。

私はそんな風な、彼れに關する色々な話を思ひ耽つてゐた。もうやがて夕食にならうと思はれる時であつた。永島の事や夕食の菜の事や、放免後の事などごつちやに頭の中で捻り廻してゐると、私の監房の扉が大袈裟にガチャッと鳴つた。私はピクッとした。幾度聞いても監房の扉の音は、全く監獄にピタッとしてゐる。あんな種類の音を社會で聞き得るものではない。私は耳の傍で一日中赤ん坊に泣き立てられる方を、未だしも辛抱する。殊に今日の運動看守と來た日には、それを知つてゐるのかどうだか、ワザとひどく音のするやうに力一杯叩きつけるのだ。

その看守が扉を開けて立つてゐた。

『オイ。』

と云つて、顎をチョッとしやくつた。出ろと云ふんだとは思つたが、私は腰を半分浮かしたまゝ、

『何ですか』

と訊いた。

『出るんだ。』

と、章魚の吸盤に似た口を開いて、運動看守が云つた。

私は出た。そして監守溜りの一隅の、法廷の粗末な縮圖見たいな調室に入れられた。彼は私の後ろに立つてゐた。正面のドアを開けて、芝居の舞臺見たいに一段高くなつてゐる所へ、部長が出て來た。彼は机の前に立つたまゝ、未だ椅子にも腰を下さないうちから、

『おまへは今日歌を唄ふのを聞かなかつたか』

と訊いた。そして、瞼を下した。

『何ですか』

『歌を聞かなかつたか、と云ふんだ。』

波止場の隅に捨てられたワイヤロープを、彼の口髭から聯想して、私はゐた。

『長い事もう歌も聞きません。』

『馬鹿！　お前が運動に出てる時、十五房が窓から半身乗り出すやうにして、怒鳴つたぢやないか、あれが聞えなかつたか！』

『あ、あれですか？』

『あれですか、とは何だ！　聞いたゞらう。何の歌だつた。』

『あれが歌だつたのですか？　私は又何だらうと思つてゐました。』

『おまへは十五房の唄ふのを聞いたゞらう。そして半分顏を出したのも見たゞらう。』

『私は見てゐました。私の家のある方の空を。』

『十五房を見なかつたか。』

『ハイ、見ませんでした。』

『歌は聞いたゞらう。』

『ハイ。』

『どの方面から響いて來た！』

私は部長の顏をちよつと見た。彼はボツボツ安心しかけてゐるやうに見えた。

『私は又、天が叫んだのかと思つてゐました。』

『馬鹿！』

それから口ぎたなく私を罵つた。私は下を向いて低氣壓の去るまで、葡萄に似た赤褐色の囚衣の膝を見詰めてゐた。

『どうしてもお前は、天が怒鳴つたと主張するんだな。記録に取つてもいいだらうな。』

と、遂々痺れを切らした部長が言つた。

『ハイ、天が叫びました。』

と私は答へた。

私と一緒に運動に出た、他の囚人たちも十五房が唄つた、とは云はなかつたと見える。十五房は懲罰を食はなかつた。

それにしても、他の連中は何と答へたのであらう。不思議なものだ。彼は十五房を知つてはゐなかつたであらうのに、彼を不利な立場に置きはしなかつたのだ。

面白い事には、その時の運動看守はそれ以後、段々人間が練れて來たやうに思はれた。彼はかう思つたのではあるまいか、『囚人に罰を食はさなくても、囚人であるだけで充分罰を食つてゐるのだ。』と。

實際、それはその通りだ。そして又、懲罰を食ふ囚人も隨分多いのだ。

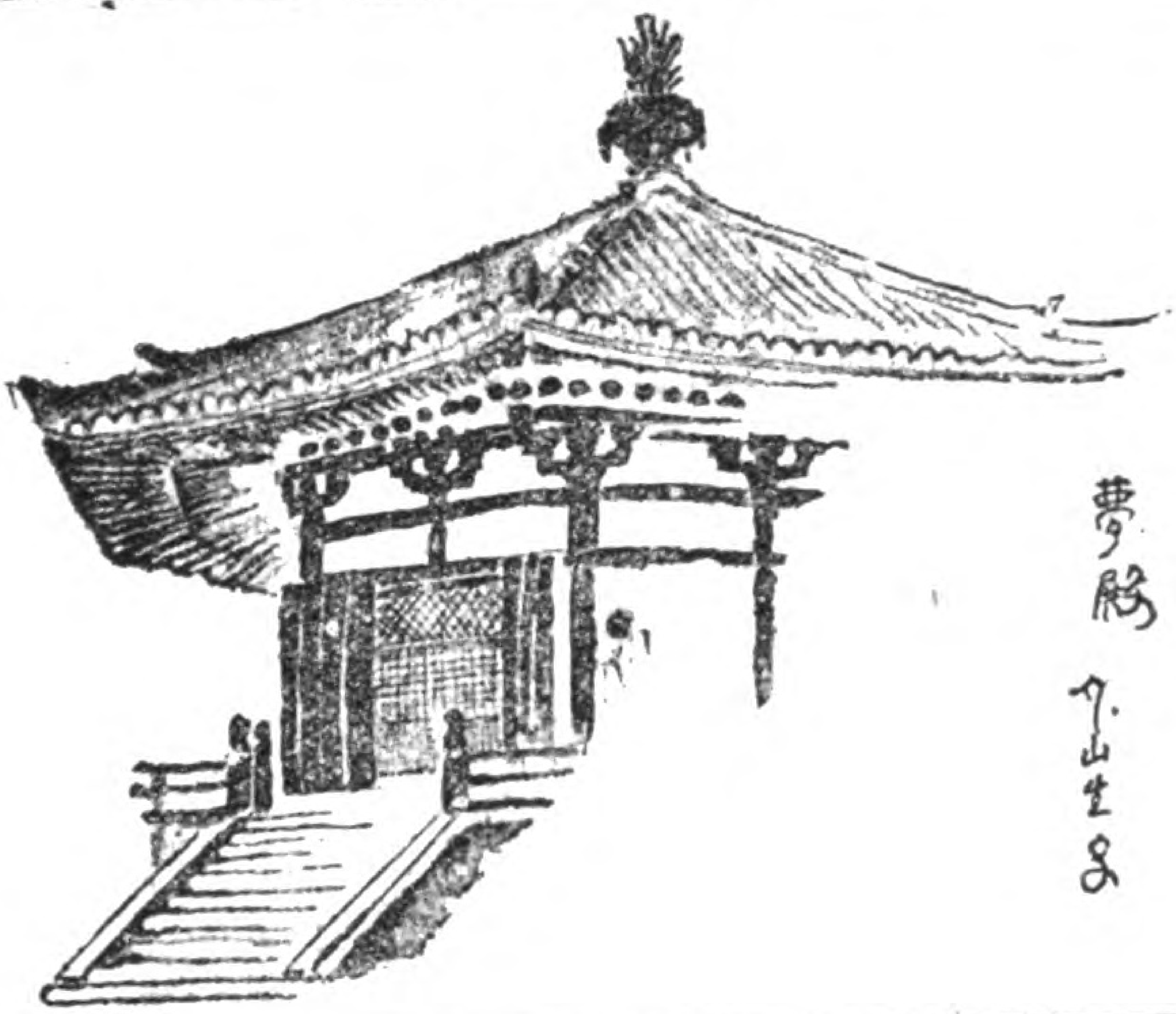
監獄には變つた事件はさう毎々起らない。

私も、此話を此んな變化のない處で打ち切りたくはない。それは變化のある話も稀にはあるのだから。

だが又、こんな變化のない勞役に從ふ囚人もある。それは監獄中の監房や事務所などに使ふ、水道の水をタンクに押し上げるポンプ係である。

彼は朝から晩までポンプを押してゐる。眞冬でも彼の額からは汗が流れてゐる。彼の傍を通つて運動場に出て行く。私たちを見る彼の眼は、砂糖臼に縛りつけられた牛の眼に似てゐた。私は彼が二年も經つたら、きつと恐水病に罹るに相違ないと思つた。

——一九二七、七、二八、——



長篇 夢殿

中里介山

小引

(發端)鳥物師の描いてゐる天人の繪が蘇我の河上の娘に酷似してゐることを秦河勝が不審とし一場の議論となつたが、歸る時、河勝は法隆學問寺の建築を深き感慨を以てながめる。

(第二回)聖德太子の舍人調使麿が太子の愛馬の烏の駒を太子生誕の地なる橘寺から牽き出して飛鳥の都より斑鳩の里へ急ぐ。

(第三回)太子夢殿入定の夜、めいらの森に魔神が戯るゝ事、攝洲難波の津より、隋亡びて唐起らんとする重大報告あり、高向の學生その報告を太子に傳へんとして斑鳩の夜を彷徨する事、鳥物師自作の繪姿におびやかさるゝ事。

(この回)太子烏の駒に乘じて幽明の天地に遊び、調使麿馬をつないで、大伴の小手古の郎女が天皇の寵衰へたることを恨み、宮廷の内秘を姦臣に洩らして大事の端を開く前朝不祥事の暗示を夢む。

第四回

「調使麿、調使麿」

瞑眼を撫でゝあたりを見廻した時に、調使麿は、自分といふものが、上宮王院の右の御殿の中に、島の駒の股を枕にして、うたゝねの夢を結んでゐたことを發見した。

その自分の存在を疑ひはしなかつたけれども、自分の耳を疑はずにはゐられなかつたのはたしかに、自分は今呼びさまされたのに相違ない。わがその耳もと近く聞えた御聲は、まさしく殿下の御聲である。

「調使麿、調使麿」

とたしかに二度までお呼びになつたそのお聲で自分の夢が破れたのだ。さうで無くて何者が此の場で我を呼ぶ筈があらう。まさしく殿下がお呼びになつたものに相違ないが、さめて見ると、どうも夢うつつの境がハツキリしない。

眼をさます途端にハツとお返事をして、夢殿の御前の庭の眞砂の眞白いのに、その眼を射られたことを覺えてゐる。だが、それにつゞかせ給ふ現實の御聲が無いので、調使麿は、さめての後再び夢路にあるやうな心地で、夢殿の御階段の上から連子の窓のあたりを跪いて拜んでゐる。

その時、連子の御扉が音もなく、さつと押し開かれて、その中から、すつくと歩み出で給ふのは、紛れもない上宮太子殿下の御姿であつた。

「調使麿、調使麿」

ほがらかなお言葉で、わが名を呼ばせ給ひながら透きとほるほどの白妙の裳を引いて、御扉の中から殿下が今し、階段をお下りになりつつ、こちらに向ひお出ましにならうとする處である。

「はつ」

と調使麿は恐懼して走り出で、階段の御前にて平伏し

「御前に伺候いたしました」

「おゝ、調使麿、島の駒は來てゐるか」

「はい、昨夜から私と一緒にあれに控えて御待ち申上げて居りまする」

「さうか、では、鞍を置いて鐙をかけるやうに」

「殿下には、何れへかお出ましでゐらせられますか」

「うむ」

「飛鳥の都へお歸りでございますか」

「さうではない」

「それでは攝津の國の四天王寺へ………」

「いゝえ、さうでもない」

「然らば、龍田の明神へ御參詣になりますのでございますか」

「さうでもない」

「山背の國、葛野の別宮へお成り遊ばされますか」

「いゝえ、さうでもない、今日は少し遠い處へ出かけて見たいのだそれでお前の親父では少し大儀かと思ふ故に、お前を呼び寄せたのだ」

「有難い思召でございます、いづれへなりとも御供を仰せつけ下さりませ」

「兎も角も、鳥の駒をこれへ廻すやうに」

「心得ましてございます」

彼は軽快に身を翻して厩へ戻ると、駒はもう心得顔に、すつくと立つて、勇ましく身ぶるひをした。

いつの間に誰がしたのか、白檀の鞍も置いてあるし、金銅の鐙もかけてある。殿下お出ましの心を知つて、早くも駒自らが身づくろひしてお待ち受け申すやうにも見える。

「鳥、太子殿下がお出ましになるのだ」

駒の轡を取ると素直に従つて水が流れるやうに鳥は御階段の前まで馬蹄軽く進み寄つた。と見れば、殿下にも、やはり軽快に身を翻して早くも馬上の人となられ

「調使麿、つゞけ」

「心得ました」

主従二人と一頭の駒とは、夢路を走るものゝやうに上宮王院の庭の眞砂を踏んで、また人靜かなる斑鳩の里の暁を走るのであつた。

「あれく、殿下が烏駒に召して、いづれへかお出で遊ばしまする、烏駒に召して白雲を踏んでお出で遊ばしまする」

夜が明け放れたと見えて、天地は著しく明るくなつたが、ふと下の方で、斯ういつて人の呼ぶ聲の高いのを聞いたものだから、調使麿は思はず足許を見ると、遙かの下、法隆學問寺の門の前に二三の人が天上をながめながら右往左往に走つてゐるのを見た。

その聲で呼びさまされたと見えて、多くの人が斑鳩の門前へ集つて來ては、此方を打ち仰ぎながら口々に何かさわいでゐるのが、はつきりと見える。衣冠束帯の宮人もゐるし、物の具をしたますらをもゐるし、寺々の僧尼も見てるし、後宮の女房達も、學生も工人も、衛士達も、斑鳩寺の門前から中門の櫻、金堂の前、五重の塔の周圍の空地といふ空地には群がつて、ひとしく此方を仰いでさわいでゐるのが手に取るやうに見える。

そこで、調使麿は、またも自分の立場がはつきりとわかるやうに感じた。つまり、あの人達と自分のゐる處とは全く立場がちがうのだ。あの人達がいくら騒いでも自分達には追從が出來ないのだ。自分も亦、こゝから殿下の馬首をお返し申して、あの人達に一言の暇を告げるの餘裕もなくなつてゐるのだ。天上と地下との相違だ。天上を行く者は限りなき空間を征服するのだが、地上の人はたゞ徒らに手を束ねて地だんだを踏むに過ぎないのだから。

「左様なら……行つて參ります」

調使麿は大きな聲で挨拶をしてから、向き直つて馬上の殿下のお姿を拜すると、地上の事には一向に御頓着がないものと見えて、斑鳩の里を見返りもなされず、眞直に前途に向つて馬を進ましめられるだけで、法隆寺内外にあの通り人が集まつて、騒ぎ罵つて、やがて歎息の

駒を渡らしてゐるのにもお耳を傾けらるゝ筈はなく、只管に天空に向つて馬首を進めらるゝ御容子だから、調使麿も馬側に追ひすがりまして、再び斑鳩の里を見返す事も見おろすこともしなかつた。

雲を踏み、霧を凌いで駒は只管に天空を走るのみである。だが、駒に取りついた調使麿は、どうも自分が天空の上を空に駕して飛んでゐるやうだとは思へない。飛鳥から斑鳩へ往復する時と同じやうに陸地の上をやゝ輕快に走つてゐるやうな心持に過ぎなかつた。それにもかかはらず、雲の絶間から行手越方を見ると、どの山もこの山も皆んな自分の脚下にしか見えないのが不思議でならなかつた。

「調使麿、あれを見よ、東海のほとりに白く見える山があるだらう、あれが富士だ、それから此方への山つゞきが信濃の山だ。あれはまた越の山——白山、立山」

殿下には馬上から、雲の下に見ゆるあの山この山を指して、調使麿にお示しになるのを、調使麿は、こぼれた豆を拾ふやうに忙がはしく見下すだけであつた。成程、千山萬岳のうち、頭角を現はしてゐる山々にはそれ〲名がある。殿下はそれを一々お指圖になるのだが、調使麿には、たゞ一つ、天雲も行きはゞかると聞いてゐた富士の峰の雪を頂いた姿だけが、銀の置物のやうに眼にうつつただけで、その他は脈脈として、山が東西南北に走りつながるのを見るだけであつた。

それでも、殿下には少しも駒の歩みをとゞめ給はず、調使麿も亦敢て駒の手綱をゆるめやうとはしないで、只管に走るのであつたが、今日は、全然、足の疲れといふことから解放されて、自分の足が駒の脚と同じやうに輕快に飛ぶのを覺ゆるのみだ。

さしもの山々も何時しか盡きると、四方は渺茫たる大海原となつてゐた。殿下をはじめ自分たちは、やはり平地を行くやうにその海原の上を走つてゐるのであつた。山である間は下界といふ下界は何處を見ても山であつたが、海になつて見ると、何處まで行つても海の上であるらしい。

そこで、調使麿はやゝ不安を感じ出して來た。夢殿を出立してから、時といふものゝ觀念をホト〲忘れてしまつてゐたのだが、何處まで行つても單調一色な海原が餘りに廣いと見て、はじめて多少の不安が兆して來た。

下界は最初から白み渡つてゐるのだから、時といふものゝ經過は常のやうに繰り返されてゐるには相違なからうが、どこまでが朝で、どこまでが日中であつたか、それは今顧ると漠乎として自失するばかりだ。この白み渡つた下界の光りを朝と見れば朝だが、時に囚はれて見ると、その白みは未明の白みではなく黄昏の末期に近づいた白みとも見えるのである。そこで、時の不安が著るしく調使麿を抑えたものだから

「殿下、もう日が暮れるのではございますまいか、山遊びもこの位に遊ばされて、斑鳩へお歸りになつてはいかゞでございませう」

と申上げて見たが、殿下には何のお答もなく、僅かに馬上でお頷き

になつたばかりで、相變らず後ろを顧みやうともなされない。

　さう思ふせいか、海の上が黝ずんで來た。和らかな色の衣が襲つて來た。一たび時に囚はれはじめた調使麿の不安は夕暮の色と共に濃くなるのを奈何ともし難かつた。

「調使殿、心配せんでもよい、此處まで來たついでだから、今宵は一つ故郷をたづねて、久々で故人にも會つて行きたいと思ふ」

　調使麿の不安を憐れに思召してか、殿下が慰め顔にかう仰せられたのが、また一層調使麿を當惑せしめたやうでもある。

「故郷と仰せられまするのは」

「申すまでもない大和の鵤余の里だ」

「大和へお歸り遊ばしますならば、恐れながら、それは御道筋が違うやうに心得まする」

　調使麿の不安は去らなかつたけれども、太子はそれ以上に返答をお與へにならない。たゞ心にこそ多少の不安は懷いてゐるもの丶調使麿の足は、鳥駒のそれと同じやうに幾ら歩いても疲れといふものを更に感ずることのないのは最初と少しも變らないことが賴もしい。

　日は全く暮れた。

　だが、これが果して夜といふものか知ら。十日あまりの月の光に青い薄絹をかけたほどの色あひが、天にも地にも一ぱいに流れてゐるだけだ。時は經つて行くだらうが、天地の色はそれよりは濃くも薄くもならなかつた。

「あゝ、大和が見えました。あれは鵤余の里でございます」

と調使麿は我を忘れて懽然として叫びながら眼を拭うて見た。

　さしもの大海原も何時しか盡きて、調使麿の眼界に入るものは山河襟帶の平野である。それは慥かに葛城山の上あたりから見慣れた大和平野のすがたに紛れもない。駒はその平野の上を南に鵤余の里あたりへ向つて急ぐことも疑ひがない

　山を越え、海を越えて、故郷の土地に來た。十年も旅をして、再び故郷の山河に接するやうな懷かしい心持が淸水のやうに調使麿の心の中から湧き出して來たが、それが忽ち嗚咽して泣きたいほどの心持に抑えられた、その瞬間の擾ましさが、調使麿にはわからない。

　二たび見ても、三たび見直しても大和の國は大和の國に紛れはないけれど、昨日、花見の歌をうたひながら出て來た大和の國に相違はないけれど、今日はまた何といふ悲しい色だ。白日の下にかゞやいて花の飛鳥の都を昨日立ち出でゝ、今日この月光の上に青い薄絹をかけたやうな岡本の宮居へ歸らうとは、泣くにも泣けない斷腸の光景ではないか。

　彼は、こゝで先日のやうな童謠でもうたつて、心を紛らかさうとして見たが、唄どころではない。寧ろ、眼をつぶつて、この痛々しい青白の色を見まいとした。この物悲しい風物に、到底まともには接しきれないものだといふ傷心で思はず眼をとぢてしまつたのである。

　併し、今まで小休みもしなかつた鳥駒が此處へ來て、はじめてヒタ

り歩みを止めて動かなくなつたのだから如何ともし難い。

調使麿は、いやでも一度閉ぢた眼を見開かねばならなかつた。

眼を開いた時に、今度は自分の立つてゐる處が正しく地上で、烏駒の歩みをとゞめて立つてゐる處も同じく土の上で、殿下に於かれても早くも地上に下り立たれてゐるのを見た。無論、人と馬とを送つて來た筈の白雲は何處へ行つたか影も形もない。

「あれが橘のお宮でござりまする」

「やがて夜も明けるだらう、それまで靜かに駒をいたはつて……」

太子は先に立つて歩かれる。調使麿は烏の駒の手綱を取つて、靜かにそのあとをお附き申して行手は、昨日、自分がこの駒を牽き出して、花見の歌をうたひながら立ち出でた墨染の櫻の咲く橘のお寺であつた。

眼には見えてゐるが、その間が可なりに遠い案内は熟しきつてゐるのだから焦らずにその間を歩ませて行くうちに、成程、殿下の仰せられた通、時は夜明け間近であつたものと見え、この時分から、天地の色がまた變りはじめて來て、物悲しい水のやうな青い色が、一足づゝに白くなつて行く、その白い色に極めて少しづゝ赤い色がさして來た。調使麿の心にもそれだけづゝ喜びの色が増して行くやうである。

暫らくして、四方から夥しい歡呼の聲が起つた。

「厩戸の皇子様がお歸郷になりました。お出迎ひを申上げろ」

殿下が故郷と仰せられたのはこれだ。

今、數限りのない人が山の蔭や木立の間や、宮居の中や、松の下や、樓の上から續々と出かけて來るのである。それはまさしく太子のお出になつたのを歡迎の意味であることはたしかだけれども、いづれも極めて靜粛に歩いて來る。僅かの間にお馬の通る道筋は人垣を作つてしまつた。その上になほ續々として、且、極めて靜粛に夥しい人が繰り出して來るのであつた。

調使麿は、やはり烏駒の口を取つて、この夥しい歡迎の人垣の中を通り抜けて行く間に左右を見廻したけれども、見知つてゐる面とては一つも無かつた。先きへ進んで行くほどに高位高官の服装をしたお出迎ひの者も少なからず見えるけれども、それとても、日頃飛鳥の宮廷や斑鳩の學問所で見慣れてゐる面影は一つも無いのであつた。

太子は、そこで馬からお下りになると、お出迎ひの人達は渦を卷いて、その周圍を取りかこみ、

「殿下には、ようこそお渡り下されました、御父天皇様には殿下のお着を待兼ねてゐらせられまするが、とりわけて大行天皇様には一刻も早く殿下に御對顔あらせられたしと再々のお使者でござりまする」

取り圍んだ夥しい人數を分けて、粛々と練つて來たお使者の一行が太子の御前に立つて斯く申上げた。

調使麿はそのお使者の口上を解せない事に思つた。

何となれば、殿下の御父君橘の豐日の天皇は今は世に亡き御方でゐらせらるゝ、それに大行天皇と申上げるのは、さきつ頃申すも恐多

き殺逆の難に遭はせ給へる泊瀬部の天皇（崇峻）の御事で、聖徳太子には御叔兄に當らせらるゝ御方であつて、今はいづれも此の世にお在しまさぬ事は、こゝに集る群集もお使者も知らない筈は無いのに。

あゝ、それではこれ等の御方は誠はこの鯰余の里に世を忍んで隠れておゐで遊ばすものか知ら――殿下が此の不思議な口上のお使者に對して何と御返事を遊ばされるか――調使麿はそれを懸念にも思ひ興味にもしてゐた處が、太子はその何れへも御明答はなさらないで

「兎も角も、夢殿に歸りて後……調使麿そちは此の烏駒を厩へ伴うて大切にいたはり遣はせ」

「はつ」

調使麿はその仰せを畏むばかりであつた。さうして烏駒の口を取つて御厩の方へと歩んで行くと、さしもの人波がおのづから道を開いて通して呉れる。通してしまうと、その人波は滿月のやうに流れて水のやうに消えてしまふ。

あたりはもう人の子一人ゐないやうになつた。

「あゝ、こゝは飛鳥の大佛だ」

昨日の朝、高麗笛を取りに立ち寄つた處、門といひ庭といひ、どうしても、その飛鳥の法興寺としか受取れないが、それにしても四邊の野原が廣過ぎる、廣過ぎてさうして荒れ過ぎてゐる。尺に餘る雑草が茫々と生えてゐる處に、離々とした斷礎がつゞいてゐる。

「昨日通つて、智堂さんから笛を貰つたところなのに、どうして、こんなに變つたらう、あんまり變りやうが迅い――」

調使麿は撫然とした物思ひに堪へなかつた。それと同時に眠くてたまらなくなつた。昏々として眠くてたまらない、まだ眠つてはいけない、昨日したやうに、此の烏駒を斑鳩の上宮王院の御厩までつれて行つて、それを休ませた後でなければ自分が眠つてはならないのだ。今眠りに落ちては務めが荒廃する。その多少の責任感から、調使麿はこの眠氣を押へやうとして懐ろへ手を入れて見た。ある〳〵、昨日の日此處で智堂法師から受取つた高麗笛はたしかにある。これを吹き鳴らして睡魔を拂はうではないか。

調使麿は、高麗笛を脣に當てゝ見たが、どうしても鳴らない。却つて昏々と襲い來る睡魔の爲に、その持てる笛をまで取り落さうとして遙かに物に突當り氣味を、あはたゞしく避けて見ると、自分の前面に立ちふさがつてゐるのは墨染櫻であつた。

「あゝ、この墨染櫻も大きくなつたなあ」

調使麿は眠い目をみはつて、朦朧たる墨染櫻の成長ぶりに驚嘆した。それは橘寺にある墨染櫻も、法興寺にあつた墨染櫻も、木ぶりは同じやうなものだが、今、眼前に見るそれも、やつぱり木ぶりは同じやうなもので、しかも形はそれに何倍するほどの大木になつてゐる。

彼は、いつの間に、こんなに大きくなつたのだらうと、木を撫でゝ見て再びそれを確認せずには居られなかつた。すべての花は散りつく

じたのに、時を忘れて咲いてゐる、しと〳〵と雫のやうに落ちてゐるあの花びら、智堂さんでさへも、あの花の下には駒をつなぐなと止めた位だ。此處で調使麿は意地にも我慢にも眠くてたまらなくなつてしまつた。さうなると、不雑な想像もいつか消へ去つて、無意識に黒駒の手綱をその樹の幹にぐる〳〵と捲きつけて、自分はその根元へ崩折れるやうに倒れると、早くも深き眠に落ちてしまつた。

どの位の間眠つてゐたか知らん。

ふと手拍子打つ音で調使麿の眼がさめた。醒めて見ると、墨染櫻の大木や、廣い野原や、荒草や、礎石はそのまゝで、木の幹には黒駒がつながれたまゝ神妙に草を食つてゐるのも以前と同じことだ。

たゞ見慣れないのは……少しく上方に、古色を帯びたすばらしい大殿堂が、左様、東西廿丈、南北は十丈もあらうかと思はれる高麗風の大建築が、戸を閉ざされたまゝで現はれてゐることであつた。

無論、法興寺の本堂とは違ふ、精舎ではなくて宮殿の形をしてゐる。つい、眼の先にこんな大きな建物があらうとは全く思ひ設けぬ事であつた。可なりの年數を經てゐることは一見してわかるし、それも扉をとざして人の出入を絶すること可なり久しいから、風淋雨打の趣きが建物が大きいだけに何となく妖氣を漂はせてゐるのである。

この建物の中で、今、自分を呼びさました手拍子の音がしてゐるのである。

此の幾百年人の氣を脱したらしい古殿堂の中に人があつて、拍子面白く手を拍つてゐるといふことが、調使麿をして身の毛をよだてさせるほどの怪しみの感を持たせた。怪しいのはそれだけではない。

この手拍子が聞え出すと共に、今まで、しと〳〵と雫のやうに重く下を向いて散つてゐた自分の頭上の墨染櫻の花びらが、一齊にその大殿堂の堂の手拍子の音の方へ向いて散り出したことである。

丁度、それは何がしの行者が、船の中で鐵鉢を上げると、陸上の米倉の米が悉く空を飛んで、海を渡りその鐵鉢の中へ落ちたといふ物語を目のあたり見るやうに、墨染櫻の花びらはすつかり手拍子の音に引寄せられて、燦爛として古殿堂の欄と扉に向つて吹き散るのであつた。

いかにも面白い手拍子だ。あの手拍子の音律が妙に自分の心を引く。花びらが引かれるの無理はない。

櫻井の村の伎樂の巧者か、催馬樂の舞の上手でなければあの拍子は打てない。何といふ冴えた手拍子だらう。心憎い業だ——その時、調使麿はまたも自分の懐ろへ手を入れて見た。二たび高麗笛を取り出して、あの手拍子に調子を合はせて見やうとしたのだが、その途端に、今まで一筋に殿堂の扉の方へ吹き寄せられてゐた墨染櫻の花びらが、この時分には、同じやうに吹き寄せられながら、ひら〳〵と舞ひ出したのを見ると、調使麿の眼があやになつて、その片々散亂する落花の舞に我を忘れて見入らざるを得なくなつたのだ。

その時に大殿の階の上の扉が颯と開いた。

欄の上に現れたのは赤裳を長く引いた花のやうに美しい宮方の郎女であつた。

「あゝ、花が散る、花が散る、花が散るわいな」

といひながら郎女は、なほ手拍子を打つて、欄の上を行きつ戻りつしてゐる。打てば打つほど花びらが散る

「花が散るわいな、花が散るわいな」

郎女は泣いてゐるのであつた。

興に乘つて手拍子を面白く拍つてゐるのかと思へば泣きながら躍つてゐるのであつた。調使麿にはその擧動が解せない。

「あれは顧愷之の筆法なんだよ――鳥はよくあんな事をやりたがる」

慣々しく後ろから自分の肩を叩いたものがあるから、調使麿は驚いてふり返ると、それは兼ねて熟知の高向の學生であつた。

「え、高向の學生さんでしたか」

「あゝ、君、あれは顧愷之だよ、わかるかい」

「え……」

調使麿は高向の學生と同じやうに、欄の上に舞ふ宮女の姿を見入つてゐるのだが、學生のいふ處がよく呑込めない。

「鳥佛師はよくあれをやりたがるのだ、あの線を見給へあれは流水行地の、遊絲的描法といつて、愷之の風韻をそのまゝに眞似てゐるのだ、人物の衣褶の秀媚な處を見給へ――春蠶の絲を吐く如く、初見甚だ平易といふ愷之の骨法を自由に自分のものにして消化してゐる處を見給へ。形似に於ては時に失あるが如しと雖も、細に之を視れば六法兼ね備はるといふ行き方だ――あまりよく消化し過ぎてゐるから、その點が鳥佛師のあやまられ易い處だ、鳥のは獨創ではない、模倣だ、たとへば法隆寺の釋迦三尊も北魏時代の雲崗石佛あたりの意匠骨法をそのまゝ襲用したゞけで、何等獨創の趣を見ることが出來ない、原本を知らぬ者には多少の驚異があるか知れないが、知るものは冷笑あるのみだ、彼の表現を古拙といふけれど、本當の古拙はあんなものではない、眞の古拙には古拙のうちに尊厳がなければならぬ、鳥の作に至つては、やゝもすれば作中に一種の低劣な醜悪が面を出してゐるのはどうだ、我々は寧ろ、上代の埴輪人形の中に古拙味を見出さうとも、鳥佛師の作物の古拙には共鳴出來ない、その古拙は鳥のものではないからだ、借物の古拙だ――といふのが、君、鳥佛師の作物を見る靜なる方の一説だよ」

「さうか知ら」

調使麿には、やはり高向の學生の論法がわからない、寧ろこの際何の爲に、そんな事をいつてゐるのだか、わからない。

欄の上では、美しい宮女が前と同じやうに手拍子を打つては散る花をながめて行きつ戻りつ舞ひながら泣いてゐる。

「併し君、あの婦人の表現、あれは借物ぢやないよ……顧愷之もよく艶麗な婦人を描く、愷之の筆になるといふものゝ輸入品を僕は蘇我氏の所蔵品の中で發見した事はあるが、どうして、神仙、道釋、肖

像、人物、山水、風景、動植物に至るまで行くとして可ならざるは無き有樣だが、艶麗な美女を描いて人を魅する處の味な行き方には心憎いと感ずるほどのものがある、だが、鳥佛師がこゝへ現はしたのは斷じてその眞似ではない。つまり筆法と意匠には、顧愷之あたりを借り用ひたことが歴々として爭うべからざるものに相違ないが、人物の表現こそ鳥佛師獨得のものだ、昨晩、僕は偶然、佛師の繪所を驚かして、ハツと此の婦人の表現につかまつてしまつたのだ、――さうして鳥佛師、この人にはモデルがありますかと聞いて笑はれてしまつたのだ、僕は知らない、君は無論知るまいが、何とあの美人は見たやうな女ではないか、現に我々の時代に、我々と同じやうに生き、我々と同じやうに遊び、我々と同じやうに現代を見てゐる多數の女性の中にあれがありはしないか」

「さうですかねえ」

高向の學生が頻りに鳥佛師、鳥佛師と呼ぶのが調使麿にはいよ〳〵わからない。鳥佛師が此の場に關係のあることか、顧愷之がどうの筆法が斯うのといふことも、この際何の交渉もない事ではないか。どうしても此の人の議論に取り合つてゐる氣にはなれない、調使麿が相手にならないのに、張合が無いと思つてか、高向の學生は手持無沙汰で、やがて斷りもなくクルリと向き直つて、法興寺の門を出て行つてしまつた。

花は、いよ〳〵盛んに散りはためいてゐる。最前は手拍子の音にのみ操られるやうに散つてゐた花が、今は廊下を踏む足拍子に狂うて散りはじめた。

あの花の一ひら毎に
わたしの
血と肉が
ひら〳〵と
落ちて行く

あゝ、花が散る
花が散るわいな

いとをしい
あの花びら
地に落ちて
淡雪のやうに
消える
心なき駒よ
地に落ちた
花びらを
泥土の中に
踏むことなかれ

あゝ花が散る
花が散るわいな

あんまりその聲が悲しいので、調使麿は見ても聞いても居られなくなつた。そこで

「もし」

と立ち上つて、呼びかけて見たのである。

「郎女様。あなたは花の散ることを歎いておゐでになりますが、その花の散るのは、あなたが手拍子をお打ちなさるからでございます、あなたが足踏みをなさるから、それが大地へ響いて花が散るのでござります、最初には、しと〳〵と雫を滴らすやうに、僅かしか地面へは落ちて居りませんでした、此の花が、あなたが御殿の中で手拍子をお打ちになるその時から撩亂と散りはじめました、恐らくあなたが、そのやうに、花の散るのを惜しまれなかつたなら、花はそのやうに無慘には散らなかつたも知れませぬ、あなたがその面白い手拍子をお打ちになるから花が興に乘つて亂れて散りまする、その妙なる足ぶみをなさるから花が樹にたまらぬのでござります、花の散るのを惜しいと思召すならば、そのお手拍子をおやめなされませ、廊の上を行きつ戻りつ躍りなさる事をやめなければなりませぬ」

調使麿が斯ういつて、小賢しく諫言を試むると、

われとわが花を散らし
われとわが罪に泣く
愚かなる女

わたしは
それを知つてゐる。
打てば花が散り
躍れば花が散る。

それをわたしは
よく知つてゐる
知つてゐながら
打たねば
躍らねば
此の命が
絶えますわいな

郎女は調使麿の諫言に答へるものゝやうに歌ひ終ると、後ろの扉を開けて大殿の中へ入つてしまつた。手拍子足拍子もハタと絶えて今まで吹雪のやうに亂れ散つてゐた花びらは、その時限り一ひらも地に落つるといふ事が無く、落ちて散り敷いた花びらは見る〳〵灰のやうに

變つてしまつた。

その時、大殿の後ろから階段の下へ、いつの間にか瀟洒たる一人の壯士が現はれてゐる。白衣を著て劍を佩びてゐた。

「大伴の郎女はこれにおゐでのやうでゝしたな、只今、これで手拍子面白く歌をうたつておゐでのやうでしたが、あれは小手古の姫ではございませんか」

「待ち兼ねてゐました、そなたは東の漢の直駒」

「いかにも、漢の駒でござりまする」

階段の上の扉は再び開かれた。そこから現はれたのは、紛れもなく、たつた今まで手拍子打ちながら散る花をながめて泣きつ踊りつしてゐた郎女であつた。その時と同じやうに新しさは變らないが、その眼は乾いてゐた。乾いてゐた眼の中には炎のやうな光が燃えてゐるのが、程離れた調使麿にもあり〳〵とわかる。

「待ち兼ねてゐましたわいな、東の漢の直駒」

「大伴の小手古の姫、拙者も今まであなたを探がして居りました」

二人は誰憚からず名乘つてしまつたのである。誰憚からずといふうちにも、現在此處には數ならねども最前から調使麿が控えてゐるのに、それもあの郎女は心得てゐたければならない筈なのに――無下にお互に名乘り合つてしまつてから、あの秘密猶はどうだ。

郎女が階段を踏み出すと、壯士はその手を取つて助け下ろし、廣庭の前を、あたりに心を置いて、あゝして、ひそかに物語りしながら步いて行くのが憎い。

「駒殿、わたしは、もう何もかも一切の秘密を皆んなお前に話してしまひます」

「拙者をそれほどに信じて下さるのを有難いと存じます」

「その代り、お前は、わたしの爲に復讐をして下さい」

「復讐をとは誰をですか、現在のあなたに、それほど他を怨まねばならぬ相手があらうとは思はれませんが」

「いゝえ、肉を食ひ、骨を裂いてやつても飽き足らぬ怨の相手があるのでございます」

「初めて承はりました、お話し下さい、事と次第によりましては随分お力になり得ない限りもございますまい、駒は富も名譽も門閥も持ち合はせはございませんが、それ等のものを持つことによつて得られない勇氣だけは失はないつもりでございます」

「それを、お前に、わたしは頼もしいと思ひます、富も名譽も門地も欲しがらぬものでなければ本當に强い人にはなれません」

「駒を、その强い人の端くれとでも思召すなら、何なとおつしやつて見て下さい」

「駒殿、わたしは君の寵愛を人に奪はれました。女が寵を奪はれた事ほどの悲慘と苦痛と怨恨とが此の世にあらうと思ひますか」

「はゝあ……さういふ事は駒にはよくわからないのですけれど、お察し申すことは出來るつもりです、さうして、あなたはその深刻な

戀の怨みといふものを、どなたに向けて晴られるのですか」

「憎いのは、あの蘇我の河上の娘でございます、あの娘が入内したばかりで、わたしの御寵愛が奪はれました、わたしは廢物にされてしまひました、自分の戀が奪はれた上に世間からは嘲りの的となり……一族の運命は落ち目になり、あらゆる運命の光が逆轉した悲慘を見るその眼で勝ち誇る戀の勝利者を見なければなりませぬ……この復讐を遂げずして死ぬことは、死が生きてゐるよりも一層の慘酷です」

「それで、拙者に、代つてその無念を晴らせといふ、あなたの所望ですな、つまり、河上の娘を亡きものにせよといふのが、拙者へのあなたの御注文と承知致しますか………」

「その通りです………それを爲し得る勇者は、わたしの知れる限りでは、そなたの外にありませぬ」

「お待ち下さい――この御信任ばかりは拙者にも荷が重過ぎる」

「その代り、お前が聞いて下されば、わたしは有ゆるもの丶犧牲をお前の爲にさゝげてしまひます」

「折角ながら、それは難中の難事といふよりは不可能といふべき事です」

「何故ですか、たゞ一人のあの戀の敵を、お前ほどの勇者が、わたしの爲に亡ぼすことは出來ないのですか、あの憎いたつた一人の河上の娘といふ女を………」

「河上の娘の背後には蘇我氏のあることを忘れてはなりませぬ」

「蘇我氏が何です……」

「河上の娘は蘇我の大臣殿の息女でございます」

「蘇我の大臣の息女が何です、わたしも天押日命の末、大伴の一族でございます」

「それはさうでございませうが、今の世で蘇我の大臣殿の一族を向ふに廻すのは堤を切る大河に向つて小舟をやるやうなものでございます、犧牲を覺悟ならでは向へませぬ、併し、その犧牲はたゞ犧牲そのものだけの効用しか成さないで、河流そのものには微塵の手傷をも與へることは出來ないでございませう、それよりは、あなたとして別に、もう少し賢明な復讐の手段をお考へになつたらいかゞですか」

「戀の爭ひには計略や手段の餘地はありませぬ、怨みに燃ゆる心に餘の力を計つてゐる餘裕がありますか………」

「感情突きつめた時、餘裕といふものを殘し得ぬのは狂者の振舞でございます……心を鎭めて、よりよき復讐の手段をお考へなされませ、拙者の考ではあなたの御容色といひ御聰明といひ、河上の娘に優らうとも劣れるものとは拙者はじめ誰も思ふものはございませぬ、たとへ一時の御寵愛が他にうつらうとも、永久の勝利があなたにあることをお信じなさいませ、自ら侮るものこそ人に侮らるゝのでございます、御自愛遊ばして、再び上の御寵愛が、あなたの御身にうつる時を豫想して、戀の敵をお見返しなさるやう、一時の忍耐が何よりの復

醜ではありますまいか」

「それは違ひます」

「どうしてゞすか」

「戀の戰ひは一戰に敗るればそれが最後でございます、一たびの戀の敗れは即ち永久の敗れといふことを お前は知らないの、男子の望む富貴功名は七度失うても八度目に戻ることもありませう、女子の求むる戀は一たびうつりては二たび歸りませぬ」

「それは餘りにおあきらめが早う厶います……周到な愛情と忍耐とによつて、一旦失うた戀を取り返し得た例が此の世に幾つと無いとは申されますまい、よし、かりにさうで無いとしても、今の世で、蘇我氏の一族を相手に取つて爭うの無智と無謀とに比ぶれば、その手段の穩當にして、理に合してゐることをお氣のつかれぬほどのあなたではないと信じます」

「駒、お前は自分の卑怯を隱す爲に、わたしに向つて諫言をしますね」

「卑怯とは」

「男らしくもない、富も名譽も門閥も怖れぬ勇氣を持つと廣言しながら、相手の名を聞いて急にしり込みする、その態度を卑怯といはずして何を卑怯といひませう」

「否え、卑怯といふのは違ひます、人間の力で爲し得ることゝ、爲し得ざることゝの境といふものはあるものでございます……今の世で、蘇我氏の一族に當るのは、卵を以て巖石に當るやうなものです、その無益なのは繰返して申すまでもありません」

「では、お前には、わたしが頼んだ復讐はお前の手では出來ないといふのですね」

「まあ、苦しいけれども……これはきつぱりと御辭退を申すより外ありません、惡しからず思召し下さい、その代り……」

「否え、もう宜しい、現在のわたしには、その代りといふ條件は一切不用です、これに代るべき代償のものはありません、出來なければ出來ないで宜しいのです、それだけでもう澤山」

「惡く思召しては困ります、それが結局拙者一人の卑怯ではありませぬ、あなた樣の御身と御一族の爲に、駒はこのお頼みを辭退致すのでございますから」

「もう宜しい、頼みません、お前に頼まなくとも、わたしに代つて憎い者を亡ぼす、お前の力より、もつと大きい力があるから、その時思ひ知るがよい、それをお前よく覺えて置いて、今日は、わたしからの頼みをすげなく振り切つた罪の償を近い將來に殘さないやうにお氣をおつけ……」

「え、それでは、あなた樣の爲に甘んじてその復讐の任に當る勇者が拙者の外にあるのでございますか、それは……その位ならば、わざわざ拙者にお打ち明けなさらずとも」

「その力に比ぶれば、お前の力などは云ふに足りたい、今に見よ、あ

の憎い河上の娘の身の上ばかりではない、蘇我氏の一族が擧げて骨灰のやうに亡ぼされて一滴の血統も此の世には殘らないやうになる。大連の家を亡ぼし、已に利のあらぬ皇子達をまで弑しまゐらせて天下の權を一手に收めた蘇我氏の家が草むらとなることは眼に見るやうだ、眼さきにちらついてゐる、その時にはお前は齒嚙みをしても及ばない、足ずりをしても追付かない事をよく覺えておゐで……」

「これは聞き捨てならぬ一大事、誰か謀叛の者でも起りますか、さりとて、蘇我氏の礎を動かすほどの謀叛の者が近き將來に、このあたりから起らうとも思はれませぬ」

「謀叛ではない、征伐ぢや、その征伐が近いうちに蘇我氏の一族の上に下ることを知らぬ者こそ笑止、それを思うと此の胸が晴れる、あの宏大な蘇我氏の家が灰燼となり、一族の者がおしなべて、さう〳〵、あの物部氏の一族の首を切つて、千首の池に投げ込んだ時の有樣を、今は蘇我氏の上にして、大臣殿をはじめ緣を引く三親の者までが、首といふ首を都大路に梟されるといふ日も遠からぬこと、その時こそは、此の胸が夕立のあとの大空のやうに晴れ渡るわいな」

「滅相もない、あなたは戀を奪はれた爲に正氣をも失はれました」

「否え──戀を失うたものこそ却つて心が冷やかになりまする、心の冷やかなるもの丶氣が狂ふといふことはありませぬ、わたしは今此の通り靜かに、憎いものを眞面に見て物が言へる冷靜を失うては居りませぬ」

「そんならば、あなたは全く正氣で只今の事を仰せられましたか、正氣で仰せられたならば拙者も眞劍にお尋ねをしなければなりません」

「何なりと尋ねてごらんなさい」

「只今、あなたは蘇我氏を征伐する者があると仰せになりました」

「いかにも」

「征伐といふ言葉は王者が夷狄に對する の言葉でございます、正が邪を懲らす、上が下をおさへる時にのみ征伐といふ語が用ひられるので ございます、して見ますると、今の世に國家の大臣たる蘇我氏を征伐なさる地位の方はどなたですか」

「もとより征伐といふ文字の裏には誅戮といふ制裁が控えてゐることを、わたしとても忘れはしませぬ」

「どなたが、蘇我氏を前に置いて、當面にお立ちになりますか」

「お前の推察に任せます」

「もしや、來目の皇子でゐらせられますか」

「否え」

「では、當麻の皇子」

「否え」

「まさか、あの御聰明な厩戸の皇子樣であらせられやう筈がない」

「それはその通り」

「それでは、若しや、申すも恐多いことながら……」

「今は匿しても詮ない事、蘇我の大臣の御上に天誅の下り給うは今日

明日の事、それが因に、かねてより内裏へ兵を集め、物の具を隠し置かれることを、御存知ないそなた達が笑止、昨日も御前に猪を献ずるものがありました」

「猪の子の祝でございませう」

「陛下には其の猪をみそなはして、近いうち朕が最も憎む処のものを此の猪の首の如くに斷つぞと仰せになりました」

「え」

「この事は、他言はなりませぬぞ」

「あゝ、さては、畏きあたりには、それほどまでに大臣をお憎しみ遊ばされるか」

「きつと、他言はなりませぬぞ」

「…………」

壯士は何と思うか、深く首低れながら、郎女と少し離れて歩き出した。

「もし、この事ばかりは他言はなりませぬぞ」

郎女は、あとから追ひかけるやうにして壯士の肩に手をかける。

壯士は答へずに、肩にかけられた手を摺りぬけて前へ進んだ。

「さあ、お誓ひ下さい、今の事は決して他言せぬやう」

その時壯士は立ち止まつてカラ〳〵と笑つた。調使麿はハッと胸を打たれたのは、そのカラ〳〵と笑つた壯士の口が耳まで裂けて中から焔のやうな黑いものをかつと吐き出したと思つたからである。

「何を笑ひます、お前は」

郎女も燃え立つやうに屹起となつた。

「大伴の郎女、あなたは返す〴〵も不運なお方でございます、戀の惱に我を忘れたとはいへ、言ふべからざることを、聞かせてはならない人に聞かせました」

「え」

「小手古姫、お氣の毒に存じます、あなたの憎む蘇我の河上の娘こそ、この駒と許した中でございます」

「え」

「駒は最初から蘇我氏の方人でございます、大臣殿は此の駒を二なきものとして頼んでおゐでになるのみならず、河上の娘と拙者の仲を内々でお許しになつてゐるのです」

「あゝ、それは本當か」

「金山が崩るゝとも、駒が蘇我氏を裏切る時はない、それを知らずに、いふべからざる事まで駒に向つて打ち明けた、あなたといふ御方が返す〴〵もお氣の毒です」

「まあ、何としませう、惡魔を二重に味方として頼もうとした此の愚かな女！　それは大伴の小手古の名で、云ふべからざる人に、云ふべからざる事を云ひました、夢であれかし、今云つたわたしの言葉を、此の人の敵陣の中から呼び返すことは出來ますまいか」

「何ともお氣の毒に堪へませぬ、あなたはあなたとしての運命をお定

めなさい、拙者はこれでお暇を致します」

「お前は何處へ行きます」

一島の庄へ參ります、蘇我の大臣の御許まで……」

「それでは……後生ですから、あの猪の事だけは、畏きあたりの御事だけは、誰の耳にも入れぬ、絶對、お前の此の場での聞き捨てにするといふ事を誓つて下さい」

「それには及びますまい」

「なぜ誓へないのです、さあ、このわたしに何でも要求しなさい、わたしの持てるすべてのもの、生命をでも要求しなさい、たゞあの事を他言しないとそれだけを誓つて……」

「誓ふことを許していたゞいて、その代りにすべてを忘れませう」

「忘れるのは當にならぬ、誓つて下さい」

「では誓ひませう、劍を拔いて……」

壯士は白い衣の下に佩いてゐた長い劍をすらりと拔いた。

「劍を以て、蘇我氏と一族の爲に、わが愛人河上の姬の爲に、王宮の礎の下で、血を以て誓ひませう」

「何、蘇我氏の爲に……」

郎女の面は物凄いばかりの蒼白に變じた。調使麿が心から惜いと思つたのは、この無情冷酷な壯士の態度であつた。

あゝさうだ、彼の名を駒といつた。では東の漢直駒か彼か。違ひない。

それにしても、石川の池のほとりの十字の柱に晒された彼の首といふものは尋常の人の首の三倍もあつたといふ事だが、こゝに見る駒は白面の瀟洒たる壯士ではないか。彼は今、郎女の必死の顏色をふりきつて劍を拔いたが何處へ行くのだ。

彼は劍を拔いたまゝ驀然に大殿の奧深く闖入したではないか。

その時、天地がにはかに暗くなつた。

「あゝ、天地が崩れる、天地が崩れますわいな」

その暗の中で絶叫するのは大伴の小手古の姬の聲であつた。

「わたしが、出ない人に出ない事を洩らしたばつかりに天地が崩れます、戀の恨に心が狂うて、云うまじき人に云うまじき事を云ひました、洩らすまじき事を洩してしまひました、あゝ、わたしの此の罪！眼が廻る、眼が廻る、胸が躍る、胸が躍る、血が逆さに流れる、五體が八裂きに裂かれます……あゝ天地が崩れます、天地が崩れて、わたしの身の上に落ちかゝります、あゝ、苦しい、この苦しみ……上宮聖德、厩戸の皇子樣、せめて、あなた樣の御手で此の苦しみを……」

暗の中を、のたうち廻つて號泣絶叫してゐるのは大伴の小手古の姬である。

調使麿はたまり兼ねて、墨染櫻の木蔭からをどり出して、大伴の姬の聲を尋ねて走らうとしたけれども、大波のやうに搖れる大地に足が定まらぬ、遽かに眞暗になつた周圍の方角がわからぬ。

「おう、天地が崩れる！」

その物すごい叫びは今は鄭女一人の聲ではなく幾千萬の人が一度に聲を合せて叫ぶと共に闇の中を逃げまどう物の音であつた。

調使麿は立ちすくんだ。

その時、今まで靜かであつた墨染の櫻の木蔭に繋がれてゐた烏駒が金鈴のやうな聲をあげて高く嘶いた。

「お丶烏の駒、烏の駒、烏の駒に怪我があらせては殿下へ申譯がない」

調使麿は我に歸つて、墨染の櫻の木蔭へ飛んで來て駒の手綱を解くや、轟々と音を立て丶揺れる大地に足を踏みしめ〱闇の中をひた走りに走つた。

大地が揺れるのに、天には非常に大きな鳥が羽ばたきをして、頭の上を低く飛んで走るのを感じた。

けれども、すべては眞暗である。暗を走るもの丶誰もが一定の目的に向つて走つてゐるのではない。たゞ動揺し混亂し、逃げる方に向つて動いてゐるだけのものである。



人間の意志

「明るい人」の續篇

犬養健

一

二日經つて禎三は、大きい夕燒雲の下で灯の點つたあちこちの家の晩食の匂ひを親しいものに感じながら、丘の一番上にある梶田の家に招ばれて登つて行つた。そこはあまり急な坂道なので、借り手が少いといふ評判の家だつた。——每金曜日の音樂會の練習なのだらう、すぐ足もとの避暑團公會堂の朽ちかけた屋根の下から大型ピアノの練習の節がしきりに響いて、食事前の落ち着かない空氣のなかに小ぜはしく擴がつてゐた。松子の緣談についてその晩、梶田にも一應賴光の事を尋ねやうと思つてゐるので、禎三はピアノの音を聞くとすぐに、松子が子供達にピアノを敎へて小遣ひを得てゐるといふ事實を想ひ浮べた。足もとの公會堂の外人の令孃は、勿論樂しみのために、明るく喜ばしく彈いてゐるのであらう。——

禎三の招ばれて行く梶田の家といふのはつまり、梶田が同居させて貰つてゐるニコル——英國陸軍大尉のニコルの家だつた。そしてそれは、ニコルが先日の飜譯の禮を禎三に云ひたいといふ意味のもてなしなのだ。

又もや遮つた霧が降りて來た。崖の上の、落葉松を盛に使つた入口に蚊帳の張つてあるニコルの家からは、誰かを相手に日本語で熱心に喋つてゐるあるじの聲が徹つてゐた。

「さう！　フォッシュは非常に頭がいゝ。天才ね。——千九百十五年——ではなくて十六年です。ちやうどソンム河といふところへ廻されてゐました。英國海峽に近い。佛蘭西の軍隊の左翼になるのです。（ニコルは軍事についてはいつも漢語を使つた。）オックスフォードの寄宿舍から一所に從軍した友達が大勢ゐた。あれは八月のみそかに——」

ニコルは蚊帳越しに顧三を目ざとく認めて、大學生のやうな物腰で立ち上つて來た。廚のすぐ隣から台所の皿の音の響いて來るニコルのこの部屋は、顧三には初めてだつた。それは新婚の夫婦のそれのやうに、簡素ではあるが念入りに飾りつけた部屋だつた。石を積み上げた、幅の廣い爐の上には、山から採集して來た一面の羊齒類の鉢植が、窓の多い部屋全體をしつとりと溫室のやうに見せてゐた。そして電燈に照らされた羊齒に頭の上を覆はれながら、爐の前の長椅子に寛ろいでゐるのは思ひがけず醫者の高木であつた。

「さう、八月のみそかにタンクがはじめて十五臺着きました。それあわたし達はみんな大戰で世界がすつかり變る、すつかり新らしくなると思つてゐましたよ。——敵はこのタンクの事をなにも知らない。秘密だからね。非常に愉快だつた！　わたし達の聯隊長殿は——」

ニコルは顧三のために冷めたい飲み物を手際よく調合しながら、その醫者高木へ話しつゞけた。

「出來たばかりだからタンクはみんなぴかぴか光つてゐた。ほんとの世界最初です。人間の頭はいろいろの事を工夫する。味方にもまつたく珍しかつた。光線の反射が強いから敵に見つからないやうに、わたし達でわざと一生懸命に汚した。それを九月の十五日の戰鬪にはじめて使ひました。獨逸はびつくりした。三哩半も退却しました。非常に成功した！」

ニコルは樂しさうに手を一つ大きく打ち、床のうへに直接に置いたウイスキイを飲むと、またその洋杯を靴の間に無雜作におろした。

遲れて梅田が湯あがりの濡れた頭髮を見せながら、階段をゆつくり降りて來た。そして腹をへらした四人が食卓に就くのだつた。

「これはわたしが食べるのではない！」丸燒の鷄を力を入れて切りながら、何杯かのウヰスキイ——その兩親の現に靜かに生活してゐる故鄕の蘇蘭土のウヰスキイで上機嫌になつたニコルがそんな事を云つた。「これは獸物の角から酒を飲んだり、戰爭して娘を掠つたりしてゐたわたしの祖先の遺傳が食べるのです！」

彼は六つかしいことを云ふ時だけ早口に母國語を使つた。

「そのわたしがかうやつて佛教徒のなかに加つてゐる。家の花を活けてゐる。人間て何時どうなるか分らない！　わたしはオックスフォードから前線に出るやうになつてから、人生を人間の無邪氣な遊びだと考へて、一番苦しい瞬間をあきらめる癖をつけた！　だがあなたがた

佛教徒はあきらめる事はよう〈知つてゐるらしいですね」

「さうかも知れない」と、生きてゐるといふ不思議な事をどう解釋したらいゝか、三津の濱邊で野蠻に考へつゞけたことのある祐三が口を出した。「僕はこの間佛蘭西のカイヨオ藏相の離婚事件の訴訟記錄を讀んだのですよ。――讀んでね、あれが日本人だつたならば、あすこまで長い間執拗く人を憎んだり愛撫したりすることは、いゝ加減中途で嫌になつてしまふだらうと思つたな。少くも前の夫人か、新しい夫人か、ふたりの何方かゞ、さらりとあきらめるだらうと思つたなあ」

「さう、日本の婦人は謙遜です。――美しい」

「さうだ、謙遜だ」と梶田が短かくニコルの言葉を繰り返した。

「そら、梶田、あなたの知つてゐるお孃さん。――あなたの褒めてゐた――ミス下山　松子さん。――あの方もさういふ風に見えます。ね。あの方も、本當に、東洋風だ」

食卓を隔てた梶田と祐三との眼が自然に會つた。だが梶田は何故か、それを落ち着いて無愛想に反らせた。

祐三はまた祐三で、先日幹子に頼まれた――松子のことで今夜聞かねばならぬ用のあるために、梶田の機嫌について殊更細かく氣が付くのだつた。

「しかし素晴らしい勉強家!」と西洋人特有の社交的な敏感さから、この一瞬間の沈默を急いで埋め合はすやうに、ニコルが更に高木へ振り向いた。「高木さん、あなたはなかなかあきらめる性ではないでせう。佛教徒にも例外がある。梶田はすぐにあきらめる。殊に田舍娘りの時などにはね」

「どうせ野蠻人とは一所にならないよ」

梶田が濟まして答へた。と、ニコルは子供らしく梶田を打つ身振をして見せた。

「おいおい。僕は佛教徒ぢやないよ」これもまた小量の杯で上氣した顔つきになつた高木が横から應酬した。「僕あこれでもイエスの學生だ。クリスチャンだ」

ニコルは岐阜提灯の下で大袈裟に兩手を擧げた。

「どうして? ドクトルがクリスチャンだと罰金でも要るのかね。第一、ボオトだの投擲だのつて、僕の運動癖はこれでYMCAで仕込まれたんだ」長い間酒を輕蔑してゐた高木は一杯に足りないウイスキイでも、もう大ぶん饒舌だつた。「だが僕は化學のうへぢやあ、神秘力といふものを全然信じないね。研究室に入つたら最後、もうそれこそポオトレエスのやうに頑張つて、科學的法則にしか一切仕へない」

高木は過勞から來た不健康のために、學士院から年金を貰つてゐる大がかりな糖尿病の研究が續けられず、助手に實驗の大體の方針を教へる程度にして保養してゐるので、話がそこへゆくと自然突放な焦躁を隱し得なかつた。それがまた祐三の高木に對する同感を深めるのだ。

「なぜこんな事を云ふかつていふとね。――これが今僕のやつてゐる

膵臟に大いに關係があるんだ」高木が今度は座の中心になつて、稍充血した眼で三人を見廻した。「つまり糖尿病といふやつは、知つてるでせう、そら腎臟から糖が出る病氣なんだ。そこで君達のやうな連中に分り易くいふと、わたしの考では誰しも腎臟からふだん糖は出る―――出るが―――しかし、西洋ぢやあ食事中にこんな話はしないのだらうなあ。ニコルさんいゝですか」

「結構！　一番社交的な話です」

ニコルはかういふと眼を丸く見開き、額に皺を寄せ、顏を充血させて聲高く笑つた。

「ぢやあ失敬するとして―――眞面目な話なんだからね―――誰しも糖が出ますね。君達だつて出るんだぜ。しかし健康體の人はその糖が腎臟のこんなかたちの出口をとほして（と、高木は卓の端にウイスキイで膜の繪を描いた。）出たとしてもね、その膜のさきの管の部分で、もう一度同じ糖分を吸收してしまふだけの力を持つてゐるんだな。それはどういふ譯かといふと、これはいま實驗中なんですがね、管の外部にまあ海綿質のやうなものが具はつてゐて、それが糖を吸ひ取るはたらきをするらしいのだ。僕にはその見當がついてゐる。これさへ證明がつけば、もう乾杯だ！―――ところが僕の意見と反對な生理學教室の連中に云はせると、糖分の出る出ないは、全然出口の膜一枚の責任だといふのだ。そして結局われわれが短時間で追及してゆくと―――六つかしい理論は省くがね―――先生たちは、曖昧なところはすべて生活力、生活力と云つて、生活力でさういふ事になるのだと說明するのでこれぢやあ一種の神秘說ぢやないかね。だが僕は生物科學者だからだ、生活力といふだけで引きさがるのはどうあつても良心に恥ぢるんだ。―――しかし、さうかうしてゐるうちに僕は身體をこはすし、助手も一人で萬事實驗を引き受けたもので、これも大分エネルギイの方からまゐつて來るし、そこへ生理學教室の方では此の十一月早々、學會で意見を發表してしまふと云つてゐるのでね―――」

高木は自身の昂奮を抑へるやうに、急に口を緘むだ。しかし近眼鏡の奧の彼の眼差は、やはり滿ち足りるところのない人間の眼差だつた。

「―――ひとりで喋り過ぎたかな。―――それは、向うの連中も皆出來る男は男なんだがね―――」

「それあ難だ」と禎三が口を挿んだ。「科學者がしまひまで科學的に說明しやうとしないのは可笑しいぢやありませんか。生活力といふだけでは一種の詩だからな」

「さう。これあ嬉しいですね」高木は體格に不似合ひな、しほらしい聲をたてた。「君のやうな萬端、詩に緣りさうな人がさう云つてくれるのは有り難いなあ」

「これは高木さんの方が勝つた―」と、聞きとりにくい部分を傍から通譯して貰つたニコルが遲れ走せに―――「わたしにはよく分つてる」

「そら、軍人にさへ分りましたつて、發表するといゝですよ」

先刻からふたゝび口數の少なかつた梶田が、例によつて唐突に冗談を入れた。ニコルはそれを聞くと大袈裟にナフキンを振り上げて、巧みに避けてゐる梶田の脊中を二三度打つた。

「全くだ。生活力といふだけぢやあ說明になるものか。生活力そのものはまあ虛無なんだからな。」お相伴で時どき口にひたしてゐた白葡萄の酒がまはつて來たものか、顧三には身體から酒精分を盛んに發散させるやうに、不意にひと議論振りまきたいやうな衝動が起るのだつた。

「宇宙の生活力の一部を偶然貰つてゐるといふだけぢやあ、われわれは何物でもないんだ。その生活を自分から意志しなほさなくつちや。あらためてね! 僕たちは天文學を習つたから、自分がまあ微菌のやうなものだつて事をよく知つてるわけだ。身輕なものさ! 世界が微菌にとつて最善なものか、最惡なものか、必要なのか、不必要なのか、どうでもいゝとしやうや。(醉つてゐる筈がないが、と顧三は自分のことを考へた。)だが、自分からちよつと六七十年ほど――生きることを意志するとなると、少し話が違つて來るたあ。そこであらためて時間が存在するんだ。たゞ種族が――微菌の種族がね――何代もかはるがはる續くといふだけぢやあ、こいつは時間なんぞないんだ。それあ宇宙の惰性だもの。自分で意志することがはじまつて、やつと時間といふものを持つんです――もう何時だらう。遲いのかしら。(顧三は時計のついてゐない腕を無駄にのぞいた。)ねえ、醉つてると時間なんぞないでせう? それと同じやうなものですよ」

たが顧三の氣儘な獨り言をニコルに分らせるためには、梶田のほかに高木の英語の手助けまでが必要だつた。

「さあわたしには分らないなあ」とニコルが社交的に微笑み、眼を凝つと顧三に据ゑて云つた。「英語ではあきらめる事と、意志する事とはまるで違ひますね。あなたのさつき云つた事と今云つた事と、――例へばさつきカイヨオの話が出ましたが」

「カイヨオ?――ああカイヨオの場合か。――さう、もし僕がカイヨオだつたら――僕がカイヨオで二人の女を同時に愛したら」その時に顧三は、醉から醒めるやうに、自分が見かけ七年の間カイヨオであつたのではないかと、ふと考へた。彼は不意に動搖した。彼はさつきの高木と同じく、今度は自身が挑むやうに部屋ぢうを見廻した。入口のわづかに風で搖れてゐる蚊帳を、燭の上の透きとほつて青すぎる植物を、影のある壁を、そして片隅の蓄音機を。――その旅行用の蓄音機に載つた圓盤は妙に音無しく小さく提燈の灯を映してゐた。「カイヨオだつたとしても、やつぱり僕は意志するだらうたあ。僕流に意志する。僕はいつ何時誰が好きになるかも知れないよ。明日の事は分らないからな! だからカイヨオのやうにひよつともう一人(と云つて顧三は正面の梶田を自然に視た。)誰かを深く愛したとしても、それは自然力として素直にみとめやうかしら。自然力は絶えず盲目だし、僕達は自慢ぢやないが小さい微菌だからな。人をひよつと深く愛してしまふことは、その邊りまではまだ僕の責任には入らないよ。ひよつと人

を愛してしまふことはまだ生活ぢやないよ。たゞ生活の準備だ。[illegible]ヨ。だつたとしても——自分から意志して——多分先づ拵らえて見せるだらうよ。——出來るかぎりはね！——こいつはもう生活だ。僕の範圍なんだ。これが僕の場合は一番いゝんだ。意志することは、ひよつと誰かを愛したよりも、もつと素張らしくその人を自分の所有にしたことになるかも知れない、と思はうかな。快樂派のエピクロスの生活法は意志する方法だつたぢやないか。——たとへ最後のなりゆきは誰にも分らないとしてもね——」

「あきらめる事と、意志する事と、か」

「さうなんです」自分のために座の白けはしなかつたかと急に後悔した禎三が喜んでさう云つた。「高木さん、僕の出まかせを分つて下さつたんですか」

「わたしにも、多分、分りましたよ」ニコルがやはり前と同じ表情で微笑むと、急に立ち上つた。「ヴラボオ。おいしい酒をぬきませう！わたしの上官が訪ねて來る時に用意して置いたのですが、そんな事、もうまつたく構はない！」

亂暴な拔き方で、新しいキルクは床のうへを丸く轉げた。一層赤くなつた高木とニコルはめいめい別の長椅子へ仰向けに身體を投げ出した。「梶田、何でもいゝ、一つ選んで」——格鬪で押へられたやうに潮遊の見えないニコルが、部屋の隅の穩和しい小さい蓄音機へ向つて、しきりに宙に浮いた不自由な手振りを繰り返してゐた。

二

禎三が梶田と差し向ひになつたのは、高木を人力の溜りまで送り屆けるために、ニコルが附いて行つた後だつた。もう十二時近くだつたらう。散らかした圓盤と、蠟燭の衰へた提灯と、急に汚なく見える食卓の汚點とに圍まれて、禎三は何と云ふこともなく饒舌つたあとの空虛を感じてゐた。

「高木氏、珍らしく饒舌りましたね」

「あゝ饒舌つた」

こんな疲れた工合では改まつた話に不適當だと考へながら、禎三は今まで高木のゐた籐椅子へじつと後頭をつけてゐた。——しかし先日の幹子は、何度も纏まらなかつた縁談のあとではあり、顴光を「穩和しい男」と聞いて、禎三の意見だけではすぐにあきらめきれない樣子だつた。この點が、姉妹の愛情を知つてゐるものゝ、兼雄の場合とくらべて禎三には稍々不服だつた。だが彼は幹子のその樣子を見てとつて、心にもなく「それでは梶田にも聞いておきませう」と云つたのだ。そして幹子は喜んだ。既婚の姉らしく喜んでゐた。——

「しかし、君もなかなか饒舌つたな」と、又もや梶田が途切れがちに云つた。

「あゝ、饒舌つたね」それから禎三は急に——曲り角を突然曲るやうに、身體を向けてから切り出した。「さうさう、君に尋ねる事があつた

つけ」

「何ですか」

梶田はいつもの氣のない調子だつた。

「磯子さんにちよつと頼まれたんだ」夜が更けてゐるし、彼は出來るだけ簡單に濟ませたかつた。「君は賴光を知つてゐるかい。君と對ひあはせの席かなにかにゐたぢやないか。賴光はどんな奴だつたかね。―僕はどうもはつきりした印象を受けてゐないけれども――音無しいやうだつたが、少し――平凡ぢやなかつたかね」

「さうだなあ。平凡だつたなあ」用談と聞いて、一寸表情の變つた梶田が答へた。「いま何處とかの、臨海試驗所かなにかに出てゐる」

「戸田のださうだ。いや、戸田ぢやなかつた、あれは――」

「平凡な奴さ」

さういふ平凡さが惡德に近い。梶田の語調はそんな風だつた。

「さうか。それなら、もういゝんだ」

禎三は目に見えて快活になつて來た。

「それは何の話です」

「縁談。縁談さ」

かう事務的にてきぱきと談を濟ませてのけると、禎三はもう解放されたやうに思つた。だが梶田はさうでなかつた。ニコルの殘して行つた外國煙草を爐の横で無駄にふかしてゐた彼は、少時して不意に氣弱く云つた。

「ちつと云ひ過ぎたかな」

禎三が返事をしなかつたので彼はまた呟いた。

「少し、酒のとばつちりだつたかな」

禎三にはその沈默が厭はしくなつて來た。それは空間ではなく、何か窮屈な、固まつた形をとつたものが二人の間に存在してゐるやうな氣がした。

「さて、僕は歸るよ」と彼は限りがないので息をつき、帽子をとつた。

「どうもちつと、云ひ過ぎたかなあ」又しても梶田が煮えきらず繰り返して、禎三を離しにくさうだつた。「僕は賴光とは、どつちかつて云うと仲がよかつたのだからな――」

しかし梶田の顏色で、禎三にはそれが明らかに嘘だと分つた。一體梶田といふ人間が嘘には向かないのですぐ顏色に出るのだ。梶田の嘘は珍らしい！　だが禎三のその直感はすぐに梶田へ反射して、彼は一層どぎまぎしながら云つた。

「君を送つて行かうかしら。このまゝ別れるのも何だか變だし」

「それあ明日でもいゝぢやないか」

禎三が眠たげに云つた。だが彼は嗅覺を働かせはじめてゐた。梶田は自身の言葉にひどく拘泥してゐる。變だ。どうしたのだらう。しかし彼自身も嘗て深い夜の公園の道で、紀雄に對してこのとほりだつた。彼にも覺えがある。――

「さあ失敗するぜ。僕に何とも思つてやしないよ」

「あゝ、何だかすつかり落ち着かなくなつてしまつた」かうなると梶田はまた頑張なのだ。「それに酔つた晩のニコルと差し向ひは御免だし――やはり行かう。泊つていゝかしら。――君が夜更かしが閉口なら、食堂にでも寝かして貰はうかな」

「いやに熱心になつてしまつたものだね」禎三は強いて笑つて見せた。反響があつて、それは空々しい笑ひ聲だつた。「おい、一體どうしたんだ」

「どうもこめかみが張つてゐるやうで、窮屈なんだ」と梶田は脇を向いた儘、頭を擦つて見せた。「すつかり云つてしまはうかしら」

その何か引け目を感じた横顔を覗つめながら、禎三は奇妙に感情が冴え、自分を警戒しはじめ、そして加速度的に冷靜になつて行つた。

「すつかり云つてしまはうかな。僕あね」と、もう一度梶田が躊躇つて、伏眼がちに云つた。「松子さんがどうも、だんだん好きになつて來てゐるんです」

それから、五分ほど經つて、二人は默つて外へ出た。

實際彼等はその時異常だつた。禎三が暗い急な坂道を降りて行く間、遠くの地勢ほど妙にせり上りながら、低い灯のひろがりが絶えず眞正面に見えてゐた。それが彼の不安を強めるのだ。そのうへ彼は足もと不案内のために自然と步調が亂れ、昂奮からも一種彈みがつき、ほとんど驅け足に移つてゐた。そして彼のすぐ後ろの梶田もまた同じ事だつた。梶田は時どき木の根につまづき、去年の朽ち葉にすべり、幾度彼を追ふやうにして荒々しく從いて來た。それが禎三に何か反撥心を與へるのだつた。――たうとう觸れるべき出來事に觸れてしまつた！と腦のなかで禎三は考へた。だがこの出來事は何故か、彼にとつて全く意表外ではなかつた。長い間に知らず知らず準備された嫉妬の本能から、禎三は誰かしらによつて惹き起されるこの同じ場合を、疾うに想像のなかで恐れてゐたゝめかも知れなかつた。松子のやうな性質は誰からも愛される方がむしろ當然なのだから。――たうとう、それも古馴染の子供だつた梶田によつて、と禎三は考へた。建てつけのわるい、みじめな、自分の家の雨戸の鍵をしばらく捜してゐる間、彼は過つて、かういふ出來事ははじめてゞはなく、前にも一度經驗したことがあるかのやうに、ふと思ひつめてゐた。――

いま禎三の家の食堂に使つてゐる部屋で、禎三が枕や敷布を運び込んでゐる間、梶田は病院で束縛されてゐる患者のやうに、ぼんやりそれを眺めてゐた。だが禎三が最後に重い布團を運んで來た時に、梶田は急に氣がついてそれを手傳つた。不器用に布團を敷きあふ二人が、同じやうな事を並んでやつてゐる。そして禎三は、さうさう、梶田とはかういふ間柄なのだと今更考へた。

「どう思ひますか」

重い洋燈が不常の場所へ置かれた時に、梶田が歸り道以來はじめて

口を切つた。堀田は其處に嘘もないのに、やはり險の方へ心もち上體をこゞめ、禎三に背を向けてゐた。それが彼の弱點だ。だがその弱點に對して、禎三は不思議に意地わるく、鋭敏だつた。

「どうでせう。――僕はこれでも、何度も考へ直して見たつもりなんだけれども――どうでせう」

「好きになつたといふのを、僕たちはどうしやうもないぢやないか」と禎三が應へた。「さつきもニコルに云つたとほりさ」

「ぢやあ、それからさきが問題だと云ふんですか」

洋燈の影を動かして堀田が顏を擧げた。しかし禎三はそれを點頭くと皮肉に近くなるので默つてゐた。

「それからさきの問題も考へてゐるさ」と、堀田は次第に腰を據ゑて、對抗的になつて來た。「僕は結婚だつて、してもいゝんです」

禎三は梁の露はな天井の下で、憎惡をあらはすまいとしてやつと堪らえた。

「さうかい。結婚となるとまた違つて來るね。たしかに」

「うむ。松子さんさへ承知なら」

堀田は禎三の言葉の外形だけを貪つて、その突き放すやうな語調にはつい迂濶になつてゐるかのやうに、活氣づいて云つた。

「僕はもう自家の平凡な、ごちやごちやと見栄の多い、家族制度の生活にあ倦き倦きしたんです」

「なぜそれをまた僕に相談するんだい」

「君ならば分つて貰へると思つて！」

禎三の意外なことに堀田は感動して、顏を赤らめ、涙ぐみさへしたやうに思はれた。だが禎三はそれでも、平生のやうにすぐに同情に捲き込まれることをしない自分を見出してゐた。しかもその事に少しの後悔もない。これは容易ならぬ現象なのだ、自分もひよつとすると知らず知らず必死なのだ、と彼は考へた。

「君よりほかの連中は、第一問題にさへしてくれさうもないんだから」と堀田が附け加へた。その口振りで、連中といふのはこの場合堀田の身内の意味らしかつた。「それに、松子さんをいゝお孃さんだと思ふやうにたつたのは、幾分、君の影響たんだから――」

「なぜほかの人は問題にしないのだらう」

「だつて松子さんは僕より年上ですからね」堀田はちよつと羞む樣子をした。「同い齡だけれども、松子さんのはうが十月以上も早いのだから」

「僕だつて齡を問題にする方かも知れないよ」

「それあ君らしくない」と堀田が遮つた。

「なぜ？――それあ齡だけをかれこれ云へば變だらう。しかし松子さんは普通のお孃さんぢやないぜ。普通のお孃さんぢやないといふのは、あの人がいまの齡まで縁遠くしてゐるといふ意味ばかりぢやないんだ。あの人の事を、まあ未亡人のやうなものだなどゝ陰口する奴がゐる。ひどい想像だ。芳子と離婚して、現にきのふも腹をたてたもの

だ。しかしさういふ僕でさへ、あの人をたゞの二十四五の娘さんと全く一所に考へることは、出來にくいね。松子さんはどうかすると十六七の娘よりも初心に見える事がある。純潔だからな。——しかしさう見えても松子さんはこの何年か、澤山、經驗をして來てゐるよ。精神的には再婚以上なのだらう。君も少しは聞いてゐるだらう。——だから松子さんは男といふものを、あんな見かけに似合はず觀察してゐるに違ひないんだ。たゞそれを顏いろに出さない——出せないといふだけだ。松子さんにはきつと、人生の經驗の深い人が必要だよ。僕はさう思ふなあ！　本當の經驗のね。——君は若いからな。君の若いことはそれあ君にとつては善い事さ。でも君のやうな種類の猛烈な若々しさを、松子さんは一番恐がるだらうと思ふね。その意味が君に分るかしら」

「それあ常識論だ！」

梶田は故意と苦笑した。

「僕だつて、自分の性質はよく知つてゐるんだからな」から梶田がまた傲慢に云つた。「うちの兄妹達と僕とはまるで違うんです！　僕は僕で、もう母にすゝめられて出來るやうな結婚は考へてもうんざりだ。益々それあ家族に縛られることになるし。——第一、精神的に一か擲かといふやうな生活がいま是非欲しいんです。僕はなにもずべたらに學校が遲れてゐるわけぢやない。自分に本當にあてはまる仕事を、焦つて、焦つて、搜してゐるんだ。代々の病院持ちの醫者の家族なんていふやうな、馬鹿々々しい醫長制度にあ余くだらけてしまふ！　だからなほ空想家になつてしまうんだ。(空想家？と禎三は冷酷に聞き耳をたてた。)——松子さんはきつと、特別な生活に適したひとに違ひない。ト——松子さんの事だつて——はじめ隨分考へ直して見たんだけれども——やはり君には正直に云つた方がいゝと思つて」

禎三はしかし、梶田の隙を迅速に容赦なく擊つた。

「ぢやあ君の空想に松子さんを當てはめやうと云ふのかい！」

「そんな風に見えますか」

梶田はむつとしたやうだつた。

「君は、僕の云う事が分らないんですか」彼は禎三を睨むで云つた。「結婚してもいゝといふのは、そんな生ま優しいものぢやありませんよ」

梶田のその眼付きのうちに、禎三は今まで知らずに來た兇暴な梶田を見つけ出した。それは或る場合兇暴によつて唯一の快をとりたがる種類の眼差だつた。禎三ははじめて梶田が寄宿舎で鐵拳制裁をうけやうとしたり、母親につねづね愚痴をこぼさせたりする理由を眼のあたりに見たやうに思つた。

「ぢやあ君は、反對なんですね」

「さうかも知れない」禎三がはつきり答へると、何か悲しみに近いものを感じた。「僕には松子さんと君とが、どうも直感的に結び付かないのだ。何か無理があるやうに思ふのだ。——正直に云へば、君のその

事情がどうも僕の腹の底まで納得出來ないんだ」

「ぢや、よござんす」

梶田はさう云ふなり立ち上つて、食器棚に置いてある外國雜誌を無意味に開いたりしてゐた。最初の狀態とそつくりな、重い沈默が來た。

「君は――こつちへ來てから松子さんを見たのかい」

「いや」と梶田は、強いて強味を見せやうとして短く答へた。「妹の學校で、ずつと前から顏だけは覺えてゐた。――どうもさうらしい」

それでは松子が芳子と同じ學校の出身だといふ事は、禎三の到着の日に既う分つてゐた話ではないか。それを梶田は八重子の病氣の折にはじめて禎三へ知らせたのだ。それも高木の家へ――松子の隣り家へ、これから二人して出掛けやうといふ間際であつた。「さうさう、高木氏の隣りの家に」と梶田はその時思ひ出したやうに、初めて教へたのであつた。せつぱ詰つたのだと禎三はいま考へた。思ひあたる事が澤山出て來さうだつた。閉め切つた室のなかで想像力ばかりいやに働き出すのを感じて、彼にはその三四分間が堪えにくかつた。

禎三は息をついて、何よりも頭をよくしたかつた。――彼のすぐ横の、花瓶にくらべて澤山に盛り過ぎてある秋草から發する酸素臭い匂が殊に蒸すやうでいけなかつた。彼が摘みとる折にはそのために注意して避ける草が、澤山混つてゐる。誰の不注意なのだらう。――禎三は不愉快を花に向けるやうにして、その束を窓から投げ棄てた。それに彼は何か梶田へ當てつけた、恐々しい事がして見たかつたのだ。

「それあ松子さんが持つて來たんですよ」と、梶田が前からそれに氣がついてゐたやうに注意した。「今朝町で出會つて知つてゐる」

禎三は振り向いた。

「松子さんが持つて來たつていゝぢやありませんか」その不用意な表情を見抜いて梶田が透かさず云つた。この調子で友達に擽られやうとしたのだ、と禎三は窓を閉めながら憎々しく考へてゐた。――だが梶田はもう一度面でもすつぼり脱ぐやうに、推察の快感をおほびらに見せながら、彼に肉迫して來た。「僕あ、君が松子さんを好きなんぢやないかと思つてゐるんだ。どうです」

「……」

禎三は視線をその眞相手の視線のうへに置いてゐた。自分が動搖してゐると思はれたくなかつた。そして、梶田に一番苦痛を與へる要領のいゝ脱離は何だらう、そんな事を考へてゐた。

「さう見えるかい」

から、彼は仲繼ぎした。

「ああ、さうかも知れないよ」

「さうだらう！」梶田は一種歪んだ泣き顏に變つた。「君はさつきの飯の時に、結局自分の話をしたんだ！」

三

——禎三はしかし、桓田の疑つてゐるやうにその何年間か絶えず松子に接近する機會を狙つてゐたのではなかつた。それどころか、彼はほかの男子の友達、よりは、ずつと松子に對して言葉少なく不愛想にして來た。これこそ矛盾した何年間かであつた。その細かい事實の例はあまりに澤山にある！　例へばその一つは或る歳末の夜だつた。それもたゞ歳末といふのではない、寒い大晦日らしい大晦日の夜だつた。禎三は銀座の混雑のなかを歩いてゐた。もとの同級生の忘年會に加はるためだつた。幹事に新米の通人がゐて、その會は珍しく旗亭で行はれるのだ。しかし禎三にはその頭全力を投げ出すほどの勢ひでたづさはつてゐた仕事のあつたゝめに、疲れて、無精髯を生やし、まつたく旗亭に行く樣子の人間ではなかつた。その年一年は彼にとつて何の進歩もない貧しい年であつた。と、彼は軒並みに華手な飾付けをした舗道のまぶしい人波のなかに、母親に伴はれて此方へ近づいて來る松子を突然目ざとく認めた。松子は十間ほどさきにゐた。一年に何度といふ近さであつた。しかし彼にはその瞬間、このやうにして松子の傍を通る氣力——生活力のないのを感じた。まだ禎三が伊豆へ行く前で、松子は美しさの絶頂に達してゐるやうに見えた。だが禎三はと云へばその年一年、自分を卑下するほかはない貧しい年なのだ。彼は突差に電車通りへ出て街を横切つた。小僧達の乘つた自轉車が前をすれすれに除けて行つた。禎三は動搖してゐて、たゞ對う側の人道をせかせかと歩き、もう笑ひ聲の湧くやうに起つてゐるであらう宴會なぞに行く心持には少しもなれなかつた。生活のなかで進歩のない良人、それと同棲してゐる女學生あがりの年若な妻、口から白い息がたち、外套が重く、彼はせめて早い歩調でそれらのすべてを紛らすやうにしてゐた。

ふと彼は白熱燈の無暗に明るい場所へ出た。それは新らしく開店した舶來物ばかりを賣る玩具店で、一個何十圓といふオルゴオルが突き當りの棚で鳴り、兩脇の壁には一勢に正面を向いた金髮の人形が反射をうけて眞白に居並んでゐた。小さいオルゴオルは早熟にもメンデルスゾオンを氣取つて奏でてゐた。禎三は知つてゐるのだ。それは十六七歳の娘がピアノの教師からよく習ふ小曲だつた。奇妙な錯覺から彼は今しがたその無禮講の宴會に行くつもりであつた事までが、だんだん不愉快になつて來た。純潔といふ事が人間の生活力にとつて第一のものではないのに、彼はその時はさう感じたのだ。禎三は誘惑されるやうに店に入つて、賣出し氣分の番頭に早速愛想よく附き纏されると、その金髮の人形の一つを八重子のために買つた。「ママア！」と生意氣に聲をたてる人形だつた。それでも、安くないその晩の會費に不足が出來たわけだつた。

彼は箱を抱へ、つい二三間先きの十字路で乘合自動車に乘るために、その方へ足を向けた。すると彼は又しても、丁度止つたばかりの乘合に乘らうとしてゐる松子達をみとめた。そして彼は、もう一度、見ることを欲しない人間に出會つたやうに、すぐ後ろに續いて來た別

の乗合の昇降臺へ走つた。しかしその瞬間に、満員で断はられた松子達がさらに彼のすぐ横へ近づいたのを見たのだつた。彼には松子が氣づいたやうにさへ思はれた。禎三は自分が同じ車に乗り込むことを欲してゐるのか、厭つてゐるのか、双方の願望ともにあまり強いので判断がつかなかつた。しばらくして乗合が暗くひつそりした線路を長い間走つてゐる時に、はじめて後ろを見廻し、その甚く揺れてゐる車臺のなかに松子のゐないのを知つて、彼はすぐ明日の來年くらゐから、この自分の古風な歌をいゝ加減にどうにかしなければいけない、あまり根強い、あまりに自分を支配してゐると考へたのだつた。

もう一つ、彼は秋の或る絵畫展覽會を觀に行つた。やはり詩人と机とにかぢりついてゐて、最終日の最終に近い時間に駈けつけたのだ。巴里歸りの畫家である知りびとが三四人會場に集つてゐて、その仲間が部屋々々を案内した。入賞した油繪を指してそのひとりが云つた。「ひとつ森島君にこの裸形のモデルを見せやうぢやないか」——それは八十號大のカンヴァスに描かれた東歐風、中央亞細亞風、または馬來風といふのか、ともかくも混血兒獨特の美しさを持つた混血兒らしい娘だつた。——「こいつが僕たちでやらせてゐるカフエ・ラタンのテエブルの取締をしてゐるんだ。日佛混血兒で、巴里からうまく呼んだのだぜ。森君もちつとはかういふ飾り稱を眺めて置くといゝ。入賞金で懐ろが暖かいから今夜はこの巣窟で底ぬけに飲むのだ。君はどうも夜明かしの魔力に憑りつかれる修業は、まだまだいろはの程度と見えるね。——この娘の肉づきと來たら實際素晴らしい。太り肉といふのだな！ 眼玉と髪がこの絵の通りにぬばたまの黒さなんだ。畫家には堪らん。腰家でなくともね！ G君は感じをつかんで描いてゐるよ。關節がくりくりして、皮膚のきめが細かくて、押すとスラゼンジヤアのテニスの球のやうに彈ねつかへるのだ。いや嘘ぢやない。それにクラリネットも一寸吹ける。ピカソの友人のモデルをしたことがあるとかで、勿論嘘たらうが、素的に強い訛音の西班牙語も少し話すぜ。しかし僕たちは申し合せて、決して面白く遊ぶ友達といふ以上には、互ひに觸つて近寄らないことにしてゐるんだ。あやしい誓ひだがね。——勿論行くね？ タクシイもちやんと云つてある」

しかし禎三が伴はれて行くことになつて、下宿屋から夕日の鮮かな戸外へ出た時に、彼はそこに一家と連れたつて、誰か贈物を受け取り遅れた伴れでも待つてゐるらしい松子を見つけた。砂利道に行儀よく長い影をならべたつゝましい一家であつた。そして禎三が相變らず挨拶をしそびれてゐると、松子が見つけて「おや」といふ晴れやかな表情をあらはした。たしかに松子に似合はないはつきりした表情だつた。それから兼雄が帽子をとるばかりではなく、禎三に近づいて挨拶らしい挨拶をし向けたのは、その時が恐らくまだ三度目とはならなかつたであらう。すると、洋行歸りの例の畫家が少時して云つた。「おやあのマドマアゼルは何だか見たことがあるた。——一寸かたちが印象的に崩れてゐて、あれあ描けるぞ」——他の畫家仲間は、その男がど

の婦人でも知り合ひだと云ひたがるいつもの癖と解つて一度に笑つた。鐵雄が再びこつちへ振り向くほどのそれは笑聲だつた。禎三はその男の口髭に剃つた、妙に光澤のいい、しかし疲れを隠すことの出來ない太つた頬を視つめながら、鐵雄に彼の交友仲間を見ぬかれ、蔑まれたやうな氣がした。そのうへ畫家たちはタクシイの來ないまだるこさに大聲で、佛蘭西語でではあつたが、婦人に聞かせてはどうかと思ふ通な小唄を歌ひはじめた。ところが三四間さきの松子は鐵雄よりも佛蘭西語をよく分るのだ。——禎三は手洗場に入つて行つた儘、別の出口からさつさと公園の並木道を歸つてしまつた。並木道から見おろす蓮池にとんぼが一面群がつてゐた。なぜ、このやうにして松子を避けるのだらう。——禎三は自分のその單純さを今さら反問してゐた。まつたくそれは人にも云はれない感傷主義に過ぎないのだ。このやうにしてぎごちなく避けることで、頭のなかの松子の印象を一層無理にも強烈にするならば、それはいくら外形的に運命を恐れたとて、何にもならないではないか。——

このカフェ行きの話を芳子にした折に、芳子は禎三を「わりに堅い」と云つて、まあ褒めたのだ。しかし禎三は、カフェへ附き合はなかつた事と松子に出會つた事とは全く聯絡をつけずに聞かせたのだつた。——松子はもうその時は美しさの盛りとは云へなかつた。謂はゞ孃と若い未亡人との間にあつた。そして禎三は、自分のこの執着が松子の結婚にとつてどんな場合にも、過つて些細な妨害にすらなつては、と不安を感ずるのだつた。事實禎三の眼のなかには、その結婚を深く深く欲してゐる理解以外のものが、明らかに住み込んでゐる。しかし實際の場合、禎三は一番親しい友達にも松子のことを輕い話題にさへ當てのぼせたゝめしがなかつた。それはあながち禎三の無口な嗜みや、別の或る打算にばかり原因してゐるとは云へなかつた。——危機、忍耐、などといふ安つぽい諧謔が往來の電柱などに書き記してあると、たあいもない話ではあるが、彼は自分に何かで縁のある文字だと感じて、一瞬間それへ眼を向けるといふやうな事さへその頃經驗したのだ。——

これらのすべてを、禎三は堀田に街の食堂で聞かせたわけではなかつた。しかしさういふさまざまの事實を頭に描いてゐる彼は、堀田から向けられてゐる疑ひに對してたしかに頑強ではあつた。——その頑強さはまた、松子といふ人間を知つて、その天眞を愛してゐる點では、自分は世の中の極少數のひとりなのだといふ長い間の確信から來てゐた。實際禎三ひとりが、或ひは禎三と芳子とふたりだけが、松子のために他人にむかつて辯護した場合をこれまで度々經驗して來たのだ。——一年前の冬の晩だつた。彼等ふたりは知りびとの結婚披露にホテルへ招ばれて行つた。晩餐が濟んで、禎三は懇意な——ほとんど親戚に近い關係の婦人たちと別室に椅子を寄せ集めて話し込んでゐた。それはめいめいがそろそろ家へ歸る刻限を見はからつてゐるとい

ふ風な、社交臭い半端な、時間だつた。其時、ふとした話題から禎三の隣りにゐた遠縁の婦人が松子の噂を彼に向つてしはじめた。子供服の講習で一時しばしば松子と顔をあはせたといふのだ。その夫人は冷たい飲み物のコップに唇を働かつけながら、故意と眉を寄せて云つた。「あの方はちつと變ね。講習會で皆さんが可笑しい事を云つて笑つても、あの方だけは默つていらつしやるのよ。どうしたのでせう。あれでは御縁がないのも仕方がないわ」——禎三はやはり覺えてゐる。その時ホテルの附屬演奏場で温習會の長唄の三味線が妙に陽氣に勿體振つて拍子を合はせてゐた。男達の吐く外國煙草の烟が低い埃及模様の天井にぶつかつて流れてゐた。だがその話し手の夫人は、いつも一番末席に坐つて一番控へ目にしてゐる禎三が、故意に穏やかな笑顔を見せて、頭から反對してかゝつたのに驚いた樣子だつた。長唄の温習はたしかに師匠の氣に入るやうに進行してゐる。と、柱の向うから芳子が近づいて、その話の經緯を聞くと、彼女も必要以上に昂奮した面もちで松子を賞めはじめた。夫人は苦笑して、默つてしまつた。——

少時して、自動車の燈の混雜した玄關先きを通りながら、良人にむかつて今しがたの反駁の効果を子供らしく喜んでゐる芳子を振り返つて、禎三はその芳子を善人だと考へた。

芳子は彼の幼馴染だ。從妹だ。たしかに彼とは切り離せない。そして禎三の芳子に對する愛情の根底の深さも薄弱さもすべてそこにあるのだ。

四

明け方の四時頃、禎三はいつも夜更かしをした後のとほりに、わづかの物音にも鋭敏に眼を覺ました。濕氣の多い感傷的な夜明けだつた。寢しなにカアテンを下ろすのを忘れたので、鈍い薄明るみが三つの窓硝子をとほして部屋のなかを三方から——水脈の強さで照してゐた。彼と食卓の脚を隔てゝ、板の間にそのまゝ薄い布團を敷いた梶田がぐつすり眠込んでゐた。その、一寸見ると平常と變りのない熟睡に彼は驚嘆した。なるほど梶田は燈を消す前に睡眠劑をくれとは云つた。しかし宵のやうな出來事のあとで、これほどによく眠るとは、疲勞よりもそれはむしろ素晴らしい健康を語つてゐるのだ。それほどに梶田は生活力を持つてゐる。これならば梶田は、たとひあゝいふ事があつても全く打ち碎かれてしまふ事はあるまい。この推移が、ひと眠りした後の禎三にとつて唯一の氣安めだつた。

あゝ、確かに梶田の執拗さはたゞの奴ぢやないと彼は思つた。梶田はずつと寄宿舍以來、禎三にだけは特別に人懷こく從順だつた。志望をきめる——梶田の言葉で云へば志望をたつた一つに限る事で母や兄と衝突した際には、いつも少年のやうに口をとがらせて禎三のところへ不平を漏らしに來たものだ。友達の選び方、音樂、政治論、それから哲學的系統、すべて年だけのことはあつて一二歩先きを歩いてゐる禎三と似たり寄つたりになつても、別にそれを勞はしく不快には思つ

てゐないらしかつた。第一、松子に對するあの突發的な心持についても、それが同じ禎三からの影響だと素直に云つてゐる。その梶田が一旦どうしても折り合へないと知ると、あのやうに禎三に向つて、溌剌といふ言葉さへ使つていゝほどに惡意をさらけ出して抵らふのだつた。しかも禎三の家へ附いて來てゞあつた。ほんたうに嫌の奴ぢやない。——禎三は自分が思ふ存分に逆手を用ゐて撥ね返したあとなので、宵のうちの反感を暫時のあひだ忘れたやうにしてゐた。それに梶田はいまぐつすり眠つてゐる。中學生かなにかのやうに晝間の疲れで眠つてゐるのだ。梶田の夜具は雨の晩などに芳子が重ねて掛けるものだが、それが丈夫さうな息づかひで規則的に動いてゐる。そして、眠つてゐることは個人の差別を除くことだ。——それが現在の禎三の心持を幾分か和らげてゐた。

いま禎三はふたりが眠るまでの議論を想ひ出した。平常の無口同志で、その度外れな饒舌は夜氣や疲勞や燈し火にそゝられて、たしかに稍々病的な饒舌だつた。そして年少といふ單純な理由からも、梶田は禎三の語氣の裏にある變な強氣に、とかく壓倒され氣味だつた。

「どうも仕方がなかつたんだ」と禎三がその時、食卓の傍を堪らえきれず歩きながら云つた。「僕だつて、君には正直に云はないわけに行かないからな」

實際さうなつた以上、松子のことに就て自分だけうまく曖昧に逃げるといふことは、禎三の性質では出來にくかつた。いや一瞬間、彼は萬一梶田と松子とが親しくなつた場合の用意として、自分の心持を梶田に明かさずに置く方が得だとさへ考へたのだ。しかし彼はやつとの事でその打算を制した。反動的にな自制したとも云へる。それに彼は先刻から梶田がこれ見よがしに見せてゐる、もう嘲るだけの事を嘲つたあとの自由さ——まるで手足を伸ばし切つてゐるやうなその自由さを、自分の身にひき比べて嫉妬してゐた。——その禎三の豫想のとほり、自分の心持をひと言梶田へ明らすやいなや、彼は謂はれなくほつとして身輕になつた。それで彼はもう、梶田と寸分の差異もない身輕さを獲たのだつた。

いま彼は梶田に對して、平常よりもさらに一歩近づいたやうな氣さへした。しかしこのやうにして突然近すぎるほど接近した梶田を、どうして嘗て想像した事があつたらう。梶田に對して最後の遠慮の除かれる時は痒いところに手のとゞく友情をこそ豫想すれ、このやうな敵意をどうして嘗て考へて見たらう！ 事實彼は蟲の片隅に鳴いてゐるその部屋のなかで、自分の動じない敵意に愕いてゐた。

「ぢやあ、さつきニコルに云つてゐた事は、そのまゝ君の考へ方だと思つていゝんですね？」

「あゝいゝとも！」

「ぢやあ君は、全然自由だつて云うんですね」

「あゝ、僕が意志することは僕の自由だよ！」

そして彼は芳子の使ふ標識に、梶田が苦痛を映したのを見て見ない

振りをしてゐた。

「それが僕の方則さ！」と彼は圖に乘つて喋つた。「自分で方則を持つてゐないと、實のところ僕は怖いんだ。虚無などといふ文字は、僕にはまだ薄氣味わるくつていけない！（實際頭のうへの屋根一つを剝げば、彼がいつも威嚇される星がその星座に整然と居並んでゐるのだつた。）——だから自分で自分の方則を創らないと、あんまり無抵抗で心細いんだよ。自然に則る、などといふ事は、僕にあずつとずつと、緣の遠い先きの事らしな」

「君はきつとえらいんだな」

と梶田が衰へた火花に似た皮肉を云つた。

「そんなに頼りになるものかな。——意志なんていふことが」

「それあ保證しないよ！」禎三も負けずに手厳しかつた。「僕たちははじめつから制限されてゐるんだからな。七八十年で死ぬなんてひどい制限だ！　それを今さら意志だけが不自由だと云つたところで始まらないぢやないか。意志する——まつたく、空へ小石を投げるやうな醜態かも知れないさ。——しかし生きてゐながらどこかで虚無に馬鹿にされることが承知出來ない連中は——結局まあ利口馬鹿といふのだらうな」

このやうな、詭辯と眞實とが半分づつ混つてゐる自分の言葉を禎三はいま思ひ出した。そしてこのやうに鋒先きを抽象論に向けてしまつた禎三は、病的な饒舌慾からでもあつたが、たしかに多少卑怯であつた。だが梶田はそれを怒つてひとりニコルの家へ歸るほどの氣力もなく、もう倦み疲れた眼蓋をして、彼に睡眠劑をせびつたのだつた。

——

どこか雨戸をぴつたり締めなかつたのだらう、宵に洋燈のまはりに集つてゐた蛾が五六匹、大きさのとりどりな身體を青白い窓硝子のあちこちへ打つけながら、しきりと無駄に羽搏いてゐた。——たしかにあの場合抽象論は狡かつたと、禎三は床のなかで靜かに思ひ返してゐた。横車を押したところがあれば、今朝は梶田に取り消した方がいい。——幸福の形がめいめいに違ふとしても、生きるといふ事に架空な強い望みを持つてゐるのは梶田ばかりではないのだ。自分も全力で生きたいのだ。病後に特有な貪り方で、どんなに自分も生活しなほすことを欲してゐるだらう。そして八重子の病氣は、あの危機一髪といふ瞬間は、あの小野獸のやうな食慾は、まるで計畫でも立てゝ貰つたやうに禎三のその生活慾を强めてくれたのだつた。

禎三はこんな事を考へてゐるうちに、寢床のなかにその儘じつとしてゐられなくなつた。彼は起きて、手さぐりに二階へ階段をのぼつて行つた。兎も角も日記風な手記をして見る——文字に現はして見る事で、自分にも混沌としてゐる現在の位置をあらためて考へ直して見やうと思つたのだ。だが寢不足の彼の動作は、頭のはたらきほどには行かなかつた。彼はぼんやりして、本棚の本を二三冊落した。

「どなた？」

と、隣りから芳子の低い聲が聞えた。禎三は扉を開けて、八重子の寢息の靜かに聞えてゐるその部屋を覗いた。
「あなたなの――さうお――もう向へお泊りかと思つてゐましたわ」
「梶田と話し込んでしまつた――」
禎三がぼんやりした顏付で答へた。
「何かさがしてらつしやるの。――お藥？」
「いゝや、手帳だ」
禎三が明け方に突然手帳を手さぐりする事には馴れてゐるので、芳子はその儘寢返りをうつてしまつた。だが禎三は變に興の醒めるのを感じた。風呂敷につゝまれた電燈の下では、藥瓶やコップや懷爐が黃ろく露はに照らされながら、毎日のとほりにきちんと起きてゐる。其處は彼自身の家であつてそのほかの何ものでもなかつた。そこでは部屋の隅々までが變化といふものを斥けてゐる。調子の外れてゐるのは彼だけだつた。階下の部屋だけだつた。――彼はもう、何もする事がなくなつたやうな氣がした。寢床のなかでは何か非常に意味のあるやうに見えた考が、急に下らなく思はれるのだつた。たゞ寢不足の重荷だけが強くのしかゝつて來た。それで彼は手帳をもう一度、雨戸の節穴のやうやく明るくなつて來てゐる物置部屋へ置いて、そのかはり特に梶田に渡したと同じ睡眠藥を飲んでしまつた。
禎三が二度目に眼を覺ました時には、もう十時を過ぎた日盛りだつた。窓をとほして誰か物干に足袋を乾してゐる手が見えた。手だけがふと見えたのだ。しかし禎三はすぐにそれを松子のだらうと察した。松子はその三四日、短い時間ではあつたが、また八重子の看護の手傳ひに來てゐるのだつた。やがて足袋を乾した當人が階段をのぼつて行つた。食卓の下から丁度足の動きが見えるのだ。しかしそこにも、脫いだ筈の眞白い足袋が再び登つて行く。――その瞬間、まだ起きたての禎三は、いま日にあてたばかりの足袋をもう乾かして、松子がそれを履いて行つたやうな幻覺を持つた。非常に爽かな幻覺だつた。足袋のぬしの足音は彼の頭上を横切つて八重子の部屋へ入つて行つた。
禎三が窓を開けて、やはり前のまゝに物干で日光消毒をされてゐる白足袋をもう一度みとめ、さうさう、松子は傳染の用心のために戶外で履く足袋と禎三の家で使ふものとを注意深く區別してゐるのだつたと思ひ出したのは、そのすぐ後だつた。しかし今しがたの幻覺の美しさは、なほも彼の頭のなかで鮮かに尾をひいてゐた。
梶田もやがて起きた。夙うに眼が覺めてゐながら、同じく松子の足音を聞いて起きにくゝしてゐた樣子にも見えた。梶田は心もち寂しい、むつつりした、工合のわるい表情を見せてゐた。しかし其處にゐるのはもう不斷の梶田だつた。そして禎三に背中を向けながらズボンを履いてゐる梶田の肩のかたちは、彼の二番目の妹のそれに生き寫しだつた。「僕は家のほかの者とはまるつきり違ふ！」などと昨夜傲慢に云つてはゐたものゝ、やはり兄妹は爭はれない。禎三は下駄に紺

つたその梶田の悧潑な妹が、昨夜彼と梶田との間にあのやうな云ひ爭ひのあつたことを聞いたならば、どんなに驚くだらうと、ふと考へた。日のよくあたる秋らしい靜かな朝で、青い、襞の多い遠くの山々が、林の上からぽつくりそれぞれの顏を出してゐた。

禎三と梶田とは裏手の、三軒共同に使つてゐる貯水槽へ顏を洗ひに出て行つた。起きてすぐに松子のゐる――そして梶田も無論氣がついてゐる――家のなかで、そのやうな事をするのが窮屈だつたのだ。貯水槽の隣に官有林があつて、その境界の柵の針金に赤蜻蛉が一列に留つてゐた。そして二人が通り過ぎると、一番近くの蜻蛉が二三疋飛んではまた、少し離れた針金の空いたところへ休むのだつた。

かはるがはる顏を洗つてゐる間に、禎三はかう云つた。

「おい、どうしても例の事を松子さんに傳へたいと云ふならば――僕には出來ないけれども――誰かほかの人に頼むといゝ。――僕は無論邪魔はしないよ。――當り前の話だけれども」

「うむ」と、金だらひへ俯いてゐる梶田が鈍感なやうな返事だつた。

「無理にさうしやうと思へば、一人あるさ」

その一人が誰であるか、禎三には一寸見當がつかなかつた。しかし、少しでも同情の影さへ見せて貰ひたくない、といふ風なその率直さは、梶田のために一種寂しさに苦しめられてゐる禎三にとつては、この場合かへつて有難かつた。

松子は二階から二人に愛想よく挨拶した。松子は芳子の話しかける後から、ずるずるに潜り込んだ梶田へ何か冗談らしい事をさへ云つてゐた。

「梶田さん、梶田さん」

と、八重子がいかにも規則的に舌足りた無邪氣さで――と禎三には樓上へ仰向いてさう感じたのだが――同じ二階から梶田に聲をかけた。そして何か細かく書き記してある雜誌を見せびらかしてゐた。隣家芳子は、やがて食卓に向つて新聞を擴げてゐる二人の天井の上で、隔壁から脈々に深山のものを話されつゝある食事の目録表を、八重子のために讀んで聞かせてゐた。

「それから」

「それから」

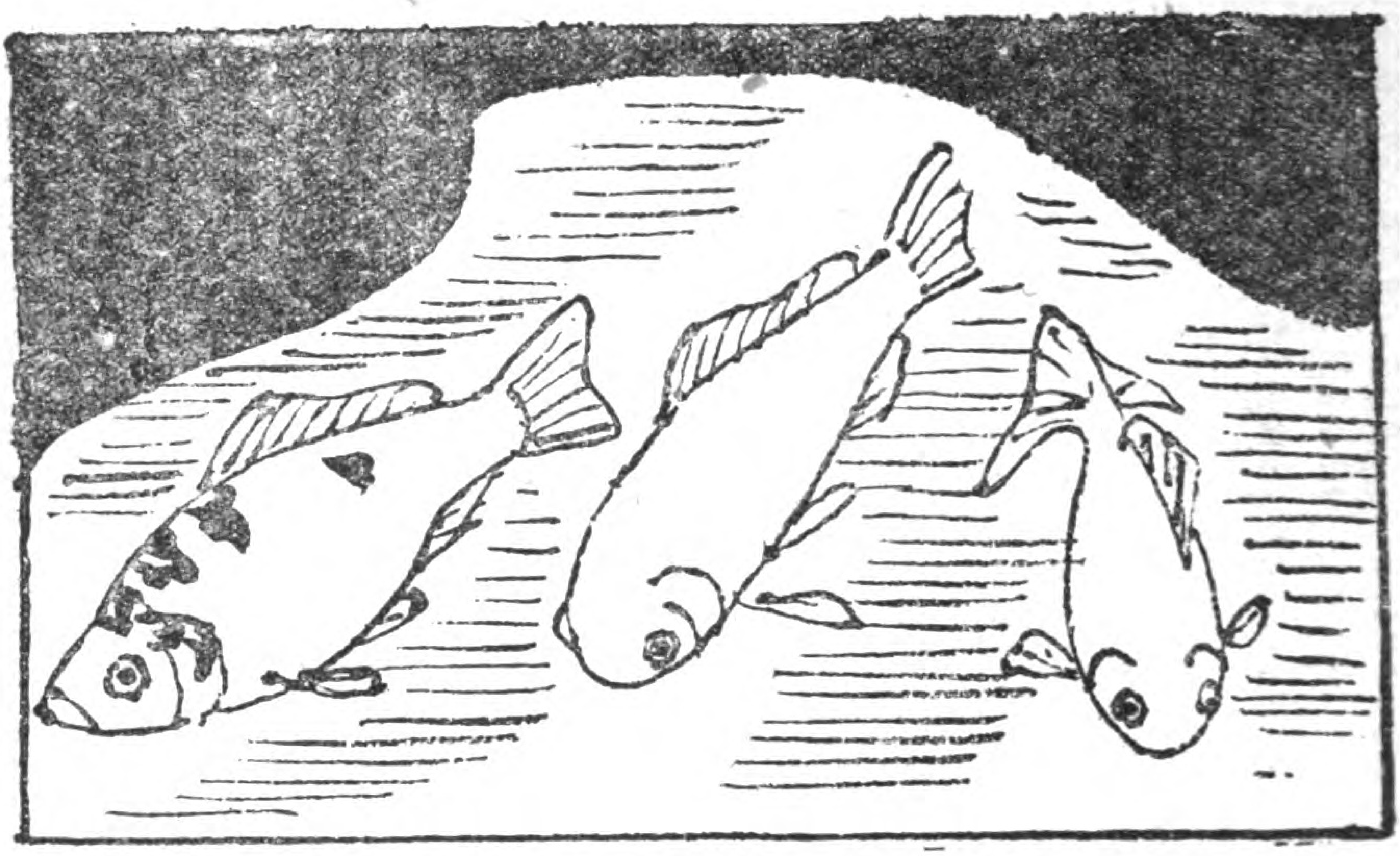
「それから」

と八重子は強請つた。その甘え氣味な八重子にむかつて、松子が傍からから敎へてゐた。

「それでもう、何でも召し上つていゝのよ」

「何でもつてどんなものよう。何でもつてどんなものよう」

梶田は食事の運ばれる間、濕氣の多い空氣を吸ふ振りをして、二階に遠い方の緣先へ出てしまつた。禎三もそれに續いた。友情の變形であつた。それで彼にはもう、松子が笑ひたから何を云つてゐるのか、聽きとる事が出來なかつた。……



善魔

里見弴

六の一

「今夜はひよつとすると來られないかも知れませんよ」

さう云ふお民の表情で、もう十が十まで來ないにきまつてゐるものとの察しはついたか、然し昌造は、どこで誰に逢つてゐるのか知ら、といふやうなことは、考へてみるどころか、てんで氣にもかゝらなかつた。そのくせ、いつぞや四谷のおでんやで三時近くまで飲んでゐた擧句、醉ひに任せて沖津を叩き起した時でも、お民が、もう夙に寢込んだにきまつてゐる瑛龍を、態々電話口に呼び出して、いろ〳〵云ふのに、あんまり晩すぎるとか、やれ髮を洗つたからとか、容易に應じさうもない應對を傍聞すると、「よし、俺が出よう！」かなんかで、いきなり受話器をひつたくり、有無を云はせず呼びつけて了つたこともあるくらゐで、決して我儘でないことはないのだし、特別嫉妬の感情が薄いとも思はれないのだが、氣にならないとなると、またケロリと忘れたやうになんとも思はなかつた。昌造には、さういふ、ちよつと調子のはづれたところもあつた。

それに、丁度仕事も切迫してゐた。態々狹い部屋を撰んで、火鉢に鐵瓶をちん〳〵云はせ、いつでも紅茶の淹れられるやうにして、明方まで一氣に書き續けた。勞れて、隅の方によせてとらせて置いた寢床にはいつたのは六時頃だつたが、仕事のあとの亢

かりでなく、今度はまた瑛龍のことばかりが氣になつて、どうしても寢つかれなかつた。階下に梆鼓の音がしだすのを待つて呼鈴を押して催眠藥を買ひにやつたが、定量よりも二粒ほども餘計に飲んで、それで矢つ張り眠りが得られなかつた。

　十時すぎになつて、三月一日から後、隔ての瑛龍が、五寸ほど雨戸を隙したゞけの薄暗い部屋に、そうッと、覗き込むやうにしてはいつて來た。

「起きてるの？」

「寢られないで困つてゐるんです。早くこゝにいらつしやい」

夜具の上に横座りに坐つて、

「昨夜は夜明し？」

と、散らかり放題になつた机を見て、「書けたんですか」

「書けた」

　昌造は、なんと云つても、約束を破つて、瑛龍の謂ふ「爆裂彈」に觸れて了つたことが、やゝ後めたくもあり、またかうして差向ひになつてみると、思ひも設けなかつた憎しみも湧いて來たりして、いつものやうにすぐぺら〳〵喋り出すわけに行かなかつた。

「それアよかつたわね」

ふと、枕もとの藥の箱を把りあげて、「これなアに？」

「カルモチン」

「どうして？　寢られないの？」

「寢られないんだ」

「寒かアない？　火を貰ひませうか」

「あゝ」

呼鈴を押しに立つた序に、窓のそばに行つて

「もうちつと暗くなくつてもいゝ？」

「いゝでせう。……たんたら、屏風をもうちつとこつちに引いて貰ふと、おかに目に來ないでいゝんだが……」

「はい。かう？」

「上等！」

　いつまでも話らしい話にならなかつた。火鉢をつぎ足してから、そこら散かして置くことの嫌ひな瑛龍は、紅茶の道具をさげさせたり、書き損ひの原稿紙をひと纏めにしたり、机の上のものをキチンとしたり、こちよ〳〵と立ち働いてゐた。平氣さうに見せても、矢つ張りどことなくてれくささうだつた。

　片づいて了ふと、立つて、羽織の紐に指をかけながら、

「あたしも寢やうかしら」

「えゝ、いらつしやい」

「いま一箇ある？」

　一人で寢る時でも、女枕は必ず夜具棚の方に入れてあつた。いつぞや、ひどくはしやいでゐた昌造が、ふと手に觸れたそれを、また起きて枕もとなど片づけてゐた瑛龍の方へ蹴しつけて、圓右の假聲で、

「いま一箇の枕は、要して何人の使用するものかね」

と、「五人退治し」のなかの官員さんをやつてみせたことがあつて、以來、その裄の方に隠してある枕を、二人の間では「いま一箇」と呼んでゐた。

「あゝ、いま一箇？」

初めて笑ひ顔になつて、起き返つて來りながら、「あゝ、ある／＼」

「さうお」

瑛龍の調子も、やつと普段の低さに落ちついた。

横になつてから、昌造は、まじ／＼と顔を見詰めながら、

「あんたのこと、知つてますよ」

と、云つた。なんとなく、惡黨ぶりたいやうな、へんた芝居氣がむら／＼と湧き起つて來てゐた。

ピーンと響いて、

「さうお」

瑛龍も、平然自若とした。「云つてごらんなさい」

「云はなくつたつて大丈夫。間違つてる氣遣ない」

「でもさ、云つてごらんなさいよ」

どうかすると、忽然としてこの人に現はれて來る氣の強さ、――一歩もあとへは引かない、といつた感じの、キパッとした張りが言葉の調子に響いた。

やゝ、壓され氣味に、

「[illegible]……たらう？」

少しも惡びれずに、

「さう！」

が、あとはやゝ急き込んで、「いつ、誰から聞いたの？」

「せんから知つてる！」

忌々しさに、昌造も、躊躇するところなく嘘をついて、無理壓しに壓し返した。

「嘘！　三谷さん？　それとも、久保さん？」

年若ながら、劇評家として頭角を擢てゐる三谷は無論兩角も知つてはゐたし、それより、すぐの弟とは可なり親しい仲だつた。前年の秋、まだ昌造と瑛龍とがそれほど接近しない時分、どちらかと云へば引込思案の三谷が、初めて逢つた瑛龍と、忽ち仲よしになつて了つたのも、云はず語らずその秘密によつて結ばれた態だつたとみえて、いま、第一に擧げられたのが彼の名だつた。人からは、生馬の目でも拔きさうに思はれがちで、その實存外うつかり者の昌造は、そのへんの機微には全く無神經だつた。どつちもあんまりはなつきあひのよくない同士が、どうして急にあんなことになつたか、うまが合ふとでもいふやつかな、くらゐにしか氣にとめてゐなかつたから、いきなりこゝに飛び出して來た彼の名が、どうにも腑に落ちなかつた。

「三谷？　どうして？　三谷君知つてたの？」

「たらうと思ふけど……。おア、久保さんね？」

「まア、それア誰だつていゝさ。それより、そんなこと、ちつとも爆烈彈でもなんでもないぢァありませんか。少くとも、あたしにとつちアなんでもない。——無論それア、そんなこと、なかつたらなかつたに越したことはないけど、あつたらあつたで仕方がないさ。たゞ……

……」

「ぢア云つちまひますけどね、實はあたし、今日の十二時に、あの人に逢ふ約束になつてゐるの。逢つて、ちやんと話をきめて來ようと思つてるの。ほんと云へば、それがすんでから、あたし、自分で、すつかり貴方に話したかつたんだがな」

ちよつと口惜しい、といふ感慨の、微に語尾に絡んだのが、正面に昌造の胸へ來てさゝつた。機會で、どうにも仕様がなかつた。が、この機會は、矢つ張り來てくれなかつた方がよかつた、と思つた。——（御免ね！）肚で詫びて、……然し、兎も角今は、當面の問題だつた。

「それアいゝ！」

いつの間にか、昌造はすつかり緊張してゐた。「偶然さういふ場合にぶつかつたとすれば、尚更あたしはなんにも云ふまい。あんたのことだから、無論さういふ氣もあるまいとは思ふけれど、あんたもあたしになんにも相談なんぞしない方がいゝね」

「あたし、自分でも、あゝ云はふかう云はふなんてこと、まるつきり考へてないのよ」

「それアそれが一番いゝさ」

「それア、考へたことは、去年から丸半年も、そればつかり考へてたことよ。だけど、いざ今日となつたら、なんにも考へられなくなつちまつたの。それア、いかにたんてつたつてかんてたつて、い、はなつから、云ひ譯の立たないことなんですもの、——人が聞いて、尤もだ、と思ふやうなことぢやアないんですもの」

「それアさうだ。それでゐて、あんたの氣持としちア、ちつとも惡いことをした、といふ……」

「それアあたしにはないわ。だけど、ひとの身になつて考へると、何も彼もみんなあたしが惡いことになつて來るんだから、あたしとしちア、ひと言だつて云ひやうはないのよ」

「然し、この場合は、ひとのことまで背負い込んで考へちアいけない。負けなくも、といふ言葉があるでせう？　負けなく浮世の民に負ふかな、——あの負けなくだが、つまり背負ふだけの資格や實力もないくせに、といふ意味だね。全智全能の神樣だつて知らん顏でいらつしやるのを、人間の分際でやたらに背負ひ込まうとする……。それア無論、利己主義のガリ／＼のよくないことは知れ切つた話だけれど、負けないことはしない、つまり自分の分際を知る、といふこともまた肝心なんだ。だから……」

「よく解つたわ。もうよく解つたわ」

「あゝ、さう／＼、なんにも云ふまいつて云つときながら、……どう

もいけないね。もうなんにも云ひませんよ。あんたとあの人と二人だけの問題だ。助太刀は卑怯だからね」
「さうよ。ですからあたしだつて、今日その話をしに行くつてこと、あなたには内證にして置かうと思つてたんだけど……。貴方がこゝにゐるんだな、と思ふ氣持だけだつて、ちよつと卑怯なやうな氣がしてゐたくらゐなんだけど……」
「それアまア、然し、偶然來合せたんだから仕方がないさ」
「あたし、だけど、行つても、ほんとになんにも云ふことないわ」
「それア行けば出ますよ。あんたも先刻さう云つたけど、あゝ云はうから云はふなんて、前もつて考へて行かない方がいゝね。無念無想で、たゞ怒の氣持だけ、ぴりッとも動かないやうに、うんとから下ッ腹に力を入れてさへすれアいゝんですよ」
「さうね」
「このくらゐは云つたつていゝでせう？　何もこれは、今日に限つたことぢアない。人間として、いつだつてさうありたいと希はなけれアならない筈の、一番立派な氣持なんだから。……然し、あんた、いゝのかい？　十二時に逢ふ約束なら、もうそろ／＼仕度をしないと……」
「さうね」
　明さないうちは、氣振にも見せなかつた胸のつかへが、俄かに眼の色に出て、いつに似げない、うはの空な返事だつた。惹き込まれて昌造も、あぶなく感傷的になりかゝるのを、ぐッと喰ひしばつて、枕もとの時計を見た。
「あゝもう十五分ぐらゐしかない！」
「少しぐらゐ遅れたつて仕方がないわ」
「然し、それア早い方がいゝ。早く行つて、早く歸つていらつしやいよ！……一遍うちに歸つて出直すの？」
「おそくなつたからぢかに行くわ」
「近く？」
「遠いの」
「ぢア、自動車をさう云つとかう」
呼鈴の紐に手を伸さうとするのを、
「いゝわ。今あたしが呼ぶから」
云ふと同時に起き返つて、慌たゞしく、脱いでゐたものを身につけ始めた。
　なんとなく、昌造も氣が急いた。
「自動車さう云つとかうよ」
今度は起きて行かうとすると、その時丁度襟をしめ終つた瑠璃が、
「いゝことよ」
と、小走りにその方へ寄り、ちよつと跳んで押して、戻つて來るのを見ると、襦袢の下から胸に抱くべき筈の伊達巻が、だらりと裾の方まで引きずつてゐた。
「何？　それは」

「え？」

と、見て、我ながら呆れ顔に、「あら、いやだわ。不斷しめちやつたら忘れちまつたのよ、馬鹿ねえ」

昌造は、いじらしくもあり、心もとなくも思はれた。

「落ちついて、落ちついて！　あたしがあまり急きたてたのがいけないんだけれど、ちつとも慌てることはないよ」

云ひながら、自分自身を落ちつけやうとして、下肚に深く息を嚥み込んだ。

—(完)—





斷片

武者小路實篤

僕の友達のAが行衞不明になつた。勿論調べればすぐわかると思ふ。だがAの氣持を察して誰も調べないのだ。そして皆反つてその方がAの爲にいゝと思つてゐる。一年か二年引こんでゐたらAのことだからきつと出てくるにちがひない。彼は誰にも何にも云はず。妻と二人で何處かへ行つた。

彼には子供がない。彼の妻は彼を信じ切り、彼のゆく處なら何處でもついてゆく女である。彼が死ぬと言へば一緒に死ぬであらう。

はたで見てゐてもいゝ氣持を通りすぎてゐる。少し病的だと云ひたい位いだ。だから二人でゐなくなつたのだから、誰も調べる必要は認めない。勿論、Aは可なり名の知れた作家だから雜誌記者や、新聞記者で少しは彼の居處を氣にして捜したものがあつたが見つからなかつた。強ひて記者たちも捜さうとはしなかつた。それに二人なので、なほ誰も捜す興味も感じなかつた。

「死んだのかも知れない」と云ふ噂もたちだしたが、僕達の仲間では誰もそれを信じてゐない。彼は自殺はしない男だ。反つて何處かで勉強してゐるにちがひない。そして僕達が急がしがり、そして毎月々々未熟なものを發表するのを氣の毒がつてゐるであらう。

彼自身もそのために苦しんだ。僕は疲れたと云つた。生きてゐるのが少しいやになりか

けたと云つた。三年許り行衛不明になりたいとも云つてゐた。それを實行したにすぎないと自分達は思つてゐる。そしてそのことが彼のためにもいゝと思つてゐる。彼は生た死骸になる男ではない。きつと何かしてゐる。或は一時、何にもせずに遊んで居やうとも、それは英氣を養なつて、更に起き上るためだと思つてゐる。

處がへんな噂がつたはつた。それはある山の中で二人の死骸が見つかつた。それがどうもA夫婦らしいと云ふのである。

その噂は何處から出たか自分は知らないがしかし僕は逢ふ人からその話をきく、そして僕自身も、こんな噂があると云つて吹聽して歩く。なにもその噂を信じてゐるわけでもないが、又信じないわけでもない。人間はいつ死ぬかわからないものである。又いつ氣のかはらないものでもない。いつ死にたくなるか又死にたくなくもいつ死ぬものかわかつたものではない。

二人の死んだことが假りに事實としたら、恐らく二人は死なうと思つて死んだのではあるまい。つい道に迷つて死んだのであらう。しかしそれだつてあらうにすぎない。

自分は十が九までAは生てゐると思ふ。そして近頃話をやり出し、山がかきたいと云つてゐたから、恐らく呑氣に山をかいてゐるのだらうと思ふ。だがそれも思ふだけで、本當のことはわからない。自分はある文士の自殺からAのことが氣になつてAの家のあとしまつをしたBの處へ行つて見た。そしてAのかいたいろ／＼のものをあさつて見た。

しかし僕はそれで手懸はつかめなかつた。

自殺しないとも云へない。しかし僕は恐らく、生てゐるのだと思ふ。金も不意にまとまつて入つたらしい形跡があるから。

しかし生てゐるなら何處かに何かたよりがありさうだと思ふが誰にもたよりはない。二三の僕の友はA夫婦が死んだことを信じ出した。

自分は二三年たつ内にAがこの世に再び、強い力を得て起き上つてくることを信じる。そしてその時はAは一つの傑作をものにしてそれをお土産にして出現すると思つてゐる。

自分はこゝにAに内證でAの手記の内から面白いと思つた次ぎの斷片話をぬいて見る。Aは知つたら怒るかと思ふが、怒られゝば自分は嬉しく思ふ。死んだものは怒れないから。

Aよ怒りたかつたら怒つてくれ。

僕は君の生てゐることを切にのぞむものだ。隨分出鱈目だが、其處がAらしい所としておく。

○

日蓮。君達は俺がよわらないのを不思議に思つてゐる。君達は俺が俊寛のやうによわることを豫期してゐたのか、この法華の行者が、俊寛のやうによわることを豫期した。が、俺だつて人間だ。この八寒地獄にもまけない寒さを感じないのぢやない。都を戀しく思はないの

ぢやない。俺の弟子達がどんなにひどい目にあつてゐるかも氣にしないのぢやない。だが俺は法華の行者だ。その位の覺悟は出來てゐる。女々しいまねは出來ない。俺は日本の柱である。この柱がまがつてどうなるか。君達でさへこゝに住みこゝで生てゐる。この俺にこゝで生てゆかれないと云ふことはない。そしてこの俺を生かして、俺の仕事をさせないことは出來ない。俺は云ひたいことだけは云ひ、かきたいことだけはかく。俺は云なければならないことが多い。俺の言葉を信じないものは、日本を亡ぼすものだ。日本を亡ぼしたくないものは俺の云ふことをきかなければならない。君達は日本が亡び外國の者がせめよせて來て君達や君達の妻子をなぶり殺しにし、君達の土地を奪ひ、君達を奴隷にするのをよろこぶか。よろこびはしまい、それなら俺の云ふことをきかなければならない。この法華行者の云ふことをきけ。君達は聲高く南無妙法蓮華經をとなへよ。その時、この宇宙に充滿する、佛陀の心は、人々が名をよばれて君達の所へくるやうに、君達の心にくる。君達の心のまわりを天使がはゞたゝく。君達は佛の加護を得やうと思ふならば南無妙法蓮華經を聲高々にとなへよ、俺は南無妙法蓮華經を聲高くとなへることで瀧口で首の座にまですわつて助かつた。その他いたる所で死なゝかつた。八寒地獄や、この孤島が俺の心をしなびさすと思ふのは南無妙法蓮華經の力を知らないものだ。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

○

日蓮。俊寛君。

俊寛。誰かと思つたら日蓮さんか。

日蓮。君は鬼界島で隨分參つたさうぢやないか。

俊寛。それは參つたさ。あの時分僕は生てゐたのだからね。

日蓮。生てゐるから參らないのぢやないか。

俊寛。生てゐる時は腹がへれば參る。都に歸りたくなつても歸れないと參る。妻子に逢ひたくつても逢へないと參る。

日蓮。それは君が法華經を信じなかつたからだよ。法華經を信じれば、鬼界島に流されたつて君のやうには參らないね。僕だつたら、鬼ケ島に流されても、平家が亡びるまでは生てゐるね。反つて太つて生てゐてやつたね。

俊寛。それは君は鬼界島を知らなかつたからさ。

日蓮。僕だつて佐渡に流されたことがある。

俊寛。佐渡はいゝ所さ、鬼界が島とはわけがちがう。

日蓮。佐渡は隨分寒かつたぞ。

俊寛。それだつて人間が澤山ゐるだらう。美人だつてゐたらう。

日蓮。美人なんかゐなくつたつていゝよ。

俊寛。居た方がいゝな。

日蓮。僕が君だつたら參らないね。

俊寛。君は抽切つて鈍感らしいからな。

日蓮。何を云つてゐるのだ。僕を鈍感と云ふのは君許りだ。僕の弟子に火のやうにあつくなつた釜を頭からかぶされて顔中やきたゞされても、平氣で南無妙法蓮華經をとなへてゐた奴がゐる。

俊寛。偉い奴がゐたものだね。

日蓮。君にそんな眞似が出來るか。

俊寛。今なら平氣だよ。

日蓮。あたりまいさ、生てゐる時の話さ。

俊寛。生てゐる時そんな目にあつてはたまらないね。

日蓮。君が南無妙法蓮華經をとなへることを知らなかつたのはおしかつた。

俊寛。僕の友達にのべつに南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と云つてゐた男があるよ。

日蓮。南無阿彌陀佛は消極的だよ。自分を大きく生かして、宇宙にゐる佛をよび出してそれと一つになると云ふおもむきはないな。

俊寛。さうかね。

日蓮。君には僕の話はよくわからないか。

俊寛。ちつともわからないよ。

日蓮。氣の毒だな。僕は今度人間に生れかへつたら、鬼界島へ行つて見たいな。

俊寛。君はもの好きだな。あんなつまらないいやな所はないぞ。

日蓮。其所だつて、南無妙法蓮華經を聲だかくとなへると極樂になるよ。南無妙法蓮華經々々々…

(日蓮の弟子達大ぜいあらはで太鼓までたゝいて南無妙法蓮華經をやる)

俊寛。うるさいね。死んでも我慢が出來ないよ。(退場)

日蓮。あはゝゝゝ。

○

一休。(登場)賑かですな。

日蓮。誰かと思つたら一休さんか。

一休。えゝ一休です。こゝぢやもう南無妙法蓮華經の必要もありませんね。

日蓮。ないとは云へない。

一休。あるとも云へませんね。

日蓮。君は生てゐる時あんまり茶化しすぎたね。

一休。生てゐる時のお小言ですか。いや恥かしい話ですよ。

日蓮。君はうかれて許りゐたね。

一休。さう云ふ君は、中々元氣だつたさうだね。

日蓮。僕は人生を茶化することは嫌ひだ。敵か味方だ。

一休。人間に敵と味方とはつ切り區別が出來ますかね。

日蓮。出來る。法華經を信じるものと信じないものとね。

一休。マルクスを信じるものと信じないものとですか。
日蓮。それはなんだ。
一休。いや最近來た男がそんなことを云つてゐましたよ。
日蓮。マルクスとはなんだ。
一休。いやなんだか僕にはわからないので、今頭から怒られて來ましたよ。しかし生てゐない、幸に怒られても少しも腹は立ちませんでしたよ。ありがたくも思ひませんがね。處でもつと太鼓でもたゝいたらどうです。僕は陽氣なことが好きなので。
日蓮。それなら一つやりませう。皆踊めやう。
（一休おどりだす）
日蓮。一休さん、さう茶化しちや困りますよ。
一休。あなたもおどつたらどうです。
日蓮。そんなことは僕には出來ない。
一休。その通り僕もあなたの眞似は出來ませんよ。

○

日蓮。誰だ其處にゐるのは、つんぼか。なんだ坐禪してゐるのか。馬鹿だなそんなことはよせ、よせ。何と云ふ顔をしてゐるのだ。馬鹿な眞似はよせ。皆もつと強く太鼓をたゝき、お題目をとなへよ。
（だるま、平氣でゐる）
日蓮。一休さん、一休さん。あの男はだるまですか。
一休。だるまさんです。
日蓮。呑氣なものですな。
一休。あれも、もつて生れた病ですよ。だが僕はあの人は好きですよ。あゝして平氣でゐるのが。
日蓮。あんな氣むづかしい顔はしないでもいゝでせう。
一休。したつて惡くないと思ひますな。めい／＼勝手なことしてゐる所が、この世のいゝ所ぢやないのですか。
日蓮　だから僕は僕流にやるのです。見てゐられないものはだまつてゐられませんからね。
一休。相手がきかないでもですか。
日蓮。きかない馬鹿は仕方がありませんがね。
一休。しかし僕はあなたの話をきいていつも感心してゐたのです。僕は君のやうな人が出てくるといいと思つてゐたのです。
日蓮。まあ、僕が出なければならなかつたのですな。
一休。本當にさうです。いつの時代でも君のやうな人が一人はゐてもいゝと思ひますね。一人だけですがね。二人ゐちやうるさいですからね。怒り玉ふな。（調子つけて）さようなら。（逃げこむ）
日蓮。あはゝゝ。おかしな奴だ。

○

（羅漢出てくる。子供ついてくる。）

子供。へんな顔してゐるね。

子供。珍らしい顔だね。

（レオナルドあとをつけてくる）

レオナルド。一寸待つて下さい。あなたの顔をかゝして下さい。

羅漢一。かいてなにゝなる。

レオナルド。あなたの顔は珍らしいのでかきたいのです。あなたのやうな顔には始めてお目にかゝれたので、本當に珍らしい顔ですね。こんな顔になるのは大したことでせうね。

羅漢一。あなたは顔のこと許り云つてゐますね。

レオナルド。顔見ればあなたの心もわかります。その心の深さが顔に出てゐるのでおどろくのです。私は生てゐる時あなたのやうな顔をさがして歩いたのですが、とうとう逢へませんでした。珍らしい顔にはあつても精神の深さのない顔許りで、尤もミケルアンゼロの顔はいゝ顔でしたが、あれの怒りつぽいのがきづでした。

羅漢一。ミケル……そんな人も私は知りません。

レオナルド。さうでしたね。だかともかくあなたのやうな顔を生て見ることが出來た人はうらやましい限りですな。あなたの顔をかいた人がありますか。

羅漢一。そんな人はありません。

レオナルド。さうですかね。惜しいものだ。

羅漢一。まだですか。

レオナルド。出來ました。この畫を地上に送ることが出來たらな。

子供達。うまいうまい、そつくりだ。うまいもんだ。

羅漢二。うまいもんぢやな。君そつくりだ。

羅漢一。俺の顔はそんな顔してゐるかな、少し悲觀するな。之でも生てゐる内は、美男子で女にさわがれておしやかさんに心配かけたものだがな。

羅漢二。それならゆかう。

レオナルド。一寸待つて下さい。あなたもかかして下さい。

羅漢二。又今度にして下さい。今日は一寸之からおしやかさんに逢ふ必要があるので。

レオナルド。さうですか。それならその内是非かゝして下さい。

（羅漢や子供達去る。レオナルドの弟子くる）

弟子。先生。話してゐる内に逃げるのはひどいですな。この頃は地上を平氣で飛行器がとんでゐるさうです。

レオナルド。その話はもうすつかり聞いたよ。人間と云ふ奴は馬鹿が多いと思ふが、澤山でいろいろのものを考へ出す處を見ると、俺も一人ぢや叶はないと思つたよ。しかし之を見ろ、いつか話した人をとうとう見つけたのでおいかけて來たのだよ。

弟子。先生。とうとうものになさりましたね。先生の畫にも、この位い珍らしい顔はありませんでしたね。

レオナルド。世の中は廣いものさ。俺達の知らない處にこんな顔の男

がうろついてゐたのだからね。

（貫休出てくる）

貫休。一寸その畫を見せて下さい。

レオナルド。どうか。

貫休。うまい。

レオナルド。あなたは何處の方です。

貫休。私は支那の坊主で畫かきです。

レオナルド。畫かきですか。

貫休。さうです。

レオナルド。どうか是非畫を見せてほしいものですね。

貫休。一つお目にかけませうかね。（畫をふところから出す）

レオナルド。えつ。之はあなたがかいたのですか。

貫休。さうです。

レオナルド。おどろきました。感心しました。あなたはなんと云ふ名です。

貫休。貫休とも云ひ、禪月大士とも云ひます。

レオナルド。あなたに逢へたことは實によろこびです、この畫を見てごらん。大したものぢやないか。

貫休。あなたにわかります。

レオナルド。わかります。

貫休。あなたも大した人ですね。一つあなたの顏をかゝして下さい。

レオナルド。名譽です。僕にもあなたをかゝして下さい。

貫休。光榮です。

（二人かきつこする。）

○

男一。なんだ畫かきが二人畫をかいてゐるな。

女一。珍らしい立派な人達ね。

（畫を見て女ふき出す。男もふき出す）

男一。行かう。

女一。えゝ。

男一。あれは氣ちがいだね。

女一。さうね。へんな畫ね。

男一。あの支那人の畫にはおどろいたね。

女一。救世主よ。

男一。や向ふから何かくるぞ。

女一。うるさいから逃げやう。

男一。おや向ふからもくるわ。

女一。あれは日蓮宗だ。

男一。あつちへ逃げませう。

女一。おやへんな男が怒るよ。

女一。あれはきつと氣ちがひよ。

男一。おや、こつちからもくるよ。

女一。あら、よつぱらいよ。今日はお祭りなのね。

レオナルド。出來ました。

貫休。私も出來ました。

レオナルド。大したものだ。

貫休。本當に大したものだ。

レオナルド。あんまり大勢人が來ますから向ふでゆつくりお話しませう。逢へてこんなうれしいことはありません。

貫休。私も實に愉快です。

(二人話しながら退場)

(大勢來る。音樂がひゞき出し、皆だん〴〵この調子にかぶれておどり出す)

○

之でAのかいた狂言のやうな對話は終つてゐた。面白いと云へば面白いが、何か足りない。

Aはそのあとにこんなことをかいてゐた。

もう一歩、その一歩が急がしくつてふみ切れないはがゆさ。自分にはもう二三年修業がゐる。誰も知らない所にゆきたい。

そしてその一歩がふみ切れたら出て來たい。

Aはそれを今實行してゐると自分は思ふのだ。

Aが死んでゐるとすることは噓ではないかも知れない。しかしAがやがて再生の勢ひをもつてあらはれてくるのを期待するのはまちがひとは思はない。よし二人の死骸がA夫婦に似てゐたとしても。

諸君はどう思ふ。(二七、八、一三)

編輯だより

◇普選實施後の府縣會議員選擧が近まつた。こんどこそは新有權者擧つて熱と意とを選擧に傾けてもらひたい。そして既成の木偶連を氣持よく掃蕩してもらひたいものだ。しかしよほどの準備を練るにあらずんば老巧者のために砂をつけられるであらう。先づ第一に無産政黨は偏離を排し、すべての感情を流して共同戰線を張らなくてはなるまい。このことが出來なければ結果はもう知るべきである。

◇サッコ、ヴァンゼッチの死刑延期！　アメリカだけで七十五萬の同情罷業！　我國では國民の殆んどすべてが彼等を知らず。

◇芥川龍之介君自殺す。特異の才能を文壇に傾けて十數年、その功績は沒すべからざるものが多い。殊に君の小說や隨筆が全く他の追隨を許さぬものが多かつただけに何となく寂寞の感がせまつてくる。

◇其文壇的絶筆「西方の人」を讀むものは、死に至るまでの君の過程をよくつかむことができる。

◇古泉千樫君逝く。歌壇にこの人のなくなつたのはさびしいかぎり。

◇「現代日本文學全集」八月配本は少々遲れて廿日配本に決定。しかし菊判五百六十頁の堂堂たるものとなりました。九月配本は「永井荷風集」で、十月配本は「芥川、久米集」の豫定です。それから增卷十三册の組合せは一二ヶ月後に發表、既報以外に重大な文獻を入れたいためにおくれたのです。

◇夏季大學で開催地諸君のいろ〳〵なおせばにあづかりました。そして講師諸君もこの暑いのによく努力していただきました。厚く感謝します。

◇本社より近刊の書は眞山青果氏著「鼠小僧次郎吉、桃中軒雲右衞門」池谷信三郎氏著「橋・おらんだ人形」細井孝作氏著「無限抱擁」中條百合子氏著「伸子」等です。

◇懸賞小說は原稿を楷書で認めて下さい。それから社員、校正、給仕の募集は〆切りとしました。合格者には九月五日までに通知します。何分四五名の採用者に一千名以上の應募者を見たことはいかに失業者の多いかを痛切にもの語つてゐます。

◇十月號から新刊紹介欄を設けます。

改造定價

册數	定價	郵税
壹册	五拾錢	貳錢
半ヶ年	參圓	郵税不要
壹ヶ年	六圓	郵税不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

(價五拾錢)

昭和二年八月十八日　印刷納本
昭和二年九月一日　發行

東京市麹町區内幸町一ノ三幸ビルヂング
編輯兼發行人　山本三生

東京市外戸塚町市谷加賀町一ノ二
印刷所　秀英舍

發行所
東京麹町區内幸町一ノ三
幸ビルヂング一階
改造社
振替東京八四〇二
電話銀座一四五五八
營業部一五〇四六
編輯部一七三三

改造社出版圖書目録（昭和二年七月現在）

著(譯)者名	書名	型 頁數	定價 送料 (円)
法學博士 穗積重遠著	離婚制度の研究	菊上 九四〇頁內	一〇・〇〇 ・三六
河西太一郎著	農業問題研究	四六上 四三五	二・三〇 ・一二
專大教授 宮本英雄著	婚姻の基調	四六上 二〇八	一・五〇 ・一八
法學博士 福田德三著	社會運動と勞銀制度	四六上 四二〇	二・五〇 ・二〇
慶大教授 小泉信三著	改訂 價値論と社會主義	菊上 四三三	三・二〇 ・二八
商大教授 孫田秀春著	勞働法總論	菊上 五四〇	二・六〇 ・二六
經濟學博士 本庄榮治郎著	日本社會史	菊上 二九六	二・五〇 ・二四
經濟學博士 本庄榮治郎著	日本財政史	菊上 五一六	二・五〇 ・二四
經濟學博士 本庄榮治郎著	近世農村問題史論	四六上 三六〇	二・三〇 ・一三
法學博士 河田嗣郎著	農村問題と對策	四六上 五四四	二・〇〇 ・二〇
法學博士 河田嗣郎著	社會問題綱要	菊上 內六〇四	四・八〇 ・一七
法學博士 河田嗣郎著	農政四十三講	四六上 三九八	二・五〇 ・一三
法學博士 河田嗣郎著	家族制度と婦人問題	四六上 三五三	二・〇〇 ・二〇
專大助教 平野義太郎著	法律における階級鬪爭	菊上 三四一	二・三〇 ・二六
農學博士 小野武夫著	農村研究講話	四六上 三三八	一・九〇 ・一八
農學博士 小野武夫著	日本農民史語彙	四六上 四九二	三・五〇 ・二三
法學博士 末弘嚴太郎著	農村法律問題	四六上 四一八	二・三〇 ・二三
法學博士 末弘嚴太郎著	嘘の效用	四六上 四四五?	二・〇〇 ・二三
法學博士 末弘嚴太郎著	法窓閑話	四六上 四一三	二・三〇 ・二三
法學博士 末弘嚴太郎著	勞働法研究	四六上 五七六	三・〇〇 ・二四
法學博士 堀江歸一著	國際經濟總論	菊上 四一七	三・三〇 ・二六
法學博士 堀江歸一著	改訂增補 國際經濟と國民經濟	菊上 三四三	二・三〇 ・二六
法學博士 堀江歸一著	續國際經濟と國民經濟	四六上 五九四	二・三〇 ・二三
法學博士 堀江歸一著	貨幣・銀行・外國爲替（上卷）	菊上 五八四	三・〇〇 ・二六
法學博士 堀江歸一著	貨幣・銀行・外國爲替（下卷）	菊上 五二一	四・〇〇 ・三六?
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	經濟學原理（分册一）	菊上 五一六	三・五〇 ・二四
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	經濟學原理（分册二）生產要因	菊上 四〇〇	三・〇〇 ・二四
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	經濟學原理（分册三）需要・供給・價値の一般關係	菊上 四九八	三・五〇 ・二八
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	經濟學原理（分册四）國民所得の分配	菊上 六三〇?	三・五〇 ・二八
文學博士 高田保馬著	階級及第三史觀	菊上 三八四	二・八〇 ・二四
慶大教授 野村兼太郎著	近世商業史	菊上 五四四	三・〇〇 ・二六
京大講師 山口正太郎著	中世寺院法と經濟思想	四六上 二三三?	一・五〇 ・一八

著譯者	書名	體裁・頁數	定價
トロツキイ著 茂森唯士譯	文學と革命	四六上 [illegible]	[illegible]
ブハーリン著 富士辰馬・横田千元譯	唯物史觀	四六上 [illegible]	[illegible]
ブハーリン著 富士辰馬譯	世界經濟論	四六上 [illegible]	二・二〇
ニコライ・レーニン著 茂森唯士譯	レーニズム	四六並 [illegible]	一・二〇
デ・シノヴィエフ著 富士辰馬譯	勞働政黨と勞働組合	四六並 [illegible]	一・九〇
持地六三郎著	日本植民地經濟論	菊上 [illegible]	二・八〇
佛國藏相カイヨー著 [illegible]井一郎譯	民衆の苦悶	四六並 [illegible]	[illegible]
森戸辰男著	青年學徒に訴ふ	四六並 [illegible]	[illegible]
森戸辰男著	學生と政治	四六並 [illegible]	[illegible]
森戸辰男著	思想闘爭史上に於ける社會科學運動の重要性	四六並 [illegible]	[illegible]
森戸辰男著	思想と闘爭	四六上 [illegible]	二・〇〇
ウンターマン著 森[illegible]一譯	哲學思想の史的考察	菊上 [illegible]	[illegible]
ヨゼフ・ディツゲン著 山川均譯	無産階級の哲學	四六上 [illegible]	[illegible]
高橋龜吉著	資本主義末期の研究	四六上 [illegible]	[illegible]
[illegible]一郎著	勞働問題原理	四六上 [illegible]	[illegible]
高畠素之著	マルキシズムと國家主義	四六並 [illegible]	一・〇〇
アーサー・レウヰス著 高畠素之譯	改訂 社會主義社會學	四六並 [illegible]	一・〇〇
高畠素之著	社會主義と進化論	四六並 [illegible]	一・〇〇
カウツキイ著 高畠素之譯	改譯資本論解説	四六並 [illegible]	一・〇〇

著者	書名	體裁・頁數	定價
口田康信著	國家思想の研究	四六上 [illegible]	二・〇〇
早大教授 大山郁夫著	現代日本の政治過程	四六上 [illegible]	[illegible]
法學士 森莊三郎著	法制講話	四六上 [illegible]	[illegible]
文學博士 朝永三十郎著	カントの平和論	四六上 [illegible]	[illegible]
大阪內務事務官 三宅司法書記官著	增補 普通選擧法要綱	菊半截 [illegible]	[illegible]
帝大教授 田中耕太郎著	法と宗教と社會生活	四六上 [illegible]	[illegible]
帝大助教授 廣濱嘉雄著	私法學序説	菊上 [illegible]	[illegible]
京大教授 末川博著	ソヴィエトロシアの民法と勞働法	四六上 [illegible]	[illegible]
法學博士 高柳賢三著	現代法律思想の研究	菊上 [illegible]	[illegible]
文學博士 松本亦太郎著	心理學講話	四六上 [illegible]	[illegible]
文學博士 松本亦太郎著	智能心理學	菊上 [illegible]	[illegible]
文學博士 桑田芳藏著	ヴントの民族心理學	四六上 [illegible]	[illegible]
文學博士 米田庄太郎著	文化哲學叢書第一篇 リッケルトの歷史哲學	四六上 [illegible]	[illegible]
板垣鷹穗著	文化哲學叢書第二篇 新カント派の歷史哲學	四六上 [illegible]	[illegible]
帝大教授 恒藤恭著	文化哲學叢書第三篇 ジムメルの經濟哲學	四六上 [illegible]	[illegible]
[illegible]教授 務部謙造著	文化哲學叢書第四篇 ディルタイの哲學	四六上 [illegible]	[illegible]
帝大教授 植田壽藏著	藝術哲學	菊上 [illegible]	[illegible]
[illegible]教授 清原貞雄著	日本道德論	菊上 [illegible]	[illegible]
[illegible]教授 長田新著	現代教育哲學の根本問題	菊上 [illegible]	[illegible]

著者	書名	判型・頁	定價	送料
賀川豊彦著	生存競爭の哲學	四六上 三八〇	二・二〇	・一二
帝大教授 武内義雄著	老子の研究	菊上 五三〇	四・五〇	・二八
佐藤繁彦著	體驗宗教の研究	四六上 三六六	二・〇〇	・一二
スティルネル著 辻潤譯	自我經	四六上 六六〇	二・八〇	・二二
理學博士 桑木彧雄著	物理學と認識	四六上 二四〇	一・五〇	・一八
東洋大學教授 關寛之著	學校兒童心理學	四六上 四〇三	二・七〇	・二二
エム・ジー・コールダイ著 長尾正人譯	遺傳學概論	四六 三三八	一・八〇	・二〇
松崎實 校註	切支丹鮮血遺書	四六上 六六三	三・五〇	・二八
有島武郎著	愛する人々へ	四六上 五〇四	三・〇〇	・二四
吉江喬松著	近代文明と藝術	四六上 三三四	二・〇〇	・二〇
里見弴著	文藝管見	四六上 一九八	一・二〇	・一〇
文學博士 厨川白村著	苦悶の象徴	四六上 二二四	一・八〇	・一〇
文學博士 厨川白村著	近代の戀愛觀	四六上 三三〇	二・五〇	・二二
昇曙夢著	露國現代の思潮及文學	四六上 七八六	四・八〇	・三四
帝大教授 阿部次郎著	學藝論鈔	四六上 四一三	二・二〇	・二二
帝大教授 阿部次郎著	北郊雜記	菊半上 五〇三	一・九〇	・一八
帝大教授 村岡典嗣著	吉利支丹文學抄	菊上 三八〇	五・五〇	・二六
武者小路實篤著	文學に志す人に	四六上 二六六	一・五〇	・一八
帝大助教授 太宰施門著	ロマンチック時代	四六上 二八六	二・〇〇	・一八

著者	書名	判型・頁	定價	送料
理學博士 石原純著	戀愛價値論	四六上 二三一	一・六〇	・一八
視傳文學會編	ゆかり	四六上 四四四	三・〇〇	・二〇
文學博士 高野辰之著	日本演劇の研究	菊上 四二二	四・〇〇	・三〇
菊池寛著	文藝當座帳	四六上 二二四	一・五〇	・一八
正宗白鳥著	文藝評論	四六上 四〇三	一・八〇	・二〇
齋藤茂吉著	現代代表自選歌集 朝の螢	四六上 一五〇	一・六〇	・一八
島木赤彥著	現代代表自選歌集 十年	四六上 一四〇	一・七〇	・一八
古泉千樫著	現代代表自選歌集 川のほとり	四六上 一八〇	一・六〇	・一八
中村憲吉著	現代代表自選歌集 松の芽	四六上 一八〇	一・八〇	・一〇
釋迢空著	現代代表自選歌集 海やまのあひだ	四六上 二六〇	一・八〇	・二〇
木下利玄著	現代代表自選歌集 立春	四六上 一六八	一・八〇	・二〇
與謝野晶子著	現代代表自選歌集 人間往來	四六上 一七三	一・八〇	・二〇
前田夕暮著	現代代表自選歌集 原生林	四六上 二二四	一・八〇	・二〇
土岐哀果著	現代代表自選歌集 空を仰ぐ	四六上 一六六	一・八〇	・二〇
若山牧水著	現代代表自選歌集 野原の郭公	四六上 三三一	一・八〇	・二〇
窪田空穗著	現代代表自選歌集 槻の木	四六上 一九五	一・八〇	・二〇
倉田百三著	超克	四六上 三九九	二・三〇	・二〇
賀川豊彦著	星より星への通路	四六上 三四八	二・〇〇	・二〇
若山牧水著	樹木とその葉	四六上 三七〇	二・〇〇	・二〇

著者	書名	判型・頁數	定價・送料
長谷川如是閑著	改造社隨筆叢書第一篇 犬・猫・人間	四六並 四〇三	一・八〇 ・一六
堺利彦著	改造社隨筆叢書第二篇 野外劇の一幕	四六並 二九八	一・五〇 ・一六
中澤臨川著	改造社隨筆叢書第三篇 嵐の前	四六上 二六四	一・五〇 ・一六
高濱虚子著	改造社隨筆叢書第四篇 朝の庭	四六並 三〇五	一・七〇 ・一六
武者小路實篤著	改造社隨筆叢書第五篇 筆の向くまゝ	四六並 二〇四	一・二〇 ・一四
河東碧梧桐著	改造社隨筆叢書第六篇 二重生活	四六並 二一〇	一・二〇 ・一二
文學博士 新村出著	南蠻更紗	四六上 三九八	二・六〇 ・二〇
野口米次郎著	先驅者の言葉	四六上 三一〇	一・八〇 ・一六
野口米次郎著	坐る人間の評論	四六上 三一六	二・〇〇 ・一八
富田溪仙著 下店靜市編	溪仙八十一話	菊上 三四〇	三・〇〇 ・二六
岸田國士著	言葉・言葉・言葉	四六上 二四八	一・八〇 ・一二
文學博士 幸田露伴著	幽秘記	菊上 三六八	二・五〇 ・二〇
文學博士 幸田露伴著	龍姿蛇姿	四六上 三二三	二・五〇 ・二〇
醫學博士 土肥慶藏著	鶚軒游戲	四六上 四六六	四・〇〇 ・二〇
文學博士 瀧精一著	文人畫概論	菊上 品切	二・〇〇 ・二〇
板垣鷹穗著	美術史論集 表現と背景	菊上 一九六	三・八〇 ・二〇
岸田劉生著	圖畫教育論	菊上 一三八	三・五〇 ・二〇
矢代幸雄著	太陽を慕ふ者	四六上 二二四	一・五〇 ・一八
醫學博士 木下杢太郎著	支那南北記	四六上 五八六	三・〇〇 ・二〇

著者	書名	判型・頁數	定價・送料
改造社編	大正大震火災誌	四六倍 八四〇 內	一・六〇 ・四〇
ビシャラ・ナハス著 高瀬毅譯	ツタンカーメンの生涯と時代	四六上 一三三	一・八〇 ・一六
村松梢風著	近世名匠列傳	四六上 三八六	二・五〇 ・二〇
山川均著	改版 レーニンとトロツキー	四六上 二八六	一・五〇 ・一八
大杉榮著	自敍傳	四六並 三一四	二・〇〇 ・一八
文學博士 幸田露伴著	蒲生氏郷 平將門	菊上 二六三	二・〇〇 ・二〇
文學博士 幸田露伴著	賴朝・爲朝	菊上 二九八	二・〇〇 ・二〇
柳澤健著	ジャン・ジョレス	四六上 二五三	一・五〇 ・一八
堺利彦著	堺利彦傳	四六上 三四四	一・九〇 ・二〇
野口源三郎著	オリンピアへの旅	四六上 四〇八	二・五〇 ・二〇
芥川龍之介著	支那游記	四六上 二六六	二・〇〇 ・二〇
賀川豐彦著	雲水遍路	四六上 三五六	三・〇〇 ・二六
京大教授 河合榮治郎著	在歐通信	四六上 三三三	二・〇〇 ・一八
理學博士 石原純 監修、理學士 [illegible] 共編	アインスタイン全集 全四冊	菊上	各冊 五・〇〇 ・二六
理學博士 桑木彧雄著	物理學と認識	四六上 二四四	一・五〇 ・一八
佐藤充 庄司彦六 共著	近代物理學概觀	菊上 三四四	三・〇〇 ・二〇
中澤臨川著	電子說から見た世界	四六上 品切	一・八〇 ・一八
佐藤春夫著	童話 ピノチオ	四六上 二九六	一・八〇 ・一八
關寬之著	學校兒童心理學	四六上 四〇二	二・七〇 ・二三

十年間に貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふも同じだと云ふ煙草も一度「カロツト」を口にすれば

再び煙草は吸へぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本社代理部と榮川堂主人

先年十月十三日煙草代用品「カロツト」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロツト」の御註文がありました店員が此事を主人に報告しますと主人は「明日私自身で代理部へ上つて「カロツト」を御説明申さう」と云つて主人は翌十五日午前十時「カロツト」一個を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて呉れました、此處で榮川堂主は自身來社せる誠意を述べて「カロツト」發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました、其うして先づ一社員の煙草好きな方に御試を願ひました、すると其社員の方は早速「カロツト」を取上てお試しになりました、暫くして其方は「カロツト」を口より放して今度は巻煙草をお吸ひになりましたが社員の方「やつ！之は驚いた、之は煙草が不味て吸へない、煙草がいやになりました、到底煙草等吸 ないですね！」驚いたと仰有いました、此處發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ」「僕もやつて見よう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立になつて「カロツト」を取り上げてお試しになりました。

「やあこれでは煙草は吸へませんね！」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞讃下さいました、其處で更に店主は口を開いて一度「カロツト」を御用ひになれば何等の努力を要せずして再び煙草を吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロツト」が多くの人に認められて來た事の本懐を述べて暇をして歸りました、歸るに先だつて社員の方々は此品の將來に對する御獎勵の言葉を述べて下さいました。

特徴

外見恰も巻煙草を用ゆるに異ならざるを以て手中無沙汰の事なく適當朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを人體に與ふると同時に溫雅なる香氣と忘れ難き淸涼なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は煙草に對する永き嗜好を離れて再び顧みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時其他散歩等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を治すべし。

カロツト（凡百日分）

ベークライト製パイプ付 **金貳圓五十錢**（カロツト味一瓶 きらひ液一瓶）

象牙製パイプ付 **金參圓五十錢**（カロツト味一瓶 きらひ液一瓶）

送料（內地十八錢 臺、朝、樺四十五錢）

引替送料（內地三十錢 臺、朝、樺五十五錢）

御註文は振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引換小包にて送品可仕候

◎代金引替は御便利の郵便局を御申越願升

發賣元 東京府大森不入斗八二八 **榮川堂** 振替東京五二九一一番

代理店 東京市京橋區瀧山町十三番地 **天下堂** 振替東京七〇六八番

武内義雄氏著

老子の研究

滔々三千年、東洋の精神文化を貫流する老子の思潮は、一種獨特の風格を存して、世界學界の一大研究對象となつてゐるのが、解し難い文章は多く學者をなやまして其精神が那邊にあるかを捕捉しがたい。本書は篤學なる武内氏が二十年間刻苦研鑽の成果であつて、遍く上古の文献を蒐集し考證して、老子の存在を孔子以後と斷定し、道德經五千言を分析批判して千古の疑義を氷解し、前人未發の卓説を披瀝したもので、東洋の學術思想に關心を有するもの丶見逃し難い名著である。卷頭に挿んだ寫眞九葉は本文の證定に用ゐられた石經古鈔本の一部分で、一字一句の異同も此の如き稀覯の資料のみによつて證定されてゐることは、本書の價値の如何に大なるかを裏書きするものであらう。

——〔目次抄〕——

◇菊判五百十二頁 挿圖九葉

◇定價三圓五拾錢 送料二十六錢

改造社

東京市麴町區内幸町 幸ビルディング二階

振替東京八四〇二番

電話銀座（四五五八・五〇四六・一七四四）

淸原貞雄著

日本道德論

總説・國家・團體・日本道德の要素・忠義從順の德と犧牲的精神・武士道の發達・神道と國民道德

價 四・五〇 税 ・三〇

スチイルネル著 辻潤譯

自我經

人間篇・人生・舊時代と新時代の人々・古代人・近代人・自由人・自我篇・所有・所有人唯一者

價 二・八〇 税 ・二二

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: FIFTY SEN A COPY, SIX YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, UCHISAIWAI-CHO COGIMACHI-KU, TOKIO.

株式會社秀英舍印刷